小山内薫全集
第弐巻
春陽堂

1　安樂椅子に倚る先生

2 宮下町の家の庭

3 旅　浴　衣

4 ス　テ　パ　ン

5 市村座時代

6 くつろいで

7 お　花　見

8 或る園遊會

9 尼ヶ崎にて

11 旅　　　　　　信

12 病室ベッド

13 旅　　　　館

15 好　　　　　物

16　カメラを持てる先生

小山内薰全集 第二卷 目次

大川端……一
第一課……三五九
背教者……五七八

小山内薰氏の長篇小說について（久保田万太郎）……一
解題（水木京太）……五
裝幀（有島生馬）

寫眞目次

1　**安樂椅子に倚る先生**。――大正十一年。

2　**宮下町の家の庭**。――明治三十八年頃、小石川區宮下町五番地の自邸で。向つて左より先生、蒲原有明小島文八中澤臨川氏。

3　**旅浴衣**。――明治四十二年八月八日京都にて。向つて右より先生長谷川虎太郎市川猿之助（當時團子）河合武雄氏。

4　**ステパン**。――明治四十三年九月、濱町岡田に於ける先代左團次七回忌追悼會の余興。チエエホフの「犬」を演じてステパンに扮した。

5　**市村座時代**。――大正七年頃。後列先生と田村壽二郎氏、前列向つて右より三木重太郎岡村柿紅氏。

6　**くつろいで**。――同上の時代、近藤の旅館で。屋内は先生と田村壽二郎氏、前は小泉源太郎氏。

7　**お花見**。――大正八年頃、飛鳥山清水園にてのはつぴ姿。

8　**或園遊會**。――大正八年夏、向島浮香園にて。前列向つて右より服部普白、先生、小笠原長幹田村壽二郎の諸氏。

9　**尼ケ崎にて**。――大正元年九月、抱けるは二人の令甥。

10　**梅田驛頭**。――大正十一年八月「人間」社の講演旅行。向つて右より先生吉井勇田中純里見弴久米正雄氏。

11　**旅信**。――「人間」社講演旅行の途次。

12　**船室のベツド**。――瀬戸内海にて。

13　**旅館**。――旅館夕餉の膳に向ひながら講演の準備。

14　**耶馬溪にて**。――右より久米正雄吉井勇、先生、里見弴氏。

15　**好物**。――大正十年頃。好物のそばを食べてゐるところ。

16　**カメラを持てる先生**。――大正十年頃、蒲田松竹撮影所にて。

大川端

一

今から七年前――丁度日露戰爭が濟んだ年の秋だつた。久松町の明治座に愛國婦人會の慈善演藝會が三日ばかり催された事があつた。

その二日目に正雄は龍閑橋(りうかんばし)の伯父さんに連れられて、見物に出かけた。菊の匂の何處からともなく漂つて來るやうな如何にも好い日和で、正雄の制服姿も正雄の伯父さんの唐棧袷(たうざん)へも秋の日を受けて鮮かに光つた。

明治座へはひると、白襟に細い金鎖をかけて裾模樣を着た貴婦人といふ人達が、赤だの白だの紫だののりぼんを胸につけて、頻に廊下や棧敷を斡旋して歩いてゐた。

正雄は伯父さんとたつた二人で一間の土間を占領した。伯父さんが芳町(よしちやう)方面への義理で引受けた切符の數は四枚だつたが、外に來る人が誰もなかつたのである。

『菊畑』の芝居があつた。智惠内はその時分の莚升、鬼一はその時分の時藏、小浪は先の歿つた榮次

に凭せて、瞬きもせず左右を交る交る見た。

兩方から來たお酌達は、舞臺で入れ違ふと、一齊に後向に坐つて肌を脱いだ。縮緬の襦袢にも聯隊旗の模樣が赤く染めてあつた。

踊つ子はてんでに小さな日の丸の旗を持つて、又一踊り踊るのであつた。

正雄は上手から三番目にゐたお酌を中でも美しいと思つた。

髮の毛が黑く豐であつた。鼻の高さに過ぎないのも愛嬌があつた。夢を見てゐる人のやうな口元。黑眼勝な利口さうな眼。態度が愼ましやかなので、丈の高いのも憎げではなかつた。

正雄は自分の趣味を殆んど理想的にこのお酌から汲み取る事が出來た。正雄は一旦このお酌に眼をつけてからは、他のお酌には眼もくれずに、唯この一人をのみ見詰めてゐた。再び斯かる機會は無いと思つたのである。この貴き機會を出來得る限り長く深く味はうとしたのである。

正雄はプログラムを廣げて、そのお酌の名を求めた。けれどもプログラムには唯大勢の名が列んでゐるばかりで、どれが誰だか容易に分からなかつた。正雄は伯父さんに聞いて漸くこのお酌の名を知つた。お酌は新河内家の君太郎といふ、かなり格の好いのであつた。

君太郎の姿は深く正雄の腦裏に刻まれた。正雄は家へ歸つてからも、容易に君太郎を忘れる事が出

暇なかつた。本を讀んでゐる時も、何か書いてゐる時も、君太郎の眼が始終自分を見てゐるやうに思はれた。

正雄は家にある古い文藝倶樂部を藏から澤山出して來て、一冊々々口繪を調べた。殆ど一日掛りで漸く君太郎の寫眞を二枚見つけた。一つは元祿姿をして手に櫻の枝を持つたのである。これは何かの踊の時に撮つたのであらう。一つは恰好の惡い洋服を着て薔薇の匂を嗅いでゐる所である。これは着物を借りて滑稽に寫したものであらう。

この二枚の寫眞は少しも正雄に滿足を與へなかつた。正雄の腦裏に刻まれた君太郎の容貌は、少しもこの二枚の寫眞には出てゐなかつたのである。

丁度藝者やお酌の繪葉書に下手に彩色をしたのが盛に賣り出される時分だつた。正雄は下町へ出る度に君太郎の繪葉書を漁つた。

襷を掛けて、姉さん被りをして、箒を持つてゐるのがあつた。

日なたで洗濯をしてゐるのがあつた。

ハイカラで机に向つて手紙を書いてゐるのがあつた。

丸髷に結つて裁縫をしてゐるのがあつた。

中でも正雄の氣に入つたのは、頭をハイカラに結つて、陰矢絣の道行を着て、麻の葉絞りの帶を締

めて、しとやかに三つ指を突いた寫眞であつた。この寫眞に映つてゐる若太郎の眼は、如何にも世にへり下つた、少しも思ひ上がるところのない眼であつた。

正雄は若太郎に繪葉書の種類の多いのを喜んで、暇さへあれば新しいのを探して歩いた。

正雄の家は家内中芝居とか音曲とか踊とかいふものが好きで、色々な藝人が始終出はひりもしてゐたし、正雄自身も芝居の研究が目的で、自分と同い年位な役者とも友達つきあひをしてゐたのだが、お母さんがひどく嚴しいので、まだ惡所とか盛り場とか言ふ所へは一度も足を踏み入れた事がなかつた。從つて、正雄は若太郎を世にも愛しい者には思つたが、これに近づく手段などを講じた事は一度もなかつた。これに近づく手段があらうなどとは夢にも思はなかつたのである。

正雄は堅氣の娘を慕ふやうな心持で、若太郎を慕つたのである。正雄は唯繪葉書の一枚々々と殖えて行くのを樂みにした。

次の年の夏に、正雄は學校を卒業した。學校を卒業すると、龍閑橋の伯父さんの世話で中洲の眞芝居へ作者見習としてはひつた。勿論無給金で、交際費は自分から持ち出すのである。

正雄は芝居のあいてゐる間は、毎晩々々遠い寂しい山の手から車だの電車だのと色々に乗り繼いで、この大川の川下の、淫らな島へ通ふのであつた。

中洲の芝居の左側には銘酒屋のやうなものが幾軒か列んでゐた。白粉を眞白に塗つた女が長火鉢の前に肱をついてゐたり、門口へ出て帽子のない男と立話をしてゐたりした。

芝居の右側には待合が列んでゐた。立派な門構で供待などの出來てゐるのもある。いきなり格子戸で、長火鉢や障子襖が外から見えるやうなのもある。夜になると電話がちりんちりん鳴る。美しい女を乘せた車が、好い匂ひを撒き散らしながら、頻に出たりはひつたりする。

芝居の中は更に艶かしかつた。

河岸の美しい娘で、毎晩のやうに來るのがあつた。役者は入れ交り立ち交りそこへ挨拶に行つた。中には暫く一緒にはひつて、自分の仲間のしてゐる芝居を見てゐるのもあつた。この河岸の娘と張り合つて、外神田から來る講釋師の娘があつた。ここへも役者が幾人も挨拶に來る。娘の場所は水菓子だのお菓子だのの使ひ物でいつも狹くなつた。

若い藝者も澤山に來た。東の棧敷の藝者と西のうづらの藝者とが手の暗號で話をする。扇子を口へ當てて聲低く笑ふ。

舞臺の役者も特に見物の一人の顏を見て、笑つたり妙な眼つきをしたりした。役者の眼の行く所にはきつと若い女がゐた。

この頃は樂屋内がまだそんなに嚴しくない時分だつたから、河岸の娘や外神田の娘は、よく茶屋の

男に案内されて、座長の部屋へ來た。そして、座長が大きな鏡に向つて、兩手でべたべた顏を拵へるのを飽きずにいつまでも眺めてゐた。

下廻りには又下廻りで。樂屋の梯子段の下まで來て待つてゐる女があつたり、裏口の暗い所で手招きをしてゐる女があつたりした。

正雄は毎晩のやうに待合の名や藝者の名を耳にした。今夜は何處へ行くの、明日は何處だのと言ふ話ばかり聞いた。

二

その頃この芝居へ毎日のやうに來る男の客に木場の或若旦那があつた。いつも芝居は碌に見ないで、茶屋からずつと樂屋へ通つて、役者の部屋を方々訪ねて歩いてゐた。時には大部屋の眞中に胡坐をかいて、下廻りを相手に冗談を言つてゐた。床山の部屋へ腰を掛けてゐる事もあつた。狂言部屋に坐つてゐる事もあつた。極めて地味な――金が掛つてゐて人眼につかない――裝をしてゐて、懷にはいつも澤山金を用意してゐた。

芝居がかぶると、きつと三四人役者を連れて、何處かへ飮みに行く。取卷の藝者を呼んで、寂のある咽喉で一中節を語つて聞かせる。そして役者には一々祝儀を出す――一旦座敷へ呼んだ以上は毎日

父さんに連れられて講武所の何とか言ふ家へ一度行つた時の事である。その時正雄は手水に立つて、手を洗ふ時、藤色の着物を著たお酌に水を掛けて貰つて、眞赤になつたのである。その時分から見れば、見聞や讀書で、もう大分度胸は出來てゐたが、それでもまだ中々氣味が惡かつた。

本場の若旦那――姓を福井と言つた、屋號はカネ徳――は六枚折の金屏風を立て廻らして、肥つた顏の艶々した、頭の毛の薄い、紋附の羽織を着た五十位の男の人と二人で厚い座蒲團に坐つて、寶珠のやうな一本足の膳を前にして、笑ひながら盃を口にしてゐた。藝者は年寄つたのが三人來てゐただけであつた。

正雄は龍井の引合せで、始めて福井さんと名のり合つた。隣にゐるのは、多分後見か番頭だらうと思つて、正雄は丁寧に挨拶をした。

正雄はその時二十六だつた。福井さんも二十六だつた。同い年だといふ事が大層福井さんを喜ばせた。

正雄は龍井と一緒に直ぐ席を辭した。芝居へ歸つて聞いたら、福井さんの隣にゐたのは辨中といふ太鼓持だつた。

正雄は福井さんと段々懇意になつた。騷ぐ時はどんな眞面目な人でも騷がしてしまふまでに騷ぐ、

なかつた。

正雄は段々料理茶屋に親んで來た。お世辭の好い岡田の上さんにも引合はされた。白い髯の長く美しい百尺の主人にも會つた。小柄で、意氣で、言葉つきの愼ましやかな、一中節の巧い、深川亭の上さんにも會つた。

年寄の藝者にも大分知合が出來た。若い藝者も一人や二人は知つた。けれどもついぞその人達の間に君太郎のキの字も噂をされた事はなかつた。正雄はいつか誰かが君太郎の名を言ふ事があるだらうと思つて、いつも耳を澄まして聞いてゐたが、更にその名の出た事がない。せめて女中の口からでも聞きたいと思つて、女中の話にまで注意するのであつたが、女中も一向その名を口にしない。

もう君太郎はこの土地にゐないのだらうか。あれ程のお酌が一度も話題に登らないといふ事は無い同性の嫉妬からではないかしら。あんまりおとなしいので話になる種がないのではあるまいか。

正雄は色々に思ひ廻らしたが、自ら人に聞いて見る勇氣はなかつた。

三

盆の芝居の開く三四日前であつた。

一座の役者は朝から芝居茶屋の二階へ寄つて、「子煩惱」の稽古をしてゐた。そこへ本場の稲井さん

「君、ここだよ。」
龍井さんはやんちやらしく門の中へ飛び込んだ。正雄も眞似をするともなく、敷石を二つ三つ飛んだ。格子戸を明けると、龍井がもう來てゐて、玄關に笑つて立つてゐた。
綺麗に拭き込んだ氣持の好い家だが、何となく天井が低くて、何處へ行つても鼻が支へさうである。下駄を脫ぐと、女中が忙ててそれを下駄箱へ入れた。正雄は不思議に思つた。
龍井さんに案内されて、正雄は階子段を上つた。通された二階は次の間附の十疊位な座敷である。天井は杉の薄い板で、それに胡粉と青とで夕顏の繪が書いてある。窓の下は直ぐと大川で、障子を明けると、眞夏の日に眩めく水と、眠りながら流れてゐるやうな舟が幾艘か見えた。向う河岸には白い藏が眼を射るやうに列んでゐた。
座敷の眞中には桑のちやぶ臺が出てゐた。ちやぶ臺の三方には麻の夏蒲團が敷かれて座蒲團の側に脇息が一つ宛置いてあつた。
「君、誰か呼びたいのがあるんなら、呼び給へ。」
龍井さんは正雄に向つてかう言つた。
「え。」
と言つた時、正雄の胸は不思議に落ちついてゐた。

「脊の丁度いいと言ふやうな人があるだらう。それを呼ばうぢやないか。」
「ぢやあ、君太郎と言ふのを呼んで頂きませう。」
正雄は少しも悪びれずに、ずかりとかう言つた。
「君太郎の方が面白いや。」「へえ、酷な者がお耳に留まつたねえ。」
福井さんにかう言はれると、正雄は急に顔を染めた。
「君太郎さんなら綺麗ですわ。」
そこに坐つてゐた年増の女中がかう言つた時、正雄は百人力を得たやうな気がした。
「それに上品ですわ。おとなしくて。」
若い女中も側から助太刀をした。
福井さんは好奇心に駆られるといふやうな顔で、左右の手を揉み合せながら、
「こりや面白い。呼んで御覧、呼んで御覧。」
と言ふ。年増の女中は直ぐと座を立つた。やがて階子段の下の方で電話の鈴の鳴る音がした。
二つの盃を包むやうにして入れた盃洗と、真白なお銚子と、鯛煎餅のお皿とがちやぶ台の上に乗つた。福井は直ぐ、盃の一つの水を切つて、福井さんに差した。福井さんは手つきで正雄へ先に差すやうに命じた。福井は又一つの盃の水を切つて、突と正雄の鼻先へ出した。

「ええ、令夫人若太郎孃の御健康を祝しませう。」

龍井の漢語の甚だ危なげなのを笑ひながら、正雄はおとなしく盃を受けた。龍井は正雄と稲井さんに酌をすると、自分でも一つ盃を取つて、手酌の置注ぎと言ふのをした。

そこへ髪をハイカラにして、着物を端折つて来た小柄な若い藝者があつた。直ぐその後から、島田に結つて、褄を引いた、眼が大きくて、丈の高い二十二三の藝者が来た。この二人は稲井さんの座敷にはいつでもきつと来てゐるので、正雄も顔は知つてゐた。唯いつもは年寄藝者の蔭に貝のやうに小さくなつてゐる二人が、ここでは甚しく荒(あば)れ廻るのである。正雄はそれが不思議でならなかつた。

「まあ、先生、よく入らしてねえ。」

島田が蓮葉らしくかう言つた。

「先生の是非見たいと言ふのがあるんでね。」

島田の隣にゐる龍井がかう言つた。

「これで中々隅へに置けないのさ。女學生の方では大分經驗があるんだからね。」

と、稲井さんが言ふと、

「あら、さう。」

と、稲井さんの隣にゐる眼の可愛いハイカラが、びつくりしたやうに眼を剝いて言ふ。

違つて、如何にもはつきりしてゐる。眼には黒く深い情を湛へてゐる、鼻には少しも誇らしげな角がない。口は如何にも感じが柔かで、それでゐて、何處にか挺子でも動かぬ情の硬さが見える。

正雄は強烈な光にでも會つたやうに、どうしても眞筒に君太郎の顔を見る事が出來なかつた。抑へても抑へても胸が波を打つ。盃を手にすれば盃が震へる。

一座は暫く無言であつた。

福井さんも、瀧井も、島田に結つた吹次と言ふのも、ハイカラに結つた花子と言ふのも、居合した二人の女中も、一齊に君太郎の顔をぢつと見た。俯向いてゐるのは正雄ばかりである。

「綺麗だわねえ。」

若い女中が先づ沈黙を破つた。

「好い子だこと。」

花子が次いでかう褒めた。

「上品ですわねえ。新河内家は子供の裝を見立てるのが餘つ程上手なんですわねえ。」

年増の女中が福井さんに向つてかう言つた。

「厭ですわ。皆さんで。」

君太郎は顔も赤らめずに、少し太い聲でかう言ふかと思ふと、空になつたお銚子を持つて、すつと

「一圓、一圓。」
と叫つた。
君太郎は慎ましやかに笑つてゐるばかりである。

階子段の下から、「咲ちやん、電話。」と甲走つた聲がする。咲次は直ぐと座を立つた。

暫くすると、「龍井先生、ちよいとお顔を。」と、次の間から女中の聲がする。龍井は座を立つと、次の間で暫く女中と話してゐたが、やがて階子段を降りて行つた。

正雄は飲めぬ酒を無理に二三杯引つかけたので、顔が眞赤になつた。福井さんも大分好い機嫌で、下から運ばれる「お料理」を、側から片附けながら、少し鼻へ掛る寂のある聲で、首を振りながら端唄を唄ふ。

咲次も龍井も下へ降りたぎり上がつて來ない。やがて花子もゐなくなつた。福井さんもお皿やお椀を綺麗にすると、鼻歌を唄ひながら、何處かへ行つてしまつた。番の女中も消えた。

正雄は君太郎とたつた二人になつた。

「みんな何處へ行つてしまつたんだらう。」

正雄は情なささうにかう言つた。君太郎は默つて靜に笑つてゐる。

「僕の顔眞赤でせう。」

君太郎は笑つて領いた。その領きやうに正雄は妹か姉に見るやうな親しみを見た。

「見つともないなあ。」

正雄は恥ぢるやうにかう言つて、座蒲團を自分で持つて、川に近い窓の側へ來た。窓から下を覗いて見ると、小さな庭があつて、飛石が棧橋へ續いてゐる。棧橋の袂に手入の屆いた青い柳が細い枝葉を水の上に垂れてゐる。庭の隅には紫陽花が瑠璃色に咲いてゐて、龍井らしい笑ひ聲と咲次らしい笑ひ聲が、折々水に響いて聞える。帆を張つた舟が幾つも幾つも川下から登つて來る。水は西日を受けて金のやうに光る。

「ここへ來ませんか。好い風ですよ。」

正雄はやつとの思ひでこれだけ言つた。君太郎は少しも恥づかしがらずに、突と立つて來て、正雄の直ぐ前に行儀よく坐つた。桔梗の花を描いた、塗骨の、小さな扇子を使つてゐる。半襟の縮緬にも桔梗らしい花が繡ひになつてゐる。

「君、桔梗の花が好きなの。」

「ええ。」

「僕も大好きさ。花の紫なのと葉の眞青なのとが實に好い取り合せね。」

「ええ。」
「僕ん所に桔梗澤山ありますよ。」
「下町はだめよ。植木が植ゑられないから。」
「君も元は山の手にゐたの。」
「いいえ。」
と言つて、君太郎は謎のやうな笑ひ方をした。
そこへ年増の女中が嬉しさうな顏をしてはひつて來た。
「まあ、お二人ぎりでお睦しいこと。」
女中にかう言はれると、正雄は又かつとした。君太郎は仄に笑たきりで、澄ました顏をしてゐる。
「君の名は。」
正雄は女中にかう聞いた。
「名なしの權兵衞。」
「ほんとにさ。」
「い、ま。」
と、一字一字切つて言ふ。

葉書の話もしようと思つてゐた。けれども會つて見ると何一つ言ふ事が出來なかつた。

氣心の知れない人に、あんまりいろんな事をしやべつてしまつて、若し厭がられたら恥だと思つたのである。こつちにばかり心があつて、向うに心がないのなら、こつちにも心がないやうにして附き合ひたいと思つたのである。一旦打割つた胸の思は再びおのが胸に收められるものではないと思つたのである――正雄の心は青年の誇と強い自我とに充ち滿ちてゐた。

お今は頻に若太郎を褒める。

「ほんとに感心な人なのですよ。お父さんには孝行ですし、御主人にも中々好くするんです。ほんとにあなたのやうな方には丁度好い御相手ですわ。これから始終手前どもでお會ひなさいましよ。」

正雄はそれでも嬉しさうに頷いた。それから若太郎の顔をちらつと見て、

「さうしませうか。」

と思ひ切つて言つた。

「ええ、どうぞ。」

と、若太郎は平氣で言つて、平氣で正雄の顔を見てゐる。

これがどうも正雄には不滿足であつた。さつきから何を聞いて見ても、若太郎は決して恥つかしがつたり悪びれたりはしない。すかりすかりとはつきりした返事をする。それが、こつちを信じてゐる

へられた方程式を抱へながら、遠い寂しい山の手へ歸つた。

四

正雄はいつの間にか祕密を持つ人になつてゐた。正雄は若太郎に初對面をした明くる日から、人目を忍んで布袋家へ通ひ始めたのである。

正雄は巧に時間を利用した。芝居は大抵夕方からであるのに、早くから用があると言つて、いつも午前の内に家を出た。

芝居の始まるまでは、大抵布袋家で日を暮らした。掛けると若太郎は大抵來た。「約束」の時間にぶつかるやうな時でも、十分なり二十分なり都合して、きつと正雄の座敷へ來るのである。併し、若太郎は正雄にとつてはやつぱり謎であつた。我儘な正雄にとつては自分の好きな人は自分のみの爲に存在してゐなければならなかつた。藝者とかお酌とかいふ者が一晩に四つも五つも座敷を勤めなければならないといふやうな事は正雄には分からなかつた。毎日出掛けて、毎日會へるといふのは、旦那とかいふ者でない限り、餘程有難く思はなければならないのがこの社會の常であるのを、正雄は唯當り前の事だと思つてゐたのである。そして已むを得ぬ時間の都合で若太郎が早く歸るやうな事があると、正雄は直ぐと膨れ顔をして、世にも人にも捨てられたやうに思ふのである。

福井さんはその頃少し布袋家に遠のいてゐるのであつた。

正雄は段々大膽になつた。初めは晝の外決して行かなかつたのが、夜も時々行くやうになつた。芝居のかぶる少し前に小屋を出て、電車のなくなる少し前まで、島の奥で暮らすのである。

或晩、君太郎は自分がお酌になつた時の物語をした。

君太郎の話によると、君太郎の家は本所の横網で、親父は物堅い錺かざきである。君太郎は名をお君と言つた。八つの時に鞄を肩に掛けて、學校からの歸り道に、回向院を通り拔けると、紬の長い袂着物の羽織を着て、眞赤な半襟を掛けた、十二三の綺麗なお酌が、鼠小僧の墓の前にしやがんで、白い小さな両手を合せて頻に何か拜んでゐた。お君はそれを見て、お酌といふものは實に綺麗なものだと思つた。さう思ふと、直ぐ自分がお酌になりたくなつた。

家へ歸つていきなり鞄を投り出すと、默つて家を飛び出して、唯一人で人形町の親類の家まで來てしまつた。そこの家に大層お君を可愛がるおばあさんがゐた。お君はそのおばあさんに「お酌にしておくれよう、お酌にしておくれよう」と、朝から晩までねだり續けにねだつた。おばあさんは途方に暮れて、では兎も角も知り合ひの藝者屋があるから、そこへ連れてつて遣らうと言ふので、連れて行つたのが今君太郎のゐる昔河内家である。

おばあさん樣、たまに三日もすればきつと飽きて歸つて來るだらうと高を括つてゐた。ところがお君は中々歸つて來なかつた。お君は藝者の三味線や踊の稽古をするのを一日飽かずに聞いてゐた。お酌が下方や踊を浚ふのを一日飽かずに見てゐた。そして早く自分も稽古に遣つて貰ひたいと藝者屋の主人に迫るのであつた。

かういふ事情からかういふ商賣に這入つたので、主人に對して大した借金があるといふ譯ではないから自由な主人にも大事にされて來た。それでも、さて自分がなつて見ると、決してはたで見る程美しい商賣ではない。自分はもうやめてこの商賣を永く續けたいとは思つてゐないと、君太郎は年にはませた口の利きやうをするのであつた。

君太郎がお酌になつた姿は、正雄の頭の中の君太郎を餘計に美しくした。正雄は筆の線を惜しげもなく繪の上に引き摺つて、聶小倩の像の前に跪くお酌を、君太郎でない他のお酌にして描へる事が出來なかつた。君太郎の顏が正雄の頭の中に描いた繪では、袍をさげて堂の前のお酌に見惚れてゐる子が君太郎ではなくて、その子に美しい流眄を見せて、一心に手を合はすお酌が君太郎であつた。

その晩は兩河岸に宴でもあると見えて、いつもは早く戸を締める家々の障子に、遲くまで灯があかるく見えた。折々は人聲もうごめいて、靜に物語る追憶の樂しさも思はれた。

正雄は君太郎と膝を列べて、水に臨む向ふ河岸の灯を、夜の更けるまでぢつと見てゐた。

君太郎に會へないで歸つた日は、きつと君太郎から詫びるやうな葉書が來た。會つて歸つた後でも、一日行かないと、きつと葉書が來た。葉書が來ると、正雄は直ぐ返事を出した。そしてまだその返事の向うへ屆くか屆かない内に、正雄はもう新布袋家で、君太郎と差し向ひになつてゐた。

「葉書有難う。僕の葉書見た。」

「いいえ。」

「ぢや、まだ屆かないんだ。もう確に著いてる時分だから、歸つたら見て見給へ。」

「ええ。有難う。」

かういふ對話をして、家へ歸ると、正雄は直ぐ君太郎の所へ、きのふの葉書は屆いたかといふやうな事を書いた葉書を出すのである。それと行き違ひに君太郎の方からも「先程は失禮しました。おはがきは確に頂きました。」といふやうな禮の葉書が來るのである。正雄は葉書一枚のやうな物でも問題にして、寸時も女との消息を絶やさないやうにするのであつた。

君太郎は大抵繪葉書を用ひたが、その繪葉書は多く沒趣味なものであつた。月に薄だの、波に千鳥だのを漆で下手にかいたのが、その頃はやつた。君太郎は多くそれを用ひた。自分では大層しやれてゐると思つたのである。

正雄は丈與君太郎に遣る葉書に『小川生』と名を署した。隱し名などをしたところで、迚も相手に分かるまいと思つたからである。ところが君太郎はそれをその儘、いつも『小川生樣』として葉書をよこした。正雄が、人によこす時に生の字を附けるものではないと敎へると、その次は『小川先生』と書いて來た。先生と書かうとして、生の字を落したのである。正雄が又それを言ふと、その次の葉書には『小川先生樣』として、生と樣との間に墨の點を打つてよこした。君太郎の頭には深く『小川生』といふ三字が染み込んでゐたのである。正雄が敎へてから三度目の葉書に、やつと君太郎は本當の事を書いて來た。この無邪氣を又正雄はひどく可愛らしく思ふのである。

君太郎の葉書には、まだ一つ可笑しな事があつた。君太郎は何區といふ上に、きつと『當』といふ字を一字添へた。淺草區といふ處に、當何區と書くのである。正雄は始終それを不思議に思つて、或時君太郎に聞くと、家の姐さんがさう書くんですものと言ふ。妙な姐さんもあるものだと思つたが、これは別に間違ひと言ふ程の事でもないから、それつきり默つてゐると、君太郎は相變らず當何區と書いてよこす。それが、如何にもかう書くのが本當だと深く信ずる所のあるやうな筆つきなのである。正雄はそれを又可愛いと思つた。

君太郎の字は餘り巧くはなかつた。やはり普通のお酌流蝶吉流であつた。それでも正雄は割合に巧いと思つて、或時君太郎にかう聞いた。

「葉書はみんな自分で書くの。」
「いいえ。」
「ぢやあ、代筆。」
「ええ。書けないんですもの。」
「誰に書いて貰ふの。」
「家にゐる人に。」
「いつも手が同じだけれども、しよつちう一つ人に書いて貰ふの。」
「いいえ。」

君太郎の答はいつも正雄を迷はせる。正雄は君太郎の葉書を大事にして好いんだか悪いんだか分からなかつた。代筆を大事にしても爲方がないと思つたのである。併し葉書の文句には自分でなければ書けないやうなことも稀(たま)には書いてあつた。

君太郎と正雄とは台所口にも睦しい程の仲になつたが、それでも君太郎の心はやつぱり正雄に分からなかつた。

「嫌ひかい。」と聞けば、「いいえ。」と答へる。「好きかい。」と聞けば、「ええ。」と答へる。が、唯それだ

「さうは行きませんわ。又色々都合もありますから。」
「だつて借金なんかないんだらう。」
「でも、子供の時から色々世話になつてますから。」
「ぢやあまあ、恩返しだけの事が出來たら廢すと言ふのかい。」
「まあさうよ。」
「で若し廢したとしたら、君どうするの。」
「家へ歸ります。」
「それから。」
「家の用をしますわ。」
「一生。」
「ええ。」
「お嫁には行かないの。」
「貰つてくれ手がありませんわ。一旦かういふ商賣をしたものは。」
「若し貰ひ手があつたら。」
「そりやあ參りますわ。けれどもそんな人はありやしませんわ。どんなに身持を好くしてゐたつて、

た聲で言つた。君太郎はびつくりして手を振りほどくと、行きなり襖をあけて隣の部屋へ逃げ込んだ。帳場へ行けばお上さんに叱られるに極つてゐる。「大事なお客だからそのつもりでね。」と言はれて來たのである。と言つて元の座敷へ戻るのはどうしても厭である。君太郎は足袋跣足(たびはだし)で暗い庭へ飛び降りた。そして庭の木戸の掛金(かけがね)を外して、表へ飛び出ると、通り掛かりの車を呼び留めてそれへ乘つて家へ歸つた。それ以來その家では君太郎を呼んでくれなくなつた。君太郎は出先を一つ失つたのである。

正雄に會ひ始めてからも、これに似た事が時々あつた。

君太郎は細い身體はしてゐたが、割合にいつも丈夫で、病氣で商賣を休むやうな事はめつたになかつた。それが珍しくも一週間ばかり座敷へ出なかつた事がある。

癒るのを待ち兼ねて、正雄は君太郎に會つた。

「どうしたの。」

「頭が惡くて寢てゐましたの。幾度も入らして下すつたんですつてねえ。濟みません。」

「もうすつかり好いの。」

「ええ。」

「もうお座敷へ出ても好いつてお醫者樣が言つた。」

「ええ。ぼつぼつ始めても好いんですつて。」

「昔から頭が悪いのかい。」
「いいえ。こなひだ倒れたもんですから。」
「倒れたつて。」
「ええ、矢の倉の待合で卒倒したんです。」
　矢の倉に濱田といふ料理屋がある。或晩お座敷で君太郎がそこへ行くと、お上さんがちよいと帳場へ來いと言ふ。又例の話なのである。君太郎は好い加減な挨拶をして、直ぐ座敷へ出た。こなひだからせつせと通つて來る中通りの呉服屋の息子である。君太郎はお上からも話があつたし、厭で堪らないから直ぐ座敷を出た。帳場へ行つて頭が痛いから歸してくれと言ふと、以ての外だと言ふので、大層叱られた。それでも、もうどうしてもゐるのが厭だつたから、歩いても歸らうと思つて、中の口まで來ると、血が上がつてぼつたり倒れてしまつたのである。
「ひどい目に逢つたねえ。」
「もう度々ですわ。又あすこもしくじるんでせう。」
　玉蝶は君太郎の體を今よりも清いと思ふのであつた。

五

正雄は殆ど新布袋家へ入り浸りになつた。芝居がかぶると直ぐはひり込んで、君太郎を呼ぶ。十二時頃になると君太郎を返して、一人でこの家の二階へ寝る。朝、永代通ひの一銭蒸汽の水を蹴立てる音か、深川通ひの石油發動機船の騒がしい器械の音で眼が覺めると、朝飯を言ひつけながら直ぐ又君太郎の所へ電話をかけさせる。そして芝居の始まる夕方時分まで、君太郎と差し向ひになつてゐるのである。

料理は水月からも來た、岡田からも來た、小常磐の野菜椀に舌鼓を打つ事もあつた。たまには喜妻亭から厚切りのビイフステエクを取つて食べた。酒の飲めない正雄には旨い物を喰べるより外にしやうがなかつたのである。

食事の最中だの、これから食事をしようとしてゐる時だのに君太郎が來ると、正雄はきつと一緒に何か食べろと言つた。併し、君太郎は決して正雄の前では物を食べなかつた。菓子一つ果物一つさへ食べなかつたのである。他の藝者は平氣で客に食べ物をねだつたり、平氣で客の膳へ箸を突込んだりするのに、どんなに勸めても君太郎が物を食べないのを正雄は不思議に思つた。君太郎の爲に取つた料理はいつも女中に分けられてしまふのである。

毎晩十二時になると君太郎を返さなければならないのが、如何にも正雄にとつて辛かつた。併し、いつまでも引き留めて置いて、人に疑はれるのも厭だと思つた。そんな無理をして、若しも若河内家

てもう小川さんの座敷へは君太郎を出さないといふやうな事にでもなつたら、それこそ大變だとも思つた。君太郎の方も決していつも歸りたくて歸るのではなかつた。歸らないと家で叱られるから歸るのであつた。いつまでもゐて、變な事でもあるやうに思はれるのが厭だから歸るのであつた。正雄も君太郎もまだ「無事で逢ふ」といふやうな事に、虚榮の満足を得てゐたのである。

君太郎の歸る時、正雄はいつでも臺所口まで送つて出た。君太郎の車の音が遠く消えてしまふまで正雄は臺所の壁の側に立つてゐた。お今はいつでも、正雄の背中を叩いて、「お可哀さうねえ。でも無事でよござんすわ。」と言つた。

正雄はそれから帳場の側へ坐つて、暫くお上さんと君太郎の噂をするのであつた。お上さんはいつも正雄と君太郎の清淨な交際を褒めちぎるのである。

「どうしてあなた、無事で逢ふなんて事がさう續くもんぢやありやしません。大概な方は二度目ですね、二度目には「お上ちよいと來い」か何かできつと話があるんです。餘つ程堪へ情のある方でも五度目か六度目には御自分からもいに切り出すか、きつと私に何とか話があります。極品の好いおとなしい方でさうなんですよ。先生のやうな方があるもんですか、三月も四月も毎晩のやうに呼んでゐて、いまだに無事なんですつてね。ほんとにお珍しいつたらありやしない。私やほんとに蔭でどんなに氣を揉んでるか知れやしませんわ。」

正雄はこんな詞にも苦いを感ずるのであつた。その後にこのお上が正雄に代つて若太郎に掛け合はうとした時も、正雄は顔の色を變へてそれを留めるのであつた。

それでゐて、正雄にはますます夢中になるばかりである。家へは芝居が忙しいから茶屋に泊つてゐる事にして、五日も一週間も歸らないのである。正雄の母は、正雄の忙しいのは度々用ゐられて來たからだと思つてゐる。從つてつきあひも張る事だらうといふので、小遣も前よりは餘計にくれた。正雄は一芝居に一度宛きつと母を招待して、自分の如何にも忙しさうな所を見せた。正雄は度々噓を吐くのが上手になつた。

「一芝居がしまつても中々歸れないんだから困つてしまひます。座長があの通りな氣難し屋なんですから、書拔の直しだとか、人の出はひりを變へるんだとか、樂の日まで何かしら用のない日はないんです。日本の芝居は稽古がぞんざいだから、興行してゐる間が稽古も同樣だ、とお初日から二十日間稽古をして、さてこれから本當に人に見せられるんだと思ふ時分には、もう芝居が樂になつてゐるんだなんて始終言つてるんです。」

座長の水谷は熱心家で有名ではあつたが、正雄が言ふ程でもなかつたのである。よし又どの位熱心であつても、初日から樂まで一日も作者を放さない役者があらう筈がないのである。それでも内證

の實情に通じない正雄の母は、正雄の言ふ事を一々本當だと思つてゐた。

正雄は家へ來た手紙や葉書を、度々茶屋の方へ廻して貰ふ事にした。家に用があると、茶屋から出した事にして、新布袋家から手紙を出した。入用な本も度々家から小包で送らせた。時々丸善へ行つて買つて來る西洋の本もみんな新布袋家へ預けた。新布袋家の一室にはいつの間にか正雄の小さな書齋が出來てしまつた。

正雄が丸善から買つて來る本は、大抵ペエヂが袋になつてゐた。君太郎は象牙の紙切でそれを切るのが大好きだつた。はじめて切つた時、緣のけばけばになつたのを綺麗だと思つて、正雄のちよいとゐなかつた間に、讀み掛のをすつかり綺麗に切つてしまつた。あとで大層正雄に叱られた。それから、自分にもそのけばけばになるのが却て面白くなつて來た。

「あたし西洋の本の匂が大好きよ。」

「僕も好きだ。僕は横文字なんか讀めやしないんだけれども、その匂が好きだから、それで買つて來るんだ。」

「ぢやあ人に切らせるのは口惜しいでせう。」

「口惜しいね。一番初めの匂を人に嗅がれてしまふんだもの。」

「ぢやあなぜ私に切らせるの。」

「君が好きだといふから、特別に許して遣るんだ。だからあんまり上等な木は切らせやしない。」
「ひどい人ね。だけど、英語が讀めなくてよく上等な木だの下等な木だのといふ事が分かりますね。」
正雄は困つて頭を掻いた。
「匂つてば、隨分變つた匂の好きな人があつてね。先生、あのチャンてものを知つて入らして。」
「チャン。」
「ええ。船や何かに塗る。」
「ああ、チャンか。知つてる、知つてる。」
「あの匂の好きな人があるんですよ。」
「藝者にかい。」
「いいえ、お酌さんに。」
「へええ、それは不思議だね。」
「それからここの家のお今姐さんね。あの方はお椀の匂が大好きなんですつて。だから、御飯を食べるのも、お出花を飲むのも、みんなお椀よ。お椀も成りたけ新しいのが好いんですつて。」
正雄は木も何も讀めたものではなかつた。

正雄は富有家に下宿をしてゐる人のやうでもあつたし、居候をしてゐる人のやうでもあつたし、時には又その息子のやうでもあつた。

吉太郎が夜の十二時に帰ると、正雄はそれからちやぶ台の上で勉強を始めるのである。芝居の方の頼まれた仕事をする事もあるし、丸善で買つて来た西洋の本を読む事もある。いつでも床へはひるのは午前の三時頃であつた。

朝飯は大概お桐達とたべた。午飯には女中の中へ割り込んで一緒に食べるやうな事もあつた。晝だけはよく料理をとつたが、お八つには又台所へ出掛けて、女中達と一緒に堅焼の塩煎餅を喰べたり、芳町から来る煮豆を喰べたりした。

お上の留守に帳場へ坐つて、帳簿を手傳つた事もある。新しい帳面の上書をしてやつた事もある。女中達のお友達だの親元だの或は好い人だのに出す絵葉書や手紙の代筆も沢山した。殊にお今がハツイへ出す封筒の上書はいつも正雄でなければならなかつた。

わざと玄関から出はひりせずに、台所口から出たりはひつたりした。出る時、女中は「さやうなら。」と言はずに「行つて入らつしやい。」と言つた。はひる時、女中は「入らつしやいまし。」と言はずに「お帰りなさいまし。」と言つた。

夜、芝居から帰つて来ると、生憎座敷が一杯ではひる所のない事がある。さういふ時は、帳場の側

の鷹樽の前へ座蒲團を敷いて貰つて、その狹い所で翁堂の蒸菓子でも喰べながら、女中やお上と世間話をして、座敷の明くのを待つのであつた。

臺所口から出はひりする藝者は大抵は帳場の前を通つた。中には帳場へ坐り込んで、いつまでも座敷へ行かずにお上さんと長話をする藝者もあつた。多くは正雄の顏を知らない藝者であつたが、それでも稀には向うから挨拶するやうなのもあつた。さういふのは正雄をこの家の親戚の學生か何ぞのやうに思つてゐるのである。

或晩、帳場で話し込む一人の生意氣さうな藝者があつた。正雄が默つて聽いてゐると、それは漢語交りで朋輩の旦那の讒誣をするのであつた。さんざしやべつてしまふと、その藝者は腰を上げた。立ち上がつて一足歩かうとする足を抄はれて、よろよろつとした。正雄が知らずに褥の上に膝を掛けて坐つてゐたのである。

「こりや失敬。」と、正雄が眞赤になつてあやまると、女は居丈高に「失敬ですね。」と言ひながら行つてしまつた。これなども正雄をここの家の居候か何ぞのやうに思つたのであらう。

正雄はこれ程までに品位を落しても、ここの家にゐる事が樂しかつた。正雄に君太郎の顏か見られる園はここより外になかつたからである。

正雄が始めて君太郎を見た夕頃の間は、新布袋家の一番廣い座敷であつた。その時龍非の笑ひ聲と映

次の笑ひ聲とが聞えた下座敷が、一差しで會ふ客には最も適當な場所である。正雄は多くここで君太郎に會つた。瑠璃色に紫陽花が咲いてゐる小さな庭の飛石を渡ると船つきの棧橋へ出られる座敷である。

　この座敷の右の隅にほんの疊一疊敷位の廊下とも附かず緣側とも附かない半端な板の間があつた。そこには手摺があつて、手摺の下の石崖には大川の水が潮を上げて高くなつたり低くなつたりした。

　正雄は君太郎と二人で、よくこの板の間に坐つては大川の流を眺めたのである。「痛いから。」と言つて、正雄はいつも座蒲團を勸めたが、君太郎は決してそれを敷かなかつた。それで一時間でも二時間でも、正雄が飽きて中へはひるまでは、足の指一つ動かさずに行儀よく坐つてゐるのである。「君は當櫓の太刀持を勤めると好い。」と、よく正雄は冷かすやうに言つた。

　色々な船が水の上を往來した。一錢蒸汽に日に何回となく向う河岸に近い方を登つたり降つたりした。石油發動機で動く船には木場の奧の掘割まで行く乘合と、中洲河岸から出て深川の工場へ通ふ東京回漕會社の持船とがあつた。なんとか丸とか言ふ大きな黑い鼠のやうな船も通つた。苫をかけた肥船も通つた。小山のやうに黑い泥を積んだ舟も通つた。夕方になると片手で艪を操りながら豆腐を賣つて歩く田舟があつた。兩國から出る沙魚釣りの乘合舟が幾艘も幾艘も川下へ辷るやうに急いで行く事もあつた。川施餓鬼の大傳馬が日除の幕を張つたり、旗を立てたりして、小さな鐘を撞木で鳴らし連れながら、悲調を帶びた御詠歌の合唱を川水に響かせて、大橋と中洲の間を行つたり來たりする事も

あつた。

夏になると、毎晩のやうに影芝居の舟が石崖の下へ來た。勿論ほんとの屋形ではなかつたが、それでも布か何かで屋根も拵へ、屋根の下に障子もはめて、如何にも昔の舟らしく見せてゐた。中の燈で黄いろく見える障子にはいつも坊主のと頭を分けたのと影法師が二つ映つて見えた。この舟が太鼓と銅鑼と三味線を鳴らしながら、川下から登つて來ると、正雄はいつも君太郎の顔をちつと見て、「好いねえ。」と言つた。聲色遣ひは先代左團次の堀端の忠彌とその時分九藏と言つた今の團藏の白洲の仁木が巧かつた。正雄はこれを喜んで屢五十錢銀貨を君太郎の懷紙に捻つて舟の中へ投げるのであつたが、君太郎はそれを見て、いつも餘り嬉しさうな顏をしなかつた。故人や老人の聲色ばかり遣ふからではない、君太郎は全體役者や芝居がさう好きではなかつたのである。

石崖の直ぐ下を通る船の船頭は、よく手摺に出て居る正雄と君太郎の姿を見て、訣の分からない詞で冷かすやうな事を言つた。ボオトを漕いで通る學生達に「よいしよう」などと囃された事も度々である。或時、ボオトに乘つた學生達が、流れに任せて川を下りながら、正雄と君太郎の姿を遠くから見て、「今におれ達も行けるやうになるぞう。」と一齊に聲を揃へて叫つた事がある。この時は流石に落ちついた君太郎も顏を崩して笑つた。

龍井が龍井さんの花子の供をして、深川の不動へ參詣に行つた歸りに、船をここの家の棧橋につけた事もあつた。

鶸色の蝙蝠傘を差した儘舟から棧橋へ危なさうに上がつた花子の後に、龍井は大きな煎餅の袋をわざと重たさうに擔いでゐたが、手摺に出てゐる正雄と君太郎の姿を柳の蔭からちらと見ると、「いよう、お二人さん。」と頓狂聲を上げた。

かう言はれて顏を染める程正雄はもう初心でなかつた。君太郎は元より落ちついてゐる。やがて二人をこの川添の座敷に招じて、土産の煎餅を貰つて食べながら、不動の賑ひを龍井の口から聞くのであつた。

今では誰でも知つてゐるが、その頃はまだ珍しかつた足が針金でぶるぶる動くやうに出來てゐる蜘蛛の玩具を花子は買つて來た。いきなり袂からそれを出された時正雄は驚いて飛びすさつたが、君太郎は相變らず落ちついたもので、「玩具でせう。」などと冷淡な顏をしてゐた。

夏の日盛りに、川の眞中へ大きな傳馬をもやつて、川底の黑い泥を長い竿の先に鐵をつけたやうな物で、掬つては舟の中へ入れ、掬つて舟の中へ入れする親子の船頭があつた。

向う河岸を毎日時刻を違へず太鼓を叩きながら通る飴屋があつた。飴屋も飴屋の荷も繪遠見のやうに小さく見えたが、どん、どん、どどんどんと單調に打つ太鼓の音は、廣い川幅一ぱいに響いて、皮

の處へさへ手に取るやうであつた。正雄はこの太鼓の音を聞く度に、忘れてゐる山の手の家を思ひ出して、かひなく胸を轟かすのである。彼は唯何となく家を思ひ出すだけで、決して若太郎の側を去らうとはしなかつたのである。

大川の月を眺めた事も度々ある。向う河岸に列んで立つてゐる大きな藏と藏との間から、丸い赤い大きな月が上がるに連れて、漆のやうに真黒だつた水が金のやうに光つて來る。月が高く小さく白くなつて來ると、水も銀色に光つて來る。電車の通らない大橋が黒く高く繪のやうに浮び出ると、橋の下の水が生きた白魚の群を見るやうに、きらきらと細かく光つて來る。

橋の上を黄いろい提灯が往來して、車の音ががらがらと聞える。光の強いアセチリン燈が飛ぶやうに橋を渡つて、チリリインと鈴の音がする。夕顔の間から川へ響いて爪彈の音が冴えると、「……たしかあの時や洗ひ髪」と男の聲で唄ふのが耳に沁み入る。

セメントの煙突も忘れられない。あの白い砂のやうな色をした太く圓く丈の高い怪物は、晝間は眼に痛い烟を深川に靡けたり、中洲河岸に靡けたりしたし、夜は怪しい火を縱に吹いて、屢正雄と若太郎とを恐れさせた。

暗の夜は煙突の姿がまるで見えないで、赤とも紫ともつかぬ火の色が、唯中天に浮いて見えるのである。正雄も若太郎も承知でゐながら、それには幾度か新しい驚きを味ふのであつた。

六

二人の噂が段々世間の口に登つて來た。

この社會の習はしとして、一人の男と一人の女が餘り仲を好くし過ぎると、誰からとはなしに男の耳には女に關る蜚聲がはひつて來るし、女の耳には男の生んだ蜚語(ひご)が聞えて來る。

「そりやお何かあるでせう。藝者といふ者は何かなければとても遣り切れる商賣ぢやないんですもの。成程はじめは借金もなかつたかも知れません。けれども今ぢやあきつとそんな訣になつちやゐますよ。お父さんは繪かきだなんて言つてゐますけれど、あの人のお父さんはびら屋さんですよ——まあ繪かきと言やあ言へますけれど、びらを拵へる繪かきなんですからねえ。それに兄弟も中々多いやうです、學校へも三四人は遣つてあるんでせう。榮耀(えいえう)に藝者商賣をしてゐられる身分ぢやありませんわ。唯君ちやんは利口だからそれが分らないだけですわ。あの人のしてる事は一緒の家にゐる者にだつて分かりやしません。利口な人ですわねえ。」

斯ういふ聲が聞えて來た。正雄は今まで君太郎に限つて旦那といふやうなものは決してないと信じ切つてゐた。併しこの話に依ると少しは疑ひも起つて來る。殊に親父が本當の繪かきでなくてびら屋だといふ事は、甚しく正雄の美しい夢想を破つた。して見ると鼠小僧の墓の前の紫の振袖も怪し

くなつて來る。

「君ちやんはふんとに吝ん坊よ。自分の物つたら毛筋棒一つだつて人にいぢらせないのよ。みんなちやあんと箪笥だの箪笥だのへ納つて、一々錠がおろしてあるの。こなひだなんかも家の小さい子に蜜豆を五厘買ひに遣るのよ。蜜豆を五厘買ふ人つてないかねえ。それからいつかもねえ。家の子に櫻紙を買ひに遣つて、その子が買つて歸つて來ると直ぐ紙數を勘定するのよ。そしていつもより十枚とか五枚とか少いけれどもお前取つたんぢやあるまいねえなんて言ふの。櫻紙を買ふのに紙數を勘定する人つてあたしはじめて見たわ。」

かういふ風な噂も聞えた。正雄は君太郎の几帳面な事をよく知つてゐる。家にゐても決してだらしなく横になつたり、居汚なく眠つたりする人ではないと思つてゐた。蒲團をおつぽり出しといたり、稽古本を手垢だらけにしたりする人ではないと思つてゐた。併し、今の話では人並外れた物惜しみである、寧ろ可笑しい程なしみつたれである。

正雄は色々な噂を聞いて、それに打ち勝つだけの準備を持つてゐなかつた。正雄は一年餘りも君太郎に合ひ續けて、自分一人樂しい夢に耽つてゐたが、その間に君太郎と自分とが一つになつて世間に向ふといふやうな基礎は少しも築いてゐなかつた。正雄は君太郎を何者にも增して可愛かつた。併し唯こつちで可愛がつたと言ふだけで、何人が如何なる惡評を齎しても決して動かないといふだけの確

六成町なと芳太郎から摑まへてはゐなかつた。芳太郎は正雄にとつて尙且美しい謎であつた。

「包み隱しはよさうぢやありませんか。半年も一年も會ひ通しに會つてゐて、無いといふ筈がありませんや。そんな見透けた話があるもんですかね。若しほんとに出來てるなきやあ、男の恥ですぜ。」

――女からは又かういふ聲も聞えて來た。これは女に對する男の夢想を破る聲ではなくて、男に自己の無智を鞭打たせる聲であつた。世間を知り拔いた人が世間を知らぬ人のする事を不思議に思ふ聲で、世間を知らぬ人が世間を知り拔いた人に「眼をあいて世間を見ろ。」と催促をされる聲である。この聲は今までも聞かない聲ではなかつたが、今までは果敢ない虚榮に滿足を得て、却てそれを得意にして來た。その虚榮の色も段々に褪めて來た。今では色といふ外部の物ではない内部の何物かを摑まなければ滿足が出來なくなつた。

「約[illegible]てゐるんだ。」

かういつた聲が又雷のやうに身を搖ぶる。拳のやうに背中をどやす。風の紛のやうに空で笑ふ。正雄は夢へ重い侮辱を受けるやうな氣がした。けれども正雄はその雷にも拳にも風の紛にも打ち勝つだけの力がなかつた。さういふ力はまだ芳太郎から摑み取つてゐなかつた。

「お約束で出たばかりですから。」

「出先から又外へ廻りましたから。」
「遠出でゐませんから。」
「出直りになりましたから。」
「體が惡くて臥せつてゐますから。」
一方からは又、かういふ聲が聞えて來た。男を塞く聲である。男を疑ふ聲である。女を男に會はせまいとする聲である。
君太郎は家でも平氣で正雄の話をした。正雄から來た葉書や手紙を平氣で朋輩に見せた。正雄に貰つた正雄の寫眞を平氣で鏡臺の横に飾つて置いた。新河内家の主人はそのころ警戒を始めたのである。
「……私事とほより御手紙上げるつもりでゐましたが、御存じの通り博覽會の踊で色々取込んでゐますので、つい／＼御無沙汰になりまして誠に濟みませんでした。どうかお許しねがひます。」
「早速申上候先日は誠に失禮を致しました。何卒御ゆるし下さるやう願ひます。わたくしも又工合わるく寢てをりますが、ぢき直りますから御心配なさらないやうに願ひます。」
「……あの節早速御手紙出した筈の處、昨日の御手紙には私儀の手紙が屆かぬやうなれども、私は手紙を出しました故悪しからず、又先頃中は内を留守に致しをり候に付心に掛かりながら御不沙汰いたし平に御許し下され度……」

段々かういふ葉書が來るやうになつた。行く度にきつと會つた正雄が行く度に大抵會へないで歸つて來るやうになつたのである。

正雄から君太郎へ出した葉書や手紙にも君太郎の手へはひらないのが段々出來て來た。途中で消えてなくなるのである。そしてあとで朋輩の鏡臺の抽き出しから出たり、主人の茶簞笥から出たりするのである。

七

櫻の盛りの頃である。向島に株式の園遊會があつた事があつた。中洲の芝居の一座がその日の餘興に喜劇を一幕出すので、正雄も監督旁遊びに出掛けた。

前の晩の大雨で庭が毀れた爲に、會は豫定の小松島で遣る事が出來なかつた。急に模樣替へになつた場所は土手下の田圃を埋めた廣い明地であつた。

藝者やお酌が大勢船で來た。新橋からも、柳橋からも、赤坂からも、下谷からも、芳町からも。櫻の花の少ししか見えない、土が柔かでぶくぶくするやうな明き地を、美しい着物を着た女達は草履や足袋に泥を滲ませながら、テントからテントへ歩き廻つた。

「來てゐるぜ。」

「来てゐますな。」

「先生、會つて。」

正雄は色々な聲を聞いた。そして面には平氣を裝ひながら、胸に胸を躍かせてゐた。元のやうに會へなくなつたこの頃では、斯かる場所で會へるのさへ思ひ設けぬ喜びだつたのである。

餘興の喜劇が始まつた。人は皆その方へ走つて行つた。正雄も入口に近いテントから小屋掛けの舞臺の方へそろそろと歩いて行くと、偶と君太郎に會つた。がらんとした明き地の眞ん中に黒の多い羽織袴の正雄と赤の多いお酌姿の君太郎とが唯二人立つたのである。

と、近所のテントで賑かな笑聲がした。正雄が驚いてその方をよく見ると、木場の福井さんの連中である。花子もゐた、喉次もゐた、太鼓持の辨中もゐた、まだ出にならないのかして衣裳をつけた龍非もゐた。

君太郎と正雄は思はず同時に顏を染めて、右と左へ離れた。正雄が恥づかしさうに兩手で頭を抑へながら、福井さんのテントへはひると、砥の粉の附いた手で龍非が背中をどんと一つ遣つた。

この小さな出來事が正雄にとつては大事件であつた。正雄はこれまで唯の一度も君太郎が顏を赤くするのを見た事がなかつた。君太郎は飽くまでも利口な、飽くまでも冷靜な、飽くまでも落ちついた女だと思つてゐた。その君太郎が顏を染めたのである。しかも正雄と同時に顏を染めたのである。

この頃中からの正雄の不滿足、中にも世間が君太郎を悪く言ふ時にこれに打ち勝つだけの準備を持つてゐない事、甚しく周圍の疑を受けてゐるにも干らず、自分は少しも内心の充實を得てゐない事。かういつた不滿足の火薬に口火を點けたのがこの園遊會である。

繰返して言ふ、正雄はまだ大事な或物を君太郎から掴んでゐなかつた。その或物の何であるかは正雄にも分からなかつたが、正雄の心の空虚なり不滿足なりはその或物でなければ塞ぐ事が出來なかつた。

正雄の前で君太郎が顔を染めたといふ事が、その不思議な或物を得られる鍵のやうに正雄には思はれたのである。

夕飯、正雄は青布袋家の夕顔の間に、ひとりで二時間餘り本を讀んでゐた。本を讀んでゐた時間は可なり長かつたが頁を繰る數は實に少かつた。正雄の心は本にはなかつたのである。本にはない心を本で紛らさうとしてゐたのである。

十時頃になると君太郎が來た。正雄は園遊會の日から八日目で、漸く君太郎に會へたのである。

「御機嫌よ。」

「あなたに。」

と言つて、正雄は本を閉ぢた。いつもはきつと何處まで讀んだか爪で印をして置いてから閉ぢるのに、今日は頁も見ずに構はずぱたりと閉ぢるのである。

「よく來られたねえ。」

「いつだつて來られますわ。」

「この頃はちつとも來てくれないぢやないか。」

「御自分が入らつしやらないんぢやありませんか。」

「いいえ。僕に來るよ。毎日來るよ。」

「ここの家で掛けたいんぢやないの。」

「そんな事ぢやない。僕はいつでもちやんと電話を掛ける序を見てゐるんだ。」

「ぢやあ、家でそいはないのかしら。しやうのない人達ですねえ。」

君太郎の詞に噓はなかつた。君太郎の家は邪魔を設けて、君太郎を正雄の座敷へ出さないばかりではない、てんで掛かつて來た事を君太郎に通じないのである。併し正雄は今そんな事よりもつと重大な事を思つてゐるのである。

「こないだ園遊會の時、遲くなつたかい。」

「ええ、六時近くなりましたの。あ、あの節は。」

「僕も失敗した。みんなで囃すんだもの、話一つ出来やしなかつた。」

「なぜ囃したりなんかするんでせう。」

「なぜだらう。僕らこないだからそれを考へてゐるんだ。君には分からないかい。」

「ええ、分かりませんわ。」

「だけど何とか想像位はつくだらう。僕だつて若しやかうぢやないかと思つてる事はあるんだ。」

「言つて御覧なさい。」

「君が言はなきや。」

「だつて私にや分からないんですもの。」

「きつと分からないねえ。」

「ええ。」

「でも聞くがね、君あの時顔を赤くしたねえ、なぜ赤くしたの。」

「さうですか。」

「知らばつくれちやいけない。ええ、なぜ顔を赤くしたの。君は今まで人に何か言はれても決して僕の前で顔を赤くした事などはなかつたねえ、どうしてこないだは赤くなつたの。」

君は其時俄に笑ひ出した。笑ひ薬でも嗅がされた人のやうに、息と聲とを弾ませて度外れに笑ひ出

した。
正雄は君太郎がこんなにはしたなく笑ふのをはじめて見た。君太郎はさんざ笑ふと、急に默つて、けろりとした顏をした。
「冗談ぢやない。人が眞面目に聞いてゐるのに。」
と、正雄が言つても、やつぱり知らん顏をして默つてゐる。
「ぢやあその事はもう聞かない。その代りも一つ聞きたい事があるから、どうか返事をしてくれ給へ。」
「ええ。」
君太郎は漸く又正雄の言ふ事が聞えるやうになつたと言ふやうな顏つきをした。
「君と僕とはもう一年半以上もここの家で會つてゐる。一體何の爲にかう會ふんだらう。」
「腦を休めに入らつしやるんでせう。」
「そりやさうさ。併し、そればかりぢやない。男と言ふ者は妙なものでね。」
と言ひかけて、正雄は口を噤んだ。ここで何とか一言君太郎の方から言つて貰ひたかつたのである。けれども君太郎は何とも言はなかつた。さつきの燥ぎ方とは丸で反對に打萎れて下を向いてゐるのである。
「ぢやあ僕はもう何もかも言つてしまふよ。」

と、正雄は思ひ切つたやうに又口を切つた。

「君のんはどうだか知らないよ。又どうでも好いんだ。僕がかうやつて毎日のやうにここへ來るのは君が好きだからだ。好きな君に會ひたいからだ。成程、初めは僕も唯それだけだつた。それ以上に何にも考へてはゐなかつた。けれども男といふ者は妙なものでね。」

正雄は又後が言へなくなつた。君太郎はもう顔を上げてゐたが、ぢつと正雄の眼を見てゐるだけで、やつぱり堅く口を結んでゐる。

「まあここに君でも僕でもない男と女が二人ゐたとするね。」

正雄は又道を變へて話し出す。

「その男と女がお互に好き同志だとするね。一時間でも離れてゐたくないのは人情だらう。離れてゐたくないといふのは一緒にゐたいといふ事だね。出來るだけ始終側にゐたいんだ。同じ場所にゐても、出來るだけ側へ坐りたいんだ。出來るだけくつつきたいんだ。若し出來るなら自分の體を向うの體の中へ入れつちまひたい位に思ふもんだ。」

正雄はほつと息をついた。自分の言はうとしてゐる事の糸口が漸く切れたので。

「そこで僕は君が好きだ。これは正直に言ふよ。惚れてゐるといふ詞はなんだか厭らしい詞だが、惚れてゐると言つても差支ない。君の心持はどうだか知らないよ。君の心持はどうだか知らないが、僕

の方はさうなんだ。だから出來るだけ僕は君の側にゐたいんだ。出來るなら僕の體を君の體の中へはふり込んでしまひたいんだ。男といふ者は妙なもんでね、やつぱり最後の所まで行かなければ滿足しないんだ。」
正雄はさつきから言はう言はうとしてゐて言へなかつた文句を漸く言ふ事が出來た。
「決して今どうのかうのと言ふんぢやないよ。唯君の考へを一度聞いて置きたいんだ。かうやつて唯無意味に會つてゐたつて爲方がないぢやないか。」
「その方が好いんですよ。」
君太郎は突然顚狂な聲を出した。
「どうして。」
「その方が好いんですよ。あなたの爲にも私の爲にも。」
「なぜ。」
「さういふ事があると、又色々厭な事が出來て來るもんですからねえ。」
と言ひかけたが、君太郎は偶と何かに氣が附いたといふ風で、急に詞の調子を變へた。
「先生一體どうなすつたの。眞面目。」
「眞面目さ。」

「冗談でせう。」

「冗談なもんか、冗談にこんな恥つかしい事が言へるもんか。」

「いいえ冗談よ。きつと冗談よ。」

「男といふものはみんな獣（けだもの）見たいなものなんだよ。」

「でも先生はそんな方ぢやありませんもの。」

「僕をそんなに綺麗な人間だと思つてゐるのかい。」

「ええ。思つてゐますとも。」

「困つたねえ、僕だつて他の男と同じ事だよ。」

「いいえ、違ひますわ。」

「しやうがないなあ。同じ事なんだよ。」

「違ひますよ。」

「じやあ若し僕がここで暴力を用ゐたらどうする。」

「暴力つて。」

「無理に組み伏せるのさ。」

「あなたはそんな方ぢやありません。」

「そんな方なんだよ。」
「いいえ、だめよ。」
「だつて、さうなんだもの。」
「ぢやあ出來るなら遣つて御覽なさい。」
正雄ははたと當惑した。思想の根ざしを深く見せる爲に、無理に强い詞を用ひは用ひて來たが、さて遣れと言はれて遣る勇氣はなかつた。正雄はここまで來てもまだ全く虛榮と手を切る事が出來なかつたのである。
「出來ないでせう。そら御覽なさい。先生は決してそんな方ではないんですもの。」
君太郎は自分の信ずる所の誤らなかつたのを誇るやうな調子でかう言つた。男に對する侮辱のやうにも聞きなされるこの詞を、正雄は夢にも恥づかしめられたやうには取らなかつた。これ程までに君太郎は自分を信用してゐるのかと思ふと、その信用を破るのが惜しくなつて來た。いつその事に今まで言つた事はみんな冗談だと言つてしまはうかと思つたが、併し折角こゝまで思ひを叙べて來たものを、全然冗談にしてしまふのも惜しいと思つた。
「そりやあ君もかういふ商賣をしてゐるんだもの、旦那といふやうな者がなければとても遣り切れるもんぢやないといふ事は僕もよく知つてゐる。」

正雄は更に文検の道から君太郎の胸の内へはひらうとした。近頃聞いたばかりの藝者知識を土臺にして、苦しい論を立てるのである。

「—若し、その旦那に悪いといふやうな事でもあつたら、僕はいつまでも待つよ、決して君の迷惑にならないやうな事を今しようと言ふんぢやないよ。」

「そんな者ありやしませんよ。」

君太郎は拗ねたやうな顔つきをして、正雄の詞を遮つた。

「ない事はない。あつたつて好いんだよ。」

「ない方ですつてば。」

「まあ、あの方にして置くさ。」

「厭な先生。」

「實際僕にそれだけの資力がありさへすれば、君の旦那にでも何にでもなつて、君の世話がしたいのだが、僕にはさういふ資格がないんだ。」

正雄は構はず語を續ける。

「だから、君は何處までも旦那を大事にして、本當の家なり今の家なりに對する自分の義務を立派に果した上で僕の所へ來てくれれば好いんだ。つまり君が藝者を廢して、他に行く所もないと言ふ時に

なつて、僕の所へ來てくれれば好いんだ。」
正雄はかういふ世帶染みた事を言ふつもりではなかつたのである。併しこの場合かうでも言はなければ自分の悶々が向うへは通じまいと思つたので、思はず責任のあるやうな詞を吐いてしまつたのである。
「あたしお上さんになるの嫌ひよ。」
「だつていつかお上さんならなると言つたぢやないか。」
「厭になつた事があるの。」
「ぢやあお妾になるの。」
「いいえ。」
「家へ歸つて唯働いてゐるつもり。」
「いいえ。」
「ぢやあどうするの。」
「いつまでも藝者をしてゐますわ。」
「それが好い。」
正雄は覺えずかう言つた。その時々で君太郎が好い加減な事を言つてるのには氣がつかないのであ

る。藝者である以上は自分一人で占有する事が出來ない代り、人にも占有される虞れがないと眞面目にさう思つてかう言つたのである。正雄は君太郎に對する自分の地位をもう餘程頼りのないものに思ひなして來たのである。

「いつまでも藝者で居給へ。さうすりやいつまでも君に會ひに來る事が出來るんだから。」

「さうですとも。だからさうしませうねえ。」

「君はいつまでも僕に會つてくれるだらうねえ。」

「ええ、ええ、いつまでもお目に掛かりますわ。」

君太郎は正雄を文元の暗い道へ連れ出してしまつた。

正雄ははつと氣がついた。この儘この暗い所へ置いてきぼりにされてしまつたら、今夜の會見はなんにもならないものになつてしまふ。どうしても又別の道を求めて君太郎の心の裏へはひらなければならない。

正雄は暫く默つて考へた。

「併しねえ。」

暫くすると正雄は又未練らしい眼つきをして、かう言ひ出した。正雄は自分が口に出して言へるた

けの事はもう悉く言つてしまつたのである。そしてその言つた事は自分より年の小さい君太郎に或は言ひ破られてしまつたり或は言ひはぐらかされてしまつたのである。併しそれは唯詞の上の事である。正雄の思想の上皮はその度毎に色を變へたが、中味はまだ中々動かされなかつた。そこで正雄はまだ何か言はなければならなかつた。もう言ふ事がないのに、まだ何か言はなければならなかつた。これなり默つてしまへば負けた事になるからである。

「併しねえ。」

正雄はも一度かう言つた。

「一生藝者をしてゐると言ふ事に決して異議はないが、やつぱり唯會ふといふだけではつまらないねえ。何かそこに僕の安心の出來るやうな方法がありさうなものぢやないか。つまり君を餘所の人だとか知らない人だとか言ふ風に思はないでも濟むやうな手段がありさうなものぢやないか。」

男の態度がしどろもどろになつて來るに連れて、女の姿勢は益はつきりして來る。

「先生。」

と、君太郎は正雄の詞を不遠慮に遮つた。

「え。」

「あなたは一體ここへ何しに入らつしやるの。」

「頭を休める爲に來るのさ。」
「さうなんですか。」
「さうさ。」
「あたしに會へばそれが慰めとかになるんですの。」
「さうさ。始終君にさう言つてるぢやないか。」
「ぢやあ、あたしを妹だと思つて會ひに入らつしては慰めとかにならないんですか。」
「妹。」
「ええ、あたしを君の妹だとするのよ。それでは慰めとかになりませんの。」
正雄は又言葉に窮した。「ならぬ」と言つてしまへば、それまでであるが、若しそれを口に出して、妹にも友達にも、それで厭にならわては大變だと思つたのである。正雄は如何なる事情に置いても、君太郎の側を離れたくなかつたのである。
「ぢや、それもいけないの。」
君太郎は又答を促すのである。
「好いとも。それで慰めになるよ。」
正雄は詐りながらもかう答へない譯には行かなかつた。

「ぢやあさうしませう。ね。今夜からもうあたし先生の妹よ。もう先生なんて言ふの廢しませうねえ。先生も嫌ひなんだから、これから兄さんて言つても好いでせう。ねえ兄さん。」

女は顔に活氣を帶びて、生き生きとした詞遣ひをした。

男は終に敗北の沈默に落ちた。

正雄はその晩遲く家へ歸つた。明くる朝起きると君太郎から『兄上樣、浪花町妹より』と言ふ葉書が來た。正雄はその『妹より』にひどく動かされた。

正雄は前の晩君太郎に大變汚い事を言つたやうに思つた。夜が明けて、朝の白い光の内に、鉛筆で太く書いた『妹より』といふ三字を見た時は、犯し難い權威の前に覺えず頭の下がるやうな氣がした。自分は君太郎を見損なつた。君太郎を他の女と同じやうに思つたのは自分の誤りであつた。君太郎の肉に謎を探らうとしたのは自分の罪であつた。君太郎は決して謎ではない。君太郎は心から綺麗な人なのである。汚い事なしに戀を續けられる人なのである。

正雄はかう思つた。

併しゆうべ自分があれ以上に出なかつたのはまだしも非常な幸福であつた。譏りながら言ひ負かされて歸る時は、如何にも自分を腑甲斐ないものに思つたが、今朝になつて見ると却て綺麗で好い心持

である。若太郎に對しても再び顔向けの出來ぬやうな醜態を見せなかつたのが嬉しい。

若太郎の意志の堅いのにも感心した。若太郎だつて決して自分を何とも思つてゐない筈はないのだが、それでゐてあの毛筋一つ亂さぬ態度を取つたのは實に豪い。自分も若太郎を手本にしてこれからは意志の強い綺麗な戀の續けられる人間にならなければならない。

正雄は又かうも思つた。

これからは本當に妹として若太郎を可愛がらう。もうゆうべのやうな態度は夢にも取るまい。いつまでも綺麗な交際を續けよう。そして若太郎を美しい陶器のやうに大事にして、如何なる人にも手を觸れさせまい。

正雄は腹の底から頭をもちやげて來る嫉や僻や不滿足を無理に抑へた。その内には諦めと言ふやうな氣持も大分混つてゐた。

正雄は存外綺麗な心持で、相變らず中洲の家へ通つた。若太郎の元のやうに來なくなつたのは正雄になつてからも同じであつたが、それをも正雄は疑はなかつた。向うの都合の惡い時に來て却つて惡かつたと言ふやうな氣持で、いつもおとなしく歸るのであつた。

併し自分では變らぬ變らぬと思ひながらも、正雄の段々に遠くなるのは爭はれなかつた。二日目が三日目になり、三日目が五日目になるのは正雄自身にも氣がつかなかつた。

それに新布袋家の門を潜つても、前のやうに元氣の好い正雄ではなくなつた。座敷から帳場、帳場から臺所と、何處でも互に歩き廻つた正雄がたとひ君太郎が來てゐなくても、座敷にひとりでぢつとしてゐるやうになつた。山を登る時の元氣が山を降る時の疲勞に變つたのである。

八

それから三月程經つた。

或晩、君太郎は正雄に、

「あのまだ誰方にも話さないんですけど、あたし今度一本になりますのよ。」

と言つた。これを聞くと、正雄は君太郎に急に消えて行かれるやうな氣がしたが、

「さうかい。それはまあおめでたう。併し、僕は厭だな。僕はいつまでもその裝でゐて貰ひたいなあ。」

と、わざと我儘らしい強い調子で言ふと、

「あたしも厭なの。お酌でゐる方が氣樂で好いんですけど、もうお酌にや大き消ぎる大き過ぎるつて言はれるんでせう。爲方がないわ。」

と君太郎は冷やかな口振で言つた。

「たうとう君も藝者になるのかなあ。」

「ええ。」

「藝者になると又忙しくなるんだねえ。」

「そりやどうだか分かりませんわ。一本になつて却つて閑になる人もありますから。」

「でも今までよりは色んな人に會ふやうになるだらう。」

「そりやあいくらかね。」

「僕は髭むくぢやらな田舍つぺいに、おいこら藝者なんて君が呼はれやしないかと思つて、それが厭なんだ。跣足で駈け出すやうな事も段々覺えて來るだらうしね。」

正雄は自分達の折角今まで營んで來た小さな世界から君太郎を奪はれて行くやうに思つたのである。攫はれて行くやうに感じたのである。君太郎のこれからはひつて行く世界には多くの汚い事やなその醜い事がある。自分も一緒に隨いて行きたいのだが、とてもまだ恐くて行けない。どうしても君太郎は一人で旅に出さなければならない。さう思ふと正雄は可愛い妹を知らない田舍へ嫁にでも遣るやうな頼りない氣がした。正雄は君太郎の周圍に多くの『大人』のゐる事を知らなかつたのである。

藝者になる前の晩、正雄は二四時間君太郎と一緒にゐた。正雄は君太郎のお酌姿を死ぬまで忘れまいとするやうに、瞬時も赤い着物から眼を放さなかつた。

「もう君ちやんはゐなくなるんだ。もう君ちやんはゐなくなるんだ。」
正雄は幾度となくかう言つて、
「花の散るのを見るやうな氣もするねえ。なんだか悲しいなあ。」
と冗談のやうに言つた時、正雄の聲は潤んでゐた。
二人は一緒に窓の側に立つて、セメントの赤い火を見た。正雄が君太郎の肩へ輕く手をかけて、
「お前の君ちやんと列んでセメントの火を見るのも今夜がおしまひだねえ。」
と言ふと、
「何だか心細いわねえ。兄さんの言ふ事は、もうこれつきり會へないやうにでもなるやうね。厭だわ。」
と言つて、君太郎は正雄の顏を見上げた。君太郎の顏はセメントの火の反射を受けて美しく赤かつた。
「ね、會つて下さるでせう。これからは何心細くなるんですから、ほんとに力になつて頂戴よ。ね、兄さん。」
「ああ來るとも。」
と正雄は元氣よく言つたが、腹の中では君太郎の言ふ通り「もうこれつきり」にでもなるやうな氣がした。

君太郎が藝者になつたのは十二月の朔日だつた。その晩九時の『お約束』に三十分ばかり遲れて君太郎が箱布袋家へ來ると、正雄は羽織袴で夕顔の間に待つてゐた。方々濟ましてからで好いと正雄が言ふので、わざと約束の時間を遲くして置いて貰つたのである。

「どちらのお歸り。」

「何處へも行きやしない。家からここへ來たのさ。」

「大層改まつたお裝ね。」

「君のお祝ひだもの。」

「まあ厭だ。氣がつまるわ。」

と、君太郎は尋常に言つたが、心では正雄のあんまり初心なのを氣味惡くも思つた。

「併し、まあおめでたう。」

と言つて、正雄がちやぶ臺に手を突くと、君太郎は疊に三つ指を突いて丁寧にお辭儀をした。

「ひどく本式だね。君ははじめて僕に會つた時もさういふ風にお辭儀をしたねえ。」

「さうですか。」

と冷やかに言ひながら、君太郎は帶の間から新しい煙草入を出して、小さな細い煙管に危なげな手

つきで煙草を詰めた。

「成程さういふ物を持つんだねえ。」

「ええ。」

「煙草は好きかい。」

「いいえ、吸へないんですもの。」

君太郎は又帯の間をしごいて緋鹽瀬の小さな蟇口のやうな物を出すと、その中から黄いろい三味線絲の丸くなつたのを少し出しかけて、

「こんな物も持つて歩くんですよ。」

と言つた。

「お扇子はもう持つて歩かないのかい。」

と正雄が聞くと、

「いいえ、やつぱり持つて歩くんですよ。」

と言つて、帯の後の方から、袱紗に包んだ踊扇を引出して見せた。今までは小刀(せうたう)のやうに帯の前の方に斜に差してゐたのである。

君太郎の藝者姿は少しも不似合な所がなかつた。髪は元より多いから、高く結つた島田も立派だつ

た。額付きが狭いから、額上げのなくなつた眉も、貧しくは見えなかつた。長く引いた裾と背丈との釣合も快く取れてゐた。自信と大人らしい着物の色との取り合せも美しい肌に合つてゐた。新しい名が若太郎に似合へば似合ふ程、正雄は「自分の若太郎」に離れて行かれるやうな気がした。若太郎は一晩の間に未練気もなくお酌の旬を振ひ落してしまつたのである。若太郎は前の日のお酌とは全く関係のない藝者になつてしまつたのである。正雄は自分の今までに會つた事のない或若い藝者に會つてゐるやうな気がして、何とも言はれぬ寂しさに身を襲はれた。

若太郎は淺葱の薄いやうな紋縮を着てゐた。褄には雪を喜ぶ雀これが二匹、筆意を見せて描いてあつた。

「雪堂さんが書いて下すつたのよ。好いでせう。」

と、若太郎は立つて見せた。が、その好みは正雄の趣味に合はなかつた。雪堂と言ふ絵かきの名も正雄に今までに聞いた事がなかつた。

九

その明くる日の晩、正雄は人形町の通りで福井さんに會つた。福井さんは相變らず龍井を連れて童帯ひながら、夜店の道具屋をひやかしてゐた。

「この頃はすつかり中洲に引き取られてゐるんだつてね」
「いいえ、さういふ譯ではありません。夜遅くなるもんですから、時々泊めて貰ふだけです。」
「君も進歩したものさね。」
と、福井さんは冷かすやうに言つたが、急に何か思ひ出したやうな風で、
「藝者になつたつてね。」
といきなり言ふ。
「ええ。」
と、正雄がきまり悪さうに答へると、
「大石さんも大變だらう。」
と、何でも知つてるといふやうな調子で、正雄には分からない事を言ふ。
「大石つて何です。」
「郵船の大石さ。」
「それが。」
「驚いたな。君太郎のあれを知らないのかい。のろいなあ。」
正雄は後からどんと背中を突かれたやうな氣がした。暫く返事も出來ないで默つてゐると、

「好いなあ。あつしもも一度先生のやうな心持になつて見たいよ。」

と、横から細井が口を挿む。

「藝者になるにはやつぱり保護者といふやうなものが入るんですかねえ。」

暫くして正雄がかう聞くと、

「當り前さ。」

と、細井さんが少しも同情のない調子で言ふ。

正雄は分からない事だらけであつた。腹の底から幾つも幾つも疑問が頭をもちやげて來る。それを無理に押し殺して、何の表情も見せずに細井さんに別れると、正雄は直ぐ宿の食堂を指した。

その晩も遅くまで待つたが「藝者」の菊太郎は遂に來なかつた。來ない人を待つてゐる間に、正雄は女中のお今を相手にこんな話をした。

「君、藝者屋の大石つて人知つてゐるかい。」

「ええ。まだお目見えにはなりませんが、お名前はよく存じてゐます。中々よくお遊びになるかたださうですね。」

「會つた事はないかい。」

「一度お芝居でお顏を拜見した事があります。色の黑い男らしい方ですね。先生御存じ。」
「ううん、僕は知らない。」
「なんでもよく藝者衆を引かしちやあ、直き飽きておしまひなさるんですつて。花子さんとこの姐さんなんども一度そのでんを食つて、引つ込むかと思ふと、直ぐ又出るやうになつたんです。」
「飽きつほいんだねえ。」
「さうなんでせう。」
正雄はこの晩はじめて妙な氣になつたが、それでもまた大石の飽きつほいといふ事に多少の望みを維がずにはゐられなかつた。

その晩歸る時、正雄は玄關口の薄暗がりで、狀袋にはひつた分厚なものを渡された。
「ちよいと調べて置きましたから。」
と、お今が言ふので、正雄は直ぐ勘定書だなと思つた。
「預かつて置くよ。」
と、笑ひながら言つて、正雄は平氣でそれを懷へ突込んだが、心の內は穩かではなかつた。
正雄は一年越しこの家に通つてゐるが向うから勘定書を渡された事は今までに唯の一度もなかつ

來まいかとさへ思つた。

水天宮前まで出たが、もう電車がなかつた。人形町の初音の車で、山の手の家へ歸つたのはもう彼是二時頃だつた。

歸る道々、正雄は車の上で考へた。自分ははじめ綺麗な心で君太郎に會ひに行つた。ところが段々その綺麗な心が變つて來て、いつかの晩のやうな事になつた。併し、それもあゝいふ綺麗な解決を見たのだから、その後も相變らず、綺麗な心で前と同じやうに通ひ續けられさうなものである。ところが、それが出來なくなつた。汚い心持はもう疾うに消えてしまつたのに、何だか前のやうにせつせと通ふ氣になれぬ。して見ると、あの晩より前に毎日毎晩通つたのも綺麗な心からではなかつたのかしら。果して綺麗な心が續いてゐるものなら、今でも通ひ續けられさうなものだ、それが前程出來なくなつたのは、綺麗な心が消えてしまつたからかしら、自分ははじめから汚い氣持で通つてゐたのではないかしら。

正雄は自分で嫌だと思ふやうな事ばかり考へながら、屋敷の門の潜りをはひつた。

それでも正月の元日には、晝間三十分ばかり君太郎に會つた。君太郎はそはそはと來て、そはそはと歸つて行つた。方々の座敷から川水に響く賑かな笑ひ聲の内で、正雄は心の臓に食ひ入るやうな寂

しみを味はつた。

それつきり正雄はふつつり青布袋家の門を潜らなくなつた。青布袋家の門を潜らなくなると、段々君太郎と正雄の事が世間へ聞えて来た。新聞の六號活字にも君太郎を主にして一つ二つ書かれた。併しさういふ噂を耳にしても、正雄は決して怒らなかつた。正雄はまだ君太郎が自分を捨てたとも、自分が君太郎を捨てたとも思つてゐなかつたのである。

一月程も經つ内に、正雄は色々な噂を聞いた。

大丸髷に結つて歌舞伎座へ見物に来てゐた。その時、隣に色の黒い、男らしい顔をした紳士が坐つてゐたといふ話も聞いた。

この頃は馬鹿に陽氣になつて、座敷などでも中々はしやぐ、そして誰の事だか、Oだの S だのと頭文字を織込して俳句に川柳を捻らすといふ話も聞いた。

初卯の歸りに、お酌上りの開業藝者三四人と、その時分まだあつた馬道の大金へ寄つて鳥を食べた事がある。銘々鳥を折にして貰つて家へお土産に持つて歸る事になつたが間違ふといけないと言ふので、折を包んで貰つた紙に、銘々自分の名を書く事にした。併し自分の名では電車の中などで人に見られると恥づかしいからといふのが『名義』で、銘々符牒で岡惚の名を書く事になつた。『浪の花』と書いて吉右衛門の本姓を仄めかすのがあつた。『向島』と書いて六代目の寺島を思はせるのがあつた。

『M・K』などと露骨に頭文字を並べたのもあつた。君太郎はその時『内藏之助』と書いた。朋輩の一人はそれが分からないで、

「何。君ちやん。内藏之助つて。」と聞くと、君太郎は、「あら分からないの。心細いわねえ。大石ぢやないの。」と言つた。

そんな話も又聞きに聞いた。

又一月ばかりすると、大石が體が惡いといふ噂を聞いた。商賣にも餘り出ないで、家でぶら〳〵してゐるとか、本所の家へ歸つてゐるとか言ふのである。

間もなく君太郎が子を生んだといふ話を聞いた。正雄はまさかと思つたが、どうも本當らしくもあるので、三四日妙な氣持でゐると、子供は生れたが直ぐ死んだといふ話なのである。

それから又半月ばかり經つて聞いた噂に依ると、子を生んだんでもなければ、生んだ子が直ぐに死んだのでもない。大石に連れられて轉地をする途中、汽車の中で墮りてしまつたのだと言ふのである。話をした人は、その時の汽車の中の混雜を、見て來たやうに話した。

正雄は「自分の」君太郎が、さういふ體になつてさういふ境遇に陷つたのを心から哀れがつて、人知れず眼を潤ますのであつた。

正雄はもう一人でゐるのが寂しくて寂しくて堪らなくなつた。彼は成るべく芝居の中に長くゐるやうにした。芝居の中の稽古と體操とは、今の正雄に最も適當な緩和劑であつた。

芝居のない時は淺草の公園へ行つたり、銀座の通りを歩いたり、新橋のステェションをうろついたりした。正雄は人の大勢ゐる所を探し歩いたのである。

暫く離れてゐた福井さんも戀しくなつて來た。毎晩君太郎に會ひに行く時分には何かと口實を設けて、精々遁げよう遁げようとした正雄が、今度は福井さんに催促をするやうにして、方々へ連れて行つて貰ふやうになつた。

その頃、芝居の合間に南國の美術倶樂部で中洲の下廻り連中が研究會をした事があつた。いつも下女や丁稚や藝者ばかりしてゐる連中が、お富や浪子や貫一や武雄に扮して日頃の鬱憤を洩らす會である。正雄は芝居の方の關係もあるし、暇が在場所に見えてもゐたので、遊び旁見物に出かけると、福井さんが來てゐて、大層正雄の來たのを喜んでくれた。

會の終ると、福井さんはその日の費用の不足を補つて遣つた上に、正雄に相談して成績の好かつた一二の下廻りに賞金を與へた。

それから頭取に若干の纏まつた物を渡して、みんなを何處かへ飲ませに遣る事にして、自分は來合はした幹部の役者達と正雄とを連れて濱町の岡田へ引上げた。

正雄は餘り身裝を構ふ男ではないのに殊にその頃は邊幅も飾らず、髭や髮を延びるに任してゐたから、晴れがましい料理屋の廣間で、顔や着物の光る役者達と一緒にゐるのが、自分ながら見すぼらしく思はれた。

併し、福井さんは相變らず正雄を自分の隣に坐らして、膝一つ崩すにも正雄に斷つてから崩した。

「やつぱり男の友達の方が好いなあ。」と、正雄はつくづく思つた。

その晩は隨分大勢藝者が來た。多くは老妓で若いのは花子と映次ばかりだつた。福井さんは名のある老妓を一々正雄に紹介した。そして一人々々に正雄は年若でも學問のある豪い人だといふやうな話をした。

正雄の歸らうとする時分に、一人遲れて來た年増の藝者があつた。好い器量ではないが、眼元口元に少しも浮いた所のない、詞のはきはきした、立居の眞面目な人だつた。

福井さんはこの藝者が來ると、直ぐ自分の側へ呼んで懷から紙入を出して渡した。藝者は福井さんが小聲で言ふ命令を二つ三つ聞き終ると、淑かに立つて座敷を出た。

正雄が歸る時、本を入れた正雄の風呂敷を持つて、玄關まで送り出してくれたのは、この藝者一人だつた。

する信者や長老を四五人出して宗教上の議論をさせた。鳩宮とエミヤが縋り合ふ所には、櫻の花を散らしたり、鐘の音を使つたりした。

初日は『開幕前滿員』といふ景氣だつた。正雄も早くから芝居へ詰めて、大道具小道具のためを押したり、一人々々役者の部屋を尋ねて臺詞の修正をして歩いたりなどしてゐた。

午後の六時頃、やつと序幕が明いたので、正雄はほつとしながら作者部屋の前まで來ると、本場の藴井さんが羽織袴でそこに立つてゐた。

「大層改まつたお裝ですね。」

と、正雄が聲をかけると、藴井さんは内裏の人らしい調子で、

「おめでたう。」

と、初日の挨拶をした。

「やつと今明いたんです。けふは御見物ですか。」

「ちよいと初日のお祝ひにね。今度も君何處か書いたのかい。」

「ええ、一場ばかり。書いたといふよりは役者の註文を筆記したといつた方が好いでせう。くだらないんです。」

「そいつあ是非拜見しよう。併し、今夜は僕につきあつてくれるだらうね。」

「今までふつて、何處かへ行くんですか。」

「なにね、今度學校の寄宿舍に倶樂部が出來たんだ。その倶樂部開きにけふ呼ばれたんだが、一人ぢやあ寂しくつていけないから、君を誘ひに來たのさ。行つてくれるだらう。」

「何時ですか。」

「なあに君の用が濟んでからで好いんだよ。それまで僕は誰かの部屋で遊んでゐるから。」

「ぢやあ私の關係の所が濟んだら、お供しませう。」

「さうしてくれ給へ。寄宿は君行つた事があつたつけねえ。」

「いいえ、まだありません。」

「ぢやあ丁度好い。まあ一度は行つて見て置くさ。」

「けど、こんな姿で好いでせうか。」

正雄は相變らず、久留米絣に小倉の袴であつた。

「結構だとも。」

「さうですか。」

こんな事で正雄は一度福井さんと別れた。

正雄にその晩福井さんと何處かへ行くのが何よりも樂しみであつた。自分のまだ知らない立派な社

理屋へ行つて、晝のやうに明るい電氣の下に美しい女達の集まつてゐるのを見るのも樂しみだつたには違ひないが、その方は君太郎の事があつて以來、さう正雄の興味を引かなくなつてゐた。正雄は自分の大好きな福井さんとさういふ場所へ行つて、幅の利くのを見るのが何よりも好い氣持だつたのである。

正雄はそはそはしながら、大急ぎで自分の用を片づけ始めた。

三築目の明く時分に正雄の用はもう大抵片づいた。元より正式に雇はれてゐるといふ訣でもなく、半分は研究、半分は道樂といふ風だから、用もないのに芝居が濟むまで座にゐなければならぬ義務はなかつたのである。正雄は早速三階へ福井さんを探しに行つた。

福井さんは龍井の部屋で、鮨卷を食べてゐた。

「どうです。お供しませうか。」

「もう好いのかい。」

「ええ。」

福井さんが立ち上がると、龍井は羨ましさうに、「どちらへ。」と聞いた。「なあに、一寸。」と、福井さんは曖昧な返事をして、直ぐ正雄と一緒に部屋を出た。

「あいつ等に言ふと又煩いからねえ。」

二人は暗い裏口を出ると、同時にほつと息を吐いた。星の綺麗な春寒の夜である。猿屋、花屋、中村屋などといふ茶屋が、みんな新しい暖簾を掛け連ねて、新しい提灯の火に初日の景氣を見せてゐる。

「しまひまでに顔を出しやあ好いのだから、ぶらつか歩いて行かうぢやないか。」

「ええ。」

「氣持の好い晩だなあ。星が澄んで見えるねえ。」

正雄は「こりや意外だ」と思つた。星だとか、夜の空氣だとかいふ物が、家の内の歡樂に夜每を暮す猫八さんのやうな人に感じられようとは今まで夢にも思はなかつたのである。

「あなたのやうな人でも、こんな晩に靜に外を歩いて見ようなんて氣になる事がありますかねえ。」

「そりやああるとも。僕は賑やかなら、うんと賑かなのが好きさ。靜かなら、うんと靜かなのが好きさ。君は僕が木曾路を一人で旅行した事のあるのを知るまい。」

「へえん、そんな事があるんですかい。」

二人は日本橋側の河岸を大川端の方へ歩きながら、しみじみと話をし合つた。二人の口を流れて出る詞に、必しも深遠な内容があつたのではないが、一句々々にしつとりした春の夜の空氣が滲み込んで、二人は互に世にも稀な美しい詞を聽くやうな思ひがした。

大川は黒く靜に流れてゐた。その時分あつた大釜だの、その隣の生稻などの燈が、歩きながら話す二人の顏を薄明るく照らした。

「君は小さとを知つてゐたつけねえ。」

　突然福井さんは正雄にかう聞いた。

「いいえ。」

「知つてるさ。」

「いいえ、知りません。」

「あの時來た筈だがなあ。いつか、ほら、美術倶樂部の歸りに岡田へ寄つた事があつたらう。」

「ええ。」

「あの時確に來た筈だがなあ。それとも君が歸つてしまつてからだつたかしら。」

「どの人でしたらう。僕覺えてゐません。」

「さうかねえ。實はけふ行くのも半分はそれの義理なんだ。」

　福井さんは、濱町に一軒持家のやうな物を持つてゐた。朝一通り店の用を濟ますと、直ぐ車でそこの家へ來る。それから、そこの家を根城にして夜遲くまで方々遊んで歩く。時間が來ると、きつと濱町へ一旦引上げて、そこから車で又店へ歸るのを常にしてゐた。その濱町の家には福井などが「多

人、多ぁさんと言つて土地にゐる職人があつた。少しも美人らしい面影のない、陽気な町女房風の人であつた。福井さんがこの多ぁさんを内縁の妻として柳橋から根引して来たのは、その時分から四五年前であつた。小さとといふのはこの多ぁさんの眞實の妹であつた。姉が引いてから、この氣丈な妹は一人で其の家を續いて、病身の頑固な父と神様のやうな人の好い母と貰ひつ子の民ちやんといふ可愛らしい女の子とを、自分の手一つで養つて来たのださうである。その頃正雄はまだ多ぁさんにも會つてゐなかつた。

「すると、あなたの妹になる訳ですねえ。」

「まあ、さうさ。併し中々強い奴でね。僕などはいつでも議論に負かされてしまふよ。これからはお前もいゝ話し相手が側にゐてくれるから大丈夫だがね。」

と言つて福井さんは面白さうに笑つた。

「何しろ『男嫌ひ』で通して来たといふ女なんだからね。始末におへないやね。女も男の味を知らないうちはよたれたつて、僕なんぞは始終さう言つて遣るんだが、へん男なんか厭な事たつて鼻も引つかけない調子なんだ。そんな風だから、習ひ方は中々勉強でね、元は何も出来ない奴だつたが、今では三味線でも清元でも一中節でもちよいと遣るやうになつた。なあに藝で賣れない筈はないつて言ふんだね。負けず嫌ひの強情つ張りで、たうとうまあ一流といふ所まで押して来たのさ。」

「中々強い人ですね。」

「やつぱり親父の血だね。親父がまた七十にもなつて、車にも乘らずに歩かうといふ先生だからね。内のなども隨分強いには強いが、とても妹にや敵はないよ。」

二人は兩國へ來た。電車が本所の方からも濱町の方からも柳原の方からも來た。福井さんは走つて來る電車の前を驅け拔けたり、留まつてゐる電車の後へ廻つたりしながら、まだ小さとの話をするのである。

「あいつの男嫌ひぢや隨分面白い話があるんだ。二三年前の事だつたかね。あいつを狙つてゐる男が三人あつたんだ。併し、相手がああいつた女だから、三人ともびくびくして中々切り出さずにゐたと思ひ給へ。まあお互に競爭といふやうな鬮梅式になつて、みんな呼ぶにはよく呼んだんだね。相當にみんな名のある人だよ。ところがその内の一人が、たうとう堪へ切れなくなつて、ぶつかつたんだね。場所は代地の或待合だつたがね。無論だめさ。あべこべに散々罵倒された揚句に、横つ面を一つ遣られたと言ふぢやないか。客もかうなると災難だね。その話が何處からともなくあとの二人の耳へはひつたんだ。それからと言ふものは、後の二人もぱつたり來なくなつてしまつたと言ふぢやないか。話を聞いて、こりやとても物にならないと思つたんだらう。」

福井さんは又面白さうに笑つたが、やがて正雄の顏を覗くやうにして、

「その一人が藝者だつたら面白いね。」

と擽つたいやうな顔をして言つた。

「へええ。庫長ですか。」

と、正雄は驚いたといふ顔をしたが、やがて、

「ははあ。さう言へば思ひ出した事がありますよ。いつか庫長の内へ行つた時に、色々藝者の話が出た時がありましたがね、どうもこの頃は芳町柳橋と見渡したところで、これはと思ふのは一人もない、たゞ柳井さんの始終呼んでゐる——さうです、確に小さとか言ひましたよ——あれなら一寸面白いなんて言つてゐましたよ。さうです、男嫌ひだとか何とか世間で言つてゐるから、さういふのが征服して見たい、なんてね。」

「へえ、またそんな事を言つてるのかい。なあにもう疾うに自分の方で引き下つてゐる癖に。」

正雄は柳井さんの話で、急に小さとといふ女が懐しくなつて來たのである。まだ自分の會つた事もない、顔を見た事もない人が、もう古くからの友達のやうに思はれて、庫長の次谷でさへ羨んだといふやうな話が、何とも云へず愉快に聞かれたのである。それで堪へず、鶴奴ともの人の噂をしたのである。

柳橋へ掛かると、つい向うに、柳屋とでも言ひさうな、豊の高い二層樓が、花やかな灯を黒い水に

落してゐた。

「あれだよ。」

と、福井さんはその高殿を指した。

十一

福清の二階の廣間にはまぼしいやうな電氣が點いてゐた。紅白の段だら幕で後を圍つた、木の香の新しい所作舞臺では、今若いのが三人「うつぼ」を踊つてゐる最中であつた。

客は廣間のここかしこにおのおの末社を從へて、群島のやうに陣取つてゐる。大得意ばかり呼んだものと見えて、座敷の廣い割に客は少かつた。福井さんと正雄も隅の方に小さな島を一つ殖やした。島から島を絶えず女中達が斡旋して歩く。福井さんの所へも、女中頭とでも言ひさうな、痩せた婆さんが直ぐと挨拶に來た。

客は實業界に名のある人達ばかりであつた。福井さんは小さくなつて坐つてゐながら、そつと正雄にそれらの人々の名を敎へた。あれは第百の誰、あれは製糖の誰、あれは商業會議所の誰といふ風に。正雄は名にのみ聞いてゐた實業家の顏を一度に知つた。併し、少しもそれを嬉しいとは思はなかつた。どれもこれも下卑た顏だと思つたばかりである。金のありさうな福々しい顏は揃つてゐても、貴

野卑と蒼白い顔の色はどの顔にも見られなかつたのである。その頃成金でこの社會の草木をも靡かしてゐる[illegible]とかいふ若い人も其處の席の中に一人で坐つてゐたが、その人の捻り上げた八字髭も正雄には卑しく見えた。正雄は藝者の美しい顔や美しい聲にのみ眼と耳を奪はれてゐた。

「今、茲を唄つてるだらう。あれが小さとさ。」

細川さんは、かう言つて、山本の方へ目をやつた。

正雄は何處かで見たやうな顔だと思つた。今日は髪も違ふし、見たと言つても、唯一度ちよいと見たゞけの事だから、確とは分からないが、やはり細川さんの言つた通り、いつか岡田で見た人らしい。遅く來て、正雄が歸る時、本の包を玄關まで持つて來てくれた。あの人らしい。さう言へば、あの時細川さんはあの人に紙入を預けたか何かしたやうだつた。

「あの人ですか。あの人なら見た事があるやうですねえ。」

「さうだらう。確に、あの時來た筈なんだもの。」

「あの人なら、ちよつと變つた人だと思ひましたよ。」

正雄は落着いた口調で事もなげにかう言つたが、岡田の晩自分の受けた第一印象は今でも自分の心を去る事が出來なかつた。彼はその晩の暗い歸り道に、車の上で或怪しい夢想に耽つたのである。

正雄は今小さとの美しい唄聲を聞いて、微かに胸の轟くのを覺えた。

「うつぼ」が済むと、白襟に黒の揃を着た地方の藝者連は、大方福井さんの周圍に集まつた。小さとも來た。小さとの親友だとか言ふたつ子と言ふのも來た。福井さんは、いつもの通り、一々正雄を藝者達に引き合せた。

「これが僕のお友達の小川君。これがたつ子。これがやま子。これが巴。」

福井さんは一人々々藝者の名を敎へて、

「さあちやんはもう知つてるねえ。」

と、小さとの方を向いて言つた。

「ええ。先夜は失禮。」

と、尻上りに言つて小さとはぢつと正雄の顏を見た。確にあの人である。あの人の目である。本の包を持つて送り出してくれたあの人の目である。正雄はきまりが惡くなつて、桐胴の火鉢に綺麗に活かつてゐる佐倉の炭火に眼を落した。

藝者連が樂屋へ歸つてしまふと、次の「京人形」が始まつた。今度は小さとが流れを唄ふのである。福井さんはもう飽き飽きしたといふ風で、正雄を相手に四方山の話を始めた。正雄は右の耳ではその話を聞きながら、左の耳では絕えず小さとの唄ふ聲を聞き遁すまいとした。

福井さんは、その時分存生だつた龜淸の主人の話をした。主人は生れながらの料理屋ではなかつ

かちやかちやいふ。人の聲は段々騷かしくなつて來た。

「旦那、今晩は。」

「旦那、暫くねえ。」

「旦那、よく入らしつてねえ。」

旦那、旦那といふ嬌めかしい聲が、福井さんと正雄の廻りを取卷いた。後見をした男の師匠も挨拶に來た。手傳ひに來たお囃子の連中も挨拶に來た。一流の三味線彈、一流の長唄の師匠、一流の大鼓、さう言つた男の連中も福井さんの側に集まつて來た。

一體福井さんは客をする事が大好きで、客に呼ばれる事が大嫌ひであつた。呼ばれて素直に行く事はあつたになかつたが、行つたが最後、何か花々しい事をして來なければ滿足の足りない質であつた。

福井さんは小さとに耳打をした。何處へか電話を掛けさせた。間もなく小さとが歸つて來て、何か福井さんに耳打をした。

やがて福井さんの廻りに集まつた大勢の藝者や藝人の間に、それからそれと耳打が行はれた。耳打の意味が飲み込めると、一人々々福井さんの顏を見て、禮を言ふやうな眼つきをした。

「中洲の松本へみんな連れて行かうと思ふんだ。君も行かないか。遲くなつたら車で送らせるから。」

福井さんは小さい聲で正雄にかう言つた。

あつた。松本は正雄が家のやうにしてゐた芝居茶屋の直ぐ筋向うにあつた。
正雄はこの外構へを好く知つてゐて中を少しも知らない家へはじめてはひつた。
二階の隣間には座蒲團と脇息と火鉢とが行儀よく列んで客を待つてゐた。
「お客をするんぢやない。みんなで遊ぶんだ。何か臺を持つて來て。お酒だ、お酒だ。」
福井さんは景氣の好い聲で、かう叫りながら、脇息を自分でみんな床の間へ運んでしまつて、火鉢をみんな一つ所へ集めた。
「さあ、丸くなつて、丸くなつて。」
そこへちやぶ臺が來た。通し物に銚子が來た。
「大急ぎで牛か鳥をうんとそ言つてくれないか。うんとだよ。ちつとやそつとぢやなかなか足りないんだから。」
福井さんは女中にかう言ひつけながら、手酌で七八杯立て續けに飲んだ。
「ああ、やつとこれで人間らしくなつた。袴羽織で名士なる者の顏を見てゐる位窮屈なものはないね、どうだい小川君、一杯獻じやせう。」
かう言つて、福井さんは正雄に盃をくれた。正雄は勸められる儘に二三杯重ねて飲んだ。
「どうです、今日の御感想は。」

鶴井さんは、役者の部屋で聞き覺えた訪問記者の口調を眞似た。

「有難うございました。お蔭で今まで見た事もない盛んな世界を見ました。文學者などは一生涯かかつたつて、ああいふ世界に棲息出來るやうな身分にはなれません。」

「あんな事に驚いてはだめだ。まだまだ盛んな世界があるよ。まあ段々見せるから待つてる給へ。なあに文學者は、その當事者にならなくつたつて好いんだ。見さへすれば好いんだ。その方は僕が請け合ふから安心してる給へ。」

鶴井さんは柏木頭の師匠と猫町の師匠と、さかんに盃を取り交しながら、意氣天を衝くといふ風な調子で、いつもになく氣焔を吐いた。

「一體日本の文學者は見聞が狹過ぎるね。柏木の名さへ碌に知らない奴に、どうして藝者の事などが分かるもんか。遊びと言へば神樂坂か富士見町が絶頂なんだらう。たまに江戸向へ出かけて來たところで、皆川町の松本あたりで、電話もないやうな家の藝者を見るのが關の山なんだらう。そんな事で何が分かるもんか。君も遊びをするなら、悪い事は言はないから一流の遊びをし給へ。筋の好い遊びをし給へ。百河内家などのお酌にでれでれするやうぢやあ、まだ初歩だね。」

鶴井さんの舌鋒は意外な方へ向いて來た。正雄は狼狽して、頭を掻きながら、

「あれはもう一本になりました。それにもう商賣を廢めるさうです。」

と、小學校の生徒が先生に叱られて、言訣をするやうな口調で言つた。
「へえ、なんだかおつなお話ですね。」
藏前の若い師匠が、後から正雄に盃をさした。
「莫迦にお堅いお方かと思つてゐたら、へえ、さういふ事もあるんですか。」
「それぢやあ好いや。」といふ風で、今度は靴町のが盃をさした。
「先生お一つ。」
「先生お一つ。」
たうとう正雄はみんなから一杯宛飲まされた。
そこへ小さとが來た。家へ寄つて着換へて來たと見えて、もう白襟に黒の着附ではない。消炭色の二枚重にゴブランの丸帶を締めてゐる。
「どうも濟みません。あちらがなかなか濟まないもんですから。」
と、言つて淑かに兩手を突いた。正雄はその子供のやうに優しい聲を聞いて、これが福井さんのさつき話したやうな聞かぬ氣の人なのかと思つて、不思議さうにその顏を見た。
「みんなはどうした。」
と、福井さんが聞く。

「今晩で幾晩ですつて、みんなもう早く来たくつて堪らないんですけれども、ラアジが睨んでゐるでせう。なかなか出掛けられないんですつて。でも、もうアツルさんやコムさんに車が来てたやうですから。」

さう言つてゐる内に、階子段の下で賑かな聲がして、どやどやと二三人這つて来た。たつ子、巴、その外在籍のまだ引き合にされない年若様の藝者が来たのである。

黒井さんは、嬉しい時にいつも遣る癖で、両の掌を激しく擦り合せながら、

「さあ、みんなお腹が減つてるだらう。先づ腹を拵へて、それからゆつくり頂戴する事にしようぢやないか。」

と言ふ。そこへ又いチヤアのやゑ子が筆頭で、茂九郎になつたのだの、女夫者になつたいだいの、猿しになつたのだのが駈け附けて来た。

中の鍋と鳥の鍋とが二側に置かれた。十六人の男女は二手に分かれて、賑かに笑ひさざめきながら、好きな方の鍋へ集れた。女中は酒徳利の給仕に忙しかつた。

黒井さんは誰よりも一番喰べた。小さとも黒井さんに負けずに喰べた。正雄は飲めぬ酒を無理に飲んだので、少しも物が咽喉を通らなかつた。

「好いお色ねえ。」

小さとはかう言ひながら正雄の側へ来て坐つた。餘り喰べたので苦しいのか、筆固で帯の上を叩い

てゐる。
「上がれるんでせう。」
「いいえ、ちつともいけないんです。あなたは。」
「あたし、あたしは喰べる一方。」
「でも少しはいけるんでせう。一杯差し上げませうか。」
正雄は何とか言つて、小さとを自分の側に置きたかつたのである。
「さうねえ。あなたが下さるなら頂きませうか。」
正雄は自分の盃を干して盃洗に入れようとした。小さとは默つて、その盃を正雄の手から奪つた。奪はれた儘に、正雄も默つて、自分の唇に觸れた儘の盃に酌をした。正雄は何となしに手が慄へた。この社會では、かかる事の一夜に幾度となく行はれるのを、正雄はまだ知らなかつたのである。
喰べ殘しの鍋やら皿やら茶碗やらが片づけられて、そこにもここにも盃の遣り取りが始まつた。龜井さんは少しも一つ所に坐つてゐずに、あつちへ行つて飲んだり、こちらへ來て飲んだりした。忙しない掛聲をして藤八拳を打つのがある。居合拔がしさうな掛聲をして「やなぎ」といふ拳を打つのがある。玩具の球臺を出して來て、球を突くのがある。絶えず賑かな笑ひ聲がする。アウルさん、ゴムさんなどの名が盛に呼ばれる。その中で龜井さんは延吉といふ年寄藝者の糸で、太夫持辨中直傳

男も女も、思ひたい事を自由に思ひ、言ひたい事を自由に言ひ、爲たい事を自由にしてゐる。

小さとは少しも正雄の側を離れなかつた。他の盃は大抵盃洗へあけてしまつたが、正雄のさすのは必ず正直に飲んだので、大分醉が廻つたやうである。頻に植木屋と三助を槍玉に擧げて、骨を刺すやうな皮肉を言つた。

「厭だねえ。あんなにでれでれして何が面白いんだらう、まるで煮え過ぎたお雜煮だね。何處へ箸を入れたら好いんだらう。」

「ここへお入れなさいまし。」

と、師匠が大きな口を明くと、三助は箸で鹽からを挾んで、それをその口の中へ入れた。

「ああ堪らない。ああ堪らない。」

と、小さとは眉の根に皺を寄せながら、さも汚いものでも見たといふ風に、灰吹の蓋を取つて唾をした。

「でも、さあちやんは、まるで味知らずといふのだからお話にならない。」

と、白毛(しらが)を藥で黑く染めてゐる浪花町の師匠が口を出した。

「よござんすよ。今に好いのを拵へて驚かしてやるから。氣に入つたのがあいやあ、あたしだつてね。」

と言ひながら、小さとはほんのりした眼元でぢつと正雄の眼を見た。正雄は又何となしに慄へた。

「様子の好い事を言つたつてあなたはだめですよ。あなたは本當に男が嫌ひなんだから。この頃おやあ、もう男の方で大損害けませう。」

南の端の赤角刈の頭を撥胼胝のある小指で掻きながら、かう言つた。

「なんとでも仰しやい。ねえ、アウェさん。」

と言つて、かう子はたつ子の大きな眼を意味ありげに見た。たつ子は正雄の顔を見てくすくすと笑つた。正雄は又何となしに慄へた。

「皆開眼の見えない奴に何が分かるものか。」

今まで黙つて聞いてゐた細井さんは、突然かう冷かしながら、兩袖を廣げて鳥が飛ぶ時のやうな身振をした。

話は又外へ移つて行つた。

正雄はもう歸らなければと思つて、みだれ箱に入れてある細井さんの時計を見ると、いつの間にかもう一時になつてゐた。

「好いさ、好いさ。けふは僕も一晩ここで遊んで行くつもりだから、君もゐてくれ給へ。たまには好いさ。」

と、細井さんが言ふ、正雄は歸るともなく、ゐるともなく、やつぱり同じとこに坐つてゐた。

「雜魚寢、雜魚寢」

かういふ聲が誰からともなく起つた。

「それぢやあ、下へ有りつたけお床を延べて置きますから、どうか宜しいやうにお休み遊ばして。」

かう言つて、女中は下へ降りて行つた。

もう五十を二つ三つ越してゐる延吉は、ぐでんぐでんに醉つぱらつて、福井さんの膝を枕に寢てしまつた。福井さんは硯箱を取寄せて、その皺だらけの顏へ、髭を生やしたり、隈を取つたりした。人々は又賑かに笑つた。

「もう宜しうございます、どうぞお下へ。」

間もなく、階子段の所で女中の聲がした。一同は延吉をそこへ寢ころかしにして置いて、どやどやと下へ降りた。

川添ひの下の廣間には、疊の見えない程に敷蒲團が敷き詰めてあつた。艶めかしい縮緬の搔卷はそここに捨てたやうに置いてあつた。枕は人數だけ一隅に堅めて置いてあつた。三つある電燈はいづれも薄紫の袋が冠つてゐた。

「おい、おい、お銚子を五六本かためて持つてきといてくれ給へ。それからお香子か何かと。そしたら、もう寢ても好いぜ。」

福井さんはそんな中に言ひつけるかと思ふと、いきなりその廣い敷蒲團の上を轉げて歩いた。子供が寝た頃を睨けて言ふやうに。

「ほ、ほ、面白いな。小川君、君も轉がつて見ないか。好い氣持だぜ。」

福井さんは寝ながら、激しく兩の掌を擦り合はせた。

「ええ。」

と言つて、正雄も横になつた。併し、とても福井さんのやうに燥(はしや)ぐ勇氣はなかつた。正雄の心は、賑なさまでに續いて來る新しい光景に打たれて、もう餘程疲れてゐた。

正雄ばかりではなかつた。遊び疲れた男女は、羽織を脱ぎ、帶を解いて、そこここに倒れた。正雄の足の所には池の端の娘が、正雄の頭の所には藏前の兄があつた。その内に福井さんが起き上つて、電氣を三つとも消してしまつた。

それからの騒ぎと言つたらなかつた。二階に寝ころがしにされた延吉があばれ込んで來る。植木店と一勢が話をしてゐる上から蒲團を被せて馬乗に乗るのがある。福井さんは何處からか水を含んで來て、寝てゐる人の顔の方をさぐつては、冷たい霧を吹き込んで歩いた。その度に魂ぎるやうな女の聲がしたり、一本刀でもとられでもしたやうに男の聲がする。とても寝られたものではない。

その内に、延吉が福井さんを見附けて、喧つくしを始めた。

「ほんとに旦那は邪險だよ、あんな所へたつた一人置いてきぼりにしてさ。風を引いたらどうするんだよ。」
「水つぱなでもお垂らしなさいまし。」
誰かが隅の方から造り聲をしてかう言つた。
「默つといでよ。お茶つぴい。あたしや亭主と話をしてるんだよ。」
「痛い、痛い、詫まるから放してくれ。賴む、賴む。」
と、福井さんのさもさも弱つたらしい聲がする。
「あれで婆さん旦那に氣があるんだから驚きますね。」
「旦那が又からかふから惡いんです。」
「女もあゝなると氣味が惡いもんですね。まるで色氣違ひです。」
正雄の頭の方の藏前のと足の方の池の端のとが小聲でこんな話をし合つた。
やがて福井さんの聲も聞えなくなつた。延吉の氣はひもなくなつた。そこここに微な鼾が起つた。
正雄もいつの間にか夢に入つた。
暫くすると、きやつといふ女の聲で眼が覺めた。髮の毛を振り亂した、顏の滅茶々々に崩れた女が提灯を下げて枕元に立つてゐる。正雄は水でも浴せられたやうにぞつとしたが、よくよく眼を据ゑて

女に答を促されて、正雄は好い加減に、

「よござんすとも。」

と答へた。

「きつとよ。」

女はも一度確めた。併し、正雄はまだそれを本當に聞く事は出來なかつた。小さとのやうな人がこんな事をさう輕々しく言ふ筈がないと思つたのである。

如何にも出し拔けである。如何にも突飛である。これが二人ぎりなら、詳しいわけを尋ねて見る事も出來るが、前後左右には身動きもならぬ程大勢人が寢てゐるのである。せめて顏でも見たいと思つたが、それも暗闇で分からなかつた。

「さう極めてよ。」

女はも一度かう言つた。正雄は揉られてゐるやうな氣がして、たうとう夜明まで眠れなかつた。

夜が明けると、福井さんが何處からか出て來て、一人々々蒲團を引剝がして歩いた。

幽靈の夫婦も、何處からか起きて來た。

十三

枝本で逢つた晩から、福井さんと正雄との間の隔てはすつかり取れた。福井さんは何事も正雄に打ち明けるといふ風で、芳町の花子といふのとの関係も話した。或夏の夕方、花子が自分の家の抱子といふのと、合乗で「濱町の家」の前を通るのをちらりと見た。ハイカラに結つた、お嬢さん風な、花子の風が、不思議におつに見えたので、その車の金龍亭へはひるのを突き留めて置いて、自分も後から出かけて行つた。それが初めで、それからもう二年になるが、いつも倦きつぽいと言はれる人が不思議に今度は倦きない。福井さんはその間に起つた様々な可笑しい話や艶つぽい話をした。

「福井さんのやうに遊んだ人でも、往来で女を見染めると言つたやうな初心らしい態をするものかなあ。」と正雄は思つた。「して見れば……して見れば……して見れば、」正雄は幾度かこの詞を頭の中で繰り返した。

枝本の一夜があつてから、正雄は誰にも増して小さとを思ふ人であつた。小さとは特に立ち優つて美しい女でもなかつた。誰よりも際立つて気高い美人でもなかつた。正雄は唯何となく惚つた人だと思つたのである。藝者には珍しい人だと思つたのである。男嫌ひの話、それもある。岡田で本の包を持つて唯一人送つて出てくれた時の印象、それもある。枝本へ泊つた時、暗闇で聞いた調子の涼い詞、それもある。はじめに、その詞を皆冗談だと思つてゐたのが、イルウジヨンの色の濃くなるに連れて、あの人が嘘を言ふ筈がない、あの人が冗談を言ふ筈がない、といふ風に確信して来たのである。

正雄は福井さんの情話を聞いてから、ひどく福井さんが好きになつて來た。

正雄はその後も福井さんに方々へ連れられて行つて、幾度か小さとゝも一緒になつた。併し、小さとは二度と松本の晩のやうな樣子を見せなかつた。いつでも眞面目な、どつちかと言へば、何處かに角の取れないところがあるやうな女だつた。そんな風だから、會ひは會つても、中々松本の晩の甘話の事などを聞くどころではなかつた。正雄は小さとに物を言ふのが何となく憚かつた。

福井さんは「濱町の家」といふ所へも正雄を連れて行つた。そして、これから芝居の用などで遲くなつたら、遠慮なくここを宿にしてくれと言つた。正雄はそこで小さとの姉の多ちやんといふ婦人に會つた。小さとをその儘小柄にしたやうな人で、眼つきに何とも言はれぬ優しい女の情と諦觀を見通す愉快な光があつた。髪は町家風の物堅い丸髷に上げてゐた。着物は黒繻子の襟のかかつたごつごつした木綿物であつた。帯は幅の狭い黒繻子の腹合せをきちんと締めてゐた。何百人といふ女の中から福井さんの選んだ人である。姉思ひの小さとが夢寐にも忘れないんである。さう言つた話を待たないまでも、正雄は多さんから美しい第一印象を受けた。「内のは商賣に出てゐる時分、ちつとも賣れない人だつた。それでゐて、少しも家の者に莫迦にされたり邪魔にされたりしなかつた女だ」と、福井さんがよく言つたが、成程會つて見ると思ひ當る所が澤山あると正雄は思つた。

「お里からお噂は始終伺つてゐました。あれもああいふ我儘者ですから、嘸失禮ばかりいたしてゐる

淸の慰勞會だとか何とか言つてゐました。事によると御一緒になるかも知れませんね。」

正雄は思はず胸を轟かした。

「へえゝ。それは面白い。何時頃立つやうな樣子でした。」

「なんでも十一時だとか申してをりましたよ。」

「急行ですか。」

「急行は込むから、のろくつても國府津行で行くんだとか申してをりました。」

「ぢやあ、どうですかな。」

正雄はとても一緒にはなるまいと言ふやうな顏をした。一緒にならうとなるまいと、そんな事はどうでも構はないといふやうな顏をした。併し、腹の中ではどうかして同じ時間であつてくれれば好いと思つた。どつちにしても朝さう早い連中ではないから十時頃からステエションへ行つてゐれば、きつと會ふに違ひないと思つた。腹ではさう極めながら、

「みんな遲いから、きつと私の方が先になるでせうよ。」

態とこんな事を言つた。

楢井さんはたうとう正雄の歸るまで歸つて來なかつた。

明くる日の晩十時頃、正雄は車で新橋のステエションへはひつた。彼は石の階段を駈け上ると、急いで一二等の待合室の方へ行つた。誰かそこで自分を待ち合す筈の女でもあるやうに。

待合室からは賑かな女の笑ひ声が洩れた。正雄は胸をどきつかせながら、ひよいと覗くと小さとが先づ眼にはひつた。たつ子もゐる。やま子もゐる。巴もゐた。福吉もゐる。三助もゐた。その外、鶴菊や吹木や舎の三のがみんな揃つてゐる。いづれもお揃ひの丸髷で、手絡もお揃に草色のをかけてゐる。

「あら、小田さん。」

正雄は小さとに声をかけられて、真赤になつた。彼はまだステエションのやうな所で芸者に声をかけられるといふやうな経験がなかつたのである。

「旦那は？」

小さとは「こちらへ。」とも聞かずに、いきなり鶴井さんの事を聞いた。

「知りません。」

「御一緒ぢやないの。」

「僕はちよいと小田原まで行くんです。鶴井が行つてるもんですから。」

「あら、さう。」

「鶴井君も来る筈なんですか。」

「ええ、ゆうべお目に掛かつてこの話をしたら、それぢやあ俺も一緒に行かうなんて言ひ出したんですよ。だから、きつとあなたも御一緒なんだらうと思つて。」
「きのふ濱町へ上がりましたが別にそんな話はありませんでしたよ。」
「何時頃入らして。」
「さうですね。三時頃から四時頃までゐました。」
「おやあ、ちやうど深川亭で、あたし達が旦那にお目に掛かつてた時分ですわ。」
「僕は店だと思つてゐました。」
「お店のお歸りよ。」
「へえ、さうですか。本當に來れば好いなあ。」
正雄はいつの間にか、女の待合室へはひり込んで、丸髷の群の中に立つてゐた。
「あなたは幾時ので入らつしやるの。」
暫くすると、小さとがかう聞いた。
「今度の國府津行で立たうかと思つてゐます。」
「あたし達もそれで立つ筈なんですけれども、まだ龜清の親方が來ないもんですから。」
「ラアジ、ボオイですか。」

「ええ。ラアジ、ボオイ。」

と、巴が脇から口を出した。

「別にお急ぎぢやないんでせう。」

と、やま子が笑ひながら言ふと。

「さうですとも。ねえ、小川さん。」

と、小さんは捕へたら放さないといつた調子で言ふ。

「併し、ラアジが今度の國府津行までに間に合はなかつたら、あなたも一汽車延はしても好いでせう。わたし達ばかりぢや寂しいから。」

「さうなさいよ。」

「さうなさいよ。」

と、脇から年増達が煽てゐるやうに言つた。

正雄は承知したともなく承知しないともなく、有耶無耶の内にそこの長椅子に掛けさせられてしまつた。

ベルが鳴つた。驛夫が構内の待合室へ客を急き立てに来た。併し、ラアジはやつぱり来なかつた。正雄は懐中時計を出して見てから時間表を出した。

國府津行が出てしまふと間もなく、龜清の主人が息せき切つて駈けつけて來た。額が汗ばんで、丸く肥つた顏が赤く上氣してゐる。

「失敬、失敬、どうも遲くなつて濟まなかつた。急に公使館から言ひ込みが一つあつたものだからね。留守でも分かるやうにして來たものだから。」

と言ひながら、正雄に眼をつけて、

「や、先夜は失禮。どちらへかお出掛けですか。」

「今の汽車でお立ちなさるのを、みんなで留めつちまつたんですよ。」

たつ子が心得顏に口を出した。

「やはり箱根へですか。」

「いいえ、小田原。」

と、今度は巴が正雄の代りに答へた。

「じやあお供出來ますな。こりや賑かで好い。」

小さとは正雄になんにも言ふなといふやうな眼配せをした。ラアジは龜井さんの事に就いては、なんにも知らない樣子だつた。

汽車の中で隠かさ、

一行は停車場に仕切られた、停車の半分を占領してしまつた。何處のステエションへ着いても中の様子がえらいので、一人もはひつて來ようとする客はなかつた。

サンドヰッチが出た。チヨコレエト、クリイムが出た。干字のお菓子が出た。海苔のついた煎餅が出た。食べ物の儀式でもするやうに、一人々々大きな信玄袋の中から、何かしらそこへ出した。喰べる。笑ふ。軟派語を言ひ合ふ。手を打つ。聲色を使ふ。口三味線で歌を唄ふ。一行は驛での汽車で汽車の全體を通つてゐるかも知らない様子であつた。

正雄はみんなと一緒に調子づいて、よく喰べた。よく笑つた。時々下手な洒落を言つた。僕は今までに經驗のない事を經驗するのが無上に嬉しかつたのである。それに自分の隣には、好きな好きな小さとが坐つてゐる。一時間も二時間も、肩へ肩をすに坐つてゐる。

小さとは鑵子の中で正雄に何か山の話をした。話はなにも二人に關係のある事ではなかつたけれども、その話をする調子が、如何にも正雄を頼む樣にそれに見えた。正雄は幾度か榛木の晩の事を聞いて見ようとした。口元まで詞が出て來てゐながら、ついそれを言ひ放つ勇氣がなかつた。小さとも榛木のあの晩の事はしながら、自分が雨圓で正雄に言つた詞に就いては、もう少しも記憶がないといふやうな顔をしてゐた。

汽車は一驛々々丁寧に寄るので、中々道が捗らない。その内に方々で居眠りが始まつた。延吉がやる。三助がやる。たつ子がある。亀清の主人も閑の所へ大きな身體を凭せ掛けて、大きな鼾をかき始めた。

やま子や巴はその居眠り連中に惡戲をして歩いた。鼻の中に紙縒（こより）を突込んで嚏をさせたり、背中へ紙を張つて『この女一錢五厘』と書いたりしてゐる内はまだ好かつた。甲の下駄の片々と乙の下駄の片々とを紙縒で結びつけたり、一人の下駄の兩方を紐で結びつけたりして、寐てゐる人の起きて立つて歩かうとして倒れるのを、面白がつて囃した。中にも延吉は正體もなく寐こけてゐる隙に、荷物を載せる網の棚へ下駄を上げられてしまつた。國府津へ著いて揺り起されて、下駄のないのに狼狽した延吉の顔を、巴ややま子は手を拍つて囃した。

電車に一二等のを一臺買切つた。汽車の中で惡戲をされた連中が爲返しをするとか何とかいふので又一頻騒かだつた。

小さともみんなに負けずに騒いだ。惡戲（いたづら）も負けずにした。併し、どんな事があつても正雄の側を離れなかつた。

早川口へ來ると、正雄は席を立つて一行に別れを告げた。握手をするのがある。シツケイをするのがある。丁寧にお辭儀をするのがある。小さとは小さい聲で、

「若し日暮が見えたら入らつしやいよ。」

と、言つた。

正雄は電車の見えなくなるまで足柄病院の前に立つてゐた。

十四

正雄は母の側へ来たが、一向に落着かなかつた。賑かな笑ひ聲が耳に附いてゐて離れない。丸福の一家が絶えず眼先にちらつく、小さとの眼が思ひ出され、鼻が思ひ出され、口が思ひ出される内に、毛筋一本残さずに顔がはつきり見えて来て、その顔が意味ありげに、にやりと笑ふ。

正雄は母と話をしても気乗りがせず、海岸を歩いて見ても興味がなかつた。彼の魂は早川口で電車入時りの中に、みんなと一緒に箱根へ行つてゐるのであつた。

夜の十一時頃に、一軒置いて隣の宿屋へ電話がかかつて来た。箱根の塔の澤からと聞くと、正雄は飛び上がつた。

急いで帳場へ駈けつけて、電話口へかかると、向うの電話口にゐるのは代理の女中だつたが、かけたのは果して福井さんだつた。塔の澤の新玉の湯に来てゐるから、直ぐ来いと言ふのである。兎に角福井さんを電話口へ出してくれと言ふと、女中は畏まつて引つ込んだが、それつ切りいつまで経つて

も出て來ない。その内に電話が切れてしまつて、もうどうしても繋がらなくなつてしまつた。

家へ歸つて母にその事を言ふと、もう電車がないから今夜は廢して、あしたの朝早く行けば好いと言ふ。正雄はもうゐても立つてもゐられなくなつた。それぢやあ、も一度電話で答へて置かないと惡いからと言ふので、又電話のある宿屋へ驅けつけた。

今度は直ぐ繋がつた。正雄は福井さんはきつと酒の最中だらうと思つて、若し小さとといふ人がゐるなら電話口まで出してくれと賴んだ。

小さとは直ぐ出て來た。正雄が今夜行けないといふ話をすると、小さとは今夜は來ない方が好い、旦那は濱町の姉と一緒に夜の九時頃ここへ來たのだが、今堺の澤の藝者を總上げにして家が割れさうな騷ぎをしてる最中だから、來たところで、とても話や何か出來やしないからと言つた。それから自分達はラアジと一緒に湯本の福住にゐるのだが、その連中も今夜は箍を外しての亂癡氣騷ぎで、たつ子ややえ子のやうな飮めない口まで、倒れて寐てしまふ程に醉つた。自分は福井さんの見えたのを幸に、今ちよいとここへ逃げて來たのだと言つた。

「すると、あなたは又湯本へ歸るんですか。」

「ええ、厭なんですけど、今夜一晩だけはみんなと一緒に寐ないと惡いから。」

「そんなにみんな醉つてるんですか。」

親しく話をした。併し、それは福井さんとの關係もあつて、他の人よりよく知つてゐるからだと、みんな思つてゐる筈である。正雄の心の中はまだ小さとでさへ知る筈はないのを、どうしてラアジがそこへ眼をつけたのだらう。なあに實際ラアジがそんな事を言つたわけではなくて、小さとが自分でそんな事を考へたのではあるまいか。よし實際言はれたものとしても、小さとがそれを正雄にいつける必要はない。それを正雄に訴へるといふところに、もしや何かの意味があるのではあるまいか。

正雄は母の隣へ寢たが、いつまでもいつまでも寐つかれなかつた。一時頃かと思ふ時分に門をどんどん叩く人があつた。正雄が飛び起きて出て見ると、箱根の福井さんから電報が來たのだつた。「シンタマデマツスクゴイ。」とある。正雄は愈苛々（いら〳〵）して來た。併し、母には態と落著いた口調で、「又催促です。併し、もうとても遲うございますから、今夜は廢します。」と言つて、又床の中へはひつた。

三十分經つても寐られなかつた。一時間經つても寐られなかつた。箱根の光景が色々に想像される――梟のやうなたつ子が、大きな眼を細くして、根岸の方の惚氣を言つてゐるか。眼が縦についてゐるのかとも思はれる程眼尻の下がつた延吉が、眼の先で廣げた手を振りながら、「年の一白がね……年の一白がね……」と頻に福井さんの事を言つてゐる。三助は唯さへ少し出てゐる口を餘計突き出しながら、二人に負けずに植木店を惚けてゐる。バチヤアのやま子が眞赤になつてぶつ倒れてゐる。ゴム人形の巴がそれを介抱しながら、自分も一緒に倒れてしまつてゐる。その中で小さとは一人、白い眞面

目な顔をして、言ひながら八の字を寄せてゐる……

三時が鳴ると正雄は、母の寝息を窺つて、そつと床を抜けて出た。

「どうしても今夜の内に箱根へ行かないと、藤井さんに悪いやうな氣がしますから、これから出かけます。どうか心配しないで下さい。あしたは歸りますから。三月九日午前三時母上様。正雄拜。」

正雄は小さな紙片に鉛筆でかう書くと、それをそつと母の枕元の目覺し時計の下へ入れた。それから、女中が使ひに行く時持つて出る小さな小田原提灯に火を入れて、足音を盗んで座敷を出た。正雄はもうとても夜の明けるのを待つてゐる事が出來なくなつたのである。

門をそつと明けて出て、外から又そつと扉を引いた時、正雄はふと「駈落」といふ事を思つた。人生の經驗の乏しいよりも世に出會つた事のない正雄は、何事をも輕く考へて、彼は自分の母に書き殘した一札を、死に行く人の書置とも比べて見た。

正雄は小田原提灯をぶらぶらさせながら電車道をとつとと歩いた。寂しい道を少しも恐がらずに。

正雄はもう箱根の事より外なんにも考へてゐなかつた。自分の歩いてゐる暗い道、自分の歎いてゐる暗い雲、そんな物は正雄の眼へは入らなかつた。正雄が歩いてゐるのは、抜け出た魂の後を魂のなくなつた肉體が追つかけてゐるのであつた。

風祭（かざまつり）あたりを歩いてゐると、小田原の方から例の一番電車が來た。正雄は直ぐそれへ飛び乘つた。

そして電車の走るのを、自分が今まで歩いてゐたのよりも遲いやうに思つた。

湯本へ著くと夜は紫に明け離れた。正雄は小田原提灯を懷へ入れて、塔の澤へ急いだ。福井さんはきつと夜明かしで騷いでゐるだらうと思ひながら。

新玉の湯の戶は堅く閉ぢてゐた。橫へ廻つて見たり、二階を仰いで見たりしたが、誰も起きてゐるやうな樣子はなかつた。

正雄はがつかりしたやうに、暫くぼんやり立つてゐたが、やがて何か思ひついたやうに、上へ向つて步き出した。橋を二つ越えて、鈴木の前まで來ると、もう男が起きて外を掃いてゐた。それから男にわけを話して、一風呂浴びながら、暫く休まして貰ふ事にした。

女中はあんまり客の早いのを不思議に思ふやうであつた。正雄は部屋がきまると直ぐ手拭を借りて、湯氣のもやもやしてゐる中へ降りて行つた。一段低い所の湯殿には、女中の大勢はひつてゐるのがぼんやり見えた。

湯から上がると、正雄は時計を見て、福井さんから來た電報に小田原提灯をつけて、新玉の福井さんの所まで使に持たしてやつた。

「どうぞ直ぐ入らして下さいまし。」

これが使の返事であつた。正雄は直ぐ鈴木を出た。

静子はもうすつかり起きてゐた。正雄は女中に案内されて二階へ通ると、バルコンのやうになつた所へ椅子を出して、紺井さんとお多喜さんと太鼓持の勝中とが腰をかけてゐた。湯末の方の空が薄浅葱に晴れて、隅田の瀬が白く見えた。

紺井さんは正雄の顔を見ると、小田原提灯を鼻の先にぶら下げて。

「これで通つて来たのかい。」

「ええ、蒼い顔をして、そつと家を抜け出して。」

「でも、よく似まさ。」

と、お多喜さんが傍から言ふ。

「ねえ旦那。提灯が好いぢやありませんか。それに電報をつけて、なんにも言はずに届けたところなざあ流石先生ですね。あつしや直ぐさうだと思つちまつた。」

勝中は禿頭をてらてらさせながら、印形による金の指環のほかにないのを嵌めた手で撫でながら言つた。

「髪やの日、留守でゐてたんじや知らない顔にし」

紺井さんにかう言はれると、勝中は手拭でひしやつと頭を打つた。正雄はさう言つた勝中の様子を見て、自分が初めて會つた時、この男を紺井さんの番頭か後見人と思つた時の事を思ひ出した。

「ゆうべはえらい騷ぎでした。湯本からはお里の連中が入れ代り立ち代り醉つて來るんでせう。こつちぢやあ塔の澤の藝者を總上げなんですの。」
と多さんが言ふと。
「總上げで三十圓にならないんだから好い、」
と、福井さんは茶かすやうに言つた。
「何しろ、あの幇間といふのをお目にかけたうがすな。」
辨中がかう言ふと。
「さう、さう、あれをけふ是非君に見せよう。また何かの材料になるかも知れないから。盲の太鼓持でね、古い古い事をさも新しさうに遣つて見せるんだ。そりや餘程おつだよ。」
と、福井さんが言つた。
正雄は福井さん達と一緒に朝飯を喰べた。鈴木へ置いて來た外套やステッキも、いつの間にか屆いて來た。間もなく湯本から小さとが遣つて來た。
「もうラアジを返してしまつたから、けふからこつちへ引越しよ。旦那、又今夜總上げをなさいよ。」
さう言つてる内に、ゴムが來た、アウルが來た、バチヤアが來た。福井さんはみんなが集まつて來ると、騷がずにはゐられなくなつて來た。

「お酌、お酌。」

「御上げ、御上げ。」

酒は朝の十一時頃から夜の十二時頃まで續いた。塔の澤の藝者といふ藝者は、悉く福井さんの座敷へ集まつた。いづれも醜いといふよりは面白い顏をした女ばかりである。狐のやうに鼻の尖つたのがある。金魚のやうに皮膚の優張つたのがある。カナリヤのやうにぴいぴい唄ふのがある。

「まるで動物園だね。」

と、福井さんは正雄を顧みて言つたが、やがて笑ひながら、

「併し、東京から鷄や犬も湯治に來てゐることだからね。」

と、鷄と犬とを嘲て言つた。

たつ子とやま子が福井さんの後へ廻つて來て、背中を瘤といふ程ぶつた。福井さんはぶたれても、平氣で盃を手にしてゐる。

福井さんが自ら座敷へ連れて來たといふ盲の太鼓持といふのも來た。眼の見えぬ癖に何でも見えるやうな顏をして、人の言ふ事や爲る事に一々口を出すのである。その顏ににやにやした顏を、正雄は堪らなく不快に感じた。

「厭な奴ですねえ。」

「あれで酸いも甘いも嘗め盡したつもりでゐるんだから好い。人間もああはなりたくないものさ。あれでも昔は小田原で全盛を極めた成れの果ださうだがね。」
「眼が見えないから仕合せなんです。眼が見えたら、とてもこんな座敷へ出られる奴ぢやありません。」
「まあ、何か遣るから見てる給へ。」
盲の太鼓持は丼鉢と手拭を持ち出して、「扨これから、この鉢の中より鷄を八匹出して御覽に入れます。」と言ひながら、手拭を疊の上へ廣げて、その上へ丼を置くと、藝者の方へ「はつ。」と手で合圖をした。藝者が手品の合方を彈き出すと、盲の坊主は親指と人差指で手拭の端を摘んで、座敷中丼鉢を引いて歩きながら「はちひき、鉢引き。」と、さも得意さうに囃した。
「よう、よう。御趣向、御趣向。」
と、福井さんは正雄の顏を皮肉な眼で見ながら、態と盲を褒めそやした。盲は福井さんから盃を貰ふと、それを頭より高く捧げた。
時間が來て、箱根の藝者達が歸つてしまつても、福井さんはまだ盃を放さなかつた。多さんが欺すやうにして湯殿へ連れて行つた間に、小さとの連中は女中を手傳つて、酒に汚れた膳を片づけた。燃えるやうな赤い模樣の絹夜具が、幾つかそこへ運ばれた。
福井さんは湯から上がつて來てもなかなか寐ようとはしなかつた。多さんが「もう遲いから。」と言

つて、寐らせまうとすればする程、福井さんは寐まい寐まいとした。

みんなが床へはひると、福井さんは夜具の上から人を踏んで歩いた。それでも澄まして寐てゐると、水道の水を含んで來て、こないだ植木で遣つたやうに蒲團の裾の方から霧を吹つ込んで歩くのである。

正雄も體の上を踏んで歩かれた。足の方から霧を吹つかけられもした。多さんはたうとう福井さんの胸倉を取つて無理に床の中へ押し込んでしまつた。小さとは姉の加勢をして、蒲團の上から馬乘になつて、福井さんを抑へつけた。

夜中の一時頃、正雄はそつと拔け出して、湯殿へ行つた。けふ一日の騷がしい生活を思ひながら、靜な湯でゆつくり身を溫して、女部屋へ歸らうとすると、便所の前で手を洗つてゐる女があつた。

「おや、さあちやんですか。」

正雄は始めて小さとをかう呼んで見た。

「あら、お風呂したの。道理であなたのとこを見たけど、拔け殼だつたわ。」

「僕の假見たいにね。」

「あら、あなた拔け殼なの。」

「ええ。」

「へええ。それはお日出たう。」
「なぜです。」
「魂が何處かへ行つてるんでせう。」
「ええ。何處かへ行つてゐます。」
「だからお日出たうつて言つてるんぢやありませんか。」
「ところが、その魂はね。」
と言つて、正雄は小さとの胸を指した。
「そこへ行つてるのかも知れないんですよ。」
「ほんとですか。欺しちや厭ですよ。女といふ者は正直なものですからね。」
「いいえ。男の方が正直でせう。僕はこなひだあなたの言つた事をちやんと覺えてゐますよ。」
かう言ふと、小さとは急に眞面目な顔をした。
「ええ、あれ。あれは本當よ。あたしは自分だけでちやんと極めちまつたの。よござんすか。」
正雄はぞつとした。
「その代り浮いたんなら御免ですよ。色は厭なの。眞面目に一緒になるんでなきや。」
正雄は自分も眞面目にならなければならないやうな氣がした。

「無論ですとも。もう僕もさう決心しませう。そして時機の來るのを待ちませう。」

「きつとですよ」

正雄は小さとを先へ遣つて、自分は後から暫くして部屋へ歸つた。

夜が明けると、正雄は龜井さんと一緒に湯へはひつた。正雄は眞鍮で張つた湯舟の緣へ兩肱を逆に伏せながら、靜にゆうべの事を思つた。

小さとの言ふ事は相變らず突飛である。寧ろぶつきらぼうである。少しの婉曲もない、少しの嬌氣もない。女が男に對してああいふ詞を吐くまでには、嬉しいや悲しいの少くとも十遍や二十遍はなければならない。花が咲いて、花が散つて、それから實がなるまでには、樣々の歷史がある筈である。まだ碌々話もしない内に、まだ碌々人を知りもしない内に、ああいふ詞が本當に腹の底を出るとはどうしても思はれない。思へばあの時、自分のした返事も、如何にも芝居めいてゐた。果して向うが本氣で言つたのなら、自分の返事ももう少し深みのあるものであつたに違ひない。嘘だ。嘘だ。冗談に違ひない。

正雄はかう思ひこみながら、するする小さとの方へ體を引き摺られて行くやうな氣がした。併し、あの人の詞には何となく力がある。何となく人を抑へつけるやうな調子がある。あの調子は決して嘘や

冗談から湧いては來まい。あの人の詞に婉曲のないのは、あの人の今まで經て來た道に縺がなかつたからだ。あの人の詞にコケチッシユなところのないのは、却つてあの人に嘘のない證據ではあるまいか。」正雄は小さとを信じて見もし、疑つて見もした。

福井さんは店に銀行の用があるので、その日はどうしても東京へ歸らなければならなかつた。一行は土産物などを調へて、晝頃箱根を立つた。

正雄は國府津までみんなを送つて行つた。電車の中は相變らず賑かだつた。湯本細工の競馬の玩具は、あののろい電車を少しも飽きさせなかつた。

正雄は國府津のステエシヨンのプラツトフオオムまで附いて行つた。競馬の玩具で負けた人は、そこでサンドヰツチだの蜜柑だのを買はせられた。

間もなく上りの汽車が來た。スチイムと人いきれで窓硝子の曇つた、長い長い汽車が來た。正雄はみんなと賑かに別れの辭を取交した。

汽車の動き出さうとする時、小さとは急いで窓から白い手を出した。正雄は我にも非ずその手を握んだ。正雄は始めて小さとの血に觸れたのである。

汽車は正雄を一人殘して、遠く行つてしまつた。

十五

小田原から歸つて來た明くる日の晝、正雄は福井さんに呼ばれて、代地の深川亭へ行つた。一座は植木店、靜岡、浪花町、蔵前などで、藝者はたつ子、やま子、巴、三助、小さとなど、いづれも箱根へ行つた連中だつた。

話は植木の晩の騷ぎから箱根の晩の騷ぎへ移つて行つた。

植木店と三助とは相變らずみんなの槍玉に上げられた。

「あたしあの晩二人の話してる事をすつかり聞いちまつてよ。」

と、小さとが言ふと、三助は少しまごついて、

「まあ、何を。」

と、聞く。

「そりやお安くないのよ。」

と、小さとは態と三助の顔を見ずに言ふ。

「さあちやん。人が悪いわねえ。」

「でも、[illegible]に誘はれて來たんですもの。あんまり莫迦々々しいから、思はずくすつと笑ふと、植

木店のお師匠さんが、小さい聲で、「聞えたかしら。」つて言ふんでせう、すると、三助さんが又小さい聲で、「誰か笑つてねえ。」つて言ふのよ。ほんとにあんな可笑しな事はなかつたわ。

と言つて、サイダアを一口飲むと、又何か言ひ出しさうにするので、植木店は兩手を合せて、

「さあちやん、もう澤山。これです、これです。」

と、態と泣くやうな聲を出した。

正雄の小田原提灯も話の種になつた。福井さんはあの提灯を記念の爲に東京へ持つて歸つたなどといふ話をした。

「寢てゐる内に遣つて來たのには驚いたねえ。あとでお母さんが嘸驚いたらう。」

「あんまり驚きもしなかつたらしいのです。お前の事だから一度言ひ出したら聞くまいと思つてゐたなんて、歸つたらさう言つてゐました。」

かういふ話の出てゐる内にも、正雄の胸には人の知らない樂しい思ひ出があつた。松木であつた事、箱根であつた事は、洩れなくみんなの口に繰り返されたが、唯一つ正雄にとつての大事な或事は誰の口にも登らなかつた。正雄はそれが誰にも知れなかつたのを誇りとした――人に知られる事はやがて人に汚される事である。吾等の戀は吾等の周圍に解釋されるやうな、そんな低級な戀ではない。吾等は吾等の周圍より五段も十段も高い所にゐて、毫も周圍に犯される事なしに、吾等の戀を續けなければ

ばならぬ。小さとは男嫌ひである。吾等の周圍は小さとを男嫌ひと諦めて、男は敬して遠ざかり、女は共に兵を談ずるに足らぬとしてゐる。併しながら、如何に頑（かたくな）な小さとの胸にも優しい女は棲んでゐた。その優しい女を見つけたのが正雄である、その優しい女を捕へたのが正雄である。かう思つて正雄は心中一種の勝利を感じた。世間の人はみんな小さとを男嫌ひだと思つてゐる。どんな男が近づいて來ようとも、小さとの心は犯されないと信じてゐる。ところが、その小さとには正雄がゐるのだ。誰も知らない、誰も覗く事の出來ない、小さとの心の蔭には、正雄が皮肉に笑ひながら隱れてゐるのだ。正雄はかうまでも自惚れてゐた。

けれども、小さとの樣子や話には、一向正雄を得意にさせるやうな點がなかつた。小さとは少しの色氣もなく、少しの思ひ遣りもなしに、どんどん人の事をすつぱ拔くのである。植木店と三助が濟むと、今度はテウッのたつ子を冷かし始めた。それが濟むと、龜井さんに向つて構はず惡吉の事を言ひ出した。

「田野さ隨分物好きねえ。あんな古物（ふるて）ものを。やつぱり骨董がお好きなのねえ。でも、慈善だと思へば好いわ。」

小さとはかういふ詞を吐く內にも、少しも自分のした事や言つた事を省みて、氣遲れがするといふやうな樣子はなかつた。自分は清淨潔白なのだから、どんなに人は罵つても構はないといふ風なので

ある。それが正雄から見ると、自分の事は棚へ上げて、人の事ばかり言つてゐるやうに見えるのである。

小さとは正雄に言つた事を忘れたのであらうか。小さとは今でも自分を純潔だと思つてゐるのだらうか。それとも、あの晩の事は冗談なのであらうか。小さとの心の領分は依然として男に犯されないでゐるのであらうか、小さとの人を冷かす調子に少しも後暗い影のないのを見て、正雄は少し不安になつた。

併し正雄は直ぐとかう考へ直した。小さとはプライドのある女である。たつ子や三助は元より眼中にない、植木店や藏前は勿論の事である。時には稲井さんをも自分より餘程低い所に見てゐる女である。從つて、同じやうな事をしても、自分がするのと、自分の周圍の人達がするのとでは、大層意味が違ふと思つてゐるのである。たとひ形に於いては寸分違はぬやうな事をしてゐても、自分のしてゐる事と自分の周圍のしてゐる事との間には、何の交渉もなく何の連絡もないのである。小さとが人を罵つて恥ぢないのは、自らを高く持してゐるからである。

男嫌ひで通つた小さとが、どうして正雄のやうな書生に、突然あんな事を言ひ出したのであらうか、それも正雄にとつては不思議の一つであつた。成程、正雄は今まで小さとを包圍した男とは、全く種類の違ふ男であるかも知れぬ。併し唯種類が違ふと言つて、いきなりそれが氣に入るといふのも變な

話である、正雄は直頭か小さとに本心を質す機會を求めたが、それは今まで終に得られなかつた。唯、國府津で汽車の動き出さうとする時、車の窓から出た白い手だけは眞である。あれは夢でもない、空想でもない。正雄は自分の生きた手で、小さとの生きた手を掴んだのである。正雄はそれを唯一の希望にするより外はなかつた。

芝居へ出る時間が來たので、植木店の連中は一足先へ歸つた。藏前の若師匠も、下谷に藝者の溫習會があるとかで、間もなく歸つた。それでも、福井さんと正雄が深川亭を出た時は、まだ明かるかつた。小さとは着物をはしよつて二人の後からついて來た。

「さあちやん。ちよいと家へ寄らうか。」

福井さんが、後へ振向いて、かう言ふと、

「ええ。たまにはお寄りなさいまし。」

「御馳走するかい。」

「前の家のお鮨位ならねえ。」

「結構、小山君、どうだい。君も一緒に一寸寄らないか。」

正雄は態と分からないやうな顔をした。

「何處へです。」

「さあちやんの家へさ。」

「ええ。」

と、正雄が曖昧な返事をすると、小さとが後から、

「汚いところですけど、どうぞお寄り下さいまし。」

と、ひどく眞面目な調子で言つた。

「では御一緒に。」

と、正雄は漸く決心がついたといふやうに、福井さんの顏を覗いた。

「ひどく嚴しいところへでも行くやうだねえ。」

と言つて、福井さんは兩手をこすり合せながら笑つた。

正雄は生れてまだ藝者屋といふものの中を見た事がないのである。山の手の藝者屋町で育つたには育つたのだが、正雄の家はさういふ種類の家と交際をしなかつた。正雄自身もその當時は、藝者は卑しい者、下等な者と思ひ込んでゐたので、藝者屋の前は日に幾度となく通り過ぎても、中を覗いて見ようとした事さへなかつたのである。君太郎に會ふやうになつてから、覺束ない描寫で、屢藝者屋の中のどんなに汚くどんなにしだらのないものであるかを説かれたが、どうも正雄には想像のつかない

事が多かつた。

正雄は藝者に會ふとも、藝者屋へ足を踏み入るべきではないと考へてゐた。藝者屋へ足を踏み入れるといふ事は、[illegible]身を持ち崩した人のする事であると思つてゐた。正雄は藝者屋を何か恐ろしい所のやうに見てゐたのである。

唯の藝者屋へ行くのではない、小さとの家へ行くのだ。小さとの家へ行くのではない、濱町の多さんの生家を尋ねるのだ。といふ風に、正雄は我と我心に言訣をしながら、福井さんの歩く方へ歩く方へと素直について行つた。

濱町公園の側の、角の二階家が小さとの家の隣家であつた。間口が狭くて、奥行の深い、六枚折の屏風を疊んだやうな形をした家だつた。門口の格子の上には『多忠雛』と、かういふ家には不向な名を書いた小さな木札が打ちつけてあつた。狭苦しい靴脱ぎの横の羽目には鳥籠が二つ並べて掛けてあつて、その一つ一つに同じ位な大きさの目白が一羽宛飼つてあつた。

上がると直ぐ六疊ばかりの茶の間で、その狭い所に箪笥やら用箪笥やら茶箪笥やら長火鉢やらが置いてあつた。往来へ向いた出窓の所へは、二疊位の細長い部屋が突き出てゐて、そこには大きな風呂敷包だの脱ぎ捨てた着物だのが、山のやうになつてゐた。

正雄は長火鉢の向うに坐つてゐた小さとの母に引き合はされた。小さとの母は、色の白い、眼の小

さい、顏に角のない、五十ばかりの品の好い婦人で、齒を黑く染めてゐた。その側でポンチ繪を見てゐた貰ひつ子の民ちやんにも引き合はされた。民ちやんは、にこにこしながら、品をして正雄にお辭儀をした。

福井さんは少しもぢつとしてゐなかつた。郵便箱から繪葉書を拔いて、その文言を讀んで見たり、佛壇の前へ行つて鉦をちいんと鳴らして見たり、茶の間の直ぐ向うの臺所へ出て行つて、洗ひ物をしてゐる女中に聲をかけたりした。

「さあ。まあお二階へ入らして、お茶でもお上がりなさいましな。あんまりここでは失禮ですから。」

小さとは帶留の金具を外しながら、かう言つた。

「よし、ぢやあお鮨を賴むよ。小川君、どうです、二階へ。」

と勢よく言つて、福井さんが佛壇の側の襖を明けると、そこに幅の狹い急な階子段が見えた。

「お鮨は何ですね。」

と、小さとの母が聞くと、

「鮨卷。」

「鮨卷ばかり……。」

「ええ、鮨卷ばかり。」

と言ひながら、嶋井さんはとんとんとんとんとんと聲の好い音をさせて、階子段を上がつてしまつた。

正雄は一人取り殘されて、直ぐ上がるのも無遠慮らしいし、下にゐるのも極りが惡いしといふ風でゐると「小川君、早く來給へ。好い物を見せるから。」と、上から嶋井さんの聲がした。

正雄は小子とおかつとの傍に輕く會釋をして、その狭い階子段を恐々登つた。

二階は下と比較にならぬ程綺麗に片づいてゐた。床の間には嶋井さんから貰つたらしい愛染明王の小さな像が飾つてあつて、床柱の一輪差には白い菊の花が投げ入れにしてあつた。窓の側には一間張の小机が据ゑてあつて、その上に習字の手本らしい折本と、手擦のしたロイヤル、リイダのIIがきちんと行儀よく置いてあつた。机の横には稽古本でもはひつてゐさうな、丈の低い幅の廣い桑檀の本箱が置いてあつて、その上に三味線箱の黄いろい箱と、古代更紗の撥袋が見えた。

「どうだい。たまらない風ぢやないか。」

と言つて、嶋井さんの指さす方を正雄が見ると、そこには四つ切位の大きな寫眞が金緣の額にしてかけてあつた。

嶋井さんの若い時の寫眞である。旅行服のやうな、腰にバンドのある、襟の開いた、立襟の洋服を着て大黒帽子を冠つてゐる。半ずぼんの下には派手な縞のある靴下を見せて、毒々しい飾のある靴を穿いてゐる。

「十八の時に寫したんだがね。まだ氣障な盛りさ。自轉車を盛んにやる時分で、なんでも不忍の十五哩競走か何かに勝つた時に得意で寫したもんさ。あの時分は頭を眞ん中から分ける、チックはつける、薄化粧はする、たまらない時だつたよ。この寫眞の洋服なども色が眞赤なんだから驚くぢやないか。」

「へえ、あなたは自轉車までやつたのですか。」

「やつたところぢやない。十二三臺も自轉車を買つて、それをずつと天井へ並べて釣るしといて、その下へ床を取らして、自轉車を見ながら寢るのを樂しみにした位なもんさ。たうとう終には大橋の側へ家を一軒借りて自轉車會社まで遣り始めたもんだ。」

「その會社はどうしました。」

「一月經たない内に潰れたね。けふも相談、あしたも相談で、何の事はない、飲んで歩く會議に會社を拵へたやうな事になつてしまつたんだからねえ。その内に悪い奴が出來て、代物を賣りこかす、債務へは穴を明けるといふ風で、忽ち沒落さ。併し面白かつたよ。」

と、藤井さんは今の額縁の中に過去の自分をぢつと見ながら、その時分を戀しがるやうな調子で言つた。

「濱田のに始めて會つたのが、この寫眞を寫す丁度一年前さ。」

「さうすると十七の時ですね。」

「ナニ、早いもんさねえ。もう十二年になるよ。まあ、君あれを見給へ。」

と言つて、今度は反對の側の壁を指さした。そこにも同じ位の大きさの寫眞が金縁の額になつてゐた。

白襟に黒の『出』を着た、藝者の半身像である。少し拔衣紋に着物を着たところも、帯揚を眞直にしたところも、潰しの島田に笄を差したところも、何となく古風である。眼の鋭い、鼻筋の通つた、口元の締まつた、如何にも昔の藝者らしい凜とした顔立である。正雄は何處かで見たやうな顔だとは思つたが、ちよいと誰だか分からなかつた。

「どなたです。」

「濱町のさ。」

「ああ、多さんですか。ちつとも分かりませんでした。」

と言ひながら、正雄は畏敬するやうな眼つきで、ぢつとその寫眞を仰いだ。

「もう昔の面影は薬にしたくもないだらう。併し、昔の面影をなくした所に僕の苦心はあるのさ。あれでも、始めはぺらぺらした着物ばかり出して着たがつたものさ。」

と、臨井さんは臨井さんで、自分の感慨に耽つた。

「まるで昔の繪を見るやうですねえ。小本の中の小さんとか米八とかいふ人に、こんな人かと思はれ

るやうですねえ。」
と、正雄は正雄で、自分の景慕を恣にした。そして、この人の妹が小さとである、小さとは斯かる人の妹であるといふ事を、心窃に嬉しく感じた。
そこへ、小さとが鮨を持つて上がつて來た。座敷着の裾を引いた上へ、大島の書生羽織を羽織つて來た姿が常ならず正雄の眼を引いた。正雄は姉の昔の姿から、妹の今の姿へ眼を移した時、そこに拔くべからざる張りと意氣地の共通を見たのである。正雄は始めて小さとを「美しい」と思つた。
「これは御馳走。」
と言ひながら、稲井さんは直ぐと鮨へ手を出した。
「如何。」
と、小さとに言はれて、正雄ははつとして、慌てて皿へ手を出した。
「今寫眞を見ながら昔の話をしてゐたのさ。あの時分はお前もまだ小さかつたつけねえ。」
と、稲井さんが鮨を頬張りながら言ふと、小さとは昔戀しげに、
「あの時分は暢氣でよかつたわねえ。まだこんな商賣をしようなどとは夢にも思はなかつたんですもの。」
と言つた。これを聞くと、稲井さんは急に沈んで、

「それを言はれると、おれが辛いよ。お前に商賣をさせるやうになつたのは、全くおれに意氣地がないからだ。併し、時機が來て、落町の姉さんを表向にすりやあ、厭でも廢して貰はなきやならないんだから。ね、も少しの辛抱だ。」

「あら、そんなつもりで言つたんぢやありませんよ。あたしは何處までも兩親の爲に働いてるんですから、そんな心配をしちやあ厭ですわ。」

「そんなら好いけど。」

と、龜井さんは笑つて言つたが、その聲にはまだ曇りがあつた。

正雄は二人の話の、ふと妙な方へ逸れたのを氣遣ひながらも、自分には分からない事情もあるらしいので、默と口を噤んでゐた。併し、「兩親の爲」といふ小さとの詞には何となく動かされた。その道義的内容に動かされたのではない。さういふ義務を意識してかういふ商賣で果して行く小さとの境遇に動かされたのである。

「もう歸さう。おれが惡かつた。さあちやん、小川君と三人で何處かへ騷ぎに行かうぢやないか。けふはお約束は。」

「不景氣ねえ。一つもなし。」

「ぢやあ丁度好い。三人でぶらつか歩いて行かう。」

福井さんは忽ち機嫌を直して、つと立ち上がると、帶を締め直した。

三人が門口を出ようとする時、小さとの父が寄席の講釋から歸つて來た。痩せた、丈の高い、如何にも昔侍だつた人らしい、七十ばかりの老人である。

「これがいつか話した小川君です。」

正雄は門口で立つた儘引き合はされた。老人は輕く會釋をして、

「これは、これは。ようお出でた。もうお歸りかな。」

と、嗄れた聲で言つた。この物堅い父の樣子にも、正雄は何となく氣を引かれた。

外はもう暗かつた。

三人は何處へ行くともなく大川端を大橋の方へ歩いた。川にも岡にも、燈の數がだんだん殖えて來た。福井さんは正雄のステツキを借りてそれを振廻しながら、小聲で端唄を幾つか唄つた。

「岡田が好いだらう。龍井でも呼んで遣らうぢやないか。」

福井さんは唄をやめて、小さとの方を振返りながら、かう言つた。

「この頃は何時にかぶるんだらう。」

「さあ、僕もきのふ歸つて來たばかりで、まだ行つて見ないから分かりませんが、もう餘つ程早くな

つたでせう。」

「早かつたら、暫く振りで水谷さんを呼ばうか。」

「ようござんすね。」

正雄は思はずかう答へたが、後に小さとのゐるのに氣がつくと、はつとして口を噤んだ。水谷が小さとを追つかけたといふ話をふと思ひ出したのである。

小さとは、二人の話を氣にもかけない樣子で、平氣で川の方を見ながら歩いてゐた。

中川へはひると二階の廣間へ通された。廣い座敷の床の間の前に、鶴井さんと正雄がほつねんと坐つてゐると、そこへ羽織を脫いで褄を引いた小さとが、呼ばれて今來た藝者のやうに、遠慮しいしいはひつて來た。そして、二人の前へ來ると、恭しく兩手を突いた。

「入らつしやい。」

「よう。今晚は。」

と、鶴井さんも態と今來た人のやうに挨拶をした。鶴井さんはいつも小さとに對して、態度を二樣に取るのである。或時は妾さんの妹として、少しも隔てのない打解けた取扱ひやうをした。或時は自分の贔屓にする藝者の一人として、十分尊敬もし遠慮もした。

膳が出ると間もなく、花子が來た。福井さんがここへ來ると、默つてゐても花子は來る筈になつてゐるのである。花子は小さとに氣を兼ねて碌々口も利かなかつた。

やがて芳町の年寄連が二人三人集まつて來た。水谷と龍井へ電話もかけた。芝居を濟ますと、この二人も遣つて來た。

一座は可なり賑かになつて來たが、座敷は一向調子附いて來なかつた。「同じ遊びをしても、ばかに調子が好い時と、何だか物足らないやうな、調子の狂つたやうな時がある。」と、よく福井さんがさう言ふが、かういふのがその狂つた方なのだらうと、正雄は思つた。

水谷と小さととの會見も一向面白くなかつた。水谷の方は白ばつくれてゐるし、小さとの方はてんで侮蔑してゐるので、唯互に無頓著らしい顏を見せ合つただけであつた。

小さとと正雄と龍井が、いつものやうに浮き立たない福井さんを濱町の家まで送り屆けたのは、もう十一時過ぎだつた。

正雄が車で濱町の家を出る時、小さとは「ちとわたくしの方へもお遊びに。」と言つた。多さんも側から、「どうか柳家へもちよいちよい寄つてやつて下さいまし。お里が又何か敎へて頂けませうから。」と言つた。

腹を見透かされるといふやうな羽目になつてはつまらないと思つたのである。正雄はやはり極りの惡いのを堪へて、柳家を訪ねるより外に手段がなかつた。

芝居へ行きがけにはきつと柳家を訪ね、芝居の歸りには缺かさず濱町を訪ねする内に、柳家でも、濱町でも、初めは遠慮してゐたのが、だんだん正雄に用を頼むやうになつた。

「あしたの歌舞伎座は二人行きますから、そのつもりで場所を取つて置いて下さい。」とか「こなひだお願ひした羽織をどうか急いで下さい。あしたは旦那が着て出るんですから。」とか「あさつてお茶湯へ參りますから、きつと誘つて下さい。」とか、いづれも大した用ではなかつたが、正雄はさう言つた言傳を頼まれると、喜んでその使をした。少しでも用があれば、柳家を訪ねる極りの惡さが幾分なりとも減るからであつた。

その内に正雄は柳家の父とも母とも懇意になつた。小さとの母はいつ見ても機嫌の惡いといふ事のない人だつた。いつもにこにこしてゐる。いつも濱町の多さんの事ばかり言つてゐる。小さとの父も、唯の頑固親爺ではなかつた。旗本の次男に生れて、隨分放蕩も盡して來た人であつた。舊芝居の二番目によく出る惡侍のやうな眞似も實際遣つて來た人であつた。細君の着物をみんな賣りこかして、男の着物を細君に着せて置いた時代もあつた。親には勘當される、親類には見放される、已むを得ず根岸の大きな屋敷を人手に渡して、可愛い長女を藝者屋へ賣つたのが今のやうな身分になる初めであつ

た。長女の多さんが福井さんの世話で自前になつて、今の柳家を買つたのは、それから五六年も苦しい生活を續けた後であつた。

これから少しは樂が出來ると思つてゐると、急に多さんが引く事になつた。福井さんが丸髷に結つた多さんを連れて、深川亭へ婚禮ごつこをしに行つた時、小さとはもう姉の名を繼いで、藝者でそこへ來てゐた。小さとは姉の廢すまで堅氣で家にゐたのであるが、義理堅い多さんは、自分が廢すからと言つて、一家を擧げて福井さんの世話になる事は出來ないと言ふので、理を說いて妹に出て貰つたのである。姉思ひの小さとは、藝も碌々ないのに、丈の足りない姉の衣裳を無理に長く着て、いきなりお酌姿で出たのである。それから今日の地位になるまでには、姉の名もあり福井さんのお蔭もあつたが、人の知らない苦しい瀨を幾度か渡つて來たのである。

小さとの父は大抵朝五時に起きる。それから大川端を散歩して、歸りに牛乳を一合飲んで新聞を讀んで歸つて來る。それから鳥籠の掃除をして、鳥の餌を拵へる。晝飯を食ふと、缺かさず講席の講釋を聞きに行く。夕方歸つて來ると、一人で晩酌を遣りながら、來る人來る人を捕へて、惡口を言ふ。その惡口が江戶つ子らしい滑稽な警句に富んでゐるので、いつも惡口を言はれる人が笑つてしまふのである。七時頃には晩酌が濟む。八時には大抵もう寢てしまふ、十二時頃、丁度小さとが座敷から歸つて來る時分に一度小用に起きるきりで、それから朝までは又ぐつすり寢てしまふ。一年三百六十五

日、一日もこの課程に變りはない。唯晝席が稀に濱町行に代る位の事である。

正雄も時々その晩酌にぶつかつて、色々昔の面白い話を聞いた。

「十八ん時、板橋へ冷やかしに行つた事があつたが、あんな面白え事あなかつたね。何とかいふ家の格子へつかまつてると、女郎の奴、煙管の雁首を僕の袖口へ引つ掛けやがつて、どうしても上がれつて言やがるんだらう。錢が無えつて言ふと、あたしが立て引くよつて言やがるんだ。嘘をつけつて言ふと、嘘なもんかつて言ふから、そんならここへ一朱持つて來いと言ふと、立つてほんとに持つて來やがつた。僕はそいつを握るが早いか袖をちぎるやうにして逃げ出した。そして、その金で外の家へ上がつたもんだ。悪い事をしたもんさね。」

小さとの父は、一本の銚子を幾度も幾度も直させて、ちびりちびり飲みながら話すのである。

「旗本の次男て言へば、大抵まあ悪い者に極つてるたが、僕なざあその方でも名高い部だつたね。錢がなくなると、やたらに喧嘩をして歩いて、仲直りに一杯飲めるのを當てにしたもんだ。なんでも辰巳に火事があつて、新富町に假宅が出來た時分の事だつけ。あの邊をぞめいてゐると、ばかに大束を極め込んでるお國侍があるんだ。忌々しいと思つたが、こつちやあ相變らずのぴいぴいと來てるからどうする事も出來ねえ。その内、その侍が末社を連れて隣りの鹽湯へはひりに出て來やがつた。しめたと思つて、續いて僕もその鹽湯へはひつた。さあ、それから、その風呂場で喧嘩を吹つかけたもん

だの女がほれなかつたとか、足が頭へ廻つたとか、いづれもくだらない事に無理に因縁をつけたのさ。何しろ直裸で披身を振廻すといふ騒ぎだらう。末社は逃げる、町内の仕事師は刺子を着て飛んで来る、そりやあ豪い騒動にしてしまつた。揚句が例の仲直りで、たうとうその園侍に一晩奢らしてしまつたわけさ。」

その時分両國にあつたとかいふ淫猥な見世物の話もした。田舎者を釣る詐欺賭博の遣り方も話した。正雄はいつでも話を聞いてゐる内に、大髻に朱鞘の大小で、朴齒の高下駄を鳴らしながら、江戸中飲める權を探し歩く、丈の高い園侍を心に描いた。そして、その豪放不羈な侍の血が、自分の戀人にも傳はつてゐるのだと思つて、何となく畏ろしいやうな、気強いやうな感じを抱いたものである。

正雄は貰ひつ子の民ちやんとも仲が好くなつた。民ちやんは徒士町の方から貰はれて来たのだが、當人は貰はれて来てゐるとは知らないのである。尤も實の親には堅く出入を禁じてあつて、たまに訪ねて来ても、親類の伯父さん伯母さんにして會はせてゐるのである。柳家で民ちやんを貰つたのは、別に相續者にするつもりでもなかつた。喉をさんがゐなくなつてから、家が急に寂しくなつたので、唯何となしに貰つたのである。民ちやんは小さとやまさんを姉さんと呼んだ。小さとの母をかあちやんと呼んだ。

民ちやんはその時分まだ六つか七つで、綺麗な黒い柔かな毛をお河童さんにした、色の白い、眼と

口の可愛い、器量好しだつた。この子はどうしたのか、「濱町の兄さん」が嫌ひで、福井さんが來ると、いつも逃げて歩いた。小さとにも餘り懐いてゐなかつた。好きなのは小さとの母と濱町の姉さんで、この二人には始終取つついたり引つついたりしてゐた。正雄が來るやうになつてからは、すつかり正雄が氣に入つてしまつて、もう正雄でなければ夜も日も明けなくなつてしまつた。子供好きな正雄は、民ちやんの思ふ通りな玩具になつたのである。馬になつて載せもした。犬になつて吠えもした。百面相の眞似もした。民ちやんの相方になつて芝居の眞似もした。

正雄は心から民ちやんを可愛いと思つたのである。實際民ちやんの顔が見たいばかりに柳家を訪ねる事も度々あつたのである。併し、民ちやんの顔の蔭には矢張小さとの顔があつた。正雄は屡民ちやんの寢た時分に、民ちやんに遣る土産を持つて、柳家の格子戸を明けた。

正雄はかうして毎日のやうに小さとに會つたが、胸にある事を話し合ふやうな機會は少しもなかつた。母がゐる、民ちやんがゐる、女中がゐる、近所の人が話しに來てゐるといふ風で、小さとと正雄が二人切りになるといふやうな事は丸でなかつた。正雄は毎日のやうに戀しい人の顔を見ながら、不滿足に不滿足に日を送つてゐた。

十七

正雄の一家が生れ故郷の山の手を見捨てて、代地河岸へ越して來たのはそれから、二月ばかり立つてからであつた。親父が勤め先の用で暫く朝鮮へ行く事になつたので、下町(したまち)の好きな正雄の母は、家の寂しくなるのを言ひ立てにして、屋敷は暫く人に貸して、自分達は下町の意氣な所へ越さうと言ひ出したのが初めではあつたが、代地の靜なのを主張して、川添ひの新しい二階家を探して來たのは正雄だつた。橋一つ渡れば懷しい家のある所へ、正雄は家を持ちたかつたのである。

正雄の家のならびには、深川亭だの柳光亭だのがあつた。近所は役者の家か、妾宅か、さもなければ大商人の捨家のやうな家ばかりだつた。踊や唄の稽古に行くお酌達は、毎朝のやうに家の前を通つた。正雄を知つてゐるお酌は、家の前を通る度に、二階にゐる正雄に聲をかけた。

「先生。」

かういつて尻上りの可愛い聲が往來からすると、正雄はいつも讀みかけの本を手に持つた儘、障子を明けて二階の欄へ出て來た。

「これからお稽古。」

「ええ。」

「早く行つてらつしやい。」

などと、上下で問答をするのである。正雄はかういつた土地に棲んで、かういつた挨拶をするのを

名譽とも幸福とも感じた。

正雄は代地に來てから毎日のやうに濱町の家を訪ねた。たまに芝居の方の書き物でもあつて、家に引つ込んでゐると、きつと福井さんの方から誘ひ出しに來た。二人は毎晩のやうに方々遊んで歩いた。歸りに正雄はきつと柳家の前を通つた。小さとがまだ歸らなければ、雨戸はきつと二三寸明いてゐた。小さとが歸つた後だと、雨戸はきつとすつかり締つてゐた。雨戸が少しでも明いてゐると、正雄はきつと聲をかけた。

「まだお歸りになりませんか。」

すると、いつも中から小さとの母の聲がして、「どなた。」と聞く。「小川です。」と言ふと、「まあおはひんなさいまし。もう戻る時分ですから。」と言つて、急いで格子戸の掛金を外してくれるのである。正雄は「もう遲うございますから。」とか何とか言ひながら、遠慮しいしいきつと上がつてしまふのである。

十分か二十分話してゐる内に、きつと小さとは歸つて來た。入れ交つた下駄の音がして、「さよなら。又明日。」と言ふ可愛い聲が門口でするると、正雄はいつでも胸を轟かした。

小さとは平氣で正雄の前で着物を着換へたり、晩飯を喰べたりした。正雄は又默つておとなしくそれを眺めてゐるのである。

「どうも失禮。」

かういつて小さとは箸を置くと、正雄と母を相手にきつと其日一日の出來事を話すのである。

「今朝面白かつてよ。電車の中で大喧嘩をしたの。ゴムさんと一緒に築地へ英語のお稽古に行つた歸りに濱松町まで來ると、そら、今日は水天宮様でせう。大層電車が込んで來たのよ。そこへ持つて來て運轉手が新米なんでせう。車を出す時いつでも急に動かすもんだから、たうとうゴムさんが隣りに立つてた書生の足を踏んぢまつたの、ところがその書生が生意氣な奴なのよ。いくらあやまつても勘辨しないのよ。「なんだ淫賣藝者が。」なんて言ふの。あたしはもう腹が立つて腹が立つてしやうがないから、「失敬です、あなたの方が失敬です。」つて言つて遣つたの。あんまり癪に障るから、「吾々は唯の藝者とは藝者が違ふんです。口惜しければこれを讀んで御覽なさい。」つて、リイダを袱紗から出して、鼻の先へ突きつけて遣つたら、讀めないんだと見えて、顏を眞赤にして默つてしまつたの。ほんとに面白かつたわ。」

小さとはいつでもかういつた子供らしい喧嘩話をした。「男を屈伏させる」といふ事は、何よりも小さとの喜びだつたのである。

「お里は小さい時から氣が強くて困りました。よく近所の男の子と喧嘩しちやあ、男の子を泣かして歸つて來るんです。しまひには家のお里が來たといふと、男の子の方で逃げるやうになりました。」

小さとの母は、よくこんな話をした。

正雄が小さとに會はない晩を物足りなく思ふやうに、小さとも、家へ歸つて正雄の待つてゐるのを見ない晩は、何となく物足りなかつた。小さとは福井さんの隱れ遊びを詰るのに事寄せて、時々正雄に肉迫した。

「昨晩はどちら。」

「ゆうべは福井さんと結城孫三郎を見に行つたんです。」

「操りですか。」

「ええ。」

「あべこべぢやないの。」

「何です。」

「操られに行つたんでせう。」

「冗談言つちやいけません。」

「ぢやあ、なぜお歸りにお寄りなさらなかつたの。」

「もう戸が締まつてゐましたから。」

「戸が締まつてゐたつて起きてゐますよ、大抵二時頃までは何かしらしてゐるんですから。」

正雄は戸の締まつてゐる時も、柳家の門を叩かなければならない事になつた。さういふ時、小さとはきつと手本を側に置いて手習をしてゐるか、ロイヤル、リイダを擴げて見てゐた。小さとの母は、どんなに夜が更けても、小さとの寐るまでは決して寐なかつたから、さういふ折でも正雄は胸の思を訴へるわけには行かなかつた。

今日は寄るまいと思つて、柳家の前を素通りして來ながら、柳橋の上で代地から歸つて來る小さとにぶつかつて、又家まで連れて戻られた事もあつた。珍しく早く家へ歸つて、今夜だけは行くまいと思ひ思ひ、十一時の鳴るのを聞くと、堪らなくなつて又柳家へ驅けつけた事もあつた。

小さとは正雄の顔を見る度に、「話がある。」「話がある。」と言つた。併し、小さとは中々その「話」といふのをしなかつた。正雄はその「話」といふのに、總ての希望が繫がれてゐるやうな氣がして、一刻も早くそれを聞きたかつた。

小さとはその「話」をしに一度正雄の家へ來ると言つた。正雄はその日を頻に待つたが、いつも二三日内に行くとばかりで、相變らず正雄の方から柳家を訪ねるばかりであつた。

「あしたの晩方きつと上がりますから。」

と言はれた日、正雄は朝から氣が落ちつかなかつた。米澤町の風月で小さとの好きさうな菓

洋菓子を買つて來たり、書齋の裝飾をいろいろに置き代へて見たりして、正雄は一日立つたりゐたりしてゐた。
夕方になると、雨が降つて來た。小さとはたつ子と相合傘で遣つて來た。湯歸りと見えて、二人とも素足をほんのり上氣させて、手には濡れ手拭を持つてゐた。
正雄は欺されたやうな氣がした。きつと一人で來るだらうと思つてゐた小さとが二人で來たといふ事、これが先づ意外だつたのである。唯さへ物堅い小さとが、初めて人の家を訪ねるのに、湯歸りのしどけない風で來たといふ事、これも理想家の正雄には不滿足だつたのである。併し、連れでも拵へなければ家を出る工合も惡かつたらう。湯歸りか何かでなければ、人の所へ寄れない事情もあるだらう。正雄はいろいろに思ひ直して、却つて女に同情を寄せて見たが、それでもまだ何か欺されてゐるやうな物足りない氣持がした。
小さとは來ると直ぐ歸つた。正雄が心を籠めて買つて置いた菓子は一つも小さとの手に觸れなかつた。勿論「話」の八の字も出ずにしまつたのである。

十八

それでも明くる日になると、ゆうべ小さとが家へ訪ねて來てくれたといふ事が、正雄には嬉しかつ

た。藝者が自分の家へ訪ねて來るなどといふ事は、容易ならぬ事だと思つたのである。何は言はずとも、何は話さずとも、唯訪ねてくれたといふ事だけに、幸福もあり希望もあるやうな氣がしたのである。

そこへ小さとから繪葉書が來た。ゆうべは連れがあつたので話が出來なかつた。いづれ折を見て又話すからといふやうな事が、格の正しい字で簡單に書いてある。正雄は縱々望みがあるやうな氣がした。

正雄は相變らず毎晩御宗へ通つたが、小さとは「話」の日を切らなかつた。正雄は曖昧々々日を暮らす内に、いつかその不滿足な感じが麻痺して來て、しまひにはもうその「話」を聞かうといふ欲望もなくなつてしまつた。正雄は日々の逢瀬に貪かれて、いつの間にか、まだ得もせぬ物を既に得た物のやうに思つてしまつたのである。正雄にはいつも浮き浮きした明かるい氣持で、その日その日を過ごしてゐた。

はじめての夏が來た。

小さとの浴衣の好みは、悉く正雄の趣味に合つた。毎晩換へて着る女の浴衣を、正雄は同じ愛讀の書をいろいろな趣味ある裝幀で見るやうな氣がした。

極家の涼み臺も樂しいものの一つであつた。正雄は小さとが歸る時刻を計つては、散歩にでも出るやうにぶらぶら代地の家を出た。小さとはきつと家の前へ竹の涼み臺を出して、たつ子や巴と腰かけてゐた。三人とも浴衣に着換へてゐる時があつた。一人が浴衣で、二人が座敷着のことがあつた。二人が浴衣で、一人が座敷着のことがあつた。小さとはよく女中にバナナを買つて來させて、それをみんなに分けた。そして、自分が一番餘計に喰べた。

夕方、福井さんと小さとと正雄と三人で、中洲から大川へ舟を出した事もあつた。首尾の松の少し手前で、福井さんの舟の船頭が、そこに舫(もや)つてゐた泥舟の船頭と喧嘩を始めた。小さとは男と一緒になつて泥舟の船頭を罵つた。藏前の電燈會社の大きな煙突が三本立つてる下へ來ると、小さとは嬉しさうに笑ひながら正雄の顔を見た。

「あの煙突を横にして、こつち河岸から向う河岸へ屆くと思ひますか。」

正雄は正直に煙突の高さを眼で計つた。

「そりや屆かないでせう。」

「屆きますよ。」

「屆くもんですか。」

「三本繋げは屆きますからね。」

と言つて、小さとは愈嬉しさうに笑つた。正雄の凹むのを見るのが、愉快で愉快で堪らなかつたのである。

秋の彼岸には、藤井さんが六阿彌陀詣を思ひ立つた。藤井を頭に新濱の下廻り連は、みんな脚絆草鞋で濱町の家へ集まつた。鳥さんも小さとも白い脚絆に結ひつけ草履をして、同行に加はつた。正雄は學校時代の制服をつけて行つた。

「まあ可愛らしいこと。」

「似合ひますねえ。」

「若いなあ。」

などとみんなに言はれて、

「まだやつぱり學生が習慣なんでせうよ。」

と、正雄は皮肉に笑ひながら言つた。

丁度水の出た後で亀井戸あたりには、所々に女には徒渉りの出來ない程水溜りの深いのがあつた。

正雄はさういふ時、きつと小さとをおぶつて、ちやぶちやぶ水の中へはひつた。

一行の大部分は信仰から歩くのではなくて、「日曜」のおつきあひに遠足をしてる氣なのだから、要

廻話はする、歌は唄ふ、往來の女にはからかふ、その賑かな事と言つたらなかつた。中にはきつと歸りに『旦那』は何處かで飮むに違ひないが、柳橋だらうか、芳町だらうか、どうせ芳町へ行くなら何處何處へ行つて、誰々を呼んで貰ひたいとか、そんな事まで相談してるのがあつた。

田端から王子へ拔ける途中だつた。道端の小さな新築の家で、左官屋が壁を塗つてゐた。多さんや小さとの姿を見ると、左官屋は田舍訛で何かからかつた。小さとが例の負けない氣で、左官屋を睨みつけると、左官屋は態と小さとの着物へ泥をはねかした。

「畜生。」

小さとはみんなが驚くやうな大きな聲を出した、

「あやまれ。田舍つぺい。あやまれ。」

と肉薄するやうな調子で言ひながら、小さとは着物に泥の附いた所を、左官屋の鼻の先へ突きつけた。左官屋はあんまり小さとの劍幕がひどいので、びつくりして頭を下げた。

一行が上野の廣小路へ出た時、もう町には燈がついてゐた。福井さんは雨園までみんなを歩かせて、柳光亭で夕飯を喰べさせた。小さとは多さんと並んで客の膳についた。福井さんは龍井以下十人ばかりの下廻りにずつと祝儀を出した。

それから一月ばかり經つてからの事である。

或晩、正雄は福井さんに連れられて、濱町の不動新道の側の或小さな待合へ行つた。この待合は岡田に元ゐた女中が出してゐるので、福井さんが多さんに隠れて遊ぶ場所になつてゐた。その晩福井さんは長唄の連中を呼び寄せて一晩飲み明かした。藝者は花子の外に、いつも見た事のないやうなのが五六人來た。

その明くる日の午後一時頃、福井さんはみんなと一緒に湯豆腐で飲んでゐたが、不意に何か用を思ひ出して、「直ぐ歸つて來るから。」と言つて、車で濱町へ歸つて行つた。

三十分經たない内に、福井さんは歸つて來た。歸つて來ると直ぐ硯と卷紙を女中に持つて來させて、頻に何か書き出した。傍にゐた正雄は見るともなく福井さんの手元を見た。「離縁」といふ字が見える。「到底同棲仕かね」といふ詞が見える。「委細は人を以て申進ぶべく」といふ文句が見える。正雄は少し心配になつて來た。

「何處へお出しになるのです。」

「濱町へ持たして遣るのさ。」

「冗談なんでせう。」

「なあに眞劍さ。」

「そんな事をして好いんですか。」

「好いんだとも。」

「また體にでも障るといけませんぜ。」

多さんはその十日ばかり前から、頭が悪くて寢てゐたのである。

「なあに大丈夫だよ。」

と言つて、福井さんは手を叩くと、女中に言ひつけて、直ぐその手紙を濱町へ屆けさせた。

正雄は幾度も「どうしたんです。」「どうしたんです。」と、心配さうな顏をして聞いたが、福井さんは唯笑つてゐるばかりで、どうしてもわけを話さなかつた。

福井さんは日の暮れるまで飮んでゐると、木場へ歸ると言つて、急に車で出て行つた。正雄は珍しい事もあればあるものだと思つた。これは何か餘程込み入つた事が湧いたに相違ないと思つて、その晩は態と濱町へも柳家へも行かなかつた。

それでも、明くる日の朝になると、きのふの事が氣になつて爲方がないので、正雄は思ひ切つて濱町の家を訪ねて見た。

濱町の家は別に變りもない樣子だつた。多さんはまだ客間に寢てゐたが、もう顏色も大分好くなつてゐた。

暫くすると、ゐないと思つた福井さんが、奧の方から恥つかしさうに、頭を掻き掻き出て來た。

「ゆうべは大活劇を演じちまつた。」

「どうしたんです。」

福井さんはひどく意氣の昂らない樣子で、多さんの顏色ばかり見てゐた。

正雄は多さんの口から初めて一部始終を聞いた。問題の中心は柳家の民ちやんである。福井さんは民ちやんの實の親といふのが大嫌ひだつた。きのふ福井さんが例の席からちよいと濱町の家へ歸ると、運惡くその民ちやんの實の親にぶつかつたのである。柳家へさへ出入を禁じてある人間が、どうして濱町を知つて來たのだらう。多さんの病氣を案じて、柳家へ訪ねて來て、どうか濱町のお宅を敎へてくれと言ふので、折角見舞に來た人をさう素氣なく斷るわけにも行かないので、已むを得ず小さとの母が案内をしたのださうである。福井さんは民ちやんの親を一目見ると跣足で家を飛び出して車へ飛び乘るが早いか、例の所へ戻つて來たのである。福井さんは先づ案内者になつた小さとの母を怒つた。但し、母はお人好しでもあり、年寄でもあるから、少しは條理に暗い所があつても許さなければならぬ。條理に明かるい筈の多さんがさういふ人間を門口から一歩でも内へ入れたといふ事が福井さんには分からなかつた。福井さんはこの一事で甚しく自分を侮辱されたやうに感じたのである。

晝辨當の届いた時、多さんの側にはもう母も客もゐなかつた。多さんは常にない福井さんの怒りやうを見て、大層驚いた。直ぐ女中にわけを話して、小さとを迎ひに遣ると、女中は車で柳家へ驅けつ

けたが、小さとの顏を見ると、いきなりわあつと泣き出してしまつた。小さとは、姉の病氣が重くなつたのだとばかり思つて、なんにも聞かずに、女中の乘つて來た車に飛び乘つた。多さんの枕元へ坐ると、小さとはいきなりわあつと泣き伏した。

暫くすると、その間違ひが分かつた。小さとは姉から話を聞くと、今度は泣いて怒り出した。そんなつまらない事で別れるの何のといふ法はない。民ちやんの親がなんぼ卑しい身分だからと言つて、見舞に來た人を會はないで返せといふのは無理だ。「よござんす。旦那が歸つて來たら、あたしが談判して上げますから。」と、いきり立つてる最中へ、離縁狀を書いた福井さんがふらりと歸つて來た。

さあそれからの福井さんのみじめさ。小さとは常さへ鋭い舌鋒を愈が上に鋭くして、縱横無盡に福井さんを責め出した。

「全體、姉さんが病氣だといふのに、あなたが家に落ちついてゐないのが惡いんぢやありませんか。一體その時あなたは何處から歸つて來たんです。」

福井さんは一言もなかつた。

「なあによござんす。姉さんのお世話がして頂けなければ、いつでもあたし引き取ります。姉さんの一人位、どんな事をしたつて、あたしが立て過ごして見せます。憚りながら家へ引き取つたつて、商賣をさせるやうな事はしませんから、御安心なさいまし。」

福井さんは小さとの前に両手を突いて、平あやまりにあやまつたが、妹の怒はなかなか解けなかつた。しまひには參さんが福井さんと一緒になつて小さとにあやまつた。

「それでまあ、やつと無事にをさまつたんです。」

と言つて、參さんは疲れたやうな眼で福井さんの顔を見た。

「いやもう大失敗。流石の僕もゆうべは參つたよ。」

と、福井さんは幾度も頭を掻いた。

十九

然し一年は過ぎた。正雄が小さとを知つてから第二の夏は來た。

その頃、水谷の芝居は明治座から更に有樂座へ移つてゐた。一座は漸く劇壇に固い基礎を得るやうになつた。今までは多く水谷の手芝居であつたのが、だんだん確な金主も附いて來て、小屋とも一年二年の契約をするやうになつた。長い間研究的に手傳ひに來てゐた正雄も、いつの間にかきまつた物を貰ふ作者の一人になつてゐた。

夏の芝居は昔、座附作者が俳優本位の小説を翻案したのだとかいふ「黄薔薇」の通しであつた。役者は社會的の地位がだんだん堅くなるに連れて、だんだん作者や道具方に無理な注文をするやうにな

つた。彼等は何事にも苦情をつけて、その苦情を通すのを、虚榮の餌にした。正雄は大道具や電氣屋や狂言方などの、奴隷のやうに叱り飛ばされるのを見て、やうやう自分の境遇を自覺し始めた。併し、劇場及びその周圍が、絶えず作つてくれる歡樂の空氣をさう易々見捨てる氣にはなれなかつた。正雄は自分が「如何なる所で如何なる事をなしつつあるか」を十分に知りながら、相變らず芝居の中で嬉しさうに暮らしてゐた。

その頃、深川の冬木の辨天の社殿新築落成の祝か何かがあつた。福井さんは木場の組合に推されて、餘興掛の主任になつた。組合は藝人社會の顏の廣いのを知つてゐて、かういふ時には、いつでも福井さんを引つ張り出すのである。福井さんは自腹の痛むのをこぼしこぼし、やつぱり好きでいつも引き受けてしまふのである。

福井さんは先づ柳橋の連中を說いて、踊を二番寄附させる事にした。それから新富座の新派の連中に頼んで喜劇を一幕出させる事にした。柳橋では福井さんのふだんの顏があるので、立方にも地方にも一流どこを選んで、衣裳鬘小道具なども自分の方の持ちにした。小さと、たつ子、巴、やま子、三助などはいづれも地方で、毎日午から鶴淸へ集まつて稽古をし出した。鳴物は、やはり福井さんの顏で、浪花町の師匠始め一流の太鼓や大皷が寄附で出る事になつた。喜劇を引き受けた新派の連中もそれに負けないだけのしたくをした。狂言は福井さんの爲に正雄が書きおろした『辨財天女』といふの

で、書生や下女や仕出しに至るまで幹部どこが出る事になつた。男の主人公と女の主人公とは、水谷と竹村が引け受けた。福井さんは餘興準備の成功を誇つて、木場中鼻を高くして歩いた。ふだん遊ぶの、金を使ひ過ぎるのと異見がましい事を言ふ人達のところへは、態と厭味らしく自分の勢力を吹聴して歩いた。

やがて當日になつた。餘興方の樂屋は辨天から庭續きの米市（こめいち）といふ蕎麥屋だつた。正雄は忙しい中を福井さんに案内されて、深川の風物の特殊なところを見た。米市が江戸時代から名代な蕎麥屋であるといふ事も知つた。福井さんがよく言ふ『堀』といふものも分かつた。岸端の眞晝に、鍔の廣い麥藁帽子を冠つて、竹の棹の長い鳶口を擔いだ木場の若い衆の風も珍しかつた。正雄は又方々へ手傳ひに來た福井さんの店の番頭や小僧にも引き合はされた。福井さんの店の人は、いづれも物堅さうな勤勉家らしい人ばかりで、福井さんの命令を一つ一つ忠實に聞いた。

餘興の宣傳なのを聞いて、見物人は深川中から集まつた。中には柳橋の踊を見に、態々淺草から來たといふお客さんなどもあつた。餘興なしに來た粹人連中は、山のやうな見物よりも福井さん一人が大事だつた。彼等は福井さんのお座敷へ呼ばれてでも來てゐるやうな氣持で、一にも旦那二にも旦那と、福井さんの後ばかり追つかけて歩いた。

芝居が開いてる最中なので、新派の喜劇が先づ第一に出た。それから柳橋連中の『戻駕籠』が出て、

その次に臨時に長唄連中の『勸進帳』があつて、最後に柳橋で名うての踊り手、小辰、すま子の『連獅子』が出た。

『連獅子』の時、すま子の赤毛の紐が、毛を振つてる最中に緩んで來た。いくら後へ振つても鬘は內へのめるばかりで、すま子の顏は汗と眉墨で臺なしになつてしまつた。すま子は踊が濟むと、逃げるやうに米市へ駈け込んで、福井さんの顏を見るとわあつと泣き出した。

併し、失敗はこれ位なもので、冬木の餘興は無事に濟んだ。福井さんは、いづれ慰勞をするからといふ事で、その日は直ぐ店へ歸つた。

福井さんは藝人に寄附で餘興をさせて、默つてゐられる人でなかつた。初めは木場の爲、冬木の辨天の爲に賴んだ餘興ではあつたが、さて濟んで見ると、自分は自分で何か慰勞をしなければ氣が濟まないやうに思つたのである。

役者の方の慰勞は芝居が濟んでからといふ事にして、福井さんは先づ長唄連中藝者連中の慰勞を思ひ立つた。この相談には正雄が專ら與つた。なんでも普通の招待や何かではつまらないからといふので、考へた揚句が龜淸で假裝會をして、當日は冬木の餘興に出た藝者を、一人殘らず客の膳につかせようではないかといふ事になつた。新派の方からも代表者として座長の水谷と竹村は呼ばう、それに龍

井も呼ばぬわけには行くまい。そんなら序に舊の方の誰彼も呼びたいといふので、福井さんの贔屓にする舊の方の役者も二三人臨時に呼ぶ事にした。福井さんの觸れが廻ると、藝者連や役者連は樣々總當に趣向を凝らした。

當日が來た。主人側は福井さんと正雄二人切りで、あとは二十何人といふ客が悉く藝者、役者、幇間、歌唄ひ、三味線彈きなどなのである。正雄は殆ど有頂天になつた。

時刻が來ると、一人々々車の幌に怪しい姿を隱して遣つて來た。玄關に列んで出てゐた女中達は、客の一人來る度に、相競つて假裝の主の誰であるかを見當てようとした。

藝者の趣向には奇拔なのがなかつた。たつ子や三助は御守殿姿で來た。やま子は女學生になつて來た、手古舞姿もあつた。田舍娘もあつた。ゴムの巴は自分の綽名から思ひついて、舶來のゴム人形その儘といふ裝をして來た。小さとは屁のばかに大きなハイカラに結つて、薄色の眼鏡をかけて、郵便切手を模樣にした帶を締めて、軍艦が裾模樣になつてる着物を著て來た。小さとが自分の趣味とは全く違つた、この厭味な令孃風をして來たのには、多少の諷刺と皮肉があつたのだが、正雄は戀人の假裝を斯かる姿で見ようとは思はなかつた。彼は成るべく小さとと顏を合はせまいとした。

男の方には可なり奇拔なのがあつた。達磨に扮して轉がつてはひつて來たのがある。ぼかされに扮して、傀儡法師を連つて來たのがある。今拂品の外套と帽子を友達の所から借りて來て、露西亞兵に

なつて來たのがある。正雄は柳原の古着屋から似よりの服を選んで來て、ピエロォめいた風をした。福井さんは自ら富樫に扮して、太刀持に扮した振附の花柳某を供にして歩いた。

藝者連はなかなか座蒲團の上へ坐らなかつた。ふだんの習慣で、兎角男の客の前へ坐りたがるのを、富樫の福井さんは左團次の聲色で叱つて歩いた。お客で來た藝者もお座敷で來た藝者も、終には區別が附かなくなつてしまつた。

一通り酒の廻つた時分に、夜店の繪葉書屋に扮して來た龍井は、廣間の眞ん中に店を廣げ始めた。彼は公に賣る事を許されない繪葉書を、何處でか澤山に仕入れて來てゐた。龍井の店は忽ち男や女に取り圍まれた。龍井は祕密にかういふ繪葉書を賣る商人の口上を巧に眞似た。藝人達は十錢銀貨だの二十錢銀貨だのを投げて、爭ふやうにしてそれを買つた。

突然帽子を目深に冠つた刑事が二人現れた。一人の刑事は客を追つぱらつて、龍井を高手小手に縛りあげた。一人の刑事は殘つた商品を沒收して、それを風呂敷に包んだ。龍井は泣き出しさうな顏をしながら、二人の刑事の間へ挾まれて、下の方へ引つ立てられて行つた。刑事の一人は福井さんだつた、商品を沒收したのは正雄だつた。

「途中で分かつてからは、安心して芝居をしましたが。出し拔けですから初めはびつくりしましたよ。」と、後で龍井はさう言つた。一座の中にも初めは本當だと思つたのが大分あつた。

その晩正雄はいつもになく飲んだ。藝人や藝者の持つて來る盃を一人に一つ宛受けたとしても、銚子に三四本の量は傾けたのである。一杯か二杯で直ぐ赤くなる正雄は、胸が苦しくなつて衝立の蔭に倒れた。その時水を持つて來てくれたり、頭を縛つてくれたりしたのは、薄色の眼鏡をかけた地味な今朝だつた。

正雄は醉つた勢に乘つて、日頃の思ひを一度に切つて放さうとしたが、それには餘りに醉ひ過ぎてゐた。正雄は自分の言ふ事が自分で分からなかつた。

二十

新派の慰勞は箱根行といふ事になつた。併し、男ばかりではつまらないからと言ふので、小さと、たつ子、やま子、巳だ子の外に、濱町の多さんまで行く事になつた。

芝居の濟んだ明くる日の晩、一行は新橋のステエションに勢揃ひをした。俳優に出た幹部連の外に衣裳へ手傳ひに來た下廻りの連まで連れて行く事にしたので、人數は男の方ばかりでも十人を越してゐた。正雄は新井さんに頼まれて、みんなの切符を買つたり、遲い人間を電話で急き立てたりした。

正雄は暖い夜汽車の中で、一人靜に一年前の思ひ出に耽つた。一年前に芽ざした自分の戀が、絶えず、自分を取り卷いて來る騷々しい藝界の世界に壓されて、花にも實にもならずに萎縮してゐる事を

まざまざと汽車の窓に見た。一年この方正雄が生きて來た世界は、餘りに忙しかつた、餘りに騷がしかつた、餘りに散漫であつた。正雄は吉原の太鼓持などがよく言ふ「二輪加色(にわかいろ)」といふ詞を思ひ出した。秋の二輪加の騷ぎの中に火のつくやうに出來て、二輪加の濟む時分には忘れたやうに褪めてしまふ情交である。正雄は自分の戀がさういふ種類のものではなかつたかと疑つた。相手には既に既に消えてしまつてゐる色を、欺された自分の眼は、いまだに消えずにゐるつもりで、無益に見詰めてゐるのではないかと思つた。

塔の澤の新玉(しんたま)では、夜を日に次いで騷いだ。一行が毎日明ける銚子の數、サイダァの數は夥しいものであつた。夜は必ず塔の澤の藝者を總上げにして、きつと何か變つた遊びをした。關所を設けて誰彼の差別なく藝盡しをさせた晩もあつた。或者は浪花節で關を通つた。或者は聲色の使ひ分けをした。多さんも何年振りかで三味線を手にした。藝がなくて困つた正雄は劍舞の眞似をして漸く許された。

盆芝居の「黄薔薇」には、盆踊の中で男の主人公と女の主人公の邂逅する場があつた。箱根へ來た下廻りの連中の中には、その盆踊へ出たのが二三人ゐた。間の延びた田舍唄の素朴な節廻しや、拍子の單純な手振足振は、誰にも直ぐ眞似が出來た。或晩、福井さんはみんなで盆踊を遣らうと言ひ出した。龍井は臺所から空樽を借りて來て、それを叩いた。福井さんも、多さんも、正雄も、藝者や役者と一緒になつて、手拍子を打ちながら、座敷や廊下を踊り歩いた。あんまり足踏がひどいので、丁度

その下座敷に来てゐた日本橋の或呉服屋の、五つばかりになる男の子がたうとう蟲を起してしまつた。子供は一晩泣き通しに泣いてゐたが、二階の連中は自分達の騒ぐのに夢中で、それを聞いたのは多さん一人位のものであつた。

山廻りの日は更に賑かだつた。女達は總て駕籠に乗つた。役者の方でも女方だけは女に準ずべきものとして駕籠に載せたが、その外の男はみんな歩いた。

男達はいつも駕籠より先へ先へと驅け拔けた。そして山の鼻のやうな所へ来る度に、みんなで立留つて、列を作つて下から上がつて来る駕籠の連中を冷かした。一齊に聲を揃へて「ピキピツトンピツトントン」などと囃しながら、馬鹿踊のやうに手を振つたり、足拍子を踏んだり、おどけた顔をしたりするのである。十三ばかり一列に續いた山駕籠には、美しい女や美しい男が、赤い蒲團の上に、人形のやうに載せられて来た。

大地獄下では、女達も女方も駕籠を降りた。たつ子や巴は湯の吹き出る岩の上を歩きながら、きやあきやあ云つて騒いだ。姥子の道では野郎への竹付が、直姫の投げ込んだ荒塩の當つたのに驚かされて、駕籠から道へ轉げ落ちた。一行は姥子の濱から舟に乗つて、湖水の上を元箱根の方へ渡つた。四艘の舟は人と駕籠で一ぱいになつた。舟からは賑かな歡聲が起つた。

蘆の湯から七曲りを降りて、小涌谷へ出ると日が暮れて来た。一丈以上も高さのある、大きな松明

が二本用意された。二人の人足は一人で一本宛それを擔いで、一行の先導に立つた。松明の火は高い所に赤く燃えて、ぱちぱちと火の子を彈いた。駕籠舁は一斉に杖を上げて、坂道を駈けるやうにして降りた。道のゆるやかな所へ来ると、鼻を切つた聲の好いのが音頭をとつて、次々に雲助唄を唄つた。リフレエンのやうに入れる「ヘツチヨイ、ヘツチヨイ」といふ掛聲が、暗い山に響いて悲しく聞えた。塔の澤から半道程手前の、大きな枝垂櫻のある茶屋まで来ると、新玉の女中達が賑かに提灯をつけて迎ひに出てゐた。

一行は毎晩二階の廣間へみんな一緒に列んで寝た。正雄は或晩は福井さんの隣へ寝、或晩は龍井の隣へ寝た。東京へ歸る前の晩、彼は偶然小さとの隣へ寝た。併し、戀人の隣にゐるといふ事が、正雄にはもう然程嬉しくなかつた。正雄は汽車の中で自分の戀を悲觀してから、女に對する執著が、餘程薄らいで来たやうに思つてゐたのである。正雄は何も思はずに寝てしまつた。

夜中にふと眼が覺めると、小さとの顔が自分の顔の直ぐ前にあつた。小さとの眼は自分の眼の直ぐ前にあつた。小さとの鼻は自分の鼻とくつつくばかりになつてゐた、小さとの口は自分の口に觸るばかりになつてゐた。小さとは微な鼾をして、靜によく眠つてゐる。電氣は煌々としてゐて、一行の頭が明かるく列んで見える。正雄は覺えず手を伸ばして戀人の頭を抱いた。女の顔は眠りながら微に笑

つて、枕許に正雄の顏を蔽つた。

漸く白眼が覺めると、小さとは後向きで遠い所に寝てゐた。正雄は夢を見たのだらうと思つた。併し、電氣の明かるかつたのは確に知つてゐる、連中の頭の列んでゐたのもはつきり覺えてゐる。或は本當だつたのではあるまいかと思つた途端に、正雄の戀のとろとろ火は忽ち又熾烈に燃え出した。闇の中から微に笑ふ女の顏は、その日から正雄の眼の前を離れなかつた。

東京へ歸ると、正雄は又せつせと柳家通ひを始めた。併し、小さとは相變らず、男が聞きたいと思つてゐるやうな話は、一言半句も口にしなかつた。

二十一

正雄が柳家へしげしげ出はひりする事は、福井さんもよく知つてゐた。たつ子も巴も何かにつけて、小さとや正雄を冷かすやうになつた。併し、福井さんはこの事に就いて、一言も正雄に何か言つた事はなかつた。

秋の芝居の明く前に、新富町の[illegible]に「顏つなぎ」の宴會があつて、正雄は作者として、福井さんは一の最屓として、いづれもこの宴會に座を交へた。

その晩、福井さんは珍しく醉つて、幾度も正雄に同じ事を言つた。

「君の將來はきつと僕が引き受ける。ね、君の將來は必ず僕が引き受けるから、勉強しなけりやだめだ。遊んでちやだめだ。僕は、僕は御覽の通り道樂者で、天下のやくざ者だ。併し、僕は體が弱いんだから爲方がない。僕を働かせれば、僕の體は忽ちなつてしまふんだ。だから爲方がない。だから爲方がないから、僕は自分の代りに人を育てたいんだ。人材を養成したいんだ。好いかい。だから君の將來はきつと僕が引き受ける。必ず引き受ける。」

その內に、福井さんは正雄の肩へ手をかけて、こんな事を言ひ出した。

「君の結婚問題だね。その事も僕は考へてゐる。結婚披露は園遊會か何かにして一つ盛大に遣らうぢやないか。それも一切僕が引き受けるから安心してゐ給へ。ねえ、君。君は僕の妹を貰つてくれるだらう。」

正雄は思はず只胸を突いた。これ程長い間一人で胸を痛めてゐた問題が、かう突然解決の緒につかうとは夢にも思ひがけなかつたからである。

福井さんに實の妹が一人ある事は正雄も知つてゐた。併し、その妹にはまだ一度も會つてゐないし、その妹に就いて福井さんと何か話した事もないのだから、福井さんが今言つた「妹」といふのは無論小さとの事であらう、きつと小さとに違ひない、必ず小さとでなければならぬと、正雄は一圖にさう思つてしまつた。

貰つてくれるだらう、え、貰つてくれないかい。」

福井さんは心配さうな顔をして、頻に正雄の顔を覗き込んだ。

「貰ひますとも、僕は喜んで貰ひますが、あなたきつとくれますか。」

「ほんとに貰つてくれるかい。」

「ええ貰ひますとも。併し、ほんとですか。」

「ほんとに貰つてくれるねえ。」

「きつと貰ひます。」

「よし、たのまあ。」

と言つて、福井さんは正雄に盃をさした。

正雄は躍り上がつて喜んだ。宴會が濟むと、直ぐその足で楠家を訪ねた。小さとは丁度お座敷から歸つて來たばかりで、まだ着物も着換へずにゐた。小さとの母は湯へ出かけてゐて留守だつた。

正雄は吃り吃りその晩の話をした。小さとは左程驚きもしない樣子で、

「旦那のこつたから、當てにやあなりませんよ。」

と言つた切りだつた。正雄は拍子拔けがして、ぼんやり家へ歸つたが、それでも明くる朝、小さと

から葉書が來て、『かの君の言葉しみ〲嬉しう覺え候』とあるを見た時は又新しい力を得たやうな氣がした。

正雄は今までの事を總て福井さんに話してしまはうと思つた。話のかうなつた以上、もう隱してゐるのは罪惡だと思つたのである。彼は福井さんに、一度是非内々で話したい事があると言つた。

二十二

或晩、福井さんは新富座に正雄を訪ねて、二人で築地の宮川といふ鳥屋へ上がつた。

「話といふのは何だね、」

幾度かう言つて福井さんが聞いても、正雄は躊躇してなかなか口を切らなかつたが、酒が少し廻つて來たのと、あんまり福井さんに責められるので、たうとうしまひに切り出してしまつた。

「これを御覽下さい。」

かう言つて正雄は懷から小さとの葉書を三四枚出した。それにはいづれも『多さと』と小さとの本名が記してあつた。

「さあちやんと僕との間には既にこれだけの交通があつたのです。」

福井さんは怪訝な顏をして、一枚々々葉書の文句を讀み終ると、正雄の顏をぢつと見て、意外だと

いふ顔をした。

「ちつとも僕は知らなかつた。」

正雄には福井さんの意外な顔をするのが意外だつた。

「さうですか。」

とは漸う言つたが、もうあとを言ふ勇氣がなかつた。

「一體いつ頃からの事なんだい。」

「去年の春からです。」

「どつかよそで會ひでもした事があるのかい。」

「いいえ、そんな事は一度もありません。御宅で會ふか、濱町のお宅で會ふか。あなたと御一緒でお茶屋で會ふかよりした事はありません。」

正雄は福井さんの問ふが儘に答へた。然し松本の晩の話、去年の春の箱根の話、それから後の心中の問問、其他は何一つ隠さず、すつかり話してしまつた。

福井さんは困つた事が出來たと言ふやうな顔をしながら、正雄の言ふ事をすつかり聞いてしまふと、暫く考へてゐたが、やがてかう言つた。

「君の氣持はよく分かつた。なに、どうせおれは嫁に行く體なんだから、君が欲しければ、君に上げ

るやうにしても好いんだが、實はいろいろ事情があつてね、あれも今直ぐ商賣を廢めるといふわけにも行かないんだ。兩親を見送つてしまはない内はどうする事も出來ないかと思ふよ。まあ相談して見るがね、とても今直ぐにといふわけには行くまいと思ふんだ。兎に角僕も考へて見るから、暫く待つてくれ給へ。」

正雄は飛んだ事をしやべつてしまつたと思つた。福井さんがこなひだ「妹」と言つたのは、やつぱり實の妹だつたのである。實の妹ではなかつたとしても、少くとも小さとではなかつたのである。正雄は福井さんが内々二人の仲を感づいてるて、それであんな事を言ひ出したのだと思つたのである。だから、今までの事を正直に話せば、寧ろ喜んでくれるだらうと思つたのである。ところが福井さんは意外だといふやうな顏をしたのである。正雄は飛んだ事を話してしまつたと思つた。

「驚きましたか。」

最後に正雄はもう一度探りを入れて見た。

「驚いた。」

福井さんのこの一句で、正雄はもう總ての望みが絶えたやうに思つた。

それから一日置いて柳家を訪ねると、小さとの態度はもうすつかり變つてゐた。

「濱町の姉さんに大層叱られてよ。若い方を迷はすやうな事をしてはいけないつて。やつぱりあたしの方が悪いんですつて。姉さんがまあさう言ふんですけど、つまり旦那が姉さんにさう言つて來いつて命令したんでせう。あたしは旦那にも姉さんにも一方ならない義理があるから、もう今までのやうには出來なくなつてよ。」

かう言つたが、暫くすると、

「あなた自分でしやべつたんですつてねえ。隨分おしやべりねえ。」

と、さも憎さげに言つた。

細井さんからはその後正雄になんとも音がなかつた。正雄は小さとの態度を見て既に十分失望はしてゐたが、それでもまだ細井さんの心には一縷の望みを繋いでゐたかつた。併し、一月經つても、二月經つても、話はそれつきり何もなかつた。

正雄は細井さんに捨てられるのが悲しかつた。それで自分の方からも、もうその事に就いては何も言はずに、相變らず濱町へ通つてゐた。

待合へも相變らず通つた。今に歸らなくなつたら、母も心配しよう父も憂はうと思つたからである。

小さとは正雄の來てゐるのを見て、時々厭な顏をするやうになつた。

小さとは正雄の前でよく役者の噂をした。誰は好い彼は悪いなどと、今まではした事もない男の品定めなどもするやうになつた。中にも歌舞伎座の或若い役者がお氣に入りで、「あの人と夫婦になりたいわ。」などと、態と正雄の前で言つた。

それでも正雄はなんにも言ふ事が出來なかつた。

二十三

小さとの一件が妙な羽目になつてから、正雄は益福井さんと親しくなつた。福井さんは多少正雄を氣の毒に思つたのである。正雄は福井さんに對して何か濟まない事をしたやうな氣がしたのである。小さとは「つまり旦那が」さうさせたんだとは言つたが、正雄はそれを信じなかつた。正雄はやはり男の友達を賴りにしたかつた。そして女を疑ひたかつた。

十月の朔日であつた。正雄は福井さんに連れられて、築地の本願寺へ行つた。寺內の正心寺といふ寺に福井家先祖代々の墓があるのである。福井さんはどんなに遊びにほうけてゐる時でも、決して朔日といふ日を忘れなかつた。朔日の午前か午後には何を措いてもきつと正心寺へお參りをした。

「僕がこんな事をしてゐられるのも先祖のお蔭だからね。まあ墓參りだけは缺かずにするのさ。」

福井さんはいつもかう言つた。正雄は福井さんが『遊ぶ人』であつても、何處かかういふ點に逡つ

た肩のあるのを常に懐しく思つてゐたので、いつも墓参りには一緒に行つた。腰巾着のやうに福井さんの傍を離れなかつた職人達も、このお墓参りの供だけは厭がつて、誰も一緒に行く者がなかつたのである。

福井さんは寺内の花屋で、樒(しきみ)を十幾束か買つた。この数もいつもきまつてゐるのである。それから、塀の下へ草鞋を投げて遊んでゐた墓掃除をする唖(おし)の男を呼んだ。この男も福井さんのお馴染で、福井さんの顔が見えると、何処にゐても直ぐ飛んで来るのである。

唖は福井さんから樒の束を受け取ると、どんどん正心寺の方へ駆けて行つた。二人が寺へはひる時分には、墓はもう大概掃はれてゐた。多くの墓の中に飛び飛びに散れてゐる福井家の墓を六か七つ掃除するのであるが、唖は墓の在りかを一々よく知つてゐた。もう年数が立つて、字のよめないやうな墓でも唖は決して間違へなかつた。

福井さんは自ら墓の一つ一つに樒を供へて、一々墓の前に額づくのであつた。木場かね何と墓石に彫つた墓がある。魚がし何徳と墓石の横に彫つたのがある。福井さんは親類の墓を順々に拝んで来て、最後に一番大きな「福井家先祖代々之墓」の前に跪くのである。正雄はその間、寺の縁側に腰かけて、ぼんやり小春日和の青い空を眺めてゐた。

お参りを済まして、寺を出ると、福井さんはもういつもの遊び好きな福井さんになつてゐた。

「何處かで一杯頂戴したいものだな。」
二人は築地の電車道を新富町の方へぶらぶら歩いた。
「どうです、新色も出來ませんか。」
福井さんはもう小さとの事は忘れてしまつたやうな顏をして、かう言つた。正雄もいつまでも未練のあるやうな顏をするのが厭だつた。
「別に新色も出來ませんが、好いのはなかなかありますねえ。」
「へえ、あるかねえ。君の好きなのはいつでも一風流變つてゐるから、また何か不思議なのを見つけたね。」
「いいえ、別に奇抜なのでもないんです。ごく平凡なんだらうと思ひますが。」
「一體誰だい。」
正雄は躊躇した。浮つかり言つて、口の悪い福井さんに罵倒されるやうな事があつてはならないと思つたのである。
「言ひ給へな。」
「さうですねえ。」
正雄は再び躊躇した。福井さんは自分を試驗するのではないかと思つたのである。これを言へば如

何にも小さとに未練がないやうで、福井さんを安心させる種にはならうが、又これが爲に一度思つた女がさう早く思ひ切れるのは、情の薄い證據だといふ風に取られるのも厭だつたのである。併し、正雄が既に或新しい女を思つてゐた事は事實であつた。君太郎に逃げられ、小さとに見捨てられた正雄の胸は、もう一刻も空虚でゐる事は出來なかつた。

「こないだ、あなたと一緒に、ここへ曾我の家を見に來たでせう。」

二人は新富座の前を歩いてゐた。

「ああ。」

「あの時、歸りに鶴家であなたに挨拶した若い藝者があつたでせう。」

「ああ、せつ子かい、辰巳屋の。」

「せつ子つて言ふんですか。芳町ですか、柳橋ですか。」

「芳町さ。あれが氣に入つたのかい。あれなら上等さ。大分君も眼が肥えて來たね。」

「併し、とても吾々の相手にはなりますまい。」

「なあに、ありや不見でさ。わきやありやしない。」

正雄は福井さんのこの詞を少しも侮蔑とは思はなかつた。寧ろ嬉しく感じた「では俺でも近づけるな」と思つたのである。正雄はもう餘程この道に擦れて來てゐた。

「ほんとですか。」
「ほんとども。何なら證據を擧げても好い。」
「けども、安い方ぢやありますまい。」
「さう高くもないだらう。まあ中どこだね。唯、ゐる家が悪だから氣を附け給へ。中々絞るのが巧いんだから。」
「へえゝ。」
「まあ知れないやうに遣るんだね。あんまり凝りさへしなけりや知れるもんぢやないよ。」
「さうですねえ。ですけど、僕等のやうな者の言ふ事を聞くでせうか。」
「聞くともさ。何でも好いからいきなり突貫して見るんだ。今までの君のやうに遠廻しに愛だの戀だと言つてゐらやだめだ。あれぢやあ却つて代物を逃がしてしまふよ。先つ男の力で相手を捕まへてしまふんだね。理窟はそれからで好いぢやないか。」
「さうですかねえ。」
「自分の言ふ事を聞くんだか聞かないんだか分からない女の爲に、一年も二年も頭を痛めるなんて愚な事さ。何でも好いから直ぐぶつかつて見て、いけなければ又他のを探すさ。遠くから見てゐて、自分だけその氣でゐて、あとで捨てられたとか見換へられたとか言つて泣く位ばかな話はないぢやな

いか。」

「でも、いきなりそんな事を言ひ出して愛想を盡かされるのも厭ですからね。」

「冗談でせう。女といふものは決してそんな者ぢやないよ。いきなり口說いたから厭だの、遠廻しに口說いたから氣に入つたのと、決してそんな贅澤を言ふもんぢやないよ。自分の好い人なら、暴力を用ひられたつて少しも相手の人格を見下げたりなんかするもんぢやないよ。」

「さうですかねえ。」

「ぶつかつていけなけりや廢すまでの事さ。肱を食つたつて何が恥なもんか。散々欺された揚句、最後に天どんを食ふ位なら、行きなり一發食らつちまつた方がどんなに氣が利いてるか知れやしない。第一ぐづぐづしてるなあ軍費のつひえだあね。」

「さうですねえ。」

正雄は生返事をしてゐる内に、だんだん礒井さんの話に引き入れられて來た。

「高が賣り物買ひ物だあね。向うで看板をかけてゐるものを、無理に生娘扱ひにするにも當らないぢやないか。そんな事をすると却つて甘く見られるばかりだ。藝者に貞操もへつたくれも入つたもんかね。」

正雄は自分の夢想を散々に踏み毀されたやうな氣がしたが、それでもやつぱり嬉しかつた。正雄の

前には或新しい道が開けた。正雄は或新しい力を得た。正雄は漸く僞らない自分を見出だしたやうな氣がしたのである。

二人は八丁堀から茅場町を通つて、たうとう水天宮の角まで歩いてしまつた。

福井さんは正雄を岡田へ誘つた。二人は中の橋を渡ると、寫眞屋の角を右へ曲がつた。

その晩、正雄はいつもと違つた心持で多くの藝者を見た。ふだん福井さんが藝者に對して取る態度で分からない分からないと思つてゐた點も大分分かつて來た。

福井さんは正雄の爲にせつ子を呼んでくれたが、せつ子は十二時を打つまでたうとう顏を見せなかつた。

二十四

「今年は僕が遊びを始めてから十三年になるから、何か紀念に一騷ぎしたいと思ふ。」

福井さんはその頃頻にこんな事を言つてゐた。やがて岡田で素人芝居でもしたらといふ議が何處からともなく持ち上がつて來た。福井さんは直ぐとそれに極めた。

福井さんの計畫は出來るだけ金のかかるやうにしたいやうな計畫だつた。岡田を二日借り切つて、當代の藝人をみんな招待して、御馳走をした上に芝居を見せて遣らう。福井さんの出し物は寺子屋の

松王に爺やの梅八で、自分以外の役には一切本物の役者を使はう。女の役は一流どこの藝者で行かう。ちよぼは歌舞伎座の競太夫、お囃子もふだん贔屓にしてゐる歌舞伎座の連中に遣つて貰はう。當日は岡田座と名つけて、村芝居の看板を表へ出し、福井さんは岡田の一室をすつかり楽屋らしく飾り立てて、座頭市川小十郎と名乗つて出よう。かう言つた計畫が忽ち出来上がつた。

正雄は日夜その手傳ひに忙しかつた。福井さんは毎日稽古に熱中した。稽古の場所はいつでも岡田だつた。稽古の相手はいつも役者や藝者ばかりだつた。稽古が済むと毎日のやうにあとは酒宴になつた。

正雄は屢せつ子に會ふ機會を得た。正雄は屢酒に勇氣を借りてせつ子に思ふところをほのめかした。せつ子も正雄の事を折々は友達の間に噂すると見えて、正雄は屢せつ子の朋輩に冷かされた。併しかういつた騒ぎの中だつたので、正雄は絶えず心でいらいらしながらも、容易に「突貫」する機會を得なかつた。

もう舞臺稽古をするといふ一日二日前の晩であつた。正雄は福井さんに連れられて、岡田の直ぐ側の或待合へ行つた。この待合は門構の立派なやうにこの界隈での格式も高かつた。客はいづれも長年の得意ばかりで、知らない顔は一切客にしなかつた。名前がそれらしいからか、はひり口が宏大な爲か、ここへ出はひりする客や藝者は、みんなこの家を「お寺」「お寺」と呼んだ。

福井さんは稽古にかまけて暫く會はなかつた花子に、隱れて會はうと言ふのであつた。福井さんは毎日のやうに口の悪い老妓連に取り卷かれてゐたので、しみじみ花子に會ふ事が出来なかつたのである。福井さんは藝人達に隱れて遊ぶ時、いつでも正雄だけ連れて歩いた。正雄は自分だけ特別扱ひにされるのが嬉しくて、いつも邪魔だらうとは思ひながら、福井さんの側を離れなかつた。

福井さんは正雄の爲に或種類の藝者を呼んでくれた。併し、正雄はその藝者に少しの興味も持つ事が出来なかつた。正雄は福井さんに内證でその藝者を直ぐ返してしまつて、お菊といふこの家の女中と二人で、四方山の話をしてゐた。

お菊は丸髷に結つた年增盛りだつた。本を讀むのが好きださうで、とうから正雄の名も知つてゐるといふやうな話をした。

「一度お目にかかりたいかかりたいと思つてゐましたら、たうとう旦那のお蔭で思ひが叶ひましたわ。先生の方ぢや御存じなくつても、あたしの方ぢや何もかも存じてゐるんですよ。」

と言つて、お菊は意味ありげににやりと笑つた。

「あなた、せつ子さんがお好きなんですつてねえ。可愛い人ですわ。あたし妹のやうに思つてゐますのよ。珍しい人ですわ。先生、やつぱりお目が高いわねえ。」

正雄は不意討を食つて、少し驚いたが、態と平氣な顔をして、默つて笑つてゐた。

「せつ子さんの方でも大變なんですよ。あの人に限つて今まで浮氣のうの字程も噂を立てられた事のない人なんですから、先生ほんとに御馳走なすつても好いんですよ。お似合の御夫婦ですわねえ。」

お高は一人でしやべつた。正雄はもうそんな話に乘る程初心ではなかつたのだが、それでも嬉しくない事はなかつた。

「みんな初めはそんなことを言つて、あとぢやあいつでもだめなんだからしやうがない。」

正雄は嬉しさを隠して、探りを入れるやうな眼つきでかう言つた。

「大丈夫ですわ。君ちやんとは人が違ひますからね。」

正雄は度膽を抜かれた。お高は君太郎の事まで知つてゐるのである。

「君ちやんのやうな薄いかたぢやありません。育ちが好いんですからね。あたしは何もかも知つてゐて申し上げるんですから、默つて任してお置きなさいましよ。」

「だつて、ここで會ふわけにや行かないんだらう。家が大層やかましいつて言ふぢやないか。」

「まあ默つて入らつしやいましよ。家の事なんか心配する人があるものですか。あなたも存外お坊ちやんですわねえ。」

正雄は煙に巻かれて、答へる詞を知らなかつた。唯不思議に人の事に肩を入れる女もあればあるものだと思つて、その目鼻立のきりりとした、一苦勞も二苦勞もしたらしい女の顔をぢつと見てゐた。

「お菊姐さん。」
襖の外で小さい女の子の聲がした。お菊は直ぐ座を立つて、座敷の外へ出ると、暫く廊下でその女の子と何か話してるやうだつたが、やがて又はひつて來た。
「先生、丁度ようございましたわ。今、他のお座敷へ參つたさうですから、内證でお會はせしませう。なんでも仰しやりたい事をしつかり仰しやらなけりやだめですよ。」
暫くして正雄は薄暗い廊下へ連れ出された。戀しい女は暗い廊下の隅に立つてゐた。
「今晩は。」
「今晩は。」
二人はこれ以上何も言へなかつた。お菊は矢庭に二人の手を引張つて、無理に握手をさせた。そして、「好いでせう、せつ子さん。好いでせう、先生。」と言つた。せつ子も正雄も見えるやうに頷いた。せつ子も正雄も手を堅く握つた。正雄は自分の手が戀しい人の手に壓された時、始めてこの芝居らしいお菊の取持に、いくらか力ある希望を得た。
「せつ子さん。せつ子さん。」
二階の方でかう呼ぶ聲がすると、せつ子は逃げるやうに姿を隱してしまつた。正雄は座敷へ歸つて、崩れるやうに脇息の側へ坐つた。

福井さんが車で歸ると、正雄も直ぐこの家を歩いて出た。
「なんだか莫迦にされたやうな、おもちやにされたやうな氣がするなあ。ほんとかしら、今夜の事に。女は物を取消すのが巧いからなあ。併し、あの手には確に力が籠つてゐた。あの手は確に或ものを語つてゐた。あの時あの手にどういふ力が籠つてゐたか。それはお菊も知らないのだ。それを知つてるのは俺ばかりだ。あの手。あの手。あの手はまさか噓ぢやあるまい。」
正雄は眞面目にこんな事を考へながら、嬉しいやうな、不安心なやうな氣持で、家へ歸つた。

二十五

會芝居の當日となつた。
岡田の入口へは魚河岸から李十郎へ來た幟が十幾本か立つた。積樽も幾つかあつた。提灯も來た。旗も來た。福井さんに贔屓を受けてゐる盛り場からは酒が來る。菓子が來る。肴が來る。正雄はそれらの應接に忙しかつた。
李十郎の福井さんは、岡田の女將の部屋に陣取つて、黑い襟のかかつたお召の部屋着を着て、大きな友禪縮緬の座蒲團の上に大胡坐をかいてゐた。部屋の用は濱町の多さんと柳橋の小さとがした。
正雄は福井さんの部屋へはひる度に小さとと顏を合せたが、小さとはいつも權高な顏をしてゐた。

正雄は心の痛みを紛らはさうとして、努めて若い藝者の噂などをした。

客は在らゆる方面から在らゆる遊び好きな人が集まつて來た。中には村芝居といふので、態と娘を田舍者に仕立てて來る人などがあつた。村役場と書いた提灯を持つて、色の褪めた山高帽子を阿彌陀に冠つて、ぢんぢんばしよりで遣つて來る客もあつた。

福井さんの杢十郎は、權八も松王も大眞面目で立派に遣つてのけた。一體物に凝り出すと、ねつい質なので、一擧一動一言一句の末に至るまで、自分に合點の行くまでに稽古を怠らなかつたからでもあらう。皮肉な鈴ヶ森のタテも、むづかしい首實檢の眼の配りも、お世辭氣なしに藝人達に舌を卷かせたのである。

せつ子は二日共岡田へ來た。正雄は幾度となくせつ子に會つたが、話をするやうな機會は一度もなかつた。それでゐて、正雄は何處へ行つてもせつ子の事をからかはれた。正雄は何だか今までの自分とは餘程勝手が違ふやうな氣がした。

二十六

二日の歡樂は夢のやうに過ぎた。

藝人達は疲れて暫く濱町へ出て來なかつた。福井さんも溜つてゐた店の帳合に忙しくて、暫く顏を

見せなかつた。

　正雄の女を慕ふ心は、かう言ふ間も休んでゐなかつた。彼はこの機會を利用して、一人でせつ子に會ひに行かうと決心した。

　正雄が一人で行ける家は外になかつた。彼は一年振で中洲の新布袋家の門をはひつた。

「まあ、よく道がお分かりになりましてねえ。」

　お今といふ馴染の女中は、かう言ひながらいそいそと正雄を夕顔の間へ案内した。福井さんがこの頃ぱつたりここへ來なくなつたので、何となく家が寂しい。

「なんと思つて入らして。」

「あんまり御不沙汰をして済まないと思つたからね。」

「この頃はお忙しくつて入らつしやるさうですからね。」

「厭味は言ひつこなしさ、ほんとに家が遠くなつてからすつかり御不沙汰しちまつた。」

「岡田へは毎晩入らつしやるんでせう。お寺へもね。」

「そりや福井さんのおつきあひぢやないか。」

「存じてますよ。」

「何を。」

「せつ子さんが大變ですわ。」
「ここへも來るのか。」
「ほらね、たうとう本音をお吐きなすつた。先生も暫くお目にかからない内に、旦那のお仕込ですつかりお人が悪くおなりなすつたのねえ。」
「なぜ。」
「始終お寺で會つてらつしやるんでせう。」
「冗談言つちやいけない。實はけふはじめて差しで會はうと思つて、それで君のところを賴つて來たんぢやないか。」
「ほんとですか。」
「ほんとさ。」
「なんだか當てになりませんねえ。」
「冗談ぢやない。直ぐ呼べるなら呼んでくれ給へ。」
「ほんとですか。ぢやまあ欺されたつもりで掛けて參りませう。」
お今は直ぐと梯子を降りた。

せつ子の来た時、正雄はまだ猪口に一杯の酒を干してゐなかつた。
「まあ。」
と言つたきり、せつ子は唯人の好ささうににこにこと笑つてゐるばかりであつた。その様子がこんな所で正雄一人に自分一人が呼ばれるのか、なんだか可笑しいといふ風であつた。
「よく来てくれましたね。」
正雄は自分で黒くなつたなつたと思ひながら、まだ藝者に對してこんな挨拶をする癖が抜けなかつた。
「不思議だらう。」
「不思議ですわねえ。」
「一遍ゆつくり言ひたい言ひたいと思つてゐたんだけど、岡田の芝居でごたごたしてゐたもんだから。」
「どうも有難う。」
と言つて、せつ子は態としかつめらしく手をつかへた。
如何にも曇りのない、晴れやかな微笑を見せる、何處かにまだお酌あがりの匂の残つた女であるが、又何處かに年だけの苦労はして来たといふ跡の見える、弛みのない、しまつた所のある女だつた。

柄も大きい方ではないが、丈がすらりとしてゐて、朋輩にも姿の好いのを羨まれる方だつた。顔も規模が小さくて、大勢の中にゐて目立つといふ方ではなかつたが、色が透き通るやうに白く、眼が愼ましげに可愛く、耳が貝のやうに好い色をしてゐた。

髪の結ひ方にも、顔のこしらへにも、着物の好みにも、少しも異常な所がなかつた。何處までも地味に何處までも上品に、何處までも人の後へ隱れるといふ風があつた。

子供らしい中に大人らしいところがあつた。極めて意氣な姿の内に極めて堅い心持が見えた。群集の中から男の眼を引く女ではなかつた。一人離れて始めて味のある女だつた――雜草の中にゐては道行く人の足も留めぬ鳴子百合(なるこゆり)――一本(ひともと)我が庭へ移し植ゑて、始めて造化の微妙に眺めても眺めても飽かぬ眺めを見せる鳴子百合――せつ子はその鳴子百合であつた。

正雄は覺えず詩的な空想に陷つて、暫くぼんやり默つてゐたが、ふと思ひ出したのはこなひだ本願寺で福井さんの言つた詞である。福井さんは「先づ相手を捕まへろ」と言つた。「理窟は後で好いぢやないか。」と言つた。「どうせ賣り物買ひ物だ。」と言つた。「今日俺がここへ來たのも、福井さんの詞を實行しようと思つて來たのぢやないか。それだのにこんな事でどうなる。こんな事でどうなる。」正雄は竊に自分で自分を鞭うつた。

「どうして君を呼んだのか知つてるかい。」

「分かりませんねえ。」

せつ子はませた笑ひ方をした。正雄も附け合せに強ひて笑つた。それでもこれで話の小口は切れた。

「君を口說きに來たんだよ。」

正雄は眞面目な顏をしてかう言つた。これでも正雄の方は滿身の勇氣を絞つて、極めて亂暴な、極めて强い一句を言ひ放つたつもりだつたが、せつ子には何となくそれが滑稽に感ぜられた。丁度素人の役者が敎へられた通りの臺詞を何等の飾りもなく、何等の節廻しもなく、ぶつきらぼうに言ひ放つのを聞くやうに、甚しく言ふ事が言ふ人にそぐはなかつた。

女は聲を上げて笑つた。

「笑ひ事ぢやないよ。眞劍なんだから。」

「でも、なんだか可笑しいぢやありませんか。」

「少しも可笑しい事はない。ほんとにさう思つて來たんだもの。」

「大變ですわねえ。」

「どうか笑はないで眞面目に聞いてくれ給へ。」

「伺つてますわ。何だか變ですわねえ。」

正雄は又いつもの女の手が出たなと思つた。福井さんの言ふのはこゝだな、こゝが勇氣を出さなければならない所だなと思つた。

「長い事を言つても爲方がない。何處が好いとか、何處に惚れたとか、言ひたい事は澤山にあるのだが、そんな事をお世辭らしく今列べて見たところで爲方がない。要するに僕は君が氣に入つたんだ。そこで、要するにどうだと訊くんだ。」

「大層むづかしいんですねえ。」

「少しもむづかしい事はない。イエスかノオかさ。それだけ聞けば好いんだ。隨分厚かましい失敬な言ひ方だけど、要するにしまひにはやつぱりそこへ來るんだからね。遠慮のないところを言つてくれ給へ。遠慮のないとこを。」

女はやつぱり笑つてゐた。

「笑つてちや分からない。君が厭だと言つたつて、僕は決して厭な顏なんぞしやしない。遠慮なく言つてくれ給へ。遠慮なく。」

せつ子はそれでも落ちつき拂つて笑つてゐた。

「え。どうだい。好いの。惡いの。」

正雄はどうしても返事を聞かなければ止まなかつた。

「結構ですわ。あたしのやうな者で宜しければ。」

女はやつとかう言つた。併しそれでも正雄は安心しなかつた。

「ほんとかい。お座なりは厭だよ。大丈夫かい。」

その心配に堪へないやうな、憫れみを乞ふやうな正雄の顔が女には又可笑しかつた。

せつ子は笑ひながら、

「大丈夫ですよ。大丈夫ですよ。」

と、幾度も正雄に頷いて見せた。

「だけど、この土地ぢや君も困るだらう。そりやあ僕も知つてる。君の迷惑になるやうな事をしたつてしやうがない。何處かへ行かう。何處かへ。」

正雄は暗井さんから與へられた僅少な知識で、何もかも分かつた人に成り済まさうとした。

「何處か離れたとこで君の知つてるとこがあるだらう。」

女はかういふ問に答へるものでない事を、正雄は一向知らなかつた。

「あたし知りませんわ。あなた何處か御存じでせう。」

正雄はほんに聞いて知つてはゐても、一度もまださういふ所へ行つた事はなかつた。

「困つたなあ。僕は全く知らないんだ。お今にでも相談して見ようか知ら。」

「さうですねえ。」
正雄は直ぐ手を打つてお今を呼んだ。お今は事もなげにこの『難問』を解決してくれた。
「水神へ入らつしやいましな。宅から電話をかけて置きますから。」
「さうか。さうしてくれりやあ、知らない人でも上げてくれるね。有難い。」
「先生、一圓。一圓ぢや安いわねえ。」
と言つて、お今は片手を正雄の前へ出した。
「併し、君、家の方は好いかい。」
正雄はまだ心配さうな顏をして、せつ子にかう聞くのであつた。
「大丈夫ですよ。」
「福井さんと一緒で大勢で行くんだからとか何とか、巧く電話をかけりや好いだらう。」
お今は態と呆れたやうに眼を丸くした。
「まあ人の悪い。坊ちやんだ坊ちやんだと思つてたら、なかなかもう隅へは置けませんのね。旦那にいつけますよ。」
「知れたらあとであやまるさ。そんな事をぐづぐづ言ふ人ぢやないよ。」
お今もせつ子も電話をかけに下へ降りた。正雄は一人後へ殘つて、一秒を一分とも、一分を一時間

とも待つた。彼は自分がどういふ部屋にゐるかといふ事さへ氣が附かなかつた。月の夜、雨の宵、[illegible]のやうに懐しい若太郎の顔を見た夕顔の間も、今の正雄には偶と休んだ道端の掛茶屋か何かのやうにしか思へなかつた。正雄は唯行くべき所へ行つて、一刻も速くせつ子と二人切りになりたかつたのである。

「あちらは宜しいさうですよ。時間が遅うございますから、成るべくお早く入らして下さいつて。」

お今の返事は先づ首尾が好かつた。暫くするとせつ子が上つて來た。

「どうだつたい。」

せつ子は微笑つてゐる。

「好いのかい、宅は。」

せつ子は點頭いた。

「大勢で行くつて言つたのかい。」

せつ子は默つて笑つてゐる。

「福井さんと一緒だつて言つたのかい。」

せつ子はやつぱり笑つてゐる。

「どうだつて好いぢやありませんか。行けさへすれば。」

お今はかう言ひながら正雄の背中をどんと一つ遣つた。正雄はその儘自分の身體が何處かへ飛んで行つてしまひさうに思つた。

二十七

二挺の車が新布袋家の門を出た。風の少し吹く、寒い寒い月夜である。

町は黑く戸を鎖してゐた。橋は黑く水の上に寐てゐた。車は黑く濱町河岸を兩國へ向つた。正雄は生れて始めて自分の願が人に聞かれたやうな氣がした。生れて始めて自分の我儘が通つたやうな氣がした。一人の女は夢に來て夢に去る美しい影のやうに、散々正雄の心を焦らして、消えるやうに姿を隱ししまつた。一人の女は暴君のやうに、好きな時は人を近づけ、嫌ひな時は人を遠ざけた。情火の流れに身も心も任して、正雄に一緖に行く所まで行かうとした女は、まだ今までに一人もなかつた。正雄は戀の夢想に眼覺めて、これからは寧ろ戀を飾りとも玩具ともしようとした。然るに正雄が初めて飾りともし玩具ともしようとした女は、會ふと直ぐ正雄の物になつた。正雄は初々しい良心に責められて、ともすれば又昔の夢の世にはひらうとする。

車は宙を飛んで兩國橋を渡つた。狹い暗い道を少し通ると、直ぐ又横綱の河岸へ出た。柳が黑く風に動いてゐる。舟が黑く岸に舫つてゐる。黑い長い塀は、二人だけの通る道を圍ふやうに、水に近く

輝いてゐた。正雄は再び君太郎の事を思つた。小さとの事を思つた。さうして自分がせつ子と二人車を並べて行く様子を、二人の夢にでも好いから見せて遣りたいと思つた。正雄は幾度か月を仰いで得意の微笑を洩らした。

吾妻橋の袂にはまだ客待の車が澤山提灯をつけてゐた。枕橋を渡ると一しほ寒い風が川の方から吹いて來た。

向島の土手は長かつた。枝ばかりになつた黒い櫻の木が何本も何本も、側へ來ては後へ去り、後へ去つては又前へ來た。一つの瓦斯燈に車が近くなると、又遠くに瓦斯燈が見えた。やがて道は川を離れた。

正雄の心は生れて始めて愛する女と唯二人道を行くといふ大きな喜びと誇りとに溢れてゐた。彼は何時か聞いた清元の美しい文句をそこここと思ひ出した。彼の心臓は記憶に殘る淨瑠璃三味線の旋律に拍子を合せて鼓動した。

いつもせつ子の車は正雄の車の前にあつた。車は決して入れ違ひもせず、決して一緒に並んでも走らなかつた。せつ子は土手へ來ると、寒さうに袖を合せて、ショオルへ深く襟を埋めた。正雄は瞬時も眼を放さずに美しい人の後姿を見詰めてゐるのであつたが、せつ子はいつも前屈みに風を避けてゐて、一度も後を振返らなかつた。

正雄は堪らなくなつて、覺えず後から聲を掛けた。
「寒いだらう。」
「ええ。」
女は襟の中に籠つた聲で僅にかう答へた。
「氣の毒だねえ。」
「いいえ。」
正雄はこれだけ女の聲を聞くと、もう滿足した。彼は再び元の沈默に歸つて、前屈みになつた女の寒さうな姿を、後から嬉しさうに見詰めるのであつた。

水神の森は二人を暗闇へ抱き入れるやうにして待つてゐた。二人は八百松の門をはひると、飛石をかたかたと踏み鳴らしながら、僅に一枚戸の外してある奧の上り口へ案内された。もう一時過ぎにもなるのであらう。家はしつかに寐靜まつて、女中は僅に二人を案内した一人が、二人の爲に起きてゐるばかりだつた。
二人は新しく建て直したらしい川沿ひの小さな座敷へ通された。座敷の入口に小さな木の札が懸つてゐて、それに『富士見の間』と書いてあつた。

「寒かつたらう。」

「ええ。」

「隨分遠いねえ。」

「ええ。」

「さあ、もつとこつちへ來て、火鉢へ當り給へ。」

「ええ。」

女は一向口數を利かなかつたが、態度は如何にも落ちついてゐた。少しも恥つかしがるやうな風がなかつた。少しも擦れるやうな様子がなかつた。せつ子はもう五年も六年も正雄につきあつて、正雄の氣心を十分知つてゐる人のやうに、正雄が言ふ通りの事を少しも遠慮せずにしてゐた。茶を飲めと言へば直ぐ茶を飲んだ。菓子を食へと言へば、直ぐ菓子を喰べた。正雄は始めて自分を理解する女に會つたやうな氣がした。さうして、菓子一つ自分の前で喰べなかつた昔太郎は、やつぱり自分が分からなかつたのだと思つた。

風は益々强くなつた。雨戸の中の硝子戸が折々激しい響きを立てた。森の木の枝のきしきしと鳴る響も聞えて、川波は同じ岸の間を違へずにどぶんどぶんと岸を打つた。

「寒いから寝ようか。」

女は坐つた儘、直ぐ羽織を脱いだ。

明くる朝の九時頃、二人は同時に眼を覺ました。雨戸はいつの間にかすつかり明いてゐて、曇つた空が寒さうに硝子戸の外から覗いてゐた。

まだ風が吹いてゐる。濁つた川の水が縞のやうに波を立ててゐる。白く枯れた葦の洲が動いてゐる。その向うの岸に、何が建つのか積みかけの赤い煉瓦と、大きな高い足場が見えた。

正雄は夜具にはひつたなり半分身を起したが、

「寒さうだねえ。」

と言つて、又横になつてしまつた。

正雄はこの嬉しい境遇を一分でも長く續けようとした。一旦この境遇を破れば、いつ又この境遇を再びする事が出來るか分からないと思つたのである。一旦床を離れれば、せつ子は直ぐ歸らなければなるまいと思つたのである。正雄は十一時頃漸く床を離れた。

併し、案外せつ子は落ちついてゐた。正雄が床の中でぐづぐづしてゐた間も、さ程氣の急く樣子はなかつた。床を出てからも、ゆつくり風呂へはひつた。湯から出て、俥の來るのを待つ間も如何にも落ちついてゐた。

心配性の正雄は默つてゐられなくなつた。
「直ぐ歸らなけりやいけないんだらう。」
「いいえ、まだ好いんですよ。」
「お約束は無いの。」
「ええ。あるんですけど七時ですからゆつくりですわ。」
「どこ。」
「『お寺』ですの。」
「おう、お前さんに會ふね。」
正雄は意味ありげに笑つた。
「ええ、會ひますわ。」
せつ子も意味ありげに笑つた。
「賑つといいでよ。」
「何故ですの。」
「この間とさ。」
せつ子は聲を立てて笑つた。併し、正雄はかへつて眞面目だつた。

「好いかい。」
「大丈夫ですよ。」
「折角あれだらう、君と僕をあすこで會はせようと思つて、骨を折つてゐるんだらう。なんだか出し抜いたやうで悪いから。」
「構やしませんよ。」
「だけど、あの人は君の事を隨分思つてくれてるぜ。」
「そりやあ知つてますわ。」
「妹のやうに思つてゐるなんて言つてゐたぜ。ほんとかい。」
「ええ。」
「ぢやあ餘つ程大事にしなけりやいけないぜ。」
「ええ。」
「僕も大事にしようねえ。」
正雄は覺えずかう言つたが、何だか自分の言つた事が態とらしく聞えたので、自分の詞を自分で遮つた。
「ほんとに君遲くなりやしないかい。家は大丈夫かい。叱られやしないかい。」

「大丈夫ですよ。」

「電話をかけとく方が好いぜ。もうぢき歸るからつて。」

「ええ。」

せつ子はかう言つたが、なかなか立たうとはしなかつた。

「ええ。ほんとにかけ給へ。心配だから。」

二三度正雄にかう促されて、せつ子は笑ひながら漸く座を立つた。

暫くして漸く飯が來た。

正雄は御飯を三杯代へた。せつ子も負けずに二杯代へた。刺身や甘煮やさういふ物には二人とも餘り箸をつけなかつた。

食後の菓子を喰べ終ると、漸くせつ子は歸ると言ひ出した。正雄は直ぐ手を叩いて、勘定書を取つた。勘定書には二人の喰べた物の外なんにも書いてなかつた。正雄ははたと當惑した。

「これつきり。」

「はい。」

と言つて、女中は笑つてゐる。正雄は何かを尋ねるやうにせつ子の顔を見た。せつ子もやつぱり笑つてゐる。

「君、一寸顏を貸してくれ給へ。」
正雄は女中を廊下へ連れ出した。女中はやつぱり笑つてゐる。
「白狀するが、實は僕始めてかういふ所へ來たんで、一向勝手が分からないんだ。」
「ほ、ほ、御冗談でせう。」
「いえ、ほんとなんだよ。で、何かい、僕等の泊つたりなんかしたのは。」
「それはお思召でございますから。」
「ぢやあお帳場へ幾らか上げれば好いんだね。」
「それで宜しいんです。」
「ぢやあ、それはそれで好いとして、あれに遣るのは。」
「それはわたくし共の方に關係がございま　んの。お連れになつたんでございますから。」
女中は又笑ふのである。
「大抵分かつてるだらうから、君の方で書いて來て、君の方から拂つて貰ふわけには行かないもんか知ら。」
「それは困りますわ。どういふ事になつてをりますんですか、存じません事ですから。」
「さうかねえ。困つたなあ。」

正雄は暫く考へた。

「ぢやあ、相濟まないけど、今ここへよこすから訊いて見てくれないか。」

「宜しうございます。」

正雄は直ぐ座敷へ戻つて、せつ子を廊下へ遣つた。せつ子は笑ひながら直ぐ歸つて來た。正雄は又廊下へ出た。

「分かつたかい。」

「やつぱり分からないつて言ひますの。」

「困つたなあ。」

「宜しいやうになさりやあ好いぢやございませんか。」

「宜しいやうつたつて。」

女中は頻に堪へないといふやうな顔をした。

「ぢやあ兎に角。」

と言つて、正雄は女中に勘定を濟した。そして、なにがしかを帳場へ、なにがしかを女中へ包んだ。

女中は直ぐ顔を和らげた。

「それから、車を一臺。」

「どちらまで。」

「芳町。」

「畏りました。」

「お供も御祝儀もこつちで上げるよ。」

「畏りました。」

女中は駈けるやうにして行つてしまつた。正雄は直ぐ座敷へ歸つた。

「ほんとにどうしようねえ。」

「何をですの。」

「君に上げるものさ。」

「どうだつて好いぢやありませんか。」

「どういふ風にしたら好いか、知つてるなら敎へてくれ給へな。」

「分かりませんわ。」

「そんな事を言はないでさ。」

「好いんですよ。」

「でも、それぢやあ家へ歸るのに工合が惡いだらう。決して澤山に上げようと言ふんぢやないから。」

「だつて好いんですもの。」

正雄は暫く默つて考へてゐたが、やがてせつ子に見えないやうに、なにがしかを紙に包んだ。さうして家

「ぢやあ、かうしてくれ給へ。ここに少しあるから兎に角これを持つて歸つてくれ給へ。さうして家で何か言つたら若布袋家へ聞いてくれつて言つてくれ給へ。あすこへ頼んどくから。」

女は幾度か紙包みを推し戻した。併し、正雄はどうしても聞かなかつた。せつ子は漸くそれを帶の間へ挾んだ。

「ぢやあ僕は蒸汽で歸るから、一足先きへ行くよ。まだ車は來ないのかしら。」

正雄が手を叩くと、女中が盆の上に受取と土産の手拭を載せて來た。

「車は」

「只今催促をさせてをりますの。」

何處でか喇叭の鳴る音がした。

「あれで呼ぶのかい。」

「遠いもんでございますから。」

せつ子は正雄に、僕はず先きへ行つてくれと言つた。

「ぢやあ二三日内に又會ふからね。」

と言つて、正雄は女中の顔を見た。

「小松島へ行くのと鐘ケ淵へ行くのと、どつちが遠いだらう。」

「さやうでございますねえ。おんなし位なもんでございませう。」

「ぢやあ鐘ケ淵へ行かう。」

正雄は川の上から、も一度記念の深い座敷が見たかつたのである。

「お拾ひでございますか。」

「ああ。」

女中だけが正雄を送つて出た。風はまだ止まなかつた。正雄は石の門を出ると、外套の襟を立てた。

正雄は川蒸汽の窓からしけしけと、富士見の間の硝子戸を見たが、船は忽ち懐しい家の前を通り過ぎてしまつた。正雄は振り返り振り返り水神の森を見送つた

船が言問を出ると、正雄はゆうべ夜遅く來た時の事を思つた。さうして、若しや車で土手を歸るせつ子の姿が見えればと思つて、しきりに土手の方を見た。車は幾臺も通つたが、それらしい姿は一つも見えなかつた。やがて蒸汽は吾妻橋の上がり場へ著いた。

その晩、正雄は押川家を訪ねた。「見返してやらう」といふ程に思つたのでもないが、何となく小さとの顔が見たくなつたのである。今日からの自分は今までの自分ではない。自分はもう小さとに捨てられただけの自分ではない。せつ子といふ新しい女を得た自分である。かういつた得意らしい感情は正雄に非常な強みをつけた。正雄はその強みを持つて、自分を捨てた女の顔を見て見ようと思つたのである。

小さとは十一時頃歸つて來た。併し、正雄が來てゐるのを見ても、別に厭だといふやうな顔はしなかつた。當り前に正雄と話しもし、當り前に正雄をもてなしもした。正雄は少し張合が拔けたやうな氣がした。

正雄はもつと冷やかに取扱つて貰ひたかつたのである。寧ろ虐待して貰ひたかつたのである。そして、その冷淡なり虐待なりを自分の強みで直視して、平氣で笑つて見たかつたのである。併し、小さとは一向冷淡でなかつた。

正雄は心の痛手を色にも見せずに、岡田の芝居の話だの福井さんの噂だのをして、一時頃ぼんやり家へ歸つた。

二十八

それから一日は我慢した。二日目も我慢した。三日目になると、たまらなくせつ子に會ひたくなつた。

正雄は夜の十時頃そつと家を拔け出して、淺草橋の自働電話まで驅けるやうにして行つた。

「浪花の九百三十六番。」

正雄は『お寺』へ電話をかけると、名を言はずにお菊を電話口まで呼んで貰つた。

「僕です。小川です。今夜上がりたいと思ひますがどうでせう。」

「宜しうございますとも。どうぞ直ぐ入らしつて下さいまし。」

「だけど、僕一人ですよ。一人でも好いんですか。」

「ええ、ええ、宜しうございますとも。どうぞ成るべくお早く。」

正雄はどきどきしながら自働電話を出ると、直ぐ通りがかりの車に乘つた。

正雄はびくびくしながら『お寺』の門をはひつた。正雄はここの家の構へが、とても自分一人を容にしてくれさうに思へなかつたのである。正雄は女中のお菊一人を頼りにした。

お菊は女中頭といふ程の位置にはゐなかつたが、可なり古參の方で、多少は自由も利くやうであつた。正雄が一人で來たのを大層喜んで、正雄が何一つ言ひつけないでも、正雄が頼まうとする程の事

はしてくれた。

酒も來た。あつさりした肴も來た。せつ子も直ぐに來た。

正雄はお菊の取りなしの如何にも親切で氣が利いてゐるのを心から感謝すると同時に、お菊を出し抜いて水神へ行つたのを悔む心が腹の底からこみ上げて來た。

「濟まないねえ。濟まないねえ。」

正雄はお菊が何か一つしてくれるたんびにかう言つた。併し水神の夜の事はたうとう言はなかつた。せつ子は初から澄ました顔をしてゐた。寧ろこないだの事はもう忘れてしまつたやうな顔をしてゐた。正雄はそれを心細くも思つたり、心強くも思つたりした。

お菊は少しも疑はなかつた。どこまでも二人は今夜始めて差して會ふのだと思つた。そして、その仲立を自分がしてゐるのだと思つた。お菊は可愛いせつ子と可愛い正雄が仲よく話をするのを見て、心から喜んだ。

正雄はお菊の前に顔を赤くしながら、遅くまで話してゐた。お菊は置屋へはせつ子を返した事にして、内證でせつ子を泊めてしまつた。

その明くる日、正雄は藤井さんを濱町の家に訪ねて、凡ての事を打ち明けた。藤井さんは正雄のか

うなつたのを寧ろ喜ぶやうに見えた。
「大出來、大出來、それでなけりやだめだ。どうだい。案外女といふものは訣のないもんだらう。」
「まあ、さうですね。併しお菊にはなんだか濟まないやうな氣がします。」
「濟むも濟まないもあるもんかね。もう大抵察してるよ。あんな所の女中をしてゐて、その位な事が分からないでどうなるもんか。」
「さうですかねえ。」
正雄はやつぱりこの道の事は分からないと思つた。

二十九

初めは四日に一度か五日に一度、よくよくお菊の都合の好い時を選んで行つたのが、忽ち三日に一度になり、二日に一度になつて、たうとう正雄は毎晩のやうに『お寺』へ通ふやうになつた。
併し正雄は君太郎の時分に通つた新布袋家のやうに、どうもこの家には親しめなかつた。門の構への物々しいのと、座敷のいやに廣くて立派過ぎるのもその原因の一つだつた。女將の外に『お帳場』と稱する男が一人ゐて、それが主人なのか女將が主人なのか分からないのも氣になつた。『お帳場』はめつたに客と顏を合せなかつた。たまに玄關などで客に會つても、逃げるやうにして自分の部屋へ

はひつてしまつた。女中の數が多くて、一々の女中と親しむ機會がなかつた事も、正雄は不滿足だつた。殊に女中頭の如何にも冷淡な、正雄を子供扱ひにするやうな眼つきが氣に入らなかつた。每晩のやうに來る客が、何れも實業社會や華冑界に名のある人ばかりで、正雄などが足元へも寄れさうになかつた事も、不安な感じを起させた。お菊が留守で、せつ子の來るのが遲い晩などは、正雄は野原に一人置かれでもしたやうに思つた。

正雄は大抵夜來て夜歸つた。都合で泊る事も稀にはあつたが、さういふ時でもせつ子は一旦夜歸つて、又明くる朝早く來た。寐る所もいつも一つ離れた誰にも知れないやうな座敷だつた。正雄を泊めるのも、せつ子を朝早く呼ぶのも、朋輩を憚りながら、お菊が內證でしてゐる事は、樣子で正雄にも知れた。

或時、二人の逢ひの如何にも窮屈なのを正雄が嘆くと、せつ子は笑ひながら、かう言つた。

「今にあたしだつて一人前になればねえ。」

その調子は如何にも輕くて冗談らしかつたが、正雄はこの詞をぞつとする程嬉しく感じた。正雄はこれまで每日のやうにせつ子の顏を見てはゐたが、かう言つた口を利くのを聞いた事は唯の一度もなかつたのである。正雄はこの一言を聞くと、せつ子の心が悉く自分の方へ傾いて來たやうに思つた。

正雄は初めせつ子ばかりを呼んでゐたが、お菊が一人で家に氣を兼ねてゐるのを見ると氣の毒にな

つて、三度目か四度目からはせつ子の朋輩藝者を一人か二人きつと一緒に掛ける事にした。せつ子が仲をよくしてゐる一人は德子といふ、肥つた、眼の丸い、いつも陽氣な女だつた。一人は時松といふ、柄の小さい、眼の可愛い、鼻の側に少し雀斑のある、おとなしい女だつた。德子は福井さんが最屓にしてゐる或老妓の抱だつたので、正雄に會はない前から、正雄の事を聞いて知つてゐた。或晩、三人が正雄の座敷で一緒になると、德子は君太郎の事で正雄を冷やかし始めた。

「あたし君ちやんのとこで、あなたの寫眞を幾つも拜見してよ。だから、お目にかからなくたつて、お顏だけはちやんと知つてゐましたわ。」

正雄は眞赤になつてせつ子の顏を見た。併し、せつ子は驚いたといふやうな顏もしなかつた。

「あたしだつて知つてゐますわ。お酌の時分、踊のお稽古で毎日のやうに會つたんですもの。『先生』『先生』つて、あなたの事ばかり言つてゐましたわ。」

正雄は驚いた。

「なんだい。君も知つてるのかい。人が惡いなあ。今までなんにも言はないで。」

「そんなに言つて貰ひたいんですか。」

「さうぢやないけれど。」

正雄は詞に窮した。

「この頃はちつともお會ひなさらないの。」

「會ふもんか。」

「まあ、薄情ねえ。」

「どつちが薄情だか分かつたもんぢやない。」

「そんな譯なんですか。」

「さうとも。器量の惡い話さ。大の男が子供見たいな奴に背負ひ投げを食はされたんだ。」

時枝は始めて口を挾んだ。

「なかなか凄いんですつてねえ。だけど、どうしてあなた見たいな方をねえ。」

「どうも僕は先からさうだよ。初めは向うが好いとかなんとか言ふんだがねえ。それがぢきにいけなくなつてしまふんだ。一人も僕の方で捨てたつもりはないんだけれど、みんな向うで行つちまふんだ。僕はお世辭が使へないもんだからねえ。」

かう言ひながら、正雄は意味ありげにちよつとせつ子の顔を見た。

正雄はだんだんせつ子に對して眞面目になつて來た。初めは富井さんの詞に動かされて、半分は遊戲的に近づいたのであつたが、今ではもうそこに出來た關係を遊戲の結果として考へる事が出來なか

つた。せつ子は飾りにするには、餘りに地味な女だつた。玩具(おもちや)にするのは、餘りに堅い女だつた。正雄は女を知れば知る程、自分と女との關係が重大に思はれて來た。せつ子は決して浮氣で男に身を任す女ではなかつた。せつ子は決して稲井さんが言ふやうな「不見轉(みずてん)」ではなかつた。

或朝、正雄はせつ子に、貫太郎の事も小さとの事も細に打ち明けた。そして最後にかう言つた。「いつでも今度こそは今度こそはと思ふんだけれど、いつでもおしまひにいけなくなつてしまふんだ。君だけは、どうかさうならずにいつまでも僕を見捨てないでくれ給へ。僕は君を最後の人にしたいと思つてるんだから。」

せつ子は默つて頷いた。その眼の色には自分はその人達とは違ふといふ誇りが見えた。

十二月へはひると、せつ子は時々病氣で商賣を休んだ。正雄はせつ子に會はれない晩は、徳子や時松を呼んで、せつ子の噂をした。

「病院へはひりたいはひりたいと言つてるんですけれど、なかなか家で入れてくれないんですの。」

「どこが惡いんだらう。」

「痔ですつて。」

「痔。」

正雄は少し意外に思つたが、その晩お菊に聞いて病氣の原因が分かつた。せつ子はお前の時分、隨

分服なお座敷を勤めさせられた。せつ子はそれを口惜しがつて、夜の眼も寐ずに藝を勵んだ。せつ子が今日若いながら一流の一人に數へられて、藝で賣るやうになつたのは、全く自分の勉強一つからであつた。正雄は始めて福井さんがせつ子を不見だと言つた訣が分かつた。

「可哀さうに、あなた、いまだにその時分の體が本當にならないんですよ。」

お菊はかう言つて、伏目に自分の膝を見た。正雄は急にせつ子が可愛くなつた。

羽子板市の立つ時分になると、せつ子はぱつたり「お座敷」へ出なくなつてしまつた。

三十

大晦日の晩まで寐てゐたせつ子は、元日の朝から又「お座敷」をし始めた。

「可哀さうぢやございませんか。一年中の書き入れを稼ぎ人に寐てしまはれちやたまらないつて言ふんで、無理に床を片づけてしまつたんださうでございますよ。」

「お寺」のお菊は正雄の顔を見ると、涙を零さないばかりにしてかう言つた。

「そんなに虐待されてゐるのかねえ。」

「家ぢやあ少しも虐待してるつもりぢやないらしいんですよ。なにしろなかなかお座敷の多い人ですから、お正月遊ばれると大分違ひますからねえ。」

「病院へ入れてすつかり直してやれば好いのにねえ。」
「費用は自分で持つから暇だけくれつて言つたんださうですが、どうしても聞いてくれないんですつて。二月になつたらこつちで入れてやるから、それまで待てつて言ふんですつて。お正月の三十一日まで稼がせるつもりなんでせう。」
正雄は疲れた體を田の春清に包んだせつ子の姿を見ると、急いで座蒲團を無理に敷かせた。
「まだいけないんだらう。」
「ええ。でも、みんなが稼ぐのに一人寢てもゐられないもんですから。」
「車がたまるまい。」
「車もさうですが、疊へおかに坐るんでせう、長いお座敷だとしまひに立てなくなつてしまふんですの。」
「でも、ここへ來てほつとしたでせう。」
お菊に慰めるやうに、側からかう言つた。
「ええ。」
と言つて、せつ子は始めて嬉しさうに笑つた。その寂しい笑ひ顔を見ると、正雄はたまらなくなつた。

七草までは大抵毎日會つた。正雄も福井さんに連れられて方々廻るのに忙しかつたが、せつ子はそれにも増して忙しさうだつた。併し、せつ子はどうにでも都合をして、ちよいとの間でも、正雄の座敷へ來た。

「あなたのとこへ來るのは、休まして貰ひに來るんですよ。」

お菊はよくさう言つた。せつ子もよくさう言つた。それが正雄はこの上もなく嬉しかつた。

七草が過ぎると、時々せつ子に會へない晩があつた。正雄が訪ねるのを怠つたわけでもなければ、せつ子が忙しくて來られなかつたのでもなかつた。正雄の方は毎晩缺かさず電話をかけるのであつたが、向うの方で三度に一度か二度に一度は、席が一杯だからとか、お約束でみんな塞がつてゐるからとか言つて斷るのであつた。

初めは正雄も氣がつかなかつた。正月の事でもあるし、いつも時間が遅いのだから、全く都合が悪いのだらうと思つて、いつもおとなしく諦めてゐた。ところが「お寺」の斷りやうはだんだん激しくなつて來た。二度に一度が三度に二度になつた。三度に二度が三度に三度共になつた。時にはこつちの名を聞いただけで、用も言はない内に電話を切つてしまふやうなことがあつた。お菊を呼んでくれ

と言つても、芝居へ行つて留守だとかお座敷の手が放せないからと言つて、一向呼んでくれなくなつてしまつた。

或晩、珍しくも來ても好いといふ返事があつた。正雄は敵地へでもはひつて行くやうな心持で、あたりを兼ねながら『お寺』の大きな門を潜つた。

せつ子も時松も德子もみんな來られなかつた。正雄はそれでもと思つて、番の女中に三度目の電話をかけさせて、廣い座敷に一人ぼんやりと待つてゐると、そこへお菊がはひつて來た。

「少しお話したい事がございますの。」

かう言つて、お菊は正雄の直ぐ前へ坐つた。正雄は豫て期してゐた事にぶつかつたやうな氣がしたが、態と平氣な顏をした。

「なんだい。改まつて。」

「いいえ。つまらない事なんですの。」

「なんだい。」

「あんまりつまらない事ですから、申し上げまいかとも思つてゐるんですの。」

「なんだい。言つたら好いぢやないか。」

「お怒り遊ばしちや厭ですよ。」

「怒るもんか。僕は怒るのは嫌ひだ。」

「でも、あんまり莫迦莫迦しい事なんですもの。」

「構はず言つたら好いぢやないか。」

「あたくし今日といふ今日は、つくづくこんな所に奉公してゐるのが厭になりましてすよ。」

「どうしたんだい。」

「あなた、ほんとにお怒り遊ばしちや厭でございますよ。」

「大丈夫だつたら。」

「まあ、なんにも分からない者の言ふ事だと思つて、笑つて聞いて入らして下さいましよ。」

「ああ。」

「お帳場さんはやつぱりあなたを唯の若旦那かなんかのやうに思つてゐるんでせう。小川さんといふお客様は、大層お若い方のやうだが、あんまりお若い方に遊ばせては悪いつて言ふんですもの。」

「ふうん。そんな事を言つてゐるのかい。」

「ええ。つい一年ばかり前にも、田所町の方の或大家の若旦那が、大層お遊びなさいましてね。あとでそのお袋様に恨まれた事がございましたの。御自分で入らして、なぜ黙つて遊ばしてくれたつて仰しやるんです。お帳場も困つたんでせう。それからといふものは若いお方つて言ふと直ぐ心配をする

「勘定でも溜めると思つてるんだらう。」

「いいえ、決してそんな事を思ふお帳場さんぢやあございませんの。決して御信用申すの申さないのつて、そんな事を言ふんぢやない、若しあとで知れて親御様のお恨みを受けるやうな事があつては済まないからつて、それぱかり言つてるんですの。」

「ぢやあ、もう來てくれるなと言ふんだね。」

「福井さんと御一緒の時だけにして戴きたいつて言ふんです。」

「それぢやあ、やつぱり僕を信用してないんぢやないか。新聞のもぐり記者か何かだと思つてるんだらう。」

「お怒りなすつちや困りますわ。もう少しあなたのなすつて入らつしやる事がよく分かると好いんですけれど、何しろあんな禿ちやんでせう。隨分そ言つて見たんですけど、とても分かりませんの。」

「おかみさんはなんて言つてるんだい。」

「おかみさんはなんとも申しませんの。」

「唯默つてゐるのかい。」

「ええ。さういふ事はお帳場任せだもんですから。」

「ぢやあ、まあ爲方がない。無理に來たつて君が迷惑するばかりだらうし。そんな風ぢやあ來たつて面白くもないから、もう來るのは廢めよう。」

「ほんとにお氣を惡くなすつちや困りますわ。お帳場でも決して御信用しないの何のつて言ふんぢやないんですから。唯お家へ惡いお家へ惡いつて、それぱかり心配してるんですから。」

「僕の金を僕が使ふのに、誰が何を言ふもんか。」

「さあ、それが分かつてさへゐりや好いんですけど、何しろお袋や何かにもお構ひなさらないでせう。」

「まあ今に八字髭でも生やして、べらべらした着物でも着るさ。さうすりや又客にする事もあるだらう。」

「いいえ、そんな事をなさらないたつて、少し福井さんと御一緒に入らつしやりやあ、直ぐ分かつて參りますわ。」

「やつぱりまだ人間に値打がないんだねえ。帳場の見るところ毫も誤りなしさ。」

「まあ内ばかりが世界でもございませんから。」

「さうだとも。會ふところはいくらでもあるからね。」

「その内にきつと分かる時も參りますから。暫くの御辛抱でございますわ。」

「君にもいろいろ心配ばかりかけて濟まなかつた。ぢやあ、まあ暫く御不沙汰する事にしよう。」

「こんな小さな事で大事なおつむりをお痛めなすつたりなんかしちや厭ですよ。」

「誰が痛めるもんか。ここの帳場を相手にして苦しむ程僕は莫迦ぢやないよ。」

「ほんとにさうでございますわ。」

愈せつ子が來られないといふ事が分かると、正雄は直ぐに歸り支度をした。氣に掛けはしない氣に掛けはしないと言ひながらも、正雄の心は煮えくり返るやうであつた。正雄はもう一分時も長くこの不愉快な家にゐるのが厭になつたのである。正雄は何かに追はれるやうな氣持で、逃げるやうに「お寺」の門を出た。

正雄はその晩、遲くまで眠らなかつた。

一體どうしてこんな事になつたんだらう。せつ子と俺があの家で會ふと、何かあの家に都合が悪い事があるのだらう。それは初めから様子で知れてゐた。併し今夜のやうにきつぱり斷るには、よくよく何か訣がなくてはならない。せつ子は若しやあの家に旦那といふやうな者を持つてゐるのではなからうか。それならさうと明かに言つてくれれば、俺は決してせつ子の迷惑になるやうな事はしないつもりだ。だが、どうもさういふ様子はない。あの家に旦那があるなら、いくら何でもお菊があれを俺に取り持つ筈がない。恐らく今の問題ではなくて、將來の問題なんだらう。これから先あの家で旦那

といふやうな者を取り持たうとする時に、俺のやうな者があつては不都合だと思つたのだらう。きつとさうだ。きつとさうに違ひない。

お菊は信用不信用ではないと言つたが、或は金の問題なのかも知れない。併し、俺はあの家へ行くやうになつてから決してその點で不信用になるやうな事をした覺えはない。少し溜まると月に二度でも三度でも拂ふやうにしてゐるし、去年の暮でも綺麗に借りただけの物は拂つてゐる。俺もそんな事で合ふ場所を失つてはならないと思つたから、その點は隨分氣をつけて來たつもりだ。これも現在の問題ではなくて、將來の問題なのだらうか。今はまあ綺麗にしてゐるが、今にきつと困つて來るだらうとでも思つてゐるのだらうか。

それとも福井さんが又なんとか言つたのだらうか。あんまり遊ばせてくれては困るとか何とか。いや、決してそんな筈はない。あの人はせつ子と俺に關係の出來たのを寧ろ喜んでゐたやうではないか。小さとの事で少し沈んでゐた俺が、せつ子が出來て、少しは浮いて來たのを、寧ろ安心したといふやうな態度で見てゐたのではないか。福井さんが何か言ふ筈はない。決してない。

要するに、相手は『お寺』の帳場だ。あの禿だ。あいつが俺を莫迦にして、俺のやうな者を客にしたつて、どうせ碌な事はないとか何とか思つたんだ。あいつが俺を嫉いたんだ。あいつに俺が嫉かれたんだ。よし、今に見ろ。きつと俺は立派な人間になつて、向うから頭を下げて來させるやうにして

見せるから。

正雄は様々に思ひ惱んだが、決してお菊やせつ子は疑はなかつた。正雄は何處までも『お寺』を恨んだ『お寺』の帳場を恨んだ。

お菊は毎日のやうに手紙をよこした。手紙に依ると、その後せつ子は毎晩のやうに『お寺』へ行くやうなのである。正雄は自分一人が除け者にされたやうな氣がした。

その春、歌舞伎座へ或大坂の役者がはひる事になつた。福井さんは大坂から一流の藝人が上(のぼ)つて來ると、自分が知つてゐても知らないでも、きつと一度は招待して、盛に歡迎する習慣があつた。ちやうど正雄が『お寺』一件でむしやくしやしてゐる最中に、今度上つて來た役者の招待會が龜清であつた。正雄も誘はれて澁々出席した。

一座はその大坂役者を正客にして、歌舞伎座附の主な役者殘らずであつた。藝者は柳橋、芳町、新橋、赤坂などから一流どこばかりが來てゐた。これは福井さんが、顏馴染のない役者の顏を成るべく廣く知らしてやらうと言ふので、いつもするしきたりなのである。

小さとも來てゐた。小さとが好きだといふ若い役者も來てゐた。小さとはその役者の事で、ゴムだのバジヤァだのに冷かされてゐた。正雄は世を隔てて何かを見るやうな氣がした。

他にも約束があるとかで、大寂役者は一時間程ゐると歸つた。他の役者も一人立ち二人立ちする内、いつかみんなゐなくなつてしまつた。

贔屓達は役者達が喰べ汚した膳の廻りに群つた。そして、これは誰の箸だとか、これは誰が使つた盃だとか言つて、そんな物を取り合つたり奪ひ合つたりした。

中でも小さとは激しかつた。いきなり例の若い役者の坐つてゐたところへ駈けて行くと、引つたくるやうに膳を抱へて、逃げるやうに次の間へはひつてしまつた。あとでバジャナに聞くと、小さとはお膳から刺身から口取から香の物まで役者の使つた箸で、役者の喰べ殘した物を、殘らず綺麗に喰べてしまつたのである。

正雄はこれを聞くと、胸の塞がるやうな氣がした。水神の夜の明くる日、自分から師家を訪ねた時は、まだこつちが強かつた。併し、もう今日の自分はどうであらう。つまらぬ奴に叩かれて、もうせつかくの面を汚ふ事さへ堪へられないのではないか。たとひ小さとに今のやうな事をされても、自分はもう彼等に打ち勝つだけの事を言ふ事も出來なければ、する事も出來ないではないか。自分は明かに贔屓の奴隷にゐる、明かに敗北者の運命にゐる。正雄はかう思つて、兩手に顔を埋めた。

「どうしたんだい。ひどく元氣がないねえ。」

福井さんは慰めるやうに、かう言つた。

「ええ。なんだか氣が進まないんです。」
「少しやつて見給へ。」
「さうですねえ。」
正雄は福井さんの勸める盃を重ねて見たが、いつまで經つても醉へなかつた。

三十一

風の寒い二月が來た。
せつ子はやつと病院へはひる事が出來た。
せつ子が病院へはひつたと聞くと、正雄は愈寂しい氣がした。たとひ「お寺」では斷られても、まだ「お座敷」へ出てゐる限りは、きつと何處かで會へると思つてゐた。商賣を休んで、病院へはひられては、訪ね　うにも訪ねるすべがなかつた。病院にはきつと家の者が附き添ひに行つてゐるんだらう。そんな所へうつかり訪ねて行つて、女に迷惑をかけてはならない。自分はとても表立つて旦那といふ者になる程の金力を持つてゐない。自分はどこまでも蔭にゐなければならない人だ。隱れて思はなければならない身の上だ。病院のやうな人目の多いところへとても出て行かれる境遇ぢやない。
正雄はかう思ふと、もういつせつ子に會へるか分からないやうな氣がした。

精院に鳥越の樂山堂病院であつた。女の寐てゐる場所が自分の家に近いといふ事は、正雄がせめてもの喜びであつた。正雄は毎晩のやうに二階の窓から鳥越の空を眺めた。

芝居はその頃やはり新富町でやつてゐた。三月の出し物は都新聞の續き物と極つたが、座附の狂言方が書いた臺帳が、如何にも冗漫なので、どうしても正雄が全部書き代へなければならぬ事になつた。そんな事で正雄は大分紛れてゐたが、それでもせつ子の事を思ひ出さない日は唯の一日もなかつた。正雄は忙しい最中でも、日に一度はきつと見舞の手紙を書いた。

或晩、稽古の歸りに正雄は龍井の弟子の浪山といふ下廻りを連れて、玄冶店の菊水といふ鳥料理をする家へ上がつた。

正雄は一度も來た事のない家へ來て、一度も呼んだ事のない藝者を呼んだ。正雄は少しでも今の境遇を忘れようとしたのだが、浪山が一人ではしやいでゐるのを見ると、結果は却つて反對になつて來た。

正雄はたまらなく寂しくなつて、飲めぬ盃を幾度か重ねた。藝者達は正雄が默つて飲んでばかりゐるのを見て、餘程の上戸とでも思つたのか、干すとは注ぎ、干すとは注ぎした。

浪山の肩につかまつて、玄冶店の路次を出ると、正雄は自分の足元の危ないのに驚いた。

「先生、隠してゐらして大分上がれるんですな。」

「どうもこの頃少し飲めて來たよ。こなひだも龍井さんと龜清で大分飲んだが、あの時はちつとも醉

はなかつた。今夜はどうしたんだか、參つちまつた。」
「そりやあ、あつしといふ者がゐるからでさあ。どうか度々お連れなすつて。」
と言ひながら、師匠の龍井がするやうに、平手でぴしやりと額をぶつた。
「時に近頃せつ子さんはどうしましたえ。」
龍井が福井さんから聞いたのを、浪山は又龍井から聞いて知つてゐるのである。
「病院へはひつてる。」
「へえ。何處が惡いんですね。」
「痔ださうだ。」
「痔なら家の前の病院へはひると好いんだがなあ。」
「なんて病院だね。」
「樂山堂病院。」
「へえ。君はあんなところにゐるのか。」
「直ぐ筋向うでさあ。」
「さうか。ちつとも知らなかつた。實はその樂山堂病院にはひつてゐるんだ。」
「せつ子さんがですか。へえ。不思議ですな。大抵あすこへ知つてる人がはひると直ぐに分かるんで

すか。へえ、さうですか。ちつとも知りませんでした。」

しきりに首を振る湯山の顔を見ながら、正雄はふと或事を思ひついた。

「すると君は毎日のやうに病院の前を通るんだね。」

「通るも通らないもありません。家に坐つてても見えるんです。」

「ぢやあ、君済まないが、僕に用を頼まれてくれないか。」

「何かおことづけですか。」

「いや、實はね、僕見舞に行きたい行きたいと思つてるんだけど、なにしろどんな奴が側に附いてるか分からないから、又何か言はれても煩さいと思つて、今日まで未だ一度も行かなかつたんだ。若し君が僕の代理に行つてくれれば、非常に都合が好いんだがなあ。君なら若しばつが悪かつたら、師匠の代理だとでも何とでも言へるだらう。」

「ようがす。參りませう。今夜直ぐ參りませう。」

「今夜は遅いから廢し給へ。もう九時だもの。」

「なあに、あの病院なら知つてるから大丈夫です。それに今頃行きやあ却つて邪魔者がゐなくて好いかも知れません。」

「さう言やあ、まあさうだね」

二人はちやうど藥研堀を歩いてゐた。正雄はとある大きな菓子屋へはひると、
「何か綺麗な入れ物へはひつた菓子はありませんか。」
と、言つた。
二人は彼か是かといろいろに迷つた揚句、トランクの形をした鐵葉の箱にチヨコレエトクリイムが一杯はひつてるのを選んだ。
「見舞に行くなあ好いが、あんまり下らない事を言つちやあ困るぜ。」
「大丈夫です。大變心配をしてゐらつしやいますから、お大事になさいましとか何とか言つて來りやあ好いんでせう。」
「それで澤山。それで澤山。」
それ以上の事は頼みたいにも頼めなかつた。

明くる日、稽古場で浪山に會ふと、正雄は直ぐゆうべの樣子を聞いた。
「行つたかい。」
「參りました。」
「會へたかい。」

「會へました。」
「よくあんなに遠く行つて會へたねえ。」
「看護婦に知つてるのがあるもんだから、頼んで通して貰ひました。」
「どんな工合だつたい。」
「あつしが這ひると、寐てるやうでしたがね。看護婦に聲をかけられると、直ぐ起きてびつくりしたやうな顔をしてゐましたつけ。」
「側に誰もゐなかつたのかい。」
「お蔦さんのやうな人が一人ゐました。」
「それつきりかい。」
「ええ。それつきりのやうでした。」
「それから、僕に頼まれて來たつて言つたのかい。」
「ええ。そしたら大層喜びましてね。くれぐれもどうか宜しく言つてくれつてね。」
「貰つてつた物は出したのかい。」
「さう、さう、そのお禮もありましたつけ。」
「容態はどんな風だつたい。」

「大分好いさうです。もう療治の方はすつかり濟んだんですつて。」
「驚いてたらう。」
「驚いてました。」
「別に話はなかつたかい。」
「別に話はありませんでした。」
浪山の見舞は一向賴りのないものであつた。それでも正雄は一度でもせつ子に交通の出來た事を喜んだ。

せつ子が退院するといふ噂を聞いた時は、もう藥研堀に雛市が立つてゐた。病院を出れば直ぐ又家へ歸るんだらう。家へ歸れば直ぐ又商賣を始めるんだらう。商賣を始めれば又毎晩のやうに『お寺』へ行くんだらう。一體俺達は何處で會へば好いんだ。これから俺達は何處で一緒になれば好いんだ。正雄は自分がせつ子に會ひに行く場所のないのを、せつ子が病院を出て歸る家でもないやうに思ひ惱んだ。

「御不沙汰致しました。毎々御手紙有難うございます。いつも御返事差上げる筈でしたが、手紙を書

くのがやかましいものですから、それ故つい／＼御不沙汰、誠に濟みません。私は餘程宜しくなりましたゞついては一兩日の内に退院致します。しばらくの内、淺草の内へ參つてをります。又お目に掛つていろ／＼お話し致します。さやうなら。せつ子より。正樣。」

正雄はこの手紙を讀むと、ほつと息をついた。せつ子は病院を出ても直ぐは芳町の家へ歸らないのである。從つて直ぐには「お寺」へ顔を出さないのである。淺草の家と言へば、いつも話す鳥越の伯母さんの家に違ひない。伯母さんの家では、病院より尚訪ねるすべを失ふわけであるが、それでも芳町へ歸られて、「お寺」へ毎日行かれるよりは心持が好い。

正雄は人にも會はれないといふ事を、自分に會はれないといふ事の慰めにした。

しうなの所へ見舞ひ遣る事も出來ず、手紙を出す事も出來なくなつた。せめて、ゐる家の近所でも歩けたらと思つたが、それも唯ぼんやり鳥越と聞いてゐるだけで、町所も番地も一向分らなかつた。

お菊からは相變らず便りがあつた。せつ子が退院した事も、退院してから鳥越の家へ歸つた事も、一々知らして來た。併しせつ子自身から消息があつたと言ふ事は唯の一度も書いてよこさなかつた。

せつ子とお菊の間に消息がない事は、やがてせつ子と「お寺」の間に消息がない事だ。

正雄はさう思つて安心してゐたものの、やはり會ひたいと言ふ心に變りはなかつた。

その頃、正雄の母は毎年の例で、小田原へ避寒に行つてゐた。正雄は土曜日毎に母を訪ねたが、田舍へ行つて母の側にゐる間でも、せつ子の事は忘れなかつた。正雄はせつ子とお菊の間に消息がないのを知りながらも、お菊の所へ毎日のやうに手紙を出して、苦しい胸の内を訴へた。

或雨の降る晩、正雄は小田原から歸つて來た。母に頼まれた菓子を買はうと思つて淺草橋で電車を降りると、雨の中をびしよびしよ茅町の方へ歩いた。風月堂でボンボンだのカドベリイのビスケットだのを買つて、ひよいと表へ出ると、夢寐にも忘れないせつ子の姿が、飾り窓の青白い瓦斯の光に照されて立つてゐた。

「まあ。」

正雄は夢かと思つた。

「暫くだつたねえ。」

「暫くでしたわねえ。」

二人は暫く默つて顏を見合つてゐた。

「どうしてこんな所に立つてゐたの。この近所なの。」

「ええ。直ぐこの裏通りですの。伯母さんと今買ひ物にこつちの方へ來たんですけれど、どうも今こ
この家へおはひんなさる樣子があなたのやうでしたから、立つて待つてゐましたの。」

「伯母さんは。」

「あすこに待つてゐますの。」

せつ子は天王様の方を指さした。薄暗い社の石垣の側に、蛇の目をさした年寄の女らしい影が見えた。

「あんな所に待たしといて好いのかい。こつちへ呼び給へな。僕會つても好いぜ。」

「好いんですよ、構やしません。」

「併し、もうすつかり好いのかい。隨分長かつたねえ。」

「ええ、もうすつかり好いんですの。ですけど家へ歸るのが厭ですから、當分伯母さんの所にゐようと思ひますの。まだ惡いつもりにして。」

「だつて、さう長くはゐられまい。」

「ええ、でも、まだ二週間位は構ひませんの。」

せつ子は髮を小さく結つて、黒つぽい地味な着物を着てゐた。下駄も傘も飽くまで堅氣らしい好みなので、商賣人らしい風より幾倍か似つかはしく見えた。正雄はもうせつ子を藝者の一人として見る事が出來なくなつた。

「いろいろ僕は君に話があるんだが、伯母さんの家にゐる間に一度ゆつくり會ひたいもんだねえ。僕

の家へ來てくれても構はない。ちやうど母が小田原へ行つてるんで、誰も家にやゐないから。」
「ええ、伺ひますわ。あたしも一度お禮に伺ひたいと思つてゐたんですから。」
「禮なんてどうでも好いから、唯遊びに來てくれ給へ。眞面目に少し話したい事があるんだから。」
「ええ。ぢやあ明晩上がつても宜しうございますか。」
「あしたの晩、好いとも。待つてるから、きつと來給へ。直ぐこの前の横町をはひると、左つ側だから。」
「ぢやあ。御免下さいまし。」
「早く行き給へ。伯母さんが待遠しいだらう。」
正雄は遠くから、せつ子の伯母に頭を下げた。せつ子の伯母も遠くから正雄に挨拶をした。やがて姪と伯母は傘を並べて、須賀橋の向うへ隱れてしまつた。

正雄は待合といふ機關もなく、藝者屋といふ媒もなしに、計らず往來でせつ子に會つた事を、何よりも痛快に思つた。もう何が邪魔をしても好い、誰が妨害しても構はない。二人はきつと會へるのだ。會へる運命を持つてゐるのだ。『お寺』も入らない。お菊も入らない。電話もいらない。箱屋も入らない。二人が世の中に存在を續けてゐる限りは、二人はきつと何處かで會へるのだ……

三十二

明くる日の晩、せつ子は約束通り正雄の家へ訪ねて來た。前の晩會つた時よりも餘程きちんとした裝をして來たのであつたが、ハイカラに結つた髮の形にも、紋の小さな黑縮緬の羽織にも、衿に締めた翡翠の帶止にも、袖をこぼれる長襦袢の柄にも、それ者らしい匂があつた。正雄はインキで汚れた棚や本で埋まつた壁を見廻して、背景と人物が如何にも調和しないのを、可笑しくも思つたが、また嬉しくも感じた。

せつ子は鳳月堂の大きな折を持つて來た。そして濱山が代理で見舞に行つた時の禮を述べた。

「丁度うとうとしてゐましたの、なんだか聞き馴れない男の聲がすると思つて、眼を明くと、直ぐ寢臺の前に濱山さんが立つてゐるんでせう。あたしあい方をよく知らないもんですから、びつくりしましたの。」

「失敬、失敬。あの時は全く醉つた紛れにいたづらをしたんだ。さぞ迷惑をしたらうと思つて、あとで心配したよ。」

正雄はせつ子に話したい事が澤山あつた。どれから話して好いか分からない程澤山あつた。

「何かお話さうなあ。さうさう『お寺』の一件からでも話さうか。君、知つてるかい。僕の『お寺』

で断られた話を。」

「ええ、なんだかそんなお話を伺ひました。」

「どういふわけであんな事をするんだらう。何か君の事で不都合な事でもあるのかしら。」

「いいえ、そんな筈はありませんわ。」

「ほんとにないかい。隠さずに言つてくれ給へ。」

「隠しやしませんわ。あたしも不思議に思つてゐるんですの。きつとお母さんがおかみさんに言つたんでせう。」

「さうかねえ。それ以来僕はすつかり考へちまつたんだ。」

「何をお考へなすつたの。」

「どうせあんな家に受けの好い程金を使ふ事も出来ないんだし、又とてもそれ程金持になれる気遣ひはないんだ。例へば君だつても、僕に若しそれだけの力があるなら、旦那にでも何にでもなつて、保護して行きたいと思ふんだけど、とてもそんな事は出来やしない。だからもう僕ばかりの金で遊んだりなんかするより、それだけの金でも君の小遣の足しにして上げたいと思つてゐるんだ。もう僕は護者として君を取扱ふのが苦痛になつて来たんだ。妹とも思ひ、姉とも思つて、君の力になりたくなつたんだ。どうかそのつもりでこれから先きつきあつてくれ給へ。どんな事でも僕の力で出来る事はする

から、遠慮なく相談してくれ給へ。」

せつ子は唯默つて頷いた。

「この商賣をしてゐる以上はどうも爲方がない。藝だけで賣るなんて事はとても出來る事ぢやないんだから、旦那を持たうと何をしようと、決して僕はそんな事はぐづぐづ言やしない。僕は飽くまで蔭に隱れてゐて、君の事を心配してれば好いんだ。時機が來て、君の體が自由になつた時、萬一君が僕のやうな者の所へでも來て遣らうといふ氣が起つたら遣つて來給へ。僕は喜んで迎へるから。」

正雄は飽くまで自我を沒したやうな口吻を用ひたが、その詞の奧には、飽くまで自惚れた、蟲の好い、一人極めな調子があつた。それでも、せつ子は別に厭な顏をしなかつた。

「あたしもまだ當分人の體ですから、どうにもしやうがないんですの。自分の體にさへなればどうにでもしようと思つてるんですけど。」

「だから出來るだけ稼いで、一日も早く自由な體になり給へ。僕もそれまでに勉強して相當な暮らしの出來るだけにはして置くから。」

正雄は既にせつ子との間に、何か堅い約束でも出來てゐるやうに話した。併し、せつ子は別にそれを迷惑に思ふやうな樣子もなかつた。

せつ子の口から責任のある詞を聞くよりも、せつ子のさうした樣子を見るのが、正雄には嬉しかつ

た。口へ出して言ふ確らしい詞よりも、如何にも世を憚ると言つたやうな慎ましげな様子が、幾倍正雄には頼もしく見えたらう。

せつ子は三十分ばかりゐると、もう歸らなければならないと言ひ出した。正雄はそこまで送らうと言つて一緒に家を出た。須賀町の通りへ出るまで二人は成るべく暗い道を歩いた。

通りへ出ようとする時、正雄は幾度か出しそびれてゐた、なにがしかの紙包を、せつ子の手に握らせた。

「一度見舞に行かう行かうと思ひながら、たうとう行けなかつたから、これは本のお見舞だと思つて。」

せつ子は直ぐ紙づつみを押し戻した。

「どうかそんな事をなさらないで。あたし入る時には入るつて言ひますから。」

「そんな事を言はないで取つとき給へ。心配する程の物ははひつちやゐないんだから。」

「でも、それはどうしても頂けませんわ。」

女は男が又握らした紙包みを、又男の手へ押しつけた。

「僕は妹にお小遣でもやるやうな氣持でこれを君に上げるんだよ。決して君を藝者だと思つて、旦那が小遣でも渡すやうなつもりで上げるんぢやないよ。だから僕は平氣でこんな事をするんだ。どうか取つといてくれ給へ。妹が兄さんに小遣を貰ふんだと思つて。」

正雄は無理にせつ子の帶の間へ紙包みを押し込んだ。女は已むを得ずその儘歩いた。須賀町の通りは夜店で明かるかつた。

「誰に見られないとも限りませんから、あたしここで失禮します。」

「だけど、君、大丈夫かい。」

「ぢやあ、あたし向う側を歩いて歸りますから、あなたこつち側を歩いて入らして下さいましな。」

二人は電車道を間に挿んで、向う側とこつち側の人道を離れて歩いた。男は女の姿が柳の蔭に隱れたり、夜店のカンテラに明かるくなつたりするのを、眼も放さずに見ながら歩いた。女も二三度男の歩いてゐるのを見て笑つた。

須賀橋の袂まで來ると、正雄は立ち留まつて、せつ子が暗い横町へ消えてはひつてしまふまで、ぢつと見送つてゐた。

三十三

二週間程經つと、せつ子のところから、芳町の家へ歸つたといふ知らせが來た。

ついそのふまで、もう「お座敷」といふやうなところでは係り合ふまい。「お座敷」などで會はなくても、二人の世界は別にあるといふ風に信じてゐた正雄も、女が「お座敷」でなければ會へない境遇

に歸つたと知ると、もうゐても立つてもゐられなくなつた。

併し、彼はもう『お寺』へ行く事は出來なかつた。新布袋家で會ふといふ事は若太郎に對する良心が許さなかつた。彼はこの二軒より外、知つてる家を持たなかつた。

正雄は或卑しい考へを起した。福井さんを誘ひ出して、一緒に行くより爲方がないと思つたのである。正雄はこれまで數へ切れぬ程、福井さんと一緒に方々のお茶屋へ行つたが、自分の方から福井さんを誘ひ出した事は唯の一度もなかつた。それがこの日は初めから誘ひ出すつもりで『濱町の家』を訪ねたのである。正雄はもう手段を選ぶ暇がなかつた。

正雄は首尾よく福井さんを連れ出して、首尾よく『お寺』の門を潜つた。併し、正雄が會はうとした人は幾度掛けても終に來なかつた。

「あの人だけはどうしても呼んぢやいけないつてお帳場で言ふんです。」

お菊は正雄が便所へ立つた時、廊下でそつとかう言つた。

正雄はもう斷然こんなところへは來まいと思つた。こんなところへ來ないばかりではない、もうあんな女にも會ふまいと思つた。自分は欺されてゐたのだ。おもちやにされてゐるのだ。指の先で三番叟を踊らせられてゐるのだ。せつ子の言ふ事も當てにはならない。苟にも自分の客が理由もなく斥かれてゐるのに、それをどうする事も出來ないといふ法はない。それ位の事をどうする事も出來ないの

は、自分に弱みがあるからだ。男に對する情(じやう)が足りないからだ。
福井さんを誘ひ出した正雄は、福井さんをせき立てるやうにして、「お寺」の門を出た。
それでも二三日すると、正雄は又せつ子に會ひたくなつて來た。どうかして何處かで會ひたいものだと思つて、色々に頭を痛めた。

三十四

正雄はたうとう水谷の一座と手を切つた。「自分が芝居から學ばうと豫期した事は一つも芝居の中に見出だされなかつた。自分が芝居の爲に盡さうと豫期した事は、一つも芝居が用ゐてくれなかつた。」正雄が前閑橋の伯父さんに述べた理由はかうであつた。自分の頭が水の流れるやうに進むに連れて、いつまでも一つ所に頭の停滯してゐる芝居が、正雄にとつて面白からぬものになつたのは事實である。正雄は多くのしかつめらしい、しかも莫迦らしい爭論を芝居の中で聞いた。正雄は座長の權威といふものに、滑稽な人生の反語を讀んだ。正雄は役者の藝術的意見よりは、大道具や[illegible]の職人的苦心に教へられるところが多かつた。
「乳姉妹(ちきやうだい)」といふ芝居をやる時だつた。平磯海岸の場の背景に、大道具は夕日に赤く燃える雲と、その雲の映る青い海とを書いた。座長は道具調べの時、この背景を見ると、顏を赤くして怒つた。

「こんな赤い海が何處にあるもんか、お前達は海といふものを見た事がないのか。」

大道具は二三度座長に逆つたが、終には莫迦々々しいといふやうな顔をして默つてしまつた。そして、その晩徹夜で赤い海をすつかり青く塗り直してしまつた。赤い空だけは元の儘にして置いて。

明くる日は初日だつた。座長は平磯の場の明く前に、高濱勇に扮裝して舞臺へ出て來た。そして、空が眞赤で海が眞青な背景を見ると、我が意を得たりといふ風に頷いた。

「これだけかける腕を持つてながら、あんな物をかくんだ。好い、好い、たまらなく好い。」

座長はかう言つて、大道具へ特別に自分で祝儀を出した。

正雄が自分の生きて働いてる所を莫迦々々しく思つたのは、この時が絶頂だつた。正雄はその晩家へ歸ると、直ぐ辭表を書いて、それを座長のところへ郵便で送つた。そして、明くる日の朝龍閑橋の伯父さんを訪ねて、伯父さんからも斷つて貰ふやうにしたのである。

併し、それは表面の理由だつた。正雄が芝居と手を切つたのには、他に隱れた理由があつた。茶屋小屋で會ふ程の女は大抵正雄を芝居者として見た。役者に使はれる芝居者、役者より下にゐる芝居者として見た。「先生は別ですわ。」などと口では言つても、人物の區別の好く分かつてるないのは明かだつた。正雄はそろそろこれに堪へられなくなつたのである。

女の中でも殊に正雄が氣を兼ねたのはせつ子である。せつ子は芝居者を相手にしさうな藝者に見え

なかつた。芝居者を友達扱ひにするには餘りに氣高い女らしく見えた。一日でも役者の噂をしなければ日の暮らせない藝者達の中で、せつ子だけは別の事を考へてゐる人のやうに見えた。正雄はそのせつ子に芝居者として見られるのが、何より辛かつた。醉つた紛れとは言ひながら、下廻りの浪山雅を、苟にも自分の代理として病院に見舞に遣つた事を、正雄は今でも悔いてゐる。

正雄は女に對する虚榮心から芝居と手を切つたのであつた。「俺は役者とは違ふぞ。」といふところが女に見せたいばかりに芝居を退いたのであつた。

正雄は得意でせつ子のところへ手紙を書いた。「僕はもう役者に縛られてゐる體ではなくなりました。僕はもうどんな高いところへでも自由に飛んで行ける體になりました。僕はもう役者と同じ地面の上に立つてゐるのではありません。」こんな事をまだ長々と書いた。

正雄はせつ子に會へなくなつてから、毎日のやうにせつ子のところへ手紙を出した。手紙を出してさへゐれば、たとひ會へなくても、二人の關係は永久に續いてゐると思つたのである。それ程、正雄はせつ子を素人扱ひにしてゐた。だから、返事の來やうが如何に少くとも、返事の文句が如何に簡單であらうとも、正雄は一向氣にしなかつた。

正雄は唯少しも僞り事なしに、「どうかして會ひたい。どうかして會ひたい。」と思ひ續けてゐた。併

し、今の正雄には、もうせつ子に會ふべき場所が一つもなかつた。

その頃、正雄は福井さんの『濱町の家』で、自分より若い三人の友達を得た。一人は福井さんの弟で、名を傳之助と言つた。一人は多さんの從弟で、名を竹二郎と言つた。一人はまだ若い背派の役者で、藝の名を市川定丸と言つた。一體に『濱町の家』は公然とは言ひながら、祕密に福井さんの足を休める家だつたのが、段々福井さんが不精になつて泊る晩が出來たり、二三日歸らないやうな事があつたりしたので、用のある本場の人が訪ねて來たり、福井さんの方から店の人を呼び寄せて用を言ひつけたりする内に、終には福井さんの弟や多さんの從弟までが、毎日のやうに學校歸りに押しかけて來て、おやつを喰べたり議論を爲合つたりする場所にしてしまつたのである。役者の定丸も背派の連中とは違つて、座敷でばかり呼ばれてゐたが、段々『濱町』が公然になつて來たので、傳之助や竹二郎に誘はれて、自分もここへ集まる人の一人になつたのである。定丸は元から傳之助や竹二郎の友達だつた。

カネ徳の傳ちやんで通つた傳之助は藏前の高等工業の建築科の學生だつた。傳ちやんは體格のがつしりした大男で、ボオトでも游泳でも柔術でもチヤンピオンの名が學生間に高かつた。眉毛の濃い、眼に威のある、口の締まつた、男らしい顏立で、いつもぼろぼろな制服を着てゐた。どつちかと言へば豪傑肌な、ちよいと見ると恐いやうな男だつたが、心は女よりも優しかつた。夜晝遊んで暮してゐる

る兄さんをも侮るやうな事は決してなかつた。「兄貴には豪いところがある。兄貴はきつと今に何かする。」と言つて、福井さんの性行の美しい點をのみ見てゐた。多さんにも親身の弟のやうに仕へた。

中學時代には或種の學生の群にはひつて、隨分亂暴もして歩いたものらしいが、本所の方の或醫者の娘に戀をしてからは、まるで人間が變つてしまつた。その娘が愈或海軍の士官のところへ嫁に行くと極つた時などは、一日一晩夜具を被つて、聲も立てずに泣いてゐた。それからホスキイの大壜を一本提げて、濱町の多さんの家を訪ねた。その晩丁度福井さんは留守だつた。傳ちやんはホスキイを生の儘大きなコップで煽りながら、多さんの膝を揺ぶつて男泣きに泣いた。それから、そこを出ると行方不明になつてしまつた。福井さんと多さんが、箱根の底倉で傳ちやんを捕まへたのは、それから六日ばかり經つての事であつた。傳ちやんは頭を剃りこぼつて、一日も部屋を出ずに谷の流れを見詰めてゐた。傳ちやんの心の傷が癒るには、それから一年の餘もかかつた。藏前の學校に入學試驗を受けてはひつた頃、傳ちやんの中學時代の同級生は、もう二年にゐたり三年にゐたりした。

竹二郎は家が佃にあるので、佃の竹ちやんで通つた。丈は高かつたが、身體が蠟燭のやうに細かつた。頬のこけた、眼の可愛い、顏の木目の細かな、如何にも柔順らしい男で、いつもとぼけたやうに口をあんぐり開いてゐた。併し、學生にしては中々おしやれで、制服でも和服でも、いつも折目正しいのを着てゐた。髭一筋髮の毛一本伸びてゐるやうな事はなく、いつも顏が明かるく光つてゐた。運

動は游泳位なものでその外には餘り遣らなかつた。學校の出來は中々好い方で、早稻田へも早くはひつた。早稻田の席順もいつも好いところにゐた。一人の女に熱烈な戀を捧げて、身も世もあられぬ悶えたといふやうな經驗は、一度もなかつた。竹ちやんはどつちかと言へば理性の勝つた聰明な學生の一人だつた。竹ちやんの戀はいつも內證に始まつて內證に終つてしまつた。戀の苦汁を甞めるまでに、戀の可笑しみを悟つてしまふ程、竹ちやんの心は老成してゐたのである。竹ちやんは自分の心の中で自由に女を愛したり捨てたりするのを喜んだ。竹ちやんと傳ちやんとは何から何まで好いコンツラストだつた。

　定丸の柳瀨は、體格も性質も、傳ちやんと竹ちやんとを寄せて二で割つたやうだつた。身幅は役者に似合はずがつしりしてゐたが、丈が低かつた。肩幅が廣く、骨節が太く、眉毛にも眼にも男らしい凛々しさがあつたが、何處かに舞臺の人らしい物優しい表情が溢れてゐた。柳瀨は傳ちやんの出た中學校へ通つてゐた。役者の子は大抵小學校を出れば、學校を廢めてしまふので、柳瀨もその例に漏れなかつたのだが、或文學博士の書いた脚本が舞臺に上つた時、親父の定十郎がつくづく自分の無學なのを悲しんで、急に息子を舞臺から退かして、年の遲れてゐるのも構はず、又中學へ通はせるやうにしたのである。柳瀨の學校生活は樂しく勇ましく美しく過ぎた。柳瀨はもう五年生になつてゐる。親父の定十郎は息子を學校へ遣るやうになつてから、一人で寂しく舞臺の上の戰ひを續けて來たが、自分

の周りに一人又一人と斃れて行く三座時代からの仲間を見ると、急に息子が戀しくなつて來た。定十郎は福井さんに相談して、福井さんから正雄に、定丸の行つてゐる中學の校長のところへ、學校へ行きながら舞臺へ出る事の許可を乞ひに行つて貰つた。學校の課業に差支を及ぼさない限り、學校の體面を傷つけない限りはと言ふ條件で、柳瀨は又舞臺の上で親父の爲事を助ける事が出來るやうになつた。柳瀨は學校が退けると、制服の儘で、芝居の樂屋口へはひる身となつた。柳瀨の樂屋には、いつも机が置いてあつた。柳瀨はその上で、幕合幕合に、英語の下讀をしたり、代數の復習をしたりした。

柳瀨が中學の一年へはひつた時、傳ちやんはもう四年にゐた。傳ちやんはその頃、綺麗な男の子を追つかけて歩く悪書生の仲間入をしてゐた。役者が學校へはひつて來るといふ評判を聞いた時、傳ちやんは體が疼くやうな氣がした。

「きつとヨカチゴだぜ。」

傳ちやんは仲間の者にかう言つて、早くその役者の顏が見たいと思つてゐた。體操の時間に、傳ちやんは始めて新入生の整列するのを見た。

「どれだ、どれだ。役者の子つて言ふのは。」

「あれだ。あれだ。後列の終から二番目にゐる、あの丈の低いのだ。」

傳ちやんは仲間の者の指さすところを見て驚いた。想像とはまるで違つた頑丈極まる男である。こ

つちが捕まへるよりは、向うに捕まへられさうな男である。傳ちやんはがつかりした。

傳ちやんは『濱町の家』で、柳瀨によくこの昔話をしては、みんなと一緒に腹を抱へた。

三人とも遊びたい盛りであつた。柳瀨はそれでも商賣柄、多少は茶屋酒の味も知つてゐたが、傳ちやんと竹ちやんは、生れてまだその匂さへ嗅いだ事がなかつた。柳瀨は自分が知つてる有名な料理茶屋の話や藝者の話を、得意になつて二人に聞かした。二人はいつも『理想』を夢みるやうな眼つきで柳瀨の話に聞き惚れてゐた。

福井さんが毎日のやうに、さういふところへ遊びに行くといふ事も二人は知つてゐた。正雄や柳瀨が福井さんに連れられて、時々さういふところへ行くといふ事も二人は知つてゐた。福井さんはいつも二人を撒くやうにして、內證で正雄を連れて出た。それも二人は氣取つてゐた。

誘惑はまだそれだけではなかつた。帮間の辨中は、時々福井さんの留守に來ては、二人に『遊び』の奥の手を說いた。『三圓五圓とちびりちびり出して、くだらねえ不見を取つ換へ引つ換へ買ふ位ばかな話はありやしません。五圓を十遍拂へて、五十圓一度に出して御覽なさい。素晴らしいのが一人出來た上に、女はいつまでも忘れやしませんぜ。』辨中はこんな風な話をして、二人の心をそそるやうにした。多さんの妹の小さとも三日に上げず濱町を訪ねて來た。さうして朋輩の噂や色町のいきさつな

どん面白可笑しく二人に話して聞かせた。水谷の一座の役者も入れ替り立ち替り「濱町の家」へ集つた。二人は又これらの人から、少しも拘束のない、自由な戀の世界の物語を聞いた。

正雄はふとこの若い二人を誘つて、料理屋へ行つて見ようかといふ氣になつた。正雄は普通の「遊び」の順序を逆にしてゐて、待合へは既に一人で行つた事があるが、まだ料理屋へは一度も自分で行つた事がなかつた。せつ子に會へなくなつてから、料理屋へ行きさへすればと思はない日は一日もないのだが、まだ一人で行くといふ勇氣がどうしても出なかつた。何か機會があつたら機會があつたらと思つてゐるところへ、若い二人の友達が行きたくて行きたくて堪らないといふ風を毎日のやうに見せるので、ふと連れ出して行つて見る氣になつたのである。

「吾々の住むところには眞の人生がない。嘘の人生があるばかりだ。僞りの人生があるばかりだ。愛したい者を愛す事も出來ず、憎みたい者を憎む事も出來ないのが、吾々の人生だ。ところが、あすこには眞の人生がある。眞の涙がある。眞の笑がある。眞の戀がある。あすこには正義の假面を被つた僞善といふものがない。謙讓の衣裳を纏つた屈從といふものがない。總てが自由だ。總てが自然だ。吾々は食べたい物を食べたい時に食べる事が出來る。飲みたい物を飲みたい時に飲む事が出來る。愛したい女を愛したい間だけ愛す事が出來る。」

正雄は二人に向つてこんな事を言つた。

「君等が今まで見て来た女は、どれもこれも舊道德に囚はれた虚榮の塊だ。あすこにゐる女達は所謂道德を守る事を社會から許されてゐない。たとひ守つて見たところで、社會はそれに向つて少しの尊敬も拂つてくれないのだ。だから、みんな自由な奔放な情の世界に躍り狂つてゐる。あすこにゐる女達にも虚榮のない事はない。併し、その虚榮は所謂婦人社會の虚榮とは大分種類を異にしてゐる。彼等は彼等の國へ籍を入れた瞬間に、世界の所謂虚榮とは緣の切れた者になるのだ。かれらの多くは如何なる「人の妻」となる資格さへ、自分にはないと諦めてゐる。況や何爵夫人だとか何々大將夫人だとかに於いてをやだ。かれらは地位と財産とに依つて、男に好惡の指を差さない。かれらは唯男の「心意氣」をのみ見る。張りと意氣地。張りと意氣地。何といふ美くしい反抗的な詞だらう。」

正雄はまだその世界を覗かない二人の若い友達より、より以上の美しい夢想に耽つてゐた。正雄は君太郎の事も小きとの事も忘れてゐた。唯せつ子の事ばかり思つてゐた。せつ子に會ひたい一心ばかりに、古い手傷の痛むのにも氣がつかなかつた。

正雄の詞はどんな誘惑にも勝つて三人の心を刺戟した。既に經驗のある柳瀬までが、まるで別な世界の話を聞くやうな眼つきをした。正雄の呪文は悉く功を奏した。

或晩、傳ちやんと竹ちやんは猿屋町の柳瀬を誘つて、代地の正雄の家へ押しかけて來た。正雄は丁

度『お菊』のお菊のところへ手紙を書いてゐるところだつた。

「手紙を書いてゐるんですね。忙しいところを邪魔して濟みません。」

　竹ちやんがこけた頬を平手で撫でながらかう言ふと、柳瀬が傳ちやんの顔を睨むやうにして、

「だから僕がさう言つたんだ。夜、家にゐれば、大概勉強なんだからつて。」

「なあに、勉強でも何でもありやしない。これは或待合の女中へ遣る手紙さ。」

　正雄がかう言ふと、三人は顔を見合せた。

「へええ。面白いなあ。小川さんは待合の女中にそんなに懇意なのがあるんですか。何處の待合です。」

　傳ちやんはびつくりしたやうな顔をして、かう聞いた。

「『お菊』さ。知つてるだらう。濱町の家の直ぐ側の。」

「ああ、あの大きな門の家ですね。あすこへは兄貴もよく行くんですつてね。いつでも車が澤山はひつてゐますねえ。」

　と言ふかと思ふと、突然、

「今夜、僕達をあすこへ連れてつてくれませんか。」

　と言ふ。

　正雄は直ぐに悟つた。三人が言ひ合せて、自分を誘ひ出しに來たのだといふ事を。

「あすこはだめだ。あすこは貴族的だから僕等のやうな書生は上げてくれやしない。僕だつて兄さんと一緒でなければ客にしないといふ風なんだ。」
正雄はここまで言つたが、自分の堰かれた話はしなかつた。
「ぢやあ何處でも好いから連れてつて下さい。實は今夜。」
と、竹ちやんが熱して何か言ひかけると、柳瀨が袖を引いた。
「みんなで僕を誘ひ出しに來たんだらう。」
と正雄が、竹ちんの言はうとした事を言ふと、
「どうして分かります。」
と、傳ちやんが驚いたやうな顏をして言ふ。
「そんな事が分からないでどうするものか。僕は人を見るのが商賣だ。」
「ぢやあ何處かへ連れてつて下さいな。何處へでも好いんですから。」
竹ちやんは懷へ手を入れて、紙入か何かを弄りながら、哀願するやうに眼を細くした。
「たうとう機會が來たな。」と正雄は思つた。よし、もうこれだけ味方が出來れば大丈夫だ。俺は何處へでも行く。何處へでも行つて、せつ子に會ふ。
正雄は自分が若い友達を誘惑してゐるのだとは氣がつかなかつた。三人は又三人で、自分達が正雄

の戀の道具に使はれるのだとは知らなかつた。

正雄は込み上げて来る嬉しさを押し隠して、態とゆつたり構へた。

「さあ、何處が好いだらう。うつかりしたところへ連れて行つて、あとで福井さんに知れると僕が面目のない人間になる。さうかと言つて、福井さんの終始行くやうな家へ行くのも、なんだか生意氣らしくて厭だ。さあ、何處が好いだらうなあ。」

と言つて、暫く考へる振りをした。その實何處ならと言ふ程の心當りも、正雄にはなかつたのである。

「兎に角、何處かお茶屋へ行く事にして、家を出ようぢやないか。待合はいけないと思ふ。あとで知れると困るから。」

正雄はかう言ひながら、立つて帯を締め直した。

四人は何處といふ當てもなしに灯を慕ふ蟲のやうに歩いた。空には五日ばかりの初夏の月が、雨を含んで懸つてゐた。薄い着物の褄をとつた、手首の白い女が、心をそそるやうな匂を殘して、幾人か四人の側を擦り抜けた。柳橋は青白い光の中に、人を何處へか誘ふ道のやうに懸つてゐた。黒い神田川は亀清の灯を倒まに映して、手招きをするやうに柔かく搖めいてゐた。四人は明るい兩國から暗い

大川端へ出た。

「何處でも好いからはひらうぢやありませんか。もう何處でも好いから。」

竹ちやんはもう堪らないといふ風で、催促するやうにかう言つた。

「こんなところはだめだよ。もつと好い家でなけりやあ。」

正雄は生稲や大釜の二階の灯を仰ぎながら、窘めるやうにかう言つた。

正雄の心はひたすら芳町へ向いてゐた。花屋敷を通り抜けて、大常磐や彌生の奥まつた灯を見せたのも、小常磐の裏通りを縫ふやうにして歩いて、小待合の軒燈の透き間もなく列んでゐるのを見せたのも、畢竟目的地へ著くまでの迂廻路に過ぎなかつた。正雄はここといふ、しつかりした當てを持つてゐたのではないけれど、成るべく芳町に近いところでなければならぬと極めてゐたのである。少くとも久松橋より西でなければならぬと心に極めてゐたのである。

廻り廻つて、四人は高砂町の河岸へ出た。ここの河岸は今まで通つて來たどの河岸よりも暗かつた。河岸の家は何れも問屋か大商人の控家といふやうなものばかりで、どれもこれも大戸を黒くおろして、靜まり返つてゐた。

このひつそりした暗い河岸に、唯一つ大きく光る青白い瓦斯の燈があつた。瓦斯燈は高い塀の上にあつた。塀の中の松の繁みを洩れて、晝のやうに明るい二階の灯が、四人の眼に映つた。

「あ、ここが好い。」

正雄は突然かう叫んだ。

「好いところが見つかつた。ここなら福井さんに知れつこがない。」

「ここは何て家なんです。料理屋ですか、待合ですか。」

「料理屋さ。高砂町の福井――俗に高福（たかふく）といふ家さ。」

「ここへは兄貴來ないんですか。」

と、律ちやんが聞く。

「どういふものだか、ここが嫌ひでね。一向來た事がないんだ。時々帽子の市（いち）や何かが立つので、さぞ下賤なのかも知れない。一つは自分の名と同じなのも嫌なんだらう。」

「併し、一流は一流なんですか。」

竹ちやんが口を挾む。

「まあ一流と言つても好いだらう。一體この芳町といふ所には、誠に料理屋の好いのが少ないんでねえ。」

その頃、福井はまだ今程繁昌んでなかつた。岡田の方が客種が好かつた。百尺（ひやくせき）の方が好い藝者がはひつた。

「ぢやあ、ここが好いぢやありませんか。」
「贊成、贊成。」
竹ちやんと傳ちやんとは、もうここに極めたといふやうな顏をした。
「柳瀨君、君は一度もここへ來た事はないかい。」
正雄はまだ決心のつかない顏つきで、瀨柳にかう尋ねた。
「いいえ、一度もまだ。」
「ぢやあ何好いや。はひりませう、はひりませう。」
「贊成、贊成。」
竹ちやんと傳ちやんとは頻に正雄を急き立てた。
「だが、僕もまだ知らない家なんだから。」
「知らない家だつて、金さへ拂へば好いんでせう。さ、はひりませう、はひりませう。」
勇氣のない正雄は、みんなに後から押されるやうにして、福井の暗い路地へはひつた。忽ち明かるい玄關が眼の前に開けた。小柄な色の白い女中が、眼の前に手をつかへてゐる。
「お幾人様で入らつしやいます。」
「四人だ。何處かあるかい。」

「ちよいと、どうか。」

と言ひ捨てて、女中は奥の方へ走つて行つたが、直ぐ又引返して出て来ると、

「どうぞ、こちらへ。」

と言つて、四人の風體を不思議さうにじろじろ見ながら、表二階の狭い座敷へ案内した。

「唐二階か。ちと虐待の氣味だね。」

と正雄は嘲るやうに言つた。門口であれ程はひるのを躊躇した男が、一旦はひつてしまふと、もうこんな大胆を極めるのである。これが正雄の癖であつた。

「虐待でも何でも構ふもんですか。好いから早くあなたの所謂「自由な情の世界に生きてゐる女」を呼んで下さい。」

傳ちやんがかう言ふと、

「賛成、賛成。」

と、今度は竹ちやんが相槌を打つた。

女將が来た。とく子が来た、とく子の親友だとかいふ駒吉といふのも来た。

「まあ暫く見えね。」

「まあ、お珍しい。」

繭吉といふのも、かねがね正雄の噂を聞いてゐたといふので、もう前から呼ばれてゐる人のやうに親しげに口を利いた。

「繭ちやんは暫く休んでゐたんですけど、つい五六日前から又出ましたの。別に景物はつけませんけれど、開店早々ですから何分宜しく。」

と、とく子はへうけた口の利きやうをして、肥つた身體を苦しさうに屈めた。

正雄は知つた顔が殖えて來ると、益々元氣づいて來た。

「それでは僕の方でも御紹介いたします。これが木場の信ちやん、ふだんがお堅さうな書生さんですが、女には至つて優しい方です。ちよいと六代目に似てゐませう。それから、これが個の竹ちやん、中々意氣なお方です。その次は皆さん舞臺で御存じの栢湖君。みんな僕の仲の好いお友達です。別に景物はつけませんが。」

と言ひかけると、

「開店早々ですから何分宜しく。」

と一齊に言つて、三人一緒に頭を下げた。

そこへ一番遅れてせつ子が遣つて來た。正雄は夢寐にも忘れない、懐しいせつ子に、殆ど二月目か

三月目に會へたので、愈興奮して來るばかりである。

「この先生は戀の病で、暫く入院してゐたんですが、近頃漸く癒つて出て來たんです。」

正雄がかう言つて、せつ子を主人に紹介すると、傳ちやんは直ぐ眞顔になつた。

「すると、その戀は成功したんですね。」

「どうだい。お靜さん。」

と、正雄はせつ子の本名を呼びながら、意味ありげにぢつと女の眼を見つめた。せつ子と正雄との關係は、傳ちやんも竹ちやんも押川も全く知らないのである。とく子や時松も恐らくはまだ知らないのである。

「どうでせうねえ。」

と言つて、せつ子は可愛い眼元で謎のやうに笑ひながら、態と考へるやうな振をした。

「ちやあ、どうして癒つたんです。」

傳ちやんは益眞顔になつた。

「あたし切開(せつかい)をして貰ひましたの。」

「戀のですか。」

「切つて捨てつちまつたんですとさ。」

と、とく子が又へうけた事を言つて、面白さうに、帯を叩いて笑つた。話はそれで滅茶々々になつてしまつた。

藝者の顔が揃つて、みんなの身分が分かると、俄にお茶屋の待遇が變つて來た。柳瀬が定丸だといふ事が分かつたのも、勿論その大きな原因の一つだつた。

正雄の一座は、表二階から次の間附きの奥二階へ移された。二人の女中が三人になる。座蒲團が變る。膳が變る。傳ちやんや、竹ちやんは手を打つて喜んだ。

「優待、優待。」

「萬歳、萬歳。」

「かうなると、僕等も着物でも着換へなければならない事になるね。」

と正雄が言ふと、

「生憎着換へをお持ちにならなかつたでせう。」

と、とく子が冷かすやうに言ふ。

「莫迦にしないのねえ。お客様を藝者扱にして。」

時松は窘(たしな)めるやうに、とく子の脊中を平手で打つた。

「義者振ひ、結構です。そこには眞の人生がある、そこには眞の悲しみがある、ですか。」

と、傳ちやんは毒を含みながら、笑つて正雄の顏を見た。

「何の事なの、それは。」

と、とく子が眼を丸くして訊く。

「君達を褒めてゐるのさ。」

と、柳瀬が笑ひながら言ふ。

「なんだか演說見たいね。」

傳ちやんも竹ちやんも、親讓りで中々酒は强かつた。ふだん餘り行ける口でない正雄と柳瀬も、その晩は大分飲んだ。

「痛快、痛快。」

傳ちやんは無暗にかう呶鳴つて、拳固で膝を打つた。それを見ると、竹ちやんは、

「嬉しい、嬉しい。」

と、黃いろい聲を出して、平手でこけに頰をびしやびしや叩いた。

「一週間に一度位かういふ會を遣るのも好いね。」

と、柳瀬が言ふと、

「是非遣らう」

「是非遣らう。」

と、傳ちやんと竹ちやんは直ぐに贊成した。

やがて、四人の藝者に一人々々符牒が附けられた。とく子は本名をお玉といふので、ボオル。時松は下の一字を譯して、パイン。駒吉は上の一字を譯して、ポニイ。せつ子は羅馬綴りの頭字を取つてS。

「S君。S君。」

「ポニイ君、一つ上げませう。」

などと、出來たての符牒が盛んに用ひられた。

傳ちやんは、あんまり拳固で疊を叩くので、人差指だの中指だの關節から血をたらたら流した。おとなしい時松は小菊を裂いて、側からそれを縛るのであるが、それでも傳ちやんはやつぱり疊を叩いた。白い紙は直ぐと又赤く血に染んだ。

竹ちやんは、とろりとした眼をして、駒吉の膝に肱を突きながら、定丸の聲色を定丸に聞かせてゐた。

四臺の車が、死人のやうに醉ひ潰れた四人を載せて、木場と佃と淺草の三方へ分かれて出たのは、それからまだ一時間も經つてからであつた。

三十五

それから正雄は毎晩のやうに、高輪へ通つた。四人一緒の事もある、三人の時もある、二人の事もある。併し、正雄の加はらない晩は一晩もなかつた。

その内、一つ所ではつまらないといふので、新葭町の百尺へも行くやうになつた。ここにも福井さんが險い顏を爲ないといふところで、正雄に選ばれたのである。

正雄は俄にせつ子に會ふ道が方々に開けて來たので、一晩でも家にぢつとしてゐる事が出來なくなつた。彼は成るべく福井さんのゐさうもない時刻を見計らつて、「濱町の家」を訪ねた。そして、そこで偉ちやんだの竹ちやんだの梅瀬だのと落ち合つた。多さんは、みんながさういふ意味で毎日のやうに集まつて來るのを知つてゐたが、それらしい事は少しも福井さんに話さなかつた。

正雄の好な藝者は、大抵外の三人にも氣に入つた。併し誰は誰、誰は誰といふ風に野心を起す者は一人もなかつた。正雄は存外みんなの遊びの綺麗なのに驚いて、或晩自分とせつ子との關係を殘らず圓に打明けた。木場での初めての首尾。『お寺』での苦しい逢引。お菊の事。せつ子の病院生活。「お

寺』で擯かれてから暫く會へずにゐた事。そして最後にかう言つた。

「はじめは浮氣で始まつたんだが、今では大分眞劍になつてるんだ。だから、どうか笑はずに、そのつもりで見てゐてくれ給へ。」

正雄の話はかなり自惚(うぬぼれ)の強いものだつたが、それを聞いた三人は一向「當てられた」といふ様子は見せなかつた。三人は眞面目に正雄の戀の幸福を祈つた。そして、急にせつ子を尊敬するやうになつた。

その內、とく子や時枝にも打明けなければならない時が來た。せつ子が番町の方へ「お宅行(たくゆき)」で行つてて來られなかつた晩、二人は散々に正雄を責めつけた。側にゐた傳ちやん竹ちやんも、告白の勇ある男らしい事を說いた。正雄が頭を抱へながら「實はさうだよ。」と言つた時、とく子と時枝は、實は吾々も疾(とう)からさう思つてゐたのだと言つた。

「隨分ねえ、今まで隱してゐて。」

「ほんとに隨分だわねえ。知らん顏をしてゐて。」

こんな詞が恨めしげに二人の口から出た。併し、それは唯口の上だけの事で、正雄とせつ子との戀は、女の方面にも幸福を祈られた。それ程二人の關係は似つかはしく見えたのである。調和して考へられたのである。

た。偶には友達を出し抜いて來る事もあつたが、さういふ時には、きつと側にとく子か時枝がゐた。正雄は時々堪へ切れなくなつて、人が側にゐるのも構はず、謎をかけるやうな事を女に言ふのであつたが、せつ子はいつもさういふ時、分からないやうな顔をして、態ととんちんかんな返事をした。

正雄はやはり「お寺」のお菊に頼るより外に爲方がなかつた。正雄は一再ならずお菊の態度を疑つたが、この胸中の悶々を口でなり書いてなり訴へるところは、やはりお菊より外になかつた。正雄は毎晩のやうにせつ子の顔を見てゐながら、會つてせつ子に言ひたい事は、悉く書いてお菊に送つた。

お菊は正雄の手紙を受け取る度に、一々忠實に返事を書いた。お菊のゐる「お寺」では濫に客と文通する事がやかましい。殊に正雄はそこの帳場に斷られた客である。お菊は帳場や朋輩の眼を偸んで、寢床だの便所だの車の上だので筆を執つた。さういふ苦しい中から返事をくれるといふ事が、既に正雄には嬉しかつたのに、お菊の手紙にはいつも希望が充ち滿ちてゐた。お菊の手紙に依れば、せつ子がお菊に會ふ時は、きつと正雄の噂をするのである。その噂は正雄の胸を躍らせるやうな事ばかりなのである。お菊は飾りのない文章で何から何まで落ちなく書いてよこした。

正雄はせつ子に言ひたい事をお菊に言ひ、せつ子から聞きたい事をお菊から聞いて僅に苦しい胸を透かしてゐたが、それももう終には堪へられず不滿足になつて來た。「けふS君に會つた。」といふ書き出しで、正雄は何度手紙を書いたらう。「今晩Sさんが來ました。」といふ書き出しの手紙を、正雄は何

度受け取つたらう。こんな事をいつまで續けてゐたら好いのだ、こんな事を續けてゐてどうなるのだといふ考へは、毎日のやうに正雄の頭を苦しめた。

正雄はせつ子に會へば會ふ程、お菊の手紙を受け取れば受け取る程、この不滿足に苦しめられた。

三十六

正雄の不滿足は直ぐとお菊にも知れた。

或日お菊からかういふ手紙が來た。この頃毎日のやうにせつ子が「お寺」へ來るので、その度毎に少し宛でも話をするやうにしてゐるが、どうも思ふやうにゆつくり話が出來ない。そこで、せつ子とも相談して、この頃に是非何處か人の氣のつかないところで、一緒に御飯でも喰べながら、暫くぶりでしみじみ三人で話がしたいと思ふが、あなたの都合はどうだらう。兩國の寄席の立花家の裏に、一寸人に知れない、手輕な小料理屋で若村といふのがあるが、そんな家ではどうだらう。そこなら自分も知合であるし、總てが便利だらうと思ふ。せつ子にも既に話した。こちら二人の都合はこの次の日曜日が好い。時間はお午頃からにしたいと思ふが、どうだらう。實は前から話したい話したいと思つてゐた事もあるのだが、どうも手紙などでは委しい話が出來ない。いつか一度は「お目にかかれる時節」もあるだらうと思つて、今日までなんにも言はずに來たが、たうとうその機會が來た。これには

色々深い事情もある事だから、會つた時に委しく話す。お菊は繰り返し繰り返しこんな文句を列べて來た。

正雄は愈自分の希望が熟して來たやうに思つた。思へば、去年の冬に、水神の森の暗い夜に、始めてした嬉しい首尾は、例へば氣紛れな火が、側へ飛んで來た薄い紙片に燃えつくやうなものであつた。併し、その紙片は、その夜の風に灰になつて、飛んで散つてはしまはなかつた。冷めて土となるべき灰の底には、いつまでも隱れて消えぬ暖もりがあつた。この暖もりは段々に熱度を增して、終には灰その者が熱い火であつた。淺く燃えた火は、いつか深く燃える火に代つたのである。男はこの熾烈な火を、僅に半月か一月女の胸に托す事が出來た。男は忽ち女の聲をさへ聞く事が出來なくなつた。男は徒に燃え上がる炎を、幾月も幾月も、唯我一人の胸に抱いてゐなければならなかつた。運命は更に男を弄んだ。男は偶とした機會から、再び女に會へるやうになつたが、今度は女に會ひながら、女と一緒に戀の火を抱き合ふ事が出來なかつた。男が女に會ふ爲に使つた手段は、いつか二人の心を隔てる墻壁になつてしまつたのである。男は女の顏を眼の前に見ながら、一人で胸の火を抱へてゐなければならなかつた。かうした正雄の苦しい胸に、思ひもかけぬお菊の消息は、どんなに凉しく響いたらう。正雄は直ぐと承知したといふ返事を出した。

當日は直ぐに來た。正雄は朝起きるからそはそはして、何處か非常に遠い所へでも出かける前のやうな心持でゐた。彼は日と鼻の間の南國へ行くのに、三十分も一時間もかかるやうな氣がして、もう十一時頃には家を出てしまつた。裝(なり)は相變らずの書生風で細な絣の單衣にセルの袴を穿いただけである。もう九月も末で、伊香保や大磯へ行つてゐる藝者もそろそろ秋の稼ぎに歸つて來る時分である。

正雄はやつと人一人歩けるやうな狹い路地を、あつちへ曲つたりこつちへ曲つたりして、漸くお菊の手紙に書いてある家を見つけた。そこははひると直ぐ階子段があつて、階子段の直ぐ横が料理場になつてるやうな小さな家であつた。

お菊はもう來てゐた。女中に案内されて階子段を上がると、二階は存外廣くて涼しげであつた。幾つかの小座敷が、悉く襖を拂はれたものと見えて、廣い座敷を圍が幾つにも仕切つてゐた。

お菊は緣側の障子に凭れて、ぼんやり近所の物干を眺めてゐたが、正雄が來たのを見ると慌てて居ずまひを直した。相變らず頭は丸髷で、手絡(てがら)は水色の絞りをかけてゐた。

「暫く。」

「暫く。」

待合茶屋での出會ではあつたが、一別以來の挨拶は極めて短かつた。二人は毎日のやうに手紙の遣り取りをして來たので、昨日も一昨日も會つた人のやうに話をし合つた。

間もなくせつ子が來た。黒つぽい縞明石を素肌に着て、白博多の帶を貝の口に結んだ風情は、きまつた裝をして來る『お座敷』よりも同じ人を美しく見せた。

女中の運んで來る膳を、お菊は涼しさうな所を選んで二つ列べた。さうして、自分の膳をその二つに向ひ合ふやうにして置いた。

お菊は正雄とせつ子が列んで箸を取るのを、子供がお雛樣でも見るやうに見ながら、自分も嬉しさうに箸を取つた。お菊は女中を下へ立たせて、自分でみんなのお給仕をした。

併し、正雄が豫期して來たやうな話は、一向出なかつた。お菊は正雄に傳ちやんや竹ちやんの事を聞いた。せつ子は正雄にとく子や時松の噂をした。正雄はもつと肝心な話があるだらうのに、早くそれをすれば好いと思つたが、二人は少しもさういふところへ話を持つて行かなかつた。

食事は碌に話のない内に濟んでしまつた。お菊は座蒲團を風の來る窓の側へ持つて來て、そこへ二人を坐らせた。窓の下にはがらりとした寄席の疊が、柔術の道場か何ぞのやうに見えて、そこから來る風がひやりと冷たかつた。

正雄は今こそお菊の口から、『お寺』で自分の斷られた『事情』が聞かれる事であらうと片唾を呑むやうにして待つてゐたが、お菊はやつぱり二人の顏を、唯にこにこと嬉しさうに眺めてゐるばかりで、そんな話をしようといふ氣振さへ見せなかつた。正雄はお菊があんまり落ちついてゐるのに氣を

呑まれて、自分の方から聞いて見ようといふ氣になるのをさへ忘れてゐた。

その内に、もう時間が来たから、自分だけ先へ歸る、せつ子はまだゐても好いのだから、後でゆつくり話をしろと言ふやうな事を言つて、お菊はどんどん歸つて行つてしまつた。正雄にはもうお菊を留めようとする力さへなくなつてゐた。

正雄はせつ子と二人きりになつた。お菊は話すべき事を話さずに歸つても、せつ子には話したいだけの事を話さずには歸るまい。二人で話をするといふ機會は、待ちに待つて、やうやう来たのである。そうして、この機會は再びいつ来るか分からないのである。正雄はたゞ二人きりであるといふ嬉しさを味はひながら、女がいつ口を開くか、いつ口を開くかと、胸を躍らせて待つてゐた。

併し、せつ子は一言も正雄が待つてゐるやうな事を言はなかつた。女は唯嬉しさうに笑ひながら、時枝と一緒に興津へ行つた時の話だの、同僚總出で多摩川へ鮎獵に行つた時の話だのをした。

正雄も初めはいらいら氣を苛立てたが、女の話が餘りに安らかに穏かなので、もう總ての話が濟んでしまつた後のやうな安心と希望とが次第に胸の内を領めて来た、終には自分もその他愛のない話を嬉しさうに笑ひながら聞くのであつた。

その内にせつ子も、もう時間が来たからと言つて、立ち上がつた。正雄は路地の口までせつ子を送つて出たが、そこで二人は右と左に別れた。せつ子は鶸鼠茶の水色の影を白い帯の背に落しながら、

米澤町の葉茶屋の角を曲つて、藥研堀の不動の方へ後も振り返らずに隱れてしまつた。

正雄はこの日の會見に依つて、少しも『確な或物』を掴む事は出來なかつたが、それでもかういつた會見には、會見その者に意味があるやうな氣がして、自分と女との間に或新しい堅い基礎が出來たやうに思つた。

正雄はその日の會見を、思ひ出しては滿足した。滿足しては思ひ出した。

三十七

併し、その滿足は長くは續かなかつた。藥を嗅がされて眠つた人が、次第に知覺を取り返して來るやうに、正雄も漸く夢のやうな滿足から、現實の限を覺まして來た。

正雄はせつ子の詞なり行動なりから、どうしても『確な或物』を掴まなければならないと思つた。さう思つて、彼は又毎晩のやうに高禍や百尺へ出かけた。手紙も前よりは一層繁々出した。併し『お座敷』では相變らず妨げがあつた。偶一人と一人になるやうな事があつても、せつ子は深く慮るところがあるやうな樣子で、いつも話を冗談にしてしまつた。勿論、手紙の返事といふものを、せつ子は一向書いてよこさなかつた。偶よこしても、それは極短い通り一遍の挨拶に過ぎなかつた。尤も返事

は書かなくても、正雄の顔は毎日見るのだから、その時「有難う。」と一言禮を言つてしまへば、それで濟むわけなのである。正雄はそれに對して少しも不平を言ふ餘地がなかつた。

正雄は忽ち金に窮して來た。今までは毎日のやうに茶屋の軒を潜つたのが、三日に二日は家にゐなければならないやうになつた。それでも、三日に一度行ける内はまだよかつた。三日に一度が五日に一度になつた。五日に一度が一週間に一度になつた。

毎日會つてゐてさへ不安で堪らない正雄は、かうなると愈せつ子の身の上が氣になつた。彼はどうかして、少しでも多く女の顔を見ようとしたが、もう傳ちやんにも竹ちやんにもそれを助ける力はなかつた。二人も同じく窮してゐたのである。

正雄はお宿から來る手紙で、せつ子の動靜を一日も缺かさず知らうとした。「けふは一度も顔を見せませんでした。」といふ日があると、正雄は何がなし不安の念に襲はれた。前にはせつ子が「お寺」へ行くのを氣にし抜いた正雄も、今ではせつ子が「お寺」へ行くのを望むやうになつた。日に一度「お寺」へ行つてさへくれれば、きつとお宿から消息が聞かれたからである。

正雄はせつ子が連中で芝居見物に行く日をよく調べて知つてゐる。さうして、その芝居がどんなに自分にとつてつまらないものであらうと、正雄はきつと竹ちやんと傳ちやんを誘つて、同じ日に見物した。

「芝居で會ふなあ、安上がりですなあ。」

なんにも知らずに連れて出られた若い友達は、屢かう言つて正雄を冷かした。正雄は何と言はれても、せつ子に會へさへすれば好かつた。

或晩遲く、正雄は竹ちやんと二人で、人形町の通りを當てもなしにぶらぶら歩いてゐた。

「この頃のやうぢやあ、しやうがありませんねえ。」

「ほんとに不景氣極まるねえ。夜外へ出てもどこへも行く當てがないんだから。」

こんな事を言ひながら、竈河岸を明治座の方へぶらぶら來ると、芝居の前の橋の側で、ふと「お座敷歸り」のせつ子ととく子に會つた。二人は直ぐと車を降りて車を先きへ歸した。

「歩いて歸りますから、そこまで一緒に入らつしやいな。」

正雄と竹ちやんは、せつ子ととく子を送りながら、又同じ道を人形町の方へ歩いた。

この晩、味を覺えてから、正雄は屢竹ちやんを連れて「お座敷歸り」のせつ子を道に要した。いつも時間を見計つて、人形町の寫眞屋の角から、明治座の前の橋を渡つて、濱町の「お寺」の方へ、せつ子が歸つて來さうな道筋を、逆に廻つて歩くのである。この工夫はなかなか好かつた。三日に一度はきつと會へたからである。會へれば家の門まで一緒に歩いて送つて行くので、話も思つたよりはし

みしみと出來たからである。「お寺」の門まで會へずに行つてしまふ晩もあつた。さういふ時は、門の中に待つてゐる車の提灯を若しやそれかと懸めしさうにぢつと見たり、奥の方で鳴る電話の鈴を、若しやまだ來ぬ催促ではないかと、口惜しがつて聞いたりした。

時間が餘り早くて、とても歩いてもむだだと思ふやうな晩は、家にゐないのは知れきつてゐるのに、せつ子の家の前を行つたり來たりした。せつ子の家は、煎餅屋と玩具屋の間をはひつた細い路地の中にあつた。あんまり同じ道を出たりはひつたりするので、しまひには極りが悪くなつて、煎餅屋で煎餅を買つたり、玩具屋で玩具を買つたりした。

「人間もかうなつちやあ、おしまひだねえ。」

正雄は細い聲で、言訣らしく言つた。

「これも經驗の一つですよ。」

竹ちやんは慰めるやうに笑つて言つた。

正雄は暫くせつ子に遠ざかつてゐる内に、世間はせつ子に關して色々な噂を生んだ。

暫らく關西へ行つてゐて、その頃久しぶりで東京へ歸つて來た新派の女形に篠村寛と言ふのがあつた。篠村は一種哀しみのある地の聲に、大阪で學んだ舊劇の素養を加味して、滿都の人氣を自分一人

の舞臺に集めた。正雄も福井さんと一緒に、二三度宴會でこの役者に會つた。そして、その技藝に關する豐富な知識と明快な判斷とを聞いて、自分が嘗て見捨てた世界に『意外な一人』を發見したやうな氣がした。正雄は篠村の出る芝居を、それからそれと、新しい熱心を以て見て歩いた。

正雄が耳にした噂の一つは、せつ子がこの篠村に大層「熱く」なつてゐるといふ事だつた。さうして、篠村も大層せつ子を贔屓にしてゐるといふ事だつた。

併し、正雄はそれを何とも思はなかつた。ふだん餘り役者の好きでないせつ子が、篠村を好くやうになつたのは、篠村の藝に感じたからに相違ない。篠村の舞臺が他の人の舞臺と違ふ所に眼を附けたからに相違ない。篠村の手腕を認めて、篠村を贔屓にするのに何の妨げがあらう。篠村が出る芝居は、正雄自身も追つかけて歩いてゐるのである。正雄は寧ろせつ子に『眼』のあるのを喜んだ。

篠村がせつ子を贔屓にするといふ事にも、正雄は何等の不快を感じなかつた。せつ子は自分の愛する女である。如何なる女にも代へて自分の選み出した唯一人の女である。その女の美點を人が認めてくれたのに、何の不滿足があらう。正雄は篠村を認めたせつ子に『眼』のあるのを喜んだやうに、せつ子を認めた篠村にも『眼』のあるのを喜んだ。

それでも、篠村が餘り屢せつ子を呼ぶといふ噂と、篠村が時々『お寺』へ泊り込むといふ噂は、た

んだんと正雄の心を動かした。篠村が大の話好きで、相手さへあれば二時が三時でも平氣でしやべつてゐるのは正雄もよく知つてゐた。併し、篠村の細君が朝自身で「お寺」へ遣つて來て、無理に篠村を連れて歸るやうな事が度々あつたらしいのには、いつも「夜明かしで話す」といふ以外に、何かわけがありさうに見えた。それにお蘭が又急に篠村贔屓になつて、手紙をよこす度にこの役者の事を褒めて書いて來るのも氣になつた。

或日、正雄は或演藝雜誌の記者に會つた。この記者は長年正雄の家に出はひりをしてゐるので、正雄とせつ子との關係も、薄々は聞いて知つてゐた。記者は二三日前に篠村に呼ばれて、或料理屋へ行つた時の話をした。

「相變らずせつ子が來てゐましたよ。大層あの子を褒めてゐましたつけ。少し醉つて來ると、なんだかあなたの事を氣にかけてゐましたよ。頻になんだか言つてゐましたが、僕も醉つてたんで、よくは聞いてもゐませんでしたがね。」

これを聞くと、正雄は俄に不快になつて來た。自分が篠村を見違へたのを自ら腹立たしく思ふと同時に、自分とせつ子との關係が、ひどく、世の中から侮辱されたやうに感じたのである。唯の役者が唯の藝者に輕口を利いたのだと思つてしまへば何でもない事を、正雄は飽くまでも眞面目に、飽くまで重大に考へたのである。正雄はからかつた人間が篠村で、からかはれた人間がせつ子だといふ事を

忘れる事が出來なかつた。
「せつ子はどんな顔をしてゐました。」
正雄がこの際望みを繋ぐところは、唯この一點であつた。
「唯默つて笑つてゐましたよ。」
正雄にはもう何も彼もおしまひになつたやうな氣がした。

噂は又噂を生んだ。せつ子と篠村の噂は、六號から五號、五號から二號と、新聞の活字の上でも、段々に大きくなつて來た。
かういふ内に「水神」の一週年が來た事は、餘計に正雄の心を暗くした。人形町の柳が散るのも、大川の水が寒く光つて來るのも、藝者がショオルに顏を埋めて、風を厭ふやうに車を走らせるのも、一々正雄には思出の種であつた。正雄はたつた一年前の事を、もう「追憶」にしなければならないのが悲しかつた。

年は曇りながら暮れて、曇りながら明けた。

三十八

　正月が來ても、正雄の心は一向浮き立たなかつた。彼は福井さんに連れられて、一日に二軒も三軒も料理屋や待合を廻つて歩いたが、装ひを凝らした藝者の新しい身なりも、匂の高いお茶屋の新しい疊も、一向その暗い胸を明かるくしなかつた。正雄は徒に酒の量を増すばかりであつた。

　門松が取れた日の夕方、木場の信ちやんがひつそり正雄の家へ遣つて來た。

「この頃はちつとも一緒に出かけませんねえ。」

「ふん、不景氣だからねえ。」

「正月になつてからS君に會ひましたか。」

「暮に兄さんと一緒に、一度か二度宴會で會つたけど、春はみんな忙しくてねえ。碌々話もしなかつたよ。」

「篠村とどうとかだつて、あれは本當なんですか。」

「さあ、それが分からないんだ。僕はまさかと思つてゐるがね。」

「S君にぶつかつて聞いて見たらどうです。」

「どうもその勇氣が僕にはないんだ。なんだかこつちが見透かされるやうな氣がしてね。それに聞いて見たつて、ほんとの事は言ふまいし。」

「言ふでせう。S君の事ですから、きつと言ひますよ。兩方で默つてゐて、いつまでも含み合つてゐるよりか、早く話をし合つて、どうならどう、かうならかうと極めてしまつた方が心持が好いぢやありませんか。」

「それもさうさねえ。」

「どうです。あしたの晩あたり出かけて見ませんか。」

「あしたの晩。」

「もう七草も濟みましたし、幾らかゆつくりもしてゐられるだらうと思ひますから、一つ行つて本當の事を聞かうぢやありませんか。」

「さうねえ。」

傳ちやんが熱して勸めるだけ、正雄は氣が進まなかつた。どうせぶつかつて聞いて見たところで愉快な結果の得られないのは知れてゐる。向うの後には大きな舞臺といふものがある。社會の上の地位がある。自分で働いて取る金がある。こつちはまだ部屋住の意氣地なしである。地位もない、金もない、女の心を引きつけるやうな技倆も持つてゐない。しかも向うはこの頃毎日のやうに會つてゐるの

に、こつちはこの頃俥に顔さへ見られないのである。

「さうねえ。」

正雄は、も一度躊躇するやうに繰り返した。

「どうです。行かうぢやありませんか。それに僕。」

と言ひかけて、傳ちやんは拳固で一つ自分の膝を打つた。

「實はお願ひがあるんです。あの新河内家の君太郎ですね。あなたが大好きだつたとか言ふ。」

正雄の思想の連絡は、突然傳ちやんの口から出たこの意外な女の名で、ぷつつりと絲を切られた。

「どうしてそんな事を知つてる。」

「兄貴にも高岡の姉さんにも聞いて知つてゐます。」

「おや、おや。」

「どうでせう。實に僕あの君太郎に惚れたんです。一度會はしてくれませんか。」

「そりやあわけのないこつた。呼びさへすれば來るんだから。併し、一體どこで見たの。」

「あすこの家の前を通るたんびに、きつと近所で會ふんです。ほかに氣に入つちやつたから、段々調べて見ると、それがあなたの君太郎だつたんです。」

「僕のとは言はれない。僕のに成りそこなつたんだ。」

「では、僕が惚れても構ひませんか。」
「一向構はないね。だが、氣をつけ給へよ。きつとしまひには妹にしてくれと來るから。」
「そんな事を言ふんですか。」
「女は大抵さう來るよ。相手を怒らさないで逃げようと言ふんだ。」
「でも、こつちの人格が抑へつけてしまつたら、そんな言ひ拔けをする隙がありますまい。」
「そりやあさうさ。君のやうな強い人なら、或は向うを屈伏してしまふ事が出來るかも知れない。」
「僕もそれを思つてるんです。あなたが失敗したのは、あなたが弱かつたからだらうと思ふんです。僕は飽くまで、強く出て見ます。あの女が自由にならないといふのは、男の恥だと思ひます。」
「さうだ。全く男の恥だ。」
正雄は傳ちやんの語氣に誘はれて、思はず身內に力を入れた。
「さうだ。全く男の恥だ。」
「では會はしてくれますね。一緒に行つてくれますね。」
「行くとも、どこへでも行く。」
「序にS君の問題も解決しちやつたらどうです。あなたの物ならあなたの物、人の物なら人の物と。」
「面白い。遣つて見よう。」

正雄は俄に氣が強くなつた。金が何だ。藝が何だ。俺には人格がある。清い尊い人格がある。この人格の力は、金よりも地位よりも藝よりも強く女の心に響かなければならない筈だ。篠村に人格があらうか。篠村に強い人格の力があらうか。

「一體、僕は今まであんまりおとなし過ぎたんだ。一旦自分の力でつかまへたものは、何處までも自分の物にして放さなければ好いんだ。女が何を言はうと、如何なる行動を取らうと、自分が一度つかまへた手首さへ放さなければ、女はいつまでも自分の物でゐるんだ。それを僕は、つまらぬ事に氣を取られて、思はず手首を弛める爲に、女に遠くへ逃げられてしまつたのだ。さうだ。僕はどうしても一度その手首を取つつかまへて遣らなければならない。」

正雄が熱して來るに連れて、傳ちやんの意氣は昂つて來た。傳ちやんは、何か強い詞を言ふたんびに、拳固を固めて、自分の膝をぶつたり疊をぶつたりした。

「愉快、愉快。僕はあなたがさういふ氣になつてくれるのを待つてゐたんです。あなたはも一度小君をおつかまへなさい。僕はきつと君太郎をつかまへて見せますから。」

「宜しい。僕も君の爲に一臂の力を貸すから、君も僕の爲にその強い腕を貸してくれ給へ。」

「では、いつにします。今夜ですか。」

「今夜と言つても、もう遲い。あしたの晩にしよう。」

「場所は。」
「百尺（ひゃくせき）。」
「約束にしとくんでせう。」
「無論さ。電話は僕がかける。」
「女の數は。」
「先づ君太郎、それからS、附錄としてボオル、パイン、ボニイ。」
「そんなもので好いでせう。では、あした。」
「成るべく早く來給へ。」

傳ちやんは風のやうに來て、風のやうに歸つて行つた。正雄の胸の暗い雲霧は、快活で情に厚い傳ちやんの言語と態度に、跡方もなく吹き拂はれた。正雄は長く失つてゐた物を突然取り返したやうな氣がした。俺はいつの間にか龜井さんに言はれた事を忘れてゐた。女は現實であつて夢ではない。現に在るものを男の力で掴むのが女である。有りもせぬものを男の空想で築き上げたところで、それが何の女であらう。Sを支配したつもりでゐた俺は、いつの間にかSに支配されてゐた。女を囚（とら）へたつもりでゐた俺は、いつの間にか女に囚へられてゐた。人の自由を束縛したつもりでゐた俺は、いつの

間にか自分の自由を失つてゐた。俺は再び支配しなければならぬ、囚へなければならぬ、束縛しなければならぬ、俺はふたゝび戀の影を破つて、女の實體を得なければならぬ。」

正雄はかう思つた。

「傳ちやんが君太郎に惚れるのも面白い。以前の關係を知つてゐながら、傳ちやんがそれを俺のところへ持ち込んだのも痛快だ。傳ちやんの苦い經驗は、いつの間にか傳ちやんを戀から解脱させて、女の甘苦に向はせたのだ。昔の戀の君太郎を唯の女として取扱はなければならない時が來たのは、今の俺にとつてどんなに好い試練であらう。俺はSをも君太郎をも唯一個の肉體として考へなければならぬ。俺は何等の情に動かされずに、君太郎を傳ちやんの物にしなければならぬ。さうしてSを自分の物にしなければならぬ。掴むのだ。捕へるのだ。奪ふのだ。男が女を得る道は、この外に一つもない。」

正雄は又こんな事を考へた。

明くる日の晩、正雄と傳ちやんは非常な勢で家を出た。二人は屡手を握り合つた。二人の足は地面に附かなかつた。二人は駈け出して見たり、立ち留つて見たりした。百尺の門をはひる時、二人は言ひ合したやうに肩を聳かした。

座敷は新築の二階が取つてあつた。誂へた藝者はもうみんな來て待つてゐた。正雄と傳ちやんは、忽ち酒と女の中にゐた。
「隨分だわねえ。松のある内に會つて下さらないで。」
「ほんとよ。今まで何をしてゐらしつたの。」
「方々廻つてゐらしつたんでせう。どうせ吾々の方は疎遠しなさんだから。」
「どうなすつたの。顔にお二人ともおまじめね。一つ召し上がれな。」
「罰金に今日はゆつくりなさるんですよ。手前どもは一向忙しくないんですから。」
女の嬌聲と激しい盃の取り遣りは、暫く二人をぼんやりさせた。座に君太郎のゐた事は、一層女連に活氣を添へた。
「君ちやん、嬉しいでせう。」
「唯ぢやあ濟まされないわねえ。」
「小川さんも出すんですよ。」
せつ子はとく子や駒吉と一緒になつて、君太郎を冷かした。
「そりやあ嬉しくつてよ。あたし妹なんですもの。でも、あなたのやうな好い方が出來たんで、この頃兄さんちつとも會つて下さらなくなつたのよ。」

「まだあつてよ。」
せつ子は更に帯の間から絽刺の煙草入を抜いて、それを傳ちやんと正雄との間に置いた。煙草入に紫と緑で刺してあるのも九枚笹だつた。
正雄は急激に或種の屈辱を感じたが、弱みを見せてはならないと思つて、態とその帯と帯留の意匠を褒めた。
「僕もあの人の舞臺は好きだ。お菊さんも好きだつて言ふぢやないか。吾黨はみんな好きなんだね。」
こんな事を言つて見た。それから、態と靜に煙草入を手に取つて、裏を返して見ると、燃え立つやうな緋鹽瀬の隅に、墨で黒くSの字が書いてあつた。
「これは君が書いたのかい。」
正雄はかう聞いた。
「ええ。あの人もSでせう。丁度好いと思つて。」
せつ子は平氣でかう答へた。その顔には少しも悪びれた色がない。その詞つきには少しも臆した調子がない。その態度は寧ろ闊々しいと言つた方が當りさうな程、落ちついてゐた。
正雄は考へた。せつ子は自分に疚しい所があるのに、平氣でこんな事が出來る程厚皮な女ではない。
せつ子が平氣でこんな事をするのは、却つてせつ子の疚しくない證據である。恐らくせつ子は、世間

が思ふ程、まだ篠村にも會つてゐないのぢやあるまいか。

かうは思つたが、さて屈辱はやつぱり屈辱だつた。苟(かり)にも正雄の友たるべき女が、役者の紋を身につけて喜ぶとは情ない。餘りに卑俗な趣味である。餘りに低級な趣味である。餘りに有りふれた趣味である。正雄は今までせつ子をそんな藝者として見てゐなかつた。

一方から又正雄はかうも考へた。せつ子は態とこんな事をして俺を試してゐるのではあるまいか。そしてこんな事で直ぐと動かされる人間ならとても駄目だとでも思ふのではあるまいか。

いや、いや、さうではない。せつ子はもう俺が厭になつてゐるのだ。どうかして俺と離れたいと思つてゐるのだ。そこで、態とこんな物を列べて見せて、俺を怒らせようとするのだ。俺を怒らせて、俺の方から離れて行かせようとするのだ。

正雄は感情をぐるぐる卷にされたやうな氣がした。手も出なかつた。足も出なかつた。

九枚笹に苦しんでゐる正雄の顏を色を見て取ると、氣の弛みかけた傳ちやんは急に今日の計畫を思ひ出した。

便所へ二人一緒にはひつた時、傳ちやんと正雄はこんな話をした。

「なんだかごたごたしてゐて一向豫定の通り行きませんねえ。」

「君はあんまり醉つちまふんだもの。」
「あなたは又九枚位ですつかり醉き込んでしまふんですもの。」
「大丈夫だよ。僕はきつと決心しただけの事は遣つて見せる。」
「僕もう大丈夫です。安心してゐて下さい。」
座敷へ歸ると、傳ちやんはいきなり君太郎の手首をつかまへた。
「君ちやん、今日君を呼んだのは、實は僕が小川君に頼んだんだ。實は僕、とうから君に參つてゐたんだ。一度會ひたい會ひたいと思つてゐて、やつと今夜思ひが通つたんだ。」
「まあ、どうも有難う存じます。」
「一つ大に飲まうぢやないか。」
「ええ、頂戴しますわ。」
傳ちやんはコップを君太郎に持たして、銚子を鷲掴みにした。
「まあ、こんな大きなもので。」
「ああ、殘つたら僕が飲んで遣る。」
「きつとすけて下すつて。」
「きつとすけて遣る。」

君太郎は辛うじて三分の一を乾した。

「甘い、甘いや。」

「もうだめよ。」

君ちやんは君太郎の渡した殘りを息も繼がずに飮み乾した。

「これでお盃し濟んだ。さて今夜何處へ行かう。」

「何處かへ入らつしやるんですか。」

「ああ。君と一緒に。」

「あたしと。」

「厭かい。」

「結構ですわ。」

君ちやんは拳固で膝を打つて喜んだ。

「愉快、愉快。實に君は話が明瞭で好い。」

と言ひながら、正雄の方を振り向いて、

「どうです、君ちやんは僕と一緒に何處へでも行くと言ひますが、何處が好いでせう。水神（すゐじん）ですかな。

[illegible]ですかな。」

傳ちやんは得意になつて鼻をうごめかした。

「水神。行きたいわねえ。」

かう言つて、とく子が横から口を出すと、

「あたしも行きたいわ。」

「あたしも行きたいわ。」

と、時枝も駒吉も口々に言ふ。

「それぢやあ、いつそみんなで行く事にしたらどうだ。」

正雄がかう言ふと、傳ちやんは意味ありげに正雄の顔をちらつと見ながら、

「さう、さう。それが好い。それが好い。」

と、態と真面目な調子で言つた。

「S君。君も行けるだらう。」

正雄は極軽い調子で、かうせつ子に聞いた。

「あたし。あたしはあした早いお約束がありますから。」

「でも。いくら早いつたつて、午からだらう。」

「そりやさうですけど。」

「いやあ、少し早目に歸りやあ間に合ふぢやないか。」

「でも髮を結つたりお湯へはひつたり、いろんな事をしなければなりませんから。」

せつ子一人が暫く行く行かないでみんなに氣を揉ませた。正雄は意地にも連れて行くといふ様子をした。せつ子は家へ電話をかけたり、家から女中を呼び寄せたり、散々いろんな事をした揚句、漸く行く事に極めた。

せつ子が行く事になると、今度は君太郎が行くとか行かないとか言ひ出した。それもみんなで色々に宥めて、漸くみんなが出かけるといふ事になつたのは、もう十二時が少し過ぎる時分だつた。

三臺の車が百尺を出た。一番初めの車は傳ちやんだつた。一番しまひの車は君太郎だつた。正雄は君太郎の直ぐ前の車だつた。

傳ちやんは乗ると直ぐ正體もなく寐てしまつた。泥除に懷手の肱を突いてゐるのが見える。車の動く度に黒い胴體でふらふら搖れるのが見える。角を曲る度に、傳ちやんの身體は水に流れる藻のやうに靡いた。

「兄さん。」

正雄は後ろから呼ばれたやうな氣がした。併し、それは氣の迷ひだらうと思つた。後に君太郎がゐるゐると思つてゐるので、何年前かに聞いた聲が、昔懐しさに耳の奥から沸いて来たのだらうと思

つた。

「兄さん。」

今度ははつきり聞えた。記憶の惑はしでもない。耳の迷ひでもない。生きた聲が確に後の車から出たのである。正雄は思はず腰を浮かして後を振り向いた。

君太郎は首を前へ突き出して、正雄の顔を探るやうに暗闇を透かしてゐる。正雄も出來るだけ身を捻向けて君太郎の顔を近く見ようとした。やがて、車が車に追ひつくと二人の眼はぴたりと合つた。

「あいね。」

君太郎はあはれみを乞ふやうな眼つきをした。その眼には何年經つてもかはらぬ親しみがあつた。忘れても忘られぬなつかしさがあつた。怨んでも消えぬ可愛さがあつた。

君太郎は聲を潜めた。

「あたし、ほんとに困るのよ。行くのは好いけど、若し向うで何とか仰しやられると困るわ。兄さんも間へはひつて困るでせうし、あたしも困るわ。」

「そんなに困るなら、さつきさつぱりと斷つてしまへば好いのに。もう出てしまつた以上は、向うまで行かなけりやあ惡いだらう。」

「さうね。困つたわねえ。あたし途中で歸るつもりで出て來たんでせう。家へも何とも斷らずなの

よ。」

「それぢやまあ後で電話ででもなんでも斷れば好い。」

「でも、あたし。ほんとに困つたわねえ。どうしたら好いでせう。」

　正雄は急に君太郎が可哀さうになつて來た。正雄は自分が遠ざかつた時分の君太郎を思ひ出さずに、自分が近づいた時分の君太郎を思ひ出した。執拗のある客に手を握られて、足袋跣足で待合を飛び出した君太郎。呉服屋の息子に尻を追はれて、料理屋の玄關で卒倒した君太郎。正雄は唯昔の君太郎のいぢらしさのみを思つた。

「そんなに困るのかい。」

「ええ。」

「ほんとに。」

「ええ。」

　それでも無理にと言ふ勇氣は、もう正雄になかつた。

「ぢやあ、どうかして斷り給へ。あとは僕が引き受けるから。」

「さうしても好くつて。」

「好いとも。どうせ醉つて寢てるから分かりやしない。跡は僕がどうとでも言つとくから。」

「ほんとに大丈夫。」
「大丈夫。」
「ぢやあ、さうしてよ。」
と言ひながら、心から感謝するやうに、君太郎は正雄の顔を見てにつこりと笑つた。
正雄は友達を欺いてゐながら、自分が友達を欺いてゐるのに氣がつかなかつた。彼は唯君太郎が嬉しさうに笑つたのが嬉しかつた。

車の列が南國橋を渡つて、百本杭の方へ曲がらうとする時、正雄の直ぐ前の車に乘つてるたとく子が、提灯の一つ足りないのに氣がついた。
「あら、どうして。車が一つ足りないのね。君ちやんでせう。」
正雄は後から手を振つて制した。
「しづかに、しづかに。傳ちやんが起きると困るから。」
「あなた知つてゐたの。」
「僕も寐てゐてちつとも知らなかつたんだ。大久の前あたりで氣がついたにはついたんだが、もう言つたつてしやうがないと思つたから默つてゐたんだ。」

「君ちやんは妙な人ねえ。」

「ほんとに妙な奴だ。」

正雄はかう言ひながら、後を振り返つた。提灯もない。車もない。後からは唯暗闇が附いて來る。暗闇の中をぢつと見てゐると、花屋敷の提灯屋の角で、そつと横町へそれてはひつた君太郎の白い顔が、嘲るやうに笑つて出て來る。

正雄は急に腹立たしくなつて來た。逃げられたんだ。やつぱり逃げられたんだ。昔の弱點に附け入られて、俺はあいつに一杯喰はせられたんだ。それを俺は好い氣になつて、何か大兄いにでもなつたつもりでゐたんだ。――正雄は自分で自分が癪に障つて來た。

「畜生め、たうとう逃げてしまやがつた。」

正雄は口の中で呟くやうにかう言つた。そして、今度は自分が別れた時分の君太郎を思ひ出して、一人で不快な顔をした。

「今頃は何處かで大石にでも會つてゐるんだらう。提灯屋の角で彌生の方へ曲がつたが、大きに彌生あたりで、大石が待つてゐたのかも知れない。好い面の皮だ。」

正雄は見もせぬ君太郎の二日醉の顔を、眼の前の暗闇に描いて、その顔にぶつと唾を引つかけた。唾は正雄の唇を掠めて、汁が氣味惡く襟へかかつた。

八百松の門の下で車が一齊に梶棒を置くと、傳ちやんは車からのめりさうにして眼が覺めた。

「おや。君ちやんがゐないね。どうしたんだらう。」

「途中で逃げられちまつたんだ。僕もすつかり寐込んでゐたものだから、ちつとも氣がつかなかつたんだ。」

正雄はとく子についた嘘を、も一度傳ちやんにいつた。

「つまんねえなあ。ぢやあ僕だけ歸らうかしら。」

傳ちやんは一度降りた車に、又飛び乘つた。

「もう君一時過ぎだ。今から歸つたつてしやうがない。まあ今夜は吾々につきあふさ。」

「お厭でもございませうけど。」

側からとく子がかう言つた。

「ほんとは僕歸つた方が好いんだ。今まで一度も家を明けた事はないんだし、あとで兄貴に怒られるに極つてゐるんだから。」

傳ちやんは暫く車の上で、子供のやうに拗ねてゐたが、とく子や時松が口を酸くして說くので、やつと不承々々に車を降りた。

「折角ここまで持つて來たんだ。一つは見事に侮辱されてしまつたが、せめて後の一つだけでも遣り

通さうぢやないか、この際君に行かれてしまつては心細いと思つた。」

　正雄は誰にも聞かれない所で、そつと傳ちやんにかう言つた。

「失敬、失敬。我儘を言つて濟まなかつた。あんまり意外だつたもんだから、つい前後を忘れてしまつたんだ。」

　傳ちやんは君太郎を逢かした正雄に、幾度も頭を下げてあやまつた。利己的な正雄は、まだ俺の方に望みがあるぞ。とばかりで、傳ちやんの失望などは少しも思ひ遣らなかつた。

　女達は長火鉢一つで床の上に丸くなつて、海鼠腸一皿を肴に、きやあきやあ騒ぎながら酒を飲んだ。中にも、せつ子は思ひの外の大酒で、芥子漬の茄子を肴に、幾杯かコップで熱いのを引つかけた。

「君はそんなに飲めるのかい。」

　正雄は驚いて聞いた。

「ええ、ほんとはいくらでも飲めるの。でも體に障るといけないと思つて、ふだんはまるでいけない振りをしてるのよ。」

「ぢやあ、どういふやうな時に飲むの。」

「今夜のやうな時に。」

正雄は探られるやうに身を竦めた。
「今夜のやうな時つて。」
「まあ。分からないの、篠さんに會へない晩よ。」
と、叫りつけるやうにせつ子は言つて、正雄の顔を覗き込んだ。
正雄も傳ちやんも、もう怒る勇氣がなかつた。二人は唯女達のする儘に任せた。せつ子は廻らぬ舌でしつつこく篠村の名を口にした。
それでも、まだ正雄は豫定の計畫を捨てなかつた。もう女の心などはどうでも好い。女が誰を思つてゐようと、女が誰ののろけを言はうと、もうそんな事に構つてはゐられない。自分は唯も一度女を自分の物にしなければならぬ。も一度女をつかまへなければならぬ。正雄は女中に頼んで、思出の深い富士見の間を明けさせて置いた。
併し、せつ子はどうしてもみんなのゐる座敷を離れなかつた。正雄と傳ちやんは色々にしてせつ子を連れ出さうとしたが、せつ子は悟つたでもなく悟らぬでもない樣子で、「厭だよ。厭だよ。」と、コツプの酒を振りこぼしながら、盆腰を落ち着けるばかりであつた。
やがて、せつ子もとく子も時松も駒吉も、みんな一緒の所へ醉ひ倒れてしまつた。傳ちやんも隅つこへ行つて、やけに蒲團を冠つてしまつた。正雄は一人寐た振りをして寐なかつた。

………女は男に背中を向けたなり、夜の明けるまで眼をあかなかつた。

三十九

正雄はもう再び女の顔を見まいと思つた。

其夜の明くる日、正雄は傳ちやんを木場へ送りながら、深川浄心寺の境内を抜けた。浄心寺の裏の墓場はいつでも、水がじくじく出てゐた。多くの墓が腰から下を泥水に浸してゐた。二人はさういふ墓の間を歩きながら、散々に「女」といふ者を罵つた。女といふものは友達にもなれず、色にもなれず、細君にもなれないものだ。女といふものは唯偶然の機會で、人を生む道具になれるだけのものだ。その道具も大抵は毀れてゐる。道具を動かす精神がない。道具を作る趣味がない。彼等は唯美しい着物に包まれた不具だ。綺麗な箱に入れられた病毒だ。

「あいつ等には嘘偽つた骨があるばかりだ。その骨はやがてかういふ所へ埋められて、いつまでも、いつまでも、泥水を啜るんだ。」

正雄は誇張の詞を盡して、女を醜いものにした。傳ちやんも負けずに露骨な詞で女を卑しめた。

その晩、正雄は家へ歸ると、日記へかう書いた。

「女は男と寐ねたり、然れども男に背を向けて寐ねたり。女は胸に一葉の寫眞を抱けり。男に背を向

けつつ、この寫眞と相抱けり。哀れなる男よ。汝は女の懷に汝ならぬ男の寫眞あるを知らざるなり。」

併し、この憤慨は二日と持たなかつた。

正雄は忽ち元の正雄に歸つて、直ぐ又せつ子を戀の幻にするのであつた。彼はもう傳ちやんや竹ちやんを誘ふのが極りが惡かつた。彼は一人で每晚のやうにせつ子を呼んだ。

せつ子は二度と水神の晚のやうな態度を見せなかつた。もう酒も飮まなかつた。大口も利かなかつた。篠村の名を口にするやうな事もなければ、持物に附けた紋をひけらかすやうな事もなかつた。せつ子は相變らずおとなしい靜な女であつた。

併し、篠村に關する噂は益高くなつた。或新聞にはせつ子が篠村と一緖に入金(いりきん)の浴衣を着て百花園をぶらついてるのを見たといふ記事が出た。或人は二人が水神の池で舟へ乘つて騷いでるのを見たと言つた。併し、一向正雄はそんな事を信じなかつた。正雄はせつ子が決してそんな月並な眞似をする女でない事を知つてゐた。從つて、二人がどうのかうのといふ噂も、大抵は當てになつたものぢやないと思つてゐた。

或日、福井さんの宴會で、正雄はせつ子の家へ近頃來た年增藝者に會つた。正雄はこの藝者が自分とせつ子との關係を知らないのを好い潮に、せつ子と篠村との關係の本當のところを確めようとした。

「そりやあほんとでせう。時々篠さんだからなんて歸つて來ない事もあるやうですよ。なかなか稼ぐ人ですから、家でも大目に見てるんですね。」

女はもう誰でも知つてる事だといふ風に、平氣でかう話した。

正雄は救はれる餘地のない宣告を受けたやうな氣がして、一時はなんにも知らぬ相手を驚かす程狼狽したが、それでもまだこれが動かすべからざる事實だとは、どうしても思はれなかつた。

深い眠りに落ちた人が、突然肩を小突かれると、びつくりして一度は眼を大きく明いても、直ぐ又すやすやと快い鼾を立ててしまふやうに、正雄はこの女の詞に一寸眼を覺まして、直ぐ又元の夢路へ歸つたのであつた。

當晩、正雄は百尺でせつ子を待つてゐた。せつ子はその晩本郷座へ行つてゐた。本郷座には篠村が出てゐた。正雄は芝居が濟んでからで好いといふ電話をかけさせて、六時頃から十時頃まで、女中一人を相手に待つてゐた。

せつ子は十時過ぎても歸つて來なかつた。十一時になつても來なかつた。やがて、何處からか電話がかかつて來て、今夜は芝居で會つた已むを得ないお客筋で、違出をするから宜しくと言つて來た。

正雄はこの社會で言ふ「宜しく」といふ詞が大嫌ひである。この位好意のありさうに見えて、好意

のない挨拶はない。「聞いて御挨拶」にはまだ脈がある。「只今出たばかりですから」にはまだ望みがある。「宜しく」に至つてはとても救ふ道がないのである。知らない客を斷るのが「宜しく」なのである。出場所でない待合を斷るのが「宜しく」なのである。「宜しく」には侮蔑がある。「宜しく」には屈辱がある。正雄はその「宜しく」を始めてせつ子から貰つたのである。

正雄は家へ歸つても寐られなかつた。彼はそつと父家を拔け出して、もう暗くなつた電車道を、足に任せててくてく歩いた。彼は雷門へぶつかるまで、自分が何處を歩いてゐるか知らなかつた。

仲見世は戸毎に大戸を降ろして、灰色に寐靜まつてゐた。仁王門は黑く高く聳えて、人を呑むやうに口を明いてゐた。

正雄は暗い築山に佇んだり、暗い池を廻つたりした。觀音堂の裏へ來ると、綿をちぎるやうな雪が音もなく降つて來た。雪は落ちては消え、落ちては消えた。正雄は瓦斯の光でほの青く雪の降る中を、冷たく濡れながら歩き廻つた。

その晩正雄は、寐ずにお菊のところへ手紙を書いた。長い長い手紙であつた。同じ事が幾度も繰返してある手紙であつた。手紙にはかういふ文句があつた。

「やつぱり夢でした。自分一人の夢でした。その夢を現だと思つたのが僕の誤りです。僕は自分の空

想を怨みます。自分の夢を怨みます。僕は『夢の女』が既に現れてゐるのだと思つてゐました。ところが『夢の女』はまだ現れてゐなかつたのです。僕は靜に『夢の女』の現れて來る日を待たなければなりません。今夜は靜かに雪が降つてゐます。『夢の女』も丁度この雪のやうに、いつか音もなく僕等の前に現れて來るのでせう。僕は深さの知れぬ暗い空を仰いで、果敢ない望みに眼を潤ませてゐます。」

「この頃は又市村座の玉助(たますけ)に夢中なんですとさ。毎日のやうに見物に行くさうですよ。向うでも負けずに呼ぶらしいんですね。今に篠村と一悶著あるだらうなんて言ふ人もあります。S君ももう前のS君ぢやなくなつたんですね。」

或日竹ちやんが來て、こんな話をした。

「お菊があなたに惚れてるんだつて言ふぢやありませんか。自分が惚れてるもんだから、どうかしてあなたの好きなS君とあなたを一緒にして、あなたの歡心を買はうとしてるんですつて。肝心のS君の心はどうだか分かつたもんぢやないなんて話ですぜ。」

傳ちやんは又何處からかこんな事を聞いて來た。

「一體小川さんとも言はれる人が、あんな女で氣を揉むといふ事はない。あんな子守見たいな女は何

處にだつてごろごろしてるぢやありませんか。」
こんな事を言つた人があると、或日柳瀬が氣の毒さうに話した。
正雄はどれを聞いて好いか分からなかつた。彼は唯暗闇で物を探すやうに、せつ子の心を探し廻つた。

篠村が又暫く大阪へ行く事になつた。正雄はせつ子がどんな顏をしてるだらうと思つて、態と篠村が立つ前の晩會ひに行つた。せつ子は一向平氣な顏をしてゐた。
篠村が立つてから二三日して又會ふと、せつ子は少しも曇りのない明かな調子で、
「新聞なんて隨分當てにならないもんですね。あたしが少しばかりあの人が好きだなんて言ふと、直ぐ厭な關係でもあるやうに書き立てるんですもの。もうこれであの人も行つてしまつたから、安心ですわ。なんぼ何でも東京と大阪ではねえ。」
と言つて、如何にも打ち明けたやうな笑ひ方をした。
正雄はせつ子の世をも人をも恥ぢない笑顏を見ると、忽ち又せつ子を信じてしまつた。その晩家へ歸ると、正雄は直ぐにお菊のところへ、こなひだの手紙の詫びを書いた。
明くる日の晩には、もうお菊から返事が來た。「いづれ何かの間違ひであらう。いや必ず間違ひであ

ると堅く信じてゐたのです。今に心が落ちつかれれば、お怒りの解ける時もあるべくと何事も申し上げずに參り候所、今日の御書面にてやうやう安堵致しました。その男とは例のS君の事でせう。それならば商賣の事、商賣が商賣ですから、色々少しの事でも大袈裟に噂されるのも尤もです。それを一一取り上げてゐた日には切りがありません。みんなてんでんに好きな熱を吹いてゐますから、自分なども或時は彼女の事に付心配もした事もあつたのですが、これも人の噂と聞き流し、今では何とも思つてゐないのです。』返事の内にはこんな文句があつた。正雄は從せつ子を信じなければならなかつた。

それにも關はらず、今度は又玉助に關する噂が高くなつて來た。玉助の爲に連中を組織したといふ噂もあつた。玉助の家へ毎日のやうに遊びに行つて上さん氣取りではしやいでゐるといふ噂もあつた。

正雄の心は雲を出て雲へはひる月のやうに、少しも落ちつく暇がなかつた。

四十

冬と春と疾に過ぎて、柳と川風に夏は來た。

傳ちやんはもう世を白眼に見て、せつせと辰巳の方角へ通つてゐた。衣桁の襦袢。赤い夜具。大皿の盛し出前。長火鉢の廻ひ酒。傳ちやんは「女」を賣つたり買つたり取り換へたりするところで、頻に

かういふ物の味を嘗めてゐた。

佃の竹ちやんと定丸の柳瀨は、又脛齧りの財政を囘復して來て、その頃矢の倉河岸の大名屋敷を買ひ潰して、座敷も直さず營業を始めた高砂町の福井の支店で、日毎夜毎の宴を張つた。竹ちやんは中和泉家の小絲といふお酌上りの踊上手に眼をつけた。柳瀨は誰といふ當てもなしに、それからそれと興味を移して、頻に『今の男』がつてゐた。

正雄も時々誘はれて行つた。薄緣を敷いた暗い長い廊下や、柱に瘤のある茶席などが陰氣ではあるが、しつとりと落ちついた、昔らしい感じを與へるのが氣に入つて、正雄は自分一人でも時々出かけた。車の輪を、丸窓のやうに壁に塗り込んだ小座敷が、中でも正雄の氣に入りて、正雄はよくここでせつ子に會つた。

せつ子はどんな時でも來ない事はなかつた。どんなに都合の悪い時でも十分なり二十分なり、正雄の前へ坐らないといふ事はなかつた。お茶屋で「今日はとてもだめでございませうよ。」と言ふやうな時でも、多分來るだらうと思つて待つてゐると、せつ子はきつと遣つて來た。園遊會の歸りだと言つて袂から赤前垂の束ねたのを出して、正雄の前で顏を直して、髮の块を櫛で梳く事もあつた。倶樂部で踊つた歸りだと言つて、襟脚に白粉を拭き殘した儘、藍下地で來る事もあつた。

せつ子がかうして勤めるといふ事が、正雄には何か唯の客に對する態度でないやうに見えた。それ

にせつ子はもう正雄の前で、一向浮いた話をしなくなつた。せつ子は昔のせつ子のやうに何處までも男を信じて、少しも隱し立てをしない女に見えた。

それでゐて、やつぱり正雄を不快にするやうな噂は止まなかつた。正雄は會つて女の顏を見てゐる間は、どうしても女を信じなければならなかつた。別れて女のゐないところへ出ると、どうしても女を疑はなければならなかつた。正雄は眠りながら石の多い道を歩く人であつた。彼は躓いては覺め、覺めては又夢を見た。

正雄がいつまでも女の心を得られずに苦しんでゐる樣子は、酒の席でも眼につくやうになつて來た。竹ちやんや柳瀨は、思ひに窶れた正雄の頰を見た。絕えず何者かを追ひ求めるやうな、哀れに賴りない正雄の眼の色を見た。

二人は心弱い正雄を憫れむと同時に、平氣なせつ子を憤つた、二人は會ふ度に女の心の曖昧なのを罵倒した、男の心の正直なのを憤慨した。

丁度二三日前の晚だつた。正雄は竹ちやんと柳瀨と三人で、大川端を川下の方へ、風に吹かれながらぶらぶら歩いた。游泳場の更衣所の中は、薄暗く人氣がなくて、白や赤の褌が、布でも晒してあるやうに、澤山天井から下がつてゐた。小形なランタアンを側へ置いて、竿のない釣絲を石崖の上から

暗い水の中へ投げては手繰り、投げては手繰りしてゐる人もあつた。

「小川さん、S君の一件はもうどうしても何とか解決をつけなけやなりませんね。」

柳瀬が突然かう言ひ出した。

「どうしてもあなたには本心を明かさないといふ事なら、吾々が一つ當人の意志を聞いて見ませう。或は自分の胸にある事でも、あなたには言ひにくいといふやうな場合もあるかも知れませんから。」

竹ちやんは、柳瀬の詞に次いでかう言つた。

「實は二人で決心したんです。萬一S君に昔のやうな心がないのに、あなたが一人で釣られてゐるやうなわけだつたら、實につまらないと思ふんです。僕等は強迫しても好いから、最後の決答をS君から聞かうと決心したんです。」

柳瀬は又かう言つた。

「そこで念の爲に聞いときますが、若し向うが好いとなつたら、あなたはS君を細君にしても好いんですね。」

竹ちやんはいつにもない強い調子で、正雄の顏を覗き込むやうにして言つた。

「無論さ。しても好いどころぢやない。しなければならないと思つてるからこそ、こんなに氣を揉んでるんだ。」

正雄も竹ちやんに負けない強い調子で、慣るところありげに答へた。

「親とか親類とかに苦情があつても、きつと細君にして遣るつもりですね。」

「さうとも。僕はあいつにさへ捨てられなけりや、誰に捨てられたつて構はない位の決心はしてるんだ。」

「よござんす。それで安心しました。」

竹ちやんはかう言つて、何かを促すやうに柳瀬の顔を見た。

「かういふ方法にしようと思ふんですが、どうでせう。お盆の晩にS君を船に誘つて、船の上で強迫しようと言ふのです。」

柳瀬は真面目な顔をして、一大事を明かすと言つた調子で言つた。

「芝居じみてるねえ。そんな事であいつの量見が分かるかしら。」

正雄は頼りなげに寂しく笑つた。

「大丈夫です。きつと聞かずにや置きません。僕は親父のピストルを借りてくつもりです。」

「莫迦な。なかなかそんな事に驚く女ぢやないよ。」

正雄は柳瀬の若氣が頼りなげに思はれて来た。

それでも二人の言ふ事に誠意のある事は正雄にもよく分かつた。正雄は二人がそれ程までに思つてしてくれる事を、よし表には危ぶみながらも、心では嬉しく思はなければならなかつた。それに存外こんな機會で、女の心が知れぬとも限らぬと思つたのである。

手紙は正雄からせつ子へ出した。一人きりでは變に思はれるといけないからと言ふので、とく子も一緒に連れて來させる事にした。

返事は直ぐに來た。お盆に一日遊ばうと思つてゐたところだつたから、丁度好かつた。ボオルさんも是非行くといふから、二人で澤山御馳走を擔いで行く。こんな事が簡單に書いてあつた。

その日が來た。

正雄と竹ちやんと柳瀬とは、日の暮れぬ内から聖天下の汚ない船宿に集まつた。船宿の婆さんは堀に藝者のゐた時分から、ここに住んでる人だつた。江戸時代の傳説に富んだこの船宿の女流歴史家は、堀の小萬の逸事だの、屋根舟廢滅の徑路だのを說いて、時勢の推移を江戸つ子らしい皮肉な調子で歎いた。

「今の藝者はだめだねえ。お婆さん。」

突然竹ちやんが頓狂な聲を出した。

「だめでございますともさ。蠟燭の心の切りやうさへ知らないのが多いんですからねえ。」

婆さんの氣焔は何處まで上がるか分からなかつた。

三人は幾度も吉野橋まで迎ひに出たが、せつ子ととく子はなかなか遣つて來なかつた。

「遅いなあ。」

「遅いなあ。」

柳瀬は六連發の大きなピストルを、出して見たり納つて見たりした。

「君、ほんとにそんなものを持つて來て大丈夫かい。間違ひがあつても僕知らないぜ。」

正雄が心配して、かう言ふと、柳瀬はピストルを眞中から折つて見せた。

「御覧なさい。なんにもはひつちやゐないんです。」

今戸の交番に赤い燈がついて、船宿の蚊遣りの烟が渦を卷いて河岸を這ふ時分、二人はてんでに大きな風呂敷包を抱へて、汗を流し流し遣つて來た。

「どうもお待遠樣。」

「お待遠樣。大阪鮨を持つて來て上げようと思つて、朝から誂へて置いたのに、なかなか出來ないもんですから。」

「でも、持つて來たのかい。」
「ええ。やつと今出來たから、大急ぎで直ぐ來ましたの。」
「ボォルさん。君のは何だい。」
「あたしは辨松よ。」
「大層張り込んだね。」
「やどりですもの。あなた方の方はどんな御馳走があつて。」
「吾々の方はなかなか大したもんだ。ばかの佃煮、薩摩揚、それから灘萬の蒲鉾、柳瀬家特製の幕の内、お菓子は土手の成田卷。」
「まあ、早く喰べたいねえ。」
とく子は相變らず女らしくない口の利きやうをした。せつ子も今日の會合がまさかに自分を中心にしたものだとは氣がつかなかつた。
「あの角の家は誰の家。」
「宗十郎の家さ。」
「あら、門のところに由ちやんが遊んでゐてよ。」
舟は廣い隅田川の眞中へ出た。五人はほつとして、薄明かるい大空を仰いだ。

「上げ汐かい。」

「さよでござんす。」

兵隊から歸つて來たといふ、船宿の婆さんの孫は、威勢の好い屈強な若い船頭だつた。

「ぶらぶら上へ流して貰はうぜ。」

「畏りました。」

舟は橋場寄りをだぶりだぶりと上へ登つた。緣側に腰をかけて、一つ本を兩方から覗き込んでゐる若夫婦の家があつた。廣い座敷に電氣がかんかんついてゐて、人一人見えない大きな屋敷があつた。一錢蒸汽の上がり場には、團扇を動かす白い浴衣が澤山見えた。

竹ちやんも柳瀨も、話す筈の話はなかなかしなかつた。正雄は氣が揉めて堪らなかつたが、よくよく考へて見ると、自分が側にゐるといふ事が、どれだけ二人に不都合だか分からないと思つて、もうどうでも成り行きに任せようといふ氣になつた。

舟が綾瀨へ來た。柳瀨は船頭に命じて、舟を川の眞中へ繫がせた。水神の森が黑く見える。八百松の臺所が木の葉に明かるく見える。何處かで梟が間を置いて鳴いた。

柳瀨はもうピストルを隱してゐる事が出來なくなつた。彼は場所にも構はず、づしりと舟の中へ投り出した。

「あつ。」
とく子はせつ子にしがみついた。せつ子は恰も様子を知る者のやうに平氣で笑つてゐる。
「大丈夫、大丈夫。玉は一發もはひつてゐないんだから。」
正雄が側からかう言つた。とく子はやつと安心したやうに、友達の膝から顏を上げた。
「なんだつてそんな危ない物持つていらしたの。」
「嚇かさうと思つてね。」
柳瀨はそれ以上なんにも言はなかつた。そして、親父の定十郎が、そのピストルで強盜を追つ拂つた時の話などをした。
竹ちやんも柳瀨も一向豫定の行動にはひらなかつた。

夜が更けた。
柳瀨の發議で、その夜は夜通し遊ぶ事になつた。水神は正雄が否定した。入金はせつ子が斷つた。奥の植半は竹ちやんが厭だと言ふ。柳瀨は一晩舟を浮べてゐるやうぢやないかと言ひ出したが、それも結局行はれぬ說だつた。
ふと誰かが上野の鹽原へ行かうぢやないかと言ひ出した。成程、あすこは一寸人に知れなくつて靜

で好いかも知れないと、今まで取り留まりもなかつたのが、急に氣を揃へて行く事になつた。

麤隙でも可なり騷いだ。

騷ぎの最中に柳瀨と竹ちやんは、ふいとせつ子を連れて、何處かへゐなくなつた。正雄はとく子を一人座敷へ殘して、三人を廊下に探しへ出た。

三人はみんなが寢る筈になつてる座敷の蚊帳の中に、膝も崩さず坐つてゐた。柳瀨と竹ちやんは、前に眥向いてゐるせつ子に、頻に何か小聲で聞いてゐた。

「愈遣つたな。」

正雄はかう思つたから、そつと又元の座敷へ歸つた。そして、とく子にはどうもみんなのゐる所が分からないと言つた。とく子はもう半分寐てゐた。

明くる朝、女二人が歸つてしまふと、柳瀨は直ぐ正雄にかう言つた。

「ゆうべ、たうとうほんとの量見を聞きましたよ。」

「分かつたかい。」

正雄は心配さうな顏をして聞いた。

「まだすつかり分かつたといふところまでは行きませんが、まあ大體は分かりました。」
「どう言ふんだい。」
「あなたに對する好意は十分あるんですね。唯細君になるならないの問題は、少し事情があるから、その事情の解決が濟むまで返事を待つてくれと言ふのです。」
「旦那でもあると言ふんだらう。」
「いえ、さういふ者はないと言つてゐました。事情と言ふのは、自分の親身に關する事らしいんです。餘程親族關係が込み入つてるやうですから。」
「すると、その事情さへ片がつけば、僕の方へ返事が出來ると言ふんだね。」
「ええ、さうです。」
「なんだか心細いやうだねえ。」
正雄が寂しく笑ひながらかう言ふと、今まで默つてゐた竹ちやんが慰めるやうに口を出した。
「ところが十分望みを持つてゐて好いらしいですぜ。第一篠村の一件も、玉助の一件も、みんな世間で言ふのが嘘だと言ひますぜ。そりや成程贔屓にはしたさうです。親しい交際もしてるさうです。併し、關係なんてものは斷じてないつて言ふんです。どうも樣子が嘘らしくないんですよ。」
「それに、あなたの心持は前からよく分かつてるんだつて言つてました。」

側から柳瀬が又かう言つた。

正雄はたとひ少しでも、始めてせつ子自身の口から、せつ子の『心』が知れたのが嬉しかつた。『事情』といふのは何の事だか分からないけれども、竹ちやんや柳瀬は、多少それに就いて聞いたところもあるらしいし、その二人が安心して待つてゐろと言ふのだから、安心して待つてゐても好ささうに思へた。

正雄はせつ子と直接の交渉をした二人が、急に頼りになつて來た。

四十一

安心して見たり、心配して見たりして、せつ子の返事を待つ内に、正雄の身の上には意外な變動が起つた。

朝鮮に行つてゐる正雄の父が、事業の上で非常な蹉跌を見たのである。正雄の一家族は、山の手の屋家も手放した上、代地の家を引き纏めて、朝鮮へ移住しなければならなかつた。代理店のやうな役をしてゐた顧問官の伯父さんも悪くなつた。正雄は母の好意で、一人東京へ残る事になつたが、生れて始めて下宿住ひをしなければならない身分になつた。

下宿は竹ちやんの世話で、佃島に好いのが見つかつた。正雄は母が殘して行つた家財の一部と自分の本とを車に積んで、洲崎の見える、海のほとりの假の宿に移つた。

正雄は一家の變動を大して悲しくも思はなかつた。痩せても枯れても、日本で事業家の一人に指を曲げられた親父の事である。自分が遊びに使ふ位の金に、事を缺くやうな事はあるまい。一家が山の手の屋敷以上のものを都の一隅に築き上げて、前にも優る贅澤な生活に歸るのも、僅か一年か二年の内であらう。正雄はこんな事を考へて、寧ろ自分の生活の、前よりは自由になつたのを喜んだ。正雄の頭は家の事より、せつ子の事で一杯になつてゐた。

佃島の下宿人になつてからも、正雄はせつせと百尺や矢の倉の福井へ通つた。そして、せつ子がいつあの返事をするか、いつあの返事をするかと、それぱかり心で待つてゐた。

「なかなか返事をしないねえ。いつになつたらするつもりだらう。一時の逃げ口上ぢやなかつたのかしら。」

或日、正雄がかう言つて竹ちやんに聞くと、

「いいえ、大丈夫。たしかに僕のところへ返事をする事になつてるんです。それに、あなたは知らないけど、僕は始終手紙で催促してるんですから。」

竹ちやんはかう言つて、如何にも賴りになりさうな、年寄じみた顏をした。

竹ちやんと小糸との關係が、どの邊まで進んでゐるか、それは正雄も知らなかつた。併し「遊び」に於ける竹ちやんは、いつの間にか先輩の正雄を凌いで、自分一人でどしどし勢力を芳町方面に扶殖してゐた。竹ちやんはもう一人で何處へでも行つた。小糸と夜毎に會ふ場所なども、どういふ便を求めて行き出したのか、大川端に近い、庭に大きな池のある、濱町の或大きな待合を根據にしてゐた。

いくら困らないとは言つても、正雄の財政が前より苦しくなつたのは事實である。正雄は段々竹ちやんの御馳走でせつ子に會ひに行くやうになつた。濱町のその待合へも、時々お供のやうな後見のやうな形で附いて行つた。

竹ちやんは、どんなに遊びにはうけても、決して家を明けるやうな事はなかつた。それが或晩、何か家につまらない事があるとか言ふので、相手もないのに、今夜はどうしても歸らないと言ひ出した。やはり、池のある、その濱町の待合であつた。

「好い機會だから、今夜S君を呼んで、も一遍あなたから直談判をやつて見たらどうです。ここなら誰にも氣が附きませんから。」

竹ちやんはかう言つて、自分でせつ子のところへ電話を掛けた。もう夜の十一時過ぎだつたのに、せつ子は直ぐと來た。

正雄は或狭い座敷で、せつ子と二人ぎりになつた。待合は勿論二人が泊るのだと思つたかして、次の部屋に寐道具や寐覺めを用意して置いて、女中や何かもどんどん寐る支度をするやうだつた。正雄はそれを見ながら態と見ない振りをしてゐた。

もう寒い時分だつた。二人は火鉢を圍んで差し向ひにきちんと坐つた。

正雄はお盆の舟遊びから話を始めて、竹ちやんや柳瀨がせつ子を詰問した事を、何か自分は全く關係のない事のやうに話した。

「僕には君の心はよく分かつてるんだ。唯あんまり世間がやかましいもんだから、二人が心配して聞いたんだらうと思ふ。君もどうかそのつもりで、いつでも好い、いつでも好いから都合の好い時に、二人を安心させるやうにして遣つてくれ給へ。」

せつ子は默つて笑ひながら領いた。その落ちついた、如何にも賴りになりさうな態度の内には、「二人の事は二人の間でよく分かつてゐる。よし世間でどんな事を言はうとも、誰も心配する必要はないんだ。」といふ色が見えた。

「そりやあ商賣をしてる内は、それぞれ保護者の入る事も僕は知つてゐる。そして、僕が世間晴れての保護者になるだけの資格がないといふ事も度々君に言つてる。僕は決してそんな事をぐづぐづ言ふんぢやない。君が商賣をしてる内は、僕はどんな事でも堪へる。どんな事があつても、堪へて待つて

ゐる。僕は唯最後に君が僕の所へ來てくれさへすりやあ好いんだ。僕の家を自分の家だと思つて、一番しまひに歸つて來てくれさへすりやあ好いんだ。」

正雄は一人で熱心にしやべつた。

「考へて見ると、僕は初め浮氣で君に會ふやうになつたんだ。けれども、段々君につきあつて見る内に、君といふ人は決して浮氣でつきあふべき人ぢやないと言ふ事が分かつたんだ。」

「あたしもさうですわ、初めは浮氣だつたんですけど。」

「今ぢやあ、さうぢやないと言ふのかい。」

「ええ。」

「だらう。だから僕は君を信じてたんだ。どうだい、ほんとに僕の所へ來ても好いといふやうな氣があるかい。」

「そりやあ、ありますわ。」

「決して遠慮はないから、なんでも隱さずに言つてくれ給へ。ほんとに僕の女房になつても好いと思つてるのかい。」

「結構ですわ。」

君つ子は、少しも僞り氣のない調子で、いつもにない、しつかりした返事をした。正雄は殆ど二年

振りで、本當のせつ子に會つたやうな氣がした。正雄はこの長い年月氣を揉んだり身を悶えたりした事が、決してむだにはならなかつたと思つた。正雄は喜んだ。心から喜んだ。

その晩せつ子は、この暮れか來春、愈自前になるといふ話をした。年期はいつ明けるのだと正雄が聞くと、それはもう疾に明けてゐるので、今はもう禮奉公をしてゐるわけだと言ふ。借金はないのかと聞くと、借金は少しもない。こつちで貰ふ筈のものがまだ大分ある筈だと言ふ。正雄は嘗てせつ子が「今に自分の體になればねえ」と言つたのを思ひ出して、たうとうその時機の來たのを喜んだ。

「併し、さうなるとお父さんやお母さんも引きとらなきやなるまいし、又なかなか骨が折れて來るねえ。」

正雄はせつ子の兩親が、濱町の清正公の側にささやかな暮らしをしてゐるのを知つてゐた。せつ子の父は何を商賣にしてゐるか、せつ子は決して話さなかつたが、始終田舍を歩いてゐて、東京の家へ歸つてゐるのはほんの一年に二月か三月位らしかつた。

「今までお話はしませんでしたけど、あたしの家も隨分込み入つてゐるんですよ。あたしはほんとのお母さんもほんとのお父さんも知らないんですよ。」

正雄は始めて聞いて驚いた。正雄は今まで濱町にゐる兩親をほんとの兩親だとばかり思つてゐたのである。

「ぢやあ濱町のは。」

「兩方とも嘘。」

「へえ。ちつとも知らなかつた。」

「誰にも話さない事なんですもの。」

「ほんとのお父さんやお母さんは死んぢやつたの。」

「いいえ、生きてるんですけど、少し譯があつて、會ふ事も名を聞く事も出來ないんですの。ほんとのお父さんて人は、可なり身分の高い人なんださうですけど、自分のお上さんがあるのに、あたしのほんとのお母さんて人に關係したんですね。お母さんて人も、今ぢやあ立派な御亭主があるんですつて。あたしはさういふ關係で出來た子なんですのよ。それでお父さんて人が大變心配して、あたしが生れると直ぐ、内證で今のお父さんの養女にしてしまつたんですね。ですから、あたし餘つ程大きくなるまで、今のお父さんをほんとのお父さんだとばかり思つてゐましたわ。今のお母さんはその時分のお母さんとも亦違ひますの。あたしがほんとのお母さんだと思つてた人は、あたしが十二の時死んでしまひましたの。隨分込み入つてるでせう。」

と言ひながら、せつ子は一寸息をついた。

「眞越の伯母さんとこにゐるお婆さんね。あれなんども、あたしのほんとのお婆さんだとばかり思つ

てゐたのに、やつぱりさうぢやないんですつて。あれはあたしが貰はれて來るまで預けられてゐたあたしの乳母(ばあや)なんですつて、それはつい近頃知れた事なのよ。烏越のお婆さんは、あたしが大きくなつたら話さう。大きくなつたら話さうと思ひながら、ついこなひだまで、たうとう話さずに來てしまつたんですつて。今日こそは言はう。今日こそは言はうと思つて、あたしの顏を見ると、可哀さうになつて言へなくなつてしまふんですね。あたしが格子戸を明けて出て行く後姿を見て、今までに幾度呼び返して話さうとしたか分からないんですつて。」

正雄はせつ子の境遇の、思ひの外孤獨なのを驚くと同時に、一しほせつ子に對する愛著の念を增して來た。

「それぢやあ君は、世の中に一人もほんとの身寄を持つてゐない人なんだねえ。」

「ええ。」

「全く一人ぼつちなんだねえ。」

「ええ。」

「それで、ほんとのお父さんやお母さんは、今君がこんな事をしてるのを知つてるのかい。」

「さあ。それを今のお父さんが始終言ふんですよ。どんなに困りましても人に賣るやうな事はいたしませんから、御安心なすつてゐて下さいましつて言つて引き取つた子供をこんな事にしてしまつたの

は、どう考へても申訣がないつて、始終さう言つちやあ、あたしにあやまるんですよ。」

「ほんとの兩親にやあ、どうしても會へないのかい。」

「さあ。藝者をしてゐましちやあねえ。藝者さへ廢めてしまへば、無理に賴んでも鳥越のお婆さんに連れてつて貰ひますけど。」

「さうだねえ。」

「だから、あたしもうこの頃、つくづく商賣をしてゐるのが厭になつてしまつたんですよ。」

「ほんとに僕に廢させるだけの力があればねえ。」

「いいえ、それはもうどつちにしても一人になるんですから、お父さんに相當な物が殘せるだけ稼げば、いつでも自分で廢せるんです。だから、あたし一人にはなつても決して藝者屋はしないつもりなんです。」

「ほんとに僕に保護をするだけの力がないのが殘念だ。まあ一つせつせと稼いでくれ給へ。僕も勉強して、君を迎へるだけの資格のある人間になつとくから。」

帳場の時計が二時を打つた。二人はやつぱり火鉢を間にして、きちんと向ひ合つて坐つてゐた。

「遲くなつたねえ。」

正雄はもうせつ子を歸すのが厭だつた。
「泊るなら泊つてつても好いぜ。」
「いいえ、歸りませう。」
「歸つた方が好いかい。こんなに遲くても。」
「ええ、歸つた方がよござんす。」
正雄は輕い失望を感じたが、若し無理な事をして後の爲にならないやうな事があつてもならないと思つた。
「ぢやあ僕が送つて行かうか。」
「いいえ。門を出れば直ぐ車屋がありますから。」
正雄は樣子の知れない締りを色々苦心して明けて、やつとせつ子を門の外まで送り出した。車宿は直ぐ一二軒先にあつた。
寐てゐる番の見子が起きて出て來て、足袋を穿いたり提灯をつけたりする間、正雄はせつ子の側に立つて待つてゐた。せつ子が車に乘つて行つてしまつても、正雄は暫くぼんやり往來に立つてゐた。
せつ子が主人の家と同じ路地の、五六軒奥に家を借りて、自前の看板を出したのはもう十一月の末

だつた。

世間は相變らずやかましかつた。好い旦那が出來たんだらうとか、篠村から金でも來たんだらうとか、玉助が片棒擔いだんだらうとか、さかんに巷說が立つのであつたが、正雄は一向動かされなかつた。正雄はせつ子自身の口から出た事を、飽くまで本當だと思つてゐた。

正雄はせつ子の出世を祝つて、母から預かつてゐた大事な家財の一部を割いて贈つた。支那燒の小皿が一組あつた。出雲燒の古風な御茶碗が十人前あつた。一閑齋の菓子器があつた。夫婦の桐胴の手焙を片々だけ遣つたのには意味があつた。正雄はこの一對の火鉢が、いつか又一緒になる時があるのを豫想したのである。そればかりではない。さういふ時が來る前までも、正雄は女の家で自分が贈つた火鉢にあたる時があるのを樂しんだのである。正雄は「自分の身體になつたら。」と言つた女の詞をいつまでも、忘れる事が出來なかつた。

ところが、せつ子は自分の家を持つても、一向正雄に遊びに來いといふ事を言はなかつた。せつ子の家には二階があつた。親父は相變らず外へばかり出てゐた。お袋は無口なおとなしい人だと聞いてゐる。それでもせつ子は遊びに來いといふ事を言はなかつた。正雄はどんなに困つても、せつ子に會ふにはやはりお茶屋へ行かなければならなかつた。

正雄は折角信じたせつ子を、忽ち又疑ひ出した。

その頃、せつ子はあんまり『お寺』へ行かないやうだつた。お菊から正雄へ來る手紙も大分間を置くやうになつた。

四十二

傳ちやんは公然『濱町の家』へ出はひりするやうになつてから、柳橋の柳家へも繁々寄るやうになつた。傳ちやんは辰巳からの呼び出し狀や無心狀を、大抵ここで受け取つた。傳ちやんは小さとと正雄との以前の關係を、知つてゐるやうでもあり、知つてゐないやうでもあつた。

「さあちやんには僕も少しばかり惚れた事があります。よく僕はあなたと同じ女に惚れますねえ。」

こんな事を言つて笑ふ時には何も彼も知つてゐる人のやうだつたが、

「あんまりさあちやんが夢中なんで、親父さんに叱られたんですつてね。色々愁嘆場があつたつて言ふんぢやありませんか。」

などと、眞面目な顏をして言ふ時は、まるで事情を知らない人だつた。

もう暮れの二十六日といふ日だつた。傳ちやんはばかの剝身をぶら下げて、飄然正雄の下宿を訪ねて來た。

「お歸りかい。」
「ええ。」
「どうだい。面白いかい。」
「何に面白いです。あなたの方はどうです。」
「一向不景氣だね。」
「相變らずＳ君の問題で苦しめられてゐるんですつてね。氣の毒だなあ。」
「いや、大して苦しんでもゐないがね。」
「一體、藝者なんて一人だつて當てになる奴ああありやあしません。あの位堅い堅いつて言はれてた柳橋のきいちやんでさへ、この頃は怪しいんですからね。」
「へえ、そいつは面白い。何か出來たのかい。」
「まだしつかりした事は言へませんけど、僕の黒い眼玉で睨んだところに、先づ誤りはないつもりです。先生、近頃待合はひいきするやうですぜ。代地の稻垣ですね。知つてるでせう。あすこです。」
「へええ。不思議だねえ。」
「こなひだ稻垣へ行つて見ると、誰もゐないで、箪笥の上に新調の着物らしい三越から來たばかりの紙包が乘つてゐるんです。何の氣なしに、それを見ると、御家様としてないで稻垣様としてあるぢやあ

りませんか。待合名宛の着物が屆くやうぢやあ、もう確なもんですね。」
「いづれ旦那でも出來たんだらうが、あの人の性分でよく旦那が取れたもんさね。」
「そこは吾々が考へてるやうなものぢやありませんよ。箱根へ二人で一緒に出かけたなんて話もあるらしいんですからね。もう平氣なんでせうよ。」
「あの人もたうとうさうなつたかねえ。」
「尤もこの頃ああ遣つて普請はしてますし、なかなか苦しいには苦しいんでせうよ。兄貴も來年は早早親父の極めた嫁を貰はなければならないやうなわけで、もうさうさう多家へも金が出せなくなつて來たらしいんですね。まあ多さんが一番氣の毒ですよ。」
「へえ。福井さんもたうとうお嫁さんを貰ふのかい。」
「まだ分かりやしませんが、なんだか頻に弱つてゐますよ。」

花屋敷にある或茶の師匠の家が買ひ潰されて、そこに小さとの妾宅が建ち始めたのは、それから一月も經たない前であつた。

正雄は「濱町の家」へ行つたり來たりするのに、日に一度か二度は必ずその前を通つて、木の香の新しい半出來の二階家を仰いだが、別に以前を思ひ出して寂しいとか悲しいとかいふ氣持になるでも

なかつた。

正雄の頭はせつ子で一杯になつてゐた。

四十二

正雄は再び毒のやうな噂の渦の中心にゐた。

「旦那がないと思つてゐるんだから人が好いやね。旦那がなくて、どうして一人であんなに立派に遣つてけるものかね。番町の御前はお酌時代からのれこだあね。」

或人がかう言つてゐたと、或人が傳へて來た。

「篠村さんとは全く關係があつたんですつてねえ。この頃でも始終大阪から便りがあるさうですよ。なんでも、こないだ一寸大阪へ行つたなんて噂もあるんですよ。」

こんな事を言つた女があると、或人が態々話しに來た。

「主馬の妻君になりたいつて言つてゐるさうですよ。」

或日、柳瀬はこんな事を言つた。

「やつぱりお菊があなたに惚れてゐて、自分が好く思はれたいばつかりに、周旋の勞を取つたらしいんですね。」

竹ちやんは何處でか又、前に聞いたやうな事を聞いて來た。

「Sさんが言つてるさうですよ。『小川さんも隨分蟲が好いわねえ。いつまで惚れてると思つてるんでせう。玉助さんの方が餘つ程好いわ。』つて。」

これは又聞きの又聞きの、その又々聞き位であつたが、兎に角初めは、直接せつ子の口からこの詞を聞いた人の口から出た事だけは確だつた。

噂の中でも、正雄は一番この噂に苦しんだ。彼はもういくら身を掙いても、とても救はれやうがなささうに思へた。

正雄はそれでもまだ一つ『希望の絃』を持つてゐた。

せつ子から竹ちやんにする筈になつてゐて、まだしないでゐる約束の『返事』である。

正雄は濱町の池のある待合で、直接せつ子から聞いた返事が、まるで信ぜられなくなつてしまつたので、竹ちやんの方へして來る筈の正式の返事を、唯一つ頼りにするやうになつた。

正雄は頻に竹ちやんを責めた。竹ちやんは頻にせつ子を責めた。併し、せつ子はもう少し待つてくれ、もう少し待つてくれと言ふばかりで、なかなか返事をしなかつた。竹ちやんは毎日せつ子に合ひに行くので、大分金を使つた。

「萬一ためだつたら、僕の將來にも障る事だから、僕の遣つた手紙はみんな取り返してくれ給へ、取つてあるかどうだか分からないけど。」

正雄はもう半分絶望した人のやうに言つた。

「まあ、きつとそんな事はないだらうと思ひますから安心してゐらつしやい。勿論、萬一にもだめだつたら、手紙だけはきつと取り返して參ります。決してあなたの名に關るやうな處置はつけないつもりですから、安心してゐて下さい。」

竹ちやんは慰めるやうにかう言つた。

愈最後の會見がある筈の日が來た。

正雄は宣告を待つ罪人のやうに、下宿の狹い座敷の机の前に、朝から首を垂れてぢつとしてゐた。海が濁つて、雲の低い、手足が寒さで腫されるやうな日だつた。

夕方、竹ちやんが歸つて來た。

「手紙はみんな相生橋から海へ投げ込んで來ましたよ。」

竹ちやんは唯一言、元氣の好い調子でかう言つたが、聲には隱されぬ涙があつた。

「どの位有つたい。」

「隨分ありましたねえ。百本位はあつたでせう。」
「それでみんなだつて言つたかい。」
「みんなだつて言ひました。」
「もう一遍自分の書いたものが見たかつたねえ。」
「見ない方が好いだらうと思つて捨てつちまつたんです。」
「さう、見ない方が好いかも知れないねえ。」
二人はこれ以上なんにも話をしなかつた。
正雄は聞きたい事が澤山あつた。事情といふのは一體何だらう。こんなわけになるなら、何故いつかあんな確なやうな話をしたんだらう。これからせつ子はどうするんだらう。篠村のところへでも行くのか。玉助と夫婦にでもなるのか。それとも旦那に引かされるのか。併し、もう何を聞いたところでなんにもなりはしない。正雄はかう思つて、默つてぢつとしてゐた。
竹ちやんが言ひたい事は澤山あつた。せつ子は初めから、さう正雄が好きだつたわけではなかつた。唯間にお菊といふ鏡があつた爲に、大變せつ子が焦れてゐるやうに、正雄の心に映つたのである。せつ子は正雄に對して、決して親友以上の愛を感じなかつた。その友愛の情さへ一年程前から大分減じて來てゐた。せつ子は幾度かそれを正雄に打明けようとしたが、正雄の態度が餘りいぢらしいので

たうとう今日まで騙すともなく欺して来てしまつた。併し、今更こんな話をしたところでなんにもなりはしない。」さう思つて、竹ちやんも黙つてぢつとしてゐた。

二人は日が暮れて部屋が暗くなるまで、さうやつて黙つてゐた。

小さとが青雲の妾宅で女の子を生んだといふ知らせがあつたのは、それから僅二三日してであつた。

四十三

三月三日の晩だつた。

正雄は福井さんに用があつて「濱町の家」を訪ねたところが、福井さんも多さんも留守で、二人とも柳橋へ行つてゐると言ふ。それから柳家へ訪ねて行くと、小さとの父が唯一人で留守居をしてゐて、今日は孫の初節句でみんな花屋敷へ行つてゐると言ふ。

正雄はちつとも氣がつかずにゐた。小さとと小さとの旦那の間に出來た子が、小さとの旦那の拵へた妾宅で初の節句を迎へるのである。正雄はその儘歸らうとしたが、その用といふのが、どうしてもその晩話をしとかなければならない事だつたので、勇氣をふるつて花屋敷の妾宅を訪ねた。

玄關まで福井さんに出て來て貰つて、用件だけ話して歸らうとすると、奥から小さとの母と多さん

が出て來た。
「まあ宜しいぢやございませんか。」
「白酒でも一つ召し上がつていらつしやいましよ。」
「みんな内輪ばかりなんですから。」
正雄はたうとう引つ張り上げられてしまつた。

二階には知つた顏ばかりが集まつてゐた。傳ちやんがゐる、竹ちやんがゐる、ゴムがゐる、アウルがゐる。民ちやんも久し振りで正雄の膝の上に乘つた。
正雄は小さとにも一寸會つた。小さとははだけた胸を隱すやうにして、ひどく切り口上で挨拶した。子供といふのも正雄は見た。
どうした話の續き工合だつたか、席上でふと君太郎の噂が出た。
「あの子もたうとう引いたさうだね。やつぱり大石さんで。なんでも高輪邊にゐるさうだよ。」
福井さんは、正雄の全く知らずにゐた消息を傳へた。

正雄は逃げるやうに小さとの妾宅を出た。

小さとが君太郎になつたり、君太郎が小さとになつたりした。さうかと思ふと、せつ子が胸をはだけて色の黒い赤ん坊に乳を飲ませてゐた。

正雄は自分で自分の歩いてる道が分からなかつた。両側の家が両方から狭くなつて來たり、両方へ廣がつて行つたりした。下駄がぬかるみへはひつたり、砂利の上でぐらついたりした。水のぴちやぴちや跳ねる音がすると思つて、首を上げると、正雄は大きな川の縁を歩いてゐた。

暗い川が暗い上（かみ）から暗い下（しも）へ流れてゐる。暗い道が暗い川に沿うて續いてゐる。正雄は自分で自分のゐるところが見えなかつた。

正雄は唯暗闇で足を動かしてゐた。なんにも考へずに足を動かしてゐた。

――三部作「大川端」の第一部――

第一課

成程さう言はれて見れば、もう十年になる。二十歳の僕が三十になつたんだからな。早いもんだ。三十未だ家を成さず、といふと豪さうだが、あんまり自慢になつた話ぢやない。相變らず碌々として下宿屋住居の腰辨當だ。君などから見たら、さぞ意氣地なしに見えるだらう。それも爲方がないさ。僕は出發の爲やうを間違へたんだ。

下世話によく言ふ「裸で道中がなるものか」さ。あれは本當だ。眞理だ。僕も裸で人生の旅に出かけたばつかりに、一生裸で歩いてなければならぬ事になつたんだ。

着物を着ずに旅が出來るもんか。一文なしで旅が出來るもんか。それを僕はやらうとしたんだ。金が何だ、物質が何だ、現實が何だ、人生は愛だ。人生は精神だ、人生は理想だ。これらの者さへ得られれば、もう外にはなんにも入らない。裸になつたつて好い。身體が無くなつたつて好い。かういふ氣でゐたんだから堪らないさ。

それから見ると今日の青年は幸福だ。十年前から見ると、世間一般に生活が餘程苦しくなつたんだから今日二十歳代の青年は大抵『生の不安』を感じてるやうだ。それが好いんだ。僕の二十歳時分には、先づそんな人はめつたにゐなかつたと言つて好い。よし親が困つてゐても、それが子供の頭にはひり込んで、子供の思想に影響する程の事がなかつたんだ。それだけ世間が樂だつたんだね。

一體、世の中が進めば進む程、年の若い者が『生の不安』を感ずるやうになつて來るやうだね。大昔は人間生れて死ぬまで『生の不安』などは感じなかつたものらしい。それが、中古には、五十位になると、それを感じて來る。近古になると三十位にはもう感ずる。現今では廿歳になるともうそれが分かる。と、かう段々に苦勞が早くなつて來るやうだね。十年前に廿歳だつた僕等が、一向考へてなかつたやうな現實的な苦勞を、今日の廿歳代の青年はみんな嘗めてるやうだからね。もう十年も經つと、十五六で『生の不安』を感ずるやうになるかも知れないね。更に十年も經つと、五つか六つでもう生活の苦勞をするやうになるかも知れない。併し、それが好いんだ。『何等の空想なしに生れた』赤ん坊は幸福だよ。

ところが、僕などと來ると、空想の腹から空想に滿ちて生れたんだ。そして空想世界で空想の乳を吸つて育つたんだ。その空想兒が戀愛問題で初めて實世間に觸れたんだ。そして實世間といふものは、空想に何等の關係もないもんだといふ事を知つて驚いたんだ。

いや、話が理窟になつて濟まない。併し、それはまあ僕の癖だから許し給へ。

そこで、あの話だ。十年經つたらきつと話すと、あの時約束したつけねえ。あの時には君にも色々心配をかけた。そのお禮としても是非今日話をしなけりやならないんだが、そこに又議論があるんだ。豫めこれを聽いといて貰はないと本題にはひる事が出來ないんだ。

僕は飽くまで理窟の好きな男だね。「昔は空想に生き、今は議論に住む」か。どつちにしても裸だ。は、は、は。

十年前には、僕が一箇の空想兒だつたやうに、君も一箇の空想兒だつた。だから、平氣であんな約束をしたものの、今日强ひても約束の履行を求められる段になると、少からず僕は狼狽せざるを得ない。

第一、今日では僕も中學の敎員だ。生徒に小言をいふ年で、もう黴の生えた戀物語でもなからうぢやないか。唯さへ僕がかうヒヨコスカした安つぽい人間だから、馬鹿にしよう馬鹿にしようと掛かつてる生徒達だ。若しこの話でも耳にはひらうもんなら、又どんないたづらをするか知れたもんぢやない。

馬鹿にされても好い。惡戲をされたつて構はない。けれども、それが爲に僕の見識が落ちると、僕

中學用までが怪しまれて来る。さあ、さうなつたら飯の食ひ上げだ。何よりこれが一番恐ろしい。そこは十分含んでゐて貰はないとね。

第二に困るのは、君が今日小説家になつてる事だ。なに小説家にならうと、脚本作者にならうと、それは銘々の勝手だ。世間では始終赤門に創作家なしとか何とか言つてゐるんだから、僕は寧ろ大に遣つて貰ひたいと思つてゐる。決してそれをぐづぐづ言ふんぢやない。ただ僕は、小説家たる今日の君に、空想家たりし僕の十年前の話をするのが厭なんだ。

君も商賣だ。僕の話を聞けば小説にしたくなるだらう、又しても好いと思ふだらう、する權威があるとも考へるだらう。それは僕が英吉利の小説を讀んで應用試驗に恰好な文句を探し出すやうなもので仕方がないが、そこが又感情だ。

ヂッケンスやサッカレェが僕等のしてゐる事を見たら、吾々は中學の試驗問題をこしらへる爲に小説は書かなかつたと瞋恚るだらう。それと同じやうに、僕も君の小説の材料になる爲にあんな苦い經驗をしたんぢやないと、まあ言へば言へる理窟さ。

いや、併し、友人の顔に苦悶の色を見て、その苦悶の根源を探り知らうとする心は、醫者が病人の苦しむのを見て、その苦しみの本を見當てようとするのに等しい。これは親切な美しい心だ。決して好奇心ぢやない。

君だつて、あの時分、さういつた美しい心持から、僕の話が聞きたかつたのに相違ない。何のかのと、理窟は並べたものの、これを要するに、あの時分の心持になつて聞いて呉れさへすれば、それで僕は滿足なんだ。僕も出來るだけ、あの時分の心持になつて話したいと思ふ。

併し、人間昔の氣持になるといふ事は中々むづかしいもんだ。この間もね、高等學校時代からお馴染の早川ね。あすこへ古い手紙を澤山持つて出かけたんだ。そして朝から晩まで昔の手紙ばかり繰返して讀んで見たが、一向若い氣になれなかつた。友達からのにも、婦人からのにも、隨分熱烈な文句が列べてあるんだけれども、一向それに動かされないんだ。なんだかまるで自分とは關係のないものを無理に讀まされてゐるやうな氣がするんだ。それでも自分は精々若くなるつもりでゐるんだよ。

吾々はよく「あの時分」「あの時分」といふ事を口にするが、その「あの時分」といふ奴は、一度過ぎたら、中々二度とはやつて來ない代物だね。「あの時分」といふと、如何にも何か明確に思ひ出してゐるやうだが、それが一向又さうでないんだから心細い。現に或時代の證據とも言ふべき手紙を讀んでさへ、なんでこんな事を書いたんだらう、なんで又こんな事を書いて寄越したんだらうと、どう考へても分からない箇所が澤山あるんだからね。

これから君に話さうといふ初戀の物語も、實は僕の持つてる二三十通の手紙だけが頼りなんだ。せめて僕が先方へやつた手紙でも殘つてゐると、もう少し又はつきりした所が思ひ出せるかは知れない

が、それは先方の人が嫁に行く時、すつかり焼いて行つて了つたから、もうこの世の中には灰一つ殘つてゐないんだ。僕の「あの時分」の思想の記錄は、もう一字もこの世に殘つてゐないんだ。僕の「あの時分」の苦悶の足跡は、もう世界中どこを捜してもありやしないんだ。

二十男の僕は今、十幾年前かの少女の手紙を繙いて、その頃若かつた自分を無理に思ひ出さうとしてゐるんだ。

併し、それは無理な話さ。僕等の皮膚を見たつて分かるぢやないか。十年前には、いくらなんでも、こんな汚點だらけな皮膚ではなかつた。もつと柔かな、もつと白い、もつと血の氣のある皮膚だつた。それが世渡りをする内に、かう汚れて來るんだ。美しい初戀の記憶も、もう今日では汚點だらけだ、塊だらけだ、穴だらけだ。

見給へ。ここに寫眞がある。これが僕の初戀の相手だ。But shall God lift to endless unity! と紫鉛筆で裏に書いてある。多分ロゼッチの句だつたらう。

この寫眞ももう大分色が褪めて來た。右の頰から右の額あたりへかけての輪廓も餘程ぼんやりして來た。髮はまだどうかかうか分かるが、着物の縞目などは殆どもう分からなくなつた。

僕の髮も、もう黄いろく褪めたんだね。

二

それでも、目と髪の毛だけは、まだはつきりしてゐね。實に利口さうな目だらう。この日に僕は參つたんだ。髪は古い結ひ方だが、毛筋一本亂れてゐないだらう。全くかういつた几帳面な女だつた――けれども、そんな事を知つたのは、まだ餘程あとの事だ。

話の發端は僕が十四の春だ。十四の春に、僕は高等三年から四年になる大試驗を受けた。その時分小學校はまだ八年だつた。

なんでも、もう理科だとか算術だとかいふむづかしい試驗が濟んで了つて、唱歌の試驗を受けてる時だつた。

僕等は御眞影室といふ部屋に集まつて、一人々々先生の前へ出ては、學校の校歌を唄つた。御眞影室といふのは、兩陛下のお寫眞が高い所に納つてある部屋で、三大節には、その隣の教場との仕切戸を取り拂つて、お寫眞の納つてある戸棚の戸を明けて、その前に小さな紫縮緬の幕を張る、すると手もなく廣い式場になるといふ趣向だ。

僕が試驗を濟まして、廊下をぶらぶらしてると、關といふ同級生が側へやつて來た。この子は學校の直ぐ側に住んでる或金持の息子だ。學問は一向出來ないが、世間學には級中で一番通じてゐた。當

時の僕は學問勉強萬能主義の人間だつたから、學問の出來ない、勉強の嫌ひな、そして知らないでも好い世間の下等な事ばかり知つてる、この闘などといふ人間はまるで眼中になかつた。頭の大きな、口の大きな、何となく締まりのない子だつた。それでも色は白くて、着物がいつも光つてゐたから、中々上品には見えた。

いつも親しく口を利いた事もないのに、その日に限つて、闘は如何にも懐かしさうな目つきをして、僕の側へ寄つて來るから、をかしいなと思つてゐると、

「おい、岡田、女の試驗してる所見に行かないか。」

と言ふんだ。この頃では子供でも友達の名を呼ぶのに、「君」とか「さん」とかを附けるやうだが、その時分はみんな呼び捨てだつた。敬稱をつけると却つて生意氣だと言はれたもんだ。

僕は間にさう言はれて、ふッと行つて見る氣になつた。この時行つて見る氣にさへならなかつたら、僕の今日までのライフは全く別なもんだつたかも知れない。僕のその後のライフは、殆ど總て、その時「ふッと行つて見る氣になつた」爲に變つて來たと言つても好い。

扉のハンドルを握つて、それを一つぐるッと廻す內にも運命があるとは、メエテルリンクだか誰だかの言つた言だね。扉を開けた途端に風がはいつて來て、部屋の中のランプの火が消えて了つたとする。その扉のハンドルを握つた手は恐ろしい運命を持つてゐたんだ。

闕に言はれて、「ふッと行つて見る氣になつた」僕は闕の手に廻された扉のハンドルだつたんだ。僕のライフの火は、その途端に既に消されて了つたんだね。それを僕は十年も十五年も氣が附かずにゐたんだ。

三

一體、僕はその頃まで、女なんどといふ者はまるで眼中に入れてゐなかつたんだ。女は男の家來だ位にしか考へてゐなかつたんだ。それといふのが、ほら、僕は早く親父に別かれて了つたらう。女ばかりの中で、一人威張つて育つたもんだからだ。姉も家來なら、妹も家來さ。母は、それでもたまには恐かつたが、腹ん中ではやつぱり家來と心得てゐたもんだ。

その頃の僕は、極端にいふと、まあ女の存在といふものをてんで認めてゐなかつたんだね。だから、學校へ行つても。女の生徒などには見向きもしない。女なんどに何が出來るものか、女なんか何だといふ氣でゐた。

そんな氣でゐた僕が、あまり親しくもない闕に一言誘はれて、ふッと行つて見る氣になつたんだから をかしい。それが運命なんだね。

闕に手を引つ張られて連れて行かれたのは、高等三年の女の教場の前だつた。即ち僕等と同じ級の

女生が、僕等と同じく三年から四年になる試験を受けてゐる所だ。
戸口も窓もみんな硝子戸だから、外に立つてゐても、よく中が見える。女の方ももうむつかしい試驗は終つたものと見えて、その時は繪の試験を受けてゐた。
みんな一齊に、色々な形をした顔をうつむけて、頻に毛筆を振るつてゐる。書いてゐるのは枇杷の繪だ。枇杷の彩色畫だ。眞鍮の鈴の錆びたやうな實と、ブリキ細工のを青いペンキで塗つたやうな葉とが、あつちにもこつちにも見える。
僕は不思議にその時は女の事が目についた。硝子戸の中の廊下に一番近い席にゐる女が、一番近いので殊に目についた。一つはその女の席が首席なので、女の方の一番は――僕は男の方の一番だつた――どんな奴だらうと思つて、それで注意して見る氣にもなつたんだ。
黒つぽい地味な着物を着てゐる。色が白い。髪の毛が美しい。利口さうな目を一心に繪に注いで、しきりに枇杷の葉を染めてゐる。
岡は大人らしく、僕の後から平手でポンと肩をぶつてね――
「岡田、あの女の人を知つてるかい。」
と言ふんだ。僕は少しどぎまぎして、
「あの女の人つて、どの人。」

とは言つたが、實は今までたつた一人しか注意して見てるなかつたんだから、關がそれを知つて言つたものだとは、初めから承知してゐたんだ。

「そら、そこにゐる――」

關はその首席にゐる女を指さした。

「ううん、知らない。」

僕は知らう筈がないから、かう答へると、

「向うぢや君を知つてるよ。」

と、かう關が言ふぢやないか。僕は子供心にもぼうッとして、顔が熱くなつた。ぞつとして、何か水でも浴びせられたやうな氣がした。

この「向うぢや君を知つてるよ」が僕には毒だつたんだね、僕のやうな自惚の強い人間にとつて、この位毒な詞はないんだ。

「園田、君、あの女の名前知つてるかい。」

「知らない。」

「知らない。驚いたな。有名な人なんだぜ、學問が出來るんで。」

「ふうん。」

「信樂みかツていふんだ。僕の家の二三軒先だよ。」

「さう。」

「君の事よく知つてるぜ。始終君の事褒めてるよ。お父さんがないのに感心だつて。」

「君知つてるの。」

「知つてるとも、時々一緒にお淺ひの會をするんだ。君も來ないか。」

「だつて、僕は。」

「來給へよ。喜ぶぜ。」

こんな事で僕はもうすつかり參つちやつたんだ。

四

まあ、その日はそれつきりで歸つたが、さあ、それからといふものは、その女の子の事が忘れられない。うつむいて枇杷の繪をかいてゐた橫顔が、目の前にちらつく。「信樂みか」「信樂みか」といふ聲が、音樂のやうに、どこからともなく聞こえて來る。

そんな風で、試驗休みなどは、唯もうぼうツと過ごして了つた。それでも、往來などを步いてゐると、今まで少しも注意しなかつた「女」といふものが、不思議に目につくやうになつた。そしてどの

女を見ても、どの女を見ても、信樂のおみかさんに及ぶものは一人もないやうに思つたもんだ。免狀授與式の前の晩。その當日。おみかさんが高等三年の總代で、一束にした修業證書を受け取つた時の樣子。僕はいまだ嘗てかういふ感情で轟かした事のない心臟を轟かした。心臟の純潔。若しさういふ事が言へるなら、僕の心臟の純潔は、十四の春に既に汚されて了つたんだ。

よく初戀は純潔だとか神聖だとか世間では言ふね。多くは肉の關係にまで及ばない内に濟んで了ふから、成程それから言へば、純潔かも知れない、神聖かも知れない。併し、精神に惚れるとか心意氣に感ずるとかいふ事は、初戀にはないね。そりや初戀も長く續いてる内にやあ、さういふ事にもならないとは限らないが、初めは先づさういふ事はない。

やつぱり顏に惚れるんだ。樣子に參るんだ。唯なんとなく好きになるんだ。何しろ、兩方とも、まだ子供なんだからね。精神だとか心意氣だとかの分かる筈がないやね。唯ぽうッと醉ふんだ。始めて酒を飮んだ時も、始めて煙草を飮んだ時も同じさ。ほんとの味が分かるのは、まだ年をとつてからの事だ。

僕が信樂のおみかさんに惚れたのも、初めはさうだ。おみかさんの精神を何處で見たといふではない。おみかさんの言ふ事を何處で聞いたといふではない。唯忘れられないのは、硝子戸の中で枇杷の繪を書いてゐた横顏だ……

五

關が僕におふかさんを見せたのは、色々魂膽があつたんだ。

關は信者の娘に自分の好きな女の子がゐたんだ。關は自分がそれに近づきたい爲に、自分の知つてる信者を僕に教へて僕の歡心を得て置いて、自分が事をする味方に僕を引き入れようとしたんだ。僕は當時學校の成績も好かつたし、品行も方正で、衆望を一身に負ふ身だつたから、僕と一緒に事を計れば、きつと牧師への聞こえも惡くはあるまいと思つたんだらう。

併し、僕はその手には乘らなかつた。

尤も、たつた一度かういふ事はあつた。或日、關に誘はれて、何の氣なしに揚場まで遊びに行つたんだ。すると關が舟遊びをしようといふから、贊成して、二人で田舟を一艘借りた。關は棹も櫓も中中うまい。

飯田河岸の中程まで來ると、關は自分の頭の上にある、欄干の突き出た家を仰ぐやうにして、

「君、ここだぜ、内野の家は。」

と言ふんだ。

「内野つて誰だい。」

つて聞くと、

「ほら、あの信樂の級のさ。」

そこで、僕は關の惚れてる女が内野といふのだといふ事を始めて知つた。そして、今日は關のダシに使はれたんだなと思つた。けれども、僕はまだ信樂の事について聞きたい事が澤山あつたから、別に怒りもせず、默つてダシに使はれてゐた。

關は口笛を吹いたり、わざつと大きな聲を出したりしたけれども、頭の上の家からは、終に誰も顏を出さなかつた……

僕がかういふ意味で關に附き合つたのは、殆どこれが最初の最後だつたと言つて好い。僕は關から信樂に關する一通りの知識を得て了ふと、ぱつたり關と附き合はなくなつて了つたんだ。

僕はその時分から利己主義な人間だつた。こんな男といつまでも附き合つてゐた日にはどうせ碌な事はないと思つたんだ。もう信樂の家も敎へて貰つた。兄弟が五人とかあつて、それがみんな同じ僕等の學校に來てゐるといふ事も敎へて貰つた。もう關に用はない。關のやうな人間を相棒にしてゐると世間の信用を失ふ。もうこれからは一人でやる事だ。と、かう利己的な考へを起したんだ。

けれども、當時の僕は中々利口だつたから、自分が信樂に氣のある事などは樣子にも人に見せなかつたもんだ。關にさへ僕の心はよく分らなかつたに違ひない。關か一緒に信樂の家の前を通らうと言

つても行かず、復習會が信樂の家にあるからと誘はれても行かないといふ風だつたんだからね。
僕は依然として品行方正學術優等の少年だつた。親類の自慢だつた。近所の褒め者だつた。
でも、腹ん中は、まだ十四位の小僧の癖に、もう女の事ばかり思つてゐたんだ。
岡惚れた内野といふ女の子は、小柄ぢやあつたが、おとなしい、可愛い人だつた。信樂の方は、どつちかと言ふと鋭い所があつたね。

高等四年一年は殆ど戀の一年だつたと言つても好い。併し誰に話したといふではない。誰に打ち明けたといふでもない。唯一人で思つて、一人で空想を逞うしてゐたんだ。
勿論、その時分の戀だ。別に大した野心があるんぢやない。ただ顔が見たい、話がしたい、ぐつと大きなところで、仲好しになりたい位なもんだ。それでも女と話をするとか、友達になるとかいふ事は餘程惡い事だ――操行點に關る事だ――と思つてゐたから、ただ毎日遠くからでも顔さへ見られればそれで滿足してゐたもんだ。
僕の方で注意し始めると、向うでも注意してゐるやうに見えて來た。僕が意味ありげな目付をすると、向うでも意味ありげな目付をするやうなんだ。人のゐない時に、計らず顔が合つて、僕が笑ふと、向うでも笑つて答へるやうに見えるんだ。なあに、そんな譯ぢやあなかつたんだが、そこがそれ、自惚

でさう見えたんだ。「向うぢや君を知つてるよ」が利いたんだ。

顔が合ふと言つたつて、教場は勿論違ふんだし、ほんの運動時間に運動場で會ふ位なもんなんだ。だから、運動場にゐる間が何より樂しみで、朝は授業の始まる餘程前に學校へ來て、裏門からおみかさんのはひつて來るのを運動場で待つてゐる。夕方も、女の方の引けるまでは、自分の方が早く引けても、運動場で遊んでゐて、おみかさんが歸るのを見て、やつと安心して歸つたもんだ。世間では僕を「學校の好きな子だ」「勉强家だ」と言つて褒めた。

尤も、勉强もしたにはしたね。併しそれも女に對する虛榮心からさ。絕えず首席にゐて、「あの人は出來る」と思はれたいからさ。それに女が大抵一番にゐたらう。僕の方も始終一番にゐないと、なんだか關係が遠くなるやうな氣がしたんだ。どうかした拍子で、小試驗に三番に下つた時なんぞは、一晩寢ずに泣いたね。それも唯女に對する虛榮の傷つけられたのが口惜しいからだつた。

その時分、僕の小學校には子供の虛榮心を刺戟するやうな惡い習慣があつたもんだ。それは朝授業の始まる少し前に、男生女生全部を運動場の左右に分けて整列させてね、教員全部が廊下の上に居並ぶと、最上級男生の首席生徒を、廊下から運動場へ降りる段々――即ち教師と生徒との中間――に立たせて、「禮」といふ號令をかけさせるんだ。そこで生徒全部が教師全部に朝の挨拶をするといふ趣向だ。その段々に立つて、毎朝「禮」を號令する生徒は。學校第一の名譽の生徒な譯さ。

最上級の首席生徒も、初めは外の生徒と一緒に列ぶんだ。生徒がみんな揃つて、教員がみんな揃ふと、首席生徒は唯一人列を離れて、男生と女生との間の道を通つて、廊下の段々まで歩いて行くんだ。その時全校の生徒は羨ましさうにその名譽ある生徒の姿を見送るんだ。

僕もその「譽」を得意になつてやつた一人さ。そしてこの上もない名譽と心得てゐたもんさ。何より嬉しかつたのは、段段の上に立つた時、高等四年女生の中から、おみかさんの利口さうな目が、ぢつと僕の方を見てゐた時だ。

少年時代の戀と虚榮心か。面白い問題だ。

學校から歸つて、家にゐる時も、おみかさんの事は忘れられなかつた。でも、學校の本を勉強してゐる時はさうでもなかつたが、『少國民』だの『幼年雑誌』だのを讀んでゐる時は、ふツと讀んでゐる事が何だか分からなくなる時がある。さういふ時は、きつとおみかさんの利口さうな目が、頭の奥の暗い所から、僕の方をぢつと見てゐた……

夕方、僕を濟まして、ぼんやり庭など眺めてゐると、堪らなくおみかさんの戀しくなる時がある。さういふ時は、ふらふらと家を出て、おみかさんの家の廻りを一廻りして歸つて來る。さうすると、何となく氣が靜まつて、夜の勉強が平和に出來たもんだ。

おみかさんの家は、藪の中のやうな所にあつた。廻りはすつかり生垣で、日が暮れると、家の中の燈がチラチラ見える。誰が彈くのか時々琴の音も洩れた。

門には潜り戸があつた。門の前は急な狹い坂だつた。僕は大抵この坂を上から通つたものだが、いつでも困るのは門の前を通る時だ。

潜り戸の明いてる時がある。締まつてる時がある。明いてる時はまだ好い。そつと横目で中を覗きながら、急いで通つて了ふ。弱るのは締まつてる時だ。若し丁度門の前へ來た時に、潜り戸が明いて、誰か出て來たらどうしよう。お父さんでもお母さんでも極まりが惡い。姉さんか弟なら、學校で顏を知つてるだけに、なほ極まりが惡い。當人だつたら――大變だ。

天下の往來を人が通るに何の不思議もない筈なんだが、やつぱり氣が咎めるんだね。秘密を知られまいとする苦心は、戀する人も刑狀持も同じこつた。

或日の夕方、僕は近所の酒屋の子を連れて、二人でおみかさんの家の前の坂の上まで來た。酒屋の子は何も知らないんだ。唯ふだん菓子を貰つたり古雜誌を貰つたりするから、交際に散歩をする氣で出て來たんだ。

僕は例によつて、門の前を通るのが恐くて堪らない。けれどもそれを酒屋の子に言ふ譯には行かない。しかもその日は潜り戸が締まつてゐた。

僕は内實胸をドキドキさせながら、上部(うはべ)は強ひて落著き顔をして、悠然と坂を降りかけた。丁度門の前まで來ると、門がガラリと明いた——誰が出たんだか、それはいまだに知らない——僕は兩手で顔を押さへて、闇雲(やみくも)に坂を駈け降りた。酒屋の子も驚いて、僕の後を追つかけた。

唯(たゞ)ある小さな横町へ駈け込んで、ほつと息をつくと右の足の裏が何だか擽(くすぐ)つたいから、下駄を脱いで見ると、まん中から綺麗に二つに割れてゐた。あんまりひどく駈けたからだ。

呆氣にとられた酒屋の子を促して、跣足で遠廻りをして、家へ歸つた。

そんな馬鹿な事もあつたもんさ。

それ程までに思つてゐながら、僕には一向勇氣がなかつたんだね。手紙を書いてやるなどといふ事は夢にも思はないんだ。闇か誰かに紹介して貰つて、友達にならうといふ氣もないんだ。自分の尊嚴も傷つけず、人の世話にもならずに、戀を得ようとするんだ。隨分勝手な戀さ、利己主義な戀さ。

六

その内に小さな波瀾が起つて來た。

そんな時分の僕にも、もう色敵(いろがたき)といふやうな者が出て來るんだから面白い。

僕の色敵は同じ級で同じ年の藤村といふ子だつた。なんでも非職官吏か何かの子だつたがね、僕の家から見ると餘程有福だつた。この先生とは前から僕も仲好しだつたから、時々家へ遊びにも行つた。中々立派な家でね、庭などは毎日のやうに植木屋がはひつてゐた。闊の家よりは信樂の家に遠かつたが、僕の家よりは信樂の家に近かつた。

お母さんは色の白い綺麗な人でね。いつでも艶々しい丸髷に結つてゐた。笑ふと金歯が目を射るやうに光つた。

さういふ人の子だから、藤村も中々美少年だつた。校中第一といふ評判もあつたが、僕は嫉妬からさうは思はなかつた。併し、自分よりずつと綺麗な事だけは認めてゐたね、いくら自惚な僕でもね。

その代り學問は俺の方が出來ると思つてゐた。いくら器量が好くたつて、學問が出來なければ駄目だ位に思つてゐた。その實藤村の綺麗なのが口惜しくて口惜しくて堪らなかつたんだ。學問だつて藤村はさう出來なかつた譯ではない、五六番の所には始終ゐたんだ。

藤村は毎日洋服を着て學校へ來た。あの時分よく子供の着た服だ。立襟で前の明いた、チヨツキの見える、縁とりの、西洋ではよく坊さんが着てるね、あれだ。地は紺へルだつたと覺えてゐる。

それを着て毎日學校へ來るんだ、その風采が如何にも振るつてゐるから、男生の間でも評判が高い、況んや女の生徒だ、騒ぐのも無理はない。

さあ、その藤村と信楽のおみかさんが怪しいといふ噂が立つて来た。

藤村にやはり間によつて信楽を知つたらしいんだ。併しやつぱり僕以上には進まなかつたらしい。中々お辭儀をするの話をするのといふ所までは行かなかつたらしいんだ。あの時分の子供は一般にまた道徳に縛られてゐたんだね。それから見ると今日の子供は豪い……

藤村とおみかさんとの間には間以上の媒介者があつた。それは藤村の弟だ。美少年の弟だから、これが又林檎のやうな頬ぺたをしてゐて、中々可愛い。なんでもその時分七つか八つだつたらう、尋常一年か二年だつたよ。

その時分は、男も女もみんな同じ運動場で遊んだものだが、男女の交際といふやうなものは更になかつた。今考へて見ると、それも決して学校で禁じられてゐた訳ぢやなかつたんだね。みんな自分自分が堅く守つてゐたんだ。不思議な現象さ。

それといふのが、ほら、お互にからかはれるのが厭だらう、それだからだ。若し女と男が口でも利かうもんなら、女は女で友達にからかはれるし、男は男で友達にからかはれるんだ。それが恐いばかりに、間のやうな奴でも、学校では女にお辭儀一つしないんだ。

それ丈、女の子のずつと上の級のが、男の子のずつと下の級のと遊ぶ分には、なんとも言はれないんだ。同じやうに、男の子のずつと大きいのが、女の子のずつと小さいのと遊んでも、それは評判に

ならなかつたに違ひない。けれども男の方にそんな事をやる奴は一人もなかつたね……

その時分、女の方ではその小さい男の子を可愛がるといふ事が非常にはやつたもんだ。どの女の級にも、きつとその級全體のペットが、男の子の小さい方にあつた。運動時間になると、そのペットが大勢の女に取り卷かれて、それはそれはちやほやされる――袴を締め直して貰ふ、鼻を拭いて貰ふ、草履の鼻緒をすげて貰ふ……

つまり女の方が男より狡いんだね。又その狡い事が女には天性調和するやうに出來てるんだね。男の子の僕等でさへ、もうその時分は女の事を考へてるんだ。女の子の方は餘計に男の事を思つてなけりやならない筈なんだ。きつと腹ではみんな男に近づきたくて近づきたくて堪らないんだ。けれども女といふ奴は中々それを外に現すもんぢやない。そこで、その慾望を、小さな男の子を可愛がる事によつて充たしてゐるんだ。ところが女が子供を可愛がるのは側から見て如何にも美しい事だ。如何にも優しく見えるからあね。そこだ、女の天性が狡い事をするのに適してゐると言ふのは。

これが男であつて見給へ。短い袴をはいて毬栗坊主が、小さい女の子を側へ引きつけて見た所で、隨分不調和な譯さ、女は德だね……

藤村の弟がおみかさんの級のペットになつたのも、さういふ譯からだつた。併し、その中でも特別に可愛がつて呉れたのがおみかさんだつた。

門、藤村が弟の手を引つ張つて、學校へやつて來ると、運動場の隅に五六人堅まつてゐる女の生徒の中からおみかさんが出て來て、手招きをする。藤村の弟は藤村の手を放して、急いでおみかさんの方へ驅けて行くんだ。歸る時は、門の所で、おみかさんだの、おみかさんの級の外の人だのに取り卷かれてゐる弟を、藤村が手招きして連れて行くんだ。かういふ工合で、藤村の弟は自然と藤村とおみかさんとの交通機關になつた譯だ。

併しおみかさんは女の方での才物でもあつたし、中々道徳堅固な人でもあつたから、行ひにも愼みがあつて、容易に輕跳みな事はしなかつた。弟をやつたり取つたりする藤村に、詞一つ掛けるではない、お世辭一つするではない。唯その利口さうな目で僅に微笑むばかりだつた。ところが、それが却つて噂の種を播く事になつたんだ。

誰言ふともなく、おみかさんは藤村に惚れてゐるんだといふ評判が立つて來た。藤村の方ではおみかさんに氣のある事は、その弟をやつたり取つたりする態度で僕等の間によく知れてゐた。

僕は大に氣が揉めて來た。けれども、例の舊道徳觀から、奮つて藤村と爭はうといふ勇氣も出て來なかつた。ただ藤村とおみかさんが無言の内に仲の好いのを羨ましさうに默つて見てゐた。

暫くすると、藤村とおみかさんとの間に手紙の往復が始まつた……といふと大業だが、その一例は

こんなもんだ。

おみかさんが雜記帳か何かを千切つた紙に鉛筆で、

「けふは弟さんが見えませんが、どうあそばしたんです。信樂。」

といふやうな事を書いて、運動場で、例の關に渡すんだ。關がそれを藤村の所へ持つてくと、藤村が又畫學紙か何かの切れつぱちに、同じく鉛筆で、

「けふはおなかがいたくて休みました。藤村。」

といふやうな事を書いて渡すんだ。すると又信樂の方から、

「では、おだいじになさいまし。みか。」

といふやうな返事が來るんだ。

要するにかういふ他愛のない交通なんだが、それが又當時の僕等にとつては中々の大事件だつたんだ。

さういふ手紙の一つを、僕等の級で有名ないたづら者の鶴岡といふ奴が拾つたんだから堪らない。忽ち藤村とおみかさんとの艷聞が學校一般に廣まつて來た。尤も、それは生徒間の事で、先生には一向知れなかつたもんさ。一體、教師といふ者は生徒の精神生活に非常に密接な關係がありさうで、存外これと沒交渉なもんさね。それは今日教師になつて見て、始めて分かつたよ。

その内に、藤村とおみかさんとは時々關の家で會ふといふやうな噂まで立つて來た。まあ、復習會か何かで會つた事はあるかも知れないが、別に逢引といふやうな意味で會ふやうな事は確になかつたんだ。第一、おみかさんはそんな事をする女ぢやない。それはいまだに僕信じてるね。さう思ふのもやつぱり惚れてゐるせゐかも知れないさ。

さあ、藤村がからかはれる、からかはれる。朝、學校の始まるから、夕方、學校のしまふまで、少しでも暇さへあればからかはれるんだから堪らない。いつもその先棒は鶴岡だ。

鶴岡は落書の名人だつた。鶴岡の机の中には、いつでも教師が使ひ捨てた白墨が五六本、多い時は十二三本もはひつてゐた。

鶴岡はそれを持つて、所嫌はず落書をして歩くんだ。併し學校の建物へは決してしないんだ。學校の建物を汚して、それで捕まるのは愚劣だと思つてゐたんだね。中々利口な奴だつたからね。

鶴岡の落書するのは、學校へ通ふ道の塀だの壁だのだ。おみかさんが丁度通る道の塀に、大きく藤村の名を書いといたり、藤村の通る道端の塀に、大きくおみかさんの名を書いといたりするんだ。藤村の家の門に、「おみかさんが待つてゐるよ」と書いて、直ぐその足でおみかさんの家の前まで行つて、おみかさんの家の門に、「藤村が待つてゐるよ」と書いて來た事がある。

學校の裏門から、朝、大抵同じ時間に、藤村とおみかさんがはひつて來るのを知ると、その時間の

少し前に、裏門前の地べたへ大きく二人の名を書いて、その上に蝙蝠の相合傘を書いた。丁度同じ時間にその繪の前で落ち合つた藤村とおみかさんは、はツとして顔を眞赤にした。

鶴岡のいたづらは中々そんな事では止まなかつた。奇抜な意匠を人に褒められるものだから、益々圖に乘つて來て、益々盛な事をやつたもんだ。

甚しきに至つては、藤村の洋服だね、例の紺ヘルの奴だ、その背中へ落書をするんだからひどい。片假名で「ミカ」とか平假名で「しがらき」とか書くんだ。

「洋服が黑いから、ボオルドのやうで、白墨のうつりが好いぜ。」

とは、この落書博士の學說だ。

併し、藤村は何をされても決して怒らない。それが癪に障るから、尙みんなはからかふんだ。けれども、からかへばからかふ程、藤村は得意になつて來るんだ。

僕はもう氣が氣ぢやない。

おみかさんの方はと氣をつけて見ると、そつちでも中々評判が盛らしい。女だけに、鶴岡のやうな亂暴者はないだらうし、一體おみかさんといふ人が人望のある人だつたから、さうつけつけ言ふ事もなかつたらしいが、それでも女だけに又陰の評判が中々喧しかつたらしい。殊に學問の上から、器量の上から、おみかさんを妬んでゐる連中は、女一流の事實揑造をやつて、盛にそれを流布したものら

しい。

それらの噂を聞くと、藤村とおみかさんとの間には、もう夫婦約束でも出來てゐるやうに言ふぢやないか。

僕はもう氣が氣ぢやありやしない。

藤村の方では兎に角、なあに、おみかさんの方ではそれ程深入りをしてた譯ぢやないんさ。それでも僕は藤村が妬ましくつて妬ましくつて堪らない――

でも、女は少しも憎くないのが不思議さ。唯、憎いのは藤村だ、藤村の器量の好い事だ、藤村に弟のある事だ……

嫉妬がやがて復讐になるのは一般の公式だ。僕もどうかして藤村を虐めてやりたいと考へ出した。

そこで僕は鶴岡に同盟した。鶴岡に同盟して藤村をからかひ出した。自分が身に覺えのある事だから、僕のからかふ文句は一々藤村の胸にドキンと來るやうな事ばかりだ。藤村は心の奥底を解剖されるやうな氣がして、いつも眞赤な顏をする。それが又面白いと言つては、側から鶴岡が囃すんだ。隨分罪な事をしたもんさ。

しかも、僕は自分の事は噯にも出さなかつたんだ。口では、信樂なんか何だ、おみかなんて下らない女だ位にしか言つてゐなかつたんだ。それでゐて腹ん中は惚れて惚れて惚れ拔いてたんだから面白

いぢやないか。僕の卑劣な根性は子供の時からなんだね。

でも、藤村は左程に僕等を怨みもしなかつた。相變らず交際は續けてゐたもの。藤村もやつぱり戀に目が晦んでゐたんだね。

併し、向うは明るい暖かい國の盲だ。こつちは暗い冷たい國の盲だ……

罪滅ぼしだから何も彼も言つて了ふがね。その時分藤村をからかふ文句で、僕が巧いのを發明した事がある――

「みかん、きんかん、柿の種。」

といつて囃すんだ。おみかさんが蜜柑さ。藤村の名が錦吾だから金柑さ。そこで、

「みかん、きんかん、柿の種。」

さ。これでもその時分にしちや隨分腦味噌を絞つた結果さ。これがはやつてね。いつも鶴岡が音頭とりで、藤村に浴びせかけるんだ。

雨が降つて一日教場にでもゐるやうな時は、それこそ大變だ。寄ると觸ると、一二の三で、

「みかん、きんかん、柿の種。」

が始まるんだ。藤村が恐縮して、耳を押さへて、自分の席に小さくなるのを見ると、戀の敵の横つ腹を、刀か何かで抉つてでもゐるやうな氣がしてね、思はず獸の吠えるやうな聲を出して、それに加

はつたもんだ。

そして家へ歸るとね。そつと自分の部屋へ閉ぢ籠つて、獨で口惜しがつて泣いてゐた。先づ何より、自分の戀の思ふやうにならないのが悲しかつたんだ。それから藤村に自分の物でも取られたやうな氣がして、それが第二に口惜しかつたんだ。けれども、藤村のやうなおとなしい子を虐めるのは確かに罪惡だとは思つてゐた。その罪惡だと思ふ事を自分が毎日やつてるといふ事が、又一面に於いて悲しかつたんだ――俺は生れて今までに、こんな悪い事は一度もした事がなかつた。こんな事をするのも畢竟戀が叶はないからだと思ふと、底の知れない谷へでも引き摺り込まれるやうに、そこらが暗あくなつて來るんだ。

こんな風で、學校では鶴岡なんどと一緒に、大強がりで藤村を虐め散らしても、家へ歸ると、女のやうに隅つこへ引つ込んで、メソメソ泣いてゐたもんだ――矛盾だね。

そんな卑劣な事をしながらも、僕はやつぱり品行方正學術優等の模範生徒だつた。這般の消息はまるで教師に分からなかつたんだね。要するに、授業時間に溫順で、試驗の答案に間違ひさへ少ければ、それで學校の受けは好いもんなんだからね。學校の教育なんてものは、生徒の内部生命とはなんにも關係がないもんだね。

藤村とおみかさんとの交際は決して初め以上に深くならなかつた。あんまり評判が高いんでおみか

さんも注意したんだね。藤村も同級の友達にあんまりからかはれるんで、成るべくおみかさんを避けるやうになつた。

それでもおみかさんは相變らず藤村の弟を可愛がつてゐた。多分良心に恥づる點がなかつたんだらう。それとも心から眞面目に藤村を思つてゐたのかも知れない。それで、世間で何を言はうと、そんな事は構はないといふ、しつかりした決心を持つてゐたのかも知れない。

どうもさうぢやないかと思はれるやうな事が起つて來た。

七

丁度、その年の夏に日淸戰爭が始まつた。

僕等少年は戰爭熱、勳章熱、愛國熱に浮かされて、みんな軍人志願になつたものだ……

愛國熱はひどいッて。成程ひどいかも知れないね。併し、熱には違ひない。その熱たるに於いては、戀愛と何等の相異なしさ。時が立ちやあ冷めるんだ。

さあ、その愛國熱が盛になつて來た爲めに、戀愛熱などはどつかへすつ飛んで行つて了つた――藤村とおみかさんの問題も、一向同級間の話題に登らなくなつた。

僕も戰爭熱に浮かされて、體の弱いのに軍人を志望するやうになつた。まだ碌々讀めもしないのに、

戰爭に關する有らゆる雜誌を取つて貰つたり、木版、石版、寫眞版を問はず、あらゆる戰爭畫を買つて貰つたりした。

それでも、僕はやつぱり胸の奥で、そつとおみかさんの事を思つてゐた。そして相變らず藤村を羨んでゐた。藤村も戰爭の爲に女を忘れるやうな男ぢやなかつた。

ある晩、學校の運動場で幻燈會があつた。戰爭の繪を寫して生徒に忠君愛國の心を興させる爲めだつたんだ。僕は併しそんな事より、夜、學校で女の生徒と一緒になるのが何より嬉しかつた……

每朝、僕が「禮」を言ふ時に男生と女生が列ぶ所へ、教場から生徒の腰掛をみんな持ち出して列べた。幻燈の器械は玄關の間へ据ゑた。寫す幕は廊下へ下げた。

男生と女生は朝のやうに運動場の左右に分かれて、腰掛に腰をかけた——運動場で腰をかけるといふ事が既に珍しいのに、それが夜だから尚珍しい。しかも僕の級とおみかさんの級とは、隣り合つて坐つてゐるんだ……

藤村は腰掛の一番女の方に近い端つこに腰をかけた。そして弟を自分の膝に倚りかからせた。僕は藤村の隣りに腰をかけた、即ち藤村一人を隔てて女に一番近い所に坐つたんだ。

眞つ暗な晩だつたから、女生の顏は更に見えない。ただ髮の匂と着物の擦れる音がするばかりだ——尤も始終ペチャペチャしやべる聲は聞こえた。

……夜といふものは妙なもんさね。例へば女なんかと往來を歩いても、晝と夜とでは感じがまるで違ふからねえ。晝だと一寸しか距離を置かずに歩いてゐても、一町も離れてゐるやうな氣がするのに、夜だと一間位離れて歩いてゐても、肩と肩とが摺れ合つてるやうな氣持がするのはどういふもんだらう。あたりが暗いんで、氣の散らないせゐもあるだらうが、どうも唯それだけぢやないらしい。夜といふものは、人と人とを結びつける一種不思議な力を持つてるやうだね――僕にはどうもさう思へる――

その幻燈會の晩の印象なんども、夜といふものの爲に、特別に深くされてゐるのかも知れない。併し、夜よりも更に神秘なものは戀だ、いまだに僕がその晩を忘れる事が出來ないのは戀故だ……戀の悲み故だ……

幻燈が映ると、そこらが薄明るくなるんだ。すると、女の方がほんやり見えるんだ。驚いたね。おみかさんは藤村のすぐ側にゐるんだ。男の方に一番近い所に腰かけてゐるんだ。兩方で手を出せば、手の握り合へさうな所に坐つてゐるんだ。

併し、藤村に次いでは僕が一番おみかさんに近い所に坐つてゐるんだ。おみかさんの近くにゐるといふ事を思ふと、僕はなんとは言へず嬉しかつたが、それが「藤村に次いで」であるといふ事に思ひ至ると、僕は又なんとも言へずに口惜しかつた……

僕のおみかさんに對する運命は、それから後もずつとそれだつたんだね。決して遠くに離れてゐるんぢやない。いつでも近所にゐながら側に寄ることが出來ないんだ。二人の間には、いつでもきつと誰かが「腰をかけて」ゐるんだ。それがね。情が熱して來て、目が晦んで來ると、つい間にある物が見えなくなつて來るんだ。そこで、そら、間にさういふ邪魔があるのに、無理にもおみかさんの方へ進まう進まうとするんだらう。だから躓くんだ。

僕とおみかさんとの間には永久に埋められない、永久に橋の架けられない、深い溝があるんだ。それが時々見えたり見えなかつたりするんだ。見える時は悲しい時だ。見えない時は落つこちる時だ。それが初めから極まつてゐた事なんだ。それが中々その當時の僕にや分からないやね。なあに、「その當時」ばかりぢやない。それから後もずつと分からなかつたんだ……

幻想が映つて、あたりが明るくなると、僕はきつとおみかさんの方を見た、その度におみかさんはきつと藤村の方を見てゐたやうな氣がした。

佐崎大尉奮戰の圖が映つた時、男生は一同起立して、

「護るに安き要城の
名は徒のものなれや……」

といふ歌を唄つた。

野戰病院の圖の映つた時、女生は一同起立して、

「火筒(ほづつ)の響き遠ざかる

あとには蟲の聲高く……」

といふのを唄つた。

僕は大勢の女生の合唱の中からおみかさん一人だけの聲を聞き取らうとした。繪の映つてゐる時だから、あたりは薄明るかつた。立つてるおみかさんの色は薄かつたが、形ははつきり見えた。

僕はぢつとおみかさんの口を見た……おみかさんの口の動くのを見詰めた……その口から出る聲を聞き取らうとした。

百人千人女のゐる中でも、自分の思つてゐる女は直ぐと見つかるもんだ。僕は多くの女聲の中から直ぐとおみかさんの聲を聞き分けた。

美しい聲だ、透き通るやうな聲だ、銀鈴を振るやうな聲だと思つた――僕はこの晩、初めておみかさんの聲を聞いたんだ……

唱歌が終ると、幻燈の繪が消えて、あたりが暗くなつた。

次に又何かの繪が映ると、又あたりが明るくなつた。見ると、いつの間にか藤村の弟がおみかさんの肩へ行つて、おみかさんの膝に寄つ掛かつてゐる。

おみかさんは藤村の弟の耳に口を寄せて何か囁いた。すると藤村の弟は恥つかしさうな科(しな)をしながら、見貰の方を見てニッコリ笑つた。おみかさんも藤村の弟の顏から藤村の顏に目を移して、ニッコリ笑つた。藤村も弟の顏を見て笑つて、それからおみかさんの顏を見て笑つた。

その樣子はいまだに目についてゐる。

その時おみかさんは藤村の弟に何を言つたのか、僕には少しも分からなかつた。恐らく藤村にも分からなかつたに違ひない。分からないくせに、分かつたやうな顏をして藤村は笑つたんだ。又おみかさんも自分の言つた事の藤村に分からないのはよく知つてゐるんだ。知つてゐながら、如何にもそれが藤村に分かつたやうに、藤村の顏を見て笑ふんだ。

要するに二人は、藤村の弟を道具に使つて、意味のない笑の交換をやつたんだ。

意味のない笑の交換。意味のない……その意味のない所に意味のあるのはよく分つてゐる……

僕はそいつを眼前に見せられたんだ。

それに、おみかさんは藤村の弟に囁いた事の何だか分からないのも氣になつたんだ。一體、何を言つたんだらう。どんな優しい口の利きやうで、どんな優しい事を言つたんだらうと思ふと、もう堪ら

なくなつて來た。

　途端に幻燈の繪が消えて、又あたりが暗くなつた。

　すると、おみかさんの頭が藤村の方へ近寄つて來たやうな氣がした。藤村の頭もおみかさんの方へ近寄つて行つたやうな氣がした。そして、

「弟さんは可愛くて入らつしやるのね。」

　とおみかさんが話しかける聲と、

「いんえ、いたづらでしやうがありません。」

　と藤村が答へる聲とが、相次いで聞こえた。

　たつたそれつきりなんだ。それ以上になんにも話があつたんぢやない。でも、僕は、それを聞くと、もうがつかりして了つた。

　二時間も三時間も仲好く話してるのを聞かされたやうな氣がしたんだ……いや、二年も三年も仲好く暮らしてるのを見せられたやうな氣がしたんだ……

　二人が話をした――僕の目の前で話をした――といふ唯それだけの事實が、僕の頭腦から殆ど總ての希望を奪ひ去つて了つたんだ。子供の神經は鋭敏だからね。

　こりやもう迚も駄目だと思つたんだね。おみかさんに對しては、僕にもう兎の毛程の權利もないと

思つて了つたんだね……

幻燈は又映つたが、僕の頭はもう明るくならなかつた。

暗闇の砂利の上へ、涙が止所もなく落ちた……

それからといふものは、あんまりおみかさんの事を思はなくなつた。もう駄目だと諦めて了つたんだね……「今泣いた烏がもう笑つた」で、子供の内といふものは、割合に諦めが好いもんさね。

そこで、自分で自分を責めて――中々當時は道德家だつたからね――今までは下らない事ばかりで頭を痛めてゐた、これからは又勉強しなければならないと思つた。

やがて、十五の春が來て、卒業試驗の終るまで、僕は一生懸命に勉強した。

朝は冬でも四時には起きた。自分の部屋の雨戸を二三枚あけて、まだ眞暗な庭の敷石に手水盥を置いて、顏を洗つた。それからランプをつけて、ランプの下で本を讀んだ。自分の本を讀む聲が、朝の冷たい空氣の中に澄んで聞こえる時は自分で自分の聲に聞き惚れたもんさね。

でも、時々は東雲の空に光の弱い星の瞬くのを見て、何とはなしにおみかさんを思ひ出すやうな事もあつた。

……思ひ切るなら思ひ切るで、すつかり思ひ切つて了へば好いのに、何事も曖昧だからいけないのさ。おみかさんの事だつて、その時分に一旦駄目だと思つたら、もう跡形のないやうに頭を洗つて了

へば、何の事はなかつたのさ。未練があるから損をするんだ、執着があるから失敗するんだ。

けれども、一面から考へて見れば、又それも無理のない話さ。何しろまだ子供だらう。體力も不完全なら、頭腦も不完全さ。まだ「出來上がらない」人間なんだ。その「出來上がらない」人間のすることだから――戀の爲方も不完全なら、戀の破れ方も不完全なのさ。

少年の戀は微に出來て微に破れるんだ。丁度細い絲で出來た蜘蛛の巢が、細い雨で破れて了ふやうに――しかも、その蜘蛛の巢の破れは、いつまでも木の枝に引つ懸かつてゐるんだ……

僕は諦めたと思つたおみかさんを、やつぱり忘れる事が出來なかつたんだね。

勉強したから、卒業試驗の成績は級で一番好かつた。卒業證書の外に、學術優等品行方正の賞狀も貰つた。區長からの賞品も貰つた。

おみかさんも同時に一番で卒業した。そして同じ式場で、同じやうに卒業證書と賞狀と賞品とを貰つた。

僕とおみかさんとは學校一の秀才と才媛だつたんだね。雙美だつたんだね。けれども、その時は僕はもう一向そんな事は考へなかつた――半分は反抗心からだ、半分は絕望からだ。

「俺とおみかさんとはなんにも關係があるんぢやない。」

かう思つて、花やかな式場で、心寂しい思をしてゐたものさ……

學校で貰つた物を腋の下に抱へて、家へ歸つて來る途中、どつかの家の百日紅が盛りだつた事をまだ覺えてゐる。僕はその百日紅を眺めながら、ほツと息をついた……やうやく八年の學校を終へる事が出來た……これからおみかさんなどとは全く別の道を歩いて行かなければならないんだ……これから男ばかりの學校へ行かなければならないんだ……

八

小學校の高等二年を出ると中學の一年へ無試驗ではひれるやうになつたのは、その年からだつた――小學六年制度の前觸れだつたんだねえ。

そこで、僕等は今まで小學校で二つ下の級にゐた人達と中學では同じ級にならなければならない事になつた。それが厭だといふので、僕の級の連中は大抵中學二年の入學試驗を受けた。然るに僕一人は、一年の順から言へば、三年を受けるのが當り前だと言つて、大膽にも三年の入學試驗を受けた――これも虚榮心からだ。名譽心からだ。

ところが、三年の入學試驗には幾何と代數がある。この二つは小學校で教へられなかつたから、僕は馬場向うの或私塾へ通つて、入學試驗に間に合ふ程度まで急いで教へて貰つた。

さて、試驗を受けた。

心配してゐた代數も巧く行つた。幾何も自分では滿點だらうと思ふ位に行つた。小學校では經驗のなかつた英語の會話の試驗も I cannot understand what you say. といふ文句一つだけを暗記して行つて、少しむづかしさうな事を言はれると盛にこれを用ひたので、Yes, No, の一てん張りよりは、どうやら點が好ささうだつた。

ところが歴史がいけなかつた。地理がいけなかつた。歴史や地理の教へ方は、小學校とはまるで違ふと見えて、殆ど見當の附かない問題ばかり出た。

やがて、入學試驗成績發表の日が來た。

二年級の連中はみんな及第したが、僕だけは落第だつた。それでも當時の僕は極めて自惚の強い人間だつたから、母にせびつて、中學校の教頭を尋ねさせた。若しや間違ひではあるまいかといふので。母は魚か何かを持つて、中學の教頭を尋ねた――尤も、少し知合でもあつたんでね。すると教頭の言ふには、試驗の成績は落第ではないんだが、三年に入れるには餘り年が入つてないので、議論になつたのだ。二年なら無試驗で入れて上げる――とかうだつた。

僕は「試驗の成績は落第ではないんだが……」に稍虛榮心の滿足を得たが、やがてそれは嘘だらうと思つた。母の手前、さういふお上手を言つたに過ぎないだらうと思つた。

僕はやむを得ず、みんなと一緒に二年級へはひつたが、これが爲に僕の虛榮心は少なからず傷つけ

られた。

「みんなと一緒に……」これが僕大嫌ひなんだ。なんでも「自分だけで」一人占めにしたいんだ

その時も自分だけ三年にはひつて、自分だけ特殊な人になりたかつたんだ……

小學校時代に『特殊な人』だつた人間も、中學時代にはえて『平凡な人』になる。中學時代に『特殊な人』だつた人も大學時代にはえて『平凡な人』になるもんさ。

小さな世界で威張つてゐた人間が、年をとるに連れて、群集といふ大きな世界の中へ段々と消えて行く有様は、こんな所にも見えるもんさ。

學校の行き歸りにも、今までよりは多くの女に逢ふやうになつた。自分が『群衆の一人』となると共に、自分の心に映るおみかさんも、やうやう『群衆の一人』となつた。

僕の通つた中學校は僕の家から一里も離れた所にあつた。坂を一つ上がつて、降りて、又一つ坂を上がつて、降りて、又一つ坂を上がつて左へ折れると堀端へ出る。この堀端にずうつと附いて廻つて、袁屋敷町を通り抜けると、鐵道馬車の通つてゐる賑かな町へ出る。これを突つ切つて、角に新聞社のある前の橋を渡ると、大きな芝居がある。その前を通つて又一つ橋を渡ると、僕の學校があつた。

今ではこの道もずうつと電車が通ふやうになつたが、その時分にはまだなんにもなかつたんだ。僕

等は雨の降る日も風の吹く日も、この一里の道をテクテク歩いて通つたもんさ。

三つ目の坂――堀端へ出る直ぐ前の坂の上に或女學校があつた。その女學校の隣りの屋敷から、毎朝洋服で學校へ通ふきやうだいのお嬢さんがあつた。僕は先づその妹の方に目をつけたもんさ。毎朝時間を計つては、そこの家の門の前まで行つて、門の中からその妹の出て來るのを樂しみにしたもんだ。おみかさんの家の門の前で下駄を割つた時から見ると、もう大分大膽になつたんだね。併し、このお嬢さんの通ふ學校は、僕の學校とはまるで方角違ひにあつた。だから、いつもただ門の前で一目會ふだけの事しきや出來なかつたんだ。

それから堀端へ出るんだ……その時分はまだ土手の上を歩いても好い時分だつたから、僕等は毎日、青柳の並木の下ををどりこ草やぎんぽうげの花を踏み分けながら通つたもんだ……

すると、毎日のやうに、僕等と丁度反對に、例の屋敷町の方から、堀端の土手の上を歩いて、僕等の家の方へ通つて來る一人の女學生があつた――坂の上の洋服は馬鹿にハイカラだつたが、これは又馬鹿に日本式だつた――

丈の高い、目の大きな女でね、髮はいつも日本髮に結つてゐた。長い蝦茶色の袴を胸高にはいて、いつも右の手にきちんと結んだ大きな包みを抱へて、嚴肅な歩調でトットッと歩いて來る所が如何にも立派なんだ。これにも僕は目をつけたもんさ。

尤も、これに目をつけたのは僕一人ぢやなかつた。僕の級で僕の近所から通ふ連中は大抵目をつけたんだ。さうして、みんな土手の上の草の中の狭い道で、向うの袴とこつちの制服がすれすれになつて擦れ違ふのを喜んだものさ。

この女の人には――いつも逢ふ時間が精確だつたから――パンクチユアルといふ綽名をつけた。坂の上の美人には――名前の頭字を飜譯して――マウンテンと名をつけた。山口といふ姓だつたんだ。それに坂の上といふことも利かしたつもりさ。

鐵道馬車の通つてる賑かな町の、角から二三軒目に大きな麵麭屋があつた。僕はいつでもここでお晝の辨當を買つた――捻麵麭だの、束髮麵麭だの、菓子麵麭だの、ジヤム麵麭だの、買ふものはその時々で色々違つたが、買ふ高は毎日極まつてゐた。ところが、この店の賣子の女の子の中で、いつも僕に麵麭を一つそつと「おまけ」に呉れる奴があつた。僕は又これにも目をつけた。齒の綺麗な目の涼しい、頰ぺたの赤い女だつた。これには別に綽名はつけなかつたよ。

この三人に逢つて、それから新聞社の前に立つて、三面記事を讀むんだ。それから芝居の前に立つて、看板を眺めるんだ。それからやつと學校へはひるんだ――生意氣になるばかりさね。

無論、友達も小學校時代とは違つて來た。藤村も鶴岡も園もみんな別の中學へはひつて了つたんだ。それでも初めの內は繁々往來もしてゐたが、てんでに中學の方で仲の好い友達が出來ると、その方と

附き合ふのが忙しくなつて、段々遠々しくなつたもんさ。

中學時代の友達については別に言ふまい――本題と關係がないから――まあ、僕同樣、生意氣な連中だつたと思へば間違ひなしさ。併し、同じ生意氣でも、今日の中學生の生意氣とは大分質が違つてゐたね。今日の中學生は時勢と步調を同じにして、ひどく現實主義になつたやうだが、あの時分の中學生は、まだまだ理想主義だつたね、空想だつたね……

だから、女に手紙をつけるの、交際を求めるのといふ事は何か非常な惡い事でもあるやうに思つてゐたんだね。尤もさういふ事をする連中も全くないではなかつたんだ。けれどもさういふ連中は、まあ一般から排斥されてゐたもんだ。僕等は唯往來で女に逢ひさへすれば、それで滿足したもんだ。往來で逢つて、向うが一日でもこつちを見て吳れれば、それで滿足したもんだ。若し何かの拍子で、口でも利かれたら、それこそもう死んでも好いといふ氣になつたかも知れないんだ……それから思ふと、今日の若い連中は進步したもんさ。突貫しなければ止まないんだからね。

昔の戀が歌なら、今日の戀は電話だ。昔の戀が野外要務令なら、今日の戀は實戰だ。今日の戀は、高い山から谷底を見てゐるのではない。谷底へ降りて、瓜や茄子の花を千切つて來るんだ。

パンクチュアルには每朝逢つたが、逢ふといふ以上には一步も進まなかつた。ただ、先生は一體何處から出て來るのか、先生の家は一體何處なのか、それを探索して、やつと知る事が出來た位なもんだ。

パンクチュアルの家は、僕等が毎日通る屋敷町のはひり口にある小さなホテルの隣りだつた。中々立派な家で、玄關の前にも一寸廣い庭もあつた。いつも綺麗な車が一二臺、缺かさず玄關の前で待つてゐた。

その小さなホテルは、その後自火で燒けて了つた。パンクチュアルの家も、その後市區改正で取り拂はれて了つた。今日ではホテルのあつた所も、唯の往來になつて了つて、電車がジヤンジヤン通つてゐるばかりだ。もう何の跡形もない。

パンクチュアル先生自身も、僕が中學の四年になつた時分に、學校でも卒業したのか、もうぱつたり影を見せなくなつて了つた。

これはまあ目をつけたとはいふものの、極輕い戀で、話す程ではないんだが、順だからまあ爲方がない。

マウンテンの方はこれから見ると餘程熱烈だつた。

パンクチュアルの方は、向うで一日もこつちへ與れたんぢやないけれども、マウンテンの方は時々妙な目つきをして見せたもんだから、それですつかり夢中になつて了つたんだね。

毎朝前を通るばかりぢやないんだ。學校の歸りにも通つたんだ。夕方の散歩にも通つたんだ。けれども、朝の外はめつたに逢はないんだ。

學校の歸りに、友達と一緒にマウンテンの家の前まで來ると、みんなして僕をからかふんだ。そこまで來ると、きつと僕が首を左へ向けて門の中を見るといふので、終には友達がみんなで號令をかけるんだ——

「かしらあ——左。」

なんてね。

それでも、もう大分面の皮が厚くなつてゐたから、割合に平氣だつた。寧ろからかはれて喜んでゐたね。

マウンテンは中々おきやんで交際家らしかつた。よく自轉車や馬車で方々へ出かけた。それを見ると、いつでも僕は、自分がさういふ社會へ首を突つ込む便のないのを悲しんだ。

でも、マウンテンがどつかの音樂會で獨唱をやる事などが分かると、高い切符を買つても、それを聞きに——いや見に行つたもんだ。

また女學校で活人畫などをこの人がやる時は、どうにかして切符を手に入れて、見に行つたもんだ。けれども、やはりパンクチユアル同樣、一向それ以上に近つく事は出來なかつたんだ——つまりこつちが意氣地なしなんだね。なあに、ぶつかつて見れば、存外な事もあるもんなのさ。

まあ僕が一番この人に近づいたと思つたのはこれだ——

雪の降る晩に、この人の家の近所に火事があつた。それが僕の家の窓から見ると、丁度この人の家が燒けてゐるやうに見えるんだ。僕は驚いて、寢間着の上へ外套を羽織つて、眞暗な坂を雨を突いて、驅け上がつたり驅け降りたりして、やうやくその家の門の前まで來た。

すると火事は少し先だつた。

併し、火の粉が降つて來る位の近さではあつたから、マウンテンの家も大分ごたごたしてゐたらしい。僕も見舞人のつもりで、門の中へ飛び込んで見ようかとは思つたが、その勇氣は迚もないから、暗闇の雨の中にぢつと突つ立つた儘、火事を見てゐた。

すると女の話聲がするから、門の方を透かして見ると、いつの間にか、長いショオルを頭から被つて蝙蝠傘をさした女の人が二人、門の少し前へ出て、火事を見てゐる。

僕は後からそつとその側へ寄つて見ると、一人はマウンテンのお母さんらしい。一人は確にマウンテンだ。

僕は出來るだけその側へ寄つて立つて、默つて火事を見てゐるやうな顏をしながら、時々マウンテンの顏を覗いたもんだ。

マウンテンは青白い顏をして慄へてゐた。時々火がぼつと燃え上がると、マウンテンの可愛い目の涙に潤んでゐるのが悲しさうに光つて見えた……

その晩、或電燈會社と或牛乳屋が燒けたのを覺えてゐる　明くる朝學校へ行く時、火事場を通つて見たら、板圍の内に牛が五六頭黑くなつて死んでゐた。

併し、マウンテンの方も、それつきりの話さ。間もなく一家を擧げて京都かどつかへ越して行つて了つたんだ。それつきり消息なしさ。又消息のありやう筈がないやね。

ところが、まだマウンテンがその坂の上の家にゐた時分だ。マウンテンの家の隣にあると言つた女學校ね、その女學校へおみかさんが通つてるといふ話を、ふと何處かで耳にした。

それから、學校の行き歸りに、隨分氣をつけて見たんだがどうもさうらしい人の出はひりする樣子がないんだ。で、嘘だらうと思つてゐた。

然るに、マウンテンが越して了つてから間もなくの事だ。或秋の夕方だつた。學校の歸り道に、いつもの通りマウンテンの元の家の前を通つた。マウンテンの家の門は堅く閉ざされてゐた。その前に飴屋が荷をおろしてゐた。隣の女學校の小使の子が飴を買つてゐた。飴屋の太鼓の單調な音が、寂しい屋敷町に響いて、何となく心細かつた……

女學校ももう引けた後と見えて、ひつそりとしてゐた。

坂を降りて、上がつて、又降りて上がると、もう僕の家が坂の下に見える。僕は腹が減つてゐたから、早く家へ歸つて何か喰べようと思つて、大急ぎで歩いた。

すると、僕の少し先を、一人で歩いてる女學生がある。地味な羽織の下から、濃い蝦茶の袴が少し出てゐる。髪は銀杏返しで、白い物をかけてゐる。どうも、その後姿が、何處かで見た事のある人のやうな氣がするんだ。

けれども僕の頭はその頃ゐなくなつたマウンテンの事ばかり考へてゐたから中々思ひ出せない――併し、急いでゐたから、直きその人に追ひついた。追ひついて、ひよいとその女學生の顔を見ると、それがおみかさんさ。

僕は驚いて、顔を眞赤にした。おみかさんは動じた樣子もなかつたが、それでも一寸は染めたらしかつた。

僕は極まりが惡いから、どんどん追ひ越して、家の方へ急いで坂を降りた。家の門の前で、恐々振り返つて見たら、もうおみかさんの姿は見えなかつた。多分、僕の家の向うの坂を降りると、直ぐ右へ曲つて了つたんだらう――道が違ふからめつたに逢はなかつたんだね。

やつぱりおみかさんはマウンテンの隣りの女學校へ行つてゐたんだね。けれど、それはその時始めて分かつたんだ。

流石に、その日は色々と小學校時代の事を思ひ出したね……けふ、どうも見たやうな女の人だと思つた時に、一番深く頭へ映つたのは、あの頭に掛けてゐた白い物だ。おみかさんは白い物が昔から好

きだつた。小學校時分には襦袢は常に白いのを着てゐた。いくら大勢女生のゐる時でも、襦袢の襟が眞白なので、おみかさんのゐる所は直ぐと分かつたもんだ……僕もその眞似をして、冬でもシャツは着ずに、木綿の白い襦袢ばかり着てゐた事があつたつけ……

などと思つたが、それもその時限りで、もうおみかさんの事は、以前程僕の頭の中で重きをなさなくなつて了つた。

その後、一二度、學校の歸りに逢ふ事は逢つたんだが、もう一向冷淡なものさ。

その時分の僕等の頭と來たら、始めて花園へ連れて來られた赤ン坊が、あつちの花にも、こつちの花にも、目移りがするやうに、あれも好い、これも惡くないで、往來で逢ふ程の女はみんな思つてゐたんだね。それだもの。『おみかさん』などといふ古い本は、つまり新しい本の下積にされて了つたんだ。

パンクチユアルも見えなくなつたし、マウンテンも越して了つたんで、僕は麵麭屋の賣子に毎朝會ふのを唯一の樂しみにするやうになつたが、それも亦いつの間にか店に顏を見せなくなつて了つた。年期を勤め上げたのか、不都合があつたのか、それは知らない。この先生だけには口を利く機會も澤山あつたのだからせめて家でも聞いて置けばよかつた、と非常に殘念がつた。

その後いつだつたか小金井の花見でこの女に逢つた事がある。その時はもう赤い手絡をかけた丸髷

着て、商人風の亭主らしい男と列んで歩いてゐた。それでもまだ感心に僕を覺えてゐてね、僕の方を見てニッコリ笑つた。僕のやうな燒餅燒でもね、この時ばかりは女の幸福を祈る氣になつたね……

　これで先づ初めの三人はみんなおじやんになつて了つた。それでお終ひにしたかといふと、中々さうでない。

　三年四年、五年と、段々級の進むに連れて、まだ隨分色々な女に目をつけた。でも、相變らず遠くから眺めて、勝手な空想に耽つてゐるばかりで、一向振るつた事もなかつた――

　友達の家のかるた會で惚れた女があつた。それは一度逢つたきりだつたが、隨分いつまでも思つてゐた。小作りな、目のやさしい、聲の小さい女だつた。友達のお父さんが、吾々のかるたをやつてゐる最中に、何處からか連れて來たんだ。友達のお父さんは少し醉つてゐてね、その娘をみんなのゐる座敷へ無理に推し入れて、

「さあ、これも入れてやつて呉れ給へ――どうです、諸君、中々別品でせう。」

と言つた。一つは、この友達のお父さんの詞にも刺戟されたんだね。見ると、如何にも綺麗な女だ。僕は直ぐぼうッと來て了つたんだね。

　いまだに何處の娘だか知らないんだ。ただ名前を知つてゐるだけさ。でも、隨分一時は夢中だつたもの。今考へて、その時分の日記を見ると、この娘に關する歌のやうな美文のやうなものが澤山書いてあ

る……

近頃、教科書屋か何かの番號を見るんで、下宿の電話帳を繰つてると、ふとこの女の人の名前が出て來た。おやと思つて見ると、それが下町の鳥屋の主人なんだから面白い――無論、同名異人なのだらう。

それから、また、僕の家の隣りへ越して來た或官吏の娘に惚れた事がある。それは僕より二つばかり年上だつた。目の鋭い、顎の尖つた、顏の靑白い女だつた。

この人とは口も利いたし、往來もしたが、やはり胸中悶々の情を訴へるといふやうな所までは行かなかつた。相變らず獨で思つて、獨で惚れてゐたんだ。

或日この人が、學校の歸りが大變遲くなつて、もう日の暮れかかる時分に、家の近所まで來ると、醉つぱらつた士官學校の馬丁が二三人向うからやつて來て、通せん坊をしたり、からかつたりした。この人が靑くなつて往來に立ち竦んでる所へ、僕が飛び出して行つて、その馬丁等を追つ拂つてやつた事がある。その時は大層喜んでね、僕の家の玄關の前で、幾度か禮を言つた嬉しさうな顏を、いまだに僕は覺えてゐる。

隣りと僕の家と合同で、上野へ花見に出かけた事があつた。一日散々遊んで、夕方、本鄕の龍岡町までみんなで步いて來ると、俄雨に逢つた。そこでみんな車に乘つたが、急の事で車の數が足りない。

二三の人は合乗に乗らなければならなかつた。ところが、偶然にも僕はその隣りの娘と同乗しなければならない事になつた――隣りの小母さんの命令でね。

幌をおろした合乗に、二人くッついて乗つて、暗闇の雨の中を曳かれて歸つた時は、もう總ての望みが足りたやうな氣がしたね。その時、僕の全世界は、その合乗の幌の内に小さく縮められて了つたんだねえ。

隣りの娘は家へ著くまでなんにも言はなかつた。僕も家へ著くまでなんにも言へなかつた。僕はもう眞赤になつて、口の利けない程胸をドキドキさせてゐたんだ。

家へ著いて、車を降りると、隣りの娘は、

「けふは面白うございましたねえ。」

と、そこでやつと一言いつた。そこで僕も、

「ほんとに面白うございました。」

と、鸚鵡返しをした。

この戀もこれつきりさ。間もなくお父さんが何處かへ轉任するんで、娘も一緒にゐなくなつて了つた。

つまり、いつでも機會を逸して了ふんだねえ。折角機會があつても、まだそれを摑むだけの權力が

なかつたんだねえ。そんな握力はない方が好いのかも知れないんだけれども、やつぱり段々に附いて來るんだから爲方がないさ。
その次にした戀が、先づ中學時代の戀の終りさ。こいつは大分危險なところまで進んだんだが、生來の燒餅が飛んだ役に立つて、とうとう神聖を汚さずに了つたんだ。
僕の通つてゐた中學校の直ぐ脇に、僕等同年輩の男女の學生が、毎日のやうに集まる場所があつた。それは僕の中學ではない外の中學校へ通ふ或學生の家だつた。この學生は大分年を取つてゐた。親父は何の商賣か、始終外へばかり出てゐた。藝者上がりのお母さんは、病身で、もう一向息子のする事に干渉する勇氣がなかつた。
そんな家のある事は、僕五年になるまで一向に知らなかつたんだ。ところが、もう間もなく五年も卒業しようといふ正月のかるた會に、或友達に引つ張られて、初めてこの家の敷居を跨いだ。
その晩は雪が降つたのに、二十何人といふ男女の學生が集まつた。いつも集まる顏ぶれがみんな揃つたとこへ持つて來て、僕のやうな飛び入りが大分あつたんだね。
男は方々の中學の奴等だ。僕の學校の奴も併し五六人はゐた。しかも隨分意外の奴がゐた。まさかこの人がこんな所へ來やしまいと思ふやうな人がゐたね。僕も傍から見れば、確にその一人だつた。
女は町娘風三分に女學生風七分といふやうなのが多かつた。尤も、中には純然たる町娘もゐた。又純

然たる女學生もゐた。何様親に隱れて若い男と交際しようといふ連中だけあつて、いづれも目の働きが敏活だ、口の利きやうに色氣がある。いづれも日本式の「娘さん」ぢやない――日本の家庭から見ればどれもこれも「大それた娘」達だ。

中にも一人、丈の高い、肉づきの好い、色の白い、目に潤みを持つた、下町のお孃さん風をしたのが異彩を放つてゐた。この人のお父さんは木綿問屋で、この人の名はお節さんと言つた。

このお節さんは、そこにゐる程の男とは總て親しいらしく口を利いたがね。中にも、或中學校で落第ばかりしてゐる野瀬といふ奴と馬鹿に仲が好いんだ。源平に分かれてかるたをする時でもね、組が一緒になれば、きつと膝を接して列ぶんだ。そして、目と目で話し合つたり、兩方のハンケチを取り替へつこして使つて見たりね。そりやあ堪らないんだ。

組が違へば違ふで、向ひ合つて坐つてね。かるたを取り合ふ眞似をして、手の甲を打ち合つたりなんかするんだ。

僕は厭な奴等だなあと思ふと同時に、二人が堪らなく羨ましくなつた。すると、かつとして顔が熱くなつた。

八九回目の合戰が濟んだ時分、僕はあんまりのぼせたから一回だけ休んで、中庭のある所の縁側へ出た。中庭には池があつた。池には霜除けがしてあつた。霜除けの上に雪が積もつてゐた。縁側に欄

がある。僕はそれに寄りかかつて、雪の夜の冷々とした空氣を吸つてゐた。燈はそこらになかつたが雪明かりであたりはぼんやり見えてゐた。

するとね、後からなんだか軟かい手が僕の肩に觸るんだ。おやッと思つて振り返ると、その丈の高い、肉づきの好いお節さんが、顏を眞赤にして、一人で薄暗がりに立つてるぢやないか。

僕は驚いたね。實際ぞッとしたね。併し、その咄嗟の間になんだか嬉しいやうな氣もしたね……

「雪をとつて頂戴な。」

と、如何にも肉的な聲で言ふんだ。それを聞くと、僕はバネか何かで動かされるやうに、直ぐ、

「ハ。」

と言つて、欄の上に乘つて、屋根の先きへ手を延ばした。

「危ない。」

といふ女の聲がするかと思ふと、お節さんは僕の制服の膝のあたりを、しつかりと抱いてゐた。

雪を一掴み取つて、欄を飛び降りると、お節さんは行きなり僕の手首を捕まへて、僕の掌から直ぐと雪を喰べるんだ。

女の軟かい唇が僕の冷たい掌に觸れた途端に、僕は一種言ふべからざる衝動に打たれた。身體中に充ち滿ちた血が、悉く掌の方へ流れるやうな氣がした。

頭がぐらぐらッとして、倒れさうになつた。

醉つたんだね。全く醉つたんだ。僕は生れて始めてこんな目に會つたんだもの。始めて酒に醉つた時は苦しいものさ。始めて煙草に醉つた時も苦しいものだ。僕はその時始めて肉に醉つたんだ――咽喉が、何か栓でもかはれたやうに息苦しくなつて來て、目がトロンとして來た。

「有難う。ああ好い心持。お蔭樣ですつかりのぼせが直つたわ。」

とは言つたが、女は中々手首を放しさうにしなかつた。

この晩が始まりで、僕はすつかりこの女に囚へられて了つた。惚れたんでもなけりやあ、思つたんでもない、魔術にかかつて了つたんだ。

さかんに手紙の遣り取りもした。三日にあけず、その『倶樂部』で逢引もした。手紙では頻に野瀨の惡口を言つて寄越す。『倶樂部』では段々野瀨を疎外するやうな態度を見せる。

野瀨は野瀨で外の女に目をかけ始めた。

一度などは、僕の所へ小包で絹のハンケチを三四枚送つて來て、これはいつれも野瀨に貰つたものだが、もう今日となつては見るのも厭だ。あなた何處かへ氣の濟むやうに捨てて下さい、と手紙で言つて來た。

僕は得意だつた。あつぱれ色男になつたやうな氣がしたね。

宜しい、きつと氣の濟むやうに捨てて來て上げるから、待つてゐ給へ。といふやうな返事を出しといて、それからそのハンケチを持つて、家を出かけた。

まあ君、僕はそれを何處へ捨てたと思ふ。上野公園まで行つて、森の中の共同便所の中へ捨てたもんだぜ。そして、何か偉大な復讐でも爲遂げたやうな氣になつて、得意で女に會ひに行つた。

馬鹿な話さ、こんな月並な籠絡術にかかつて、それで有頂天になつてゐたんだからね。

間もなく僕はこの女が或外の男とも手紙の往復をしてる事を發見した。それはその男が自分で僕にしやべつたんだ、得意になつてね――先生、僕の事は知らないんだ。

お節さんから來た手紙まで見せて呉れたもんさ。この男はやつぱり僕と同じ中學の生徒だつたがね、僕よりは二つ年が上だつた。

野瀬から僕になつて、僕から又その男になりかかつてゐたんだね……それを知ると、僕は直ぐ女が厭になつた。

僕はさういふ時に、いつでも「ああ、つまらない事に時間を潰した」と思ふんだ。その時もさう思つて、急に勉强がしたくなつた。

それから、貰つただけの手紙をみんな叩き返して、遣つただけの手紙をみんな取り戻してやつた。

僕は自分の手紙をみんな燒いて了つたが、向うは自分が僕に呉れた手紙を、その僕の次の男にみん

な見せたさうだ。

僕は始めて、男と女の關係にも、かういふ馬鹿げた場合のあるのを知つた。お蔭で僕の心臟は大分汚れた。

馬鹿々々しいと思つて、勉强を始めた時は、もう卒業試驗が眼前に迫つてゐた。あんまり好い出來でもなかつたが、まあ相當な所で及第はした。學校を出ると、補習科だの、英語の私塾だのへ通ふんで、大分體が忙しくなつた。高等學校へはひる準備だ。

間もなく入學試驗となつた。

僕は一部の文科が志願だつたから、受ける人數の少いところで及第した。勉强はかなりしたんだが、自分ながら出來の悪いのには驚いたもんさ。小學校時代から見ると、僕の頭はもう餘程平凡になつたんだね。それでも及第したのは、全く志願者が少なかつたからだ。

でも、第高等學校學生といふ肩書がついて、あの灰色をした寄宿舍へはひると、急に男になつたやうな氣がして、これは一番うんと勉强しなけりやならないといふ氣になつた。

そこへ持つて來て、君も知つてる通りのあの時分の校風だらう。どうして中々女どころの騒ぎぢやなくなつた。併し、生れて始めて親の膝下を離れて、生れて始めて他人の男ばかりの中で一年間暮らさなければならない事になつた時は、流石に寂しい氣がした。

寂しくなれば、人が戀しくなる。僕も寄宿舍の寢室で雨の音を聞きながら、時々思ひ出して戀しくなる人があつた。
それはパンクチュアルでもなかつた。マウンテンでもなかつた。麵麭屋の賣子でもなかつた。隣の娘でもなかつた。かるたで一度逢つた女でもなかつた。
僕が時々思ひ出したのは、自分でも忘れた筈のおみかさんだつた——
初戀の印象は淺いやうで深いんだね。微なやうで强いんだね。消えたかと思ふと又燃えて來る。隱れたと思ふと又出て來る。滅びる時は終にないのだ。
今頃はもう嫁に行つて了つたらう。どんな人のとこへ嫁に行つて、どんな家庭を作つたらうか。もうすつかり奧樣ぶつて了つたらう、もう子供が出來てゐるかも知れない。子供の目は母に似てやはり利口さうだらうか。
などといろんな事が考へられるんだ。嫁とか子供とか家庭とかいふ事に氣がついて來ただけ大人になつたんだね。それまでは、たとひ女の事を考へても、そんな事は一切考へなかつたもんだ。ただ一緒に遊びたい、話がしたいといふばかりだつた。

九

小學校時代の友達はどうしたらう。

岡は中學へはひると間もなく、學校をやめさせられて、家で持つてる北海道の牧場の方へやられて了つた。學校の出來があんまり好くなかつたんだらう。それに小學校時代に餘り世間學に通じて了つたせゐか、小學を出ると大分ほけて來たやうだつた。

岡の憶れてゐた內野の家のお父さんは鑛山に關係してゐたが、その頃大分當てたと見えて、例の河岸の家を越して、見附の側の大きな屋敷に移つた。これはなんでも內野のお父さんが新築したんだといふ評判だつたが、僕の聞いた所では、或成金が新築したばかりで住みきれなくなつたのを買ひ取つたのだといふ話だつた……併し、そんな事はどうでも好い。

肝心なのは內野で、內野は女つぷりがすつかり上がつたといふ噂だつた。詞の明晰な、態度のしとやかな、それは立派な女になつたといふ話だつた。併し、まだ嫁には行かないといふだけで、外に一向消息はなかつた。

落書の先生鶴岡は、或中學から或中學へと、僕が一つ中學にゐる間、方々を食ひ齧つて歩いて、僕等が中學を出る一年前に、途中で中學を廢して了つた。

その間にはお釜帽子を冠つて、綺麗な男の子を追つかけた事もある。髮の毛を綺麗に分けて、女義太夫のかかる寄席へ出はひりをした事もある。女學校の運動會廻りをした事もある。金も大分使つた

らしいやうな話で、とうとう二百里も離れてゐる親類へ汽車で送られて了つた。その親類の家は大きな湖水に臨んでゐた。湖水を渡る秋の風が、自分に「當てがはれた部屋」の前の芭蕉の破れた葉に鳴ると、堪らなく都が戀しくなつて、一晩泣き明かす事もあると、時々そんな事を手紙で言つて寄越したもんさ。中々文章の巧い男でね……

例の僕の家の隣の娘だね。あれがお父さんと一緒に田舍へ行く時分には、鶴岡はもう湖水の家にやられてゐたんだ。

隣の娘が東京を立つた時、僕はステエションまで送つて行つた。その汽車は鶴岡が流されてゐる湖水の縁を通る筈だつた。

そこで僕は直ぐ鶴岡の所へ手紙を書いた。ステエションの別れを如何にも形容澤山感嘆詞澤山に叙して、この汽車はあしたの何時頃君のゐる家の側を通る筈だ。その時君はどんな夢を見てゐるだらうといふやうな事を書いてやつた。

すると直ぐ返事が來てね。その汽車の通る時は、不思議に朝早く目が覺めたから、湖水の見えるステエションのプラツトフオオムへ散歩に出かけた。折しも立て籠めた朝霧を破つて、東京からの汽車が着いた。都懷しさに一室一室殆ど殘らず覗いて歩いたところが、或一等室に或令孃が白いシヨオルに顋をくるんで、眠りこけてゐるお父さんらしい人にぴつたりと身を寄せて、鉛のやうに動かない眀

け方の湖水を寂しさうにぢつと見てゐた。それを見て妙に打たれたが、して見ると、あれが君の所謂「隣の人」だつたかも知れぬと言つて來た。

かういふ風で鶴岡とは、絶えず往來があつた。

藤村はまだ中學にゐた、多分一度か二度遣り損つたんだらう。めつたに會ひもしなかつた。

高等學校へはひつてから間もなく、習志野に學校の演習があつた。僕も一兵卒としてこれに加はつたもんだ――これは君も行つて知つてるねえ。

どうだい、あのスナイドルとかいふ舊式な銃は重かつたぢやないか。腰に劍が長くて、時々股の間に挾まつたつけねえ。歩き難いつたらありやしなかつた。

船橋を出てから二里の駈足はどうだつた。あの時は實に咽喉が渇いたねえ。君は道つ端の澁つ柿を喰へて舌を痺らした人だつたねえ。僕は田の水を飲んで腹を下したつけ。

あの晩の宿屋の騷ぎ。石油の明罐を叩いて寮歌を唄ひながら、校長の宿へ暴れ込んで、怒られた級があつたつけねえ。料理屋と間違へて淫賣宿へ飛び込んで、飲んだ酒の拂ひもせずに驚いて逃げて歸つた生徒もあつた。

僕の方の隊は、明くる日の午前二時に宿を出た。眞つ暗な晩だつた。軍隊の本當の演習があるんで、時々遠くに鐵砲の音がしたつけねえ。僕は輜重兵がたつた一騎で、眞暗な街道をタッ、タッ、タッ、タ

ッと飛んで行くのに會つた――僕は斥候に出たんだ。
ほら、君もあの時敵の斥候になつて出て來たらう。君と分かる迄は何だか恐かつたが、分かつちまふと行きなり僕は摑み掛かつたつけねえ。散々相撲をとつて、しまひに兩方で逃げ出しちまつたね。
夜明けの空は綺麗だつたねえ。あれが本當の紫といふ色なんだね。雉子が時々叢から飛び出したつけねえ。
あの時の散兵線は隨分廣かつた。暗い内は花火のやうで綺麗だつたが、夜の明けるに從つて、火の色が薄くなると、薄汚い青白い顏が木の間やら叢の間からチラチラ見えて來た。そして敵も味方も知つた顏を見合つて笑つたもんさね。
歸りに、或高地で講評があつたね。例の休職少佐がやつたんだ。講評を寢轉んで聞いた學生があるとか言つて、ひどく怒つたけねえ……え、君もやつた組か……
あの時はまだ本所のステエションで汽車を降りるんだつたね。錦絲堀から駒込まで列を組んで歩いて歸るのは隨分骨だつた。あの長い劍で腰は釣れるしね、銃は肩へ食ひ入るやうだつた。
併し、段々町へはひつて、町の人――殊に若い女などに見られると、言ひ合はしたやうにみんな得意になつてね、「どうだ、勇ましからう。」といつたやうな顏をしたもんさ。だから賑やかな町を通る時程、疲れを忘れたね。

神田橋まで來ると、あの堀端を竹橋の方から二人の若い女がやつて來た。二人とも蝙蝠傘をさしてゐる。二人とも被布を着てゐる。二人とも銀杏返しだ。傾きかけた秋の日は二人の美しい横顏を同じやうに黄いろく照らしてゐる。

と見ると、その一人がおみかさんぢやないか。一人は一度見て知つてるおみかさんの直ぐの姉だ。僕ははツとして、あぶなく聲を出しさうにした。僕は自分が今除隊の一人である事も、演習の歸りである事も、何もかもみんな忘れて、ぢつとおみかさんの顏を見詰めた。

「おみかさんはまだお嫁に行かないんだ。」

瞬間に僕の考へた事はこれだつた。さう思ふと、また昔の感情が溢れるやうに湧いて來た――

小學校から中學校へはひると、世間といふものに對して、僕の胸の中にほツと燈がついたんだね。燈がつくと、廻り燈籠のやうにいろんな女の影が僕の胸の中を通り過ぎたんだね。

高等學校へはひると、浮氣でついたその燈が又ほツと消えて了つたんだ。世間に對して僕の胸の中が又暗くなつて了つたんだ。いつでも僕の胸が暗くなると、その暗い中にはつきりと見えるたつた一つの影がある。それが君、おみかさんなんだ。

演習から寄宿へ歸つた晩は、賄でも御馳走をしたね。併し實は僕、あの御馳走もろくろく咽喉へ通らなかつたんだ。おみかさんの事ばかり氣になつてね……

「まだ嫁に行かないんだ。」
「まだ誰の者でもないんだ。」
「貰はうと思へばいつでも貰へるんだ。」
かういつた聲が、一つ一つ頭の奥から湧いて來て、時々覺えず口へ出さうになる……
でも、おみかさんと僕との間には相變らず何の連絡もなかつたから、手紙一本やる事も出來なかつた。
そこで、思ひは思ひながら、どうする事も出來ずにぼんやり日を暮らしてゐた。
尤もあの愉快な寄宿生活だ。紛れる事が多いから、青い顏をして溜息をついてるやうな事は決してなかつたさ。だから學校の奴でそんな事に氣のつく奴は一人もなかつた。君だつてその時分はまだ氣が附かなかつたに違ひない。
先づ寮歌を唸りながら床を出る。寮歌を唄ひながら食堂へ行く。飯の持つて來やうが少し遲いと茶碗を食堂の三和土へ叩きつける——朝から元氣だ。
一日の課業が終へると、本や帳面をうつちやるやうに自習室の机の上へ投り出して、三四人で一緒に直ぐ外へ出る。外へ出ると直ぐ何か食べにはひる——こんな事はみんな君の知つてる事だが、まあ話の序だから我慢して聞いて呉れ給へ。

あの時分はまだ湯島の梅月で菓子を食はしたね。先づ僕の一番行つたのはあすこだ。それから次は青木堂、これは西洋菓子にチョコレエトか珈琲で、少し高いから懐の寂しい時は行かなかつたもんだ。菓子を食つて歸ると直ぐ夕飯だ。夕飯でも菜がプウアだから、直ぐ腹が減つて了ふ。すると又直ぐ外へ出て、梅月だ、青木堂だ……

まあ食べる事だね。それより外になんにも樂しみはないんだ。それで戀が紛れてゐたかと思ふと可笑しいが、全くさうに違ひないんだから不思議だ。

尤も食べに行く時はきつと大勢で行くから、中々賑やかだ。あたりが賑やかだから自分の事などは思ひ出す暇がなかつたのかも知れない……

一〇

鶴岡は湖水の家から更に西の方の親類へ送られた。こんだの家は外國船の出はひりする大きな港の山手でね、鶴岡は或商館へ勤めさせられた。

僕の高等學校へはひつた年が暮れて、その明くる年の三月になると鶴岡は不意と東京へ歸つて來た。歸參が叶つたんだ。それにもう兩親が大分年をとつて來たんで、多少家の事も見なければならなかつたんだ。

二年ぶりで鶴岡に會つた時は、大層大人になつたもんだと思つたね。頭は綺麗に分けてるし、着物は光るしね、角帶に白足袋に疊附の下駄だらう。僕等の風とはまるで變つて了つたんだもの。それに物言ひなども賦に商人じみてね。何か言ひながら右の手の指の先を揃へて、髮の毛を右から左へ撫でるといふやうな新しい癖まで何處からか持つて來た。

でも五六日往き來をしてる内に、やつぱり元の鶴岡になつて來た——少くとも僕等だけに對してはね。

なあに、いくら大人ぶつても年はやつぱり年だから、さう芝居が持ち切れる筈がないんだ。半月か一月する内に、裝まで又元の書生になつて來たぢやないか。

鶴岡は今更學校の生徒にも馬鹿々々しくてなれず、さうかといつて家の用が朝から晩まである譯でもなし、といつた風で、毎日ぶらぶら遊んでゐた。

閑で爲方がないもんだから、小學校時代の友達を一人一人尋ねて歩き始めた。鶴岡が方々尋ねて歩くお蔭で、大分昔の友達の消息が分かつて來た。

消息が少しでもわかつて來ると、お互に久しぶりで會つて見たいもんだと思ふのは當り前だ。鶴岡が歩いてる内に、一人一人多少そんな感情を洩らしたものと見えて、暫くすると鶴岡が同級會を近日是非開きたいものだと言つて廻つて歩いた。

やがて、それが實行された。

生暖い風に櫻の花が浮ぶやうに散る晩だつた。僕等は舊友の一人たる桃山の家に集まつた。桃山は公卿華族だ。庭が廣い、座敷が廣い、柱にも襖にも何處か華族らしい匂ひが染み込んでゐる。主人の桃山は學習院の高等科へ通つてゐた。物理學校へ行つてる中村も來た。高等商業へ行つてる野島も來た。藤村も時代のついた中學の制服を着て來た。鶴岡は頻に斡旋の勞をとつた。御馳走は餅菓子一包に壽司一折といふ粗末だつたが、それでもみんな滿足したもんだ。それ程この會合は愉快だつたんだねえ。

唯物理學校の中村丈は滿足しなかつた――會費を二人分出して、來る筈で來なかつた人の分の菓子と壽司とを更に一人分平げた。中村は話嫌ひなんだ――

話は暫く子供時代の事で持ち切つた。おみかさんと藤村の古い艶聞も問題になつた。それから中學時代の話、それには僕も、一二の自己告白をしたもんさ。最後に出たのが鶴岡の經歷談だ。これには全く新しい事實が多いんで、みんな固唾を呑んで耳を傾けた。

それが濟むと「人生觀の交換」が始まつた。

小學時分は一向無心で暮らしてた人間も、中學校から高等學校と段々生長するに連れて、多少世の中はどういふものだ、人間はどういふものだ、といつたやうな事を考へて來るもんだ――勿論、人

生觀といふものはそんな單純なもんぢやないんだが、今ここで言ふ人生觀はさういつた極初歩なものなんだ。即ち、小學校時代にはてんでがまだ一向持つてゐなかつた自家の哲學――その幼稚な哲學の交換が始まつたんだ。

議論は教師と生徒の關係から親と子に及んだが、やがて男女の問題に移つて行つた。

議論が正に沸騰點に近づかうとする途端、誰だつたか忘れたが、至極冷靜な態度でこんな事を言ひ出した。

「いくら僕達が眞赤になつて議論したつて駄目だ。何を言つたつて要するに男だけの說ぢやないか。女を知つてる者はまだ誰もないんだらう。女の說も聞かなくちや駄目だ。」

すると、今まで口角泡を飛ばしてゐた一人が、直ぐに相槌を打つて、

「成程そりやさうだ。吾々の議論は物の半面を見てるばかりだ。片目の議論だ。片輪の說だ。女の云ふ所をコムプルメントにして始めて吾人の說は完全なものになるんだ。」

「さうとも、さうとも。それも單に說ばかりぢや駄目だ。吾吾は婦人その者に接して、婦人その者を研究しなけりや駄目だ。婦人の人格に觸れなけりや駄目だ。婦人に觸れるまでは永久に解けない暗い神秘が吾人男子にはあるんだ。」

「また婦人の方から言つても、男子の人格に觸れない内は不完全な人間たるを免れまい。男子が婦人

に接するといふ事はひとり男子にとつて利益があるのみならず、婦人にとつて非常に利益のある事だ。」

などと今日の若い者から見れば如何にも幼稚に見えるだらうと思ふやうな議論が、さもさも進んだ新しい奇拔の議論のやうに、得意になつて辯ぜられたものだ。

鶴岡は默つてこれらの議論を聞いてゐたが、やがて「みんなは若いな」といふ風な微笑を洩らして、靜かにかう言つた。

「おやあ諸君かうしたらどうだ。男女交際會といふやうなものを作るんだ。それには同窓會ね、小學校の、あれが丁度好い。あれを男女合併にするんだ。今までは男女別々だつたがそれはいかん。これからは合併しろと建議するんだ。その運動についてはは憚りながら僕が全力を擧げて盡さう。」

この鶴岡の説には一同一も二もなく贊成した。

「贊成。」

「贊成。」

「贊成とも。一種の慈善事業だ。」

こんな事を言ふ者さへあつた。

併し、退いてよくよくてんでんの腹を探つて見れば、自家の哲學の爲に女に接したいのでもなけれ

ば、人生觀に堅固な基礎を得たい爲に婦人と交際したいのでもないんだ。

要するに唯女に近づきたくなつたんだ。理窟なしに婦人の側へ寄りたくなつたんだ。もう男だけでは寂しくなつたんだ。思想の要求ぢやないんだ。本能の要求なんだ。

それをみんな自覺せずに、てんでに自分ぢや人生觀の爲だ自家の哲學を强固にする爲だと思つてるんだから可笑しい。

併し、僕だけはその時心の奥の方で、そつとかう叫んだものさ――

「愈おみかさんに會へる時が來たぞ。」

そして、もう今までの議論などは一つも頭に浮べないで、唯おみかさんの顔ばかり空想に描いてゐた――勿論上部はやつぱり哲學や人生觀の面を冠つて、みんなと同じやうなつもりでゐたんだ。

その明くる日、鶴岡は早速建白書を書いて女子部の幹事に送つたもんさ。

女子部でも、その文章の如何にも眞面目なのには感動してなんでも幹事會を開いたらしかつたがやがて返事が來た。

誠に御趣意は結構である。わたくし共も雙手をあげて賛成する。早晩同窓會はきつと男女合併にならなければならない。併し、現今の日本社會組織なり家庭組織なりから見て、まださういふ事をする

のはちと早過ぎやしまいか。それに、いづれも新しい事を始めれば、きつとそれに伴ふ弊害があらう。その弊害に對してわたくし共は責任を持つだけの力がない。誠に殘念だが、さういふ次第だから當分時期を待つ事としてこの度は一先づお斷りするといふ返事なんだ。

みんながつかりしてね。二三日は顔を合はす事があつてもろくろく口も利かずにぼんやりしてゐたもんだ。殊に僕は失望してね。寄宿にゐても塞いでばかりゐた。

一週間ばかり經つと――丁度土曜日で僕は家へ歸つてゐた――鶴岡がニコ〳〵しながら僕の家へ飛び込んで來た。

「どうしたんだ。何か面白い事があるのか。」

つて聞くとね――

「大ありさ。大あり名古屋の金の鯱鉾だ。うまい事があるんだぜ。うまい事が。吾輩が考へ出したんだ。どうだ、豪からう。豪いと思つたら、一つお辭儀をし給へ。」

などと、何が得意なんだか、ひどく息張るんだ。それから僕が――

「だつて、何がどうしたんだか話さなけりや分からないぢやないか。話し給へ、早く。」

つて言ふとね――

「うまい事を考へ出したんだ。この間なんの氣なしに學校の始めて立つた年を調べて見たらね、それ

から丁度今年が二十五年になるんだ。そこで創立二十五年祝賀會といふやうなものを催すんだ。そして、これだけは出身者全體で祝ふべきものだから、是非とも男女合併でやらなければならないと言ひ出すんだ。永久の男女合併が成り立たなかつた代りに、せめて一回だけでもかういふ會合をやるんだね。なあに、それで結果が好ければ、これは是非續行しようと、今度は向うから言ひ出すかも知れやしないさ。第一、これならきつと校長も賛成するし、教員だつて力を貸すに違ひない。どうだい、名案だらう。」

と、かう言ふんだ。もうかうなつては人生觀もない、哲學もない、ただ男女合併だけが目的で、その目的の爲にはどんな手段をも選ばないといふ風だ。僕も大根はそれなんだから早速賛成して――

「うむ、そいつあうまい事があつたね。それならきつと成り立つよ。よし、俺が趣意書を書かう。趣意書が出來たら、一應校長や首席教員の賛成を經て、それから女子部へ廻した方がきつと結果が好いぜ。女子部も成るべく年をとつた幹事にぶつかる方が信用を博して好いぜ。」

などと、一緒になつて智慧を振るつたもんだ。

その明くる日の日曜は、鶴岡の家へ藤村や桃山までを呼び寄せて、一日その相談に日を暮らした。

二三日經つて僕の趣意書が出來上がると、鶴岡は早速それを持つて、先づ校長を說きに行つた。

鶴岡は中々世事にたけてゐたし、前のでもう懲りてゐたから、今度は男女交際だとか兩性の接觸だ

とかいふ事は噯にも出さないで、ただ創立記念さへ出來れば好いんだといふ風に說いた。そしてそれには同窓會といふものと離れて臨時に出身者全體の會を作る方が、設備の上にも經濟の上にも便利だらうといふ風に持ちかけた。

「男女合併」と言はないで「出身者全體」と云つた所などは中々考へたものさ。

なあに、こつちの趣意は記念祝賀より男女合併にあるんだ。それを男女合併より記念祝賀にあるやうに見せたのは、全く鶴岡の手際だつた。勿論、これには僕も與つて力があつたのさ。

校長は大喜びで贊成した。いくらか寄附をしても好いとまで言ひ出した。無論、會場としては學校は一日貸すし、何なら現生徒に唱歌なり遊戲なり何か餘興をさせても好いとさへ言ふんだ。

それから、鶴岡は男の首席教員を說きに行つた。これは、校長がさういふなら自分に異議のありよう筈がないといふので、手もなく贊成して了つた。

ところが、女の方の首席教員は、僕等が子供の時分から名代のやかまし屋だつた人だけあつて、直ぐには鶴岡の說に贊成しなかつた――

「こないだの男女合併が成り立たなかつたんで、それでその腹癒(はらいせ)にこんな事を企らんだんぢやありませんか、鶴岡さん。あなたは中々油斷が出來ないからねえ。」

なぞと、隨分急所も突かれたさうだ。併し、そこは苦勞をして來た鶴岡だ――

「いんえ、先生あれと全く別問題です。あれは永久的の話でしたらう。これはたつた一回ぎりの話なんです。それもです、男女を一緒にするといふのが大體の趣意ぢやないんです。わたくし共も男女を一緒にすると、會の執務上中々面倒があつて、非常に迷惑ですから、初めはいつそ男の方だけでやつて了はうかと思つたんです。併し、若し後でそれが女の方に知れて、さういふ一般的な會をするなら、なぜあたしの方にも知らせて呉れなかつたんだといふやうな苦情が出ても困ると思つたもんですから。それで一寸申し上げたまでなんです。ですから、これは敢て女子部の御贊成を強ひる譯ではないんです。ただ吾々の方でかういふ會合をするから、若しお志があるなら御相談に乘つても好い位な意味で申し上げるんです。元々わたくし共の方はわたくし共だけでやらうと思つた會なんですから…」

どうだい、中々言ふ事が巧いだらう。これには皮肉な女敎員もすつかり丸められて了つたんだね――

「成程、さういふ事なら、一つ女子部の方の幹事を集めて、あの連中とも相談の上、二三日内に御返事を致しませう。」

といふ事になつた。鶴岡は別に嬉しさうな顏もしないで――

「ぢやあまあ、どうとも御相談の上で。」

と態と冷淡な調子で言つて、澄まして歸つて來た。無論、腹ぢやあ「もうしめたもんだ」と思つて出て來たのさ。僕だつて、これを聞いた時は、手を打つて喜んだ位だもの。

四五日經つと、女の首席教員からではなく、直接に女子部の幹事から返事が來た。
御趣意は誠に贊成だ。お話によつてはわたくし共も盡力しよう、併し、色々まだ承はりたい事もあるし、申し上げて置きたい事もあるから、一度總代と總代の會見をして吳れ。會見の場所は桃山さんの家が好いと思ふ、とかう言つて來たんだ。
僕等はかうまで向うが乘氣になつて來ようとは夢にも思はなかつた。そこで、こつちからも直ぐ返事を出して、宜しい、それではいつ幾日に會見しようと言つてやつた——さあみんな大喜びさ。
桃山の家で會はうといふんだから、きつと桃山の姉さんも總代の一人なのに違ひない、それから外に誰が來るんだらう。先づおみかさんの外にはあるまい、とかう直ぐ僕は考へた。
桃山の姉さんは女子部の幹事では元老の一人だつた。若い方の幹事で最も人望のあるのはおみかさんだ。それは薄々噂に聞いて知つてゐた。
さて男の方からは誰が行くかといふ相談になつた。一時は藤村と鶴岡と僕の三人が行く事になつたのだが、小學校時代に噂が可なり喧しくもあつたのだし、若し向う側におみかさんでも來ると世間が煩さいからと言ふので、藤村だけは廢した方が好いといふ事になつた。それには藤村自身も別に異議は稱へなかつた——
一體、僕が見た所では、藤村はもう昔程おみかさんに對して親しみを持つてゐないらしいんだ。一

般に言ふ女に對しては、みんなに負けない程の好奇心は持つてゐたらしいが、特におみかさんでなければならないといふ樣子は一向見えないんだ。そこへ行くと、小さい時に成功しなかつただけ、僕の方が執着が續いたんだね。「僕の方が」どころではない。當時の僕にはもうおみかさんの外、誰も女はなかつたんだ……

そこで合議の結果、僕と鶴岡の二人だけが行く事になつた。桃山はまあ家の人だから、その場所にゐるともゐないとも、勝手だといふ事になつた。尤も桃山といふ人は一向そんな事には無頓著だつた。それでも、桃山は家に姉があるので、聞くともなしに女子部の消息に通じてゐた。愈會見をするといふ前の日に、桃山が報告して寄越した所によると、女の方から來るもう一人の幹事は、果しておみかさんだといふぢやないか。

それを聞いた時の僕の心持。そりやあとても僕のやうな頭腦の粗雜な者には說明が出來ない。

無論、嬉しいとは思つた。併し、唯嬉しいといふだけぢやない。恐いやうな氣もした。自分で自分が厭になるやうな氣もした。一度やり損つたら、もう二度と取り返しのつかない事を無理にやらせられるやうな氣もした。

一一

愈當日になつた。

僕が高等學校の寄宿から、約束の時刻に少し遲れて桃山の家へ行つた時は、もう鶴岡もおみかさんも來てゐて、一順話が濟んだ後らしかつた。

桃山の姉さんは、若い男と若い女とを監督するやうな顏をして、一座してゐた。桃山は何處かへ遊びに行つて了つて、ゐなかつた。

僕が行つてからは、もう會に就いての話は餘りなかつた。要するに會は二週間後に實行される事になつた。それに就いては、この間男女合併問題が破れて直ぐの事であるから、世間に誤解されないやうに精々注意してやらう。なほ會費だの餘興だの記念品だのといふ細かい話は、二三日内に双方の幹事全部を集めて相談しようといふ事になつたんださうだ――

鶴岡は細々とそんな事を說明して呉れたらしいんだが、僕の耳はその部屋へはひるが早いか、もう何處か外へ行つて了つてゐた……おみかさんの小さな咳ばらひ、おみかさんの呼吸、おみかさんの着物の擦れる音……さういふものは聞こえても、鶴岡の大きな聲で言ふ事は一向分からなかつた。

おみかさんはその時分「夜會」と言つた髮に頭を結んでゐた。白いリボンをしてゐた。セルの單衣を着てゐた。桔梗の色の白く出た、お納戶色の帶を締めて居た……

そんな事は覺えてゐるものの、初對面の印象は存外色が淡かつた。おみかさんがどんな話をしたか、

おみかさんがどんな顔つきをしたか、一向僕の頭には殘つてゐない。ただ桃山の家の庭に樗の花が咲いてゐた。おみかさんが――

「あれは何の花です。」

と聞いた。

「あれは樗です。ア、フ、チと書くんです。昔の歌にありますねえ。」

と、僕が得意で答へた。それを覺えてゐるだけだ……

その明くる日の明くる日、男子部女子部の幹事が全部、元の小學校に集まつた。兩方合せて十人ばかりだつた。

會の日と時間とが極まる。餘興の種類が極まる。會費が極まる。當日喰べさせる物飲ませる物が極まる――

併し、さういふ相談はあんまり面白いものぢやない。何しろ今日とは違つて、まだ若い男女の間の比較的嚴しかつた時代に、若い男達と若い女達が一つ場所に公然落ち合つたんだ。辨當の話や切符の話などをしてるのは如何にも勿體ない。もつと話したい事は澤山ある――誰しもかう思つたに違ひないんだね。そこで細かい事は一切世話好きな鶴岡に任せて了ふ事にして、みんなてんでんに勝手な話

を始めた。

男は男で互に知つてゐたし、女は女で互に知つてゐたが、男と女とは始めて會ふ人が多かつた。でも、僕と鶴岡だけはもうおみかさんを知つてゐる譯だから、話はその邊から湧いて、段々に賑やかになつて來た。尤も顏だけはみんな昔から知り合つてた中なんだからねえ——桃山の姉さんは、桃山の關係から、僕等ともよく知つてゐたんだけれども、眞面目な人だから、あんまり男と女とを結びつけるやうな口の利きやうをしなかつた。

併し、もうかうなつて來ると、女の方で男女合併に反對した奴も男と嬉しさうに話をするし、男の方で男女合併に反對な意見を持つてゐた連中も、自説などは何處かへ振り棄てて女と話を始めるんだ。兎にも角にもこの幹事會は、男にとつても女にとつても、非常に愉快だつたらしいんだ——やつぱり、理窟ぢやなくて本能なんだね。僕等も始めて窮屈な殼を破つて、晴れ晴れとした大空の下へ飛び出したやうな氣がしたもの。

さあ、さうなつて來ると、度々かういふ會が開きたくなるのは人情の當り前だ。そこで又、利口な鶴岡は直ぐと見拔いた。双方の幹事の人望を集めた爲に、何の彼のと名義をつけては、殆ど一日置きに幹事會を開いたもんさ——やれ、けふは餘興についての相談だとか、やれ、けふは記念日についての相談だとかいふ風にね。

その癖、集まれば別に細かい相談をするんではないんだ。いつでも好い加減な所で切り上げて了つて、あとは鶴岡に任せて了ふんだ。

鶴岡も亦それは初めから覺悟で會を開くんだから面白いぢやないか。先生中々遣り手だから、なあに、自分の責任はいくら重くなつたところで知れたもんだ。兎に角幹事會と稱して、その實自分達の理想とする男女交際會が開ければ、こんな愉快な事はない位に心得てゐたもんだ。

これには勿論僕も同情する所があつたから、鶴岡の責任については精々蔭で手傳つたもんさ。

かうやつて幹事會を開いてゐる内に、僕等は段々おみかさんと親しくなつた。親しくなればなる程、おみかさんといふ人は利口な人で、物の分かつた人だといふ感じがみんなの頭に深く刻まれて來た――その癖、いつも話はひどく眞面目で、決して馴れ戲れの出來る人ではなかつた。唯どんな人に附き合つても、直ぐその人の話を飲み込んで、それに對するだけの挨拶を立派にしていける人だつた。かういふとひどく交際家に見えるが、さうでもないんだ。自分だけは人に犯されないやうに、いつでもちやんと固く守つて、嫌ひな人は嫌ひな人のやうに取り扱ふし、好きな人は好きな人のやうに取り扱つてゐるんだが、それでゐて、側から見れば一向さう見えないんだ。誰彼の區別なしに一樣に愛想よく取りなしてるやうに見えるんだ。そこへ持つて來て――僕が言ふのは可笑しいが――女の幹事の中

でも容華は傑出してゐたから、男の幹事の中に大分迷ふ奴が出來て來た――

勿論、男の幹事の中には僕等より年をとつたのが澤山ゐた。髭の生えたのもゐた。黑羽二重の紋附を着たのもゐた。立派にもう社會へ出て、社會の一員として働いてゐるのが澤山ゐた。さういふ手合は僕等より前に、もう外の世界で外の種類の女に澤山接してゐるのだ。併し、この幹事會といつたやうな場所で、無垢な處女に接するのは、又別な味があるといつたやうなところで、のこのこ出て來るんだ。そこへ行くと、僕等の連中は眞面目だつたね。眞劍だつたね。だから僕等はさういふ連中が幹事會で婦人達に接する所などを見てゐると、唾を吐きかけてやりたくなつたもんだ――

中でも、或銀行へ出てゐる大野といふハイカラと、或中學で數學を教へてゐる谷といふ理學士と、或新聞の三面に關係してゐる半政黨屋の山田といふ肥つて丈の低い男と、かう三人がおみかさんを騷ぎ出した。

勿論、僕等のなかでのおみかさんの評判は大變なものだつた。どつちかと言へば、ただ世話好きでみんなの喜ぶ顏さへ見てればそれで愉快なんだといつた風な鶴岡までが、おみかさんの前へ出ると妙に固くなるし、昔の事はもう忘れて了つたといふやうな顏をしてゐた藤村までが、妙に又活氣づいて來て、おみかさんの噂ばかりするやうになつた。

かうなつて來ると、僕のおみかさんに對する戀の炎は益々燃えて來るばかりで、どうかしてこの重

圈の中から、おみかさんを救ひ出して、自分一人だけの物にしたいといふ我儘が日一日と昂じて來た。

併し、その時分の僕は依然として子供の時分の僕だつた。僕は相變らずおみかさんに氣のあるやうな顏を誰にも見せなかつた。鶴岡の誇張した讃辭に相槌を打つたり、藤村の惚氣（のろけ）を喜んで聞いたりしてゐながら、自分は始終「左程でもないさ」といふやうな顏をしてゐた――

その癖、腹ん中は四方に敵を受けてるやうな氣で、始終策略で一ぱいになつてゐたんだ……

二

愈記念祝賀會の當日が來た。

僕は『滑稽勸進帳』といふ儀式な餘興に、自分で役者になつて出たもんだぜ。義經になつたんだ、白粉をコテと塗つてね。馬鹿な眞似をしたもんさ。今思ひ出しても冷汗が出るよ。何でも四天王は球竿を金剛杖にして、關所を通るのに、富樫の號令で體操をしたと覺えてゐる。女子部の會員で長唄の心得のあるのが二三人で、ピアノに合はして「旅の衣は……」を唄つた。

おみかさんはなんでもビイル店に詰めてゐたと思つた。先生の店の廻りには始終大勢の男が、蟻のやうにたかつてゐた……

あれは何と言つたか、名前はつひ忘れて了つたがね、なんでもその時分その小學校の敎員をしてゐ

た髯の濃い目の小さい奴が醉つぱらつて、おみかさんに冗談を言ひ出してね、丁度通り掛かりにそれを聞いた僕は、怒つたの怒らないのつて——

「失禮なことをおつしやるな。信樂さんは藝者ではありません。」

とばかりで、その教員を店から外へ突き出したもんだ。そんな事をしたのも、おみかさんの歡心が買ひたいばかりでした事さ——その實、自分は内心で、その教員以上の事をおみかさんに要求してゐたんだ……

まあ兎に角その日はゴタゴタで濟んで了つた。僕なんかは壽司を受け持つてる上に餘興の役者だつたらう。忙しいの忙しくないのつて……とうとうなんにも見ず、なんにも食はずさ。

會場がすつかり片づく時分には、日がとつぷり暮れて了つた。男子部女子部の幹事は學校の教員室へ集まつて、殘りの壽司や菓子で慰勞會を開いた。

ランプの用意がなかつたので、學校の名の書いてある埃だらけの提灯をつけたり、裸で西洋蠟燭を机の上に立てたりした。蠟燭の火が風で動くと、みんなの顏が暗くなつたり明かるくなつたりした。

もうみんな大分お馴染になつたので、くたびれてゐながらも、話は中々はずんだ。鶴岡の辨慶が始終台詞につかへた話、一々僕の義經に附けて貰つた話、とうとうしまひに懷から臺詞書を出して、公然朗讀をし始めた話……それからまだいろんな話があつた。

僕はおみかさんの直ぐ隣りへ腰をかけて、靜かに昔の話をした——自分達には何の關係もない昔話をした。自分達には關係のない昔話をしながら、僕は昔のおみかさんだの、昔の自分だのの事ばかり考へた。蠟燭の火のゆらぎをぢつと見てゐると、溢れるやうに昔の事が思ひ出されて來るんだ……

僕はその晩始めておみかさんの目を、誰憚らず、落ちついて思ふさまぢつと見る事が出來たやうな氣がした——人の魂の奥の奥まで見通す目だ。限りのない愛情で、世界のあらゆる人を憐まうとするやうな目だ、無限の涙と無限の喜びとが美しく溶け合つて出來たやうな目だ。自然その者のやうな目だ。人世その者のやうな目だ——

僕はこんな風に考へながら、酒にでも醉つたやうな氣持で頭がぼんやりするまでおみかさんの目を見てゐた。

藤村が何處にゐたか、鶴岡が何處にゐたか、そんな事はまるで覺えてゐない。勿論、例の新聞屋や銀行員や理學士が、その晩おみかさんに對してどんな態度をとつてゐたか、そんな事などはまるで目にはひらなかつた。

恐らく、おみかさんに對するその晩の僕が、僕の戀の歴史の中では一番神聖だつたかも知れない。實際、その晩の僕には、策略もなければ我意もなかつた、人に對する敵意もなければ自分に對する自惚もなかつた。僕には唯戀があつただけだ、愛情があつただけだ。

僕は自分の愛情に全身を浸して、心行くばかり愛人の目に醉つたのだ。唯それだけだ、唯それだけだ……

その晩が最後で、僕等はもう再び女の幹事連に會ふ機會はなくなる筈だつた。若しさうだつたら、或は僕のおみかさんに對する戀も、それつきりになつて了つたかも分からない——いや、そんな事はない。若し女連との交通がそれつきり絶えたとしても、僕一人だけは飽くまでおみかさんを離れまいとしたに違ひない。僕のおみかさんに對する戀は、もう昔の子供の戀ではなかつた。少しは世間の女をも見、少しは愛の哲理をも究めた上の戀だつた。人を恥ぢて、ひとりで小さい胸を痛めてゐた少年の戀は、いつか人と戰つても女を自分のものにしようといふ青年の戀に變つて來てゐたんだ……

鶴岡はどこまでも抜け目がなかつた。もうその晩きりで女連との交通が絶える事は、鶴岡自身も堪へられなかつたんだね。當日會員全體に渡す筈になつてゐた記念品を態とその日に間に合はせなかつたのは、鶴岡が後の事を思うて、前からさう爲組んで置いたんだ。

記念品と言つたつて極くつまらない物なんだ。素燒の茶飲茶碗に創立二十五年祝賀といふやうな事を大きく書いて、それを樂燒にしたまでの物なんだ。これを五つ宛一組にして會員全體に分配する筈だつたんだ。その註文を態と遲くして、會が濟んでから品物が出來上るやうにして、その分配法や何かで女の方の幹事連と會はうとするのが、鶴岡の腹だつたんだ——この奇策には、流石の僕も驚い

たね。

併し、鶴岡のこの計畫は失敗した。さういつまでも、若い男と若い女が一緒になるのは、學校としても世間の聞こえがあるからといふ女の方の教師の說で、記念品分配の事は女の方の代表者と男の方の代表者とだけで取り扱ふ事になつた。併し女の方の代表者はおみかさんや桃山の姉さんだつたし、男の代表者は鶴岡や僕や藤村だつたから、結局却つて邪魔のない會合が出來る事になつたんだ。僕は勿論、藤村だつて鶴岡だつて、もうその時分はおみかさんより外に女はなかつたもんだからね――

そこで鶴岡はさかんにおみかさんの家を訪問し始めた。茶碗はいつ頃出來ると言つて、それだけの事を態々聞きに行つたり、出來たら、どういふ風にして分配したものだらうと、自分達にはちやんと分かつてゐる事を態々相談に行つたりするんだ。藤村も幾度か鶴岡に連れられて一緒に行つたらしいんだ。

僕はもう氣が氣ぢやなかつたが、丁度始めての學年試驗が目睫の間に迫つてゐたので、寄宿を一歩も外へ出る事が出來なかつた――

これは君も知つてる事だが、なにしろあの時分の高等學校の生徒の試驗前の勉強と來たら大したものだつたからねえ。夜などは時間が來て電氣が消えても、中々寢やしなかつた、西洋蠟燭を寢室の枕元へ立てて、三時四時まで勉强するのは當り前だつた。だから試驗前といふと、寮といふ寮の高い窓

が、夜の明けるまで薄明かるく光つてゐないといふ所はなかつたね。しかも僕等は新入だつたから、餘計正直に勉强したもんさ。中でも僕の惱んだのはコニック・セクションだつたね。その時はまだ哲學をやるつもりだつたもんだからね、政治地理をよして幾何の方をやつたんだが、あんな苦しい事はなかつたよ――

さういふ最中に、鶴岡や藤村はおみかさんに關するいろんな報告を寄宿へ宛てて寄越すんだ。二人は試驗も何もないから暢氣極まるものだつたのさ。

さういつた手紙の內で、今も僕の保管してゐるのがあるから一つ二つ讀んで見よう。當時の生意氣さかげんな青年の面目が躍如として目に浮んで來るから……さう、さう、斷つて置くが、鶴岡も藤村も僕の本心は知らないんだが、おみかさんの方で何か僕に氣があるやうに思つてゐたんだ、それで二人は間燒きをして見たり、僕を嬲つて見たりするんだ。二人は僕の心が分からなかつたやうに、僕にも二人の心は分からなかつた。

好いかい。これが先づ鶴岡から來た手紙だ。中々達者な字で書いてあるよ――

「報告。

彼は言つた。微笑を帶びて、

園田さんにお逢ひ申しましたが、つひ御挨拶も致しませんで、失禮でございました。なんだか、か

う帽子を持つて入らつしやいましたが……

豈夫然らむや、かるが故に驚かざるを得ず。」

先づ初めがかういふ書出しだ。鶴岡がおみかさんの家を尋ねた時の報告なんだ。これはなんでもおみかさんが何處か往來で僕の姿を見たが、挨拶をしないで濟まなかつたと言ふんだらう。なんの事だかもう今ではは つきり分からないけれども——兎に角、おみかさんが僕の噂をしたといふ事が、鶴岡には餘程の大問題だつたんだね——

「蘭燈影沈んで蕭然たる所、彼は幾度かその舊情に堪へぬものの如く繰り返した。

早いものでございますね、つひこないだのやうに思ひますが、もう五六年經ちましたのね。五年や六年は夢のやうでなんだかいろんな事を思ひ出します。

謂ひ知らず彼が面は愁思に滿ちて、俯目に吾を覗ふなりけり。

君は如何に思ひ給ふか。恐らくは思ひ半に過ぎざるべし。

想ふ、昔は可憐の少女、可愛の少年が爲に……校裡に喧々として歌はる。

今は妙齢の處女、この青年と相對す。

その態容は更に舊感と伴うて、しかく吾等を苦惱するにあらずや。

鶴　生

三十分以上雜談して、彼の家を辭した。頗る彼は優遇した。藤村は兄の敵なるを發見した。然しながら余あり、失望する勿れ。」

園　兒

手紙はこれで終つてゐる。おみかさんが僕の噂をしたといふので、藤村が心配し始めたといふのだね。併し俺がゐるから安心しろといふのは、何處まで世話好きな鶴岡だ。

考へて見れば馬鹿らしい手紙だが、それでもその當時は、この手紙を讀んで、僕大に喜んだもんだ。もうこの手紙一つで、自分は鶴岡や藤村より餘程優越な地位にゐると思ひ込んで了つたんだね、自惚も甚だしいさ。

それから、これは藤村から來た手紙だ。鶴岡から見ると、字も文章も餘程まづい――

「本日午前九時、お宅へ鶴岡先生と參上仕候處、寄宿の由にて失望致し候。

實は大々的吉報を携へて參りし事とて、お知らせに參上致し候也。

如何なる報告か。後文を見よ。

頃は六月九日の夜、ひとり我が部屋に籠りて既往を考ふれば、唯朦朧として紅顏目を遮る。

八時、杖を江戸河畔に曳く。飯田橋を渡りて川を闚れば、大曲り樹下に踞して冷を取るの時、螢は飛んで我が襟に止まる。これ何の神ぞ、何の使者なるかは知らざりし。

忽ち見る一箇の人影。

…………………………………………………………

『先日は失禮致しました。あなた園田さんにお會ひなさつたら、この手紙と《明夜今頃こゝにお待ち申します》とお傳へ下さい。』

『オヤ〳〵園田にやるのですか。僕には……』

『え。何をです。』

『いえ、なんでもありません。』

『では何分お願ひ申します。』

『承知しました。』

…………………………………………………………

なんだ馬鹿らしい。

けふまで彼の目は多少僕が左右してゐると思つたが、それは僕の側に園田がゐたからだ。

ええ、つまらない。

僕は夢中でいつ家へ歸つたか知らなかつた。

失敬、左様なら。

失戀野郎

素　寒　貧

萬助野郎

大　茂　天　君」

かういふ馬鹿な手紙なんだ。勿論、空想には違ひないが、兎に角藤村も大分失望してゐたのは事實らしい。併し人間が好いから、決してほんとに僕を怨むやうな事はせずに、かうやつて暢氣極まるふざけた手紙を寄越したんだ。それだのに僕はその人の好い藤村や鶴岡を欺いたんだ、賣つたんだ。今考へ出しても、實にひどい事をしたもんだと思ふよ……併し、その話はまだもう少し先の事だ——

更にもう一通、ここに鶴岡から來た手紙がある。これは繪入りだ。

見給へ。ここに門が書いてあるのは、おみかさんの家の寫生だ。門のところに立札がしてあつて、「十日間休業仕候。信濃屋」としてある。その下が丸く劃つてあつて、學生が机に向つて本を讀んでゐる所が書いてある。机の上に高等學校の徽章のついた麥藁帽子が乘つてゐるだらう——

これはつまり僕が試驗で忙しいから、試驗が濟むまで、十日間はおみかさんの家を尋ねないといふ事なんだ。尤も後の文句を讀むと、外にも理由があつたんだ——

「高等十日間休業と致すべく候。藤村氏の所へ彼より手紙參り。當時彼が家には病人出來取込の由に

付、右の次第に御座候。

藤村氏の運動は別に無之候。藤村氏より彼へ手紙を送りし由、その要領は吾々の主義について書きし由申しをられ候。

御心配なく御勉強あらせらしく候。

鶴

園田君

種々の空想を描きをり候。」

と、かういふんだ。

兎に角これらで如何におみかさんが吾々の間に騒がれてゐたかは分かるだらう。それに大體僕等三人がおみかさんに對してどういふ地位に立つてゐたかも分かるだらう。僕等三人の間の關係も、大凡これで見當がつくだらう。

暫くすると、鶴岡の所から、又こんな手紙が來た。いつも小說じみた手紙を寄越す男だが、又一層念入りだ。好いかい、かういふのだ――

「Ah！僕は感に迫つて書く事が出來ぬ。

薔薇の卷

飯が済んで、僕は窓に腰を掛けて、夕暮の空を眺めて、悄然としてゐた。

ところが不意に僕を呼ぶものがある。

見れば表に藤村が立つてる。頗る忙てた調子で、

「鶴岡、大變だ、大變だ、大に大變だ。」

「なんだい。」

「今手紙が來た。」

「誰から。」

「あれからさ。」

「何だつて。」

「來いつて。茶碗が出來たから取りに來いつて言つて來た。どうしよう。行くかい。」

「來いつて言ふなら、行つても好いが、併し考へものだ。」

「なぜ。行かなきや惡かろう。」

「さうさね。園田が可哀さうだ。」

「併し行かうよ。來いつて言ふんだから。」

「ぢや、直に兩行く事にしよう。」

五十の縁日で植木屋が盛んに並んでる。

僕が言つた。

『藤村、お土産を持つて行かうぢやないか。』

『よからう。何が好い。』

『ロオズが好いよ。』

一株の紅薔薇は僕の手に携へられて、瀬戸物屋で買つた鉢にまで植ゑ變へられた。

月は朧に、風は涼しい。僕は又行くのである。

リボンの卷

六疊の茶の間にはしめやかな談話が聞こえる。

『ぢや、もうそろそろ歸りませう。』

『それから廷口へ置きました薔薇は好くはありませんが、差し上げますから。』

『ああ左樣でございますか。今拜見しました。頂くのでございますか。それはどうも誠に。』

『ええ。粗末なのでございますが。』

『有難うございます。わたくしは花の中では一番薔薇が好きでございますから、結構でございます。』

『あ、それからきのふお手紙を差し上げましたが、如何でございますか。』

藤村が突如として問を發した。

リボンが答は實にしかくあつたのである。

「はい。有難うございます。承知致しました。わたくしのやうな者でも、さう思召すのに誠に有難うございます。わたくしは決して構ひませんし、それに宅でも、わたくしがかういふ者でございますから、少しも心配なぞは致しません。外の方ではどう思召すか知りませんが、わたくしもわたくしの宅でも、なんとも思つてや致しませんから、どうぞ御遠慮なく。」

と二・リボンは實に斯く答へたのである。（完）

藤村が彼にやつた手紙は吾々の交際といふ事であるさうな。

精しい話は筆には言へない。」

と、かういふのだ。これはなんでも「十日間休業」の禁を破つてした爲事に相違ない。

何はともあれ、僕等三人は、三人して一人の女を思つてゐながら、決してお互の仲は悪かなかつたんだ。だから、こんな手紙を貰つても、僕は喜びこそすれ、決して不愉快な思などした事はなかつたんだ。

それだのに僕はこの二人を欺いたんだ、賣つたんだ。實にひどい事をしたものだ……。

戀愛と罪惡とは背中合せにくつついてるといふが實際さうだね。僕もあまり戀に熱した爲に思ひもかけぬ罪を犯して了つたんだ……併し、その當時は決してそれを罪だとも惡い事だとも思つてゐなかつたんだ。自分の戀の爲には如何なる人に如何なる事をしても構はないと思つてゐたんだね。まあ夢中でやつたんだと言へば言へるが、併し、その當時の自分としては多少そこに理窟がないでもなかつたんだ。――

僕は鶴岡や藤村の手紙を見て、初めは得意になつた。うまく煽てに乘つたんだね。やがて、さういつた感情が褪めて來ると、今度は二人が妬ましくなつて來た。人を煽てて置きさへすれば、それで好事のやうに思つて、二人は僕をさし置いて、平氣でおみかさんの家へ出はひりをしてるんだ、「二十日間休業」なんて如何にも僕に同情のありさうな事を言つて寄越して置きながら、直ぐその足で薔薇などを持つて女の所へ出かけるんだ……

それに二人がおみかさんに對して、少しも眞面目な感情を持つてゐないといふ事は、今の手紙を見ても直ぐに分かる事だ。二人はまるでおみかさんを玩弄物か何かのやうに思つてるんだ。そこへ行くと自分は飽くまでも眞面目だ。十四の年から廿歳の年まで七年間も思ひ詰めてゐたんだ。自分は七年

目でやつとおみかさんと口を利く事が出來たといふ事實を、決して仇やおろそかに思ふ事は出來ない。自分はこの貴重な運命を、神の賜物として、飽くまで大事にして行かなければならない……

　それに、鶴岡は才人ではあるが、勉強ざかりをぶらぶら遊んで暮らしてる人間だ。藤村はまだ中學校さへ卒業の出來ない愚鈍な人間だ。そこへ行くと、自分は中學校も無事に濟ましたし、高等學校へも一度の試驗で直ぐにはひれたし、高等學校へはひつてからの成績も決して人には負けてゐない。自分は鶴岡や藤村などより遥に優れた人間だ。一體、鶴岡や藤村などがおみかさんの相手にならうとするのが抑も間違つてゐる。同窓會を見渡したところで、おみかさんの相手になれさうな男は、自分を置いて外に誰がある――

　僕は實際かうまで自惚れてゐたんだ。だから、鶴岡や藤村はどうなつたつて好い。自分一人さへおみかさんの心を捕まへる事が出來れば、それで好いんだ位に考へてゐたんだね。

僕はどうかして鶴岡や藤村を出し拔いてやりたいと思つたんだ。そして知らん顏をして、心の中で二人を嘲つてやりたくなつたんだ。

　まあ、一體僕はどんな事をしたと思ふ。

　僕は今君に讀んで聞かした四通の手紙を、みんなおみかさんの所へ送つたんだ。そして、それに自分の手紙をつけて、さもさも憤慨に堪へないといふやうな態度を見せたんだ。「あなたは吾々の間でど

ういふ風に思はれてゐると思ふ。あなたは鶴岡や藤村にまるでおもちやか何かのやうに思はれてゐるんだ。あなたは實に危險な人達に圍まれてゐるんだ。注意しないとどんな事になるかも知れない。あたしも友達にこんな失敬な事を言はれるのは實にくやしい」といつたやうな事をさもさも眞面目らしく親切らしく書いてやつたんだ。すると直ぐおみかさんから返事が來た。おみかさんは僕の送つた四通の手紙の一つ一つに、小さい紙片に書いた評のやうなものを挿んで、送つて寄越した。その評はいづれも二人の不禮を怒つたものだつた。そして、又一通別に鉛筆で書いた手紙が附いて來た。それが、君、これだ――

「御書面謹みて拜見致し候。先日來より藤村樣鶴岡樣再三お出でになりましたについて御心配遊ばしますが、いつでも皆の事で御用ありてのお出故、兩親始め家人等も別にいぶかしとも思つてをりませんから、この事は何卒御安心下さい。尤も御用がなくてのお出でなれば、わたくしも迷惑を致しますから、その時はお斷り申します。扨、素寒貧氏よりの御手紙中人影と書いてあるをわたくしとして考へますれば、實に腹立たしき限りです。ましてあなたのお怒りの程は誠に御尤もの次第でございます。尚又彼の目云々など實に心外の至に存じます。丁度わたくしがその人の玩弄物にでもされてゐたかのやうに取られます。しかし、わたくしのやうな賤婦でも、それ程にはまだなりません――

過日來より皆々樣の御盡力に依つて、滯りなく祝賀會を濟ませまして、誠に嬉しく存じてをります。ところが今朝貴兄よりのお手紙にて甚だ面白からぬ考へを持ちました。記念祝賀會が媒介となつて貴兄人間につまらぬ浮名が立ちましては、折角の御盡力が何の爲に盡されたのだか分からぬやうになるだらうと心配致してをります。貴兄には目下試驗中にて殊更御大切なる時をあらぬ事にて御心配をかけ、誠に氣の毒に存じます。これもわたくしが至らぬ故、かかる事と相成り、皆樣に申譯なく候。昨夜藤村鶴岡兩氏御入來の際記念品お渡し申上げ候。あとは會計簿報告をお返し申せば、それでわたくしの役は相濟み、祝賀會と關係がなくなります。それまではいやでも致し方がないのでございます。

粗文亂筆お許し被下度候

みか　拜

園田一郎樣

昨夜藤、鶴、お出での節、粗末な花なれど進上致しますとて、バラの鉢植被下候。何の爲に被下候か計られず候へ共、御厚志にそむくも宜敷なしと申され、その儘頂載致し候。明日にも宮の前御通過の節お立寄被下候へば、バラも御覽に入れ候へ共、それが爲よしなき御迷惑相かかりては御同樣に困ります。アア、ドウシテヨイヤラ。」

と、かういふんだ。

おみかさんはすつかり僕の手に乘つて了つたんだ。僕は鶴岡や藤村を賣つて、一度でおみかさんの信用を得て了つたんだ。僕はおみかさんの生眞面目な性質をよく知つてゐたからうまくそこへ取り入つて、鶴岡や藤村はこんな人間だが、自分だけは飽くまで眞面目だといふ風に見せかけたんだね。僕はこのおみかさんからの手紙を貰ふと、すぐ又返事を書いたもんだ。藤村や鶴岡は「神聖な交際」「神聖な交際」といふやうな事を始終口にしてゐるが、腹の中では實際どんな事を考へてゐるんだか分からないんだ。こなひだの藤村の手紙に「彼の目」といふやうな事が書いてあつたが、あれなども實は子供の時、あなたが藤村を見る目が變だといふので僕等の間では大評判だつたものだ。藤村はまだそれを忘れずにゐるからあんな事を書いたんだ……と言つたやうな事を長々と親切めかして書いてやつたんだ。「彼の目」云々を書いたのは、內々それでおみかさんの本心を探らうとしたからだ。

すると又直ぐおみかさんの返事が來た。それがこれだ。迷惑だらうが又讀むから聞いて見れ給へ――

「お手紙拜見致しました。貴兄の御厚志には誠に感泣いたしました。それで妹が變に思ひまして問ひましたから、あらましを話しました。しかし鶴氏や藤氏の手紙の事は決して他言は致さぬ考です。御試驗中にこんなくだらない事で御勉強を妨げたうございませんが、至急お話し申さねばならない事があるので、失禮も打忘れて御勉強のお邪魔を致します。それは外でもない。つまり貴兄のお手

紙中昨日藤の所へお出での節のお話です。」

これはどういふ事だかよく覺えてゐないが、なんでも藤村の家へ僕が行つて、いつぞやの「リボンの卷」についての話か何か聞いて、それに自分の意見を附して、おみかさんの所へ書いて送つたもんと見えるんだ――

「先夜、鶴、藤が宅へお出での時、藤がわたくしに『先日の手紙の事について何ひたし』と申されました。すると鶴が何ですと藤の方を向きました。それにはわたくしも變だと思ひました。なぜと言ふならば『孔共』と書いてあつた藤からわたくしの所へよこした手紙の事です。わたくしはいづれ井僕が御承知の事と思つてゐたからです。その時藤は先程僕が君に言つた事さと言はれたので、鶴も分かつたと見えて、うなづいたのでございます。それは今わたくしが自分の言ひました通り少しも違はずに申しますから、鶴、藤の申された言葉とよく比べて下さい。『世間からどう御覽になるか知れませんが、家では別に構ひません』とこれだけです。あとは鶴、藤が自分の心と相談して勝手に極めたものらしいのです。おつと、まだ拔けてゐました。『わたくしがこの通りの人間ですから』といふ事はたしかに申しました。それにはわたくしが幼いときから交際好きで、男女の區別なく誰とでも親しく口をききますから、兩親もなんとも思つてゐないのです。ましてこの度は祝賀會の事で世間でになるのですから何の事です。尤も今まではわたくしは藤、鶴が不神聖な人とは思はなかつた

のです。それですから別に詳しい御返事にも及ばなかつたのです。會の外の事でお出でになる筈はないと信じてゐたのでございます。それからバラの花の事です。御兩人はわたしが非常に喜んでゐたと思つてゐたさうです。ところが、わたくしは餘り嬉しくなかつたのです。こんな事を言ひますと、慾張つてゐるやうですが、わたくしはバラが一番好きには相違ないが、あんな花はいくらバラでも大嫌ひです。それは御覽になつたら分かるでせう。ですが、折角下すつたものですから御厚意に對して深く御禮申しました。(その時は薄暗い所で、よくは見えなかつたのですが、バラである事は分つたのです)それから彼の日についての御說明はよく分かりました。わたくしもそんな事を耳にしました。(その時は一寸わたくしに惡魔がついたのでせう)併し、わたくしは決して不神聖な行ひはしなかつた積りです。そんな事は昔の事ですが、こんだは年も大分とりましたから、一層注意を致さなければならないと思つてゐるのですから、藤村樣へ手紙を二度出しましたが、封じたものは一度も差し上げません。萬一の事を恐れてゐるからです。その位に注意をしてゐるのですから、他から何か言はれる氣づかひはないと思つてゐたのです。ところが御本尊樣がいやな野心を持つて入らつしやるので、實に驚いた。若し貴兄の御厚志がなかつたならわたくしが油斷をして、今度こそは何と人に言はれるか知れないのです。それを思ふと誠に貴兄のお心が忝ないのです。けふの夕方、會計簿がわたくしの所へ歸りました。それを藤なり鶴なりどなたなり男子部發起人の內へお返し申

しますれば、それでわたくしは皆樣と關係がなくなるのですから、先づ〳〵安心が出來ます。(先程申しました惡魔については種々わけのある事ですが、もう過ぎた事は仕方がないのです。わたくしには始終男女二人の惡魔がついてゐたのです)

み　か　拜

いつもながら亂暴書御推讀被下度候

園　田　一　郎　樣參らす

書き忘れましたが、お願ひがございます。それは外でもないのです。若し鶴、藤樣が今後格別の用もなくてお出でになるを前以て御承知になりましたら何卒お止めが願ひたいのです。

御勉强いお邪魔致し候段、何卒お許し被下度候。わたくしも御試驗中はこれぎりなんにも申し上げません。」

と、かう言ふんだ。どうだい、君、おみかさんはもうすつかり僕を信用し切つて、僕を賴りにし始めたんだ。この眞面目な人が「感泣」なんて事を書く位だからね。薔薇の花の件などは、僕實際痛快に感じたものさ。この手紙でおみかさんの人格について今まで知らなかつた事が大分分かつて來た。おみかさんはもう今までに平氣で男とも附き合つて來てるらしいんだね。それでゐて、こんな堅い事を言つてるんだ。僕は益おみかさんに參つて來たね。併し、氣になるのは「惡魔」云々だ。して見る

と、實際小學校時代に、おみかさんと藤村との間には何かあつたのかしら。今の手紙で見ると、僕等が知つてる以上に深い事があつたらしい。さう思つて來ると、僕は堪らず心配になつて來た――僕の得意で坐つてゐた地位は忽ちぐらついて來た。

　そこで僕は味方が欲しくなつて來た。併し味方と言つたつて鶴岡位より外に人はないんだ。そこで僕は鶴岡に對して飛んだ惡い事をして了つたもんだと思つた。僕に後悔の念が身を責めて來て、もうゐても立つてもゐられなくなつた。丁度試驗も濟んだ所だつたし、僕は直ぐおみかさんの手紙を持つて鶴岡の家へ驅けつけた。

　併し、鶴岡に會つて見ると、やつぱり本當の事は言へなくなつて了つた。僕はまだ本當に後悔をしたんではなかつたんだね。僕はあくまで友達に自分を好く思はせたかつたんだね。その癖おみかさんが鶴岡を惡く思つてゐるといふ事は、堪らなく苦しいんだ。そこで僕は半分ほんとの事を言つて、半分嘘の事を言つた――

　僕は鶴岡や藤村の手紙をおみかさんに見せた事などは全然言はなかつた。唯おみかさんの所へ、男女交際について意見を求める手紙を出したところが、おみかさんの所から返事が來て、大分吾々を誤解してゐるやうだ。殊に君は誤解されてゐるやうだから、なんとか誤解を解く方法を取らなければなるまい。……そんな事を言つて、おみかさんの手紙の中に書いてある文句で、話しても都合の好い文句だ

け話して聞かしたもんだ——持つてつた手紙はとうとう見せなかつたね。

すると、鶴岡は厭な顔をして、急に塞ぎ始めた。僕はもう氣の毒になつてどうして好いか分からなくなつた。そこで、誤解を解くについては出來るだけ僕盡力しよう。僕だつて多少は誤解されてるんだから——多少はと言つた所が好いやね——どうしてもこれは明かりを立てなければならん、といふやうな事を言つて、精々鶴岡を慰めて歸つて來たもんさ。勿論、おみかさんと藤村との關係については、「隨分怪しいね。」位な事を言つて來たんだ。

一度犯した僕の罪は、益深く食ひ込んで行くんだ。それでゐて、當時の僕にはそれが一向分からなかつたんだ。僕は飽くまで利己主義な男だつたから、利己の爲には罪も罪に見えなかつたんだね——一度鶴岡を賣つた僕は、再び鶴岡を欺いて、彼を自分の味方にしようとするんだ。さうして、罪もない藤村を圈外へ排斥しようとするんだ。それでゐて、自分はそれだけの事をする權威でも持つてるやうに思つてるんだ。當時の自分を思ふと、實際身慄ひがするね……

すると、その明くる日だつたか、鶴岡から手紙が來た。それが、君、これだ。この大きな罫紙に六枚も書いてあるんだ。可なり長いが面白いから讀んで見よう——

「昨夕君が歸ると、しきりに頭が痛む。なんだか癪に障つていけないから、久し振りで喧嘩でもしようと五十の緣日へ行つたが、誰も相手がない。俺の頭は益痛む。面倒臭いから一層の事信樂へ行つ

て辯じたら直らうと、新橋まで行つたところが、交番の巡査が眤と僕を見るので、氣がついて見ると、隨分亂暴な裝をして、自分の顏が異つてゐたに違ひない。考へると時も遲い。で、戻る事にして、大茶でビールを四五杯引つ掛けて無事に歸つたが、少しも醉はない。頭は相變らずだ。茫然坐つてゐると、表では盛んに見世物の太鼓やらラツパが騷がしい。隣りでピアノを彈いてゐるのが猶癪に障つて、寢るにも寢られない。そこで僕は紙と筆を持つて來て、白紙に書き出した、君に郵送しようと思つたが、その內に勞れて寢てしまつた。今朝起きて、君を訪うたがゐない。空しく歸つて、昨晚の反古を取りまとめて送る。順序も何も滅茶苦茶だから、その積りで。

自分は何故頭が痛むか。何故癪に障るか。これはひどく刺戟されたからだ。一、自分は今實につまらない地位にあるといふ事を自覺した。二、自分は何者かの意中にあつて、惡意を以て鞭打たるるやうな氣がする。三、自分は何者かに誤解され、何者かに出し拔かれて、恰も船を著けるといふのを眞に受けて、島へ一人殘されてゐるやうに思はれた。四、自分の善意の行爲が惡意に取られてゐる事を認めたと同時に、ひどく癪に障つて、俺の敵である、卽ち自分の意志が疏通するまでは自分の敵であると思うたが、後には唯悲しみにまで變じた。五、自分は種々の事を思ふと同時に第三者の意志が少し解らなくなつた。六、自分は大なる或事が終つて後、些々たるこんな事の爲に局外者の起した感情を推察した。譬へば大きな綺麗な船のその細部に、少し許りのペンキが垂れてゐる爲

に、船その者はなんでもない、氣にも止めない、これが爲に船の美觀を害ふとも思はないが、側を通つたボートの學生が、この船にはペンキが垂れてゐる、汚い船だと言はれれば、つまらないペンキの爲にその船全體が名譽に係る。と言つて、船では知らないからなんとも思つてゐない。局外の批評は分からない、といふ事が感じられたので、自分は少しく恐れを抱いた。かういふ事が續發して盡きない。

これを今少しく事實に言うて見よう。其前に俺は左の如き事を斷つて置く。俺は神戸の商店を辭して、二月に歸京して、房州へ轉地して、三月に歸つてから、再び學生の境遇になつたが、目下は家長を兼ぬる事となつた爲に一般の學生と違つて、多忙で且は僕の職業といふ大問題が決しないので、實は勉強にはゐられない、又ゐないのだ。僕の習慣として、內心は兎も角も、外面は頗る眞面目を裝いてゐるといふ事は君の知つてゐる所だ。それから俺の空想（敢て空想と言ふ）即ち女子と交際するといふ事については、その理由もその徑路も、その僕自身の信認してゐる所も君は知つてゐる。それから、僕には目今交情と云ふものの外、戀なるものがないといふ事、これは嘘と思ふかも知らないが、僕は二年間各地に流浪して、種々の苦しみや、刺戟や、經驗の爲に青年特有のこの溫かい情が消耗して、ひどく僕の頭が乾燥した爲に、戀が出來難いといふ事を君は知つてゐる。僕は何卒この溫かい情を呼び戻したいものだと思つてゐるが、漸漸境遇が社會的に傾くと共に、乾燥するばかりだ

さて、前の事を事實に言つて見れば——

一、自分は祝賀會の發起者であるから、十分會の事に勤め、會が終つて後も、殘務と云ふので、信樂の宅を借りて、一日つぶした。僕は信樂については何等の意志も感情もない。僕が實際彼を識つたのは近來の事で、小學時代に藤村と歌はれて、その名を記憶してる位の事で、その人は僕の腦裡になかつた。ところが祝賀會の事で度々會ひ、その後藤村と兩三回訪うたので、少し許り彼を知る事を得たが、僕は唯賢い女子だと思うてゐた。僕の訪問を分解して見れば單に、祝賀會殘務の機械となつて、且は或危險者の爲に保護者となり、或意味に於いての監督者となつて同行した譯で、これは僕自身も同行の必要を認め、君も認めてゐたのだ。ところが、僕の位置について頗るつまらないと言ふのは、誤解されてる、僕の行爲は何か意味があるらしく彼に思はれてゐる。だから癪に障る。

二、斯くの如くにして、僕はしきりに信樂に鞭たれてゐると思ふ。僕は媚を呈して人の歡びを買ふものでない。理由なしの惡意や、誤解からの嫌惡は、僕に直接の利害がない限り構はない。が、人間として惡く言はれて、好い心持はしない。

三、斯く誤解されてる僕は癪に障らなければならぬ。僕は彼については頗る單純で、僕の「空想」なるものを彼に適合しようとは思はない、又思へなかつた。又到底出來難い事を知つてた。僕は出來る事ならば、敢て退かないが、出來ない事を強ひない。君等は恐らく美しき夢を見てたかどうだ

か知らないが、僕には何もないのだ。君はこの際彼にまで彼の意志を問うた。僕は知らなかつた。僕は君が單獨にやらうとは思はなかつた。僕の意志を君は聞くと思うた。僕は出し拔かれたやうな氣がした。が、この事は僕の頗る滿足し又君に感謝する所で、これが爲に僕の名譽と信用の幾分を取り返した。僕の誤解されてゐる事から考へた。又全局より考ふるも、君のこの擧は成功に終つたのだ。僕はこの結果を以て成功といふ。僕は手を擧げて喜ぶのだ。この事は十分君に感謝する。

四、僕は過日、信樂の家に記念品を取りに行かうと言ふから、僕は例の如く同行した。ところが途にバラがあつたから、藤村が買つて、一緒に持つて行つた。これは僕の友情から出た事で、當初彼に就いては無頓著であつたが、度々往來して見ると、確に僕には友情といふものが湧きかかつた。藤村の意志に知らない。僕の意志は出來かかつた友情からだ。恐らくこれは自然の人情だらう。ところが信樂は他意にとつてゐるらしい。僕は度々會の爲に彼を勞してゐるからの一片の心情から持つて行つたものを誤解してゐるのは仕方がないが、こんなものは迷惑になるといふ事が、人として言はれようか。藤村の意志は知らない。僕に向つてはその感情が敵として價値がある。僕は薔薇その物體については言はない。僕自身の意志に向つて、彼は感謝するべく當然の人情だらう。それを彼は僕の意志を誤解してゐる爲に、無論知つてゐて惡感情を抱く筈がない。僕の好意といふものが總て打ち消されて了つた。僕は敢て贈り物をして人の禮を喜ぶものではない。唯平和な、溫かな、出來かかつた

僕の友情から持つて行つたものを、反意に取らるるは如何に辛からう、如何に苦しからう、僕は悲しみを覺ゆる。

藤村の手紙については、君も僕も知らない事で、藤村は何の責任を以て否々と書いたか、頗る問題だが、藤村がその手紙の答を促した時に、彼は私は構ひませんと言つた。これは人間普通の言葉で、その人の前で私は厭ですとは言はれない。況んや女子が斷じて厭といふ事の恐らく出來ないのは、僕も知つてる所だ。藤村が否々と言ふから、僕が聞いたら、何とか言つたが、解らない儘で無言で聞いてた。こんな事を取り上げて騷ぐといふ僕ではない。この時分には僕は彼に對して、多少氣の毒といふ感じが起ると同時に、この答が却つて彼の苦しみであつたかを想像された。然しながら、總てを深く腦裡に置かなかつた。

自體僕は人の言辭を捉へて喋々するものでない。この時分には誰もが話柄は單に信樂の事が多かつたのであつたのだ。僕は人を弄するものでない。が、手紙には多く信樂の事があつた。これは君も僕も同じ事で、敢て不審はない。列國と義和團が衝突すれば、話柄は戰話が多いと同じ事だ。

五、それについて君の目下の意志が聞きたい。

六、扨、段々考へて見ると、頗る恐れを抱くやうになつた。それは局外者の批評と、彼即ち女子等が僕に對する意志だ。僕は半は解したが、半は知らない。餘りに僕が單純であつた爲、この如き事

に氣がつけなかつた。親睦會が綺麗に終つて、こんな事で人の感情を害し（？）就中、僕の一生涯に大障害を與へたが、僕は悲しみを覺える。過去は仕方がない。誤解も仕方がないとした所で、僕が惡徳の的になつたのを殘念に思ふ。

昨晩の最高はこれだ。

なんだか辻褄が合はないやうだが、僕の積の固まりはこの事なのだ。

僕は仕種馬鹿になつた。

鶴　岡　達　也

園　田　一　郎　殿」

と、いふんだ。これを見ると急に鶴岡が氣の毒になつて來てね——と言ふよりは、寧ろ恐くなつて來てね——おかみさんが鶴岡に對して抱いてゐる惡感情だけはどうしても取り去つてやらなきや濟まないと思つてね。早速おかみさんの所へ手紙を書いた……

但し、考へて見ると友達なんて當てにならないものさ。初め僕等三人はおかみさんを中心にして、如何にも仲よく、總ての行動を共にしてたのだが、忽ち僕の二人に對する課題となつたかと思ふと、今度は僕と鶴岡が一緒になつて、藤村一人を排斥し始めたんだ。鶴岡だつて、前に寄宿へ寄越した手紙によれば、隨分藤村と仲好く一緒に歩いてゐた筈のが、今の手紙になると、藤村の事を「危險者」

だい何だのと言つてゐんだ。「藤村の意志は知らない」とか「藤村の意志は分からない」とか、繰り返し繰り返し藤村と自分とは違ふといふ事を斷つてゐるんだ。考へて見ると、僕ばかりぢやないんだね、「好い子になりたい」といふ意見は……

おみかさんへ宛てて書いた手紙の内容は忘れて了つたが、要するにこんな事だつた――自分は今まで鶴岡を誤解してゐた、鶴岡はやはり昔の鶴岡のやうにさつぱりした人間だつたんだ、それを惡し樣にあなたの所へ告げたのは、あなたを思ふ餘りの自分の猜疑から出た事だ、どうか鶴岡に對する疑ひは一掃して下さい。鶴岡の苦しんでる事はこの手紙でよく分かるから、といふやうな事で、今の鶴岡の長い手紙を一緒に状袋へ入れて送つたもんだ……

併し、鶴岡に對してはこれ程罪を感じた僕でも、まだ藤村に對しては一向罪を感じなかつたんだ。罪を感じなかつたどころではない。僕はまだ藤村が憎らしくて憎らしくて堪らなかつたんだ。それといふのも、おみかさんの所謂「惡魔云々」が始まりなんだ。僕は同じ手紙で、散々に藤村を罵倒した事を覺えてゐる。藤村の平素の不品行、學校の不成績などをまで、誇張して書いて、どうかしておみかさんの心を藤村から放さうとした。惡魔云々」については詰問的な文字まで並べたもんだ。さうして、あなたには惡魔がついてゐたかも知れないが、自分には「美の神の兒がついてゐた」といふやうな事を遠廻しにくどくどと書いて、暗にその當時の自分の戀をほのめかしたもんだ。

すると、直ぐ又、細かい字で書いた、長い長い返事がおみかさんから來た。それがこれだ――

「貴君がお病みになつて嘸御安心遊ばしたでせう。わたくしは四五日前から熱が高くて、頭痛が烈しく、毎日困つてをります。その原因は一つは時候のせゐでありませうが、わたくしの身にとつて重大の事が種々腦中に亂入して來たのです。然し、けふは漸く少し樂になつたが、又一問題が往復して、頭痛は又元の通りわたしを苦しめる。それは鶴岡樣の事であるのです。貴君は如何なる事を鶴に言はれたか知らないが、鶴の意中が分かつた。今日に於いて、わたくしは鶴に對して申譯がない。實にお氣の毒な考へを持つたのです。わたくしは今日まで鶴岡氏を誤解してゐたのです。然し、何等の點をとつて誤解したかと言はれると、お答が出來ない。唯貴君の御注意を受けてから、皆樣を邪推する念が非常であつたのです。そこで、バラの事などで聊か疑ひを起したといふより外はないのです。然し、今日のお手紙を拜見して、始めて鶴岡樣の御心中が分かつたので、今までのわたくしの疑ひは全く晴れたと同時に、非常に申譯がなくなつた。頭痛が再び烈しくなつたのはこの譯です。

小學校時代にわたくしに惡魔がついてゐたと申し上げたから、必ずお尋ねになると思つてゐたのです。それは今更申し上げません。なんでも四五年前でしたでせう。秋の事でした。(時日は手紙を見れば分かるのですが、藏の内に秘めてあるから、夜は一寸出せない)二通の謝罪狀を受けた。それ

は誰にも他言しない考へであつたのですが、唯一人非常にわたくしを憎む人が、小學校時代からあつた。その人と久しぶりで會合したのは、五月の末であつたのです。その時、種々の話の末、わたくしが小學校時代に、藤村について、有る事無い事を言はれた事が始まつた時、その人に限りその手紙を見せた。その時その人はわたくしに向つて『わたくしは實に今まで貴孃の心を知らなかつたので、種種と疑つた事もあつたのですが、嘸貴孃は迷惑でしたでせう。』と言はれたのです。その時、わたくしは實に嬉しかつた。わたくしを非常に憎む人が、この手紙でわたくしの心中を察して呉れたから、誠に滿足したのです。それで、その後その人と非常に親密であるのです。

惡魔の事については、今後決して他言しません。唯無い事を言はれて、惡評を立てられたのが、實に殘念です。藤村とわたしの間は、實に情ないのです。口もろくにきかず、ただ目位の事で、種々惡評を立てられたのですから、藤も心中に定めて悲しみを生じたでせう、有形の惡魔はわたしの清淨なる心を汚さうとしたのです。無形の惡魔はわたしの心中にちよいとついたのですが、成長しなかつたのは良心の喜ぶ所です。貴君には美の神の兒がついてゐたさうです。それを伺ひたいのは山山ですけれど、自分が惡魔の事を十分話さないで、人のばかり聞かうといふのは餘り勝手がましいからどうでも宜しいです。

それから、藤村さんの品行について他言すなとお仰せですが、他言しろと言つてもわたしは言はな

い。わたしは決して人の事は言はないです。わたしが人の事を言ふ段になると、小學時代に色々の風説が立つたでせう。然し、わたしは自分ので懲りてゐるから、人の事は言はない。事實なれば言つても宜しい事は澤山あるですが、わたしの胸中に深く秘めて置きます。ですから、どうしても忘れられない。言つてしまつたら忘れるかも知れぬが、わたしは言はれない。假へば貴君にしろ、誰にしろ、わたしに不都合な文を下すつても、わたくしは決して人には言はないが、その人とはそれぎり交通はしない考へです。

交通は別に迷惑でもないのですが、餘りしげ／＼は少し困ります。一寸あなたにお尋ね申しますが、わたくしと永久に御交通下さるお積りか、又は祝賀會と連絡してゐる時だけですか、お伺ひ申します。まだ申し上げたい事は澤山ありますが、頭が痛くて堪へられないから、又次に讓ります。この口は旅行でも許はしますか。わたくしはいつでも留守番でつまらないですよ。

みか拜

一郎様参る

けふのお手紙は切手不足でした。これから氣をつけて下さい。藤村様に先日來の事が知れたら、おこるは必定、僕も監督されてゐるたから癪に障ると言ふかも知れぬ。わたしに對して別に不都合ではなかつたのです。貴君がわたしの爲に嫌はれたらどうなさる。今から心配です。」

と、かういふ手紙なんだ。相手の不足を叱られてるところが面白いぢやないか。おみかさんの性格の一面はこれでも分かるだらう。なんでもふしだらな事が嫌ひなんだ。飽くまで常識の上に立つて、何事もきちんきちんとして行かなければ氣が濟まないんだ。

併し、そのおみかさんにも一つ曖昧な所が始終あつた。といふのは、「惡魔去れ」に關する說明だ。今の手紙を見ても、僕にはやつぱり惡魔の話ははつきり分からなかつた。「無形の惡魔」といふやうな事を言つてる所を見ると、おみかさんはやつぱり昔藤村を思つた事があるらしいんだ。さうかと思ふと自分を誤解してた人があやまつたとか何とか言つて、さういふ事實を否定してゐるやうな所もあるんだ。併し、この手紙全體から推すと、僕等の藤村に對する中傷は何等の功をも奏してゐないんだ。おみかさんは鶴岡に對する誤解を解くと同時に、藤村に對する誤解をも解いて了つたんだ。そして何等の理由を述べずに、「別に不神聖ではなかつたのです」と、至極簡單に言ひ切つて了つてるんだ。それが僕には分からなかつた。それが僕には不滿足で不滿足で堪らなかつた。

僕は何も自分だけを別の者にしようとしたんだ。やがて、鶴岡と同盟して、自分達二人だけを別の者にしようとしたんだ、ところが、おみかさんは藤村をもその中へ籠めて了つて、手もなく三人を一緒にして了つたんだ。それが僕には不滿で不滿で堪らなかつた。……

併し、今の手紙には又別に小さい紙片がついて來てるんだ。それはこれだがね。これを讀むと、僕

も少し好い心持になつて來た――

「けさは大變に頭痛が少くなつた。ゆうべ書いた手紙を見ると、意味の分からない所、字のぬけた所が山程あるので、一人で笑つてゐるのです。ゆうべは餘程變でした。それは色々と考へるとなんだか滅茶苦茶になつてしまつた。鶴岡氏も藤村氏も、わたしに對して少しも不神聖でないと言はれると、尤もなのです。唯わたしは貴君の御注意を受けてから、恐怖の念が非常であつたのですから、つまり皆樣が嫌ひ過ぎたのです。これは願ふのではない、御相談申すのです。何事も御存じになつた鶴岡樣と貴君とわたくしとが心中を打ち明けて、互に胸の雲を晴らしたいので、それで手紙では時日もかかるし、種々面倒ですから、今日午後からお二人でわたしの所へ來て下さいませんか、その時にわたしは鶴岡氏に十分御厚意を謝し、併せてわたくしの誤解してゐた事も謝したいのです。然し、貴君が惡いと思召すならば、やめにして下さい。」

と、かう書いてあつて、側に小さく――

「藤村樣には内々にして頂きたい。鶴岡氏は藤村氏に言やしませんかしら。」

と、書いてあるんだ。

「藤村氏には内々」で稍僕の胸が治まつたんだね。併し、おみかさんが家へ來いと言つて來た事は、今朝鶴岡に言はなかつた。ただ長い方の手紙だけ見せてね、おみかさんの誤解はとけたから安心し給

へ、といふやうな事を言つて、それも僕のお蔭だよといふやうな顔をした……
僕は學校の試驗の爲に、まだ一度もおみかさんの家へ行く機會がなかつたんだから、おみかさんに來いと言はれて、行きたいのは山々だつたんだが、それも例の利己主義から堪へて了つたんだ――一人なら或は行つたかも知れないんだ。鶴岡と一緒だといふ事が厭だつたんだね。それが元で、又鶴岡が繁々行くやうな事になると大變だと思つたんだね。それに僕は、おみかさんの家へ行つて、おみかさんの家の人に顔を見られるといふ事がどうしても厭だつたんだ。なんだか自分の腹を見られるやうでね……つまり僕は女に惚れてゐながら、惚れてゐるやうな樣子なり顔なりを人に見せるのが厭だつたんだ。
で、おみかさんの家へ行きもしないでゐると、おみかさんの方から、又續けて手紙が來た――
「先日來より度々御書面被下、又皆樣のお文拜見仕り、お蔭にてわたくしの諸氏の間に何か種々言はれをり候事承知致し候。そのお話は如何なる事にや元より存じられず候へ共餘り心よき事には御座なく候。種々の噂伺ひたき山々に候へ共、それが爲にわたくし病氣の快癒致すべき時が無之候間、何卒仰せ下さるまじく願上候、今わたくしの身は實に悲しき實に苦しき位置に有之候、然しながら、今後五六年も過ぎし時、今の身をかへり見れば、この苦しさがまだまだ樂しみであつたといふ事に相成るべきかと存じをり候。兎角嫌疑の多き世の中に候へば、貴君樣にも隨分御注意被遊候やう願

上候。昔話を致し候へば、隨分面白き事も澤山有之候へ共、儘ならぬが浮世の常とあきらめ申候。わたくしは何故あなた方の社會に兎や角言はるるや、實に殘念の至りに存じをり候。それ故この頃は非常にあなた方社會が怖く相成候。

あなたは如何なる思召しにや計られず候へ共、わたくしには殊更嫌疑多きあなた方社會に對してあなたと御交通する事の出來ざるを斷言致し候。何卒右の次第あしからず御推量被下度候。貴君に文を差上げ候は、これが最後と相成るやも計られず。

鶴岡氏に對して貴君は如何なる事を仰せられしか。鶴岡氏はわたくしが氏の厚意を無にしたと言はれ、非常に御立腹の由に存じられ候。わたくしは決して左樣な失禮な事は心中に無之候。御厚志は十分御禮申上げをり候積りに御座候。鶴岡氏に對しては貴君より宜しく御傳言被下度願上候。一昨日お出で有之候爲、當分お目に掛かるべき時御座なく候。尤も來月二十四日なればお目にかかれるかも知れず候。貴君よりお手紙を下さるなれば、成るべく要事を澤山書いて下さい。もう二度位で御無沙汰致します積り、向島のドォミアに就いて少し申度事有之候間、この手紙は最後ではありません。わたくしはあなた方諸氏の平和を偏に願ひをり候。

みか拜

一郎樣

いい加減に御無沙汰をしないと、それこそ大事になるでせうから、そのつもりでゐて下さい。」

と、かういふんだ。おみかさんはあんまりごたごたするんで、僕等の社會が恐くなつて來たんだね。それといふのも、みんな僕から始まつた事さ。自分だけ好い子にならうと思つて、とうとう自分までが遠ざけられるやうな事になつてしまつたんだ。この手紙によると、おみかさんは段々僕等と交通を絶たうとしてるんだ。僕は自分で掘つた穴へ自分で落ちてしまふんだ……

併し、自惚な僕は、唯それだけの事で諦めて了ふ事は出來なかつた。「昔話を致し候へば隨分面白き事も澤山有之候」といふやうな文句を見ると、若しやおみかさんの方でも何とか僕の事を思つてゐるんぢやないかしら、などとも考へて來るんだ。それに、この手紙が最後だと書いてあるかと思ふと、直ぐ又その後にまだこれは最後ぢやないといふやうな事の書いてあるのが、なんとなく未練らしくて、妙に僕を迷はすんで……

併し、ではもう自繩自縛をやつて了つた後だから、今更自分だけは交通を續けたいといふやうな事を言つてやる勇氣もなくなつて了つた。そこで、こつちからももう當分手紙を出さないつもりで、もう一度「美の神の兒」の謎を前よりは少し明からさまに書いてやつたもんだ。その返事次第で、僕ももう諦めて了ふつもりだつたらしいんだね――どうもおみかさんは今でも藤村に好意を持つてゐるらしいし、こないだ内からの事で、鶴岡と藤村と僕との間は妙になるし、多少は僕の我も折れたんだね――

え。向島のドオタアかい。うん、こりや何でもないんだ。前に話した、かるた會の晩に僕の手から雪を喰べた女さ。あれがその時分向島に住んでゐたんだ。僕はおみかさんの同情が得たいばかりに、あの女との馬鹿げた戀を告白して、あの女を極力罵倒したものなんだ。まあ、いろんな事をして、おみかさんの氣を引かうとしたんだね。

やがて、おみかさんの所謂「最後の手紙」が來た。これが、君、又こんなに長いんだ。これはいつもの男見たいな言文一致と違つて、大分しやれて書いてある――

「嗚呼宜なるかな、世に疑ひあるが爲、人は親友を得る能はず、人は清き戀を失ふと。實に宜なる事ぞかし。

されど吾は疑ひの爲に友を捨てず、疑ひの爲に戀を失はず、清麗なる交り、神聖なる戀は、深く腦裡に秘めて、永久吾身を離れざるべし。

君の清淨なる、篤實なるお心によりて、吾は疑ひの境をのがれ出づるを得たり。君は又君の心より清淨無垢の人となれり。吾これを喜び、且は君に深く感謝し奉る。御承知なれども、わたくしは學淺く、（目下は小學校時代よりも程度低し）文拙く、才なく、智なし。それが爲、自分の眞意を十分君に告ぐる事能はず。（やゝもすれば誤解されさうです）嗚呼吾は何たる愚物ぞ、はたいかにせむ。されど、それが爲、疑ひを抱かれしは暫時にして晴れしと聞く、吾が喜び何にか例へむ。

君が少年時代に於いて、美の神の子は君に清き『ファアスト、ラヴ』なる者を教へしと。君は疑ひの世の爲に、そのラヴを失ひ給ひしか。そのラヴは汚されしか、世の多くの人は、ラヴの神聖なるを知らず、又神聖のラヴを保つ事能はずして、自ら不神聖の奴となる。實に歎かはしき事ならずや。

水無月の二十八日の夜、十二時少し前なりし。臺ランプの光はさびしげに吾が部屋を照してゐる。その中央の床の中にて、吾は何を言ひしか。實に左の事でありし。向島なる某家のドオタアよ。貴女は吾が同窓の友なる園田氏を弄せしか。實に憎みても餘りある所業なり。されども吾は貴女を憎まず。貴女の罪を憎む。乞ふ、ドオタアよ。夢さめなば、氏に對して深く謝し給へよ……路遠ければ、吾が聲はえ聞こえじ……されど、吾が願ひ、夢にだに見てよかし。(更に言へり)

園田氏よ。貴兄は向島のドオタアを畜生とまで見下げてお出でです。行つて面皮を引つぱいでやらうとお憤りですが、(御尤ではあるが)どうぞそれはよしてお上げなさい。人間と思召さばお腹も立ちませうが、畜生に物を言つても分からないでせう。且、貴兄の價値が下がりませう……夢がさめたなら、必ず貴君に謝すでせう……、

その夜は十時半より床に入りしが、種々の空想を描いたり、色々の考へが起つたりして、一時を報ずるまではまどろみもせず、その後も色々の夢に襲はれて、安眠する事が出來ざりし。

三時半頃になりし時、みか起きよ〳〵、運動に行けよと、母は吾を呼び起せし。(これは二十八日夕

でありし」母はわたしに向つて、そなたは近頃食も進まず、顔色も悪し、その上夜になると寝るのがいやだなど言ふ。何か心配でもあるのか。大方、運動が不足から生じたのであらう。明日から、早朝より一時間づつ運動に行けと申しつけられた。されど、吾はその日(即ち今日)精神疲れて起きる能はず。向島について申上度きは右の次第である。

切手持人はお怒りの上の仕向けならんか……嗚呼誤てり誤てり。吾は君に對して誠に失禮なる事を言ひけるよ……許し給へよ〳〵。嘸かしケチな奴だと思召さむ……宜なり……されど吾は友人間に往々ある事にて、いつにてもそれを互に言つてゐた、言ふばかりであつた……その癖の退かざりし僅、貴兄にまでかかる御不禮を申し上げしなり。何卒許し給ひてよ。」

これは、不足の切手を僕が返したからだ。何もこんなにあやまらなくても好いものを、ひどく氣にかけたものらしいね——

「若の音の兄について、種々のお話を承れり。それについて考ふる事一晝夜、而してその是非を分つ事能はず(知識の乏しき者の悲しさには、その利害を解するに苦しむ)今だに苦しんでゐるのです。

わたくしはこの手紙が一生に於て最後とは申しません。或部分に於ての最後と致します。

あなたは越後へ御旅行遊ばすさうです。随分御養生遊ばせ。この頃は徹夜で入らつしやるさうですが、御[illegible]ですか。御病氣になつては大變です。わたくしなどは兄もあり弟もありますからわたく

し一人位どうでも好いのです（兩親へ對して不孝ではあるが。）貴君は園田家の礎です。貴君の身に何か變でもあつたなら、お母上樣の御心配は如何でせう。中々わたくし共のお察し申す位の事ではないでせう。貴君は常にニコ〳〵としてお出でですが、御心中は中々御心配が多いでせう。わたくしは昔からお察し申し上げてをります。

此間よりの事は僞岡氏の外、誰にもお明かしには相成らず候や。若し僞氏が他の方へ明かしにならずや、お伺ひ申し上げ候。若し左樣な事有之候を知らずして、後に困却する事ありては誠に困り申候間、是非お知らせ下され度候。

左の歌はわたくしの大すきの歌です。

行末も過ぎこし方もつく〳〵と
　おもひ集めて月を見るかな

では、隨分御機嫌よく御勉強被遊ませ。わたくしは君樣の御出世を何處からかの闇でお待ち申します。暫時たりとも君に疑はれしが如何にも無念。時期到來致さば御交際下さるか……

最後と思へば、言ひたき事も胸せまりて言ふ事能はず。御自愛專一御勉强あらむ事を祈る。

み　か　非

園　田　一　郎　樣

と、かういふ永い手紙なんだ、その時分の廿歳位な女にしては、隨分行き屆いた考へやうだらう。おみかさんは飽くまで世間といふものを土臺にして考へてゐるんだ。世間にどう思はれるかといふ事が、おみかさんにとつて常に大問題なんだ。だから、「美の神の兒」の謎なども、つひに解らず了ひに終つて了つたんだ。

僕もまだその時分は、可なり世間といふものに對して自分を大事にしてゐたから、おみかさんの言ふ事は一々尤もだと思つたんだ。時期が來れば又交際するといふやうな口吻も見えてゐるんだから、ここはおみかさんの言ふ通り、當分交通を絶つ方が好い、いや、どうしても絶たなければならないといふ風に、思ひ諦めて了つたんだね、僕はその手紙を貰ふと、それつきりおみかさんの所へ便りを絶つて了つた。そして、その時分越後にゐた伯父さんを訪問旁、暑中休暇の旅に出て了つた……

併し、いくら道徳的に冷やかなおみかさんの手紙の中にもやはり若い女らしい熱情は何處かに出てゐた。戀する若い男がどうしてそれを見つけずに置かう。おみかさんがその頃始終身體を惡くしてゐた事も、僕にとつては或重大な意味があつた……

社會や友達を恐れて、おみかさんと交通を絶つた僕も、心の奥の奥の方ではやつぱりおみかさんを思つてゐたんだ。僕は到底おみかさんを忘れる事は出來なかつたんだ……

この手紙の中に、「疑ひを抱かれしは暫時にして」とか「暫時たりとも君に疑はれしが如何にも無念」

とかあるのは、多分藤村に關する事だつたらう。僕はおみかさんと藤村との事を疑つて書いてやつて、しかも直ぐ疑ひの解けたやうな事を言つてやつたんだらう。その癖、藤村に關する疑ひは、その時分まで決して解けてやしなかつたんだ。その疑ひがあつたからこそ、一面交通を絕つ氣にもなつたんぢやないか。

併し、あんまり女を疑つて、それが爲に女の心を失つてはならないと思つたんだね。どこまでも女に對しては見えが張りたかつたんだね……

そんな事でおみかさんと交通を絕つた僕が、果していつまでもその儘でゐられたらうか。

一四

併し、考へて見ると僕も大膽だつた。「あの時分」の高等學校の寄宿舍にゐながら、平氣で女と手紙の遣り取りをしてゐたんだからね。戀の前にはなんにも恐いものはないと言ふが實際だね。

何しろ「あの時分」の高等學校と來たら、女の「を」の字も口にする事の出來なかつた時代だからね。女と交通してゐるなんて事が分からうものなら、それこそどんな目に會つたか分かりやしない。恐いのは『制裁』だ。あの恐ろしい『鐵拳制裁』といふ奴だ。現に僕が寄宿をしてゐる間にもかういふのがあつた――僕はいまだにはつきり覺えてゐるが、君はもう覺えちやゐまい――

英法一年の生徒だつたがね、なんでも吉原の女郎か何かと文通してゐるのが知れて、それはそれは酷い目に會つたもんだ。毎晩のやうに中堅會とか矯風會とか言つた連中にグラウンドへ引つ張り出されて、ベエスボオルのバットで撲られるんだ。僕は三階の寢室で、夜更によくヒイヒイいふ男の泣き聲のするのを聞いて、自分の目の前に白刃でも突きつけられたやうにぞつとしたもんだ――考へて見れば、自分も同じ事をしてゐたんだからね。

さう言へば、その生徒は「あの時分」の高等學校の生徒にしては少しにやけてゐた。併し、學校の成績は中々よくて、いつも十番以内にはゐたのだつたが、とうとう今の一件が學校に知れて、放校さ。もうどこの學校へはひる事も出來ないので、先生自棄になつて、とうとうほんとに墮落して了つたといふ話だ。撲つた連中は無論何のお咎めもなしで、つまり撲り徳をしたわけさ、――勿論今日はこんな事はありやしまいが、まあ當時は一寸した例がかうしたものだつた――

さういふ中で、僕は若い女と公然手紙の往復をしてゐたんだ。それでゐて、誰にも見つからなかつたんだから、今考へて見れば不思議さ。尤も、おみかさんの字は丸で男のやうだつたし、「みか」といふ名はいつも本字の「甕」の字が書いてあつたから、ちよつと人には知れなかつたんだね。それにその時分の僕と來たら、裝ぶりにはちつとも構はなかつたし、手紙の外には別に怪しむべき行動もなかつたわけだから、どうしたつて知れつこないのさ。勿論、學校で「甕」の話などは一言もしなかつた。

僕は小學時代、中學時代と同じやうに、高等學校へ來ても、やつぱり上部は學術優等品行方正の模範學生だつたのだ。

併し、僕が寄宿でおみかさんと手紙の遣り取りをしたのはほんの一月位の間だつた。さつきも言ふ通り、夏休みになる時分にはもう消息が絶えてゐたんだからね。でも、僕はちつとも失望しなかつた。おみかさんの心は藤村や鶴岡よりもづつと僕の方へ近寄つて來てゐると思つてゐたんだね。ひとりでさう極めて、安心し切つてゐたんだ。なあに、今こそ消息を絶つてゐるが、機會さへ來れば――機會さへ來れば、今度は自分一人だけで交通が出來るんだ。藤村だの鶴岡だのといふ邪魔者なしに便りが出來るんだ。僕はこんな風に自惚れて樂觀し切つてゐたんだ。

だから、越後の方へ出かけた旅行の間も、たつた一人ではあつたが、少しも寂しい思ひなどはせずに、毎日寫眞器械を肩にしては、極めて暢氣に山や川を遊び歩いたもんだ。その時の失敗談や何かは、その後三宜亭であつた同級會で話したから、君も覺えてゐるだらう――

旅行から歸ると、間もなく新しい學年が始まつた。僕はもう寄宿にゐなくても好いやうになつたから、番町の家から學校へ通つた。中學校へ通ふ時分と同じやうに、この道のりは隨分長かつた。やはりまだ電車のない時分だつたから、一里近くの道を毎日テクテク歩いて行かなければならなかつた。

併し、僕はもう中學校時分のやうに往來で毎日會ふ女に目をつけたり、通りがかりの店にゐる娘に色目を使ふやうな事はなかつた。一年寄宿にゐる間に、あの時分の所謂『校風』が染み込んだ勢もあるには違ひなかつたが、どうも唯それだけではなかつたやうだ。その當時の僕はそろそろ『人生』に自覺の目を覺ましかけてゐたと同時に、そろそろ『戀』にも自覺の目を覺ましかけてゐたのだ――いや『戀にも』ぢやない。寧ろ戀の自覺が人生の自覺を促してゐたのだ。その時分の僕に『戀』と『人生』との區別はなかつた。『戀』は即ち『人生』だつた。『人生』は即ち『戀』だつた――僕はいつの間にかはつきりおみかさんを自分の戀の標的にする事が出來るやうになつてゐた。おみかさん。おみかさん。自分の戀におみかさんより外にない。自分にとつておみかさんは世界に唯一つの物だ。かういつたぼんやりした考へからではあつたが、僕はもうおみかさん以外の女には見向きもしようとしなかつたのだ――

僕はおみかさんに會ひもせず、おみかさんと交通もせずに殆ど半年を過ごした。併し、この半年は『期待』と『希望』に充ち滿ちてゐた。今になつて考へて見ると、おみかさんに關して僕が最も幸福だつた時代は、この半年の間だつた――おみかさんの顏も見なければ、おみかさんの手紙も貰はない、この半年の間が僕には一番幸福だつた――

少しでも僕とおみかさんとの間に連絡が附くと、いつでもきつとその間に何か故障が起らずにはゐなかつたのだから。

とうとうその年は十二月の大晦日が來るまでおみかさんに便りをする機會がなかつたがね。大晦日の晩に僕はふとこんな事を考へた。いくら世間を憚つて便りを絶つてゐるとしたところで、年始狀位出したつて差支はあるまい。年始の詞の外なんにも書かない年始狀なら、いくら堅いおみかさんだつて快く受けて吳れるだらう。さうだ。年始狀が好い。それが元で又交通が開けないとも限らないから——

僕はひどく巧い事を考へた積りか何かで、早速奉書を一枚買はせて、これに丁寧に年始の詞を書いた。併し、どうもそれだけではまだ物足りなかつた。半年便りをしなかつた間に言ひたい事は山程たまつてゐる。どうかして、何かの手段でそれをおみかさんに知らせたい。さう思つた揚句に氣のついたのは、その時分そろそろ僕の書き始めてゐた『詩』だつた。勿論『詩』と言つたつてまだその時分の僕の『詩』は、丁度月並の俳人や歌人が、運座で課題に臨んでから、無理に絞り出す種類のもので、決して內心の命令で、胸の奧から溢れ出て來るやうな、そんな『詩』ではなかつた。併し、さういつた『詩』でも、この際赤裸々に文章で書くよりは、何となく拘束される所がないやうな氣がしたので、早速書き始めたが、どんな事を書いたか今ではもう全く忘れて了つた。なんでも七五調で長々と書い

た事だけは覺えてゐる。『明治……年を送る』といふやうな題で、その半年の間の自分の生活から思想からの經路を事細かに書いたと思つた。出來上がると、早速半紙へ清書をして、年始狀と一緒におみかさんの所へ送つたもんだ。

すると、『計畫圖に當つて』といふのも大袈裟だが、正月の二日だつたか三日だつたかに、直ぐおみかさんから答禮の年始狀が來た。それがこれだが、表には唯「謹みて新年をことほぎまつる」と書いてあるだけだ。表はそれだけだが、裏を見て呉れ給へ。「お作の一節身に徹して嬉しく存じ上げ候」と書いてあるだらう。たつた一句だが、この一句が當時の僕の胸を、まあどんなに動かしたと思ふ。僕は嬉しくて泣きたくなつた位だ。

驚いたのは、藤村や鶴岡の圖々しさだ。兎に角前の年にあんなゴタゴタがあつた位だらう。比較的おみかさんに信用を得てゐる僕でさへ、年始狀一本出すのにも、餘程躊躇してからした事だのに、二人は厚かましくも元日におみかさんの家を訪ねてゐるんだ。年始に事寄せてね。ほら、その後に書いてあるだらう。「元日午後四時頃鶴岡、藤村御兩氏の御囘禮に預かり候」つて――

僕は急に不快な感じに襲はれたが、又その後に書いてある。「定めし御承知にも有之べく候へども、私より右の兩氏へは御答禮申上げず候」といふおみかさんの一句で直ぐ又好い心持になつて了つた――

僕は「まア大丈夫だ」と思つた。鶴岡や藤村が僕を袖にしていくら侵略的な行動に出ても、もうお

みかさんの心は俺の方へ來てゐるのだ。その證據にはわざわざ家を尋ねて行つた二人より、年始狀一本に朦朧とした詩一篇を送つた俺の方に、おみかさんはより多く感謝の情を表はしてゐるではないか。二人には答禮をしないといふ人が、俺には返事を呉れたのだ——僕はかう考へて、益自分の「戀」に希望を置くやうになつた。

僕は續けておみかさんに便りをしようと思つたが、圖に乘つてそんな事をしたら、忽ちこつちの腹が見透かされやうといふ、例の虛榮的心配から、僕は自分で自分を欺いて、何かうまい機會の來るまで、ぢつと堪へて待つ事にした。

すると、偶然おみかさんに又會ふ機會と、おみかさんに又便りをするきつかけとが一緒に湧いて來た。

例の小學校の同窓會で、男女合併の新年會といふ奴が開かれたんだ。鶴岡や藤村が前にも懲りずにこんな事を計畫したんだね。併し、今度は僕はもう關係しなかつた。話だけは一度聞いたが、おみかさんに對する義理からも、これに贊成する事は出來なかつた。その癖、そんな會が出來ればおみかさんも出て來るだらう。「さうすれば又會へるな」位な事は考へてゐたんだ。相變らず、人に泥坊をさせて、自分は知らん顏でその贓品を使はうといふ僕一流の筆法なんだ。

僕は兎も角も、表向きでは、前の祝賀會の時に別に失態もなかつたせゐか、この新年會は存外早く話が纏まつたらしいんだね。鶴岡から話があつたかと思ふと、間もなく男子部女子部の幹事をずらりと並べた通知狀が舞ひ込んで來た。僕はその通知狀に自分の名のないのを見て、どんなにか潔く思つたらう——もう俺は鶴岡や藤村の同類ではない、鶴岡や藤村と俺とはもう全く別なものになつた。それがこの通知狀ではつきりおみかさんに分かると思ふと、僕は嬉しくて堪らなかつた……寂しいやうな氣がしたが、高い所へでも上がつたやうな好い氣持がした。大勢の人に離れたやうな氣がしたが、おみかさんだけはいつまでも自分に附いてゐて吳れるやうな氣がした。

それでは會へ行かないのかと思ふと、やつぱり平氣で出かけて行くのだ。併し、勿論、行つてもつまらなかつた。今までかういふ會がありさへすれば、きつと汗水垂らして働いてゐた男が、この日はお客樣で始終手持不沙汰でゐなければならなかつたのだから……それに、もう鶴岡や藤村とも氣まづくなつてゐたし、何となく僕は「知らない土地」へ來てゐるやうな、「除け者」にされてゐるやうな、寂しい、頼りない氣持がした——

併し、僕には外の人にない愉快があつた。それはおみかさんの顏が見られた事だ。しかも今まで會つた時とは全く違つた心持でおみかさんの顏が見られた事だ。僕は前の祝賀會以來おみかさんの顏を見なかつた。併し、その後度々の文通で前から見るとずつとよくおみかさんの心持が分かつてゐる——

おみかさんは鶴岡や藤村に對してどんな態度でゐる、自分に對してはどんな考へを持つてゐる、といふ事が大體でも分かつてゐて、おみかさんに會ふのは、この日が始めてだつた。即ち、或意味に於いて、僕は又始めておみかさんに會つたんだ……

併し、おみかさんと染み染み話の出來るやうな機會などは全くなかつた。おみかさんはやつぱり女子部の幹事だつたのだから――僕は唯遠くからおみかさんの顏を見てゐた。そして、時々遠くと遠くで目を見合はせて、笑つた。それだけでも、もう僕にはおみかさんの思つてる事がよく分かり、僕の言はうとしてる事がおみかさんによく分かるやうな氣がした。それだけで、僕はもう滿足だつた。

鶴岡や藤村はもうおみかさんには構はなかつた。もつと若い女の幹事の中に新しく好きなのが一人二人出來たやうな樣子で、何をするにもそれらの周圍を離れなかつた。

色敵としての鶴岡や藤村が、脆くも舞臺を退いたのは寧ろ痛快だつたが、今まではつきり姿を現はさなかつた色敵が三人、新年會の日に突然舞臺へのさばり出て來たのには僕も驚いた――それは例の理學士の谷といふのと、新聞記者の山田といふのと、銀行員の大野といふのとだ。

この三人がおみかさんの廻りを附いて廻つて離れないんだ。忙しいおみかさんを捕まへては何の彼のと話しかける。お世辭を言ふ。一緒にテニスを致しませうなどと誘ふ。その態度が堪らないんだ。おみかさんは決してあんな人達に氣を引かれるやうな人ぢやないと、信じてはゐながらも、僕は少

し氣が揉めて來た。何しろ相手が今までの藤村や鶴岡と違つて、もう立派に社會へ出てゐる一廉の紳士だ。こつちは布衣の一書生だ。それに向うには巧言令色があるが、こつちには羞恥があるばかりだ。若しあんな連中におみかさんを取られて了つたら、俺はどうしよう。若しそんな事になつたら、俺はとてもあの人達と戰ふ力はない。僕はさう思つて、妙に心細くなつた……

會も濟んで、幹事連が後へ殘るのを羨ましさうに見返りながら、僕が連れもなしで、ぼんやり小學校の門を出たのは、もうやがて燈のつかうとする時分だつた。

二三日すると、山田の新聞の雜報欄に「當世三人男」といふ記事が出た。なんでも靖國神社の側の或小學校の同窓會の男の幹事が三人で、女の幹事の一人を戀してゐるといふやうな記事で、勿論おまけ澤山な好い加減なものだつたが、これを讀むと僕はむらむらと癇癪が起つて來た――僕の大事なおみかさんをおもちやか何かのやうに扱つてゐる筆つきが堪らなく癪に障つたんだ。指一本人に指して貰ひたくないおみかさんを讀者の目にもはひる文字の上で、藝者か何ぞのやうに侮蔑してゐるのが堪らなく不愉快だつた。

僕は堪らなくなつて、早速おみかさんの所へ長い手紙を書いた――山田の新聞にあなたの事が出てゐますが、あなたは知つてゐるか。その人達は誠實も何もなしに冗談半分にあなたを騷いでゐるのだ。

あんな事を書かれてもあなたはあの人達と附き合つて行くつもりか。などと、例の通り自分一人を綺麗なものにして、子供らしい憤慨の文字に滿ちた手紙を送つたんだ――これが又おみかさんと便りをするきつかけになつた。

直ぐおみかさんから返事が來たんだ――新聞の事は近所の人に聞いたが、それが自分の事だとは夢にも思はなかつた。成程、あなたに言はれて見ると、その三人の男の人は丁度大野さん、山田さん、谷さんに當てはまるやうな氣もする。併しその女が自分だとはいまだに信じられない。だが、一體どうしてわたしはかう人に兎や角言はれるのだらう。誰のせゐでもないみんな自分が惡いのだ。といふやうな事が書いてあるんだ。相變らず、理性の勝つた、眞面目極まる手紙さ。

さうまだ、こんな事も書いてあつた――自分と同じやうに會の爲に働く人でも、内野さんなどは――例の關といふ僕の小學校時代の友達が惚れた女だ――内野さんなどは誰一人惡く言ふ者はない。あの人と自分とは小さい時分から氣がよく合つてゐた。人望もあるし、才智も優れてゐる。柔順で、しかも活潑だ。唯、氣が小さい人だけに人の誹を非常に恐れてゐるやうだが、それが却つてあの人の徳になつてゐるかも知れない。そりやあ、誰だつて人の誹を好む者はないが、内の母は始終あたしにかういふ事を言つてゐる――「多くの人に惡く言はれ、多く恥をかいた者でなければ人の上に立つやうにはなれない」……

ね、君、これで朧げながら、内野とおみかさんとの區別も分かるし、おみかさんの家庭のどんなものかも分かるだらう。僕はこのおみかさんの手紙に、存外苦勞をした人のやうな口吻のあるのを、わけもなく喜んだ。どこか唯のお孃さんとは違つた、しつかりした所のあるらしいのが、馬鹿に頼もしく思へて來たんだ。僕は愈おみかさんを信仰するばかりだ。

　ところが、この手紙の中にそれとなく又僕から手紙が貰ひたいやうな事が書いてあるんだ。それは、自分は餘程男子部で何か言はれてゐるやうだが、どうかさういふ評判の一部を洩らして呉れと言ふのだ。いづれ惡評だらうが、自戒にするのだからどうか遠慮なく教へて呉れ、惡評の中の最も惡評だけでも好いからと言ふのだ。そして、まだ申し上げたい事は澤山あるが、氣がせくから今度はこれで筆を留める、從つてもう一度は手紙を上げるが、それで又御不沙汰にするといふやうな事が書いてあるんだ。さうして、手紙の一番終ひへ持つて來て、若しあなたが手紙を呉れるやうなら、どうか學校へ行く時投函して呉れ、さうすると大變都合の好い事があるから。といふやうな、ひどく内輪らしい事が書いてあるんだ。――僕は、こつちからもう一度手紙をやれる望みと、向うからもう一遍手紙を貰へる望みが出來たところへ持つて來て、かういつた如何にも打ち解けた、二人ぎりだけの事らしい、感情のありさうな詞に接したので、もう有頂天になつて了つた。

　そこで、僕は早速返事を書いた。併し、勿論おみかさんの惡評などは一つも書かなかつた。第一、

おみかさんの惡評などを僕の知らう道理はない。よし又そんな事を聞いたつて、それが當時の僕の頭の中へはひつて來よう筈がないのだ。僕は徹頭徹尾おみかさんを崇拜してゐたんだもの――

僕は自分のおみかさんに關する考へを、世間の評判でもあるやうに書いた。僕の詞の限りを盡しておみかさんを褒め立てた。憧憬の全量を長い長い一本の手紙に盛つたのだ。それでも、僕はまだ僕の『戀』をあからさまに表白する事は出來なかつた。それはやつぱり僕の虚榮の卵がまだ殼を割らなかつたからだ。うつかりそんな事を言ひ出して、藤村や鶴岡や、後から出て來た『三人男』などと一緒にされたら大變だと思つたからだ……例の新聞の記事に關しては、いくらあなたが否定しても、書いた當人の山田がさう言つてゐるのだから、これ程確かな事はありません。といふやうな事を書いて、もう一本釘をさして置いた――これは實際の事で、山田は僕とおみかさんがどういふ關係になつてゐるか知らないものだから、その後往來で會つた時に、すつかりしやべつて了つたんだ。そして「なあに、一種の牽制運動さ。」といふやうな事まで平氣で言つて了つたんだ。それを殘らず僕はおみかさんの所へ報告したんだ。

すると、おみかさんから返事が直ぐに來ない。二日待つても來ない。三日待つても來ない。僕は少し心配になつて來た。自分ながら切り込み方の激しいのは知つてゐたから、若しやそんな事でこつちの本心を悟られたのぢやあるまいか。それで、返事が來ないのぢやあるまいか……さう思つて、少し

ふさいでゐると、八日あたりにやつと返事が來た――

返事の遲れたのは「急ぎの仕立物を控へて」ゐたからだと言ふのだ。僕は先づそれで安心した。安心すると同時に、その仕立物で返事の遲れたといふ事が、無上に嬉しくなつて來た。おみかさんが家にゐてせつせと働いてる樣子が目に見えるやうで、それが嬉しかつたのだ。その忙しい中から僕だけにはこの長い手紙を書いて呉れるのだと思ふと、それが又嬉しかつたのだ……

この手紙は惜しい事に、一番初めの一枚がない。燒いて呉れと書いてあつたんで、正直に燒いて了つたんだ。おみかさんの身の上話が書いてあつたんだが、もう十年も前の事で、殆ど覺えてはゐないがなんでも小學校時代に男の事で――それが藤村の事でも僕の事でもないらしいんだから面白い――大變人に疑はれた。それが元で、お父さんからも大層結婚を急がれて、或軍人をお婿さんにまで探して來られたのだが、おみかさんは斷然拒絶して、是非廿歳までは家へ置いて貰ひたいと言つた。その內には自分の汚名もきつと綺麗になると思つたからだ。自分の身持を疑はれて、それで結婚を急がれるといふ事が、どうしてもおみかさんには堪へられなかつたんだ……それが爲に自分は餘程「ねじけた者」になつたが近頃は又次に悟つて來た。四年間の涙はこの頃になつて漸く干す事が出來た。といふやうな事も書いてあつたと覺えてゐるが、話の內容は全く忘れて了つた。これが前の「惡魔」云云に關係があるに相違ないんだが、全く覺えてない所を見ると或はやつぱりほんとに詳しくは書いてな

かつたのかも知れない……

兎に角、おみかさんはそんな秘密――火中して呉れと言ふ位だから秘密には違ひない――そんな秘密まで打ち明けるやうになつたのだ……

この手紙の殘つてる部分を見ると、こんな事が書いてある――自分は實際自分の缺點を知りたいと思つて、あなたに世間の評判を伺つたところが、あなたは思ひもかけない事ばかり書いてお寄越しなすつた。あんな事なら聞かないでも好かつたのだ。自分はそんな事を聞いて、それで喜ぶ者ではない。決してあんな事を本當にして滿足する人間ぢやない……僕の魂をこめた憧憬の詞も、生眞面目なおみかさんには、一向利き目がなかつたんだね。

併し、この手紙には餘程僕の胸をドキドキさせるやうな事が書いてあつた。例へばかうだ――

「わたくしはあなたとお交はりを結んだのを、何より幸福だと悅んでをります。併しながら、世の嫌ひを避くる爲に常にお便りを絕つてをりますので、殘念に堪へません。どうか公に御交際が出來て、身を終るまで心の友として暮らせるやうに熱望致してをります。」

かういふ文句を見て、當時の僕がどうして平氣でゐられたらう。併し、まだこの位の事なら好かつた。もう少し先へ行くと、こんな事が書いてある――

「また六月に成りますと、御試驗であなたが腦をお痛めになつて、お瘦せ遊ばすかと思ひますと、わ

たしは胸が裂けさうに成ります。わたしなどが申すまでもございませんが、唯今から御養生遊ばして、御身體を御壯健に遊ばして下さい。徹夜などは最も不養生ではないかと存じます。」

どうだい、君、まだ正月の末だといふのに、もう六月の事を心配してゐるんだ。この心配を當時の僕が唯の心配だと思ふ事が出來たらうか。併し、まだこんな事だけなら好かつたのだ。更にもう少し先きを讀むと、こんな事が書いてある――

「めつたに左樣な事はないと存じますが、萬一わたしが何處かへ縁談が整ひましたなれば、必ずお知らせ致しますから。わたしが面に笑ひながら心に泣いてゐると思し召して下さい。本當にわたしは縁談程嫌ひな事はございませんよ。いつでも必ず頭痛が起ります。そして無暗に悲しくてたまりません。どうか聞き合せが惡ければ好い、惡ければ好いと願つてをります。さうなると、必ず何か故障が出來て參りますので、ひとりで喜んでをります……」

「面に笑ひながら心に泣いてゐる」どうしておみかさんは僕に向つてこんな事を言ふのだらう。どうしておみかさんは縁談の不快な事などを、突然僕に訴へ始めたのだらう――自惚の強い僕が、どうしてこれを冷靜に聞いてゐる事が出來たらう。

まだこの手紙の一番末にはかういふ事が書いてある――

「あなたの御手紙はいつも午前十時少し過ぎに、配達人の手から直接にわたしの手にうつりますので、

誠に好都合ですよ。」

初めはなんにも隱さなかつたおみかさんが、段々僕との交通を家の人にも隱すやうになつたんだね。さう言へば、去年までは、ちやんと狀袋の裏にも、『信樂みか』と公然名を署して來たのが、今年になつてからは、『M・S・生』と隱し名をするやうになつた——この、人に隱し始めて來たといふ事が、又僕の煩悶の種にならずにはゐなかつた。

聊か强敵だと思つた『三人男』の方も、それつきり事件は發展しなかつた。おみかさんも、「どうしても自分の事だとは思へませんが、山田さん自身よりのお詞なれば、他の人の事でないといふ事は明かでございます。以後わたくしは三氏と心易く詞を交へますまい、そして成るべく會ふ事を避けます。」と言つて來た——やつぱりこの手紙でね。それで、この方の事件はそれつきりになつて了つた。

さあ、さうなつて來ると、僕の熱度は愈昂じて來るばかりだ。おみかさんは、もうこの手紙で御不沙汰をすると言つて來たのだが、僕はもうそんな事には構つてゐなかつた——

僕は三日三晩苦しんで『惡魔』の眼といふ長い詩を書いた。新年會の晩に、幹事連が殘つてからの事を想像して書いたんだ。例の『三人男』が惡魔のやうな眼を光らして、小羊のやうなおみかさんの身體へ爪をかけようとしてる光景を、微細に想像して書いたんだ。そして、それを遠くにゐて想像しながら、一人で寂しく胸を痛めてゐる一個の純潔な青年を、長い詩の最後に加へて描いたんだ。敍事

詩のやうな抒情詩のやうな、一種妙な詩だつたがね、前の詩から見ると、もう餘つ程眞劍になつてゐた……

　この詩に短い手紙をつけて僕はおみかさんの所へ送つたんだ。手紙には、あなたの緣談が整つたら、喜びながら祝の盃を擧げよう。併し、その盃の半分は涙で滿たしてゐるものと御承知が願ひたい。といふやうな事を書いてやつたんだ。やつぱり、まだ「戀」を「戀」として打ち明ける勇氣がなかつたんだね。それで、こんな思はせぶりな、未練がましい表白法を用ひたんだ。

　すると、意外にもおみかさんから直ぐ返事が來た。もう御不沙汰すると言つて來てゐるのだから、今度は返事がなくても爲方がないと思つてゐたのに、思ひもかけず返事が來たので僕は愈得意になつた――

　僕の詩を讀んだら、返事を書かずにはゐられなくなつたと言ふんだ。「實に一調一節、君の御心の程推し量られて怪しきまで胸にこたへました。」といふやうな文句まで書いてあるんだ。

「あなたはわたくしの緣談の整つた事を御承知になる時、祝の盃の半分は涙に滿たして下さるさうですね、誠に難有くお禮を申し上げます。その時の事が今から胸に描かれて、悲しくて悲しくて堪りません。」といふやうな事も書いてある。

　しかし、この手紙をおみかさんは、或特別に忙しい事のあつた中から寄越してゐるんだ――牛込へ

片づいてゐる姉さんが身重になつてゐるところへ、そこの姑さんが急病になつたので、お里のおみかさんの家へ歸つて來てゐたところが、きのふとかの朝から産氣づいて來て、夜の八時に女の子を生んだ。何くれとごたごたしたが、十一時半頃にやつと總てが片づいた。その晩、おみかさんは徹夜を命ぜられたのだ、存外早く返事が書けたのだと言ふのだ――迷惑だらうが、少し聞いて呉れ給へ――

「何しろ寒い時分でございますから、産婦と子供と交る交る湯たんぽをしかへるので、この手紙を書きます内にも、幾度も筆を置きました。今三時がなりましたが隨分寂しうございますよ。遠くで犬の吠える聲が聞こえたり、勝手の方の雨戸がゆれたり、産婦がいやな苦しさうな聲をしたりして、何だかぞつと致します。わたしは宵から風を引いたやうでしたが、今になりましたら、咽喉がつまつて、頭痛がしまして、苦しくて堪りませんから、もうこれで筆を留めます。」

かういふ中からおみかさんが返事を呉れたといふ事が、どんなに僕を感激させたらう。しかも、もう今度こそはおしまひだらうと思つてゐると、又この手紙の終に、まだまだ申し上げたい事は山程あるが、今夜はどうしても書けないから、殘念ながら又折を見て申し上げるといふやうな事が書いてあるんだ……

これでおしまひだ、これでおしまひだと言ひながら、中々おしまひにしない所に、僕はおみかさんの未練を見つけた。そして、それが又僕の未練になつた。僕はもう手紙だけでは滿足が出來なくなつ

た。僕はやたらにおみかさんの顔が見たくなつた。併し、どうする事も出來なかつた。僕は叉子供の時やつたやうに、夕方になると、おみかさんの家の廻りを歩き始めた。そして、歌を唄つた。歌は『落梅集』の『壯年の歌』の中にある佯狂の歌だ――

　胡蝶の夢の人の身を
　旅といふこそうれしけれ
　常世に長き天地を
　宿といふこそをかしけれ……

といふ奴だ。こいつを友達がつけた譜で唄ふんだ。それでも、この歌を唄ひながら、おみかさんの家の廻りを一廻りして來ると、どうにかかうにか氣が濟んだんだから可笑しい。

　その後におみかさんから來た手紙も、どういふわけだか、前の方が半分以上破つて了つてあるので、どういふ事が書いてあつたのだか今ではもうどうしても思ひ出せないが、殘つてる部分を見ると、一つ重大な事が書いてある――

「面白い昔話を致しませうか。わたくしがね、あなたのお名前を知り始めたのは、丁度高等三年になつた五月、小學校で運動會がありましたでせう。あの運動會はわたしが學校へはひつてから爲初めの仕納めでした。運よく一等賞でしたよ。あの時あなたが赤と白との帽子を冠つて、わたし達の前を通

つて便所へお出でになる時、誰だか後にゐた方が、あれが園田さんよと誰かに言つてゐましたのが、ふと耳へはひつたものですから、何の氣もなく見ましたらあなたでした。それから覺えたのです。隨分面白いお話でせう。」

といふのだ。僕はこれを讀んでどんなに驚いたらう。僕がおみかさんを知るより一年前に、おみかさんはもう僕を知つてゐたといふのだ。この小さな事實が、どんなに當時の僕を動かしたか、それは迚も君には想像がつくまい。

僕はもうおみかさんに『戀』がないとは、どうしても思へなくなつた。自分がおみかさんを思つてゐるやうに、おみかさんもきつと僕の事を思つてゐるんだ。それでなくて、どうしてこんな事を言つて寄越すものか。さう思ふと、僕は愈堪らなくなつた。

ところが、この手紙の終を見ると——

「誠に申し上げにくき事ながら、あなたよりも何卒お便りをお絶ち遊ばして下さい。わたくしもこれぎりもう御不沙汰致します。隨分御機嫌よう。」

といふやうな事が書いてあるんだ。もう僕の方から手紙を出す機會はどうにもなくなつてゐるところへ持つて來て、「今度こそは」といふおみかさんの決心がこの詞に見えてゐるんで、僕は愈久便りを絶たなければならない事になつた。僕はやつぱりおみかさんに逆らふ事が出來なかつたんだね。

それが丁度三月初日の事だつた……

一五

併し、二日經ち三日經つ内に、僕は堪へられなくなつて來た。唯便りをしないといふ事だけが堪へられないのではない。この僕、『戀』の告白をせずに終ぶといふ事が、どうしても堪へられなくなつて來たのだ。

おみかさんに『戀』があるかないかは、勿論分からない。併し、向うは向う、こつちはこつちだ。向うに『戀』があらうとなからうと、こつちの『戀』をむざむざ葬つて了ふ事は出來ない。自分の戀を打ち明けて見て、若し向うにも戀があつたらどんな困難を犯しても一緒にならう。萬一向うに戀がなければ潔く諦めるばかりだ。かうやつて、いつまでも愚圖々々してゐたところで、それが何にならう。第一卑怯だ。男らしくない。僕はかういつた勢で手紙を書き始めたが、さて出來上がつた手紙はやつぱり女々しさの限りを盡したものだつた。僕は小學校時代からその頃に至るまでの、おみかさんに對する自分の戀の内部史を長々とこの手紙の中に書き込んだのだ。今まで僕のおみかさんにやつた總ての手紙の總ての文句を、悉く『戀』の一字で裏書しようとしたんだ。

さすがに、この手紙に對するおみかさんの返事は直ぐには來なかつた。僕は一週間ばかりを夢想と

覺醒と微な希望と自己の否定と——の間に暮らした。或は笑つて歌を唄つた、或は沈んで一日默つてゐた。勿論おみかさんの家の廻りも幾度か歩いた。

九日ばかりするとやつと、返事が來た。それが卽ちこれで今度はすつかり讀むから、まあ聞いて呉れ給へ——

「いつも／＼御返事が遲れますので、今更にお詫の申し上げやうもございません。殊に此度は非常の延引で、何とも申譯がございません。實は進んで御返事が申し上げ惡い所へ六日の晩より兎角氣分がすぐれませんので、御返事を申し上げようと筆を取りました事は幾度もございましたが、いつも途中で烈しく頭痛が致して參りますので、どうしても書く事が出來ませんので、とう／＼今日まで遲れました。先日からけふまでの間、嘸あなたが御心配遊ばして入らつしやるでせうとお察し申してはをりましたが、前に申し上げたやうな次第で誠に濟みません。この頃は始終言ふに言はれぬ苦痛の內に暮らしてをります。」

先づかういふ書き出しなんだ。僕はこのいやに落ちついた、寧ろ冷やかな冒頭を讀むと、直ぐもう「こりやあ駄目だな」と思つた——まあ次ぎを讀んで見よう——

嗚呼一郎樣、あなたは終にわたしが厭ふ最も悲しむ事を仰せ下さいました。わたしは悲しくて／＼あのお手紙の上に泣き伏しました。わたしにはこの御返事を致す程辛い事はございません。實に腸

を寸斷せらるる思ひでございます。あなたはわたくしの心を確めて、若しさうでなければこりや爲方がない……若しさうであつたら宜しい、荊棘を破つても結婚しよう……と御決心になつたさうでございますね。あゝ、わたしはどうして泣かずにゐられませうか。わたしは世人の誹謗を恐れるのではございません。あなたの御身分を不足とするのではございません。決してそんな事で、あなたに不快な念を起させ申し、又自らも日夜このやうに苦しみは致しません。わたくしはどこまでもあなたが親しき友と思つてをります。わたくしは一生誠實を以てお交り致したいと存じてをります。或時は世の垣に隔てられて、公の御交際を申し上げる事が出來ない事もございませうがいつかは必ず／＼公にお交りを致すやうにしようと始終心がけてゐるのです。あなたは決してわたくしの夫と致すべきお方ではございません。到底そんな事を望んでも、成就すべき事ではないと思ひます。あなたはわたくしさへ承知致さなければ、兩親も無理な事はしまいと思つて入らつしやいますが、一體は御尤もの御仰せでございます。わたくしはここで少し聞いて頂きたい事がございます。いつぞや申し上げました通り、わたくしは父に無理に賴んで廿歲までは是非家に置いて貰ふ事に致しましたのです。

その代り廿歲過ぎましたなら、相當の所の有り次第緣づいても宜しうございますと、堅く申した事がございます。

そこで申し上げねばならぬ事がございます。わたしはまだよくは存じませんが、近頃父の様子を見ますに、どうもわたくしを配偶しようと見込んだ人があるやうに思はれます。若しその話が追々と進んで參りますなれば、多分わたくしはそこへ行くのでせう。その話が破れたところで、今年内には是非とも緣づかせると申してをりますから、わたくしは悲しいのです。今までに御男子と公の御文通は致した事はございます。あまり人に聞かせたくない事で御文通を致したのは、實にあなたお一人でございます。わたくしの身の上に就きまして種々の事を訴へましたも、あなたばかりでございます。あなたは小學校時代より今日に至るまでのわたしに就いての御胸中をお打ち明け下さいました。誠にわたくしの樣な不束者を、あれ程までに思し召し下さるお心は何ともお禮の申し上げやうもございません。わたくしは感謝の涙を止める事が出來ません。

わたくしはまだ一度もあなたに對して、あなたを戀してゐると申し上げた事はございません。わたくしは決して自分の戀する人を人に語る事はございません。わたくしは唯自分ひとり胸裡に秘めて置いて、決して他言すべきものではないと決心致しましたのです。併し、今日となつて見ますと、流石に迷ひ始めました……言ふが罪か……言はぬが罪かとわたくしの心中は亂れ〳〵てしまひました。あなたのお詞を拜借致しますなれば、わたくしには戀といふものはないのでせう。よし、あるにせよ、甚だ賴もしくない戀なのでせう。甚だ思ひ切りの好い人間と言はれるのでせう。更に〳〵

氣の多い奴と言はれるでせう……ああ、わたくしは何と言はれても致し方がございません。
一郎様、あなたはこれをお讀みになりまして、何と思し召しますか。嘸無情の者とお憤りになりませう、わけの分からぬ奴と思し召しませう。更に向島のドオタァのやうに、畜生とおさげすみになりませう。嗚呼わたくしは何とあなたに罵られましても、決してお怨みは申しません。どうぞお罵り下さい。どうぞお責め下さい。わたくしはあなたに責めらるるその辛さよりも、あなたがわたくしのこの手紙をお讀みになつた時の御胸中をお察し申す方がいくら辛いか知れません。ほんたうに自由になるなれば、わたしはこの儘消えてなくなりたいと思つてをります。
わたくしはこれだけの御返事を致しますに、大變延引致しました。一時わたくしは御返事も上げずに、これなりあなたとお交りを絶たう。誠に今までの望も水泡に等しく消えてしまふけれども、これも、虚行であるから致し方がないと思ひましたが、日夜の苦痛は益募るばかりでございます。いづれこの苦痛は身を終るまで消ゆる事はないが、せめてあなたに申し上げて置いたならば、何分か減るであらうと存じまして、やう／＼亂書致しました。

M 拜

一郎様」

僕はこれを讀むと、忽ち絶望して了つた。いくら長々と言ひわけらしい事が書いてあつたつて、そ

んな事は口にはひるんぢやなかつた。唯もう配偶が極まつてゐるといふ事、これだけが僕には總ての返事だつた。僕一人は、僕一人はと思つてゐたその僕が、やつぱり鶴岡や藤村や「當世三人男」と同じ運命になつて了つたのだ。おみかさんにはもう亭主が出來かかつてゐるのだ。それを知らずに思ひつめてゐたのはこつちが馬鹿だつたのだ。おみかさんが僕のやうに熱してゐない事は、この手紙を見てもよく分かるぢやないか。それが分からずに、輕々しくも「戀」の告白をして了つた俺の間拔面はどうだ……僕はおみかさんの冷淡を怨むよりは、寧ろ自分の不間を口惜しがつた。その代り存外諦めも早くついたので、直ぐ返事をおみかさんの所へ出した。僕は虚榮と負け惜しみから、怨みがましい文句は唯の一句も書かなかつた。唯「かたみ」として、愛讀書の中から胸に當るやうな文句ばかりを拔いて寫して、それを一冊に綴ぢて送つた。その中には女に對する怨みも十分あつたし、失戀の悲しみも十分あつた。僕は僕の本心を悉くその「かたみ」に封じ籠めて、手紙には綺麗な事ばかり書いたのだ。

「かたみ」の内容も今は大抵忘れて了つたが、「金色夜叉」の熱海海岸の一節があつた事だけは確だ——

それはこれからのおみかさんの手紙に、よく貫一とか宮とかいふ名が出て來るので分かる。それからランドルが空想で書いたダンテとベアトリイチエの會話の一節も、誰かの飜譯から寫したと覺えてゐる。「ヱルテルの悲しみ」の中からも、一二箇所自分で譯して書いた。藤村の「落梅集」からも、「胸

とも鳴に』の一節を寫した。多分『君こそは遠音に響く』だつたらうと思ふ。併し、何よりも一番よく僕の抜き書したのは鏡花だつた。あの時分の僕の鏡花熱と言つたら、非常なものだつたからだ——

こればかりは今でも暗記してる位だ……。

「しかしね、芳さん、世の中は何といふ無理なものだらう。唯式三獻をしたばかりで、ただの、妻だのつて、姉だものが出來上つてさ、女の身體はまるで男のものになつて、何をいはれてもはいはいつて、從はないと、イヤ、不貞腐だの、女の道を知らないのと、世間で種々んなことをいふよ。」

これは『化銀杏』の一節だ。

「分かつてるよ、をばさん、お前も江戸でないことをいふ人だね、そんなことあ山の手のお臺所か、ふむ、間居の臺所でいふこつたな、惚れあつた奴が逢曳をするのに、親も何も入つたものか。世間も何もありやしないやね。毛の生えた團子のやうに固くなつた素人のなあ、小生意氣に何の人、おもしろくもない。嫁てえことあ昔から、そらに御用はございませんか、年頃になりましたつて、門並開いてあるいて、間の抜けた所へおつはめるんだ。仕入ものゝ、言さらしで押賣よ。酒屋の御用と大した違はありやしない、暗中(だんまり)と云つた樣に手さぐりの戀があるわ。盲つかみにぶつかゝつた所で、嫁だ、お婿だ、胡瓜と南瓜のはり合せぢやあないか、氣の利かない骨頂だあね……」

これは『辰巳巷談』の一節だ。まだ覺えてゐるのがある——

然るに此國に限つちやあ、晝夜ともに月と仰ぐべきものがあつた、一人の美人だね。僕が之に惚れてたといはれたつて敢て恥ぢない。見る人の心々だけれども、月を美しい、と思はぬものがありますか。皆然う思ふ月の如き美人があつた。

「其が君、人のものになつたんだ、浦島の奴に占められたんだ。」

「心細いことは世間にいくらもあるけれども月がもう此世に見られないといふことが極つた時、橋の上、山の端、谷間の清水に、猛獸の眼に、草の露に、花片に、すべて何等のものにも光を宿さない、三百六十五日を幾まはり、闇夜ばッかりだとなつたら、人は何の位寂寞を感ずるでせう。」

これは『湖のほとり』の一節だ。

實際、その當時僕はかういつた文句を讀んで、泉さんが自分の代りにこんな事を言つて呉れたんぢやないかと思つた位だ……

すると、直ぐ又おみかさんから返事が來た。それがこれだが――これもすつかり讀む必要があるから、厭だらうが、まあ聞いて呉れ給へ――

「わたくしは涙を拂ひつつ御返事を致します。わたくしはあのお手紙を幾度となく繰り返して拜見致しました。ああ、わたくしは、三月十五日……金曜日……何として忘れませうぞ。あの日は終日一食もせず。涙を呑んで苦しき便りをした日です。三月十五日……金曜日……ああ、わたくしは終に

貴兄を失戀の鄕に行かしめたのです。

さえも貴兄はわたくしをお責めなされず、お恨みなされずこの……罪深きわたくしを姉と呼んで下さるのですね。さうして『時期もあらばやさしき詞の一つもかけて與れよ』と仰しやつて下さいました。『更に親しき友と思うて、一生忘れないで下さい』……ああ勿體なき仰せ。わたくしはどうしてあなたを忘れられませうか……あなたを……貴兄を片時だに忘れる事が出來るならば、こんなに泣きはしませんよ。こんなに苦しみはしませんよ。わたくしは每日每夜、人さへなくば、聲を限りに泣いてをります。

わたくしにどうして貴兄を「友でない」などと申しませうぞ若し貴兄がわたくしを友でない畜生と仰しやつても、わたくしは……わたくしの精神は何處までも貴兄を離れない覺悟なのです。

貴兄は此後養生して病氣になるまい。間貫一のやうに學問を捨てない……ああ、よくこそ仰せ下さいました。眞に嬉しうございます。わたくしはこのお詞を聞いて、泣き崩れながら喜びました。何卒々お身體を御大事にして下さい。さうしてますます御勉強遊ばして下さい。

貴兄はいつか御夫人をお迎へ下さるさうですね。わたくしは許すも許さないもないのです。何卒お迎へ下さい。『君あとより給はずは、またの逢ふ瀨もくるしき契にあらずや。いといたう業へ離き事ない、言にあうですよ。どうぞ貴兄のお心に叶つたかたがございましたら、その方と御結婚遊ばして下

さい。貴兄の事ですから、わたくしなどが申すにも及びませんが、よく〳〵その人の心を調べなければなりません。貴兄には多分出來る事と存じてをります。ですから、出來るだけ調べなければいけませんよ。

わたくしなどはほんとに情ないのです。なんでも親任せないです。そりや目に見えてゐる故障は分かりますが、中々その人の性質まで調べる事は、まあ、出來ないのです。先日も或人が申しますに、日本の結婚は丁度暗闇で物を探るやうなもので、結句は好い物をつかんだ者が幸福なので、悪い者に當つた者は不運とあきらめるより爲方がないと申しましたが、實にそんなものであらうと思ひます。

わたくしの父がわたくしを配偶しようと見込んだらしい人は軍人でもなく、官吏でもなく、商人でもないのです。その人は貧乏な書生です。わたくしは昨年の暮から、時々遠廻しにわたしの心を父に聞かれてをつたのです。この話は整つても破れても、いづれにか極まれば必ずお話し申し上げます。

それから貴兄は、わたくしの……わたくしのやうな者でも姉と仰しやつて、「寫眞があつたら」と思つて下さるのですか。誠に辱いお詞です。貴兄からは何よりの「おかたみ」を頂いてあります。あの御本の中には、わたくしを慰めて呉れる文が澤山にございます。わたくしは悲しい事には歌も出

歌も詩も出來ない人間なのですから、わたくしは寫眞を差し上げます。わたくしのかたみと思し召して下さい。ですが、お急ぎにならずにお待ち下さい。きつと……きつと上げます。わたくしが愈何處かへ行くやうになつた時、悲しい便りを致す時に進上致します。

貴兄は今後も時々詩を見せて下さるさうですね。ああ、わたくしはこれが何より樂しみです。どうぞ〳〵わたくしはめくら同様の者ではございますが、お見せ下さい。わたくしから切にお願ひ致します。

先日御返事を致します時、申し上ぐべき事なのですが、この間は書けませんでしたから、今日申し上げます——貴兄が高等學校で始めての演習のお歸りにお會ひになつた女性の一人は確かにわたくしでした。一人は姉なのです。あの時始めて貴兄が高等學校へおはひりになつた事を確めたのです。それまでは想像してゐたのです。その後人に尋ねましたら、文科を修めてゐらつしやると承りました。

今月の四日、及び七日、宅の上を御散歩になりましたのは存じてをります。唱歌で分かりました。歌といひ、節といひ、實に悲しうございます。わたくしはお蔭で覺えましたから、この頃は夕方になりますと必ず唄ひます。七日の晩は四日と反對にお通りになりましたらう。七日……あの時机の上に泣き伏してをつたのです。わたくしの机は今月から茶の間の窓際に置きました。そこでお手紙

も拜見すれば御返事も書くのです。煩悶の繁き時は、その部屋で掻き琴の調べもするのです。ああ、貴兄はもうわたくしには何もお聞き下さらぬさうですね。どうぞお聞き下さいますな。いくらお諫めになりましても、わたくしは貴兄には辛い事ばかり申し上げるのです。わたしも何か變事があるまでは、お便りを致しません。どうぞ御機嫌よく御勉強遊ばして下さいまし。ですが、詩を頂いた時は短い手紙を差し上げるかも知れませんから、どうぞお許し下さい……では

これで……左様なら。

三月二十二日　　　　　　拜

一郎さまお許に」

と、かういふ長い手紙なんだ。これで見ると、僕は隨分思ひ切つた「諦め」を言つてやつたもんだと見える。かたみに寫眞を見れ、自分はもう外の人を嫁に貰ふから、とまで言つてやつたんだね。それで、何か非常な犠牲でも拂つた氣になつてゐたんだ。

この手紙で見ると、もう殆んど一件落着のやうに見えるぢやないか。その癖、決して僕の胸の中がこれで濟んでゐたんぢやない。やつぱり「見え」さ、虚榮さ。女を思ひ切つてまでも、女によく思はれたいといふ「見え」たんだ——併し、おみかさんも隨分冷淡な所があつたね。この手紙を見ても分かるぢやないか。僕の嫁の選定法などを平氣で書いてるんだ。「ではこれで……左様なら」なども、隨

分滿足な調子ぢやないか。それでも當時の僕は左程にも感じなかつたんだね。やつぱり惚れてゐたんだ。

　でも、流石に苦しかつたと見えて、僕は春の休みの來るのを待ちかねて、旅行に出かけたもんだ。これが、ほら、君と一緒に行つた甲州旅行さ。君はなんにも氣がつかなかつたらうが、あれでも僕はあの時、苦しい胸を抱いて旅に出たんだ。

　あの時分、まだ八王寺までつきや汽車がなかつた。小佛峠も笹子峠も歩いて越したつけね。小佛の頂上に櫻の花が咲いてゐたのを、君は覺えてゐるか、ごまのはひが恐いからと言つて、あすこで僕等の連れになつた唐物屋の番頭があつたつけねえ。笹子の途中でとうとう僕等に遲れて、頂上で又一緒になつた時は「死ぬ覺悟でやつて來ました」と言つて、青い顏をしてゐたつけねえ。

　それから猿橋に一晩、甲府に一晩泊つて、鰍澤から朝早く富士川を降つたつけねえ。富士の裏向きに夜明方の月が寂しくさしてるのを見たのも、あの時が始めてだつた。

　さういつた旅の景色の移り變りは、可なり僕の心を慰めたが、それでも胸に蟠まつた憂鬱は容易に散するよしもなかつた。

　僕は猿橋の晩も、甲府の晩も、宿屋で夜おそくまで、君と「戀愛」を論じた。あの時分の君の愛讀は近松の心中物だつた。僕が旅へ持つて行つた本に「ヱルテルの悲しみ」一冊だつた。

君の議論と僕の議論とは自から別れた。君は妻子を捨てても小春と死んだ治兵衛を「戀」の本體だと言つた。僕はシヤアロツテをアルバアトに托して、心靜かにピストルの引金を引いたヱルテルを、「戀」の眞實だと言つた。

僕は極めて抽象的に、自分とおみかさんとの境遇を君に話した。そして、僕のした事にジヤスチフイケエシヨンを與へて貰はうとした。

ところが、君は聞かなかつた。世間にそんな戀があるならそれは『戀』ではないと言つた。第一、その男は——僕は或男の事にして、その話を君にしたのだ——まだ女の心もしつかり確めてはゐないのではないか。女の心も確めない内に、女に婿が出來かかつてゐるからと言つて、直ぐ諦められて了ふやうな戀なら「戀」といふ名もつけられない程哀れな戀だ。その男は七年も戀をしてゐたと言つてゐるが、それは噓だ。大噓だ。七年も思ひ詰めてゐたものが、どうしてそんな簡單な事で解決が附くものか。そんな事で「戀」の解決がつくのなら、世間に戀の苦しみはない筈だ。僕に言はせれば、ヱルテルだつて意氣地なしだ。あれは、ゲエテのロマンチシズムだ。併し、男の戀はヱルテルよりもまだ下等だ、と言つて、散々に僕を——君は僕とは知らないで言つたのだらうが——散々に僕を罵倒した。

君はまだこんな事も言つた——一體、女も女だ。親の命令なら何處へでも行くなんて、今時そんな

人形見たいな、意氣地のない事を言つてる奴が何處にあるもんか。それも、その男に少しも氣がないと言ふのなら、また爲方がない。君の話では、女も滿更でもないらしいぢやないか。親の命令で、直ぐ捨てる事の出來るやうな『戀』なら、初めからしないが好い……僕には男の心も女の心もまるで理解出來ない。そんな事をして、それを『戀』だと思つてる人があるかと思ふと、僕は寧ろ可哀さうになつて來る……。

あの時の君の戀愛觀は實に熱烈だつたね。『戀』は絕對だ。『戀』は最高の權威だ。あらゆる障礙を排して『戀』を貫徹するといふ事は最上の道德だ。それを不道德だとするのは、世界の倫理觀が間違つてゐるのだ。世俗の言ふ『犧牲』などは、眞の『犧牲』でも何でもない。『犧牲』に非ずして『僞善』だ、と言つて、殆ど僕に摑みかからむばかりの勢だつた。

君の話を聞いてゐる内に、僕は始めてほんとの僕を見たやうな氣がした。僕は始めて裸になつたやうな氣がした。「虛榮」も「見え」も「世間への思はく」も、何もかもみんな脫いで了つたやうな氣がした――自分で脫いだのではない。君に剝がれて了つたのだ。

僕は同じ風から全く違つた肌觸りを感ずるやうになつた。見る物、讀む物が悉く新しくなつた。感じる事、思ふ事が悉く新しくなつた。

僕の態度は一變した。

『從順』が『反抗』になつた。

『退却』が『進軍』になつた。

戰へ。戰へ。戰へ。僕は心の中でかう叫びながら、東京へ歸つて來た。

一六

僕は始めて正直な人間になつた。友達をも親族をも世間をも恐れぬ赤裸々な人間になつた。虚榮もなければ「見え」もない眞實純一な戀の奴隷になつた。

戀の自覺。若しさういふ事が言へるなら僕は戀の自覺をしたんだ。

この自覺の前には羞恥もなければ束縛もない。唯ありの儘の自分全體を投げ出して、思ふ限りを思ひ、欲する限りを欲し、したい放題の事をしようとするのだ。

僕は今まで自分の言つた事やした事の總てを否定して了つた。今まで厚く着てゐた總ての「僞りの衣」を一度に脱ぎ捨てて了つた。總ての「體裁」や「表面」や「外見」といふものと手を切つて了つた。僕は心臟その者になつて了つたのだ――人を恐れる目もなければ、人前をつくろふ口もない、一個の赤い、生々した、戀の心臟その者になつて了つたのだ……

勿論、さうなるまでには非常な勇氣と自信とを要した。そして、その勇氣と自信とが得られたのは

今の君のお陰だつた——あの甲州旅行のお蔭だつた……

僕は東京へ歸ると、直ぐおみかさんの所へ長い〳〵手紙を書いた——今まで自分の言つた事は皆んな嘘だ。わたしはやつぱりあなたを諦める事は出來ない。あなたが少しもわたしを愛してゐないといふのなら、仕方がないが、若しあなたが少しでもわたしを愛してゐるなら、わたしはどうしてもあなたと一緒にならなければならない。たとひ世間で何と思はれようと、親に反對されようと、思ひ合つた二人が一緒にならないといふ事は、神の意志に對して罪を犯す事になるのだ。自然の法則に背く事になるのだ。あなたに捨てられたわたしが、どうして平氣でこの世を送る事が出來よう。あなたに捨てられれば、わたしは絶望するのだ。自暴になるのだ、或は死んで了ふかも知れないのだ。あなたがお嫌になれば、わたしは罪人になるのだ。罪人になるなと言つたつて、それは無理な話だ。あなたは直ぐと親の事を言ふが、いくら頑固な親だつてあなたの誠實に動かされない筈はあるまい。泣いて泣いてあなたの眞情を訴へれば、親だつて無理に娘を檻の樣な所へ嫁にやらうとは言ふまい。親も大事な者には相違ないが、神の意志や自然の法則は親にも增して權威のあるものだ。あなたとわたしが一緒にならずに了ふといふ事は、實に人生にとつての一大事なのだ……それに就いては、一應あなたのわたしに對する考へを伺つて置きたい。わたしは今まで自分の意ばかり述べて來た。一度もまだ

あなたの考へを迫つて聞いた事がなかつたか、今度こそは強迫してもあなたの本當の考へを聞かなければならない。あなたは少しもわたしを愛してゐないのか。一度でもわたしを戀した事はないのか。今まであなたは始終「悲しい」とか「苦しい」とかいふ事をわたしに訴へて來た。何が故にあなたは悲しいのか。なぜあなたは苦しいのか。あなたが若し少しもわたしを愛してゐないのなら、いくらわたしがあなたに惚れてゐたつて、あなたは少しも悲しいわけがないのだ、少しも苦しいわけがないのだ。あなたの考へ次第で、わたしはどうにでもして、神の意志を貫徹させようと思ふ……

まあ、こんな事を長々と書いたんだね。今度こそはどうしても逃がさない、もうどうしても本心を聞かずには置かないといふ風に責めて責めて責め拔いたんだ――まあ兎に角今までとはまるで調子の違つた手紙を書いたんだ。

勿論、僕はどういふ實際上の畫策を持つてゐたのではないのだ。おみかさんから返事が來て、若しおみかさんの方でも僕を思つてるんだつたら、どういふ風にして一緒にならう――そんな事はまるで考へてゐなかつたんだ。僕も二十一なら、おみかさんも二十一、二人がおない年だといふ事も僕は問題にしてゐなかつたんだ。多くの紳士から申込があるといふ中に、僕はまだ高等學校の書生だといふ事も、僕に問題にもならなかつたんだ。僕はそれまでにまだ一度も母にこの話をした事はなかつたのだ。肝心の自分の母がどう言ふか――それさへ僕は考へてゐなかつたんだ。

どうにでもなる……どうでもして一緒になる、といふ單純な考への外、僕にはなんにもなかつたんだ。"

暫くすると、おみかさんの所から返事が來た。この通り、西洋紙に鉛筆で長々と書いてある――丁度、この手紙の來たのが五月三日だ。僕とおみかさんが始めて桃山の家で會つた日だ。偶然と言へば偶然だが、不思議さね。その事はおみかさんも書いてゐる。まあ一通り讀んで見よう――

「わたくしは言ふまいと決心し、聞いて下さるなとお願ひ申し上げましたが、あなたはお聞きになるのですね。もうこの度は隱しきれなくなりましたから、誠に辛いわけでございますが、何も彼も申し上げて了ひます。ああ、ほんとにさうでしたね。唯悲しい〳〵ではあなたにはお分かりにはなりますまい。わたしは三月七日の晩、机の上に泣き伏してをりました。なぜ泣いたのでせう。あなたの御厚志が嬉しいのと、思ふ通りにならないからです、あなたも仰せの通り、わたしがあなたに對して戀もなく何もないのならばお氣の毒なといふ同情の涙に過ぎないのでせう。併し、わたしには唯お氣の毒なといふ涙ばかりではないのです。一種言ふに言はれぬ苦しみがあるのです。その苦しみは何でせう……わたしはこれを戀ではないかと存じます。

嗚呼……戀……夢にだに思ふまじきは戀と堅く心に誓つたわたしはいつかあなたの戀を受けたので

す。わたしは廿歳の夏、始めて眞の戀人を知つたのです。併し、哀れな戀です。義務の爲に犧牲にされるのです。

わたしは嫁入するのは大嫌ひです。嫌ひでありながら、夫を持たねばならないのです……ああ、これも義務……女としての義務です。兩親に對する義務です。併し、考へて見れば誠に不安なわけです。わたしは世間に就いて、母に就いて、姉に就いて、友人に就いて、種々忌はしき事を見聞きしてゐるのですから、尙々緣づくのが厭になりました。ここで一寸お話し申し上げますのは、先頃お約束申し上げて置きました、父がわたしを配偶しようと見込んだ人の事です、その人は今大學の生徒です。今度の試驗に及第すれば、工學士となる人です。この人は高等學校へはひつた時から、父が保證人となつたので、一年に四度位は宅へも參るのです。並の人よりは無口で、少し偏屈のやうですが、至極温柔な人らしうございます。名は申し上げますまい。父の見込がうまく行かなかつたのです。まだ破れたといふわけでもないのですが、九分九厘失望の有樣です。それがわたしには大なる影響を及ぼして來ました。

今わたしは十軒程から緣談を申し込まれてゐます。今まではいや〱で濟みましたが、今度はさうは行かなくなりました。今までわたしの申す通りに許されたのも、父がその人といふ心があつたからと察しられます。この頃、その見込が外れたものですから、俄に氣がもめて爲方がないものと見

えます。

一昨朝の事でしたが、一時半頃、いつになくふと目がさめました時、何やら父母の寝間で聲がするので、耳をすまして聞いてをりました……實に辛い事でした。わたしの身について、母が責められてゐたのです。わたしはほんとに不孝者です。今までは隨分縁談が澤山ございましたが、一向氣が進まないものですから、つひ母も無理にとは申さなかつたのです。(こんな事を人に申すのは、誠に心苦しいのですが、よその親御様は子の涙で動かないといふ事はないかも知れませんが、宅の父は中々並一通りの頑固ではないのです。子の涙位で動くやうな人ではないのです)

わたくしは一日も早くこの家を出なければならなくなりました。併し、自分からどこが好いの、ここが好いのとは申されませんし、どこは厭といふ事はどうしても言はれなくなりました。これには兩親も少し困つてをります。

あなたは……好きなら好き……嫌ひなら嫌ひと言つて呉れと仰しやいますから、わたしは申します……あなたは好きです……好きです。けれども、行きたいとは申されませんのです。なぜ行きたいと申されないかと言ふと、まだ何しろあなたが二十一ですもの、ここ二三年は大事なところと存じます。もうここ二三年間は妻子の事などは念頭に置かないで、一心に御勉强して頂きたいのです。わたしはあなたに貰はれれば幸福です。心の知れた方ばかりでなく、こんな者をあれ程に仰しやつ

て下さるのですから、救つて頂きたいのは山々ですが……今が今とは行かないでせう。あなたはわたしの宅の事情をお察し遊ばして、今でもと仰しやつて下すつても、それはわたしにはお受け申されません。あなたは妻子の愛に溺れて、學問を投げやりに遊ばすやうな方ではございますまいが、誰の話を聞きましても、妻を娶つてはどうしても思ふやうに勉強は出來ないと仰しやいます。それはその筈です。妻を娶れば互に子の事を思はなければなりますまい、又家庭について色々と心配が出來て來るでせう。そんな事であなたを立派な人にしそこねてはわたしはあなたの御先祖へ申しわけがございません。わたし故にとお怨みを受けねばなりません。

どうぞ一郎さん、わたくしの胸中をお汲み取り下さい。こんな事をあなたに申し上げるのはどの位辛いか知れませんよ。どうぞわたしを妻にといふ事は思ひ切つて下さい。わたしは捨てともない人を捨てて、心も知れぬ人に嫁ぐのです……ああ。これは皆義務です。義務の爲には希望も捨てたわたしです、今度はまた戀を棄てるのです。しかし、しかし、この戀は深く胸裡に刻まれてあるのですから、生涯忘れません。わたしはあなたに胸の戸の鍵をお預け申しました。あなたはわたしを金色夜叉の宮にしたくないと仰しやつて下さいますが、あなたが若し貫一のやうにおなりになれば、わたしは必ず〳〵宮のやうになります。わたしは胸の戸の鍵をあなたにお預け申しましたのですから、自分で開く事は出來ませんし、どうあつても開かうとは致しません。

ああ、これだけ申し上げましたら、あなたのお尋ねになつた事は大抵お分かりでせうね。まだお分かりにならん事がございますならば、何卒お尋ね下さい。

わたしは今度こそは必ずどこかへ行かなければならないでせうと存じます。どんな人に極まるか知れません。ああ、ほんとにこの世は厭です。厭と言つても、まさか海や川へ身を沈める事も出来ません。何事も運命と諦めるより致し方はないのです……

終りに臨んで、あなたにお願ひがございます。どうぞ、わたしを親の心に任せて嫁がせて下さい。あなたのお許しが出なければ、わたしはいくら厭な顔を親に見せまいと思ひましても、つひ現はれるのです。母はその顔を見るのが、まあどのやうに辛いでせう。どうぞ、一言『許す』と仰しやつて下さい。

さやうなら。

み　か

一郎さまへ

去年の今夜は我が家にて、始めて君達と詞を交へし日なり。今年の今夜は斯くの如き文を君に送るとは。嗚呼定めなき浮世かな。」

と、読みから言ふんだ。

おみかさんの言ふ事は一々理窟にかなつてゐる。おみかさんの言ふ事は一々世間の道德にかなつてゐる。でも、結局おみかさんは僕の所へはこられないと言ふんだ。今にも嫁に行きさうな事を繰り返し繰り返し書いてゐるのだ。どうしても親の言ひつけに背くわけには行かないと言ふんだ。それを義務だと言ふんだ。その義務の爲には總てを犧牲にしなければならないと言ふんだ。そしてどうか外へ嫁に行くのを僕に許して吳れと言ふんだ……

併し、僕には分からない事が多かつた。義務々々としきりにおみかさんは言ふが、一應親に打明けても見ないで、默つて嫁に行つて了ふのが、果して義務なのであらうか、それが爲に一生を不幸に送るやうな事になつても、それが親に對する義務なのであらうか。第一、嫁に行くのを許して吳れと言ふのが、僕には分からなかつた。許すも許さぬもありはしない。おみかさんは決してまだ僕のものではないのだ。それに、それ程立派な義務に迫られて嫁に行かうとする人が、なぜ人に許しなどを乞ふのであらう。それ程立派な犧牲を果さうとするなら、何も人に許しなどは乞はずに、威張つて堂々と嫁に行つたら好いではないか……おみかさんはお宮が熱海の海岸で言つてゐる事と同じやうな事を言つてゐるのだ。

「あなたが貫一のやうになるなら、わたしも宮のやうになる」といふやうな文句も僕には分からなかつた。お宮があゝなつたからこそ、貫一があゝなつたのではないか。お宮があつて貫一があつたのだ。

貫一があつて、お宮があつたのではない。それを、あなたが貫一になるなら、わたしもお宮になるでは話があへこべてはないか……

　こんな事を言ふのは辛い辛いと言ひながら、その辯言ひたいだけの事は悉く言つてゐるのだ。それも僕には分からなかつた。「捨てともない人を捨てて」といふやうな、造作もなげな物の言ひやうも僕には分からなかつた。またどうなるか分かりもしないのに、もう捨てて了つた氣になつてゐるのが、僕には理解出來なかつたんだ。「救つて頂きたいのは山々だが今が今といふわけには行かないだらう」といふやうな文句もなんだか侮辱されたやうでくやしかつた。勉強がどうの、妻子がどうのといふやうな、勿體ぶつた、意見がましい文句にも、僕は反感を抱いた……「胸の戸の鍵を開ける」といふやうな詩的な、様子の好い文句も、以前の僕なら感泣して受けたらうが、今の僕には少しの難有みもなかつた……

　僕はこの手紙で、はじめておみかさんの告白に接したのだ。七年の間思ひ詰めてゐた女の告白を聞くことが出來たのだ。それに僕がおみかさんを戀してゐるやうに、おみかさんも僕を戀してゐるといふ事を、若し、この告白がこの告白だけであつたら、恐らく僕は躍り上がつて喜んだらう。併し、この告白には長い長い前書がついてゐた。十重二十重に防禦線が張つてあつた。僕はその聲を目にしながら、それをエンヂョイする事が出來なかつた——話を換へて言へば、どこに醜い

昔日があつたか、そんな事は忘れて了ふ程「よそ事」の澤山書いてある手紙だつた。子供が大事にしてゐる物を僕からちよいと出して見せて、直ぐ又それを懐へ隠して了ふやうに、おみかさんは「纏」の端つこをちらりと見せて、直ぐ又それを僕の手の屆かない所へ引つ込めて了つたのだ。

僕はこの手紙に對して、甚だしい憤りを感じた。その憤りは決しておみかさんに對する憤りではなかつた。世間に對する――世間の道德に對する――おみかさんにこんな不自然な義務的觀念を強ひた因襲的な德義に對する憤りだつた。

併し、その憤りの爲に、僕はこの手紙に對して、どうしても返事を書く氣になれなかつた。そこで、僕はうつちやつて置いた――うつちやつて置いたらきつとその「世間的の道德」といふ奴が心配して、あやまりに來るだらうと思つてゐたんだ。

今までの僕なら直ぐにも返事を出すんだが、それを出さなくなつただけ僕は強くなつて來たんだね。男らしくなつて來たんだね。

勿論、それには「女も思つてゐる」といふ強みが大分働いたんだ。

一七

さうは言ふものの、僕は決して平氣でゐられたわけぢやない。

僕は學校に一日ゐるのが堪らなく苦しくなつて來た。誰にも自分の胸の内を訴へる事が出來ないので、一日大勢の人の中にゐるのが堪らなく苦しくなつて來たんだ。僕は每日學校へ出るには出たが、僅に二三時間で歸つて來て了つた。しかも家へは直ぐ歸らずに、大抵は家の側の招魂社まで來て、お馬場の草原に轉がつてゐた。「お馬場」と言つてもこの頃の人には分からないだらうねえ。やつぱり今の能樂堂のある所だが、あの時分の能樂堂は春秋二季の大祭に明けるきりで、ふだんは草がぼう〳〵生えてゐた。僕はその青い草の中に轉がつて、每日日の暮れるまで戀の默想に耽つたのだ。やるせない胸の内を、青い空に託したり、空を飛ぶ鳥に寄せたりしたのだ。僕は自由な天地で自由に物が思ひたかつたんだ。

僕はもう昔のやうに「手段」といふやうな事を考へはしなかつた。「計略」を思ひ廻らすといふやうな事はしなかつた。僕の全體は唯一つの盲目な「戀愛」になつてゐた。僕は唯自分の念力一つで、總ての妨害を取り除かうとした。そして、いきなりおみかさんと「一つの者」にならうとした。

僕の心臟は絕えず火のやうに燃えた——僕の横になつて仰いでゐる、目を射るやうな初夏の太陽にも負けずにぐら〳〵と燃えた。僕は草いきれの中に一日寢てゐても、決して暑いとは感じなかつた。

一週間程する内に、果しておみかさんから返事が來た——

「世間的な道德」は頭を下げて詫びには來なかつたが「手段」を土産にして僕を尋ねて來たんだ。肝心なとこだけ讀んで見よう。かういふのだ——

「先日御返事を書いてゐた時分は、實に氣がもめました。あの時分の樣子では、今月中にも何處かへ行つてしまはれるかと存じてをりましたが、さう急な事もないやうです。そこはやつぱり親です。さあとなれば迷ふのでせう　わたしに相談をかければ分かりませんと申すばかりで、何も言はぬものですから、尙々迷ふものと見えます。ああ、わたしはいつこのやうに不孝者になりましたのでせう。實に勿論ない事とは承知してをりますが、どうしても自分には分からないのです。いやだと思ふ事があつても、それを言ふ事は出來ないのです。言ふと、兩親の機嫌をそこなふのです。永年經驗のつんだ親に任すより外にないと決心してをります。その代り、どんな不運にならうとも、不足などは申しませんと、かたく誓ひました。

近頃又わたしは悲しい事を聞きました。以前にも申し上げたと存じますが、わたしの兩親は遠隔の地へわたしをやるのを厭うてゐたのですが、この頃はそんな事は構はないのです。今時そんな事を言つてはをられぬと申してをりますから、次第によればどんな遠方へ行かねばならぬやうになるかも知れません。どうしてかう宅の樣子が變つて來たかと實に不思議でございます。

一郞樣、あなたは先日の手紙をお讀み下すつて、どう思召しますか。どうしてもわたしに不孝の罪

おみかさんは結婚申込といふ「手段」を、やつとの事で持つて來たのだ。そんな事なら、僕だつてと
うから考へてゐたんだ。何もおみかさんを煩はさずとも、とうからこつちで氣がついてゐた事だ――。
然るに、それだけの事さへ、おみかさんは今やつと切り出す事が出來たのだ
おみかさんはやつぱり舊道徳に囚はれてゐるんだ。やつぱり「見え」ばかりを考へてゐるんだ。「體
裁」ばかりを重んじてゐるんだ――さう思ふと、僕は不愉快になつて來た。「破れると思つて、申し込
み」といふやうな絶望的な文句も、我儘な僕には氣に入らなかつた。「破れたら、それで氣が濟むのか」
と言ふのも、考へて見ると失敬な詞だ――

僕はさう思つて、この手紙にも返事を出さなかつた。もう一度うつちやつといて見ろといふ氣にな
つたのだ。もつと苦しめてやれといふ氣になつたのだ。

さうして、相變らず毎日學校を早く出ては、お能場の草原へ來て轉がつてゐた。そして「世間」に
對する戰ふすべを知らぬ憎惡と、戀人の心臟の奧の奧まで食ひ入つてゐる舊道徳に對する反抗とで、
身内が悉く火になる程悶えてゐた。

青い草は日一日と熱くなつた。僕の心臟もそれに負けずに、日一日と熱くなつた。僕の心臟は危く
太陽に代つて、青草を燒き乾さうとした。

その内に僕は頭が悪くなつた。日に幾度となく後頭部がズキン／＼して、時々歩いてゐる足を取られ

ねばなり。されど、今は頼むにかひなき事となれり。」貫一の如くなるやも得知れずと言ひ給へり。一生無妻なるやも知れずと宣へり……ああ悲しき限りにあらずや、歎かはしき限りならずや。數にも足らぬわが身一つより、秀才の君、多くの責を負うてこの世にあれ給ひし君、一家の礎とも言ふべき君を狂はせなばいかにせむ。ああ……ああ堪へ難き事なり。

ああ、われより父母に乞はむか、われに力なし……さぞや愚なる者とうとみ給ふらむ。他のはらからにも心得りたる者と罵られむ。われはいかに罵られむも厭はじ。なれど、君を罵られむは辛し。かくしてその願ひいかなふべしとはいと覺束なき事なり。われ強ひて乞はむか……父母は如何に歎き給ふらむ。はらからは如何に心苦しからむ。世の人に指さされなば、不孝の罪のがれ難し。ああ彼も辛し……是も辛し。ああ如何にせば可ならむか。

あはれ君よ、まだ定まりし縁のなきこそ幸なれ。われの如き者を母君も厭ひ給はずば、とく／＼父母に告げ給へや。或は許されむも知れず……不幸にして破れたらば、いかに君、秀才の君よ、物のことわり知れる君よ……戀に狂ひ給ふか。ああ戀に狂ひ給ふかや。

わが身は如何になりゆくとも、既にあきらめをれば忍ぶ力はあるべし。されど、君の上のいとも氣遣はしくて、この夜頃夢まどかなる事もなし。あはれ君よ、とく／＼申し出でられたし。他に定まりし後なれば、成るものも成らざるべし。まだ定まらぬこそ、げに幸なれ。

ての相談だけをかけてやつた。勿論、相當に年をとつた人が行かなくては駄目だと思つたが、僕の母は女の事だし、一寸どんな人に頼んだら好いか見當がつかなかつた。それで、一應おみかさんの說も聞いて見ようと思つたんだ。

すると、今度はおみかさんの返事が中々來ないんだ。二日經つても三日經つても來ない。六日ばかりしてやつと來たのを見ると、おみかさんもこの返事には弱つたらしいんだね。まあ讀んで見よう。

ここの所、手紙の連續で、甚だ退屈だらうが、まあ聞いて與れ給へ――

「君許しませ……ああ、われ心ならず……心ならずして打ち絶えぬ。君許しませ……われ如何にいらへせむかと樣々に心を惱ましをりしなり。君は「申し出でむ」とのたまふか……われ問ふ君の上を氣づかひて、申し出で給へと乞ひしからに、つとめて成らざらむ事を希ふなり。さあれ、われは「謀」をめぐらすに忍びず。否、われにも「謀」なきなり。

君よ、われ君に申し出で給へと乞ひしは、我が最後の願ひなり。われ君に「願ふに」申し出で給へと云ふ外になす術なきなり。なれど、成るべき事とは如何にも覺束なきなり。事破れなば、ああ君は如何に嘆き給ふらむ。われ得堪へむや。君には今學年試驗目前にあり。さりとて今この儘にして試驗の終るを待たむか……若し、その間に他の緣の定まりなば如何にせむ……申し出でらるるも心もとなし……この儘に過ぎむも辛し。われ何れがよきか迷へるなり……あはれ君よ……君の御心に問

ひ給へ。

申し出で給ふに如何なる人よりかはわれにも思ひ計られねど、未だ世事に慣れざる年若き人なれば、御兩親の御思しも濃からむ。われ思ふに、君の母君なれば、誠に幸なれども、君ののたまふ如く御婦人の身なれば何かとお心弱かるべし。君よしと思ふ人に任せ給へや。

かへすがへすも、君とわれ同じ年齢なれば、破るるも皆これよりなり。他の事なれば如何にもなすべき需もあれど、如何に問ゆとも、こはかひなき事ならずや。

思ふに、われさへ昔は心の底を告げざりせば、かくばかり君を惱まし參らすまじきを、君の御心の嬉しくて、早く心に誓ひし「秘密」を告げしこそ、大なる過ちなりし。(君よ、如何なる事あるとも、わが心を人に語る勿れ) 君申し出で給ふには、先づ母に告げ給へ。母より父に告ぐれば、事極めておだやかならむ。母は外出のしげき人なれば、不在なる時は、重ねて御來車ありたし (來る廿六日及び廿七日は不在)。他の日は午前中なれば、不在なる事なかるべし。

五月廿四日午後九時

茶の間の窓によりて、蛙の聲を聞きつつ——

みかより

一郎の君御前に

と、かう言ふんだ。話が愈實際的になつて來たのは嬉しかつたが、さて申し込むには誰を賴んだものか、それはさつぱり見當がつかなかつた……

併し僕にはそんな事よりもつと前に、まだしなければならない重大な事があつた。それは僕の母に僕の戀を打ち明ける事だ。そして、母にこの早い結婚を許して貰ふ事だ。

尤も、これは初めからわけのない事だと僕は思つてゐた。僕は親父のない一人息子だつたし、母は僕のする事を悉く信用してゐたし、一日も早く息子に嫁を貰ひたいのは、子に甘い母の心願だつたしするから、この方は至極造作もない事だと思つてゐた。

併し、いざとなるとやつぱり極まりが惡くて、言はう〳〵と思ひながら、二三日は躊躇したが、僕は終に勇氣を振るつて、總てを母の前に告白した。そして、問題が甚だしく迫つてゐるから、一日も早く結婚の申込をしたいと言つた。勿論、あの人と一緒になれなければ、自分は生きてゐるかどうか分からないといふやうなお定まりの文句を、附け加へずには置かなかつた。

果して、母は何等の異議をも稱へなかつた。それ程、お前の氣に入つた人なら、直ぐにも貰つてやらうが、先方の親御がそんなに頑固では、とても自分のやうな氣の弱いものが行つたところで駄目だらう。一體、誰をやつたら好いものだらうといふので、今度は母と僕との間にその相談が始まつた。

僕の母は先づ親戚を物色した。僕の親戚は今でも多いが、その時分はもつと多かつた。その大勢な

親類の中でも、こんな話を理解して呉れさうな人はたつた一人よりなかつた。それは僕のいとこの一人が片づいて行つてゐる或若い法學士で、司法省へ勤めてゐる先生だつた。この人なら、きつと僕の氣持を十分に理解して、十分この問題に盡力して呉れるだらうといふ事になつた――外の親類はみんな古い人だから、今から結婚するのは早過ぎるといふので、きつと反對されるに違ひないと思つたんだね。

　母は早速その法學士先生のところへ出かけて行つて、總ての事情を打ち明けて頼んだが、いとこの亭主は意外にも頭を横に振つた。いとこの亭主は、外の老人の親戚が言ひさうな事を並べ立てた。そして、まだそんな事は早いとばかりで、少しもその事に盡力して呉れる樣子がなかつた……

　僕はこの報告を母の口から聞くと、地だんだを踏んで、くやしがつた。親類中の一番若い者でありながら、僕の一生の何物たるかが分からないとは哀れな奴だ。結婚に早い遅いがあるものか。惚れた同志が一緒にならうといふのに、時間の問題や年の問題が、なんの妨げになるものか――僕はさう思つて、そのいとこの亭主に唾でも吐きかけてやりたいやうな氣になつた――實際、それからといふものは、僕はそのいとこの家と餘り交際をしなくなつた。

　そこで、僕の母は第二の人を選んだ。これは母の古い友達で、女ではあつたが、男まさりのしつかりした人だつた。或華族官吏の妻君でね、自分に子がないものだから、小さい時から僕を自分の子のやうに可愛がつて呉れた人だつた――この人のところへ行つて、母が事情を話すと、直ぐに引き受け

て與れた。

「あたしが引き受けたからにや、都が非でも話をつけて見せる」とあつて、その人は男のするやうに腕を叩いて見せたさうだ。

それで、母も安心して、萬事をその人に賴んだ。勿論、僕も喜ばずにはゐなかつた。併し、僕には危惧があつた。若し破れたらどうしよう。おみかさんの言ふやうだと、相手は中中頑固らしい。生若い僕などの戀に動かされさうな親では斷じてないらしい。若し、それまでにして、それで破れたらどうしよう……

僕には第二の手段といふものが、まるで豫想も準備もされなかつたのだ。僕は唯萬一の僥倖を恃みにするより、外に道がなかつたのだ。

初めは非常な勢ひだつた僕も、愈かう道があくと、忽ち氣が弱くなつて來たんだね。

僕は母の友達からいつ何時返事が來るか分からないので、それが急に恐ろしくなつて來た——返事が來れば、それでおしまひだ。さう思ふと、ゐても起つてもゐられなくなつた……

僕はとても家にぢつとしてゐる事が出來なくなつた。そこで、又寄宿へはひる事にした。丁度夏の學年試驗が近づいて來てゐたので、母の手前は試驗の爲といふ事にしたのだ。さうして試驗中はその一件についての消息を一切絶つて貰ふ事にした——試驗の妨げになるといけないからと言ふので。

併し、實を言へば、僕の恐ろしいのは試驗よりはその「返事」だつたのだ――僕は「返事」を逃げ出したんだ。

一九

君も知つてるが、その時分、寄宿は増築されて、新しい寮が一棟殖えてゐた――僕はその新しい寮へはひつたんだ。

僕はおみかさんの大好きだといふ薔薇の鉢を『ばら新』で二つ買つて來て、自習室の机の上に飾つた。そして、朝々怠らずに水をやつた、その薔薇の花の前で、僕は筆記を整理したり、教科書の復讀をしたりしたんだ。

試驗は段々に近づいた。寄宿の部屋々々ではそろ〳〵夜更かしが始まつた。

僕もみんなに負けずに勉強した。かうなつても、やつぱりおみかさんに成績の惡いところなどは見せたくなかつたのだ。試驗の成績が何か僕がおみかさんを貰ふ資格にでもなるやうな氣がしたんだ――それに、試驗準備に沒頭してゐれば、少しは戀の懊惱も忘れる事が出來たからだ。

併し、夜おそく西洋蠟燭の下で勉強してる時に、帛を裂くやうなほととぎすの聲などを聞くと、さすがに家からの消息が絶えてゐるのが悲しくなつた。

家からの消息はまあ斷つたのだから爲方がないとして、おみかさんから手紙一本來ないのが、僕には堪らず寂しかつた。又寄宿へはひるといふ事は、家を出る時簡單に端書に書いて出して置いたのだから、何とかたまには言つて來ても好ささうに思つた。それとも、もう申込が濟んで、話が破れて了つたのであらうか。そんならそれで、それだけの事を知らして吳れても好いと思つた。

僕は或晚寂寞に堪へかねて、とう〳〵おみかさんの所へ手紙を書いて了つた。たよりのないのはどうしたのだ。あなたはもう僕を忘れて了つたのか。若し少しでも僕を思ひ出す樣な事があるなら、手紙位吳れても好ささうなものだと、唯怨みがましい文句ばかりの手紙を書いたんだ。勿論「申込」の一件については一言も書かなかつた。僕はその問題に觸れるのが、やつぱり恐かつたんだ。その經過を聞いて、若し話でも悪かつたら、勉強も何も出來なくなつて了ふと思つたんだ——

すると、直ぐおみかさんから返事が來た。それがこれだ——

「またわれは病にかかりぬ。このたびはつむりの痛み烈しく熱さへ加はりたれば、われ得堪へず……得堪へずして、つひに病の床に打ち臥しぬ。さあれ、君、憂ひ給ふ勿れ。われ、我が母の憂ふるさまに忍びず、心をひるがへして床を起ちけれども、幸にさしたる事もなし……ああ、われ打ち絶えぬ。君惱めり。君が惱みもことわりなり。わが病も……ああ君は、『なほ今も愚なるわれが身思ひ出で給ふ事ありや』と問ひ給へり。ああ、われ泣かざらむや。君は……君は今尙われを疑ひる給ふに

つた――返事がそれだけ遅れるんだから。

二〇

試験が濟むと、もう僕はゐてもたつてもゐられなかつた。直ぐ、その日の夕方、家へ歸つて「一件」の消息を聞かうとした。

併し、母は何とも言はないのだ。日數から言つても、もう話の濟んでゐない筈はないのに、母は「一件」に關して何一つ話をしないのだ――唯、試験の出來不出來を聞いたり、僕の健康狀態を聞いたりばかりしてゐるんだ。

僕は、これはてつきり駄目だつたなと思つたが、どうしてもこつちからそれを母に聞く事は出來なかつた。僕にはさうと察してゐながらも、返事を聞くのがまだ怖かつたのだ。

そこで、直ぐ又逃げるやうに家を出て了つた。そして、招魂社のお能場へ行つたが、そこにも落ち着いてゐる事は出來なかつた。それから又そこを出て、あつちこつちぶらついてゐる内に、來るともなしに、例の一件を頼んだ母の友達の家の前まで來て了つた。

僕は思ひ切つて、門の中へはひつた。そして、母の友達に會つた……

やつぱり話は駄目だつたのだ。申込は素氣なく拒絕されて了つたのだ。母の友達に三度も四度も頼

みに行つたのだが、それでもおみかさんのお父さんは聞いて呉れなかつたさうだ。

理由は極めて簡單さ――まだ僕が書生だからいけないと言ふんだ。

この簡單な理由の下に、僕等の七年の戀は棒を引かれて了つたんだ。この簡單な理由の下に、その長い間僕の小さい頭を痛めて來た、總ての熱情も、總ての希望も、輕い粉かなんぞのやうに、吹き飛ばされて了つたのだ。この簡單な理由の下に、僕といふ人間一定の一生がめちやめちやにされて了つたのだ。この簡單な理由の下に、僕は人間としての價値も歡喜も失なつて了つたのだ……

僕はその儘寄宿へ歸つて了つた。寄宿にはもう燈がついてゐたが、もう田舍へ立つて了つたものもあるので、部屋に物寂しく取り散らかつてゐて、いつもは賑やかな寄宿の夜も、けふは何となく人氣(ひとけ)がなかつた。

僕は窓の側へ椅子を持つて行つて、それへぐたりと身を投げかけながら、七年の間の事をそれからそれと考へた――

藤村はどうしたらう、鶴岡はどうしたらう。かれらは仕合せだと僕は思つた。

浮いた戀をしてゐる奴は、戀を得ても、戀を失つても、やつぱり浮いてゐるのだ。

沈んだ戀をする者は、戀を得てこそ光にも會へるが、戀を失ふが最後、暗闇のどん底へ落ちて了はなければならないのだ。

藤村や鶴岡は、今時分又新しい女の中へはひつて行つてどんなに賑やかに暮らしてゐる事だらう。
俺は今たつた一人で、暗い空を眺めながら、音も立てずに敗殘の苦汁を啜つてゐるのだ。
俺は斷言して憚らない――少くとも後半期の俺は、おみかさんに對して戀の誠實を立て通した。併し、その誠實も「世間」といふ廣い世界へ出ては、何の役にも立たなかつた。「世間」は誠實よりも身分を要求した。眞心よりも年齡を要求した。
自分の妻たるべき人はこの人より外にない。若し、この人を失へば自分は一生妻を持つ事は出來ない。この人は自分の生れぬ前から、神が自分の妻に極めて置いて呉れた人なのだ――それ程に思ふ人でも、こつちがまだ書生では貰ふ事が出來ないのだ。そして、人に取られて了ふのだ。神の意志でもなんでもない人のところへ行つて了ふのだ。
「世間」といふ大きな怪物には、靑年の心を見る目もなければ、靑年の誠を聞く耳もないのだ。かれは神經の鈍い、力のある大きな手で、靑年のか弱い心臟を壓し潰して了ふのだ。
俺は「世間」に對して戰ふ術をまるで知らない。人の親に對して取るべき武器をまるで知らない。
俺はやつつけられて、唯默つて引つ込んでゐなければならないのだ……
僕はかうは思つたが、自分を壓し潰した「世間」に對しては、飽くまで立派な態度がとりたいと思つた。前のやうに、決して諦めるとは言はない。決して諦めはしないが、男らしい忍耐と大量とを以

下、おみかさんに對し、おみかさんの兩親にも對さうとした。僕は何くまで敗北者らしい醜い態度が取りたくなかつたのだ……

僕はその晩おそく學校の門を出た。そしてその時分駒込にあつたパラダイスといふ小さな菓子を食はせる所へ行つて、チヨコレエトをしたたかに飲んだ――いける口なら、酒でも飲むところなのだらうが、僕はその當時酒の匂ひさへ嗅げなかつたのだ。

チヨコレエトを飲みながら、ふと僕はこんな事を考へたんだ――

何か自分の持つてるもので、一番大事な物をおみかさんに送らう。そして、それを僕だと思つて、一生持つてゐて貰はう――

それに丁度好いものがあつたんだ。僕は可なりな家に生れた「坊つちやん」だつたが、生れつき粗食粗衣を好む風があつて、何一つ贅澤な物は持つてゐなかつたが、その僕にしては際立つて不釣合な贅澤品を持つてゐた――それは金時計だ。

いくら世の中が贅澤になつた今日でも、高等學校の學生で金時計を持つてゐる奴は少なからう。況んやその時分だ。僕の金時計は級でも屢問題になつた。

併し、僕の金時計には物悲しい意味があつた。その意味を級の人はみんな知つてゐたから、「贅澤なものだな」と言ふ奴はあつたが、「贅澤」だと言ふ奴は一人もなかつた――僕の金時計は、五つの時死

に別れた父が、僕に殘した唯一の形見だつたのだ。
僕は二十一のその夏まで、それを父のやうに思つて大事にして來たのだが、ふとそれをその晩おみかさんの所へ送らうと思つたのだ。
この金時計に別れる事は、僕自身の一部分と別れる事だ、僕に僕自身の一部分を捨てて、一生それをおみかさんの側に置かうとしたのだ——一生おみかさんを離れずにゐさせようとしたのだ——僕は僕の一部分に僕の戀愛の總てを盛つてやつて了つて、自分はこれから全く新しい人間にならうとしたのだ。
おみかさんの片づく家が、若しおみかさんの柩なら、僕の金時計は僕のおみかさんに對する戀の柩なのだ。
僕はその金時計を送つて、總てを終らうとしたのだ……
パラダイスを出て、學校の門まで來ると、門はもう締まつてゐた。僕はいつもやるやうに、塀を乘り越えて、學校の中へはひつた。塀の上から草の中へ飛び降りると、生ぬるい草の匂がむつと鼻をついた。空は薄曇つて、月の光がどこからか鈍くさしてゐた。空氣が何となく重くて、頭が上から壓されるやうだつた。
僕は教室の裏庭の草原の中を歩いて、寄宿の方へ歸つて行つた。その草原にはうまごやしの白い花

に背面に咲いてゐた、淋しい白い花の一つ一つが、薄明るい夜の光に照らされて、頷いてゐるやうにも見えるし、否定してゐるやうにも見えるんだ。僕は波の上をでも歩いてゐるやうな氣持で、ふら／＼とその花の中を歩いて歸つたんだ。

　寄宿はもう灯が消えてゐた。ゆうべまでは夜明け近くまで方々の窓に燈がついてゐたのが、けふはもうどの窓も死んだやうに黒くなつてゐた。

　僕は暗い階子段を上がつて、二階の寢室へ行くと、直ぐ袴を脱ぎにかかつた。カアテンも何もない大きな硝子窓からはひつて來る薄明かりに透して見ると、同室の一人が横になつた儘まだ目を明いてゐる――君も知つてる、あの大男の村田だ。

「岡田君、君は家へ歸つたんぢやなかつたのか。」

「うむ。だけど、荷物がまだ置いてあるんで、又歸つて來たんだ。」

「さうか。僕もけふ立たうと思つたが、田舍へ行くと、又暫く青木堂へも行けないから、もう一晩お名殘にゐる事にしたんだ。」

「さうか。」

　といふやうな事を言ひながら、僕は時計を取らうと思つて袴の紐をしごくと、いつも結びつけてある筈の所に時計が附いてゐないのだ――

「あ。」
と、思はず僕が聲を立てると、
「どうしたんだ。」
と、村田が聞くんだ。
「時計がないんだ。」
「なに、時計がない。そいつあ大變だ。君の時計がなくなつちやあ大變だ……袂にでもありやしないのか。」
「僕は袂も見たし、がま口の中も調べて見た。けれども、やつぱり時計はなかつた。ないね。」
「そいつあ大變た。直ぐ探しに行かうぢやないか。」
と言つて、親切な村田はいきなり跳ね起きた。
併し、僕は一向騷がなかつた――僕は咄嗟の間にかういふ事を考へたんだ。どうせ僕の身を離れる筈のものだつたのだ。それがなくなつたのに少しも不思議はない。或は僕に送られるのを待たずに、時計の方でおみかさんの所へ行つて了つたのかも知れない――實際、その時僕はさういふ風に思つたんだ。實際さう思つたんだ。

もう言つたから、村田がいくら騒いでも、一向平氣な顔をしてゐた――
「なあに構はないんだよ。あんな物なくなつたつて。」
「そんな馬鹿な事があるもんか。あれは君のお父さんの形見ぢやないか。第一、あんな高い物をなくして、よく平氣でゐられたもんだ。」
「好いんだよ。なくなつても。どうか寢てゐて呉れ給へ。」
こんな押問答をしてゐる内に、村田はどん／＼仕度をして表へ出かけようとするんだ。そこで僕もやむを得ず、その後へついて二階を降りると、村田は寄宿のランタアンに火をつけて、それを持つて外へ出た。
外へ出ると、村田は――
「かう通つて、歸つて來たのか……かう通つて來たのか。」
と、一々僕に聞きながら、目を皿のやうにして僕の通つて來た道を見て歩くんだ。併し、それらしい物は一向ない――とう／＼學校の門を乘り越えて、パラダイスまで行つて、パラダイスでも聞いて見たが、更に手がかりはなかつた。
僕は寧ろ金時計のなくなつて了つたのを喜んだ。村田と歩きながらも、どうぞ見つからなければ好い、見つからなければ好いと、心の中で念じた位だ。僕は金時計のなくなつたのを、自分の運命の

象徴にしたかつたのだ――なくなる筈の物がなくなつたのだ。おみかさんを失つたのも、丁度これと同じ運命なんだ。なくなる筈の物がなくなつたんだ――さう思つて、少しでも苦しい胸を慰めたかつたのだ。

村田はパラダイスまで行つても見つからないので、すつかり失望して了つた。

「飛んだ事をして了つたねえ。飛んだ事をして了つたねえ。」

と、心から僕を慰めるやうに言つて、何か自分が済まない事でもしたやうな悲しい顔をした。

「なに、好いんだよ。好いんだよ。」

と、僕は言ひながら、村田と列んで、同じ道を通つて歸つて來た。もう一遍、うまごやしの澤山咲いてゐる草原まで來ると、ふと何かが暗い草の中で光つてゐる――村田は大きな身體を屈めて、草の中を覗いた。

「もうありやしないよ。よし給へ、よし給へ。」

僕がかう言ひながら、どん／＼先きへ行かうとすると、突然村田は――

「あつた。あつた――君、あつたよ。」

と、笑ふやうな泣くやうな聲を出すんだ。その異様な聲に驚いて、覺えず振り向いて見ると、先程、村田のしやがんでゐる直ぐ前の草の中に、僕の金時計はポカリと蓋をあけて落つこちてゐた。

「不思議だなあ。さつきここを通つた時は、確になかつたんだがなあ。」

村田は不思議で堪らないといふ樣子で、手も出さずに、しやがんだ儘時計を眺めてゐた……

僕も時計を見ると、急に又氣が滅入つて來て、直ぐには、それを拾ひ上げる勇氣もなかつた。そこで、立つた儘、上から時計を眺めてゐた……

時計は僕の運命をシムボライズするやうに、薄暗い草の中で、夜露と泥にまみれて、寂しく光つてゐるのだ……

ああ、おみかさんはまだなくならないのだ。なくなる筈のおみかさんはまだ僕のところにゐるのだ。僕の戀の生涯はまだ僕を離れないのだ……僕は自分で時計をなくさうとしたんだ。それのなくなるのを望んだのだ。それだのに、時計はやつぱり僕のところへ戻つて來るのだ——さう思ふと、俄に未練が出て來た……

僕はいたはるやうに、そつと時計を拾ひ上げた——時計は蓋の合せ目が毀れでもしたか、いくら蓋をしめても、蓋がはね返つた——それも僕には悲しかつた。

寢室へ歸ると、僕は村田に禮を言つて、直ぐに横になつたが、どうして中々寢られはしなかつた。村田の寢しづまるのを待つて、僕は自習室へ降りた。そして、試験で使ひ殘した西洋蠟燭に火をつけた。その火の下で、僕はおみかさんへ長い手紙を書いた。

その返事がこれだ――

「お聞き遊ばしたさうですね……わたしは、わたしは實にあなたに申しわけがございません。あなたの方よりは正當にお申し込み下すつたのですに、宅の方からは……誠に殘念に存じます……わたしは力の及ぶ限りの事を致しましたのです。父母はわたしの心をよく〳〵知つてをります。家人は皆、わたしの涙を知つてをります……知つてゐながら許して吳れないのですから……爲方がございません。

ゆうべのお手紙中『不幸なる……』の所を讀みました時は、覺えず聲を立てました……誠にお嬉しう存じます……どうぞ『かの事』は破れましても……いつまでも妹……と思し召してお願ひ申し上げます。

わたしは藤井へは決して參りは致しません。父は藤井にと思つてゐたのです。けれど、向うでは餘り欲しくないのです。それ故、藤井に對しては何もないのです。」

――藤井といふのは、例の工科大學の學生だ。

「一郎樣。どうぞ御身を御大切に遊ばして下さい……近頃は大變におやつれになつて入らつしやいます。この夏も御都合が宜しければ、どこかへ御轉地になつて御養生遊ばして下さいませんか。申し上げたい事は澤山にございますが、わたしはこれからあなたをお泣かし申すまいと心に定めま

したから、あまり何かを申し上げませぬ。

六月二十四日　　　　　　　　みか

一郎様お前に

二

これが若し君だつたら、決してこの位の手紙を貰つて、満足はしなかつたらうが、意氣地のない僕はこんな手紙でもどんなに嬉しいと思つたか分からないのだ……

話が壊れたのにも關らず、依然としておみかさんから便りがあるといふ事――それだけでも、僕には有難かつたのだ――

「……今日はていやな事をお耳に入れます。わたしは……わたしは又二軒から縁談を申し込まれました。一方は秋田縣の方から申込があつて、今まで延びてゐたのですが、一方はつひこの頃の事で、この方が是非是非と云つて参りました。これが纏まれば、今月中に式を擧げるのださうです。先日の方も是非で待つて貰れといふので、後の方に極めてしまふわけにも行かないのださうです。宅でも早く極まりのつくのを待つてゐると申しております。先日の方は判事で秋田縣にゐるのです。後の方は陸軍の

軍醫で、東京の軍醫學校へはひつてゐる人です。わたしはどうせ親の心に任せるのですから、何も申しません。どうでも構ひません。この世なんか、短かいのですもの……親が安心する所へ行つて、妻の道を盡せば、それでこの世のお役濟です……わたしは來世が樂しみです。早く來世が來れば好いと思つてをります……」

こんな事を言つて來ては、絶えず消息を絶たなかつた。もう何もかも打ち明けるといふ風だつた。僕はそれをせめてもの心遣りにした……

時期が來たら、どうか妻を貰つて異れ。そして、その人と自分と交際をさせて異れ……といふやうな事も度々言つて寄越した。

自分は嫁に行くのが厭なのに、あなたに妻を持てと言ふのは、誠に忍びない事だが、それはあなたの御先祖の爲だ。あなたといふ立派な男があるのに、他人の子をあなたの跡へ入れるやうな事が出來ては、わたしがあなたの母君に濟まない……といふやうな、おみかさん一流の道徳も、屢手紙で書いて寄越した……

僕はおみかさんの心遣ひを嬉しいとは思つたが、おみかさんの言ふ事を聞かうとは思はなかつた――どうして、その時分の僕に、そんな事が分かるものか。

も二もなく極まりました。

やはり暗黒中で物を探るやうなと申しました人の詞に少しも違ひはございませぬ。併し、わたしはもう心に定めがつきましたから、どんな不幸に會ひましても、決して人は怨みません。先夜もM先生がお出でになつて、母の前でいろいろ仰しやつて下さいました。わたしははい〳〵と謹んで聞きました。やつぱり後日どんな事があらうとも、不平に思つてはならぬといふやうな事でした。一郎様、どうぞ御安心遊ばして下さい。わたしの死に所がきまりましたのでございます。

あなた、わたくしに會ひたいと仰しやつて下さいますが、誠に有難う存じます。わたくしも行く前に是非一度……お目にかかるだけでよいのですからと、始終思つてをりますが、もう……とても駄目でございませう……わたしはもう五六日で、この家を出なければなりませぬ。

今度の話が極まりましたから、直ぐにお知らせ申さうと存じてをりましたが、どうにも間がないので、とう〳〵今日まで遅れまして、なんとも申譯がございません。わたくしは申し上げるのを忘れましたが、實は妹が二十八日で、わたくしが二十四日……ほんとに悲しうございます……かういふわけでひと月に二人嫁入するのですから、宅の混雑と申しましたら一通りではございません。あの茶の間は、わたくしの爲に調へた道具で足も入れられませぬ。わたくしの机……も誰かの物になります。この机。よくわたしの涙を受けて呉れた机です。この机にはあなたのお文も入れて置い

たので、なか〳〵に情が移つて、持つて行きたいのですけれど、あまり大きいものですから、さうも行きませんの。

お文。まだ火中致しません。どうしても惜しく又辛くて……併し、どうあつても近日に火中しなければなりませぬ……お作の詩と、あの「おかたみ」はみんな持つて參ります。これがなくては、わたくし生きてはをられませぬ。

思へば僅かの間でございましたね。去年の六月から今年のけふまで、始終お交りをしても、たつた一年……しかも神の垣に隔てられて思ふやうにお便りさへ出來ませんでした……その間のあなたの御厚志は、今更申し上げるまでもございませんが、誠に筆にも詞にも盡されぬ程でございました。まして、先頃に不幸なわたくしを……ああもう止めませう。わたくし、これが現世のお別れになると存じます。あちらへ行けば、もう〳〵お手紙を頂く事も差し上げる事も出來ませぬ……併し「ありさ」だけは御通知致したいと存じます。あなたの御宿所も知つてゐたいのでございます。若し御轉居になりましたら、必ずお知らせ遊ばして下さいまし。お名前はなくても分かりますから、端書でどうぞ。二十三日の午前に、わたくしの荷物が先方へ參ります。若し、若し詩を下さいますなれば、二十二日までにお送り下さい。

お手許に置くのが辛うございますから、成るべく短いのを下さいまし、お手紙は段々灰になつて行

くを、ぢつと見てゐるのは、實に辛くて堪りませぬ。
別封の寫眞、誠に粗末なのでございますが、今年の五月八日にとつたもので、わたくしには最近撮影なのです。どうぞ永久お手元にお秘め置き下さい。裏に何か書くのでございますが、手が慄へてどうしても書けませんから、悪しからず思召して下さい。
今後若し途中でお目にかかるやうな時がございましたら、知らぬふりなどは遊ばさないで、お辭儀をさせて下さいましな。
一郎様、もうこれで筆を置きます、誠にお名殘惜しうございます……………………………………ああ、わたくしは自分の行く先きを申し上げませんでした。わたくしは陸軍一等軍醫土屋小三郎といふ人のところへ參るのでございます。
宿所は牛込區若宮町二十三番地ださうです。
御機嫌よう。左様なら。

七月十九日午前一時　　信樂みか

園田一郎様みまへに」

これを讀んだ時の僕の心持はどうだつたらう。いつそぼんやり知らせて呉れれば好いのを、おみか

暮れ六つ、悲しき音に
盃を口に觸れむ
盃を口に觸れむ
われはいま孤燈のもと
われはいま破机の前

楽しくて
悲しかるらむ
ああ君は三々九度
手を拍ちて人ことほがむ
悲しくて
樂しかるなり
ああわれは數を知らず
手をうちて人もあざめよ

捕へられし君が手あはれ
うつし世のちぎりの盃
いかばかり君の泣くらむ
かたくなのわが手は悲し
うつし世のわかれの盃
かくばかり震へこぼるる

ひとりしてわかれの小唄
低くとも君に聞こえむ
人多き蓬莱の曲
おろかなる耳には入らじ

わがはとり。今宵ありて、人あらず
わが嘲笑あり

君がほとり、今人多し、神なけむ
君が目憂はしや

まばゆきかな、まばゆきかな
百千の燭あかくとも
悉くこれうつし世の闇
君が身の光る裝ひ
こはすでに君にあらず

君この世
何をか見る
われこの世
何をか見む

ああ二人は
うつし世に

めしひの二人

　君が手とりしも夢

　君われに縋りしも夢

奪はれて

君われに

歸る能はず

めしひよく道を知らむや

奪はれて

われ君に

縋る術は無

めしひよく走り得むや

　　さはれ泣くな

　君こそ語よ

元來は是

影あつき森の葉ごしに
あめの星、地の石と語らふ
　人の世の嘆きまなこは
　神の世の光を知れり
あめなる國は近し
さらばよ
あめなる國に近し
さらばよ

君は東
われは西
背を合はせて旅立ちすとも
神の世はまどかなり。
二人また會うて
二人また抱く時

神は誓へり

(必ず)とこそ

われには日の出づる方

君には月の入る方

ほのかなりし

末世の光

めしひにはこの光のみ

さらばよ

めしひにはこのしるべのみ

さらばよ

鐘聞こゆ

さらばよ

鐘聞こゆ

さらばよ

さらばよ
さらばよ

二三

七月の二十四日が來た。

この日までもおみかさんは便りを絶たなかつた。僕が送つた祝ひの品に對する禮や、嫁に行つてから、僕の詩の出た雜誌を送つては惡いかと聞いてやつたのに對する返事などが書いてあつた——「お作を讀みたいのは山々だが、夫の心もまだ解しかねるから、一度送つて頂いて、その樣子で何とか申し上げよう」といふやうな事が書いてあつた。

「いよ〳〵今日と相成候」といふ一句と、「信樂みか」といふ名前が、僕のライフの烙印のやうに、僕の腦裏をぢり〳〵と燒いた……

あの晩の僕の狂態は、君が一番よく知つてゐる——僕は日の暮れに家を飛び出すと、おみかさんの家の近所へ驅けつけて、あの坂を降りて來る車の提灯を一つ一つ追つかけた。併し、もう行つて了つた後だと見えて、それらしい車は一つもなかつた

それから、僕は通りがかりの酒屋へはひつて、飮めもしないのに、正宗の大瓶を一本買つた。そし

て、これをハンケチで縛つて、腰へぶらさげて、時々歩きながらラッパをやつた。

それから、僕は君の家へ行つたんだ。君の部屋へはひると、僕はなんにも言はずに、いきなりその

まゝの大瓶を君の机の上にドンと置いた。そして——

「僕はこの瓶の中へはひつて了ひたい。」

と言つた——君はあの時、びつくりしたやうな顔をしたつけねえ。

それから君の机の上に活けてあつた薔薇の花だ。それに氣がつくと、僕はいきなりその花を掴んで、

むしやくしやと食べて了つた。君は驚いたやうな顔をしたつけねえ。

僕は自分でも、氣違ひになるんぢやないかと思つた。

僕は徹頭徹尾、君にはなんにも言はなかつた。君は心配して、歸る時、僕を坂下まで送つて呉れた……

君に別れると、雨がぽつ／＼降つて來た……

それからだ、僕が[illegible]見附のトンネルの上から鐵道へ飛び込んで死なうとしたのは。

僕は汽車が四谷の方から眞黒になつて走つて來たまでは覺えてゐたが……それから後は知らなかつた。

一旦歸らうとして、又心配になつて後を追つかけて來た君に呼び生かされた時、僕は土手の上に寝たまゝになつてゐたんだ……

それから後の事は君も詳しく知つてゐる。僕の話もここまですれば、もう澤山だ。さぞ退屈だつたらうに、よく我慢して聞いて呉れた。

その後の僕がどんな女に會つても、いつもしまひにうまく行かないのは、君がよく知つてゐる。僕はそれから十年の間に、色女らしいものも度々持つて見たし、女房らしいものも幾度か持つて見たが、みんな最後には駄目だつた。

僕はやつぱり「自分の女房」を人に取られて了つたんだ。僕は一生ひとり身で暮らすより外にしようはあるまい……

僕は「書生だつた爲に」斷られたのだ。

女は親の爲に、「心」を持たずに嫁に行つたのだ。

この簡單な二つの事實は、執拗に僕の一生を支配しようとするのだ。

僕はその後多少は本も讀んだ。多少は世路の艱難も嘗めた。併し、あの當時分からなかつた事は、いまだにやつぱり分からないでゐる……

おふかさんのその後もまるで分からない。一二度地方へ轉任した時の通知に受けたが、それももう六七年前の事で、その後はまるで消息がない……生きてゐるか、死んでゐるかも分からない。

背教者

序

……ガチャンと硝子のわれる音がした。

……目が覺めた。

……書齋の方に、ミシミシと人の歩くやうな音がする。

……ぞつとして、ほんとに目が覺めた。

……それから、寢床を出て、障子をあけて、緣側へ出た。

……足がフラフラする。いくら踏みしめても踏みしめてもフラフラする。自分の體が動いてゐるのではない。緣側の板が動いてゐるのだ。地震だと思つた。

……書齋の障子をそつと明けて見た。まつ暗だ。耳を澄ました。寂（しん）としてゐる。暫く暗闇の中をぢつと眺めた。あたりがぼんやり見えて來た。どこにも異狀はない。地震もやんだ、

……明くる朝、書斎へ行つて見ると、ホルマン・ハントの「世界の光」の入れてあつた額が疊の上に落ちてゐて、硝子が粉々に割れてゐた。燈を提げた基督の顏にも手にも小さな傷がついてゐた……

……先生の坊ちやんを膝の上にのせた。

……可愛くて堪らない。

……思はず頬ずりをした。

……すると、急に坊ちやんが兩手で私の頭を押しのけた

……「お父樣、山内さんの口が烟草臭いですよ。」まだ五つにしかならぬ男の子がはつきりかう言つた。

……先生が恐い顏をして、ぢつとこつちを見詰めた……

これも夢の一つである。

……役者と一緒に車にのつてゐる。一つの人力車に苦しがつて二人のつてゐる。

……役者は女がたである。誰だか知らないが、たしかに女がたである。

……ふと、前に見える二階の廊下に、先生の姿が見えた。

……大日に下に、車は照らされて走つてゐる。

……二階の廊下で先生が笑つた。

……私の胸がキキと痛んだ。

これも夢の一つである。

……どこかの學校である。

……會堂のやうである。

……青年會館だとも思つた。

……階段のやうなところで、ふと先生に會つた。階段の上からと下からとで顔がぴたりと會つた。

……「齒が痛えた。」さう言ひながら、先生は片手で頬を撫でた。

……「この歴史の蔭には涙があるね。」

……醉へるやうな目つきを睨み返して、私はわざと恐ろしい顔をした。

無理に――無理に――恐ろしい顔をした。

これも夢の一つである。

この物語は、かういつた夢を毎日のやうに、およそ二十年も見續けてゐる、山田といふ四十男の告白である。懺悔である。

この物語は二十年も前の物語である。山田自身ももうよくは覺えてゐない程遠い昔の物語である。かれの告白には屢今の「夢」がまじる。今の「理窟」がはひつて來る。

勿論、私はそれを材料にして、客觀的な「小說」を作り上げようとした。併し、それは終に出來なかつた。それ程、この材料は混亂してゐる……

送別會

眞赤な海だ。眞赤な空だ。落日が斷崖にかかつてゐる。赤い漣が縞を作つてゐる敷物のやうに靜かな海の上に、赤く塗られた置物のやうに、荷足舟が一艘、ぢつと動かないで浮んでゐる。

ほかに舟は一艘も見えない。海岸を歩く人影もない。鳥一羽飛んでもゐない。魚一疋跳ねもしない。

唯この荷足舟一艘が中心になつて、それを海と空と海岸と斷崖とが、溢れるやうな落日の赤光を浴びながら、抱擁し愛撫し庇護してゐるやうに見える……

舟には八人の青年と一人の少女とが乘つてゐる。八人の若い男の中に、唯一人の若い女が交つてゐるのである。併し、今ここに浮べられた舟の意味は、この女性が中心ではなかつた。

八人の青年は一人を除いていづれも帝大の學生である。その內、天岡といふのがついこなひだ工科の土木建築科を卒業した。體はあとの七人の誰よりも小柄だが、年は一番上だつた。恩賜の銀時計を貰つて學校を出ると、直ぐパナマへ出張を命ぜられた。運河工事視察の爲だ。

深田と南と小寺は理科だ。小寺は物理、南は化學、深田は植物だ。

柴田と山田はどつちも文科だが、山田は英文學が專攻で、柴田は心理學が專攻だつた。

工藤と寺山はどこの學生でもなかつた。それでも寺山の方は橫濱の商業學校に籍を置いたことぐらゐはあつたらしいが、工藤の方は小學教育も滿足には受けてゐなかつた。本土の北の末端、恐山の附近から遙々東京へ出て來た貧しい青年であつた。

この中にたつた一人でゐる少女――それは理科へ行つてゐる南の妹であつた。

この九人は唯「若さ」から一緒に集まつてゐるのだらうか。勿論、それもあつた。同じ形の「角帽」がかれらを一團にしたのだらうか。勿論、それもあつた。併し、このグルウプには他のグルウプに決して見られない特殊の友情があつた――

市外の千駄ヶ谷に「森川先生」といふ基督教の教師が住んでゐた。森川先生はどの教會にもどのミッションにも關係がなかつた。自分一人の基督教を、自分一人の力で、自分一人の家で說いてゐた――九人はみんなこの先生の弟子だつた。そして、この先生を通して――基督に於いて交はる友が自

分達だと信じてゐた――

支那人町で買つて來たシウマイの二包み。

一艘の荷足舟。

本牧の海。

これが遠くパナマへ立つて行く天岡を送別する志の總てだつた。簡素な、簡素な送別會だ。

「茶が一ぱい欲しいなあ。」

子供のやうに無邪氣な南が言つた。

「贅澤言ふなよ。喉が渇いたら海の水を飲めよ。」

南とは中學時代から――まだ「信仰」などといふ問題に觸れない時分から――の友達である柴田が言つた。

「さうか。」

南は素直にさう言ひながら、手と手で椀の形をつくつて、舟べりへ身をもたせかけると海の水を一杯すくひ上けて飲んだ。赤い雫がボロボロ指の間から落ちた。

「おう鹽つぱい。」

江戸つ子で町つ子の南は、角帽を冠つてからも、かうした詞の癖がぬけなかつた。

「馬鹿正直ねえ。兄さんは。」

南の妹が腹を抱へて笑つた。柴田は手を拍いて喜んだ。南は舌を出したり嚏をしたりして、苦さうな顔をした。

「だが、なんはなんでも、あんまり粗末な送別會だなあ。天岡君には全く氣の毒だよ。」

本牧に住んでゐるので、けふの送別會の幹事をやつた寺山がかう言つた。寺山は何處かに商人風なところのある、輕快な、眉目清秀な青年だつた。

「全くだ。隨分遠いところへ行くのに、あんまり飽氣ない送別會だ。でも、僕等にはまだこれ以上のことをする力がないんだから爲方がない。」

强度な近眼鏡をかけた、面皰だらけな長い顔の、その癖少しも世俗的なところのない、もう既に學者としての風格を十分に持つてゐる小寺が、情なさうにかう言つた。

「パナマつて隨分遠いところなんでせうねえ。」

目の見當の少し違つてゐる――どうかすると底翳ではないかと思はれる程目の飛び出た工藤がかう訊いた。工藤は一番垢じみた着物を着てゐた。工藤は森川先生のところに寄食してゐる書生だつた。

「そりやあ遠いとも。」と、南が答へた。

「一つの餅を二つにちぎらうとすると、まん中のところが細くつながつてゐて中々切れないだらう。

パナマは北亞米利加と南亞米利加との間の丁度さういふ細いところにあるのだ。中央亞米利加の新共和國でね。首府のあるところは北緯八度五十七分西經七十九度三十二分だ。」

「そこに今度運河が出來るんですね。」

「さうさ。カリビアン・シイとパシフィック・オオシャンとの間に運河が出來るんだ。尤も、四分の一ぐらゐは既に出來てゐるんだが、いろいろ面倒があるところでね。こんだ合衆國との協議が纏つたんで、合衆國がやることになつたんだ。」ぼんやりしてゐるやうで、何事にも詳しい南は、口頭試驗にでも答へるやうにかう言ふと、天岡の方を振り向いて「ねえさうだねえ。天岡君。」

と、今度は甘えるやうに言つた。

「さうだ。君はなんでもよく知つてる人だね。あすこの運河はすつかり出來上がると、五十四マイルある筈だ。今までに出來てゐるのは十二マイルだけだ。」

天岡は眞面目な顏をして、かう言つた。

「名前は視察だが、天岡君は實際その爲事にたつさはるんださうだ。日本人で亞米利加の政府に雇はれて行くんだから豪いよ。」

今まで默つてゐた山田が羨ましさうに言つた。

「なあに、靑服を着に行くのさ。勞働だよ。併し、僕は神の思召は何處にでもあるものだと思つてゐる

るだらう、君んで行くつもりだ。僕だつて、もつと精神的な仕事がしたいんだが、神様は未だ適當に僕の能力を使つて下さるのだらうから、僕は少しも不平はないよ。」

大岡はかう言つた。

「不平なんて勿體ないよ。こんな尊い仕事が外にあるもんか。目に見えて人類の幸福になることだ。日本にゐて詰まらない論議に日を暮らしてゐるより、どんなに立派な仕事だか分かりやしない。」

小肥りに肥つた柴田が、持顔を赤くして言つた。

「だから、なほ僕は大岡君に對して氣の毒に思ふんだよ。」

と、もう一度寺山は同じことを言つた。

「いや、君、それは寺山君　違ふぜ。」

と、今まで一言も口を利かずに、黙つてみんなの言ふことを聞いてゐた深田が言つた。深田は顔の大きい、色の白い、目の可愛い、それでゐて口の締まり方に底力と決斷と意識との見える青年だつた。

「路加傳の十四章の十五節にある文句を僕は覺えてゐる――『神の國に食する者は福なり。』」

深田はかう言つて、目をつむつた。そして、暫くぢつとしてゐてから又、

「神の國に食する者は福なり。」

と、もう一度繰り返して言つた。

「食べる物は何でも好いんだ。飲むものは何んでも好いんだ。ただ神の國に飲食すること——そこに吾々の幸福があるんだ。吾々は今神の御前で天岡君の送別會を開いてゐるんだ。シウマイで結構だ。シウマイでなくても好い。堅パンでも好い。鹽煎餅でも好い。茶がなくても好い。鹽水を飲んでも好い。しかも、この美しい自然を見給へ。あの空の色を。この海の色を。こんな立派な食堂が何處にあらう。こんな莊嚴な宴會が何處にあらう。僕は決して天岡君に氣の毒だとは思はない。天岡君はきつと喜んでゐて呉れるに違ひないと思ふ……」

と、深田は演壇にでも立つたやうな口調で、興奮に頰を染めながら言つた。

「さうだとも。僕はこんな難有い會はないと思つてゐる。何の飾りもない。少しの外交的な附け加へもない。友情その者の——神に於ける友情その者の現れだ。僕は今日までに隨分澤山な送別會に臨んで來た。學校の教授連がして呉れたのもあつた。同じ科の連中がやつて呉れたのもあつた。建築學會が開いて呉れたのもあつた。御馳走も隨分あつた。餘興もいろいろあつた。併し、その多くは、『お義理』の會だつた。世間的な交際だけの催しだつた。けふのやうな至純な會は始めてだ。僕は感謝してゐる。心から感謝してゐる。」

感傷的な天岡は、かう言ひながら、目に涙を浮べた。舟の中が寂とした。

「おれは馬鹿だ。」

暫くすると、突然かう叫つた者がある。さつきから頻に設備の足りないのを嘆じてゐた寺山だ。

「おれは俗人だ。」

寺山は拳固で自分の頭を一つコツンと打つた。

「僕だつて……僕だつて、今深田君が言つた位なことは分かつてゐるんだ。分かつてゐながら、自信が持てないで、何か言ひわけらしいことを言はなければ氣が濟まないのだ。それが僕の俗人たる所以だ。腹の中ではこれで好いと思ひながら、それがはつきり口に出して言へないんだ。言ひわけなら言ひわけで、ほんとに腹から出た言ひわけなら好い。僕がさつき言つた言ひわけは臆病の言ひわけだ、道徳的の安心を得ようとする言ひわけではない。心理的の安心を得ようとする言ひわけだ。商人の言ひわけだ。奴隷の言ひわけだ。僕は恥ぢる……諸君の前に恥ぢる……神の前に恥ぢる。」

寺山は泣き聲を出して、かう言ひながら、悲しさうな目つきをして、南の妹の方を見た。

「いや、君だけぢやない。僕にだつてさういふ卑しい世俗的な心持はある。だから、僕もさつきあんなことを言つたのだ。僕は駄目だ。まだ駄目だ。」

さつき寺山の詞の尾について、同じやうなことを言つた小寺が、神經質に目鏡をいぢりながら言つた。

「まあ、好いさ、好いさ。そんなに窮屈に考へなくつたつて。」

南が明かるく笑ひながら言ふと、柴田もそれを追ひかけるやうに口を開いた。

「さうだとも。寺田君や小寺君だつて、何もそんなに悲觀する必要はないし、深田君だつて寺山君や小寺君を何もそんなに責めることはないと思ふよ。御馳走がないと言つて悲しむのも正直な友情なら、これ程の御馳走がないと言つて自慢するのも正直な友情だよ。何よりいけないのは議論だよ。議論は送別會の御馳走にはならないよ。」

かう言ふと、急にみんなが聲を上げて笑つた。生眞面目な深田までが、相好を崩して、

「いや、失敬、失敬。どうも僕は直ぐ議論が出て來て困るよ。實驗化學を專攻しながら、どうして僕はかう抽象的なんだらう。性格だね。親父から遺傳した性格だね。」

と言つた。

「誰も惡い方はないわ。みんな正直な人ばかりだわ。でも、正直な人が今の世の中ではみんな苦しむんだわね。」

南の妹がアルトの美しい聲でかう言ふと、舟の中は一層和らいだ。中にも、寺山は救はれたやうに空を仰いで、ほつと大きな息をついた。

「絹さん、何か歌はないか。」

兄の關係で、子供の時からつき合つてゐるので、一番遠慮のない柴田が、南の妹に向つてかう言

つた。
「何か好いてせう。」
絹子は恥にかみもせずに、直ぐとかう言つた。白い顔を惜しげもなく夕日に照らしながら。
「『世々の磐』が好いな。」
と、柴田が言つた。
「さうだ。『世々の磐』が好い。」
と、みんなも聲を合せて言つた。
この連中は基督教を信じながら、讃美歌といふものを知らなかつた。それは師と仰ぐ森川先生があらゆる教會の儀式を無視して、洗禮といふものも授けなければ、讃美歌といふものも練習させないからであつた。それ故、森川先生の愛誦する『世々の磐』を自分々々の流儀で國畫風に歌ふことの外、この人達にとつてのヒムはなかつた。その『世々の磐』も、普通の讃美歌集では『千世へし磐よ』とか『われたる磐や』とかなつてゐるのを、森川先生が自分の好みで譯し直したものであつた。
「世々の磐よ我を圍めよ。
我を汝の闇に匿せよ……」
絹子はあまり高い調子でなく、濁りのない聲で、極めて自然に、囁くやうに、話でもするやうに歌

ひ出した。

落日は斷崖に半分隱れた。空がますます赤くなつた。海がますます赤くなつた。

「……贖ふ二倍の代となりて

貴と科より我を救へよ。」

第一節が終つた。絹子は一息ついて、直ぐと第二節にかかつた。

「我の手の業如何に多きも、

法律の要求に應ふ能はず、

我の熱心休む時なきも、

我の涙は流れ盡きずも、

我の罪をば贖ふ能はず。

君、若し我を救ひ給はずば。」

柴田は懷しげに微笑しながら、絹子の口元の美しく動くのを見てゐた。深田は居ずまひを直して、兩手を膝について、ぢつと俯向きながら耳を澄ましてゐた。小寺と天岡はお互の顏をまともに見合ひながら、ぢつと動かずにゐた。寺田は少し首を傾げて、絹子の聲を聞くよりは、絹子の顏を惚れ惚れと眺めてゐた。山田は刻々に姿を沒して行く落日を見詰めながら、歌のリズムを追ふやうに、肩を絕

上下動かした。工藤は盲のやうな目を見張つて、ぢつと水の中を見詰めてゐた。南は平氣でシウマイを食べてゐた。

「……我この生氣を引き取らんとする時、
我の瞼の閉ぢんとする時、
我見ぬ世に遊らんとする時、
審判の寶座に汝が見る時、
世々の磐よ我を圍みて、
我を汝の側に置せよ。」

最後の一言が終る時分には、誰も彼もみんな首を垂れてゐた。それは極めて自然な「默禱」の姿だつた。平氣でシウマイを食べてゐた南でさへ、いつの間にか兩手で頭を抱へてゐた。

この連中に儀式的な「祈禱」といふものはなかつた。時もなかつた。場所もなかつた。いつ何處で誰から「祈禱」が始まるか分からないのだ。青春の快活さで笑ひ興じてゐる内に、突然誰かの冗談のやうに言つた一言から「祈禱」の始まることがあつた。歌をうたひながら田舍道を散歩してゐる内に、誰も名も知れぬ道端の小さな花の美しさに打たれる――その途端に「祈禱」の始まることがあつた。眩しい日光の降りそそぐ街路に、ほろりほろり汗をこぼしながら、山のやうに荷を積んだ車を喘ぎ喘

ぎ引いてゐる車力を見て、一齊に帽子を脱いで「默禱」を捧げたこともあつた……餘興のつもりで始めた絹子の『世々の磐』は期せずして、いつものこの「祈禱」的雰圍氣を作つたのだつた。

「あ、お母さんが……」

靜寂を破つて、突然工藤が金切聲を出した。目を覺まされたやうに、みんなが驚いて首を上げると、工藤は兩手を舟ばたにかけて、ぢつと海の中を見詰めてゐた。

深田は逸早く後から工藤の袴の腰を捉まへた。柴田と南は左右から工藤の兩腕を押さへた。

「あ、あ、お母さん……」

と、恐れるやうに聲を呑みながら、工藤は異常に飛び出た目を更に大きくしながら、がたがたと身を震はせた。

「お母さんぢやない。魚だ。魚が光つてゐるんだ。」

柴田が叱るやうに、かう言つた。

「『死にたる者にその死にし者を葬らせよ。』」

深田は嚴かな調子で、警告するやうに言つた。

「しつかりし給へ。工藤君。神のことを思ひ給へ。基督のことを思ひ給へ。」

天岡は慈母のやうな優しい口調で言つた。

狂的な發作的な動作は直ぐと歇んだ。工藤は水から顔を上げると、二三度頭を左右に振つた。そして、

「難有う。もう大丈夫です。放して下さい。」

と、落ちついた聲で言つた。三人は手を放した。

工藤のかうした發作は、その日が始めてではなかつた。この人達は屢それに出會つてゐるので、特別に驚きはしなかつた。唯、いつもさうした場合にとる處置を、その日もとつただけだつた。

併し、覗いたところが海だけに、若し飛び込みはしまいかといふ恐怖が誰にもあつた。それ故、工藤が落ちついてからも、みんなはいつもと違つて、直ぐ談笑へははひれなかつた。ほつとして、顔を見合せて、暫くみんなぼつとしてゐた。工藤は暫く空を見たり断崖を見たり海岸の方を見たりしてゐたが、やがて突然、老人のやうに嗄れた聲で歌ひ出した。

「祖々の罪咎を贖ゆよ

　我を汝の闇に匿せよ……」

工藤は不具な運命を持つた青年だつた。

彼は父をも母をも知らなかつた。彼は親なしにこの世に生れて来たやうなものであつた。彼は生れてから二十一年になる今日まで、慈愛といふものをまるで知らずに来た。彼は「人間の子」としての

惡みを一日も味はばずに來た。道端に生み落されて、親犬に逃げられてしまつた犬の子——それが彼の運命だつた。

工藤の父は彼が生れる五日前に死んだ。青森で小學校の敎師をしてゐたが、兒童敎育に關して常に抱いてゐた自由な思想が、校長のそれとも同僚のそれとも合はなかつた。言語に絕した壓迫に壓迫を重ねられて、終に憤死してしまつたのだ。

工藤の母はその時まだ十七だつた。母の里は工藤の父に對して少しの同情をも持つてゐなかつた。一厘一錢の遺產もなかつたので、生れたばかりの子供を抱いて里へ歸つた工藤の母は、年の若いといふのを言ひ立てに、毎日のやうに再婚を强ひられた。

併し、工藤の母は全心を傾けて、死んだ夫を信じ且愛してゐた。そして、夫の靈肉の一部分である子供といふものの存在する限り、どんなことがあつても「工藤」の名は捨てられないと思つた。

工藤の母は五日も六日も休みなしに再婚を勸められた。それでも、どうしても承知しなかつた。强制が始まつた。里では勝手に緣談をきめて、勝手に婚禮の日どりまできめてしまつた。その當夜、工藤の母は夫が用ひた短刀で見事に喉を切つてしまつたのだ。

あとに遺された工藤の運命は、想像しないでも分かつてゐる。彼は不用な道具のやうに、人手から人手を渡つて歩いた——

先の僅かな金をつけられて、弘前在の或百姓に貰はれた。七つになると、弘前の町の或鍛冶屋へ賣られた。彼は小さな體をして、兩端が地面へ引きずる程な長い鐵のボオトを擔がせられたり、自分の體と同じ位な大きさの鞴を押させられたりした。冬も汚れたシャツ一枚に、汚れた股引一着だつた。夏は猿股一つだつた。手から足から顔まで眞つ黒な儘、寢たり起きたりした。併し、彼の體は弱かつた。冬になると咳ばかりした。夏になると眩暈でよく倒れた。

八つの冬に活版屋へ賣られた。ここにはそれでも四年ゐた。初めは活字を運んだり、紙を揃へたりするだけだつたが、やがて植字の手傳ひをするやうになつた。彼が少しでも文字を覺えたのは、そのお蔭だつた。段々文章といふものに興味を覺えるやうになつた。彼は十か十一で、もう土地の雜誌に投書などをし始めた。

併し、過激な勞働は、やはり彼には堪へられなかつた。そこで、この活版所からも追ひ出されてしまつた。それからの彼の生活は目まぐるしいまでに轉變した。米屋の小僧にもなつた。漁師の手傳ひもした。あけび細工もやつた。ステエションで林檎も賣つた。さうして、最後に又或活版所の植字工になつた。

彼は十五六になるまで、自分が何者の子で、どうしてこの世に生れて來たのだか、まるで知らなかつた。世間に親といふものがあり、子といふものがあり、親子の關係といふものがあるのを始めて知

つた時、彼は自分の境遇がまるで理解出來なかつた。

孤獨とか寂寥とかいふ程度のものではなかつた。社會にも、人間にも、彼にはまるで對者といふものがなかつた。彼は何を對照にして「自分」を考へて好いか分からなかつた。

彼にも親があつたといふことを彼が知るまでの懊惱――或小學校へ刷物を屆けに行つた時、そこの年とつた小使の口から始めてそれを聞かされた時の驚き――驚きはやがて悲しみとなり、悲しみはやがて疑ひとなり、疑ひはやがて憤りとなつた。

工藤は活字を拾ひながら、「親」といふ字に出會ふとそれを握りしめた。「子」といふ字にぶつかると、それをとつて床へ投げつけた。

一緒に働いてゐる若い者の一人が、一言でも自分の親の話をすると、齒をむき出して怒つた。面白がつて、わざとそれを言ひ續けると、しまひには聲を上げて泣き出した。彼の感情の表現には烈しい野性があつた。怒れば嚙みつきさうだつたし、泣けば吠えるやうだつた。

爲事をしてゐる最中に、突然手を留守にして、ぢつと自分の前を見詰めながら、恐い顏をして何か考へてゐるやうなことも度々あつた。さういふ場合には、もう誰が何を言つても、眉一つ動かさなかつた。爲事が遲れやうが、主人に叱られやうが、一向無關心だつた。死んだやうにぢつとしてゐた。擬でも動かなかつた。唯顏の色が憂鬱に、憂鬱になつて行つた。

かうした人間をいつまでも活版所が雇つて置く筈がなかつた。工藤は忽ち又そこを追はれた。

それから或小さな新聞社へはひつた。はじめは販賣部で配達をしてゐたが、その内に文才を認められて、編輯の方へはひることになつた。彼は生れて始めて人間並の着物を着るやうになつた。始めて袴といふものをはいた時は、流石に笑ひ顔をした。

併し、彼の疑ひと彼の憤りは決して彼を離れなかつた。田舍の町の小さな出來事一つを書いても、彼の文章には必ず「社會」に對する憤恨があつた。

仕事、爲事は樂だつた。今までして來たどの爲事よりも樂だつた。小形な四ページの新聞に一段か二段書けば一日の用事は濟んだ。それで、社に泊めて貰つて、月給は九圓貰つた。

生活に餘裕がつくに從つて、物を考へる時間が多くなつて來た。物を考へる時間が多くなるに從つて彼の思想はますます曲がつた方へ、暗い方へ深くはひつて行つた。

彼は凡そ不平家とか悲憤家とか言はれてゐる人の文章を片つぱしから讀んだ。昔のものでも、今のものでも構はず讀んだ。その不平が社會の組織に對するものでも、國家の政治に對するものでも、夫婦の關係に對するものでも、そんなことは構はなかつた。彼は唯悲憤の文字慷慨の文章を、嗅ぎ求め、貪り讀つた。

その内に、彼はどうした動機からか、高山樗牛の文章を愛讀する樣になつた。吾人は須く現代を超

越すべし。」中でもこの詞が最も強く彼を動かした。彼は現代を「現世」の意味にとつた。現世は餘りに汚れてゐる。現世は餘りに無慈悲だ。現世は餘りに冷寒だ。吾人は一刻もそこで息をすることは出來ない。……彼は「超越」を「飛躍」の意味にとつた。吾人は一刻も足を現世の上に措くことは出來ない。飛躍するのだ。飛躍するのだ。飛躍して地上から足を放すのだ……

工藤はこの思想を詞通りに實行した。彼は往來を歩く時、灼熱した鐵の板の上をでも歩くやうに、飛んで歩いた。どんな場合でも、決して普通の人が歩くやうに靜に足を踏みしめては歩かなかつた。心の明かるい時は明かるい時で、笑ひながら飛んで歩いた。心の暗い時は暗い時で、泣き叫びながら飛んで歩いた。

「吾人は須く現代を超越せざるべからず。」

これは工藤の呪文でもあり、護符でもあり、祈禱でもあつた。彼は悲しい時、苦しい時、痛い時、辛い時、必ずこの一句を繰り返し繰り返し稱へた。

その次ぎに工藤の接した書物が森川先生のそれだつた。森川先生もその當時は不平家罵世家悲憤家の一人だつた。併し森川先生は高山樗牛よりは詩人だつた。詞の飾りや文章の綾はなかつたが、本當の詩人の魂を持つてゐた。森川先生は口汚なく社會の學者や宗教家や政治家を罵つたが、思想が一旦宇宙自然の事に及ぶと、小さな星一つにも、花一輪にも、魚一疋にも、到底常人の採り得ない複雜な

美と深い神の啓示とを見出した。彼は自然科學に造詣が深かつた。殊に天文學に、植物學に、水産學に詳しかつた。併し、彼の自然を見る目は決して科學者のそれではなかつた。彼はワァヅワアスのやうに見た。ブライアントのやうに見た。科學者が見るところよりは、もつと深い所を見た。後は飽くまでも詩人だつた。

そこが工藤の氣に入つた。工藤は森川先生の文章を讀んで全く新しい人生に生れたやうな氣がした。これまで讀んだ慷慨悲憤の文字は、どれもこれも唯慷慨悲憤にのみ終るものだつた。讀んでゐる間は面白くても、讀んで了ふと、もうあとにはなんにも殘るものがなかつた。ところが、森川先生の文章は芳香と靈語に充ちてゐながら、讀んでしまつたあとにも、きつと何かしつかり殘るものがあつた。

森川先生はその頃から基督教の信仰を持つてゐた。今の社會に對しては殆ど絶望に近い憎惡を感じながらも、來世の天堂に對しては女のやうに優しい憧憬と希望とを持つてゐた。工藤が始めて手にした書物は、「闇黒道の種々相を述べて、その一つ一つの場合に、暗黒から光明へ救ひ出された先生自身の體驗を抒情詩のやうに書いたものであつたが、「愛する者の逝きし夜」といふ最初の一章で、もう工藤は夢中になつてしまつた。

工藤はこの書物を讀み終へると、又先生の他の書物を探して讀んだ。それが濟むと、また他のを見つけて來て讀んだ。かうして、その當時出てゐた森川先生の著述は大抵讀んでしまつた。

樗牛の場合のやうに、彼は一冊讀み終へると、屹度その中から自分の氣に入つた文句を探し出して、夫を暗誦した。そして、夫を毎日の生活の糧ともし、油ともし、鞭ともした。

併し、工藤が森川先生の著書から暗記した文句は、不思議と、どれもこれも先生自身の詞ではなかつた――

「美麗なる造花は我等がこれを得ん爲に造られしにあらずして、これを捨てんが爲に造られしなり。否、人若しこれを得んと欲せば、先づこれを捨てざるべからず。」

これは馬太傳にある基督の詞を、先生が意譯したものだつた。

「道義肝を貫き、忠義骨髓に塡ち、直ちに須く死生の間に談笑すべし。」

これは言ふまでもなく、蘇軾の詞である。

「單數も零にて除すれば無限なり。」

これはカアライルの言つたことである。

まだ、その他にも澤山あつた。工藤は毎日のやうに、毎時間のやうに、これらの詞を高唱して、ともすれば襲つて來る憂欝な思想を拂ひのけた。

高山樗牛は忽ち影を薄くしてしまつた。「我が袖の記」も「瀧口入道」も、もう今では見るだけで食べられない菓子のやうに感ぜられて來た。併し、「吾人は須く現代を超越すべし」だけは、どうしても

工藤の頭にこびりついてゐて離れなかつた。彼は相變らず往來を狂人のやうに跳躍して歩いた。

だんだん森川先生の書翰を讀んでゐる内に、工藤は先生自身の風貌が慕はしくなつて來た。どうかして、先生の側に行つて、先生の爲事の手助けがしたいと思ふやうになつた。必ずしも筆を持つて手助けをしないでも好い。雑巾を掴んででも好い、箒を持つてでも好い、兎に角先生の側で働いて、少しでも先生の勞苦を慰めたいと思つた。

彼は或晩、夜通しかかつて、長い長い手紙を書いた。自分の生れ落ちた時からの經歴――書物の濫讀――樗牛の發見――それから森川先生の崇拜となるまでを事細に叙した。そして、最後に自分の目下の希望を熱烈な文字で書いた。

先生からは直ぐに返事が來た。返事は一枚の半紙に太い筆で簡單に書いてあつた。兎に角東京まで出て來い。その上で何とか相談するからと言ふのだ。工藤は躍り上つて喜んだ。いつも往來で飛ぶよりはもつと高く、實際家の中で飛び上がつたのだ。

新聞社の同僚は驚いた。工藤に奇癖のあることは誰も知つてゐたが、その日の工藤は特別に變つてゐたからだ。

「おい、おい、どうした、工藤。」

同僚の一人が訊いた。

「おれは嬉しいんだ。」

工藤は飛び出た目で大井を見ながら答へた。

「何がそんなに嬉しいんだ。こないだ出した懸賞小説でも當つたのか。」

「そんな低劣なことぢやない……おれは東京へ行くんだ。」

「東京へ。何しに。」

「書生になりに行くんだ。」

「書生に？ 馬鹿々しい。やつぱりそれぢやあ低劣ぢやないか。」

「馬鹿言へ。ただの家へ書生に行くのぢやないぞ。」

「大臣か華族のところへでも行くのか。」

「大臣や華族がなんだ。おれは預言者のところへ書生に行くんだ。」

工藤は昂然として、かう言ひ放つと、火のついたやうに編輯室を飛び出した。さうして、社長のところへ行つて、直ぐに辭職を申し出た。頭の禿げた土着の社長は、工藤の行動を始終氣味惡く思つてゐたので、直ぐとそれを許して與れた。そして、その日までの給料に加へて、手當を五圓與れた。

工藤にその晩直ぐ弘前を立つた。荷物は小さな行李に收めた十五六冊の書物の外なんにもなかつた。袴も羽織も綻びた儘だつた。帽子もなかつた。

東京までの汽車は随分長かつた。今日の時間の殆ど倍はかかつた。それでも、工藤は少しも飽きなかつた。凡てが皆珍しい感激に充ちてゐたからだ。

第一汽車といふものが工藤にとつては始めてだつた。堅い木の椅子に腰をかけて、下からゴトンゴトンと尻を突かれながら、すうつすうつと體を前の方へ運ばれる、その感覺だけでも彼には珍しかつた。闇から闇の先まで響いて通るやうな汽笛の音――トトト、トトトと或るリズムを持つて煙を吐く音――絶えず轟々と響きながら、その中に不思議に調和のある高低と節奏とを持つた車輪の音――總てが工藤にとつては嘗て聞いたことのない微妙な音樂だつた。

工藤は殆ど一晩中寝ずに汽車の奏するシムフオニイを聞いてゐた。夜が明けると、沿道の自然が又彼を喜ばせた。景色の好い淺蟲附近は疾うに夜中に過ぎてしまつたので、窓の外には單調無味な東北の山野があるばかりだつた。それでも生れて始めて旅をする工藤には、それが珍しかつた。それが嬉しかつた。

汽車が東京へ近くなつた時、もう一度夜が來た。

工藤は赤羽で乘り換へて、新宿で又乘り換へて、やつとのことで千駄ヶ谷へ着いた。彼はこの乘換の多いといふことだけでも、東京といふところは複雑な面倒な厄介なところだと思つた。

もう夜が大分更けてゐたが、櫟林の中にある森川先生の家は直ぐと分かつた。玄關の直ぐ奥の部屋

で、先生は洋服を着て、ランプの下に半紙をひろげて、日本の筆で何か原稿らしいものを書いてゐた。

「工藤君か。上がり給へ。」

と、先生は自身で書斎から聲をかけた。工藤はあまりに「門戸」のないのを驚いた。暫くははひつて好いのか悪いのか分からずに立つてゐた。先生はもうここで自分を試驗するのではないかとも思つた。

「どんな事にも徹[illegible]ふ先生だ。僞の善──僞の謙遜──僞の遠慮──僞の辭退。どれもこれも先生の唾棄するところだ。尊敬を失はない程度で、先生の前に直情徑行する。これが先生の望むところに違ひない。」

工藤はさう思ふと、汚い下駄を脱いで、構はず玄關へ上がつた。そして、そこへ行李を置くと、構はずつかつか先生の書齋へはひつた。そして、デスクを隔てて椅子に腰をかけてゐる先生と向ひ合つて立つた。

「工藤君か。」

「さうです。」

「たうとうやつて來たな。」

「お手紙を頂くと、その晩直ぐ立つて來たのです。」

「ここは君が想像してゐるほど好いところではないぞ。」

「構ひません。」

「君は勞働に堪へられるか。」

「堪へられます。」

「勞働といふのは君が今までやつてゐた文筆生活のことではないぞ。水を汲んだり湯を沸かしたりすることだぞ。」

「どんなことでもやります。」

會話はこれきりだつた。

森川先生の顔は、笠の深いランプで下半部だけが照らされてゐた。そこには濃い太い髭と堅く閉された唇とがあつた。上半部の薄暗い翳の中で、二つの目だけが炯炯と光つた。その目がきつと工藤の顔にそそがれた。

工藤は顫へてはならないと思つた。恐れてはならないと思つた。思はず「吾人は須く現代を超越すべし」と心の中で稱へながら、まつ直ぐに顔を立てて、先生の目の光をまともに浴びた。

一分――二分――三分。沈默が書齋を支配した。

「宜しい。」

先生の太い、力のある聲が響いた。

「そこの玄關が明いてゐる。今蒲團を出してやるから、そこで寢給へ。」

工藤は思はずいつもの癖で跳躍しようとした。併し、氣がついて、そつと興奮を押さへつけた……

それから、もう二年になる。

工藤は森川先生の家に寄食するやうになつてから、餘程快活な青年になつた。笑ひ顏も人に見せた。歌もうたつた。併し、往來を飛んで歩く癖だけはやまなかつた。

唯一つ悪いことが始まつた。それは會つたこともない母の幻影を時々見ることだつた。これは故郷にゐる間は決してないことだつた。森川先生の家へ來てから始めて經驗したことだつた。

時も場所もなかつた。或は朝汲む井戸の水の中から、或は夕方掃く櫟の林の中から、或は冴え渡る月の中から、突然亡き母が顏を出して、誘ふやうに工藤の顏をぢつと見つめるのだ……

工藤は南の妹を愛してゐた。

彼は絹子を通して、生れて始めて「女」の優しさといふものを知つた。森川先生の奧さんにも随分親切にされたが、その親切は先生の親切の補足であるやうな氣がした。それ故、奧さんの親切を感謝しないではなかつたが、それを特別に「女」の優しさとして受けとることは出來なかつた。

森川先生に女の弟子は少なかつた。しかも、その少しの弟子が始終變つた。工藤が先生のところへ

來る前からの女の弟子で、いまだに嫁らないのは絹子一人だつた。しかも、先生のところへ出はひりをする女で、工藤を氣味惡がらないものは一人もなかつた。多くは工藤の顏を見ると顏をそむけた。工藤が詞をかけても、ろくに返事をする女はなかつた。中には先生の前だと、ひどく好意を見せて、蔭へ廻ると毒氣の獸か何ぞのやうに扱ふ女があつた。

さういふ中で、影日向なく――といふよりは、先生の前では寧ろさうした態度を控へめにして、蔭へ廻つていつも優しくして吳れるのが絹子だつた。

絹子は恐れもせずに工藤の顏をいつも眞面に見た。工藤の言ふことを一言一言熱心に聞いて吳れた。そして、きつと何か優しい慰めの詞をかけて吳れた。袴や着物の綻びを見つければ、きつと先生の奥さんに針を借りて縫つて吳れた。讀みたい本があれば、貸して吳れた。

工藤は絹子を母の再來だと信じた。千駄ヶ谷へ來て始めて見た母の幻影は、それを告げに來たのではないかと思つた。それにしては、絹子と今日のやうに親しくしてゐるのに、やつぱり母の幻影が見えるのは不思議だと思つた。ことに依ると、絹子は自分の妻になるべき人で、母がそれを祝してゐるのではないかと思つた……

工藤の頭の中では、顏も知らぬ亡き母と今見る母の幻影と實在の絹子とが絶えず影を合せたり離らしたりした。三つのものが一つになつたり、前の二つが一つになつて、後の一つに對したり、後の二

つが一つになつて、前の一つに對したりした。

工藤は燃えるやうな熱情で絹子を愛した。併し、それが戀愛であるかどうかは工藤自身にも分からなかつた。戀愛の樣に感じ出すと、きつとその感じの後から母が顏を出した。母に對する愛を感じてゐると、母の面影が消えて行つて、實在の絹子だけが殘つた。

それ故、工藤は自分の愛をどう表現して好いか分からなかつた。彼は絹子の前へ出ると、急に躍り上がつたり、いきなり大きな聲を出したりした。柱があれば、柱にかじりついた。格子戶があれば格子戶にしがみついた。それは、何處かへ力を出してしまはなければ、熱情の發散しやうがないといふ風だつた。

絹子と話をしてゐる内に、知らずに冷えてゐる茶を十何杯か飲むでしまつて、あとで腹が鳴つて困つたことがあつた。

絹子と往來で會つて、立ち話をしてゐる内に、手に持つてゐた雜誌を一頁宛、初めから終まで[illegible]に破いてしまつたことがあつた。

絹子に綻びを縫つて貰つてゐる間に、自分もそこにあつた針の一本をとつて、自分の掌をちくちく突つついてゐる内に、たうとうほんとに血を出してしまつて、その傷の始末まで絹子にさせてしまつたことがあつた。

絹子の「世々の誓」を聞いて、海の中に母の幻影を見るぐらゐなことは、工藤にとつては珍しいことでも恐ろしいことでもなかつた……

工藤は自分も「世々の誓」を一くさり歌ふと、けろりとした顔で、桃色になつた空を見上げた。

工藤の絹子に對する心持を知つてゐて、工藤の狂態を笑ふことの出來る者は、この舟の内に誰もゐなかつた。

この舟の中にゐる者は、みんな絹子を愛してゐた——それぞれ違つた意味で、みんな絹子を愛してゐた。南は妹として絹子を愛してゐた。彼は姉が一人に、絹子の下にもう一人妹があつた。併し、彼は自分の同胞の誰よりも絹子を愛してゐた。柴田は兄の樣な心で絹子を愛してゐた。音樂の道にはひらない前から、彼は絹子の指導者であり相談相手であつた。南は子供のやうな暢氣なところのある男で、絹子の事務的な相談相手にはならなかつた。それ故、女學校をきめるとか、語學の教師を探すとかいつた相談は、いつも柴田にするのであつた……

天岡と深田と小寺と山田と寺山との、絹子に對する愛はいづれも戀愛だつた。併し、それらは形に於いても、度においても、内容に於いても、おのおのの性格から來る相違があつた。中には、戀愛であれながら、自分では戀愛ではないと思つてゐる者さへあつた。

先づ、深田がその一人だつた。深田はこの連中の中で一番生眞面目な男だつた。冗談口一つ利かな

かつた。みんなが興に乘つて歌をうたふやうな時でも、彼は大抵口を閉ぢてゐた。人間の生活には少しの遊びも少しの戯れもあつてはならないといふのが彼の人生觀だつた。彼は出來るだけ自分の生活を純に仕樣とした。可なりな資産家の子であつたが、裝などもいつも質素で、髮なども頭が重くて堪らなくなるまでは伸びるに任せてゐた。勿論、學校では忠實に學課を學んだ。遲刻も早退もした事がなかつた。學校の歸りにも、寄り道をするやうなことは決してなかつた。家へ歸つてから讀む本も宗教に關するものか人生問題に關するものに限られてゐた。最も多く新約聖書を讀んだ。殊に、その使徒行傳を讀んで、それを自分の日常生活の誡にした。中でも、使徒保羅の行や詞が、彼には同感された。それに次いで多く讀んだのは森川先生の著書だつた。先生の著書の中でも、宗教的に純なものをのみ讀んだ。少しでも詩的な詞があると、それが彼には躓きの石になつた。凡そ文學的な書物、世俗的な書物には指をだに觸れなかつた。小說は元より、詩集さへ手にしなかつた。雜誌も森川先生の主宰してゐるものの外は讀まなかつた。新聞は朝讀むと心が汚れると言つて、晩にならなければ讀まなかつた。晩讀むことも一月に五日か六日だつた。

　この連中には東京生れの青年が多かつた。それ故、深田のやうな味のない生活は誰にも堪へられなかつた。それ故、深田は尊敬すべき「不可能」の表示として彼等の目に映じた。深田が畏敬しない者は一人もなかつた。南の如きは、深田の前へ出ると、「一種の壓迫をさへ感ずる」と言つた。

學才や識見に於いては、深田は仲間の誰にも劣つてゐた。柴田の的確や南の剽逸や山田の詩味や寺山の敏捷や小寺の透徹は、深田にはなかつた。併し、彼の單純で根強い信仰と質朴で聊も衒氣のない生活とは、常に連中の崇高な目標となつた。彼はおのづからこの仲間の中心ともなり支柱ともなつた。

それでゐて、深田自身は決して自分を矜らなかつた。彼は常住坐臥に自分の罪人であることを感じてやまなかつた。その苦悶は決して抽象から來るものではなかつた。彼は必ず具體的にその實證を見た。彼は彼自身が罪人である證據を、少くとも一日にきつと一度は自分の行ひの内に見出だした。

深田は南の家で始めて絹子を見た時から、心に或束縛を感じ始めた。併し、その束縛を深田は戀ではないと思つた。戀であつてはならないと思つた。若し、それが戀であるなら、神の意志にかなふ――神の命ずる戀でなければならないと思つた。併し、それが深田には確でなかつた。確でないどころではなかつた。何事にも罪を感ずる深田は、この戀をも一圖に汚れたものだと思つてしまつた。それ故、彼はどうかしてそれに打ち克たうとした。それを壓し殺してしまはうとした。彼は毎日その爲に祈つた――絹子は深田のこの心持をまるで知らなかつた。

天岡も絹子を戀してゐた。天岡の戀は深田の戀ほど不自然ではなかつた。彼は自分の戀を決して汚れたものだとは思はなかつた。それ故、彼はそれを培ひこそすれ、決して摘みとらうとはしなかつた。唯彼の何事にも愼ましい性格が、それをあらはにする事を許さなかつた。彼は誰にも見られない隱れ

た圍ひの中で戀の花に水を注いだ。そして、それが實となる時を氣長に待つた。

バナマ行はこの戀について一時彼を不安にした。併し、この悲しみは肉體の絹子が暫く自分を離れることだけだと思つた。心の絹子は幾千哩を隔てようとも、必ず自分の側にゐる筈だと思つた。自分はこの地に屬いた悲しみに克たなければならないと思つた。彼は一度もまだ自分の意志をはつきり絹子に傳へたことはなかつたが、詞に出さないでも絹子は既にそれを理解して吳れてゐると信じてゐた。彼は自分の戀の必ず眞面目な結婚に終ることを信じてゐた。バナマへ行くことになつたのも、神が作つて吳れたその爲の第一階段ではないかといふ風に考へた。學校は出たが、自分はまだ社會的に少しの地歩も經驗も得てゐない――一度にそれを作つて吳れるのが、今度の旅行だ。バナマから歸つた自分は、直ぐさま絹子の夫として絹子の前に立つことを許されるだらう――天岡はさう思つて、二三日前にその意味のことを絹子へ書いて送つた。併し、彼の文章はあまりに謙遜で、あまりに力が弱かつた。それは到底戀の手紙として受けとることの出來ない程純潔なものだつた――絹子は唯信仰の兄としての愛を感じただけだつた――暫くの別離に、いつもよりは稍高調せられた「兄弟」の愛を感じただけだつた。

小寺は絹子を戀してゐながら、自分では全くそれを意識せずにゐた。彼は父の遺した少からぬ財產を持つて、祖母と唯二人、淺草の聖天下に住んでゐた。母ももう死んでしまつてゐなかつた。高等學

校の二年時分に、祖母が何處からか若い娘を連れて來た。そして、「これはお母さんのきめて置いたお前の言ひなづけだ。」と言つた。小寺は非常な勉強家で、學問の外のことは考へなかつた。その時も、唯「さうですか。」と言つたきりで、祖母の思ふやうにさせて置いた。それは下町風のおとなしい可愛い娘だつた。祖母にもまめまめしく仕へた。小寺は家族にその娘を加へたことを少しも不愉快には思はなかつた。併し、その娘が來た爲に、自分の生活が前より特別に幸福になつたとは感じなかつた。彼は娘を嫌ひもしなかつたが、格別愛しもしなかつた。彼の愛はやはり學問にのみ燃えた。

　さうして、二年が過ぎた。彼が始めて南の妹を見たのは、大學の二年になつてからであつたが、その時から小寺の言ひなづけに對する態度が一變した。今まで少しも邪魔にならなかつた娘が、急に邪魔になり出したのである。彼は娘の顔を見ると、きつと苦い顔をした。今まで叱言一つ言はなかつた彼が、ほんの小さな過失にも娘をどなりつけた。彼は學問が手につかなかつた。そして、それはあんな者が自分の側にゐるからだと思つた。

　小寺は生れてから今までに一度も持つたことのない憎惡といふ感情をさへ、娘に對して抱くやうになつた。

　彼はその原因が何處から來たかを、まるで知らなかつた。併し、抑へれば抑へる程、その毒のやうな感情は募るばかりであつた。小寺は自分でもそれを悲しんだ。「光にをると言ひて、その兄弟を憎む

者は今なほ暗きにをるなり。」この一句をふと約翰第一書に讀んだ時は、慄然とした。彼は到底自分の力では、この不可解な邪念に克つことは出來ないと思つた。彼は血に滴る基督の十字架を通して、神に助けを乞ふより外に道はないと思つた。彼は泣きながら祈つた。だが、やつぱり駄目だつた。

その癖、絹子の前へ出ても、彼は決して戀らしいものを感ずるのではなかつた。彼は一度も絹子の顔を見ようと思つて、南の家を訪ねたことはなかつた。彼の目的は南に會ふことより外になかつた。それ故、絹子が留守でも、決して物足らなさを感ずるやうなことはなかつた。唯、不思議なのは、絹子に會つて家へ歸ると、きつと言ひなづけの娘に對する憎惡がいつもより烈しくなることだつた。

無邪氣な小寺は或日その事を率直に絹子に話すと、絹子は悲しさうに笑つて言つた――

「それぢやあ、あたしが惡魔かなんぞのやうに見えますね。」

小寺は狼狽してあやまつた――

「決してさういふわけぢやないんですよ。唯不思議だから言つただけです。あなたとなんにも關係があることぢやありません。」

「兎に角、人を憎むといふことは惡いことですね。罪もない人を憎むなんて――あなたのやうな好い人に、どうしてそんな事が出來るのでせう。きつと、あなたは惡魔につかれてゐるんです。」

「きつと、さうです。きつと、さうです。」

「それぢやあ、神樣に祈るより外にしやうはありませんわ。」

絹子は小寺と一緒に祈つた。小寺のやうな善良な人に惡魔のつく理由は分からない。併し、それも神の意志であるに相違ない。神はきつと小寺を愛するが故に、この事を小寺に課したに違ひない。併し、小寺は苦しんでゐる。十分この試練に堪へて、神の道を踏みあやまるまいとしてゐる。それ故、若し神の思召にかなふなら、一刻も早く彼を惡魔から解放してやつて呉れ――さう言つた意味の祈禱を、絹子は質朴な詞で捧げたのである。

それにも關らず、小寺はその日家へ歸ると、いきなり玄關で娘を叱りつけた。箱にはひつて外國から届いた書物が土間に置き放しにしてあるのを見て直ぐ腹を立てたのである。

「君には學問の貴さが分からないのか。書物の尊敬すべきことが分からないのか。」

「でも、おばあ樣が、藥か何かだといけないから、その儘にしてお置きと仰しやつたものですから。」

「おばあ樣に何が分かるものか。第一、おばあ樣にさういふ心配をさせるといふことが惡いのだ。君が見て、君が判斷して、君が自分で處置すれば好いのだ。」

「濟みません。」

娘は泣いてあやまつた。

小寺は書齋へはひつて、椅子に腰をかけると、急にさつきの祈りのことが思ひ出されて來た。「しま

つた。又やつたな。」と思つた。同時に胸が苦しくなつて來た。机の上へ突つ伏した。涙がほろほろ眼鏡の上へ落ちた……

それでもやつぱり、小寺は自分が絹子を戀してゐることを知らなかつた。勿論、絹子の方でも、そんなことには氣がつかなかつた……

寺山と絹子との關係を知る者は、南の外に誰もなかつた。小さい時から南と仲の好い柴田でさへもよく知らなかつた。

絹子は小さい時横濱にゐたことがあつた。寺山は横濱の生れだつた。二人は十三四の時分からもう互に知り合つてゐた。年頃になると、二人の間に戀が芽ざした。その戀はかなり熱烈なところまで進んだ。南はそれを知つてゐたが、妹を信じてゐたので、爲すまゝに任せて置いた。南の父も、南の母も、それを知つてゐて、默つてゐた。言はず語らずの内に、絹子と寺山との間には、親の許した婚約が出來たやうな形になつてしまつた。

南が森川先生のところへ通ひ始めるやうになつてから、絹子も一緒について行くやうになつた。その時分、南の兄妹は、學校の關係から、祖父や祖母の住んでゐる東京の家に住んでゐた。絹子が森川先生のところへ行くやうになつてから、寺山も千駄ヶ谷へ通ふやうになつた。併し、寺山はもうその頃或商館に勤めてゐたので、日曜の外は東京へ出て來ることが出來なかつた。

眼が開かれたといふことも一つの原因だつたには違ひないが、基督教の信仰に魂の夢を醒まされた絹子は、もう以前のやうに寺山を熱愛することが出來なくなつた。併し、寺山の顔を見ると、甘い追憶に壓倒せられて、やつぱり足元が危くなつた。それに、絹子は寺山に對して或責任を持つてゐるやうな氣もした。二人の間に子供らしく約束せられたことは兎にも角にも兄や親達に默認せられてゐる——それが絹子の支拂はなければならぬ債務であつた。

だが、寺山の心は以前と少しも變らなかつた。絹子に精神的の革命が起つたら、自分もその革命に眞からなければならないと思つた。さうして、必死に森川先生の著書を讀んだ。先生の講義も熱心に聞いた。併し、生れつき物質的に又事務的に出來てゐる寺山の頭腦には、詩も神の詞もはひりにくかつた。それでも、寺山は強い意志の力で、自分の知力を壓し潰さうとした。絹子の愛を失はない爲には、是非さうしなければならないと思つた……

深田、天岡、工藤、小寺、山田の内で、誰から聞いたのでもなく、この關係を知つてゐる者がたつた一人あつた。それは、この中で唯一人純文學を研究してゐる山田であつた。山田の目的は創作家になることであつた。彼は既に詩や散文を學校の雜誌に出したり、自分の家に書き溜めて持つてゐたりした。

勿論、山田は絹子と寺山との關係を詳しく知つてゐるのではなかつた。今の絹子がどういふ心持で

ゐて、今の寺山がどういふ地位にゐるか、そんなことはまるで知らなかつた。唯彼は誰から聞くともなく、寺山と絹山は親の許した未來の夫婦だといふことを知つてゐた。そして、それを信じてゐた。

これ程みんなが親しみ合つてゐながら、天岡や工藤や小寺や深田が全く知らずにゐることを、どうして山田一人が知つてゐたのだらうか。それは山田の絹子に對する戀が敎へた事であつた。山田の戀は山田の耳を聰くした。山田の眼を鋭くした。山田の心を敏感にした。山田は絹子の髮の毛一筋動かす微風をさへ暴風のやうに強く感じたのである。

山田の戀は、工藤のそれや、天岡のそれや、深田のそれや、小寺のそれとは全く違つてゐた。彼の戀は寺山の戀と全く同じだつた。寧ろ異教的な寺山の戀と全く同じだつた。世俗の戀だつた。何處にも見られる普通の青年の戀だつた。「巧み」もあり「裏」もあり「影」もある戀だつた。

山田は今までに戀の經驗を二度もして來てゐた。一つは淸い儘で破れ、一つは汚れて破れた。山田が自分で戀だと思つてゐるものは、この二つだけだつたが、その他に情事（リイベライ）とでも稱すべきものは澤山にあつた。

彼は小學校の時分に、もう同級の或る女の子に心を惹かれて、學校の歸りには、きつと廻り道をして、その女の子の家の前を通つた。そして、塀越にその子の聲を聞いて滿足した——中學になると、學校の往き歸りにきまつて會ふ女學生の中に好きなのが出來た。それに會はない日は一日機嫌を惡くした。

その「好きな女學生」は段々に變つて行つた。或時は車で通ふ或華族の令孃だつた。或る時は袴を蹴るやうにして大路に歩いて來る或軍人の娘だつた。或時は自轉車でミッションの學校へ通ふ或混血の娘だつた……

併し、さうした路上の戀には、まだ間違ひが少かつた。彼は愛情といふものと殆ど關係なしに、かなり早くから性の変はりを知つた。彼は子供の時から多感ではあつたが、本當に「戀」らしいものを感ずるまでには、相應な歳の加算を要した。彼が性交を知つたのは、それより以前のことだつた……初めに彼をそこへ誘ひ入れたのは、自分の家の女中だつた。彼の母はあまり彼に構はなかつた。彼は寢るにも起きるにも、殆どこの女中一人の世話になつた。或晩、この女中が帶の間から紙に包つてない或男の寫眞を出して見せて、これが自分の「好きな男」だと言つた。彼には、その時分まだその意味がよく分からなかつた。女中は詞を續けて、「坊ちやんはこの人に似てゐるから好きだ。」と言つた……

彼の母は遊び好きで、始終外へ出てゐた。彼の寢る時分に母の家へ歸つてゐることは滅多になかつた。彼が朝起きる時分には、母はいつでもまだ寢てゐた……彼はさうして、まだ教へられないでも好いことを女中に教へられてしまつた。

一度門を潜つた彼は——寧ろ少年の好奇心から飽くまで家の奥を究めようとした。彼はあらゆる機

會を逃がさなかつた。相手を選ぶなどといふ餘裕はなかつた。およそ獨身の若い女で、自分の家に出はひりする者、自分の家に寢泊りする者には、誰にでも纒ひついて行つた……

彼の中學時分には、ソドミイと稱する變態の愛欲の滿足がはやつた。彼はこの誘惑にも落ちた。彼は愛せらるる地位にも立つたし、愛する地位にも立つた。强ひらるる場合の恐怖をも經驗した。强ひる場合の殘忍さをも經驗した……

自ら汚し自ら樂むことをも、彼は友達の一人に敎へられて知つた。この誘惑は殊に烈しかつた。彼は性交を知つてから後に、これを知つたのであつたが、前者にも增して彼は後者を愛した……

秘密の繪や寫眞を見て樂むことをも、彼は他の友達に敎へられて知つた。始めて見せられた時は、危く氣を失ひさうにしたが、馴れて來るに從つて、自分の方から漁るやうになつた。しまひには、普通の繪や普通の寫眞でも、異性のそれでありさへすれば、唯の意味では見ないやうになつた……

彼はかうした徑路を經てから、始めて戀といふものを知るやうになつたのである……

「性交」から「自慰」、「自慰」から「戀愛」――彼の經て來た道は全く逆だつた。

一度「戀愛」を知つてからの山田は、かうして逆に道を歩いて來たせゐか、存外以前の惡癖には陷らなかつた。

併し、兎にも角にもこれだけの經驗を經て來た山田である。彼は決して無垢純良な靑年ではなかつ

た。深田や天岡や小寺とは到底同座を許されぬ青年だつた……

山田は絹子を第三の戀の對象とした。

併し、それは彼が信仰生活にはひつてから始めての戀であつた。しかも相手は同じ信仰の同胞であつた。彼はこの戀が今までの戀とは全く別なものでなければならないと思つた。勿論、今までも、彼が戀だと信じてゐる二つは、いづれも浮いたものではなかつた。彼は自分の齢をも境遇をも無視して、その終局の目標を「夫婦」といふところに置いた。それは彼が同時に營みつつあつたところの性欲生活とは不思議に無關係に、不思議に清淨なものであつた。かうして、第一の戀は七年も長く續いたが、始めから清く、破れるまで清かつた。破れた時の悲痛は、何者にもたとへられなかつたが、追憶には塵ほどの汚れも交らなかつた。第二の戀にも、少しも浮薄な心はなかつたが、破滅があまり早く來さうにした爲に、彼は我にもあらず身を汚した。汚れて、そして直ぐ破れた。僅か二月か三月の戀であつたが、その追憶には長く曇がこびりついてゐた……

山田が春川先生の門にはひつたのは、それから間がなかつた。勿論、信仰にはひつたからと言つて、子供の時から續けて來た性的惡癖は急に刈りとることは出來なかつた。彼は姦淫の罪に對する基督の峻嚴な詩句を聖書の内に讀んで戰慄した。彼は晝夜を分かたず、この罪からの絶縁を神に祈つた。それでも、誘惑に克てなかつた時は、自からさまに罪を先生の前に告白して、先生の祈りを哀願した……

ここまで來た山田が、戀愛に對して全く新しい心を開かなければならないのは、當然なことであつた。併し、彼にはまだその新しい態度がしつかり掴めなかつた。そして、古い態度が、まだ全く彼を離れずにゐた。彼は唯前より幾分愼ましくなつたといふ程度に過ぎなかつた……

「凡そ婦(をんな)を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したる也。」

山田は基督のこの詞に會つて苦しんだ。彼はこれを「戀愛」の否定ではないかと思つた。愛のない性交――それの罪惡であることは山田にも分かつてゐた。併し、それは基督教の信仰にはひらないでも、およそ道德の常識に訴へて分かることであつた。基督の教はそれより深いものでなければならぬ。して見ると、異性に對する愛情その者の否定が基督教の奥義であるのかも知れぬ――山田はさう思つたが、それでは分からないことが澤山にあると思つた。

――基督教は決して「夫婦」を否定してゐはしない。寧ろこの關係を神聖視してゐる。若し、異性に對する愛情の否定が基督の教の奥義だつたら、夫婦も愛なしに生を續けなければならない。

――「色情を起す」といふ詞の意味が、若し「心を動かす」といふ程度にまで嚴しいのなら、異性に對して「美」を感ずることさへ許されない筈である。況んや「戀愛」に於いてをやである。併し、花の色や鳥の歌に對して「美」を感ずることの許されてゐる人間に、なぜ異性に對してそれを感ずることが許されないのだらうか。

――それも、容貌の美にのみ心を動かされるなら、或は惡いことかも知れない。併し、心の美しさ、人格の氣高さに感動を覺えることが、なぜ罪惡なのだらうか。これが若し「姦淫」なら、人間の感情に「姦淫」でないものは一つもない。基督教は終に感情その者の否定をその奥義とするのだらうか――

山田は純眞に聖書の一言一句をも守らうとした。それ故、彼の疑惑に少しも反抗的な分子はなかつた。基督の詞は正しい――それを前提として彼は苦しんだのである。理論よりは實際をどうしたら好いか――それを彼は知らうとして惱んだのである……

或日曜日の講義に、偶然森川先生はこの問題に觸れた。

馬太傳第五章第二十八節――先生にかう言はれると、山田は思はず身慄ひをした。彼は聖書を開かないでも、その一節に何が書いてあるかを知り拔いてゐた……

「凡そ婦を見て色情を起す者は中心已に姦淫したるなり。」

「若し、この飜譯が誤譯でないとしたら、世の中に姦淫を犯さないものは一人もない筈である……」

先生は先づかう言つた。山田は自分の考へをその儘言はれたやうな氣がした。併し、山田は先生の講義がいつも結論の反對で始まることを知つてゐた。山田は決して安心しなかつた。

「併し、イエスは果してかやうな詞を吐かれたのであらうか。吾々はここにその事を明かにしたいと思ふのである。勿論、吾々は姦淫の罪を輕く見ようといふのではない。唯、イエスの詞を誤解して、

罪の輕重を誤まつてはならないと思ふのである。罪を罪以上に見たり罪を罪以下に見たりして、吾々は一層強くこれに惱まされるのである……」

山田はまるで先生が自分に代つて、自分の惱みを說いて呉れてゐるやうに思つた。彼はもう感謝で胸が一ぱいになつた。

先生はこの飜譯を正確でないと言つた。希臘の原文を引いて、その明かに誤譯であることを主張した。

「凡そ色欲を遂げんとて婦を見る者は中心已に姦淫したるなり。」

かう譯すのが本當である。「色情を起す」といふ詞は、女を見ての結果ではない。女を見るの動機である。原因である。——先生はかう說いた。

かう譯して見れば、イエスのこの詞の正しさを拒むことの出來る者は何處にもあるまい。罪は單に行爲ではない、また意志である。心の內に罪を企てた時、罪は既に熟したのである。その遂行と否とは單に境遇の問題である。イエスは總ての罪を人の意志に歸したのである。外部に現れた動作に依つて定めなかつたのである。この場合では、色欲を遂げようとした動機が、すでに姦淫罪を構成すると敎へたのである。女を見て色情を起すことが姦淫であるかどうかを、この一節は敎へてゐるのではない。この一節で明白に敎へてゐることは、情欲遂行の動機から女を見るものは、その時既に心中姦淫

の罪を犯してゐるのだと言ふのである——先生はかう說いた。

更に注意すべきは「婦」と譯せられた原語である。これは單に「女性」を指す詞ではない。これは「妻」と譯す方が妥當な詞である。この場合「妻」とは、勿論「他人の妻」の意である——「凡そ色情遂行の動機よりして他人の妻を見る者は……」

これ言はずして姦淫である。ウリヤの妻を奪つたダビデの行爲である——

先生は更に言つた——自分は色情の聯想を決して無害視するのではない。唯、神は吾々に決して不可能を要求するものではないと言ふのである。防ぎ難い欲念の聯想——それを神は罪とは認めない。罪は意志である。想の一歩進んだものである。この一事を知つて、吾々は無益な苦悶から免かれることが出來る。同時に惡魔の術策に對して、有力な兵略を立てることが出來る——

先生の講義は一度に山田をその疑惑から救つて吳れた。基督教は決して戀愛を否定するものでもなければ、人間の感情を無視するものでもない。要は動機の如何である。意志の善惡である——山田は「無益な苦悶」から救はれて、ほつと安心の吐息をついた。

やがて、先生に對する感謝の心が、泉のやうに溢れて來た。

山田はかうして「戀愛」のジャスチフィケエションだけは得たが、以前のやうに無分別な熱烈さで相手に迫るやうなことはしなかつた。それは信仰に依つて行爲に對する反省が出て來たからである。

殊に行爲の前に來る意志、動機――それを山田はよく考へるやうになつた。それは明かに森川先生の影響であつた。

それに、自分の心を見せたいにも機會がなかつた。山田は南と同じ中學を出たのであつたが、級が二つも違つてゐた上に、專門に學問をするやうになつてから、科が違つた。顔だけで言へば、かなりな古馴染だつたが、立ち入つて深い交際をしたことはなかつた。同じ森川先生の門下で落ち合ふやうになつてからは、前からの親しみもあるし、隨分遠慮のない仲になつた。南が理科にゐながら、山田の詩人的な心持をよく理解して呉れたことも二人を一層近づける原因になつた。併し、山田はまだ南の家へ一度も遊びに行つたことはなかつた。

絹子にも、一週間に唯一度、森川先生のところで會ふだけだつた。先生の講義の始まる前に、みんなで雜談をする。先生の講義を聞く。それから又みんなで感想を話し合ふ。その間に二言三言口が利けば利く位なものであつた。

山田は絹子の家へ自由に出はひりをしてゐる柴田や小寺が羨ましかつた。併し、柴田はどんなに絹子と親しくしても大丈夫だと思つた。彼は小さい時から絹子を知つてゐながら、今日になつても、その愛は終に「兄」の愛以上に出ないでゐるのだ。小寺は自分で自分の愛を知らずにゐるのだから、これも今のところでは安心だと思つた。

異國の絹子に對する可憐な愛情には、かなり詩人らしい同情を寄せたが、これも意志の明白な發表まで行く氣づかひはないと思つた。深田は祈禱に依つても自分の感情を抑壓してしまふに違ひないと思つた。工藤はどうしようと絹子の方で相手にしまいと思つた。

山田の眼から見ると、彼等はいづれも善良過ぎる位善良な青年達だつた。山田の經て來た道は、「不良」といふ肩書のつかない青年でも、大抵は踏んで來る筈の道だつた。しかも、この連中はそれだけのことをさへ知らずに來た、無垢な青年達だつた。山田はその點で、心窃にみんなを見くびつた。羨ましい程善良ではあるが、戀愛にかけてはみんな弱卒だと思つた。山田は將來の勝利をはつきり望み見ることが出來た。

唯、知つて驚いたのは寺山と絹子との關係である。山田は寺山と少しも親しい交際をしなかつたから、寺山のどういふ人物であるかはよく知らなかつた。併し、寺山は外の連中とは全くタイプの違つた人間だつた。山田は何よりも先づ寺山の風采や擧動に、かなり自分と共通する世俗味があるのを見た。今までの閲歷にも自分と同じ位な――或は自分以上の汚れたものがあるやうな氣がした。事務の敏捷、社交の圓滑は到底及ばないと思つた。

しかも、その上に絹子との關係が果してその程度まで進んでゐるとすれば、自分の地位は餘程危ないと思つた。「地位」といふものさへ得られるかどうか氣遣はれた。

併し、山田は自己を信じてゐた。自己の優越を感じてゐた。カルチュアの優つてゐることゝは言ふまでもない。人格に於いても決して負ける筈はない。今は知らず、將來に於いては、精神的にも物質的にも、自分の地位は決して寺山の下にはゐないだらう――山田はかううぬぼれて、はつきり寺山を敵として戰ふ氣になつた。

山田のこの考への基督教的でないことは分かつてゐた。山田もそれは知つてゐた。知つてゐて、それに克てなかつた。基督の詞にも、先生の詞にも、山田はこれに對する明白な詰責を見出ださなかつたからである。

山田は絹子に近づく爲にも、寺山と戰ふ爲にも、機會の來るのを待つてゐた。

その機會は終に來た。それは愛の爲にも、敵對の爲にも、極めて都合の好い機會だつた。

天岡の爲の送別會――本牧の舟遊び――これがそれであつた……

山田は始めて絹子とゆつくり話すことが出來た。同時に、寺山の絹子に對する態度を始めて直接に觀察することが出來た。

絹子はかなりよく山田の詞を理解して呉れた。そして、一一同感して呉れた。山田の生活についても意外に多くの知識を持つてゐた。

「……さうですつてねえ。兄さんに聞いて知つてますわ。ねえ、兄さん。」

さう言つて、笑ひながら絹子は南の方を見た。

「絹さんは山田君のことなら何でも知つてるぜ。君、用心しないとあぶないよ。」

南はかう言ひながら、さも可笑しさうに笑つた。

「何があぶないの。」

「うつかりすると、先生にいひつけられるからね。」

この子供のやうな、南の詞は舟中を笑はせた。

「それに、絹さんは山田君の詩の愛讀者だ。」

柴田がまた側からこんなことを言つた。

「たつて。どうして。」

と、山田が不思議がつて訊くと、

「こなひだ僕んところへ書いてよこした詩ね。あれを僕が見せたんだ。」

「いけないなあ。」

山田は頭を抱へた。

併し、かうした空氣は山田にとつて全く意外だつた。意外だつたと同時に嬉しかつた。

唯、かういふ風な話になると、いつも面白からぬ顏をするのは寺山だつた。神經質な山田は直ぐと

それを見てとつた。そして、自分も不愉快な氣持になつた。

山田と絹子との交渉は、かうして途切れては續き、續いては途切れた。

寺山は一刻も休まずに絹子の顏色ばかり見てゐた。絹子の一擧一動に自分も一々反應して動いた。山田はそれを不自然だと思つた。純眞でないと思つた。巧みがあると思つた。欲するものを强ひて得ようとする或卑しささへ見えると思つた。

それでは、山田にはそれがなかつたらうか。勿論、山田にもそれはあつた。山田は寺山以上に焦つてゐた。併し、彼はそれを調節する術を知つてゐた。彼は或場合には思ひ切つて前へ出た。その代り他の場合には、まるで後へ隱れた。絹子などは眼中にないといふ顏をした――さうして、自分は寺山のやうにこせついてはゐないと思つた。寺山のやうに卑しくはないと思つた……

日が斷崖の後に落ちた。併し、空も海もまだ明かるかつた。桃色が靑白くならうとしてゐた。

その一瞬間の美しさ。

連中はそれに打たれて、思はず談笑の口をつぐんだ。

空も海も、今は淨められた美しさだつた。火よりも赤く染められてゐた時、それは「罪」の美しさであつた。「樂欲」の美しさであつた。澄み亙つたこの一瞬は「淨罪」の美しさであつた。「救ひ」の美しさであつた。

「結構だなあ。」

嘆くやうに思はずみんながかう言つた。

途端に、絹子が海の面に眼をつけた。そこには何か黒い汚ないものが浮いてゐた。それはシウマイを包んで來た新聞紙を誰かが捨てたのであつた……

「あ。あれがいけない。」

さういふ絹子の詞が終らない内に、突と長い棹が出て、それが舟の中へすくひ入れられた。寺山が絹子の顏を見ながら手を拭いた。

山田は「やられた。」と思つた。

絹子に對する愛の表示に於いては、確に道を開くことが出來たが、寺山との「戰ひ」に於いては、けふは明かに負けだと思つた。

絹子の詞が口を突いて出るか出ないに、あたりの美しいなかに、唯一つ目障りな汚れたものを電のやうな早さで取りのけた敏捷さ――それは到底自分達の及ぶところではないと思つた。

山田はがつかりした。心が重く沈んだ。口もろくろく利かなくなつた。

「どうした。山田君。ひどく默つちまつたぢやないか。」

誰かがこんなことを言つた。併し、山田にはそれも誰が言つたのだか分からなかつた。

「山田君、今の景色に參つたんだらう。僕も參つたよ。して見ると、僕も詩人かな。」

南はかう言つて無邪氣に笑つた。

「自然は美なるかな。自然は美なるかな。然れども人間の美の脚下にだも及ばず。」

工藤は自分で勝手に文章を作つて、それを偉人の詞ででもあるやうに朗唱つた。

みんなが笑つた——絹子も笑つた。

南の無邪氣と工藤の滑稽な眞面目さとは、多少山田の心持を救つて呉れた。併し、山田はまだ微に苦笑を見せただけで、心はやはり沈んでゐた……

日は全く落ちた。空も海も暗くなつた。寺山の鐘と、天岡の棹で、舟が岸につけられた。

「どうだい、諸君。今夜はみんな僕の横濱の家に泊つて、序にあした天岡君の立つのを送ることにしたら。」

岡へ上がると、南が直ぐとかう言つた。

「贊成。」

と、直ぐ應ずる者があつた。

「でも、南君の家が迷惑だらう。」

遠慮してかう言ふ者があつた。

柴田は泊ると言つた。深田も厄介になると言つた。小寺は家が女ばかりだから歸ると言つた。工藤も家を明けては先生に濟まないから歸ると言つた。

山田は胸を躍らせた。南の家へ始めて足を踏み入れる機會が與へられたのである。しかも、その最初の訪問に、一夜をそこで明かすことが出來るのである。勿論、絹子も兄と一緒に泊るに違ひない……

併し又山田は考へた。若し寺山が一緒だつたらどうしよう。寺山の家は横濱にあると聞いてゐるが、みんなが南の家に泊れば自分も一緒について來るかも知れない……

山田はもう到底絹子の前で寺山と對立してゐるのに堪へられなくなつてゐた。もうこの上寺山にあゝした場面を見せられることは口を割つて毒を注がれるより苦しいと思つた。見ないでゐれば、まだ安心してもゐられようが、見れば自分の敗北を感ずるばかりである……

山田は泊るとも泊らないとも言はなかつた。寺山もしつかりした返事はしなかつた。

「ぢやあ、小寺君と工藤君の外はみんな泊るんだね。難有いなあ。賑かで好いぜ。」

と、南は子供のやうに飛んで喜んだ。

「序に天岡君も宿屋なんか廢して、僕の家へ來て泊つたらどうだい。」

南は調子に乘つて、更にかう言つた。

「僕は駄目だよ。まだ仕度がいろいろあるし、それにあしたの朝、體格檢査を受けなければならない

からね。
天岡は眞面目な顔をして、かう答へた。
「さうかなあ。詰まんないなあ。」
南は駄々つ子のやうに言つた。
「さあ、さうきまつたらそろそろ行かうぢやないか。」
柴田はさう言ひながら、深田と肩を列べてさつさと歩き出した。南は山田や工藤や小寺や天岡と一緒に、その後を追つた。
絹子と寺山が一番あとになつた。

鼻血

燈もなかつた。月も出なかつた。
鼻を摘まれても分からないやうな暗い暗い田舍道を、二人と――五人と――二人とが離れ離れに歩いた。
山田は五人の中にゐた。そして、みんなと一緒に歩いた。皆と一緒に話しもした。皆と一緒に笑ひもした。併し、それは唯肉體が足を動かし、肉體が物を言ひ、肉體が口を大きく明くに過ぎなかつた。

心は行の二人の中にゐた。そして、二人と一緒に歩き、二人と一緒に話をし、二人と一緒に……笑つた……

併し、それは唯上邊だけのことであつた。山田の心はあとの二人の間に割り込んで肱を張つて歩きながら、影のやうに二人の一擧一動を眞似てゐたが、心のまた心は油斷をしなかつた。暗闇のなかにもぴかぴか光る二つの眼を大きくして、一瞬間も休まずに二人を監視した。心の耳は鋭く立つて、溜息一つ聞き漏らすまいとした……

急に、あとの二人が立ち留まつた。そして、向ひ合ひに立つて、何か話を始めた。そこは藪について左へ折れる小さい道のあるところだつた。月が出たのか、月が出かかつてゐるのか、燈がどこからか差すのか、向ひ合つて立つてゐる二人のシルエットが、はつきり見えた。

二人が立ち留まると同時に、山田も立ち留まつた。それは鎖でつながれた二つの物體の、一つが靜止すると他が動けなくなるのと同じであつた――心が肉體を牽いたのである……

「どうした。」

……誰かが言つた。

「あとが遅れたから……」

山田の肉體が答へた。

「寺山君がゐるから大丈夫だ。」

……又誰かが言つた。

「併し……」

山田の肉體は動かなかつた。

ふと、密接して立つてゐた二人の影が離れた。一人が畝について左へ折れた。そして、その細い道を奥へ奥へと進みながら、振り返り振り返り大聲で叫んだ——

「絹さん、左樣なら……ぢやあ、あした……みんなに宜しく……」

やがて、聲と一緒に姿が見えなくなつた。

……山田の心が雷のやうな早さで、山田の肉體へ歸つてきた。そして、さも安心したやうに、戰にでも勝つたやうに、幸福らしく笑つた……

「寺山君が別れたやうだ。絹さんが一人になつた。待つてゐてやらう。」

山田は零れるやうな嬉しさを抑へつけながら言つた。

「なあに、大丈夫だよ。あとから追ひつくよ。構はずに行かう。」

さう言つて、南はどんどん歩き出した。

「絹さんは女傑だ。夜道に驚くやうな女ぢやない。」

「さうだ。さうだ。行かう。行かう。」

小寺や大岡や工藤も、こんな事を言ひながら、どんどん又歩き出した。

「でも、氣の毒だ。僕は待つててやるよ。」

山田は優しい聲で言ひながら、強情に動かなかつた。

絹子の黒い影が段々に近づいて來た。

山田は強情に一人あとへ殘つたのが、みんなに惡いやうな氣がして來た。實際みんなが絹子を信じ切つてゐる姿は美しい――併し、自分には女に夜道を一人で歩かせるだけの信仰がまだない。それに……いや、それよりもこの絶好の機會を逃がすことがどうして出來よう――山田は少し位みんなに惡く思はれても構はないと思つた――

もう直ぐ眼の前へ絹子が來た。さつさつと裾を蹴る音が、暗い道を踏む靴の音に交つて聞こえて來た……

一番先きの二人は勿論のこと、その次ぎの四人ももう姿が見えなかつた。山田は完全に絹子と二人ぎりになつた。

二人の世界――唯二人の世界――一瞬時でもそれが來ればと、念じない日は一日もなかつた。それが來たのである。兎にも角にもそれが來たのである。形だけでもそれが來たのである。山田は

眼が眩むやうな氣がした。「待つてゐて下すつたの。どうも有難う。」

山田ははつとした。絹子の顔が直ぐ自分の前にあつた。絹子の息が微に自分の胸に觸れた。

「みんな、どうして。」

「みんな、先きへ行つてしまひました。」

「ひどいわねえ。」

山田はやつぱりぼんやり立つてゐた。

「さあ、行きませう。お待遠樣だつてね。」

「いえ。」

と小さい聲で言つてから、山田はやつと歩き出した。

「あの、なには、寺山君はどうしたんです。」

五六步あるくかあるかない内に訊いた。

「親類へ寄るんですつて……今夜はそこへ泊るんですつて……あした埠頭へ來ますつて。」

と、絹子は三つに切るやうにして言つた。併し、その詞の調子には、少しの狼狽も、少しの羞恥もなかつた。

山田は繼ぎ穗を失つた。默つて步いた。頭は寺山のことで一ぱいだつたが、それは一言でも口に出

して言へることではなかつた。

袴がさらさらと鳴つた……靴がことことと響いた……絹子の躰がすれすれに歩いた。

山田は自分の衣擦の音も、自分の下駄の音も聞かなかつた。

山田は唯絹子の「音」をのみ聞いた。絹子の「息」をのみ感じた。絹子の「存在」をのみ知つた。

自分は歩いてゐるのだか、駈けてゐるのだか、飛んでゐるのだか、まるで分からなかつた。山田は自分の「存在」をさへ感じなかつた。

二十分が過ぎた……

三十分が過ぎた……

道はやはり暗かつた……さつき明かるくなつたと思つたのは、自分の眼のせゐだつたのだなと思つた。

肩と肩とが時々觸れた……觸れては直ぐ離れた……離れては直ぐ觸れた……振子が何かに觸れるやうに。

そのたんびに、山田は息を詰めた……詰めては放した……放しては詰めた……ピストンが胴を上下でもしてゐるやうに……

突然……

突然、絹子が立ち留まつた……同時に、山田も動けなくなつた……

白いハンケチが下から上へ走つた。そして絹子の顔の下半部にマスクをかけた。

「どうしたのです。」

「鼻血。」

絹子はハンケチの中で答へた。

「それはいけない。」

と言つたが、山田はどうすることも出來なかつた。

「困りましたねえ。」

山田はうづうづしながら、手を出すことが出來なかつた。――心の束縛でどうにも身動きが出來なかつた。

「困りましたねえ。」

唯かう繰り返すだけであつた。

「いえ、大丈夫。」

絹子はハンケチでしつかり鼻を押さへて、顔を少し仰向けにしながら、そろそろ歩き出した。

「困りましたねえ。」

「大丈夫。」

…………………

「大丈夫ですか。」

「ええ、大丈夫。」

…………………

「困りましたねえ。」

「大丈夫。」

耳に詞が両方で繰り返されるばかりであつた。

……白いハンケチに血がにじみ出した――それが黒く見えた――その黒が雲のやうに、一刻一刻に擴がつて行くやうに見えた……

絹子は顔を仰向けて――電柱の上に視線を滑らせながら歩いた。左右が十分に見えなかつた。時々、よろよろと方向を誤つたり――躓いたりした。

山田はそのたんびに手を出さうとした。併し、心の偽りがそれを抑へた。心と手がばらばらに離れた。自然に手の出しようとすることを、巧みのある心が叱つた。

……女は支柱を要する――

手がかう言つた。

……おれの顏を見せてはいけない――

心がかう言つた。

絹子がふらふらするたんびに、山田の心と手が爭つた。併し、いつも僞瞞が純眞に勝つた。人工が自然に勝つた。着物が裸に勝つた。手がいつも心に負けた。

……絹子はよろよろしながら歩いた。

……山田も一緒にふらふらしながら歩いた……山田も顏を仰向けて歩いた……鼻柱の上に視線を滑らせながら歩いた……その内に手を鼻の下に當てた……どつちが鼻血を出してゐるのだか分からなくなつた。

絹子は時々ふらふらと道でない方角へ行きかけた……氣がついて、立ち留まつた……それから、又往來のまん中へ戻つて歩き出した……

山田の手はもう心の言ふことを聞かなかつた。心の鎖を引きちぎつて、猛然と飛び出した……併し、絹子を支へる力は弱かつた――まだ「心」の影響をほんとに脫却することが出來なかつた。

「有難う。」

絹子の詞は短かつたが、その聲の調子は、それを待ちに待つてゐたやうであつた。

山田は思はず手に力を入れた。さして後からしつかり絹子を抱いた――

――躓つたり、用心したり、氣どつてゐたりした「心」が安心して「手」の中へはひつて來た……

山田はもう完全に山田自身になつた。絹子を追ふ影ではなかつた。絹子を支へる柱だつた――手に力を入れて、しつかり前を見ながら、足を踏みしめて歩いた……

「向うに燈がついてゐます。あすこまで行けば水か氷か何かあるでせう。」

「有難う……済みません。」

「構はないで……僕に倚りかかつて……足だけ動かして入らつしやい。僕が運んで行つて上げますから。」

絹子はハンケチの中で笑つた。

山田はもうすつかり安心して、落ちつき切つて歩いた。前に行く六人のことも、後へ殘した一人のことも思はなかつた。自分自身のことばかり考へながら歩いた。

山田はトウルゲネフの或小説の戀の最初の場面を思ひ出した……が、それはこの場合とはうまく調和しなかつた。そこで、今度はドオデエの或小説の戀の第一場を思ひ出して見た……女の重い躰を擔つて長い階段を登る光景……それはこれにそつくりだと思つた。やがて、女が重い負擔になることの暗示――戀の破局の豫言――そんなことは考へなかつた。

「されど我なんぢらに告げん。凡そ婦を見て色情を起す者は……」

誓くすると、又この詞が雷のやうに耳朶を打つて來た……

併し、山田はもうそんなに狼狽しなかつた……自分の動機は決して汚れてはゐないと思つた……これは欲情ではないと思つた。

併し、この際小說などを思ひ出すのはよくない……それはあまりに芝居じみてゐる……遊びがあつてはいけない……これは自分達の悪い癖だと思つた……

「凡そ色情遂行の動機よりして他人の妻を見る者は……」

突然今度はこの詞が聞こえて來た……

「他人の妻」……「他人の妻」……ことによると、絹子はそれであるかも知れない……山田は或戰慄を覺えた……

併し、それなり絕望してはしまはなかつた。まだしつかり分かつたことではないと思つた……噂だけに過ぎないのかも知れない……噂が事實だとしても、兩親や兄弟の承認まで得てゐるかどうか、それは分からなかつた……

だが、萬一……萬一、絹子が他人の妻だつたら――山田は諦めなければならないと思つた。おのれを殺しても、おのれを正しく生きなければならないと思つた。義に殉じなければならないと思つた。

ウリヤに對するダビデになつてはならないと思つた……

山田はさう思ひながら、やつぱり絹子の體をしつかり抱へて歩いた。

さう思つて歩きながら……だが、それはあんまり殘酷な運命だと思つた……けふ始めて幸福に――少くとも山田はさう思つた――話し合ふことが出來たのだ……しかも、自ら計らないで、自然に二人は唯二人になつたのだ……それだのに、意志の發表もしない内に――もう別れてしまはなければならないのだらうか……

それは堪へられない……到底堪へられない……それを堪へるのは虚僞だ……確に虚僞だ……行くところまで行け……そして、破れるなら破れろ……猛進せよ……但し正しい意志を持つて――

山田は自分の心に自分でかう言つて勢をつけた……

「あ、は、は、は……」

突然、毀れた鐘のやうな笑ひ聲が、山田の眼を覺ました……

あたりが急に明かるくなつた……

白い浴衣を着た色の黑い男達が、あつちへ行つたりこつちへ來たりしてゐる……山田と絹子の側を通りながら、わざと肩を押しつける男があつた……二人の前へ立ちはだかつて、二人の顏を覗き込むのがあつた……方々に裸でランプが釣るしてある……太鼓の音がする……人ががやがやざわざわして

ゐる……祭でもあるらしい。
「へ。うまくやつてけつかりやがるなあ。」
あたりにどつと笑ひ聲が起つた……
山田は平氣で近所を見廻した。氷屋が一軒出てゐた。絹子から手を放して、そこへ駈けて行くと、
「氷を呉れ給へ――ぶつかきを――大きい儘で好い。」
と言ひながら、五十錢銀貨を濡れた臺の上にがちりと置いた……
氷を貰ふと、それを自分のハンケチに包みながら、絹子のところへ駈けて歸つた……
「それはもうお捨てなさい。」
絹子は素直に血でかたまつたハンケチを捨てて、氷を包んだ山田のハンケチを貰ふと、それを鼻の上に當てた……
「どうも有難う……」
山田はまた絹子を抱へるやうにしながら歩き出した。
「いよう……お二人さん。」
うしろで又がらがらな聲がした……
「まあ、いやな人達。」

絹子は水をちよつと放して言つた。

「田舍のせゐですわ……」

「拓けるんでせう。」と言ひかけたが、山田は「待て。そんな詞を使つてはならない」と思つた。

「……構やあしませんよ。」

「構ひませんねえ。」

絹子はさう言ひながら、ハンケチを又鼻の下に押し當てると、前よりぐつたり山田に身を倚せかけた……

山田はこれはいけないと思つた……これこそ小説的だと思つた、しかも、通俗な小説に澤山ある場面だと思つた……

……若い男と若い女が、互に心を探り合ひながら、肩を列べて歩いてゐる……すれ違つた職人か何かに冷かされる……それがきつかけで、二人の心が密接する……

勿論、絹子にそんな意識のありやう筈はなかつた。山田も思ひもかけないことだつた。たまたま通りかかつた道に祭などがあつて、田舍の若い者などが集まつてゐたからこんなことになつたのだ……

絹子がぐつたり身を倚せかけたのは、別に意味があつてした事ではないだらう。唯、だんだん遠慮がなくなつたに過ぎないのだらう。併し、その遠慮のなくなつたといふ事は山田にとつて重大だつた

――山田は、確に嬉しかつたのである。

併し、それが丁度あの田舎の若い者のからかひの後に來たのは悪かつた……それが折角の嬉しさに、「芝居らしさ」「小説らしさ」の色を塗つてしまつたのだ…… 山田はさう思ふと堪らなく不愉快になつて來た――山田は祭を呪つた。田舎の若い者を呪つた。

「可哀さうですねえ。ああいふ人達は。」

突然、絹子は氷を外して、山田の方を見ながら言つた。

「大丈夫ですか。氷を放してしまつて。」

「ええ、もう大丈夫。氷のお蔭でもうすつかり留まつたやうですわ。」

絹子はさう言ひながら、試すやうに、二三度頭を上下に振つた。

山田は絹子の體から手を放さなければならなくなつた。併し、手は絹子を離れて、方向を失つた……

「ぢやあ、その氷は僕が持つてつて上げませう。」

「でも、血がついてゐますよ。」

「構ひません。」

「さうですか。」

絹子は素直に、血のにじんだハンケチを、半分解けかかつた氷ごと山田に渡した。

山田はそれを掌と掌の間に挟んで、ぎゆつと握りしめた……ハンケチはぐしよぐしよになつてゐた……その中から絹子の肌がはつきり温かく感ぜられた……その下から氷が冷たく掌を刺した……山田の手は氷の寒さに慄へながらも、血の温かさに満足した……手はやつと縋るところが出来た……

「あなた、今なんとか言ひましたねえ……可哀さうだとか何とか……」

山田は思ひ出して、訊いた。

「ええ。あの人達は可哀さうだつて言つたんです。」

「あの人達つて……」

「今あたし達をからかつた人達。」

「ああ、あの田舎のせなあ達ですか。」

山田は思はずかう言つたが、絹子の言つた詞の意味は分からなかつた。

「なぜ、あの人達が可哀さうなんです。」

山田は不思議さうに訊いた。

「だつて、可哀さうぢやありませんか——あの人達は救はれないんですもの。」

「なぜ、救はれないんです。」

「だつて、肉に[illegible]けることの外なんにも知らないんですもの。」

「なぜです。」
「だつて、若い女と若い男が一緒に歩いてゐれば、直ぐそれを卑しいことのやうに思ふんでせう。」
山田は意外な詞を聞くと思つた。
「でも、あの人達として見れば、それが自然ぢやないでせうか。」
「ですから、救はれないと言ふんです。」
「さあ、それが僕には分かりません。」
山田がさつき田舎の若い者を憐んだのは、全く別の意味からだつた——救はれるの救はれないのといふ問題からではなかつた。
「萬人を愛せよ。」——この詞を字義通りに遵奉するのが基督教だと信じてゐる山田には、絹子のかうした物の見方は分からなかつた——
「でも、あの人達は男と女とが一緒にゐれば、直ぐ厭なことを考へるのです。あの人達の世界は肉慾ばかりで出來てゐるんです。魂の存在も知らなければ、感情の美しさも知らないのです。男と女の間にだつて友情もあれば親子の情もあるのを知らないのです……」
山田は愈意外なことを聞くと思つた——
「それは違ひます……いや、違つてはゐないかも知れないが、僕などには理解出來ません。」

「なぜですの——生意気なことを言つたつて、あたしなんにも分からないんですから、どうか教へて下さい。」

絹子は恐れるやうに、山田の顔を覗きながら言つた——その様子には少しの自負もなければ、聊かの衒ひも見られなかつた。詞の内容は如何にも断定的だつたが、絹子は唯自分の信ずることを信ずる儘に述べたに過ぎないといふことが、直ぐと山田に分かつた——山田は絹子が可憐になつて来た——「それは違ひます」などと挑戦的に出たのが、残酷なやうな氣がして来た。

山田は宥めるやうに言つた——

「僕は自分の思ふ通りを遠慮なく言ひますから、絹子さん、感情を害してはいけませんよ……」

「ええ、どうぞ。あたし自分の間違つてるところが直して貰へれば、喜びますわ。」

絹子は顔を前に見せて言つた。

「ぢやあ、言ひますよ——第一、あなたの今言つたことはほんとにあなたといふものから出た詞ではないと思ひます……」

「なぜですの。」

絹子は憐れみを乞ふやうに言つた。

「あなた自身の詞ではありません。あなたは何かに影響されてゐるのです。人の思想に操らさ

れて、自分で自分の思想をはつきり見ることが出來ないのです。多分、それはあなたの學校が悪いのです。あなたの考へ方は學校の基督教の考へ方です。ミッション一流の考へ方です……」

さう言つて、山田は一息ついた……

「……僕達はもつと謙遜でなければなりません……一體、あの人達と僕達との間に、どれだけの相違があるでせう。成程、あの人達は、誰が見ても、下等な人達には違ひありません。併し、僕達は果してあの人達ほど下等ではないでせうか……」

山田はさう言つて、答を求めるやうに、絹子の顔をぢつと見た……

絹子は默つてゐた――

山田は詞を續けた――

「あなたは、あの人達が肉に屬けることの外なんにも知らないやうなことを言ひましたね。併し、僕達だつて肉に屬けること以外にどれだけのことを知つてゐるでせう。男と女の間には、親子の情もあれば、友達の情もあると、あなたはお言ひでしたね。併し、吾々の間に――苟に、あなたと僕との間に――或感情が存在するとして、それが果して親子の情、友人の情、同胞の情以外に飛び出さないで濟むでせうか。あなたは知りませんが――少くとも僕は、それでは濟むまいと思ひます。さうして見れば、僕達はあの人達に罵られても爲方がないのです。怒る資格はないのです。しかも、僕達は人格に

なくて、あの人達よりどれだけの優れたものをも持つてゐないとすれば、僕達にあの人達を憫む資格はない筈です……」

絹子は默つて俯向きながら歩いた。

山田は稍暫くして詞を續けた——

「あの人達と僕達との間に、若し或相違があるとすれば、あの人達は正直で、僕達は不正直なのです。あの人達は思つたことを不遠慮にどんどん言つてしまふのです。僕達は自分の思つてゐることでも、これは自分の考へではないといふ風に、無理に抑へつけて、上から蓋をしてしまふのです。そして、自分達はあの人達より上等だと思つてゐるのです。それが果して上等な人間のすることでせうか。果してこれが救はれ得る人間の行爲でせうか。……「なんぢ兄弟の目にある物屑を視て己が目にある梁木を知らざるは何ぞや」です。僕達はあまりに無反省です。あまりに傲慢です。「僞善者よ先づおのれの目より梁木をとれ」と言はれたイエスの烈しい詞は、僕達に向つて吐かれたとより外思へません。……僕は恐ろしい。實に恐ろしいと思ひます……」

山田がかう言つて、詞を切ると、突然絹子が聲を上げて泣き出した……山田は驚いて、立ち留まると、左の手で絹子の肩を抱くやうにした。

「どうしました……どうしました。」

「あたしが……あたしが悪うございました……間違つてゐました……どうか……どうか許して下さい。」

絹子は切れ切れにかう言ひながら、右の横顔を山田の胸に強く押し當てた……

「泣くことはありません。分かればそれで好いのです。あなたが悪いのではありません。あなたに影響してゐるものが悪いのです――それが間違つてゐるのです。それでも、若しあなたが罪を感ずるなら、その許しは神に向つて乞はるべきです。僕には人の罪を責める權利もなければ、許す資格もないのです――僕は人間です。そして、人間以上の何者でもないのですから……」

絹子は愈烈しく泣いた。熱い涙が雨のやうに山田の右の手にかかつた。併し、山田はもうすつかり落ちついてゐた。いまだに右の手の内に握つてゐるハンケチからも、もう水の滴りの外なんにも感じなかつた。

「さあ、もう分かつたら、それでよござんす……急いで行きませう――大分遅れました。」

絹子は默つて、二三度頷いた。そして、素直に歩き出した。

山田は堪らず絹子が可愛くなつた……妹のやうに可愛くなつた。考へて見ると、絹子に向つて「人を議する勿れ」を説いた自分は、いつの間にか絹子自身を議してゐたのである。――人を責めるなと言ひながら、自分が人を責めてゐたのである……

「御免なさい、絹子さん……僕にだつて、あなたを責める資格はないのです……僕は自分で自分を責めるつもりで、知らずにあなたを責めてしまつたのです……御免なさい、絹子さん……」

絹子は又默つて頷いた。默つて頷きながら歩いた。

ふたりの心はかうして段々に近づき合つた……

もう「社會」にも「境遇」にも用はなかつた。

心と心が、何の力をも借りずに、直接に近づき合つたのである……

山田はもう手にも足にも煩はされなかつた。肉體が絹子の側にゐようと、離れてゐようと、それはもう問題にならなかつた……

「ねえ、絹子さん……」

山田は始めて自由に呼びかけることが出來た。

「え？」

絹子も始めて樂々と答へることが出來た。

「一ぺんあなたとゆつくり話がして見たいといふことは、隨分前から考へてゐたことですが、やつとけふそれが出來ました……」

「あたしも、あなたにいろいろ伺ひたいと思つてゐたんですが、やつとけふお話をすることが出來ま

した……」
「併し、その始めてした話が、いきなり議論だつたのには、あなたも驚いたでせう……どうも僕は理窟つぽくていけません……」
「いいえ。あたしはあなたが御自分の信じて入らつしやることを少しも曲げずに仰しやるのが豪いと思ひました――あたしは恥づかしくなりました。」
「恥づかしいのは僕です。成程、あなたの言ふことは間違つてゐました――それは今でも間違つてゐると思つてゐます。併し、利口ぶつてそれを責める資格が僕の何處にあるでせう。僕は自分で自分が厭になりました……」
二人は互に同じやうなことを言ひ合つた。急ぐともなく二人は道を急いだ。二人はもう二人きりでゐないでも好いやうな心持になつてゐた――もう二人きりでゐる必要は過ぎた。二人はもう百人二百人の中にゐても、離れてしまふ氣遣ひはないと思つた……
坂道が來た。瓦斯燈がほつりほつり立つてゐた。道の右側が谷のやうに低くなつてゐて、そこに沈默の家の屋根が黑く見えた。前の方に話し聲がした……歌ふ聲もそれにまじつて聞こえた……間もなく、二人は四人に追ひついた。
「絹さんが鼻血を出しちまつたもんだから……」

山田は言ひわけらしく言つた。

「それはいけなかつた……もう留まりましたか。」

大岡が心配らしく絹子に向つて訊いた。

「ええ……もう大丈夫……」

絹子は笑ひながら答へて、みんなに顔を見せるやうに、瓦斯燈の青い灯を仰いだ。

と、工藤が突然前の方を見詰めながら駈け出した。そこは一旦降りた坂が、また爪先上がりになつてゐるところだつた。

坂の上まで駈け上がると、工藤はステッキをびゆうびゆう振りながら「ええいッ。ええいッ」と掛け聲をした。

みんなは平氣だつた。平氣で坂の上までゆつくり上がつた。

「どうしたい。工藤君。」

山田がかう言つて、工藤の背中を叩くと、工藤はステッキをそこへ投げ出して、暗い空を仰いだ。

「吾人は須く現代を超越せざるべからず。」

みんなが笑ふと、工藤もみんなの顔を見て一緒に笑つた。

暗黑

南の家は公園の近くにあつた。

天岡は埠頭に近い宿屋の方へ別れて行つてしまつたし、工藤と小寺はステエションの方へ急いで行つてしまつたので、そこの硝子戸を明けてはひつたのは、南兄妹と深田と柴田と山田とだけだつた。

店の中は暗かつた。奥から洩れる光で、そこここに置いてあるデスクや椅子がぼんやり見えるだけだつた。商品らしいものは何處にも見えなかつた。店といふよりは役所かなんぞのやうに見えた。

「さあ、構はず上がつて呉れ給へ。」

南がかう言ふと、絹子が階子段のところにスリッパを揃へた。みんなはそこで下駄や靴を脱いで、南兄妹について上がつた。

通された二階の一室は八疊ほどの日本間だつた。電燈はなくて、天井のまん中に瓦斯の青白い灯がついてゐた。

部屋の廻りには戸のない戸棚が壁一ぱいに取りつけられてゐて、その中に日本紙の袋にはひつた平べつたい物が一ぱい詰まつてゐた。

「何だい――これは。」

と、山田が不注意に訊くと、

「盆さ——外國行の漆器さ。」

南は無造作にかう言ひながら、いきなり疊の上に横になつた。

「ああ、くたびれた——どうだい。諸君も横になつちやあ。」

「うむ。」

榮田は直ぐと袴を脱いで、南とならんで横になつた。深田はきちんと坐つて胡坐もかかなかつた。

山田は足を揃へて、横坐りに坐つた。

「これはみんな君のところで作るのかい。」

山田はまだ物珍しげに戸棚の方を見廻しながら言つた。

「なあに、うちで拵へるんぢやないよ。靜岡に下受をする工場があつてね。みんなそこから送つて来るのさ。」

南は寝ころんだ儘答へた。

「お盆ばかりかい。」

「盆ばかりぢやない。煙草を入れる箱もあれば、ペンをのせる臺もある——いづれも安物ばかりさ。何しろ器械でどしどしこしらへるんだからね。數でこなすんだよ。」

「すると、外國人を欺すんだね。」

突然、深田がさう言つた。

「さあ――値段が高けりやあ欺すことになるだらうが、うちのは安いんだから欺すことにやなるまいよ。」

南は深田の不遠慮な詰問を少しも怒つた様子がなかつた。

「そんなら好いが――隨分貿易商にはひどいのがあるさうだからね。」

と、深田は愈まじめな顔をした。

「併し、商人といふ者はいづれにしても正しい道は踏みにくいものだね――商人が神の國へはひるのは駱駝が針の孔をはひるより困難だよ。だが、親父なんかにそんなことを言つたつて、どうせ分からないし、僕は超然主義をとつてゐるんだよ……」

南のさう言ふのを聞きながら、山田は絹子の父のどんな人であるかを想像した。絹子の母を、絹子の姉を、絹子の妹を想像した。

「だが、君のお父さんは好い人だよ。商人には珍しい人だよ。第一、君達が基督教なんぞを信じても、默つてゐるだけでも豪いと思ふよ……」

柴田がさう言ふと、南がまじめな顔をして頷いた――

「それは實際だ。僕その點は親父に感謝してゐる。親父は寧ろ喜んでゐてくれるんだからね。」

　一旦下へ降りた絹子が妹と姉の夫を連れて、上がつて來た。柴田は前から知つてゐる樣子だつたが、深田と山田は始めてだつた。南が二人を紹介すると、深田と山田が書生流な挨拶をした。

　絹子の姉は、絹子とは似てもつかない肥大な體格の持主で、目つきに可愛らしいところはあつたが、服飾にも顔つきにも何處か鈍いところがあつた。

　山田は自分の想像してゐた人とはまるで別なので失望した――「これが南や絹子と同じ母から出た人だらうか」とさへ思つた。

　絹子の姉の夫は、髪を分けて油をつけた、綺麗に髭を剃つた跡の青い、始終笑つたやうな顔をしてゐる、小さな男だつた。聲も黄いろく、浮ついてゐた。

「……けふは是非僕も參加しようと思つてたんだが、なんしろふだんの日だもんだから店の方が忙しくつてね……」

　姉の夫はこんな事を言つた。

　山田には、その「店」といふ意味が分からなかつた。暫くすると、南の説明で、それが「商館」のことだと分かつた。姉の夫は支那人街の絹を扱ふ或商館へ勤めてゐるのだつた。

「何しろ[illegible]さんは名譽だ。學校を一番で卒業して、直ぐ亞米利加へ雇はれて行くなんて全く豪いや。

歸つて來れば、勿論博士ものだ。學者も小寺君見たいに書齋にばかり引つ込んでるんぢや駄目だ。社會へ乘り出して活動しなけりやあ、學者だつて無用の長物だ……」

山田は不快な氣がした。天岡を褒めるのは好いが、かうした賞讃のしかたが天岡自身にとつても不愉快なことは分かり切つてゐた。

「岡村さん……その説には僕贊成出來ませんね……」

突然、深田が口を出した。

「天岡君が豪い人であることは僕等も十分認めてゐますが、その豪いといふ意味は、銀時計を貰つたとか、亞米利加の政府から雇はれたとか、そんなことにあるのではないと思ひます。あの人の豪いのは、苦しいことでも樂しいことでも、神の恩惠だと信じて、議論もせずに不平も言はずに、ひたすら目前の爲事に誠實である點だらうと思ひます。書齋に引つ込んでゐるからいけない。社會で働いてゐれから豪い……一概にさうは言へまいと思ひます。書齋の人には書齋の人で、神の使命があり、社會の人には社會の人で、また別な神の使命があるのだと思ひます。要するに、人間にとつて一番大事なことは神の道を踏むことで、神の道に外れた生活をしてゐたら、書齋でいくら勉強したつて、社會でいくら活動したつて、それは唯の醉生夢死だと思ひます……」

深田が目を据ゑて、一言一句を忽にしないといふ風で、ぼつりぼつりここまで言ふと、岡村は簡單

に皆で笑つて、
「佛の道も神の道だらうが、人間の成功はやつぱり人間の成功だからね。」
と、言つた。
南はさつきから困つたやうな顔をして、二人の對話を聞いてゐたが、
「どうも、深田君と兄さんぢやあ、立場がまるで違ふからね……議論するだけ無駄だよ……こんなことを言ふと、又妥協だつて柴田に叱られるかも知れないけれど、折角今夜はかうやつて仲よく集まつたんだから、議論だけはよさうぢやないか……」
と、さも言ひにくさうに言つた。
「さうだ。僕が悪かつた。岡村さん。勘辨して下さい。」
と、深田は直ぐに子供らしくあやまつた。
この公明な態度には、俗人の岡村も動かされた。
「いや、僕こそ失敬した……僕は南などと違つて、神だの佛だのつて言ふのが大嫌ひなもんだから、つい議論が物質的になつてしまつて、いつも絹さんなんかに叱られるんだ……ねえ、絹さん、さうだねえ。」
と言つて、岡村は笑ひながら義妹の顔を見た――と、急に何か思ひ出したやうに、

「さう言へば、絹さん、寺山はどうした……また本牧か。」

「ええ……あした埠頭へ來ますつて。」

絹子は無邪氣に答へた。

「あいつだつて、元は僕なんかと同じ考へだつたんだがな。この頃絹さんの眞似をして森川先生のところへ行つてから、急にクリスチャンになつたから可笑しいよ……」

深田はまた何か言ひたさうな顏をしたが、哀願するやうな甫の顏を見ると、氣の毒さうに目を伏せた。

山田は寺山のことが話題にのぼつて來たので、急に注意力を緊張させた――

「岡村さんは寺山君とは古いお友達なんですか……」

山田は絹子の顏を見ながら、岡村に向つてかう訊いた。

「ええ、古い馴染ですとも。竹馬の友だ。あいつはあれで小さい時から中々豪い奴だつた。今にきつと立派な實業家になるよ。ただ、この頃少し思想がぐらぐらしてるやうだから、ここさへうまく切り拔ければ大丈夫だ。その責任は……絹さん、君にあるね。」

岡村がこんなことを言つても、絹子は何とも思はない風だつた。唯笑つてゐて、否定もしなければ肯定もしなかつた。

山田にはそれが分からなかつた――分からなかつたと言ふよりは、弄ばれてゐる感じがした。寺山が岡村と親友であるといふことや、寺山に関する岡村の議論は、可なりな「安心」を山田に與へたが、それを默つて笑つて聞いてゐる絹子の心は分からなかつた。

「さあ、もうそろそろ寝ようぢやないか。あした早いんだから。」

さつきから横になつて半分寝ながらみんなの話を聞いてゐた柴田が、急に起き直ると、かう言つた――途端に下ではんはん時計が十時を打つた。

「さうだ。もう寝よう寝よう……絹さん、床をとつて呉れないか。」

南も一緒になつて、かう言つた。

「じやあ、僕も失敬するかな……諸君、お休み。」

岡村もかう言ふかと思ふと、ひとりでどんどん下へ降りて行つてしまつた。

絹子は姉と二人で、奥の部屋から夜具を運んだ。五つの床が、三つと二つ頭と頭を向ひ合ひに敷かれた。その上に蚊帳が釣られると、もう歩くところがない程、部屋が狭くなつた。

「お休みなさい。」

絹子の姉はかう言つて、下へ降りて行つた。

南はいきなり蚊帳の中へ潜り込むと、蚊帳の中から捩子を捻つて瓦斯を消した。部屋の中が真暗に

なつた。ただ寢床の敷布が薄白く見えるだけだつた。
「さあ、こつちが僕と柴田と絹さんだ。そつちが深田君と山田君だ。」
さう言ひながら、南は寢間着も着換へずに、三つ敷いてある床のまん中へ横になつた。
「まあ、無精だわねえ。」
絹子はさう言ひながら、暗闇で着物を着換へた。柴田も山田も深田も、絹子の姉が出して置いて呉れた白い浴衣に着換へた。
柴田と深田が前後して蚊帳の中へはひつた。山田が一番あとから蚊帳を潜つてはひると、自分の寢床の丁度前に絹子が坐つてゐた。
深田は可なり長い默禱をしてから、しづかに躰を横にした。深田は南の父の人格を疑つたり、岡村と議論したりしたことを、きつと悔いて、罪を神に謝したに違ひなかつた。
柴田は短い默禱をして、すぐにごろりと横になつた。南はもうぐうぐう鼾をかいてゐた。
絹子と山田は、殆ど同時に默禱を始めた。山田はその晩祈るべきことを澤山持つてゐた――先づその一日を大過なく可なり正しく生きることが出來たことを感謝した。愛する信仰の兄弟、天國の爲に清い送別會を終ることが出來たことを感謝した。いつも犯す罪ではあるが、又けふも工藤の行動に對して、多少なりとも輕侮の念を抱いたことを神に謝した。殊に、寺山に對して或敵意を持つたことに

就いては、心から神に許しを乞うた……

併し、絹子のことに就いては、どうしても神の前にはつきり顔を上げることが出來なかつた……この點で自分がけふ一日全く清かつたとは、どう考へても思へなかつた。自分が肉から出發したのでないことは確だつた。動機の肉でないことだけは確だつた。併し、自分は肉を思はないまでも、少くとも肉が感じた。肉の觸感に心を動かした。これは罪でないまでも、決して清淨なことではない……

「……どうか、神樣、この不淨な心の動搖をわたくしから取り去り給へ。わたくしは信仰うすく、意志の弱い者であります。どうか神樣の御力をもつて、魂のない肉の愛をわたくしからお絶ち下さいまし。わたくしの戀が若し神樣の思召にかなはないものであつたら、どうぞそれを直ぐにお示し下さいまし。わたくしは神樣の御贊同なしには、何事もいたしたくないのです。神樣、どうか神樣、愚なるわたくしをお憫み下さいまし。そして、わたくしに、わたくしの踏むべき道をお教へ下さいまし……この不束なる、感謝に薄き祈りを、イエス・クリストの十字架を通して聞こし召し給へ。アアメン。」

山田の祈禱は長かつた。ほつと息をついて、顔を上げると、もう絹子は祈禱を終つてゐた。併し、みすまひは少しも崩さずに、ぢつと山田の方を見てゐた。それは、聞こえる筈のない山田の默禱を今まで聞いてゐたやうに見えた……

「待つてゐて下すつたんですか……どうも濟みません。どうかお休み下さい。」

山田がかう言ふと、絹子の白い顔が暗闇で笑つた――

「あなたが先きへ寢て下さらなければ、あたし休めませんわ。」

「さうですか。ぢやあ、お先きへ失敬します。」

山田はさつぱりした口調でさう言ふと、直ぐごろりと横になつた。

併し、絹子はやつぱりぢつとしてゐた。身動き一つせずに、やつぱりぢつと坐つてゐた。

山田は眼をつむつたが、眠られなかつた。絹子の起きてゐるのが氣になつて眠られなかつた――もうなんにも思はずに今夜は寢なければならない。もう寢前の祈禱を終つた以上は、少しの邪念に犯されてもならない。清く靜に寢なければならない……さう思つて、山田は眠らう眠らうと努めたが、やつぱり眠られなかつた。

寢ようとすればする程、心が冴えた……

山田はたうとう又飛び起きてしまつた。

「あら、どうなすつたの。」

絹子は驚いたやうに言つたが、詞の調子は落ちついてゐた。

「寢られません。」

山田は訴へるやうに言つた。

「でも、あなたには大變お世話になりましたわねえ……飛んだところで鼻血などを出して。」
「どういたしまして。あの位なことをするのは當り前です。僕が鼻血を出せば、やつぱりあなたの世話になるのです……」

詞が途切れた。沈默が二人の間に坐つた。

「山田さん……さつきのハンケチをどう遊ばして。」

暫くすると、絹子がかう訊いた。

「僕の着物の袂にはひつてゐます。」
「あら、着物が濡れてしまひますわ。」

絹子は立ち上がつて、蚊帳を出ようとした。

「構やしませんよ。朝までには乾いてしまひます。」
「でも、血が附いてゐますから。」
「構ひませんつたら……どうか坐つて下さい。」
「さうですか……」

絹子は又褥の上に坐つた。また沈默が二人の間に降りた。二人は暗闇で唯顏を見合つてゐた。

「まだ眠れさうにもありませんか。」

暫くすると、山田が訊いた。

「あなたは……」

「僕、僕はとてもまだ寝られません。」

「あたしも。」

山田は一寸考へた。

「ぢやあ、何か話をしませうか。」

「ええ。何かお話をして下さい。」

絹子の答は、山田の言つた意味とはつてゐた。

「話つて別にあるわけぢやありませんけれど……何か二人で話しませう。」

「ええ。何か二人で話しませう。」

絹子は素直に鸚鵡返しをした。詞がまた途切れた。

「あの、寺山君はほんとにさつき岡村君の言つたやうな人なのですか。」

暫くすると、山田がかう訊いた。山田はもう寺山の問題にはなるべく觸れまいと決心してゐたのだつた。それでゐながら、やつぱりそれを言ひ出してしまつたのだつた。

「さうでもありませんわ。岡村の兄さんは俗人だから、なんにも分かりやしませんわ。」

絹子は、はつきりかう言つた。

「成程。岡村君といふ人は可なりな物質主義者ですね。天岡君などの批評も僕は不愉快でした。深田君が異議を稱へたのは當り前だと思ひます。」

山田がここまで言ふと、絹子は幾度も頷いた。

「それでゐて、遠慮なしですから、誰がゐても平氣で議論をし出すんで、いつも困るんですよ。姉はあゝいふ人ですし、岡村の兄さんが何を言つても、唯はいはい聽いてゐるもんですから、尚更好い氣になるんですのよ。いつか森川先生が宅へ見えた時も、平氣で魂なんてものはないなんて議論をし出すんですよ。あたし先生に恥づかしくつて、困つてしまひましたわ……」

「でも、正直な人ぢやありませんか。自分の思ふことをどしどし言ふところに。僕も議論にやゝ感心しなかつたけれど、態度は無邪氣で好いと思ひましたね。ああいふ人の言ふことも、さう一概に輕蔑してしまふことは出來ないと思ひます。例へば、寺山君のことにしてもですね……」

山田はここまで言ひかけたが、流石に心が咎めて、あとが言へなくなつてしまつた――自分は強ひて岡村を辯護して、強ひて寺山を貶さうとしてゐるのではないかと思つて……

「ぢやあ、あなたは寺山さんを岡村の兄さんが言ふ通りの人間だと思つて入らつしやるんですか。」

絹子は笑ひながら、少しも相手を責めるやうな調子でなく言つた。

「さうは思つてゐません……勿論、さうは思つてゐませんが、兎に角小さい時分からの友達なんでせう。ですから、岡村君の言ふことにも、或はほんとのことがあるのぢやないかと思ふのです……」

「でも、思想がぐらぐらしてるなんて嘘ですわ……あの人は小さい時から苦勞をしてる人ですから、なかなかしつかりしたところがありますわ。岡村の兄さんなんかより餘つ程しつかりしてゐますわ。」

「併し、あの人はどこかにマテリアリストらしいところがあるやうに見えますね。」

「それは、あの人の境遇が悪いのです。その境遇からも近い内に逃げられることになつてゐますから、さうすればきつとあの人の値打もはつきり見えて來るだらうと思ひます……」

「でも、境遇に左右されるといふのは意志の薄弱な證據ぢやありませんか。」

「そりやあさうです。そこがあの人の弱いところです。でも、弱いから神に縋らうとしてゐるので、強ければ神の必要はないのです。あたし達だつて、みんなさうぢやありませんか……」

もう言はれて見ればさうに違ひなかつた。山田は返す詞がなくて黙つてしまつた。絹子もそれなり黙つてしまつた。

二人の眼はだんだん暗闇に馴れて來た。二人は互に顏をはつきり見ることが出來た。二人は顏と顏とを見合つて、暫くぼうつとしてゐた。

山田はもつと立ち入つて寺山のことが訊きたかつた——絹子の寺山に對する心持がはつきり知りた

かつた――絹子と寺山の關係を絹子自身の口から聞きたかつた。

併し、それはどう訊いて好いか分からなかつた――訊くのが恐ろしいやうな氣もした――その内に、そんなことは訊く必要はないと思ふやうになつた。

絹子と寺山の關係をはつきり聞いた上でなければ、一歩も進めないといふのは、あまりに事務的な考へである――あまりに冷やかな、形式に縛られた考へである。

ふたりの關係を若しはつきり知ることが出來たら――そして、二人の關係が實際今まで聞いてゐた通りの關係であつたら――直ぐそこで、愛の火を踏みにじつて、消してしまふことが出來るだらうか。

ふたりの關係が友人以外の何者でもなかつたとして――それを聞いて、始めて安心して、愛の火に油を灌ぐといふやうなことが、眞に「戀する者」のなすべきことだらうか。

絹子が正直な心の持手であつたら、山田が詞を費して訊くまでもなく、自然にそれらのことは分かつて來る筈である。

寺山のことを考へる必要はない。自分は唯絹子のことだけ考へて、左右を顧慮することなく、ひたすら絹子に向つて愛の歩みを進めれば、それで好いのである。

若し、自分の進む道が間違つてゐたら、自分は牆壁にぶつかるか、或は穴に落ちるだらう――少くとも、ぶつかる前落ちる前に何處からか警告を受けるだらう。

外を奔せず、心を曲げず、純眞な愛情の火の導く儘に、唯一筋の道をわき目もふらずに突き進むということが、どうして罪であらう――なんで惡であらう。

要は唯神の道を踏みあやまつてはならないといふことだけである――神の御旨に背いてはならないといふことだけである。

寺山もない――寺山と絹子との關係もない――總ての「人間」の問題を超越して、自分は唯一愛」の進む儘に進んで行けば好いのである。

實際また、今の自分としては、どう理性を働かせて見ても、如何に感情を抑へて見ても、それより外に出來さすなことはないのである。

道は唯一つである……

目標も唯一つである……

進む力も唯一つである……

さう思つて來ると、山田は急に縄を解かれたやうな氣がした……廣い世界が前にあつた……どこまでも走つて行けるやうな氣がした……どこまでも飛んで上がれるやうな氣がした。

周圍が明かるくなつた……手にも足にも……心にも……力が滿ち溢れて來た……

燃えるだけ燃える……

走れるだけ走れ……
飛べるだけ飛べ……
山田は絹子の顔を前より一層近いところで見た。絹子の息を前より一層近いところで感じた。
不可解な絹子の態度――薄暗がりな絹子の心持――それを奥の奥まで、底の底まで、見ずには置かないといふ風に、眼を鋭く光らせた……
併し、山田はやつぱり自分の思ふことを言ふことは出來なかつた――
「……全く人間といふものは弱いものです――反省すればする程、自分の弱さが分かつて來ます。どうして、こんなに弱いかと思ふと、實際情なくなつて來ます……」
山田はこんなことを言つた――殆ど無意識に、人の詞でも取り次ぐやうに言つた。
「ほんとにさうですわねえ……先生のやうな方でも、始終おれは弱くていけない弱くていけないと言つてらつしやるくらゐですもの……あたし達が弱いのは當り前ですわ。」
絹子は殆ど絶望したやうに言つた。
「でも、先生は信仰が強いから、どんなことにも負けないで神の道をまつすぐに進んで行くことが出來るのです。僕達は自分達が弱いところへ持つて來て、信仰の力が弱いのだから救はれません……」
「『心の貧しき者は福なり』といふイエスの詞の尊さを先生に說明して戴いた時は、天へでも登つた氣

持でしたが、暫く經つと、あたしはやつぱり暗い氣持になつてしまひました……こんなに心の貧しいものが、こんなに德のないものが、どうして天國へはひることが出來よう、どうして神の思召にかなふことが出來よう……あたし、さう思ふと、暗い穴の中へでも落ち込んで行くやうな心持がしましたわ。先生は路加傳にある稅吏の譬を引いて、說明をして下さいましたが、あたしはあの稅吏よりも惡い人間のやうな氣がするのです……」

「さうです。僕にとつても、あのイエスの詞は「慰め」にはなつても、「眞理」とは受けとれないのです……そこが信仰の足らない點に相違ないのですが、今の僕にはどうにもしやうがないのです。僕にあの詞を言葉通りに受け入れて、この世の倫理道德を顚覆して、これに代る「天國の福音」だと確信してゐる先生が羨ましくてたまりません……」

山田はさう言つて、深い吐息をついたが、暫くすると、また詞を續けた――

「眞に僕が自分で怖いと思ふのは、愛に對してです……愛の力の强さは非常なものです。愛の强い力は僕等を天國にも連れて行けば、地獄にも突き落とします……僕等のやうな弱い人間は愛の前に注意しなければならないのです……愛の前に盲になつてはならないのです……ところが、僕のやうな弱い人間は、いつも盲になつてしまふのです……盲になつて行くのです。そして、身を傷だらけにしてしまふのです……」

ここまで言ふと、山田は背負つてゐる重い荷物の一部をおろしたやうな氣がした……すると、絹子が直ぐに答へた――

「あたしもそれは同じことですわ……愛に克つといふことに、よつぽど強い人でなければ出來ませんわ……人間の力では出來ませんわ。」

山田の心は驚きと喜びで波を打つた――

「ほんとですか。ほんとにあなたもさうなんですか。」

「ほんとですとも。あたし、これまでも始終それでしくじつて來たんですわ。」

「あなたが……絹さんのやうなしつかりした人が……」

「いいえ、あたし、ちつともしつかりなんかしてゐませんわ……」

「それぢやあ、あなたも僕と同じ意味で弱いんですね……」

「ええ。あなたと同じ意味で……」

「それぢやあ、これからお互に助け合つて行きませうか……」

「ええ。どうかさうして下さい……お願ひですから。」

「ほんとに。」

「ほんとに。」

山田の手が思はず前へ伸びると、絹子の柔かい手がそれを堅く握つた。

山田は始めてしつかりしたものを摑んだやうな氣がした。

始めて絹子の本當の心を知ることが出來たやうな氣がした。

勿論、詞の上には少しもはつきりした愛の表白はなかつた。ふたりとも弱いから、互に助け合はう――約束は唯それだけであつた。併し、その詞のうしろに――その道徳的な約束のうしろに――詞をも道徳をも超越した或堅い誓ひが信じられた。

これは愛である――山田からも近づいて來、絹子からも近づいて來て、終に出會つて火を發した愛である。

突然、山田の眼の前に寺山の顔が現れた――寂しいやうな……悲しむやうな……怨むやうな……憤るやうな……寺山の顔が、ぢつと山田の眼を睨んだ。

「おれは知らない……」

と、山田の心が叫んだ。

「おれは知らない……おれは唯自分の心を知つてゐるだけだ……そして、絹さんの心を知つてゐるだけだ……君のことは知らない……他のことはなんにも知らない……」

寺山の顔は、うしろへうしろへと下がつて行つた……小さくなつた……薄くなつた……やがて消え

た……

と、今度は森川先生の顏が現れた……

カアライルのやうな顏だ……

ストリントベルクのやうな顏だ……

カアライルとストリトンベルクを一緒にしたやうな顏だ……

二つの眼が火のやうに燃えてゐる……

口髭が山形に積まれた焚木のやうに見える……

それでゐて――それでゐて、先生は笑つてゐるのだ……女のやうな優しい笑ひを笑つてゐるのだ……

「先生を知らないとは言ひません……」

と、山田の心は恐ろしさに震へながら言つた。

「先生は知つてゐます……先生は忘れません……先生の入らつしやることは決して忘れません……」

先生の顏は、笑ひながら……いつまでも笑ひながら……うしろへうしろへと消えて行つた。

「絹さん……」

と、山田は泣くやうに言ひながら、絹子の手を更に强く握つた。

「え。」

絹子の聲は低かつたが、手には堅く力がはひつた。

「……きつと、あなた僕を助けて呉れますねえ……この弱い愚な僕を……」

「その代り、あなたもあたしを助けて下さらなくちやあ厭ですよ……」

「助け合ふのです……互に……よござんすね……」

「ええ。」

絹子は深く頷いた……

障子の紙が白くなつて來た。蚊帳の綠がぼんやり見えて來た。無心に眠る南や柴田や深田の顏も見えて來た。

山田と絹子は居ずまひも崩さず、やつぱり褥の上に坐つてゐた。向ひ合つてゐる顏と顏が段々はつきりして來ると、ふたりは靜に微笑した——靜に、靜に、地平線を昇つて來る朝の太陽のやうに……

どん、どん、どん、どん……

表の戸を叩く音がした。

「お早う……お早う……」

勢の好い聲が外でした。そして、また戸を叩く音がした。

「寺山さんよ……」

絹子は平氣で笑ひながら、山田の顏を見て言つた。それから、立ち上がつて、窓のところへ行くと、そこの硝子障子をがらりと明けた……青白い朝の空と、鉢植の緣の葉が見えた……

「お早う……」

下から又寺山の聲がした。

「……天岡君はトラホオムなんだつて……それで、けふは立てないんだつて……次ぎの船になりさうだ……だから、僕は勤めに行つて來る……みんなに宜しく……」

それなり行つてしまつたのかと思つてゐると、また下から聲が上がつて來た――

「……絹さんはどうするの……けふ東京へ歸る……」

「分からないわ……兄さんが歸れば歸るわ……」

絹子は大きな聲ではつきりと言つた。

「でも、夕方まではゐるんだらう……屋敷が退けたら、歸りに寄つて見らあ……ぢやあ、さよなら……」

もうそれで行つたんだらうと思つてゐると、また下から聲が響いて來た――

「……みんなそこに寢てゐるのかい……まだみんなぐうぐう寢てるんだらう……」

「ええ。」

絹子は咽喉の中で答へた。

「誰と誰と泊つたの……」

「深田さんと柴田さんと……山田さん……」

「まだ一人も起きてないのかい。」

「ええ。」

「おやあ、さよなら……」

「さよなら……」

今度はほんとに行つてしまつた。堅い土を踏む靴の音がだんだん遠くへ消えて行つた……絹子は直ぐと自分の寢褥へ戻つて來た……

山田はその蒲團の上にぢつと坐つてゐたが、寺山が行つてしまふと急に暗い氣持になつた……夜が明けきらぬ内に、また夜が來たやうな氣がした……

絹子と寺山の應對は、如何にも明かるく快かつた……山田は二人の前に、きのふとは全く變つた自分を見出だした……少しの不安もなかつた……少しの嫉ましさもなかつた……朝の空氣のやうに靜に

落ちついてゐた……

突然、それを摚したのは、絹子の嘘であつた……「まだ一人も起きてないのかい。」

……これに答へた「ええ。」であつた……

嘘だ……嘘だ……明かな嘘だ……幸山が戸を明けて上がつて來れば、直ぐに分かる嘘だ……

絹子はなぜそんな嘘をついたのだらう。なぜ山田だけは起きてゐると言はなかつたのだらう……

嘘をついたのは確に絹子だつた……併し、その嘘は果して絹子一人がついた嘘だらうか……なぜ、

山田は直ぐに立つて行つて、窓から首を出さなかつたのだらう……

山田は「新しい朝」が來たと思つた瞬間に、「嘘」の……「嘘」の着物を着て起きたのだ……

突然、森川先生の顔が……前よりも近く、前よりも大きく……眼の前に表れた……

基督のやうな顔だ……

バプテズマのヨハネのやうな顔だ……

基督とヨハネが一緒になつたやうな顔だ……

怒つてゐる顔ではない……併し、笑つてゐる顔でもない……威嚴と崇高とに充ち滿ちた顔だ……

「許して下さい……」

山田は心の中で苦しい聲を上げながら、蓐の上にひれ伏した……

「許して下さい……許して下さい……」

途端に、山田の頭の中に非常な迅さで展開せられたのは、自分が入信してから今日までの長い長い行路であつた……

入信

……三年前の七月二十四日のことだつた――山田は今でもその日をはつきり覺えてゐる――山田は恐らく一生その日を忘れないであらう……

……六疊の書齋に閉ぢ籠つたきり、本を讀むでもなく、物を書くでもなく、食事に呼ばれても立たずに、一日頭を抱へて考へ込みながら、時々深い溜息をついてゐた山田は、日が暮れて、部屋が暗くなると、物に憑かれたやうに、突然家を飛び出した……帽子も冠らずに……袴も穿かずに……

宮住町の小村の間を夢のやうにふらふら歩いた……或社の境内へはひつた――黒い木の葉が星の空を閉ざしてゐた……暗い屋敷町を歩いた――小石が下駄に當つて音を立てた……或坂の上へ出た……

……急な坂だ……暗い坂だ……細い狹い坂だ……坂のまん中邊が、胸の波を打つやうに、高くなつたり低くなつたりしてゐた……

山田は眼をつむつて、まつしぐらに坂を驅け下りた……坂下まで來ると、急に身を飜して、また坂

を駈け上がつた……

……二三度さうする内に、その上がつたり降りたりする距離がだんだんに短くなつて來た……だんだんに短くなつて、しまひに一つ所をぐるぐる旋回し始めた……丁度、その前に一つの古風な衡門があつた……

……門の中には、樹の大きな葉が黒く高く繁つてゐた……遠くに藏の壁が薄白く見えた……

……突然、門の中に澤山の灯が動いた……手丸や弓張に藤の丸の黒い大きな紋が見えた……布に包まれたやうな人の聲がした……

……山田は門を飛びのくと、犬のやうに坂を駈け上がつた……芙蓉の花の匂のする生垣の蔭にうづくまつて、二つの眼を火のやうに光らせた……

……小石をぎりぎり車の轢る音がした……提灯が五つも六つもその後に續いた……見る間に、光も音も消え失せた……寂寞……救ひ難い寂寞が來た……星も默つてゐる……土も默つてゐる……山田は自分の涙の地の上に落ちる音を明かに聞いた……

……山田は自分の體が深い深い暗い暗い、果しもなく深い暗いところへ、ずうんずうんと落ちて行くやうな氣がした……やがて、その落ちて行くといふことも感じなくなつた……全く感覺を失つてしまつた……

……夢から覺めるやうに山田が意識を囘復した時、山田は或高い土手の上を歩いてゐた……土手の下には、黒い水がぢつと動かずに星を浮べてゐた……

……山田は空を行くやうに、土手の上を滑つた……土手が盡きると、ふはりと道の上に降りた……堀を横に切る土の橋を渡つた……明るく灯のついてゐる店があつた……

……山田は糸に引かれるやうに、その店の中へはひつた……「正宗を一本。」……さういふ聲が山田の口から出た……

……袂の中でちやらちやら金の音がすると……黄いろい水のはひつた硝子の瓶が、山田の手に下がつた……

……太い擦れた暗い板が眼の前にあつた……山田は喘ぎ喘ぎ匍ふやうにして、それを登つた　長い石垣に手を支へながら、一歩一歩重い足どりで歩いた……

……大きな黒い門を潜ると、明かるい窓が太陽のやうに眼の前で輝いた……山田は吸ひ込まれるやうに中の口の格子戸を明けた……

……紫檀の大きな机の一部が、青い笠をした臺ランプで光つてゐた……丸い光の中にひろげられてゐたのは、横文字の詩集と書き散らされたノート、ブックであつた……光の蔭にほんやり見えたのは、白い菊子を一輪さした細長い小さい花瓶だつた……

友達は顔も上げずに、忙がしさうに鉛筆を動かしてゐた……書いた……消した……また書いた……また消した……帳面が見る間に暗く汚れて行く……

……「どうした。」友達が顔を上げた時、山田の眼は帳面に吸ひつけられてゐた……

……終の矢は放たれしなり

今、矢壺一矢のこらず

行け――！かれが軀になひて

死の床の暗きに入れよ

冷き冷き心に埋めよ

「戀」は死したり

……「どうした。」……友達はもう一度かう言つたが、山田はやつぱり同じところを見詰めてゐた……

……否よ否それよりも疾く

かの女みづから死なむ

……それ時雨女に降らず

世を照らすまどかの日さへ

女には照り輝かで

光こそ闇となれはよ
青草も女に萌えず
川水も淀み流れず
美鳥も歌はざればよ
「鯉」の鱗の光り足らむまで……

……「畜生。」と一聲叫ぶと、山田は瓶の口から黄いろい水を、どくんどくんと飲んだ……

……「酒か。」

……「うむ。」

……「貴様、飲めるのか。」

……「飲めない。一滴も飲めない。」

……「それはをかしい。」

……「おれもをかしい。」

……山田は急に大きな聲を出して笑つた…………

椰子の花が散る程笑つた……

……「酒に目高が入るな。」

……「おれには分からない。」

……「ふむ。ここに好い肴がある。」

……山田はいきなり撫子の花を摑むと、それをむしやむしや食べてしまつた……

……「貴様、どうしかしたな。」

……「けふは七月二十四日だ。」

……「さうだ。」

……「けふは七月二十四日だ。」

……「それがどうした。」

……「貴様、忘れたのか。」

……「あつ。」と言つて、友達が何か思ひ當つたやうに、悲しい顔をした時……山田はもう外の暗闇を歩いてゐた……

……星が一つ一つ空でぐるぐる廻つた……時々石垣が横つ腹を打つた……足が横へ動いたり後に動いたりした……山田はずるずる暗い坂をずり落ちた……

……二階家が黒く聳えてゐた……二階だけ雨戸が締まつてゐないで、障子が明るく光つてゐた……衣紋竹にかかつた着物が、首縊りのやうに、だらりと黒い影を映してゐた……

……「わつ。」

……山田はめちやめちやに駈け出した……轉んだ……起きた……また駈け出した……

……また堤を横に切る土の橋の上に出た……空にはもう星がなかつた……水も暗かつた……

……堤と土手の間に、汽車の通る道があつた……土の橋は丁度その上にあつた……橋の下にはトンネル前になつてゐた……

……山田はトンネルの上から、汽車の通る道を見おろした……まつ暗だ……まつ暗な穴だ……體がふらふらする……ともすれば、前へ落ちさうにする……

「まだだ……まだだ。」山田の頭の中で誰かが囁いた……

……突然、血のやうな色をした火が、暗闇にぽつかり浮いて見えた……火は上へ息を吹きながら、非常な速さで近づいて來た……ごうッ……ごうッ……といふ音がした…………

……「今だ。」……山田が飛び込まうとすると、うしろから誰かに抱きとめられた……左右の肩のうしろから、大きな力のある手が廻つて來て、身動きも出來ないやうに抱きすくめられた……

……また、ごうッといふ音がした……その音はもう力が弱かつた……ずつと、うしろの方へ行つてしまつてゐた……

……「先生。」山田は抱かれた手を力一ぱい振りほどいて、突撃するやうに後を振り向いた……誰も

るなかつた……唯大きな暗闇が自分の前にあるだけだつた……

＊　＊　＊

山田が千駄ヶ谷の森川先生のところへ、始めて姿を現したのは、その明くる日のことだつた。

山田がその日先生のところへ來ることは前から定つてゐた。彼がその日ここへ來ることと、彼が前の日に經驗したこととは、全く關係がなかつた——

その頃、森川先生は或評論雜誌を出してゐた。それは政治にも教育にも文學にも科學にも筆を揮ふ雜誌だつた。その雜誌の特色は火のやうな熱罵と氷のやうな冷嘲だつた。しかも、その蔭には信仰と知識とに立脚した力強い基礎があつた。

凡そ、その頃の青年で、少しでも情熱のある者は、みんな飛びつくやうにしてこの雜誌を貪り讀んだ——山田のゐた高等學校にも、多數の愛讀者があつた。中でも、山田はこの雜誌を通して、この雜誌の主筆たる森川先生に熱烈な愛慕を抱いた。

この雜誌の主催で、森川先生を中心とする夏期講習會が企てられた。山田は逸早くその會員になつた——一つには、眼のあたり先生の風貌に接したかつたのである。一つには先生自身の口から溢れ出る火のやうな思想が見たかつたのである。

山田の戀愛問題は、勿論それと關係なしに、前から續いてゐた。それが偶然、夏期講習會の第一日

の前の日に最後の破綻を見たのである。

山田は森川先生をも夏期講習會をも忘れて、暗い苦惱に一日を過ごした。彼は「戀の葬式」の行列をまざまざと見た。親友の家で狂態を演じた。最後に死を決した瞬間、彼は何者にか抱きとめられた――その「何者」かは「何者」でもなかつた。

山田は家から今出て來た人のやうに、ぼんやりと千駄ヶ谷を訪ねたのである。

そこには全く別な世界があつた。

青く晴れた空があつた。緑に光る櫟の葉があつた。希望と幸福に輝く青年達の顔があつた。

北海道の果から來た小學校の教師があつた。信州の山奥から來た百姓があつた。西の都から來た桶屋の子があつた。商人もゐた。軍人もゐた。船乘りもゐた。牧夫もゐた。五十人にあまる青年が、いづれも書籍を通して日夜提撕してやまない森川先生の人格に、始めて親しく接する喜びと、やがて先生自らの口を溢れて出る崇高な思想と熱烈な信仰とに依つて、しよひ切れぬ程しよつて來た人生の疑問を解決する希望とに、胸を躍らせ、眼を見張り、頬を赤くして待つてゐた。

多くは互に見知らぬ同志であつた。それ故、常套な挨拶もなければ、無益な饒舌もなかつた。青年達は櫟林のそこここに、偶然なグルウプを七つも八つも作つてゐたが、一言も口を利くものはなかつた。支配するものは希望に充ちた沈默であつた。青年達は互の眼の内に同じものの光るのを見合つて、

一層「求める心」に火と熱とを加へた。

そこには暗い土手もなかつた。暗い堀もなかつた。汽車道に臨む土の橋もなかつた。

唯一人の人間の狹い心の中で苦しみ悶える「戀愛」のやうな問題は影だに見ることが出來なかつた。單に一人の男と一人の女との關係から起る、小さな束縛、小さな煩悶、そんなものの匂さへ嗅ぐことは出來なかつた――求道に燃える青年達の前には、境界を知らぬ全宇宙があつた。數を知らぬ全人類があつた。神の創造があつた。自然の神秘があつた。

山田は力強く脊中を打たれて、一度に愚な夢を覺まされたやうな氣がした。彼はこの純眞な青年達の明かるい顏の前に、自分の暗く汚れた心を恥ぢた――

「おい、君も來たのか。」

さう言はれて、振り返ると、同じ文科にゐる柴田が、理科の南と一緒に、牡丹色のリボンの殆ど灰色に褪めた古い麥藁の制帽を冠つて立つてゐた。

山田は意救はれたやうな氣がして、思はず、

「難有う。」

と、言つた。

「難有うつて、君、先生と前から關係があるのか。」

「ううん。さうぢやない。實は一人も知つた人が來てゐないので、少し心細くなつてゐたところへ、突然君達に聲をかけられたんで、思はずお禮を言つてしまつたんだ。」
「は、は、は。弱蟲だなあ。」
と言つて、柴田は面白さうに笑つた。
「まだ、あつちにこんだ卒業した工科の人が一人と。こんだ理科の二年になつた人が一人と、それから、君の知つてる小寺が來てるぜ。」
山田さも嬉しさうに言つた。
「ほう、そんなに學校の人が大勢來てゐるのかい。そいつは愉快だなあ。」
と、山田は稍浮き浮きして言つた。
「學校で先生の雜誌を愛讀してゐる奴はうんとゐるんだから、もつと來なけりやあならないんだが、やつぱりいざとなると恐くなるんだね。そこへ行くと、吾々は勇氣があるんだね。つまり吾々は學校の代表者だと言つても好いんだね……」
柴田はここまで言ふと、急に山田の顏を物珍しげに見た。
「それにしても、君が來ようとは思はなかつた。こいつは全く意外だつたよ。」
「さうかも知れないねえ。」

と、山田は力のない返事をした。
實際、山田がこの會に入會の申込をした時の心持は、さう眞劍なものではなかつた。森川先生の文章を好んで讀むには讀んでゐたが、それは單に皮肉辛辣な文章として耽讀するに過ぎなかつた。或は自分の全く知らない科學の知識が人生の問題に密接な關係があるものとして披瀝されてゐるのに興味を感ずるに過ぎなかつた。天性樂天的に生れた山田は人生の暗い方面を思ふことが少なかつた。文學も詩も彼にとつては、常に晴天であり、常に奇蹟であつた。それ故、彼には惱みの內に道を求めて、その道を森川先生の文章に見出だしたやうな經驗はなかつた。彼は唯單に森川先生の文章と知識とに若い好奇の渴を癒すに過ぎなかつた。先生に對する憧憬も、その頃名の高かつた小說家の尾崎紅葉や幸田露伴に對する憧憬と變りがなかつた。若し、尾崎紅葉が夏期講習會を催したら、同じやうに彼は入會の申込をしたかも知れなかつた――山田はさうした心持から――單に暑中休暇の幾日かを多少有用に使はうといふ位な考へで――兎に角にもこの會へ入會の手續をして置いたのだつた。
それ故、柴田に意外だと言はれても、決して腹は立てなかつた――侮辱だとも感じなかつた――
「全くさうだよ……僕は、まあ、先生の顏を見に來たのさ……」
山田は卑下するやうに笑ひながら、もう一度かう言つた。
併し、山田の本心は、もうそんなところにはなかつた。唯一夜を境にして、きのふの山田とけふの

山田とては、まるで人間が變つてゐた……

十四の春に、木の芽の萌るやうにぼんやりと思ひを懸けた少年の戀が、七年光陰を過ぐる間に、根を張り、枝を繁らせて、二十一歲の今日では既に一生を托すべき大きな横木になつてゐた……その唯一つの人生の支柱が、突然ゆうべ切り倒されてしまつたのである……

山田は柱が倒れると一緒に、自分も倒れてしまはうとした……併し、それは「或見えざる力」によつて支へ留められた……その「力」は何であつたか……それは果して「新しき支柱」であつたか……

山田はゆうべ一晩暗中を摸索したが、終にその本體を掴むことが出來なかつた……

山田は日の光を見ると、夢のやうにふらふらここまでやつて來たが……彼はいつの間にか「求める人」になつてゐた——何かを、何者かを「求める人に」なつてゐた……

柴田や南がそれを知らう筈はなかつた。二人はやつぱり山田を、いつもの山田として見てゐた。いつもの、明かるい、樂天的な山田として見てゐた。

併し、山田は意志の弱い青年だつた。彼は友達が自分について持つてゐる概念に、抗議を入れる勇氣がなかつた——それをぶち破る力がなかつた。

實際、彼はまだ現在の自分をはつきり見ることが出來なかつた——自分で自分を信ずることが出來なかつた——それ故、柴田に向つて自分のした返事も、必ずしも嘘だとは思はなかつた……

そこへ、強度の近眼鏡をかけた、丈のひよろ長い小寺がやつて來た。小寺も科は違ふが、南や柴田と同じやうに、山田の中學時代からの知己であつた。

「やあ。」

「やあ。」

二人は互に不思議なところで會つたといふやうな顔をした。

「どうだい。小寺君。山田がここへ來てゐるとは思はなかつたらう。」

柴田は山田自身に向つて言つたことと同じやうなことを、また小寺に向つて言つた――併し、南にもさうであつたやうに、今度のこの詞にも嘲りや蔑みの調子は少しも聞かれなかつた。柴田は意外なところで意外な同志を見出だした喜びを、反語的に小寺に傳へようとしたのである。

併し、小寺はその詞をまともにとつた――

「さうさね……併し、僕だつて、ここへ來る積ぢやないよ。實を言ふと、別にしつかりした動機があつて、來たわけでもないんだからね。まあ、先生の顔を見にでも來たんだらうよ……」

善良な小寺は、正直に自分の態度の曖昧なことを告白した。

「さう言やあ、僕だつて……恐らく柴田だつて同じことだよ……」

と、南は眼鏡のうしろで眼をぱちぱちさせながら言つた――

「柴田は山田君のここへ來てゐるのを意外だと言つたが、山田君の方から言へば、柴田のここへ來てゐるのがもつと意外かも知れないよ……僕なんざあ、まあ柴田に引つぱられて、來たやうなもので、意外の方ぢやあチャンピョンだよ。」

さう言つて、南は無邪氣に、あたり構はず笑つた。

「さう言へばさうだよ。森川宗は今の青年の間の一種の流行だ。僕等もその流行を追つてゐるのかも知れないよ……」

柴田もかう言つて、南の說に同じたが、やがて、嬉しさうに笑ひながら――

「併し、中學時代からの同志が四人もここで落ち合つたのは奇蹟だね。これは全く愉快だよ。」

と言つた。

小寺は暫く默つて何か考へてゐたが、やがて後の方を振り向いて――

「けど、あそこへ來てゐる工科大學の天岡といふ人と、理科の深田とかいふ人は、實際まじめらしいね。實際、切實な求道心からここへやつて來たものらしいね。僕は今ちよつと挨拶をしただけだつたが、なんだか恥づかしいやうな氣がした……」

「ほんとだ。工科なんてふだん馬鹿にしてゐたが、ちよいと見ただけでも、あんな精神的な顔つきをした人がゐようとは夢にも思はなかつた……それに、あの深田とかいふ人もまじめな人らしいね。」

と、柴田が言つた。

「あの人は又ひとりでに頭の下がるやうな人だ。」

「僕はあゝいふ人の前へ出ると、自分のだらしなさがつくづく感じられるよ。」

小寺と南が續けてかう言つた。

丁度、その時、話題にのぼつた二人が向ふから近づいて來た。

天岡は浴衣に袴をはいて、眞新しい角帽を冠つてゐた。小作りではあるが、骨節がしつかりしてゐて、顏にも健康な血の色が見られた。

深田も、やつぱり和服に袴で、一高の麥藁帽を冠つてゐた。體格は天岡より遙に大きかつたが、どこかに病的な陰影が見られた。顏も陰鬱に青白かつた。

併し、一目見て、二人とも善良な青年であることは分かつた。南や柴田や山田などには到底見ることの出來ない感情の純朴と意志の強固とが、その眉宇の間に見られた。

二人は笑ひながら、三人の側へ來た。山田一人が始めてなので、小寺が紹介の役を勤めた。

「文科の山田君です。」

「僕は工科の天岡です。」

「僕は理科の深田です。」

二人は自分で名のりを上げた。
五人は暫らく一つところに立つてゐた。まだ馴染が薄いので、誰も口を利かなかつた。併し、同じ學校のものが偶然ここへ集まつて來たといふことだけで、互の間にもう親睦があつた。
「まだ始まらないやうですか。」
暫くすると、柴田が深田に向つて、かう聞いた。
「なんだか、先生のところに客があるやうです……」
かう言つて、深田は陰鬱な顔をした――
「何か少しごたごたしてるやうです。先生のところへ、何だか談判にやつて來てゐる人間があるらしいのです……」
「あつちで聞いたら、雑誌ももう出ないやうな話です……」
深田と天岡が續けてかう言ふと、三人は急に不安に襲はれた。
「どうしたのでせう。」
南が心配さうに訊くと、
「よくは分かりませんが、雑誌に關係してゐる人の中に、先生に反旗を飜した人があるらしいのですね……」

天岡はかう言つて、恐れるやうに先生の住居の方を見た。
「誤解だ。また先生が誰かに誤解されたに違ひない……」
さう言つて、柴田は小さい憤りを顔に現した。
柴田のこの心持は、南にも山田にもあつた。深田も天岡も同じだつた。
五人は森川先生を信じ切つてゐた。社會が先生をどう批評しようと、どんな事件が先生の身の上に起らうと、五人は決して先生を疑はなかつた――五人は文章を通して見た先生以外に、先生の存在を思はなかつた。
はじめて先生を訪ねて來た、その夏期講習會の第一日に、既にかうした不安に會ふと言ふことは、普通人の疑惑を招くに十分だつた。併し、森川先生が由來社會の「誤解」の標になつて迫害を受けてゐることは、五人もよく知つてゐた。
森川先生は、日本の政治をも實業をも教育をも宗教をも、常に痛罵してやまなかつた。それ故、政治家からも、實業家からも、教育家からも、宗教家からも、常に憎惡の眼を以て迎へられた――それも五人はよく知つてゐた。
それ故、五人はこの場合、先生を疑ふどころか、寧ろ先生の安危を憂ひて、事が起つたら駈けつける覺悟までしてゐた……

併し、何事も起りはしなかつた。

暫くすると、先生の家から二三人の男が出て來て、險しい顏をしながら、山田達の立つてゐる側を通り過ぎると、その儘默つて、外の方へ出て行つてしまつた。

……一人は眼鏡をかけて、頭を短く刈つた、づんぐりむつくりした男で、麥藁帽子の縁のそつたのを、手に持つてゐた。一人は酒に醉つてでもゐるやうに顏の赤い、目鼻立の美しい、整つた體格の男で、これはリボンに汗のしみ出した茶色の中折を冠つてゐた。もう一人は、まだ二十一二にしか見えない青年であつて、鼻の下にも顎の下にも濃い髭を生やした、眼のぎよろりとした、色の黑い男だつた――三人の默つてゐるやうな、泣きたいのを堪へてゐるやうな顏つきが、山田達の心を暗くした――

「あれはどういふ人達だらう。」

暫くして、獨語のやうに柴田がかう言ふと、

「みんな雜誌の編輯に關係のある人達ださうです――」

と、深田が眉を顰めて言つた。

「さうすると、東村だの、齋藤だのつて人達なんですかねえ……なんだか、みんな陰險な顏つきをしてゐますねえ――」

南がかう言ふと、柴田もまた、

「一目見て、先生とは合ひさうもない人達だといふことが僕にに分かるなあ……ああいふ連中を相手にしてるんぢやあ、先生も堪らないだらうよ。」

と言つた……

山田は自分の身の上に重大な變化があつたやうに、森川先生の一身上にも何か大きな出來事があつたらしいのを、不思議な運命の一致であるやうに考へた。勿論、先生の場合は、自分の場合のやうに、子供らしい夢のやうな話ではないに違ひないと思つた。併し、山田は一刻も早くその眞相が知りたかつた。そして、若し出來るなら、先生の爲に泣いて上げたいと思つた。そして、若し出來るなら、自分のことをも告白して、自分の爲にも泣いて貰ひたいと思つた……

ガラン……ガラン……ガラン……

突然、小學校で鳴らす鈴のやうな音が、林の中で起つた。

山田は夢から覺めたやうに、眼を見張つて、その方を見た。目の小さい、頭の毛の薄い、山羊のやうな細い鬚を顎の下に生やした青年が、好人物らしい微笑を浮べながら、さも愉快さうに、大きな鈴を振つてゐた――それは、これから何かが始まるのを知らせるよりは、先生の家での嗜い出來事が無事に濟んだのを知らせる喜びの鐘のやうであつた。

「さあ、始まりますぜ……」

皆がかう言つて、みんなを促した丁度その時、先生の家から、一人の丈の高い、髭の濃い、眼の鋭い人が、茶色の洋服に書生下駄を突つかけて出て來た――

「先生だ……」

五人は同時にさう直感した……

會場は樫林を隔てた隣りの私立女學校の階下の一室だつた。そこは日本の裁縫でも稽古する教室と見えて、疊が敷いてあつた。

五人が縁側からそこへはひると、もう會員はみんなあつまつてゐた。やがて、正面のテエブルの横へ現れたのは、果してさつきの茶色の洋服を着た、髭の濃い、眼の鋭い人だつた――「わたくしは先づ、わたくしの身の上にけふおこつた一大變動に就いて、諸君の御清聽を煩はさなければなりません……」

先生は机の上に置いてある粗末な土瓶から、水を一杯コップについで、それを一口飲むと、直ぐかう言つた――力強い聲であつた、淀みのない錆音であつた。火のやうな熱情は、冒頭の唯一言にも感ぜられた。

「……この三年間、諸君の愛讀を辱うしてゐた『東京インデペンデント』は今年今月今日、廢刊のやむなきに立ち至りました……」

先生はかう言つて、眼をつぶつた。そして一瞬間口をとざした。眉と眉との間に、暗い深い皺が刻まれた――一座は寂として、咳一つする者がなかつた。

併し、先生は直ぐと眼を明いた。その時の先生はもう希望に輝くやうな顔をしてゐた。

「……理由は申しません。また訊ねても貰ひたくないのです。兎に角、けふわたくしは又元通りの獨りぼつちになつてしまつたのです――わたくしはわたくしの今までの生涯に於いて、三度も四度もこれと同じ經驗を嘗めてをります。わたくしが最後に新聞社を退いて、この千駄ヶ谷に社會的の隱遁を企てました時、わたくしの周圍に集まつて來て、日本の社會に絶望してゐるわたくしを、再び社會へ引つぱり出したのは、『東京インデペンデント』の同志であります。この若い同志は腐敗しきつたこの日本に稀に見るところの純眞廉潔な青年達でありました。わたくしはこの青年達をふかく愛しました。青年達もこのわたくしを愛して呉れました。わたくしはこの三年間ほど愉快に筆をとつたことはありませんでした……」

先生はかう言つて、過去を追想するやうに、眼を上げて天井を見た。

「……ところが、晴天の霹靂とでも申しませうか、月夜の迅雷とでも申しませうか、今年今月今日、しかも諸君にお目にかかる唯の十分間前に、わたくしはかくも愛し愛された同志に捨てられてしまつたのです。それは、わたくしの信仰が、わたくしの宗教が、わたくしのこの講習會で聖書をのみ説か

うとしたことが、しかも、わたくし唯一人でこの十日間聖書に就いてのみ話さうとしたことが、皆様をわたくしから去らせてしまつたのです……その他の事は申しますまい。また訊ねて貰ひたくないのです……」

と、先生はもう一度前に言つたことを繰り返して言つた。

「……一時はわたくしも為すところを失ひました。併し、幾人の同志がわたくしを捨て去らうとも、全愛の神はわたくしをお捨てになりませんでした。種々の妨害があつたにも関らず、この会場に容易に借りることが出来ました。諸君は路を遠しとせずして、或は東北から、或は信州の山奥から、或は山陰から、或は四国の邊陲から、かくも多数に集まつて来て下さいました。中にも熱心な方は、ここに寄宿をして、この神聖な十日間を、わたくしどもと起臥を共にすることになさいました。諸君が唯単にこの一小品川を[illegible]あまつりに来られた方々でないことは、わたくしの信じて疑はぬところであります。また諸君が唯単に「東京インデペンデント」の愛読者として、一種の読者大会に臨むやうな暢氣な心持で集まつて来た人達でないことも、わたくしの堅く信じてゐるところであります……」

島田も南も小寺も……山田も、この詞を聞くと冷やりとした。

先生は詞を續けた。

「――諸君は唯にここへ人間としての道、即ち神の道を求めに来られたのだと思ひます。若しさうで

なければ、諸君は忽ち失望をなさるだらうと思ひます。若し、諸君の内に「東京インデペンデント」の愛讀者大會のやうな心持で來られた方があつたら——また、この小森川を崇拜して來られたやうな方があつたら、どうぞ遠慮なく申し出て下さい。すぐに會費をお返し申しますから……」

先生はかう言つて、答を求めるやうに沈默した……誰もなんとも答へるものはなかつた。

南や小寺や山田や柴田の、この會へはひつた動機には、實際先生が今言つた南方の場合が含まれてゐた。併し、先生の稍皮肉な、併し實は率直な詞を聞いてゐる内に、自然にそれでは濟まないといふ氣がして來た。如何にも先生の言ふ通りだ。これは心を入れ替へなければならないといふ氣持になつた——若い者の單なる若さから生れた渇仰が、忽ちに自己を反省した嚴肅な求道の心と入れ替つた。先生の熱辯は、考へる暇もなしに、みんなの動機を淨化してしまつたのである。

山田達は耳語(ささやき)一つ交さなかつたが、互の心の急激な變化を互の眼の色に讀み合つた。

「どなたもさういふ方はないのですか。」

先生はもう一度迫るやうに、かう言つた。誰も答へるものはなかつた。一座は水を打つたやうに寂としてゐた。

「どなたもないやうです。わたくしは諸君がわたくしの信ずる通りの人達であつたことを神に感謝いたします。」

さう言つて、先生は黙禱でもするやうに眼をつむつた、が先生は直ぐと又その鋭い眼を明いた。

「……『勇者は一人立つ時最も強し』とは詩人シルレルの詞であります。わたくしは今にして一層この詞の深い意義を悟りました。若しわたくしが神の力による勇者の一人であつたら、わたくしは孤獨になつて、益強くならなければならない筈であります。わたくしが孤獨になつて前より強くなることが出來たら、それは神の力の現れだと言はなければなりません。神の力は如何なる微小なものを通しても現れるに違ひありません。わたくしはその示現を信じて疑はないものであります……」

先生はさう言つて、心に堅く決するところがあるやうに、前の方をぢつと見詰めた

「……ホウヰルも放逐されたのです。ロオジヤア・ヰリアムスも放逐されたのです。リヰングストオンは倫敦傳道會をやめて亞弗利加探檢に從事した爲に英國の傳道會社から棄てられました。米國の宣教師ァロセツトは、支那の窮民救助に從事した爲に、本國からの支給を絶たれて、支那海の下等船室の中で窮死しました。さういふ例はまだ澤山にあります。友人に捨てられ、愛する者に讒謗され、同僚に罪人扱ひにされるものは、決してわたくし一人ではないのであります。『世ににくまるるは、われのみならず。イエスは我よりもいたくせめらる。』です……」

先生は瞑想するやうに、また天井をぢつと見上げた。

「――併し、わたくしは自分だけが正しくて、わたくしを捨てた人達がみんな間違つてゐるとは決し

て思ひません。わたくしに缺點の多いことは神樣が御存じであります。わたくしの言行が常に矛盾してゐることは、わたくし自身も認めてゐるのであります。それ故、わたくしはわたくしを捨てた人達を決して怨まないのであります。あの人達の中にも必ず君子人のあるあつて、世道人心の爲に盡した功績の決して鮮少でないことも、わたくしの十分認識するところであります。わたくしは自らリベラルだと稱する人等から憎まれても、彼等を憎むことは出來ないのであります。わたくしは如何に往々、自分のやうにリベラルでない人を目して、或は迷信だと嘲り、或は狹隘だと言つて非難する場合を幾度か見ました。わたくしはわたくしの信じ且愛する神に、どうか眞正のリベラルな心を與へ給へ、しかして、自分を捨て去りし人々に對し、長く寬容なるを得せしめ給へと祈るより外、爲すべきことを知らないのであります……」

かういつた時、先生の心の中には明かに或苦しい戰ひがあつた。それは、先生の眉の引き捐るやうに鈍くなつたのにも、急に先生の顏に暗い影がさしたのにも見られた。併し、先生はいつもさうであるやうに、直ぐとその憂鬱と焦燥とを追ひ拂つて、明かるい平和な顏つきに歸つた……

「今わたくしは全く一人になりました。併し、かく一人となつたが爲に、何人にも氣兼をせずに、諸君と寬いで話をすることが出來るやうになり、誰に遠慮もせずに、聖書の研究をすることが出來るやうになり、心置きなく至愛の神と交通することが出來るやうになつたことを思ふと、歡喜と感謝に身

の指すところを知らないのであります……」

先生はここで詞を切ると、また新しい水をコップに一杯ついで飲んだ。夏の朝の日がそろそろ室内を蒸し始めた。會員の中には汗を拭くものがあつた。居ずまゐを崩すものがあつた。併し、先生は少しの疲れをも見せずに語り續けた――

「……さて、前置が大變長くなつてしまひましたが、さういふわけで今度の講習會は全部を聖書の研究に捧げたいと思ひます。そこで、けさの題目は、なぜ、わたしが聖書研究に從事するやうになつたか。その由來をお話したいと思ふのであります。元來わたくしは農學校の出身でありまして、特別に聖書の講義などは聞いたことがないのであります。ところが基督教を信じてから二十餘年を經て、ますます聖書の研究を必要なことに思ひ、かうして大膽にもそれに關する講演までするやうになつた。その間には長い經歴もあれば、込み入つた因緣もあるのであります。勿論、わたくしはこれを宣教師に強ひられたこともなければ、又これを說かなければならない世間的の義務も持つてゐなかつたのです。兩親に要求されたのでもなければ、友人に勸誘されたのでもないのであります。それにも拘らず、わたくしがこれを畢生の事業としようと決心するやうになつたのは、蓋し已むを得ざる事情から出たのです。甚だ高慢な申しやうではありますが、少くともこのことだけは、極めて清潔な思想から湧いて來たことであつて、毫も私的感情がこれを促したのでないことは、明確に斷言することが出來るの

であります……」

先生の辯舌の舟は、急流奔湍を過ぎて、やつと今大河へ出た——廣々として靜に流れる水の面を暢び暢びと滑る樣があつた——

「……第一にわたくしを聖書の研究へ引き入れたのは、わたくしが學校を出てから、最初に自分の專門とした漁業問題でありました——わたくしは農學校で水産學を學んで、特にこの學問に興味を持つたのです。そして、この學問を應用して日本の富を計らうとしたのです。ところが、忽ちにして、わたくしはわたくしの爲事の全く徒勞であることを悟りました。それは外でもありません。日本の漁業の振はないのは、資本の缺乏や漁業教育の不完全である爲ではなくして、道義が頽廢してゐるからだといふことに氣がついたのです。即ち、漁業の問題は、取りも直さず宗教道德の問題だと思ふやうになつたのです。忘れもしません。わたくしが自分の本職としてゐた漁業を見棄てたのは、今から十四年前の夏、丁度今頃のことで、たまたまわたくしが漁業調査の爲に房州の方へ出張した時のことでした。あすこの北條といふところに赤坂仁左衛門といふ老人がありまして、わたくしは毎晩のやうに、この老人と四方山の話をしました。誠に質朴な老人で、漁業の方では、實際上の深い經驗を持つてゐました。何でも思ふことをすこしも飾らずに言ふので、わたくしはそれが好きで、暇さへあれば、この老人を訪ねたのです。ところが或晩のこと、この赤坂老人が頻に嘆息して言ふには、いくら鮑の繁殖

ふ計つたところで、いくらか漁船を改良したところで、いくら新工夫の網道具をこしらへたところで、結局それは漁師達を助けることにはならないのだ——と、かう言ふのです。成程漁師の生活ほど哀れなものはない。今年は大漁だと言ふと、もう直ぐ料理屋へ駈け込んで、一夜に百金二百金を使ひ捨てる。儲けた金で借金を拂はうなどと考へるものは一人もない。況んや貯金をしようなどといふものはないのです。して見れば、新工夫を考へてやることも、それで利益の得られるやうにしてやることも、畢竟は彼等の放蕩の手傳ひをしてやることになるのです。わたくしは、かういふ人達に金をやるのは、却つて國家を貧しくする所以ではないか——丁度、さう疑つてゐたところなので、わたくしはひどく赤衣老人の詞に動かされたのです。それから、その後越後や佐渡の方も巡回して見ましたが、いつも同意見同結論に到達しました。そこで、わたくしはもう續けて漁業に從事する勇氣がなくなつてしまひました。——」

先生はかう言つて詞を切ると、また一杯水を飲んだ。

「……そこで、今度は救濟事業を研究して見ようと思ひまして、亞米利加へ渡つて、貧百姓病院へはひつて見ました——白痴を相手にする看護人になつたのです。わたくしはここでもあらゆる犠牲的な苦辛をして見ました。白痴の尻まで拭つて見たのですが、やつぱりここでも又疑惑が起つて來ました。考へて見れば、凡ゆる救濟者その者は詰まらないものである。救濟事業とは放蕩息子の梅毒を治療してや

るやうなものです。そこで、あつちの或大學の有名な先生を訪ねまして、遠廻しに教育の方針を尋ねて見ました。ところが、その先生の答が面白い……」

先生はかう言つて、その「答」のどんなものであるかを樂しませるやうに、ちよつと默つた。併し、その「答」は極めて單純なものであつた。

「……先生は靜に口を開いて、かう言ふのです――「わたしに教育の方針などといふものはない。わたしは唯主イエス・キリストの導きに頼るのみである」と。わたくしは先づこの一語に打たれました。それから、やがて先生の書齋へ通りますと、先生は一枚の寫眞を出して見せて――これは二年前に亡くなつた妻の面影である。彼女は既に天國へ行つて、あなたやわたしの來るのを待つてゐるのだ。――さう言つて、兩眼に一ぱい涙を湛めてゐるのです。わたくしは、もう堪らないやうな氣持がしました。が、それと同時に今までの疑惑が一度に晴れてしまひました――もう學問の目的も分かつた。事業の目的も分かつた。たとひ政治や歷史を研究しても、たとひ慈善事業を調べても、同胞兄弟を救ひ出されて神の榮光にあづかることが出來なければ、何の爲の學問ぞ、何の爲の慈善事業ぞと、一圖にさう考へ込みました……」

「併し、さうなつても、わたくしはまだ特別に聖書を研究しようといふ氣にはなりませんでした。聖書の註釋などは、いくらもやる人があるのだから、これは人に任せて置いて、自分はやはり農業か

著述に從事しよう。新聞記者になつて正義人道の爲に筆を揮はう。教育家になつて青年に身を任ねよう……さういつた考へにのみ支配されてゐたのですが、日本へ歸つてから、だんだん宗教界の樣子を見ますと、誠實に又熱心に聖書そのものを研究しようといふ人は曉天の星の如くでありまして、殊に外國の神學校を卒業して來た先生達が、日本へ歸ると、銀行の支配人になつてしまつたり、商店の番頭になつてしまつたり、政府の役人になつてしまつたりするのを見ますと、不肖わたくしのやうなものでも、傳道の一念俄然として奮起するのを禁じ得なかつたのであります。かやうなわけで、わたくしが諸君の前に聖書の解釋を試みるのは、父母の要求や、教師の勸誘や、肉體上の境遇からするのではなくて、實に已むを得ざる事情因緣からするのであります……」

先生はここまで話すと、始めて衣兜からハンケチを出して額の汗を輕く拭つた——併し、先生は直ぐと文詞を續けて——

「さて、聖書學者と、聖書のことばかり言へば、多數の人はそれを煩さがつて、聖書研究も好いが、たまには社會事業をやれとか慈善事業をやれとか言ふのです。勿論、それもやらないではない。新聞などは殊に好きで、やる段になれば、可なり一生懸命になるのですが、併し、ほんとにやつて見て、一番手答のあるのは何かと言ふと、やつぱり天國(てんごく)の福音(ふくいん)を說くことであります。しかも、これ以上に有益な仕事は世の中にありません。人間が死ぬ間際になつて、公債證書がいくらになつたとか、大き

な器械を發明したとか、學校をいくつ立てたとか言つたつて、そんなことで安心して死ねるものではありません。どれだけの人間が罪を悔い改めたか、どれだけの人間が吾々の紹介によつてキリストの救ひにあづかつたか、それを聞きながら死ぬより愉快なことはないのであります……

「わたくしが北海道の農學校へはひつた時分に、亞米利加から來てゐた教師でマシウスといふ人がありました。はじめて吾々に基督教といふものを傳へて吳れた恩師は、このマシウス氏であります。マシウス氏の歷史は、明治の日本宗教史の肝要な一部分を領してゐると言はなければなりません。マシウス先生がなければ、この夏期講習會もなかつたのです。マシウス先生がなければ、かく申すわたくしも一箇の西野文太郎で終つたに違ひないのです……先生が北海道にゐたのは、僅に八ヶ月でした。最初橫濱を立つて、北海道へ來る時、聖書を五十冊買ひ集めたものです。何しろ、その時分のことですから、人はその無謀を笑ひました。併し、先生は平氣で、北海道までそれを擔いで來て、學生達に配つたのです。今にして往時を追懷すれば、實に感慨無量です。先生は鑛物學者で、殊にその得意の題目は無機化學でした。南北戰爭時代には、少尉から大尉に昇級して、後には大佐マシウスと呼ばれるやうになりました。そればかりでなく、マツサチウセツト州に農學校を建てて、生理植物學者として名聲を得るかと思ふと、今度はまたアマストの市街に水道の敷設をするといつたやうな、千變萬化の英傑でありました。北海道の農學校を辭して亞米利加へ歸つてからの計畫は鯨の上に世界大學を作る

といふことでした——教員や生徒を船にのせて、世界各國を廻りながら學問を研究するといふ計畫なのでした。先生は實に野心勃々家の代表者でありました。併し、晩年は鑛山に失敗して末路は甚だ悲慘であつたといふ話であります……ところが……ところが、この先生が愈死ぬといふ間際に、ジャーの新聞記者を枕頭に呼びました。そして、言ふには、自分はこの六十年數奇な生涯を經て來たが、今省みて、たつた一つ喜びとすることは、日本の農學校に八ヶ月ゐて、聖書を讀めた一事のみである、と。どうです、諸君。學問上の新發見をしたことや、有名な第二十一聯隊を率ゐて奮闘したことは、先生の生前にとつて、必ず愉快事の一つであつたに相違ないのです。しかも、それらの追憶は臨終の床に於いて、毫も先生を慰める糧にはならなかつたのであります。併し……併し、この小日本……しかも、その又山中の一學校で、單に數十冊の聖書を讀めたといふその一事が、先生の一生に一度の死を慰めたのであります。吾々が新世紀の書物を終へて、愈死を迎へるといふ時に、吾々の書いた福音が若しそれに依つて、多くの人が宇宙の眞を見つけたといふ報告に接したら、どんなに愉快な心持がするでせうか……

一言で言へば、聖書の研究そのものが、實は實業の根本なのであります、社會改良の基礎になるのであります。社會改良、實業振興の最良策は即ち聖書を解釋して、その大精神を國民に傳へることであります。諸君の中の二三の人は、この會の始まる前に、手紙を見られて、クロムヱルの紹介をしる

とか、カアライルを說いて見れとか言つてよこされたが、今述べた精神を外にしては、わたくしにクロムエルの紹介もカアライルの解說も出來ないのであります。ここに於いて、わたくしは明白に言ひます――聖書の研究は、わたくしにとつての必要であつて、同時に又國家社會に對しての義務である、と……勿論、かく言へばとて、わたくしは諸君の總てに向つて、わたくしと同じ爲事をしろと言ふのではありません。諸君が聖書研究の爲に筆を執ることが出來なくても、口を費すことが出來なくても、それは咎むるに足りないのです。唯願はくば、人生の目的に二つはないといふことを會得して、自分の爲事は何であらうと、最大目的を同一にして、相共に進軍喇叭を吹きつつ、人生の戰ひを戰つて行きたいものだと思ふだけです……」

先生はかう詞を切ると、極めて質朴に、

「午前の話はこれだけにして置きます。」

と言つて、つと机を離れた……

先生は打たれたやうになつてゐる聽衆を後に殘して、どんどん住居の方へ歸つて行つてしまつた。

「ええ、これから一時間を食事の時間にいたします。寄宿の方はこの隣りの部屋へお出で下さい。通學の方は隨意にお辨當を食べるなり、この近所で蕎麥を食べるなりして下さい。お茶のほしい方は御遠慮なく仰しやつて下さい。」

もつさりの山羊鬚の青年が、丁度今先生の立つてゐたところへ現れて、かう言つた。

緊張し切つてゐた聴衆の間に、始めて或弛みが生じた。直ぐに隣りの食堂へ行くものがあつた。森林の蔭で肌をぬいで風を入れるものがあつた。部屋の隅で辨當の竹の皮を擴げるものがあつた。先生の住居と學校との間を頻に往つたり來たりして、寄宿者の爲に食事の世話をしてゐるのは、森川先生の奥さんらしい美しい人であつた。

大岡と深田は辨當を持つて來てゐた。南と柴田と小寺と山田は辨當を持つて來てゐなかつたので、四人は學校の外へ飯を食ひに出た。

學校の門を出て少し行くと、砂埃の立つ街道の道端に、小さな蕎麥屋が一軒あつた。

「成程、これがあるんで、あの山羊閣下、特に蕎麥と指定したわけなんだね……」

南は笑ひながら、かう言つた。

「まさか、さうでもないだらうよ……」

柴田はさう言つて、山田の方を振り返つたが、山田は何とも言はなかつた。いつもさういふ場合には、きつと何か面白さうなことを言つて友達を笑はすのが山田の癖であるのに、その日は笑ひ顔一つ見せずにまじめな顔をしてゐた。

「はひらうか。」

「うむ。」

南と柴田が蕎麦屋へはひると、小寺も山田も續いて中へはひつた。じめじめした壁の上に胡坐をかいて丸くなると、柴田が誰に言ふとなく言つた

「どうだつたい。先生の話は……」

「話は兎も角として僕は先生の今の境遇に同情を寄せたね……一體、どうしたんだ。あの『インデペンデント』の連中は。」

南はかう言つて、憤慨するやうに、みんなの顔を見た。

「……雜誌を見てゐたつて、あの連中の書くものと先生の書くものとぢやあ、天と地ぐらゐの相違があつた。かういふ結果になるのは當り前だ。僕はそれよりも、先生のけふの態度に感心したな。普通の人間なら癇癪を起して會をやめてしまふことゐだね。少くとも、けふ一日は休むね。ところが先生は初めの内こそ少し苛々してゐたやうだつたが、しまひにはもうすつかり落ちついてしまつてゐた……話もよかつたな。」

低い聲で、ゆつくりゆつくりかう言つたのは小寺だつた。

「でも、雜誌の廢刊は殘念だね。何とかして維持が出來さうなものだがね……」

南がかう言ふと、柴田が直ぐそれに答へた。

「だが、それは先生の心持に革命が来てゐるんだから已むを得ないよ……きつと、先生今に聖書研究専門の雑誌を出すやうになるぜ。」

「でも、さういふ雑誌は讀んであんまり面白くはないだらうね。」

　甫がかう言ふと、今まで一言も口を利かなかつた山田が始めて口を開いた――

「成程、それやあ面白くはないかも知れない。併し、面白いといふことが必ずしも雑誌の使命ぢやあないからね……」

　葉山も甫も驚いて山田の顔を見た――いつも面白がり屋の山田が、急にこんなことをまじめに言ひ出したからである。

「……僕は先生の話を聞いて、實際打たれた。あれが基督教なら、基督教といふものは僕等にとつて實に痛切なものだ……僕はいつか木曜で、西洋人のやつてゐる教會へ冷やかし半分にはひつて見たことがあつた……丁度、說教の済んだところらしかつたが……僕がベンチに腰をかけると、殆ど同時に、その牧師は教壇を降りて來て、聽衆の間をあつちこつちへ歩きながら、『さあ、罪を悔い改めませう。今。直ぐ。』『あしたでは遅いです。今。直ぐ。』と大きな聲で叫り散らすんだ。僕はもうそれを見ただけで、好い加減倦怠を感じてゐるところへ、やがて、その見上げるやうな背をした、顔の眞赤な奴が、僕の目の前へやつて來て、雀斑だらけの大きな手で僕の胸を指しながら、『さ。あなた。悔い改めませ

う。今。直ぐ。あしたでは遲いです。直ぐ。今。悔い改めませう。どうですか」と、かう言ふんだ。僕は何だか厭あな氣がした。少しも權威のないものが、何處かから權威を借りて來て、人を脅迫してゐるやうに感じられたんだ。僕は寧ろ反抗心を起したね。「貴樣は何だ。貴樣にそんなことを強ひる權利があるのか。おれは今までに一度も顏を見たこともなければ、話を聞いたこともない、貴樣のやうな人間に、そんなことを干渉される義務はないんだ」……僕はかう叱りつけてやりたかつた。併し、僕はそんなことをしたつて、なんにもならないと思つたから、なんにも言はずに、その大きな手を押し返して、會堂を飛び出してしまつたが、實際あんな不愉快なことはなかつた……それ以來、僕は基督教といふものに對して、あまり好い感じを持つたことはない……生若い奴等が往來で太鼓なんか鳴らして、饒舌でもするやうに『神』だの『罪』だのと叫つてゐるのを見ると、一種の公憤をさへ感じるくらゐだ……森川先生の文章は相當愛讀したが、やつぱりその基督教的なところは避けて讀んだね……先生が基督教を信じてゐるといふことには反感は持たなかつたが、成るべく基督教拔きで先生を見ようとしたんだね……ところが、けふの先生の講話を聞いて、僕は驚いた……先生は知りもしない人間を捕へて、いきなり悔い改めろの何のと言ひはしなかつた……聖書以外に基督教はないから、先づ聖書の研究をしろと言ふのだ……それも、みんなに專門家になれと強ひるのぢやないのだ……人生の最大目的を達するには、それより外に道がないから、てんでの爲事をしながらでも、これを疎かにして

はならないと言ふのだ……しかも、それは理論から出た議論ではなくて、先生自身の経験から生れた議論なのだ……いや、議論ではない。主張でもない。先生の現在の生活態度の報告なのだ。決して、それを僕達に強迫するのぢやない。――君達は知らないが、自分はかうなのだ――と、単に自分自身を叙してゐるだけだ。僕はこの態度に先づ感心したね……話の内容に至つては言ふまでもない。総てが単純で、率直で、少しの虚飾もない。誰にでも分かることだ。誰にでも受け入れられることだ……僕は實際打たれたね。」

　山田は興奮して、一気にこれだけしやべつた。南も柴田も小寺も、これを聞いてゐる内に、思はず引き入れられて行つた。

　いつもの山田とはまるで違つた山田が三人の前にあつた。

「賛成、それは山田君の言ふ通りだ――」

　暫くすると、小寺がかう言つた。

「賛成、今まで僕等の接した基督教は強制的だつた。なんにも分からないものを捕まへて、いきなり神様を信じろと言ふんだ。熱心のあまりかは知らないが、いきなり人を捕まへて、お前は罪人だ。即刻その罪を悔い改めろと言つたつて、どうにもなるもんぢやありやしない。さもなければ、むやみに天国天国と言つて、天国の美しいことを解くんだ。そして、この世は濁れてゐるから、早く罪を悔い

改めて、天國へ行けと言ふんだ。簡單なものさ。昔は知らないが、今の人間がどうしてそんなことで本當の信仰にはひれよう。勿論、信仰が論理の結果でないことは分かり切つてゐる。併し、本當の信仰だつたら、どんな理論を持つて來ても毀れないやうなものでなくちやあならない。殊に、僕や南は科學の學徒だ。科學の前に崩れる樣な信仰なら、僕等はちつとも持ちたくないと思ふね。信仰は科學以上のものでなくちやあならない。少しも科學に矛盾しないで、しかも科學の手の屆かない高いところにあるのが本當の信仰だ。僕が森川先生を崇拜するのは、あれだけ立派な科學者でありながら、あれだけ堅い信仰を持つてゐるからだ。眞の科學者だつたら、きつとあすこまで行く筈だ。だが、僕等はまだ理論に煩はされてゐて、なかなかあすこまで行けないのだ……僕の終生の目的は眞の科學者になりたいことだ。そして、本當の信仰が持ちたいことだ……教會の基督教ぢやあ、それは駄目だ。先生の基督教で、はじめてそれが期待出來るのだ……」

小寺がかう言つて、口を閉ぢると、今度は南が口を開いた。

「全く教會の基督教は厭だね。國情から言つても日本人があれを嫌ふのは尤もだと僕は思ふね。變てこれんな作り聲をして讃美歌をうたつたり、エス樣がどうしたの、父なる御神がどうしたのつて、いやに敬稱を使ふのも僕には氣障だね。ジイザス。クライスト――それで好いぢやあないか。神――と一言いへば、それで分かつてるぢやないか。内容も何もなしに、唯飾り立ててゐるだけなのが教會だ。

僕の家に富さん婆さんが敬虔なせゐか、とても、エス様キリスト様ぢやあ基督教へはひれるやうな氣がしないね。先生のけふの話は全くよかつた。いきなり受け入れないまでも、考へさせられるね。人生の根本問題に觸れてゐるんだから。そして、僕等自身の問題なんだから。僕はさつき聖書研究専門の雜誌なんて面白くないだらうと言つたが、あれは取り消すよ。山田君の言ふ通り、全く面白い面白くないの問題ぢやないんだ。ついいつもの暢氣な氣持が出つちまつたんだ。許して呉れ給へ……」

南がまじめにかう言ふと、山田は默つて領いた。

「第一、僕は先生に或革命が來てゐるのが面白いと思ふね。そして、丁度その時機に僕等が接したのは仕合せだと思ふね……僕は自分の性癖として、まだ諸君のやうに熱し切ることは出來ないが、少くとも一道の光明が僕の心を貫いたことだけは確だ。僕はまあゆつくり行かう。一歩一歩足を踏みしめて……」

その晩かう言つたのは柴田だつた。

四人は簡單な食事を濟ませると蕎麥屋を出た。

もう一面熟した麥穂の立つ街道を通つて櫟林の縁に涼しい學校の門を潜ると、もう會員達はみんな講堂に集まつてゐた。

「もう始まるのかしら。」

「さうらしいね。」

四人はこんなことを言ひながら、急いで下駄を脱いだ。

間もなく、例の山羊鬚の青年が又にこにこした顔を机の側に見せた――

「ええ……これから午後の講話が一回ありまして、それでけふは終りですが、更に午後七時から祈禱會がありますから、寄宿の方は勿論、通學の方でも有志の方は御出席を願ひます。先生が言はれるには、祈禱會などといつても、普通の教會でやるやうな儀式的なものではないから、誰でも遠慮なく來て貰ひたい。といふことでした。報告終り。」

と言つて、青年は笑ひながら引つ込んだ。

「愉快な人物だね。」

「かう、どこか超越したところがあるね。」

「それでゐて、なかなかしつかりしたところがありさうな人だ。」

「先生はああいふ人が氣に入るんだね。」

「先生とは餘程親しい關係があるらしい。さつきも一生懸命に筆記してたぢやあないか。」

「兎に角、「東京インデペンデント」の連中とは、大分氣持が違ふね……」

山田の連中はこんなことを話し合つた。

「——晩に、その夜の祈禱會とかへ君達は出るかい。」

暫くすると、南がかうみんなに訊いた。

「出ても好いけども、僕は今までにそんなところへ出た經驗がないから、なんだか氣味が悪いな……」

小寺がかう言つた。

「僕もさうなんだ……よく教會で、みんな額へ手を當ててやつてゐるだらう……この祈禱會もやつぱりあんなことをするんだらうか。何だか厭だなあ。」

と、南が言つた。

「だけど、ここのは今も山羊鬚の先生が言つたやうに、そんな儀式的なものぢやないんだらう……僕はここへ來た以上、少しでも餘計に森川先生に接したいと思ふから、少し氣味は悪いが、來て見たいと思ふね。」

山田はかう言つて、みんなの顔を見た。

深田も柴田も大岡も、祈禱會といふものには經驗がなかつた。併し、今の山田の詞に勇氣を得て、みんな出て見る氣になつた——

「先生は僕達が教會の信者でないことは勿論——まだ基督教の信者だかどうだかさへ分からないことは、よく承知してゐられる筈だから、僕等を困らせるやうなことは決してないよ。僕は安心して來て

好いと思ふね。」

柴田がかう言ふと、みんなも賛成した。

「僕は氣味が惡いとか、先生が僕等を困らせまいとかいふことは問題にしないね。僕等は先生に依つて道を求めようとしてゐるんだ。道を求めるには、苦難を經なければならないのは當り前だ。だから、僕は苦しくつても辛くても、兩方とも出席しなければならないと思ふね。」

深田がかう言ふと、みんなは愈々出なければならないと思つた……

瀬川先生がもう一度机の側に立つたのは、丁度その時だつた。

午前の先生と午後の先生とでは、まるで別人の感じがあつた。午前の先生は希望と幸福に燃えながらも、どこかに暗い冷たいものが閉ぢ籠つてゐた。今見る先生は、もう希望と幸福そのもののやうに溢れてゐた。暗い影、冷たい息は、どこにも見られずどこにも感ぜられなかつた――山田達は、先生にこんな「顔」があらうとは夢にも思はなかつた。それ程、明かるい、暢びやかな、微笑に充ちた顔だつた。

「さて、愈これから聖書の研究にかかります……」

先生はかう言ふと、家から持つて來た中形の新約聖書の第一頁を開けた――

「――アブラハムの裔なるダビデの裔イエス。キリストの系圖……けふの午後の講義はこれでありま

さ……」

先生はかう言ふと、直ぐ——

「……アブラハム、イサクを生み、イサク、ヤコブを生み、ヤコブ、ユダとその兄弟を生めり……」

と、讀み出した。

會員の内には聖書を持つてゐるものと、持つてゐないものとがあつた。聖書を持つてゐるものは、直ぐとその場所を明けて見た——

「……ユダ、タマルに由りて、パレスとザラを生み、パレス、エスロンを生み、エスロン、アラムを生み、……サルモン、ラハブに由りてボアズを生み、ボアズ、ルツに由りてオベデを生み……エッサイ、ダビデ王を生み、ダビデ王、ウリヤの妻に由りて、ソロモンを生み……」

それは一頁に亙る單なる人名の連續であつた。山田達はなぜ先生がそんなものを讀み出したのか、その理由が分らなかつた。キリストの系圖について歴史的な考證をするのであらうか。それは先生として、無さうもないことである。それとも、この系圖によつて、キリストの人間としての存在を說くのであらうか。それも先生としては、あまりに教會じみた題目である——會員達は誰も彼も奇異に當惑しながら、唯ぼんやり人の名のそれからそれと續くのを聞いてゐた——

「……マタン、ヤコブを生み、ヤコブ、マリヤの夫ヨセフを生めり。このマリヤよりキリストと稱

ふるイエス生れ給ひき。」

ここまで讀むと、先生は聖書を机の上に置いて、にこにこ笑ひながら、みんなの顏を見た――

「どうです、諸君。面白いですか。ちつとも面白くないでせう。」

さう言つて、又にこにこ笑つた。

「……聖書――殊に新約聖書は世界唯一の書物だと言はれてゐます。世界第一の有益な書物、世界第一の興味深い書物だと言はれてゐます。ところが、その卷頭第一に書いてあることは、この乾燥無味な系圖であります。コオランの序品第一には『神を頌へよ。萬物の主宰、最大慈悲、審判の日の王、汝をわれ禮拜す。』とあります。埃及の死者之書は『天の東部にラアの昇る時、これに奉る讃美の歌』を以て始まつてゐます。論語は『學んで時にこれを習ふ、また說ばしからずや。』で始まつてをります。法華經は阿羅漢の頌偈を以て始まつてゐます。然るに、新約聖書は、その卷頭、馬太傳の第一章に於いて、不愛想にも『アブラハムの裔なるダビデの裔イエス・キリストの系圖』と稱して、唯人の名を列記してゐるのであります……」

南先生はかう言つて、先づ一つの疑問を會員達の頭の中に置いた。

書籍の趣意が若し卷頭の一句にありとすれば、聖書は砂を嚙むが如き乾燥無味な書物だと言はなければなりません。なぜ、山上の垂訓を卷頭第一に置かなかつたのでせう。なぜ、愛の頌讃を以て始め

なかつたのでせう。讀者が引きつける手段として、拙の又拙なる道をとつてゐるのであります……」

但し、その砂礫のやうに無味なところに、また砂礫のやうに意味深長なところがあるのである——

生田はかう說くのである——

「アブラハムの裔なるダビデの裔イエス・キリストの系圖」。この一句の内に、もう重大な意義が含められてゐるのである。イエスはアブラハムの子であつて、又ダビデの子であつたのである。即ち、イエスはその肉體に於いて、アブラハムの信仰とダビデの權威とを代表してゐたのである。アブラハムとダビデ——即ち、信仰と權威とを一つの身に體得したものが、キリスト即ち完全な救ひ主なのである。そして、イエスは實にその人であつたのである

「アブラハムの裔なるダビデの裔イエス・キリスト……」この一行の内に、イエスに關る過去と現在と未來とが兼ね示されてゐるのである。これは決して乾燥無味な詞ではない。歴史的事實に據つた最も意味深い詞である。聖書に於いて、アブラハムと言へば、神に喜ばれる信仰を表す名であつて、既に固有名詞ではない。ダビデの名も亦同じことである。聖書智識に養はれて育つたユダヤ人が、アブラハムの子にしてダビデの子なるイエス・キリストと聞けば、もうその一句の内に深遠量るべからざる意味を讀んだものである。これを乾燥だと言つて嘲り、これを無味だと言つて笑ふのは、その人の無識を表すに過ぎないのである——

アブラハムからダビデ王に至るまでには、父子孫十四代の間があつた。その間にも、イサクの沈着、ヤコブの熱情、ユダの剛毅——語るべき性格の人物は多々あるが、今それを語る必要はない——そこでは唯、羊牧の民であつたアブラハムとその孫とが、ダビデに至つて終にユダヤ国の王となつたといふ一事だけを記憶するに留めて、この系圖が示すもつと重大な意義を探らなければならない……

この系圖に於いて、最も注意しなければならないことは、アブラハムからソロモンに至るまでの間に、婦人の名が特に四つだけ記されてゐることである。第一がタマル、第二がラハブ、第三がルツ、第四がウリヤの妻即ちバテシバである——この外はイエスの系圖全部に求めても、その生母マリヤの外に婦人の名を見出だすことは出来ないのである。然らば、舊約聖書はアブラハム家の婦人として、以上の外に記載するところがなかつたであらうか。決して、さうではなかつた。アブラハムの妻サラの名が載つてゐる。イサクの妻レベカの名が載つてゐる。ヤコブの妻レアの名が載つてゐる。なぜ、馬太傳の記者はこれらの有名な婦人の名を省いて、特にタマル以下三人の婦人の名を書いたのであらうか——

そこに、新約聖書巻頭の系圖が単なる系圖として書かれたのではないといふ深い理由があるのである。この系圖は乾燥無味な唯の系圖のやうに見えて、實は一大福音なのである。砂のやうに見えて、實は砂金なのである……

其の第一に名の出て來るタマルはどういふ婦人であつたらう。タマルはユダの長男エルの嫁であつた。ところが、エルが死んだので、その弟のオナンの妻になつた。ところが、このオナンが又死んでしまつたので、三男シラの妻になることになつた。併し、ユダは長男も次男もエホバに罪を犯して早く世を去つてしまつたので、シラも亦同じ運命を追ひはしまいかと思つて、シラが一人前になるまで暫く寡婦になつて父の家にゐると言つた。タマルはユダの言ふ通りにした。その內に、ユダの妻が死んだ。ユダはその悲しみを紛らす爲に、友人のヒラと一緒に、テムナといふところへ羊の毛を剪りに行つた。

タマルは、シラが旣に一人前の男になつてゐるのにも關らず、相變らず寡婦の儘で置かれたのを憤つた。そこで、舅のユダがテムナへ登つたといふ噂を聞くと、寡婦の着物を脫ぎ捨て、被衣に顏を隱して、テムナへ行く道の傍に坐つて待つてゐた。折から、そこを通りかかつたユダはタマルを娼婦だと思つて、お前の家へ行きたいものだと言つた。するとタマルが報酬を求めた。ユダは家へ歸つたら山羊の子を屆けてやらうと言つた。では、それまでの證據に何か質物をくれと言ふので、ユダは持ち合せた印と綬と杖とをタマルに渡して、つひにタマルの家へはひつた。やがて、タマルは被衣を脫いで、また寡婦の着物を着て、知らん顏をしてゐた。

ユダは女に預けて置いた質物を取り返さうとして、友達のヒラに託して山羊の子を屆けさせたが、

もうその時は女の行方が分らなかつた。

三月程すると、タマルが娼妓になつて人の子を姙んだと報告するものがあつた。ユダは非常に怒つて、即刻彼を連れて來て、焚き殺してしまへと言つた。

タマルは舅の前に引き出されると、例の印と綬と杖とを見せて、自分はこれを持つてゐた人に依つて姙んだのだと言つた……

タマルはかうした婦人であつた。自分の肉慾が滿たされない復讐に、身を娼婦に裝うて、わが舅を罪に陥れたのである。舊約聖書には、唯「裝うた」ことだけが記されてゐるが、彼女の素性は元々娼妓か何かであつたのであらう――この人倫に反した行爲によつて出た双生兒がパレスとザラとであつた。そして、イエスの祖先の内には、かういふ人間があつたと言ふのである。馬太傳の記者は殊更にかうした記事を掲げたのである。祖先の恥辱をわざと明白に系圖の中に書き入れたのである……

さて、第二のラハブは如何なる婦人であつたらう。ラハブは明かに娼妓であつた。舊約聖書にも「妓婦ラハブ」とはつきり書いてある。ラハブはヨシユアがエリコに遣つた間者二人を助けたのであつて、その行爲は義俠的でもあり、エホバの神に忠實でもあつたのであるが、彼女の素性の卑しかつたことは否むべからざる事實である――この婦人が後にヨシユア麾下の名將サルモンに嫁して儲けた子が、ルツの夫になつたボアヅであつたのである。

タマルとラハブ――二人ともに娼妓である。その一人は多分。他の一人は確實に。そして、さういふ人達の間からイエスがこの世に生れて來たといふのである。實に驚くべき記事ではないか。大膽極まる記事ではないか。しかも、それが舊約聖書の卷頭に於ける明白な文字なのである……

――普通の人間の立場から見て、パリサイ人の立場から見て、サドカイ人の立場から見て、教會信者の立場から見て、娼妓を祖先の一人として持つことは確に恥辱である。しかもイエス・キリストの立場から見て、それは決して恥辱ではなかつた。否、イエスは却つてこれを誇りとしたのである。おのれの清淨を誇る祭司の長や民の長老に向つて、「實に我汝等に告げん、税吏及び娼妓は汝等より先きに神の國に入るべし。」と言つたのはイエスである。

パリサイの人シモンの家に客となつてゐた時、町で悪い事をした醜業婦に、香油で自分の足を洗はせ、その髪の毛でこれを拭かせて、「汝の信仰汝を救へり、安然にして往け。」と言つたのもイエスである。

イエスにとつては、婦人が娼妓であることが、彼等を愛する少しの妨げにもならなかつた。イエスは人を見るに、神の眼を以てしたのである。即ち、人の外部生活を見ないで、その内部生活を見たのである。娼妓と雖も、神に對する態度次第で、イエスの姉妹となることが出來るのである。さうして、實に娼妓をイエスの系圖の中に置いて、墮落の女の救濟を約束したのである――これが福音でなくて何であらう。これが好き音信でなくて何であらう……

ところで、第三のルツは何者であつたらう。ルツは異邦モアブの婦人であつた。モアブの人民はエホバの神を拜せず、ケモシの偶像に事へ、所謂「イスラエルの籍にあらざる異邦人にして、夫の約束を以て結び給ひし契約に與りなき者」であつた。モオゼの律法にも「モアブ人はエホバの會に入るべからず。彼等は十代までもいつまでもエホバの會に入るべからざるなり。」とある。況んや、この異邦人を迎へて妻とすることは、モオゼ律の嚴禁するところであつた。「汝、彼等と婚姻を爲すべからず。汝の女子を彼の男子に與ふべからず。彼の女子を汝の男子に娶るべからず。」これ程嚴しい規定が設けられてゐたのである。

これを今日に解釋して言へば、「信者は不信者を娶るべからず。また不信者に嫁すべからず。」である。ところが、イエスの系圖の中には、この明白なモオゼ律違反の實例が舉げてあるのである。眞のイスラエル人なるボアヅは、異邦モアブの婦人を娶つて自分の妻としたのである。さうして、エホバはこの結婚を祝福し、これに由つてオベデ生れ、やがてオベデの孫としてダビデ王が生れたと言ふのである。見よ。この明白な歴史的事實は、律法をその根蔕より覆してゐるのである。

「人の義とせらるるは信仰に因る。律法の行爲に因るにあらず。」とは、羅馬書に於ける使徒保羅の詞である。「我れ汝等に告げん。多くの人々東より西より來りてアブラハム、ヤコブと共に天國に坐し、國の諸子は外の幽暗に逐ひ出されて、そこにて哀悲切齒することあらん。」とは、馬太傳が記すところ

の[illegible]言葉である。法律の遵奉者が救はれるのではないと言ふのである。天國の外で泣き喚ぶのは、彼等信者や自稱選民だと言ふのである。

罪人よ、不信者よ、悪人よ、無教會信者よ、神の選擇は寧ろ汝等の上にあつて、聖別を誇る所謂信者の上にはないのである。

馬太傳第一章に曰く、「ボアズ、ルツに由りてオベデを生み」と。沈黙せよ、信者と牧師と傳道師よ。君等はこの明白なる聖書の教に聽いて、再び汝等の聲に耳を傾けないであらう……

――さて、第四のウリヤの妻とは何人のことであらう。

凡そ聖書といふ書の中で、最も醜い罪、最も憎むべき罪が、ダビデに依つてこの婦人に犯されたのである。

「ダビデ王、ウリヤの妻に由りてソロモンを生み」――この簡單な記録その者が、既に姦淫罪の宣告である。

ダビデは王宮の屋根の上から、ウリヤの妻の入浴するさまを見て、心を動かし、直ちに宮中へ招き入れて、己の邪欲を満たした。丁度、その時、ウリヤはダビデ陛下の将軍ヨアブに従つて、ラバを包圍攻撃してゐた。ダビデはヨアブに命じて、ウリヤをわざと最も危險な方面の先鋒に立たせた。そして、これを討死させた。さうして、ウリヤの妻を宮中へ召し入れたのである――事は太平記に見

られる高師直の罪惡に酷似してゐる。

それ故、大王ソロモンは、ユダヤ人がイエスに對して言つたやうに、「我は姦淫に由りて生れし者に非ず。」と、自已の清淨を誇ることの出來ない人であつた。彼は父が他人の妻に由つて生んだ子であつた。姦淫の子であつた。しかし、彼は「ソロモンの榮華の極の時だにも、その裝この花の一つに及ばざりき。」と謳はれた、あのソロモン大王であつたのである。

父の恥辱である。母の恥辱である。子の恥辱である。然るに人類の救主なるイエスは「ダビデの子」と稱へられて、この父とこの母とこの子とを祖先として持つたのである

「ダビデの子」と稱へられたのは、イエスの名譽ではなくて、寧ろイエスの恥辱であつた。しかも、イエスはよくこの恥辱を忍び、ダビデの罪を自分の罪とし、これを十字架につけてダビデの罪を贖ふと同時に、ダビデに倣つて姦淫の罪を犯して總てのものの罪を贖つたのである。

タマルとラハブとルツとバテシバ。

姦淫の女と異邦の女――殊更にこれらをイエスの系圖の中に揭げて、馬太傳の記者は偉大な福音を說いたのである。神に依らずして、何人がかやうな系圖を書き得られよう。乾燥砂を嚼むが如き系圖も、かく解すれば、一篇の大叙事詩となつて、罪に苦しむ人の子を慰め、勵まし、且聽すのである……

森川先生の講義はまだ續いた――

ソロモンからエホヤキンに至る十四代に就いては、それらが悉くユダヤの王であつたことを說き、その中の多數が賢王であつたことを說いて、國王としてのダビデ家の歴史にも甚だ誇るべき點のなかつたことを述べた。

積惡の極、ユダヤの王國は滅亡し、その人民は亡命して、七十年の間バビロンの河畔に慷慨の涙を濺がなければならなかつた。ダビデの後裔は王位を失つて、再び元の庶民に化した。エホヤキンより十四代の孫に當つたヨセフは、即そのものが人に輕蔑されたナザレに於ける一人の貧しい大工職であつた。一家門の榮譽も遂に衰りて、その極に達せりと謂ふべきである。」と、先生は悲痛の色を見せて言つた。

併しながら、神の契約は實現せられずにはゐない。聖書は明にダビデの王位の再興を說いてゐる――「我れダビデに誓盟を言はく、その裔は永久に續き、その座位は日の如く恆に我が前にあらん。」……

エホヤキンからヨセフに至る十四代の間には、著しい歴史的人物がゐなかつた。

それでは、彼等は無爲にして一生を終つたのであらうか。唯、生れて、育つて、生んで、死んだに過ぎなかつたのであらうか。單に草として生え、花として散つてしまつたのであらうか。

いや、決してさうではない。彼等も亦よく偉大な天職を全うしたのである。アブラハム家の家傳を守り、祖先の信仰を貫持して、これを子孫に傳へたのである。彼等も亦等しくアブラハムの子であり、

ダビデの子であつたのである――

歴史の上に名を遺すことが、必ずしも名譽なことではない。人は必ずしも歴史的人物たることを要さないのである。信仰の父アブラハムは、唯一人あれば、それで足りるのである。榮華の王ソロモンも、唯一人あれば十分なのである。餘は悉く平凡な人物であつて差支ないのである。しかも、神は特に凡人を愛し給ふのである――世に知られず、又知られようとも思はず、靜に生れて、靜に死んで行くのである。そして、父から受けたものを支障なく子に傳へ、家訓の中繼者たるに甘んじて、その一生を平和に終るのである。これも亦貴むべく敬ふべき一生ではあるまいか――

　アブラハムの信仰とダビデの權威とは、かくして連綿イエスにまで傳へられたのである。イエスは決してマリヤ一人に由つて、この世に生れ出たのではない。家運衰微の長き年月にも心を腐らず、よくアブラハム家の信仰を維持し、エッサイの根を絶たなかつたこれら無名の聖徒達も、堂々神子出現の榮譽に與つてゐるのである――

　果して然らば、吾々とても、世に知られず、名聲の赫々たらざるを決して嘆く必要はないのである。吾々もアゾルのやうに、ザドクのやうに、又エリウデのやうに、地平線下にあつてアブラハムの信仰を維持し、吾々が密に子孫に告げたことを、子孫が遍く宣べひろめる時を待つべきである

「この驚異すべき系圖に就いては、まだ考へたいこと、話したいことが澤山にあります。併し、それ

は他日に讓るとして、これが決して無味乾燥な人名の羅列でないことだけはお分かりになつたらうと思ひます。若し四福音書が傳記を以てした福音であるならば、これは系圖を以てした福音であります。吾々は路傍の石礫に宇宙の構造を悉く讀むことが出來るやうに、馬太傳の記者が編纂するところのイエスの系圖の中に、神の愛と人間の救濟に關する一切の問題一切の眞理を探ることが出來るのでありますます……。

先生はかう言つて、この一時間以上に亙る長い講話を終ると、疲れた樣子もなく、微笑を湛へた默禱を右者にしながら、また住居の方へ歸つて行つた。

聽衆は感動もし、同時に疲れもした。

暫くは身動き一つするものがなかつた。部屋中が寂として、打たれたやうにじつとしたりしてゐた。

山羊髭の青年が、もう一度現れて、けふの講義のこれで終りであること、夜の祈禱會には成るべく多數の出席を希望することなどを述べると、やつと會員の中に戲ざわめきが起り始めた……

中でも最も深い感動を受けたのは山田だつた……

僕は南や栗田と一緒に一旦家へ歸つて、夜また出直して千駄ヶ谷へ來ることにした。その歸りの汽車の中でも、——當時はまだ電車がなかつた——山田はそのことばかり言ひ續けた……

「……僕は聖書の講義といふものをまだ一度も聞いたことがないから、教會ではどんなことを話す

ものなんだか、まるで知識にないが。恐らくけふの先生が話されたやうな話はどこでも聞くことは出來まいと思ふ……あれは斷じて牧師の說教ではない。そこには「悔い改め」の強制もなければ、無情な「罪」の叱責もない。實に人間的だ。隅から隅までが人間的だ。血がある。淚がある。溢れるやうな情熱がある……

「第一、教會の牧師なんかに、到底あの單なる系圖から、あれだけの眞理は掴み出せないと思ふね――眞理といふよりは寧ろ詩だね。先生もあの系圖を目して一篇の敍事詩だと言つたが、實際さうだ……詩は說教以上だ。所謂聖書釋義以上だ。眞理以上の眞理だ……本當の詩は本當の詩人でなけりやあ分からない。先生は詩人だから、あの詩が讀めたのだ。一點の飾り氣もない、あの單純な系圖――しかも、その中には無限の眞と無限の善と無限の美が含まれてゐるのだ――あれこそ本當の詩だ。そして、その詩をあれ程までに眞當に味はつた先生こそ本當の詩人だ――僕は詩人面をしてゐた自分を恥ぢる。馬太（マタイ）の前に恥ぢる。森川先生の前に恥ぢる……

「しかも、その解釋たるや、普通の牧師や教會信者が口にするのも穢はしいと思ひさうな事實の上に立つてゐるのだ……基督にもダビデの罪の遺傳はあるのだ。基督は自分で罪は犯さなかつたかも知れないが、罪を感じない人ではなかつたに違ひない。僕は今まで聖書をろくろく讀んだことはないが、『彼自ら誘はれて艱難を受けたれば、誘はるる者を助け得るなり。』といふ詞を希伯來書（ヘブライしよ）だつたか何處

だつたかで讀んだ時は、實際基督に對して深い親しみを感じたよ。基督はどんな誘惑にも勝つた人だが、誘惑される人間の心持はよく知つてゐたんだ――基督を唯完全無缺だ完全無缺だと言つたばかりでは、基督のことは分からないよ。基督も人間の肉體を着て生れて來た以上、アブラハムから五十二代人間の血統を引いて來た以上、不完全なところはあつたに違ひないよ。その不完全なところを認めてこそ、はじめて基督の偉大なことが分かるんだよ――十字架に釘づけにされて、血を流したつて、痛くも何ともないんぢやあ、吾々を救ふ力にはならないよ……

「實際、基督教の講義としては、先生の話は大膽極まるものだつたね。あの四人の女の話なんぞは普通の牧師ならきつと避けて口にしないだらうね。第一、舊約聖書なんて、沙翁全集と同じことで、口にこそのぼす人は多いが、實際ほんとに讀んでる人は、信者の内にだつていくらもないに違ひないんだ。だから、默つてさへゐりやあ、タマルが何だか、ラハブが何だか、分かる人はありやあしないんだ。それを先生は、あんなにはつきり何も彼も話すんだ……僕も實は始めて聞いて、實際びつくりしたよ……」

山田が切れ切れに――併し、他のものに口を利かせる隙を與へないほど興奮して――ここまで一人でしやべり續けると、いつもになく沈欝な顏つきをして聞いてゐた南が突然口を出した――

「……それから先きは僕に言はして呉れ給へ……けふの先生の話を聞いて、最も痛切に――涙の出る

ほど痛切に感じたのは僕一人だらう……僕は柴田に勸められて、先生のものを讀み出してから、先生のものが好きになつた……先生といふ人間も好きになつた……併し、基督教を信じようなどと思つたことは夢にもなかつた……第一、僕は僕みたいな人間が苟しも信者になれようなどとは思はなかつたんだ……僕は不信者の家庭に生れたんだもの。どこへ行つても不信者に取り卷かれてゐるのが僕の境遇だ。僕自身にして見たつて、不信者的遺傳に巣を食はれてる人間なんだ。だから、その點では初めから絶望してゐたんだ——絶望してゐたと言ふよりは諦めてゐたんだね——諦めた結果、暢氣になつちまつて、てんでもうそんな問題なんか頭に置かずに千駄ヶ谷へ行つたんだ。半分は好奇心で、先生の顏でも見れば好いつもりで出かけたんだ……ところが、先生の話に依ると、救世主イエスの家系には不信者の血がまじつてゐるんだ——しかも、この不信者の血がまじつてゐることに重大な意義があるんだ……おれは遺傳的不信者だ、どうせ不信者の家庭に生れたんだから救はれつこはない、などと、もう暢氣なことは言つてゐられなくなつた——基督にも不信者の血が流れてゐたんだと思ふと、僕はもう立つてもゐてもゐられなくなつた……

「そればかりではない……僕はもつともつと絶望すべきことを僕の家庭に持つてゐた……これこそは何がどうしても到底救はれつこのないことだと思つてゐた……僕等兄妹は罪の親に生れた罪の子だ……どうしても地獄へ落ちなければならない運命を持つてるんだ……今まではさう信じて疑はなかつ

たのだが、タマルの話やウリヤの妻の話で、その根強い考へが根蒂からひつくりかへされてしまつた……僕等の親でも救はれ得るのだ。僕等の兄妹でも救はれるのだ……僕は夢を見たんぢやないかしら、先生の詞を聞き違へたんぢやないかしら……僕はいまだにさう思つてるくらゐだ……」

南はさう言つて、両手で頭を抱へた。

併し、南がそれ程感動した意味は柴田にも山田にも分からなかつた。南の家庭に若し汚れがあるとしても、――凡そ世間で多少の汚れを持つてゐない家といふものはない筈なのだから――山田も柴田も、それは自分達の家だつて同じことだらうと思つた。そして、南の特別な感動は南の心の純良さから来た結果だらうと思つた。そして、その意味で二人は南に同情した。

「……僕は基督の宗系に賣女が二人もはひつてゐるといふ話を聞いてゐる内に、僕自身の今までの生活が賣女同様だつたといふことに氣がついて来た……そして、今まで少しも氣のつかなかつた罪の重さを急に感じ出すと同時に、その重い荷物はきつといつか卸される時があるといふ希望を持ち出した……」

山田がかう言ふと、柴田は詞に力を入れて言つた――

「それぢやあ、君はもう信仰にはひつたのだ……」

「たつたそれだけのことで信仰にはひつたと言ふことが出来るだらうか……」

山田は寧ろ反抗するやうに言つた――謙遜などといふ心持は微塵もなしに――

「いや。決して『たつたそれだけのこと』ではない。『それだけのこと』を悟るといふことが實に偉ことなのだ。如何にも、それは單純至極なことで、しかも平易極まることだ。ところが、その單純極まることが、心の曲がつた人間には容易にまつすぐに映つて來ないのだ――君は罪の重さを感じ出したと言つたね。それは取りも直さず『罪の自覺』だ。君は同時にその重荷がいつかきつと卸される時があるといふ希望を持ち出したと言つたね。それが即ち『救ひに對する信仰』だ。君にはこの二つの階梯を一度に踏んだのだ。これが信仰にはひつたのでなくて何だらう。これ以外に『入信』の現象があるだらうか……僕は君が羨ましくて堪らない。君は幸福な人だ。君は惠まれた人だ。先生の話を聞いて、君が直ぐそれだけのものを受け入れられたのは、君に詩人的の純良さがあるからだ。自然の美しさをその儘自然の美しさとして受け入れることが出來る樣に、先生の話をその儘先生の話として受け入れることの出來る純良さがあるからだ……純良と言へば、南も純良だ。南ももう明かに信仰の第一歩を踏んでゐる。『おれのやうなものでも救はれるのだ。』さう感じた瞬間に、人間はもう『救ひ』の道に足を踏み入れてゐるのだ。南は單純な人間だから、直ぐそこまで行けたのだ……ところが、僕のやな人間は到底直ぐにそこまでは行けないんだ。豪さうに言へば哲學的思索だが――碎いて言へば屁理窟だ。どんなことにも、そいつが附いて廻るのだ。如何なることでも、一應理窟にかけて見なければ

承知が出來ないのだ。極端に言へば、空が青いといふことも、夏が暑いといふことも、理窟なしには承知が出來ないんだ。強情に理窟がついて廻るのだ。理窟なしには生活がないと言つても好いくらゐなのだ。僕は實際君達が羨ましい……實際、君達が羨ましい……」

柴田はさう言つて、暗い顏をした。

併し、山田も南も、これをどうすることも出來なかつた。なぜと言へば、この二人にも、自分達の地位が、まだ自分達にはつきり分かつてゐなかつたのだから……

南は四谷で降りるのを乘り越してしまつた。そこで、市ケ谷へ來ると、そこで降りる山田と一緒に汽車を出た。――飯田町まで行く柴田を一人あとに殘して……

南は麹町の五丁目へ歸る人だつた。山田は三番町へ歸る人だつた。二人はステエションを出ると、右と左へ別れなければならなかつたのであるが、この場合二人別々になるといふことが何となく寂しかつた……

「少し君の家の方まで歩かう。」

南にかう言はれると、山田は待つてゐたことを言はれたやうな氣がした――

「歩かう。」

山田は思はず嘘を言つた。そして、二人ならんで歩いた。

併し、二人はもう一言も口を利かなかつた。互に言ふだけのことは、もうみんな言つてしまつたやうな氣がした。さうかと思ふと、まだ言ひたいことが山のやうにあるので、どこから口を切つていいか分からないでゐるやうな氣もした……二人の心は沈默してゐる二人の間を往つたり來たりした……

南はたうとう山田の家の門口まで來てしまつた――

「ぢやあ、また晩に。」

「ぢやあ、失敬。」

二人は簡單に別れてしまつた――あとで、氣がついて、自分達が驚くほど簡單に……

山田は家へはひると、直ぐと自分の書齋へはひつた。そして、本箱の中から古い新約全書を探し出すと、それを机の上に置いて、その前にきちんと坐つた……

山田が千駄ヶ谷で受けた感動は、彼の書齋へ運び入れられた時、前より一層強くなつてゐた……汽車で走り、道を歩く內に、それは愈高く浪を打つた……それはもう今單なる感動ではなかつた……皮膚を潜り脈に溢れて、それは既に血となり肉となりつつあつた……

きのふの今頃……

けふの今……

それが唯一日の隔たりであるとは、どうしても信じられなかつた。

山田の外部には、まるで別な境遇があつた。
山田の内部には、まるで別な世界があつた。
「きのふの自分はどうしても死ななければならなかつた……」
「けふの自分は飽くまでも生きなければならない……」
この驚くべき變化はどうして起つたのだらう……それは山田にもまだはつきり分からなかつた。
森川先生の講話は、きのふからけふへかけての山田の暗鬱な心境に、少しも直接な光明を投ずるものではなかつた……山田はぼんやり千駄ヶ谷へ行つて、ぼんやり森川先生の話を聞いた……しかも、それを聞き終つた時、急に山田は幸福の感動に溢れた……「この話をけふ一度聞いただけでも、生きてゐる效があつた。」と思つた……生きてゐて好かつたと思つた……ゆうべ死なないで好いことをしたと思つた……

きのふまでの彼には、戀が全世界であつた……全世界が戀であつた……戀の絶望は全世界の絶望であり、全世界の絶望はやがて自分の死であつた……彼は自ら死ぬまでもなく、既に命を失つてゐたのである……

突然けさ彼の前に開けたのは、今まで彼の全く知らずにゐた世界であつた……そんな世界があらうとは夢にも思つたことのない世界であつた……戀が全世界ではなかつた……全世界が戀ではなかつた

……戀の外にもまだ世界が　より廣い世界が　より深い意義のある世界があることが分かつた……前の世界に於ける山田は「死」より外のものではなかつた……併し、この突然眼の前に涌いた新しい世界に於ける山田は永遠の「生」より外のものではなかつた……

前の世界は暗闇であつた。それ故、どんなに眼を大きく見張つても、見えるものは何もなかつた……新しい世界は光の海であつた。それ故、如何に眼を堅く閉ぢても、物の像は瞼の中へ差し込んで來た……

山田は自分自身の姿をはつきりと見ることが出來た　實に弱い、實に實に弱い、汚れと毒に充ち滿ちた靈魂であつた……

しかも、その小さい力のない黑く汚れた靈魂は、神の喜んで救はうとする――救はれて神の國に生きることの出來る――貴重な一つの靈魂であつた……

弱ければ弱いほど……汚れてゐれば汚れてゐるほど……神の愛著の深い靈魂の一つであつた……

山田はゆうべ何者かに抱きとめられた意味が、やうやく分かつて來た……

あの「見えざる手」は確に「神の手」だつたのだ……神がけさまでおれの命を引き留めて……神がおれを千駄ヶ谷へ遣つて……神がおれにあの說教を聞かせたのだ……

おれは神に愛されてゐるのだ……少くとも……神に愛されてゐる何萬人何億人かの中の一人なの

だ……

山田は今まで「人に愛されること」しか知らなかつた……親の愛、同胞の愛、伯父伯母の愛、友人の愛……それらを人間の幸福だと思つた……やがて、親の愛よりも、同胞の愛よりも、伯父伯母の愛よりも、友人の愛よりも、もつと有り難い戀人の愛といふものを知つた……そして、それを人間至上の幸福だと思つた……

彼には、もう親も同胞も伯父伯母も友人も入らなかつた……ただ戀人だけがあれば好かつた……「戀人一人だけがあれば好かつた……

その大事な大事なものが、ゆうべ突然奪ひ去られたのである……至上至極の幸福が永久に攫ひ去られたのである……そこで、彼に「死」が來たのである……

彼が「死」と抱き合つた時、彼を「死」から引き離した力は、至上至極の幸福」より力の強いものでなければならなかつた……併し、その本體の何であるかは、今まで決して分からなかつた……それが……それが「神の愛」だつたのである……そんな「愛」がこの世にあらうとは今まで夢にも考へたことのない「神の愛」だつたのである……

神に愛される――この喜びは、到底人に愛される比ではなかつた……はじめて「戀」の存在を知つた時、曾ての彼が「人の愛」を塵芥のやうに思つたやうに、はじめて「神」の存在を知つた今、「戀」

は烟のやうに霧のやうに、彼の前から姿を消して行つた……
「おれはどうしてあんなものを至上の幸福だと思つてゐたのだらう……至上の幸福とは『神の愛』より外のものではない……人間の力で、人間の妨げで、破棄されるやうな幸福がなんで至上の幸福だらう……至上の幸福とは、神以外のものが指一本觸れることさへ出來ない幸福でなければならないのだ……『神の愛』より外に一つでもそんな幸福がこの世にあらうか……ない。斷じてない……」
　山田はさう思つた……
「……おれは幸福でもなんでもないものを幸福だと思つてゐて、その幸福だと思つてゐたものを奪はれて、一度死んでしまつたのだ……その憫むべき無意味な死を甦らせてくれたのが、本當の幸福だつた……本當の幸福の力だつた……『神の愛』だつた……」
　山田は眼をつむつて聖書を開いた。そして、眼の前に現れた詞を、自分の今考へたことに對する『神の答』として聞かうとした――
「人あるひは問はん。死にし者如何に甦るや、如何なる身體にて來る乎と。愚なる者よ、爾が播くところの種まづ死なざれば生きず、又なんぢが播くところのもの將來生ゆる所の體を播くに非ず。麥にても他の穀にても只粒のみ。然るを神は己の意に隨ひて、之に體を予へ、種ごとに其おのおのの形體を予へ給ふ……死にし人の甦るも亦かくの如し。壞る者にて播かれ、壞ちざる者に甦され、尊からざ

る者にて播かれ、榮ある者に甦され、弱き者にて播かれ、强き者に甦され、血氣の體にて播かれ、靈の體に甦さるるなり……」

祈禱會

山田は急いで夕飯を濟ますと、また家を出た。

家から市ヶ谷のステエションまで歩く間も、市ケ谷から千駄ケ谷まで汽車で走る間も、彼は唯一「求める心」に燃えてゐた——彼は樹の最初の枝に飛びついたのである——そして、どうかしてその枝から落ちずに、第二の枝へ飛びつかうとしてゐるのである……

千駄ヶ谷の會堂には、もう會員が大部分集まつてゐた。そこには、けさの緊張に引きかへて、幾分かの寛ぎがあつた。寄宿生の間には既に和睦と談笑とが見られ、寄宿生と通學生との間にも、局部局部に交通と親睦とが見られた——寄宿生は勿論、通學の人達も、大抵は浴衣がけであつた。

森川先生の二人の愛兒——八つになるお孃さんと、六つになる坊ちやんと——が、みんなの愛撫の手を、それからそれと渡つて歩いた。お孃さんも坊ちやんも、唯大勢人のゐるのが嬉しくて堪らない樣子で、誰にも彼にも懷いて歩いた。これが、この會合の空氣を一層柔げた。

山田は妙に子供好きで、子供を遊ばせるのが上手だつたから、忽ちお孃さんとも坊ちやんとも仲好

しになつた……

「山田さん、おぶつてよ……」

「山田さん、肩車してよ……」

二人に早くも山田の名を覚えて、左右からしがみつくのであつた。

「ぢやあ、順々にね……」

「いや、一緒でなくちやあ……」

「いや、一緒でなくちやあ……」

山田は為方なしに、坊ちやんを肩に跨がらせて、その両足を片手で押さへると、お嬢さんを背中にのせて、片手でこれを押さへた。

「歩いてよ……」

「歩いてよ……」

山田は力がないので、二人脊負ふには脊負つたが、一歩も足を踏み出すことは出来なかつた……

その様子がをかしいと言つて、柴田や南が手を打つて笑つた。あつちでも、こつちでも笑ひ聲が起つた……

「まあ、あぶない……何ですねえ、そんなことをして……」

森川先生の奥さんが、そこへ駈けつけて來て、先づお孃さんを山田の背中から放すと、今度は坊ちやんを背中からおろした。
「御免なさいよ、山田さん……二人とも亂暴でしやうがありません。」
山田は自分が叱られたやうな氣がして、眞つ赤になつた。
山田は奥さんに自分の名を呼ばれて、恐縮した――いつの間に、奥さんは自分の名などを知つたのだらう。それが不思議でならなかつた。
奥さんは少しも身のつくろつたところのない人だつた。それでゐて、美しい人だつた。生地の儘の美しさだつた――山田は山から切り出したばかりの木を見るやうな氣がした。
お孃さんと坊ちやんは、お母さんに叱られると、一度家の中へ駈けてはひつたが、やがて白地の浴衣を無造作に着た森川先生の兩手にぶらさがつて、又出て來た。
先生は二人の手を引きながら、欅林の坂を降りてもうランプのついてゐる會場の方へ足を運んだ……それでも、會場の傍まで來ると、二人はおとなしく手を放した。先生は山羊鬚の青年が渡した團扇を持つて、みんなの坐つてゐるところへ一緒に坐つた――
「白井君、机は邪魔だから、片づけて呉れ給へ。」
先生がかう言ふのを聞いて、會員達は始めて山羊鬚の青年の名を知つた――白井君に言ひつけられ

た通りに、机と椅子を隣の部屋へ運んだ。今まで少しは教室らしかつた部屋が、これですつかり唯の座敷になつてしまつた。

先生の浴衣がけ、手にした團扇、疊の上の同席――かうしたことが、甞とはまるで違つた空氣を作つた。先生に對する温かい親しみが、會員の誰の心にも起つた。

「今夜は祈禱會といふことにしましたが、諸君の内には、まだ祈禱の精神といふものを、よく知らない人があらうと思ひますから、一應座談的にそのことを話して置かうと思ひます――一體、さつき家で白井君にも話したことですが、夜の會は飽くまでも遠慮のない寛いだ會にして、わたしが何か言ふよりは、あなた方の感想なり疑問なりを、わたしの方で聞くことにしたいと思ふのです――」

先生はさう言ふと、懷から書間使つたのでない小型の新約聖書を出した――

「さて、祈禱の話ですが、一體、基督教で言ふ祈禱は儀式でもなければ、典禮でもないのです。ですから、祈禱といふものはかういふ風にしてしなければならないとか、かういふ詞を使はなければ、ならないとかいふ規則などはないのです。よく教會などで見る形式的な祈禱――あれが必ずしも祈禱ではないのです。祈禱は信仰の現れ以外のものではないのです。苟も人にして信仰を持てば、どうしても祈禱をせずにはゐられなくなるのです。世の人には、神は信ずるが、祈禱などといふ迷信的なことはしないと言つて、息張つてゐる基督教信者が隨分ありますが、さういふ人は祈禱の何者たるかをま

るで知らないばかりでなく、實は信仰の何たるかをさへ辨へない人です……」

先生の口調は、昔聞とはまるで違つて、柔かに優しく響いた――論難の調にさへ少しも激越な調子がなかつた

「……譬とか信仰といふ問題は、一先づ別のところへ置いて、諸君が美しい花とか好い景色とかを見た場合を想像して見ますね。それらが神の創造であることなどは考へないでも、美しい花を見れば美しいと思ひ、好い景色を見れば好い景色だと思ふのは、人情の自然だらうと思ひます。そこで、人間が讃美の詞を發しますね。實に綺麗だとか、こんな景色は今までに一度も見たことがなかつたとか言ひますね。ところが、それだけでは、どうも物足りない。もつと何か自分の感情を滿足の出來るまで言ひ現したい。そこで、詩や歌を作ることになる――自分で出來なければ古人の詩や歌を思ひ出す。そして、自分の感情とその感情の對象とを少しでも密接な關係に置かうとします。祈禱の精神は手もなくこれです。信仰告白の高調が詩歌となつて現れたものが祈禱なのです。祈禱は詩です。信仰の歌なのです……それでは、唯それだけのものかと言ふと、なか〳〵さうでない……」

一息すると、先生は直ぐあとを續けた――

「諸君は『山上の垂訓』といふものを知つてをられるでせう。『心の貧しき者は福なり。』をもつて始まる馬太傳第五章から第七章の終に至るまでのあの有名なイエスの詞です。これは基督教の信者でない

人でも、大抵な人は知つてゐる。或人などはこれさへあれば聖書の他の部分は全部なくなつても構はないとまで言つてゐます。トルストイなどは、これを一般道徳と見て、人は何人でもこれを實行しなければならないやうに言つてゐますが、それは非常識だと言はなければなりません。成程「山上の垂訓」の中には、イエスの倫理らしいものがあります。併し、それは道徳律ではなくて、實は天國の福音なのです。假りにこれを道徳だと見て、決して一般道徳ではないのです。信者道徳なのです。天國の道徳なのです。信者の國なる天國に於いてのみ行はれ得る道徳なのです。基督の血によつてその罪を贖はれた、心の虚しい、へり下つた信者の間にのみ行はれ得る道徳なのです――これを國家道徳と見て、また社會道徳と見て、その不可能事たるは誰が見ても明かです……

併し、この天國の律法は、モーゼによつて傳はつた舊約の律法よりも遙に嚴格です。『爾に求むる者には與へ借らんとする者を卻くる勿れ』――『なんぢ施濟をするとき右の手の爲すことを左の手に知らする勿れ。』――『もし右の眼なんぢを罪に陷さば抉出して之を棄てよ。』――『人なんぢの右の頬を批たば亦ほかの頬をも轉らして之に向けよ。人なんぢに一里の公役を強ひなば之と偕に二里ゆけ。』――どこを讀んでも、至難なことばかりです。これは確にモォゼ律以上です。『山上の垂訓』を守るの困難は、到底モォゼ律を守るの困難の及ぶところではないのです……

「天國の幸福は誰にとつても慕はしいものには違ひありませんが、かくもむづかしい律を守らなけれ

ほ、そこへはひる資格が得られないとすれば、天國は吾々凡夫にとつて有つて無きに等しいものである。「天國の市民になりたいとは思ふが、到底自分にはその能力がない。」とは、イエスの山上の說教を讀んで何人にも起る感想であります。「然らば誰か救を受くべき乎」とは、この場合ばかりでなく、他の場合に於いても、屢イエスの弟子達の間に起つた疑問でした。イエスの宣べた天國の律法は、肉體を持つてゐる吾々にとつては、あまりに純潔過ぎます。その實行は、吾々の弱さを以てしては、到底不可能です。「誰か之に堪へんや」です。イエスの要求と吾々の能力との間には天地も啻ならざる距離があります……

「求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば會はん。叩けよ、然らば開かれん」とは、この疑惑に解答を投げうとして、イエスが述べた「山上の垂訓」の總括とも稱すべき詞なのです……

「イエスは自分の述べた道言が、地上の人にとつて守るに困難なことはよく知つてゐたのです。イエスは自分一個の立場から、自分とはまるで違つた境遇にある普通の人間に向つて、自分の道德を強要するやうな、そんな無理想な人ではなかつたのです。イエスがここに言つた詞の意味はかうなのです——

「イエスはかう言つたのです——だが、お前達は私の福音を聞いて失望するには及ばない。私の要求に應ずることの困難なことは私もよく知つてゐる。「汝等の義にして學者とパリサイの人の義に勝る

に非ずんば、汝等は必ず天國に入る能はず。――私はかう言つた。これはなかなか普通の人間に出來ることではない。併し、人には出來ないことでも、神には出來る。神に出來ないことは何一つないのだから。お前達も自分の力だけを頼りにして、私の教を守らうと思つても、それは無理だ。併し、お前達の父はお前達を助けて、どんなむづかしいことでも爲遂げさせて下さるのだ。求めれば、與へられるのだ。尋ねれば、會へるのだ。叩けば、開かれるのだ。お前達の力の不足を父に祈つて補ふが好い。彼は喜んでお前達の祈禱に答へるだらう……イエスはかう言つたのです。

「かういふ意味で、祈禱には必ず效力があるのです。それは日本で普通言ふ御利益とか大願成就とかいふものではない。商賣繁昌や家内安全の祈願が叶ふのではありません。人間が人間の能力以上の道德を行はうとして、その足りない力を神に乞ふのです。祈禱の精神には無限にいろいろな意味がありますが、その重大な要素がこれであることは疑ふ餘地がありません……

「繰り返して言ひますが、イエスは神の助けなしに人間に實行出來るものとして、天國の律法を述べたのではありません。神に求めて、神に尋ねて、神の聖意の門を叩いて、はじめて、右の頰を打たれた時左の頰をこれに向ける忍耐を得ることが出來るのです。自分を詛ふものを祝し、自分を責めるものの爲に祈る愛心を持つことが出來るのです。苟もイエスの弟子たるものはその祈禱の範圍を善心の祈求にまで廣げなければなりません。吾々は先づ善事をして、それから善心を買ふのではありません。

先づ祈つて、善心その者を貰ひ、それによつて心から善事をするのです。山上の垂訓をもつて、單にイエスの道德律と見なすものは、彼が祈禱の勸めをもつてこれを結んでゐることに氣の附かないものであります……

「求めよ……尋ねよ……叩けよ……といふのは、どういふ意味でありませうか。「求めよ」とは、詞をもつて求めよの意です。「尋ねよ」とは足を運んで尋ねよとのことです。「叩けよ」とは手を擧げて叩けよといふことです。口で願つて、若し聽かれなければ、手を伸べて願へと言ふのです。祈禱は切々たらざるべからずと言ふのです。さうすれば、必ず與へらるると言ふのです。「ひたすら請ふ故に、その需に從ひ、起きて予ふべし。」といふ詞がある位です……

「求めよ、聽かれざれば尋ねよ。尋ねて猶聽かれざれば叩けよ——」さうすれば、神はお前達に、お前達の爲しとする天國の律法を實行することの出來る能力と精神とを與へて下さるに違ひない——かうここでイエスは說いたのです……

「汝等のうち誰かその子パンを求めんに石を予へんや。また魚を求めんに蛇を予へんや。然れば汝等惡しき者ながら善賜をその子に與ふるを知る。まして天に在す汝等の父は求むる者に善物を與へざらんや。」——祈禱が神に聽かれる理由はこれであります。若しこれが理由にならないならば、他に理由はないのであります。祈禱の効力——これを科學的に證明することは出來ません。祈禱はなぜ神に

聽かれるか――これを論理的に立證することは出來ません。併し、父の親心に訴へて見て、神がその子供の祈禱を聽く理由が分かるのです……

「……『エホバの己をおそるる者をあはれみたまふことは父がその子をあはれむが如し。』ここには、詩篇の第百三篇にある詞です。人間としての父がその子を憐む心は元々神から出たものであります。人間としての父に子を憐むの心があるとすれば、その心を人に與へた神には、それ以上の憐みの心がなければなりません。『子を持つて知る親の恩』といふことがあります。さうです。『親となつて知る神の愛』です。自分のやうなものにさへ子を憐む愛があるのだ。況んや天にゐます我が父をや――祈禱が神に聽かれる理由はこれで十分なのです。これ以上に所謂祈禱の哲學を攻究する必要はないのです……イエスは祈禱の効力に就いて、更に詞を續けて言つてゐます――『是故に凡て人に爲られんと欲ふことは、爾曹また人にも其ごとく爲よ。是律法と預言者なる也。』……

「おのれの欲せざるところ、これを人に施す勿れとは孔子の金言であります。おのれ人にせられんと欲することは、また人にもその如く爲すべしとはイエスの玉條であります。前者は消極的に害を他人に加ふる勿れと誡めるのです。後者は積極的に善を他人に施すべしと教へるのです。即ち人の道の終局は無害であることです。神の道の終局は至善であることです。退いておのれを潔うする道と、進んで愛を全うする道と、その間には天と地との相違があります……

「それは分かつたとして、『是故に』とあるのは、何の『是故に』だらう。進んで人に善をなすことと祈禱の効力に何の關係があるのだらう。一は人に對することであつて、他は神に對することではないか。それとこれとは全く別なことではないか……

「ところが、さうでないのです。神に善物を求めること――即ち祈禱――と、人に善事をなすこととの間には、實に密接な關係があるのです。それ故、イエスは『是故に』といふ詞を置いて、効力ある祈禱の必要條件として善事の實行を說いたのです……

「イエスはかう言つたのです――お前達は自分の力で天國の市民になることは出來ない。その資格を得る爲には、神の助けを仰がなければならない。お前達は祈つて、善心の恩賜に與らなければならない。是故に、お前達は神にして貰はうと思ふことを、人に對してしなければならない。『爾が人を量る如く己も量らるべし。』と、私が言つたのはこのことだ。お前達はお前達の持つてゐる善物を人に與へて、神の持つてゐる善物即ち聖靈の恩賜に與らなければならない……かう、イエスは言つたのです……

「かうして、はじめて道德が宗教に結びつけられたのです。祈禱は人が神に對して執るべき態度であつて、善行は人が人に對して爲すべきことなのです。さうして、人の神に對する態度は人が人に對する態度に依つて定まるのです。人を惠まうとする態度は、神に惠まれる態度となり、人を憐まうとする態度は、神に憫まれる態度となるのです……

「神に憐まれようとするなら、人を憐むべきです。神に祈禱を聽かれようとするなら、人が賴まない前に、自分から進んで自分の欲するところを人に施すべきです。「凡て人に爲られんと欲ふこと」とある――その「人」といふ中には神も含まれてゐるのです。ですから、イエスのこの詞を言ひ換へれば、「汝等すべて神にせられんと欲することは亦人にもその如くせよ。」となるのです。基督信者の道德の原理は、これ以上明白には述べ難いのです……

「……是律法と豫言者なる也」――最後にこの詞の意味を說明したいと思ひます。律法と豫言者――これが舊約の全部です。神を愛す――神を愛するの途として人を愛す――神に愛せらるる條件として人を愛す――舊約全部の敎へるところは畢竟これに過ぎないと言ふのです。そして、天國の福音もまた詰まるところこれに外ならないのです。「是律法と豫言者なる也。」――イエスはかう言つて、祈禱の効力に關する彼の訓誡を結んだばかりではありません。この一句をもつて山上の說敎を結論したのです……

「イエスは初めに言つてゐます――「われ律法と豫言者を廢つる爲に來れりと意ふ勿れ。われ來りて之を廢つるに非ず、成就せん爲なり。」と。そして、最後にかう言つたのです――「是律法と豫言者なる也。」と。卽ち、ここに述べた詞の全部は、律法と豫言者を總括したものである。卽ち、舊約の全部である――と、かうイエスは言つたのです……

「愛とは何か。神は父として人を愛す。人は子として神を愛すべきである。そして、神を愛する愛をもつて他の人を愛すべきである――これが律法と豫言者なのです。そして亦イエスの福音なのです。どんな學者が如何に基督教の教義を攻究しても、これ以上高いところ、これ以上深いところに到達することは出來ないのであります……」

かう言ひ結ぶと、森川先生はみんなの顔を見廻した――はじめは寛いでゐた一座も、いつの間にか堅くなつて、もう扇子一つ動いてはゐなかつた。

「研究の話はこれで濟みました。これから、わたしが神に感謝の祈禱を捧げます。諸君の内で、祈禱の精神が動いたものは、續いて祈つて下さい。繰り返して言ひますが、祈禱は形式ではありません。人間の衷情を披瀝すれば、それで好いのです。唯吾々は祈禱をする時に、いつも最後に「基督の名によつて」とか「基督の十字架を通して」とか言ひます。これは、イエスの贖罪なしには、吾々と神との間に交通がなし得ないからであります。一旦神に背いて罪悪の奴隷となつた吾々人類は、基督の十字架なしには神へ歸ることが出來ないのであります……このことだけは忘れてはなりません。」

かう言ふかと思ふと、先生は直ぐ兩手を膝の上で組み合せて、眼をつぶつた――會員達も先生を眞似て、眼をつぶつた。

先生の祈禱が始まつた……

少しの飾り氣もない、丁度子供が父に話しかけるやうな、しかも誠實と謙遜と神に對する燃えるやうな愛に滿ちた祠が續いた……

先生は先づ、神の力に依つて、この夏期講習會を無事に開くことが出來たことを神に感謝した。全國から純良な青年達が神の教を聞かうとして、ここへ集まつて來たことを神に感謝した。「東京インデペンデント」の解散に際して、幾多の悪魔的誘惑があつたにも關らず、神の愛によつて少しの怨恨をも遺すことなく、聖書研究に幸福な道を見出すことが出來たことを神に感謝した……

併しながら、ここに集まつて來てゐる青年達はまだほんとに神の道を體得してゐるものではない。信仰も弱い。愛の力も足りない――それを自分のやうな罪の深い、信仰の足りないものが導いて行かうとしても、それは不可能である。どうか、この不束な器を使つて、神自身で神の道を彼等の前に開いて貰ひたい……

「……この感謝と哀願とを、主イエス・キリストの御名を通して、聞こしめし給はむことを。アアメン。」

先生がかう言つて、祈禱を終ると、物怖ぢするやうな、躊躇するやうな「アアメン」といふ聲が、そこここで聞こえた……

山田も柴田や南の間にはひつて、首を垂れてゐた……

山田は祈禱の何たるかを今までまるで知らなかつた。祈禱などといふものに就いて考へて見たこと

もなかつた。森川先生の著書を讀んでも、祈禱に關することが書いてあると、それが先生といふ人を知る上に於いて、邪魔になるやうな氣がした。たとひ自分が基督教を信ずるやうなことがあつても、祈禱などはしないで濟むだらうと思つてゐた。かうして山田は祈禱と自分との間に少しの關係をも豫想してゐなかつた。

現に、その日も祈禱會があるから來いと言はれた時は、何か氣味の惡い集まりへでも呼ばれたやうな氣がした。併し、その朝から急に燃え出した熾烈な彼の「求める心」は、もうそんなことを恐れさせては置かなかつた。彼は一刻も早く、もう一度先生の顏が見たかつた。もう一度、先生の口から、どんな詞でも聞きたかつた。そして、一日の内にまるで變つた自分の心に、しつかり釘がうつて貰ひたかつた……

山田はさういふ氣持で來たのであつた――、先生の話を聞いてゐる内に、自分の今まで勝手に考へてゐたことが、まるで間違つてゐたことに氣がついた――

祈禱は詩歌の中の最も高い詩歌であつた。祈禱は神に對する人間純情の發露であつた。祈禱は神との對話であつた。祈禱は神の行爲を豫言するものであつた。しかも、祈禱は他人を愛することを條件として、必ず神に聽かるべきものであつた――

祈禱に對する山田の誤解は根柢から覆された。祈禱なしに基督教はないのである。祈禱なしに眞に

人たる道は得られないのである。祈禱なしに神に接することは出來ないのである。極端に言へば、祈禱なしに人は一歩も歩くことが出來ないのである……

祈禱のどこに氣味の惡いところがあらう。祈禱のどこに迷信があらう。先生が祈禱をするのに、何の矛盾があらう。

今まで輕く見てゐた祈禱が、急に重大なものとして山田の前に現れた。山田はかくも大事なものを今まで冷淡に見てゐた自分を深く恥ぢた。「これだ。これだ。これが本當の力になるのだ。これにつかまつて、自分は始めて安心して歩けるのだ。」山田はさう思つた。

先生自身の素朴で敬虔な祈禱は、更に山田を動かした。それには、彼の想像してゐたやうな「形式」は少しもなかつた。在りの儘の感情の在りの儘な發露であつた。祈禱は練習を要すべきことではなかつた。祈禱は所謂「朗讀」でもなければ、所謂「演說」でもなかつた……

「祈禱は自分にも出來るものだ……そして、自分もしなければならないものだ。」

山田はさう思つた――さうは思つた――併し、さう思ふと同時に、直ぐ實行が出來る程、山田はまだ純でなかつた。

山田は人の氣をかねた。友達が何と思ふだらう。先生が何と思ふだらう。また、他の人達が何と思ふだらう。けふ始めて先生の話を聞いたばかりで、すぐ祈禱などをするのは、輕率ではないだらうか。

まだ本當に信仰にはひつたのかはひらないのか、それさへはつきりしないのに、神に向つて祈禱などをする資格があるだらうか……

山田はかうした妄念に捕へられて、どうにも口を開く勇氣が出なかつた。彼は口元まで涌き上がつて來る祈りの詞を押さへつけて、ぢつと默つてゐた……

先生に續いて、直ぐと祈禱の聲を上げたのは、山羊鬚の白井君だつた……

「神樣……僕は森川先生が神樣と神樣の子供達との爲に働いてをられます間、先生を煩はすに忍びないやうな雜用に從事して、少しでも先生の骨折を少くしたいと思つてゐるものであります……神樣がこの仕事を僕に與へて下すつたことを感謝します……森川先生が僕のやうなものでも我慢して使つてくれるのは、やつぱり神樣のお蔭だと思ひます……感謝します……會員が澤山出來たことも神樣がなすつたことです……感謝します……」

白井君の祈禱には少しも作爲がなかつた。白井君は思ふことを思ひ出す儘に述べて行つた。それはまるで子供の祈禱であつた……しかも、一言一言に誠意が籠つてゐた。始から終までが感謝の連續だつた。少しも暗いところのない祈禱だつた——

「……神樣、僕は學問もないし利口でもありません……僕は神樣の爲に犬馬となつて働くことが出來ますだけです……神樣、どうか僕を僕だけにうんと使つて下さい……何でもいたします……どんなこ

とでも厭だとは言ひません……僕はこの會へ集まつた人達が、神樣から何か貰つて歸つて吳れれば、それで好いのです……僕はなんにも入りません……僕は神樣の下男として、みんなの爲に働くことが出來れば、それで好いのです……この祈禱をイエスの名に依つて聽いて下さい。アアメン」

白井君の祈禱が終ると、山田は心が一度に明かるくなつたやうな氣がした……美しい詞を聞いたのでもなかつた……奇麗な詞に動かされたのでもなかつた……飽くまでもおのれを空しうした、自分を輕くした、少しの虛榮もなしに自分を卑下した態度が、世にも尊いものに思はれたのである……

山田は愈何か言ひたくて堪らなくなつた。强ひて長いことを言ふ必要はあるまい。唯ゆうべ命を助けられたことと、その命を助けられた意味がけふ分かつたことだけを――尤も、自分にとつてこんな大きな問題はないのであるが――神に一言感謝すれば、それで好いのだ。どうも、それだけの禮は、けふ是非とも言つて置かなければならないやうな氣がする……

……先生にも禮が言ひたいのだが、先生はきつとその禮を受けては吳れまい。それは神に向つてすべき感謝で、自分に向つてすべき感謝ではないと言ふに違ひない。さうだ。どうしても、この禮は神に對して言はなければならない禮だ……

山田は顏が熱くなつて來るのを感じた。胸がどきどき波をうつのを感じた。併し、聲が口まで登つて來ては、また下へ降りて行つた……何がそれを妨げるのだらう……それは山田にも分からなかつた

が、山田はどうしても祈ることが出來なかつた……

さうした山田の躊躇に一分か二分だつた……白井君の祈禱に續いて、部屋の一隅から泣き叫ぶやうな祈禱の聲が起つた。

山田には、勿論それが誰だか分からなかつた。

それは白井君の祈禱とは似ても似つかぬ祈禱だつた。

その聲のうちには、田園らしい訛があつた。彼に祈禱の經驗がある人と見えて、神に呼びかける詞や、神に對して自分を卑下して言ふ詞なども慣れてゐた……

併し、その祈禱の内容は、悲痛な哀願に終始してゐた。感謝もなかつた。讃頌もなかつた。徹頭徹尾ただ泣いて祈願するのみであつた……

この人は基督教の信者として、職を小學校に奉じてゐた。田舍の小學校は、彼を「外國の宗教」の信者として侮蔑した。しかも、基督信者である以上、少しの缺點も彼にあつてはならなかつた。世間の監督者は、眼を皿のやうにして、彼の行爲を注意した。そして、些末な失錯があつても、彼を許さなかつた。さうしたことのある度に、彼の呼ばれる名は「偽聖人」であつた。「偽善者」であつた……

彼の父は村役場に勤めてゐた。善良な人ではあつたが、無信仰で、意志が弱かつた。彼の家計は元より豊ではなかつた。殊に彼の姉で或船員にかたづいてゐたのが、放蕩な夫の不法な離別によつて、

二人の女の子を抱へて家へ歸つて來てからといふものは、一層生活が苦しくなつた……彼の父は誘惑に勝てないで、或漁業會社からの賄賂を受けた。それが知れて、父は罔圄の人となつた……

彼は父の罪を名として、直ぐに學校を免職された。敎會からも逐はれた。敎會は敎會の「人氣」の爲に彼を破門したのであつた。さうして、さういふ家庭の人を信者として認めることは出來ないとつた。學校は彼を免職してから後も、彼を基督信者として憎んだ。そして、基督敎や基督敎の神に様様な惡名をつけた。

父の罪惡は、彼の全く與り知らないところであつた。しかも、彼が基督敎信者であつたばかりに、彼の故郷では基督の名が散々に汚された……父の罪を負ふことを、彼は厭はなかつた。彼は出來るなら、年をとつた父に代つて、牢獄の苦しみを受けても好いとさへ思つた……併し、自分の爲に基督の名の汚されることは、如何にしても堪へ得られなかつた……

彼は茜屑の行商をしながら――それで得た僅の金を故郷の姉に送りながら――食べるものも食べずに東京へ出て來た。……そして、自分のその大きな苦しみを森川先生のところへ持つて來た……

彼は彼が故郷で汚した基督の名を潔めなければならない。それには、先づ今の自分をどう處置したら好いか。今後の自分をどうしたら好いか。それが神に示して貰ひたいと言ふのであつた……

この祈禱には感動するものが多かつた。婦人の中には泣き聲を洩らすものさへあつた……

同情の祈禱が、それからそれと續いた。いづれも形式に馴れない、素朴な祈禱であつたが、どれもこれも信仰の籠つたものであつた。

山田はここまで來ても、まだ口を開くことが出來なかつた。四圍の人の苦しい心持を聞いて自分の經て來た苦しみなどは、「苦しみ」と呼ぶことさへ出來るものではないことを知つて、愈自分の幸福を感じたのであつたが、それでも、それを口に出して言ふことはどうしても出來なかつた……

堅信

山田はへとへとに疲れて歸つた。

併し、また來くる日の晩は、いそいそとして千駄ヶ谷を指した。

この日の講題は「人間の價値」といふのであつた——

吉川先生は先づ聖書のそこここから四つの文章を引いて讀んだ。

『或處に人證して言ひけるは人を誰として而これを心に記るや人の子を誰として而これを眷顧るや。』

『世人はいかなるものなればこれを聖念にとめたまふや、人の子はいかなるものなればこれを顧みたまふや。』

『イエス答へて彼に曰ひけるは若し人我を愛せば、我言を守らん、且我が父は之を愛せん。我儕來りて彼と偕に住むべし。』

『肉體は神の殿にして、神の靈爾曹の中に在すことを知らざる乎』

先生は一つの文章を二度宛繰り返して讀んだ。併し、聖書の詞そのものに就いては、少しの註釋をも加へなかつた。一つの詞と他の詞との關係に就いても、なんにも言はなかつた――

……人間の生命はなぜ貴重であるか。

これは容易な問題のやうに見えて、實は非常に困難な問題である。

なぜ乞食一人の命は千萬金を値する馬の命より貴いか。

答へて言ふものがある――それは自分の命が貴いからである。即ち若し他人の命を害ふのを許して置いたら、終には自分の命を侵すものが出て來る懼れがあるからであると。

だが、これだけの解釋では、まだ人命その者の貴重な理由を說明したことにはならない。

基督教は人命の貴重な所以を說いて、人は神の聖殿たる資格を備へてゐるものだから、それ故貴いのだと言ふのである。即ち、天の父とその愛子とが、その聖靈に由つて彼の內に宿り、彼と生活を偕にすることが出來るから、それで人間は貴重なのだと言ふのである。

哲學者カントは約翰傳十四章二十三節――『イエス答て彼に曰ひけるは』云々――を評して、「これ

は人類の最大特權を示した詞だ」と言つた。

神の宿るところとなるもの――それが人間である。それが乞食であらうと、賤民であらうと、黑ん坊であらうと、無宿無賴の流浪人であらうと、人間はどこまでも人間であつて、この至大の特權を持つてゐるのである。馬は皇帝の愛馬であつても、この特權は持つてはゐないのである。萬金を値する獵犬も、この特權を有するものではないのである。

それ故、人命は貴重なのである。だから、これを毀すものは、神殿を毀すと同じ罪に問はれるのである。「若し人、神の殿を毀たば、神かれを毀たん。蓋神の殿は聖きものなればなり。この殿は卽ち爾曹なり。」他人を殺す者も、自分を殺す者も、等しくこれ神の聖殿を毀つ者である。

人は皆凡俗だと言つて嘆く人がある。英雄の世に出づる甚だ稀なりと言つて嘆く人がある。だが、それは基督の福音を知らないところから出て來る嘆聲である。日本國には四千五百萬の神の聖殿があるのである。その一つ一つはソロモンの作つたといふ神殿にも優つたものである。隣邦の朝鮮には一千五百萬の神の聖殿があり、更に支那には四億萬の神の聖殿があるのである。

ああ、なぜ吾々はこれを淨めて神に捧げないのであるか。

吾々がこの國に住んでゐるのは、實に聖域なるエルサレムに住んでゐるのと同じではあるまいか――

山田はＫ先生の講話に動かされた、

彼も一日前までは人間の命を最も輕いものに見てゐた一人だつた。この世に自分の所有し得べきものがなんにもなくなつても、自分の命だけは自分のものである。この世に自分の自由になるものはなんにもないとしても、自分の生命だけは自分の自由にすることが出來るのである――山田は寧ろそれを痛快に思つて、戀愛に「自我」の絶望を嘗めると同時に、死に「自我」の滿足を味はうとしたのであつた……

併し、人間の命は「自我」の所有ではなかつた。それは、やがて神の來り住む爲に、神の建てた殿堂であつた――四千五百萬の同胞の一人一人が神の殿であることを説かれた時、山田は森川先生の背後から、或光が射して來るやうに感じた……

山田は先生の講話の内容より、寧ろその「光」に打たれたのであつた……

午後は懇話會として　先生の提出した題目に各自が答へることになつた――出された題は「我が靈魂の要求」といふのであつた。

先生は先づ初めに口を切つた――

自分にとつて、靈魂の要求は頗る多い。悉くこれを語らうとしたら、一日や二日では足りない。それ故、自分は今その中で一番大きいと思ふ要求を二つだけ述べたいと思ふ……

かう言つて、先生は少しの虚飾もなしに、自分の缺點を述べ立てた――

第一に、自分は大膽に正義を貫く勇氣が得たいと思ふ。筆を執つての自分は可なり剛直であり、又可なり果敢である。併し、自分はその實至つて弱いのである。誰かが若し拳骨を固めて、自分に向つて來たとしたら、自分は必ず怯懦な態度をとるに違ひない。勿論自分は他人の體力の爲に自己の正義を曲げようとするものではない。併し、なぐられるまでに自分は非常な恐怖を感ずるのである……

この恥づべき恐怖――これをどうかして自分は取り去りたいと思ふ。勝海舟に傚はうか。修練に倚らうか。或は讀書に賴らうか。いや、吾々はやはり基督に賴るより外に道はないのである。吾々の裏に基督がある時、敵に對する者は吾々でなくて基督なのである。吾々は吾々自身を靈の糧なる基督に捧げて、世界一の勇者となることが出來るのである……

自分の第二の要求はこれである――自分はどうかして怒りたくない。自分がよく怒るのは、自分が弱者だからである。怒る者は強いやうに見えて、實は弱いのである。自己の情念に抑制を加へることが出來ないから怒るのである。

然らば、どうしたら怒らないで濟むだらうか。ここでも又基督に一身を捧げるより外に道を見出すことが出來ないのである。自己の總てを基督に捧げ、基督をして世の誤解や攻撃に當らしめるのである。若し、さうすれば、僞善者と言はれようが、不忠漢と呼ばれようが、決して腹は立たないのである。

山田は先生が少しも自分を高しとしないで、正直に自分の缺點を擧げたのに驚いた。
「さあ、今度は誰かあなた方の内で話して下さい。」
先生がかう言ふと、直ぐ膝を乘り出したのは深田だつた――深田は一生懸命に先生の顔を見詰めながら言つた――
「僕のやうなものでも、神について眞面目に考へる時は、靈魂の要求を感じます。その要求の一つは相手が誰であるのを問はず、大膽に、明快に、自分の情熱を披瀝し、自分の信念を打ち明け、自分の所信を開陳したいことであります。併し、僕は至つて弱い人間で、誰に向つても自分の所信の半分をさへ語ることが出來ないのです。情ないことには、相手が骨肉親戚だと、なほそれが言へないのです。それから、もう一つ僕のいけないことは、女の前へ出ると甚しい羞恥を感ずることであります。これは自分の肉の内に根ざしてゐる罪惡が深いからであらうと思ひます。僕はどうかして自分のこの二つの缺點に克ちたいと思ひます。それにはどうしても神の力に依らなければならないと思ひます。僕は先生に導かれて、是非ともその神の力が得たいと思つてゐます……」
深田の詞にはすこしの巧みもなかつたが、そのまじめさは人を動かさずには置かなかつた。
次ぎに口を開いたのは、信州の或中學校の教師だつた――
「わたしは學校で幾度となく倫理學の講釋を聞かされました。大我たれと言ふのです。社會我たれと

言ふのです。合理的の活動をしろと言ふのです。けれども、唯そんなことを說かれたところで、それは何の力にもならないのです。理論は決して人間の力にはなりません。宗教は理論ではありません。わたしは飽くまで實行の人になりたいと思ひます……」

すると、先生が直ぐに答へた――

「實際、今日の學理は精に入り微に及んでゐますが、實行の點になると、實に陋劣を極めてゐます。一體、Why に答へることは誰にも出來ることで、唯 How を說くことが困難なのであります。How の最後の解決は『大能力』を得ることより外にはありません。然らば、その偉大なる能力はどこにあるかと言ふと、山にもあれば森にもあるのです。神に倚つて吾々に出來ないことはなんにもないのです。神にお祈りなさい。唯神にお祈りなさい。神は無限に能力を持つてゐるのですから……」

先生の答が終るか終らない內に、部屋の一隅から勢の好い聲を上げるものがあつた――

「祈禱と信仰と行爲とは常に一致しなければならないものだと思ひます。吾々は祈禱をして始めて人生に信仰のあることが分かります。祈禱のない人生は、穴のあいた人生だと思ひます。けれども、情ないことに吾々は十分に祈禱をすることが出來ません。先生、どうしたら十分祈禱が出來るやうになるでせうか。」

かう言つたのは、陣中から出て來た坊さん上がりの小學校の教師であつた。

この告白、この質問は山田や南の心にもあつた。二人は先生がこれに對して、どんな答をするだらうと思つて、片唾を呑んで待つてゐた……

併し、先生の答は思ひの外簡單であつた――

「わたしは嘗て自分の著書にかういふことを書きました――『余は余の信仰をも神より求むるのみ。基督信者は絶間なく祈るべきなり。然り彼の生命は祈禱なり。彼尙不完全なれば祈るべき也。彼尙信足らざれば祈るべきなり。彼よく祈り能はざれば祈るべきなり……』わたしの答は、やはりこれより外にないのです。何事にも力の弱い吾々は、祈禱の出來るやうに祈禱をしなければならないのです。吾々は祈禱の力をも亦愛の神に受けなければならないのです……

「世の中には、常に悔改めの祈禱を捧げる人があります。それも惡いことではありません。まるつきり祈禱をしないよりは、どんなに好いことか分かりません。併し、人間といふものは、悔改めるかと思ふと、直ぐに又罪惡を犯すものです。悔改めては罪を犯し、罪を犯しては悔改めるのが、或は人間の一生であるかも知れません。併しながら、それでは餘りに姑息な一生です。悔改めるばかりが祈禱ではありません。否、祈禱はその最も高い意義から言つて、祝福と感謝の連續でなければならないのです。吾々はさういふ祈禱の出來るやうに神に祈らなければならないと思ひます。」

祈禱の爲の祈禱――先生の詞は寡かつたが、その敎は山田にも南にも多くの暗示を與へた。二人は

顔を見合つて頷き合つた。

その言葉に口を開いたのは柴田だつた。柴田は一句一語を讀みながら、自分が陰險罪の常習犯であることを述べた。そして、如何なる場合にも、有の儘を語り有の儘を行ふことの出來ないのを嘆いた——小寺もそれに續いて同じやうなことを言つた。

先生は答へて言つた——二人の言ひ草は東洋人一般の缺點である。昨夜流行の聞辯はその尤たるもので、これに勝るのは日本であらう。併し、神の力によつて、總ての人間からこの陰險罪を取り除くことが出來たら、この世の中はどんなに愉快になるだらう……

山田は先生の詞を聞きながら、また『東京インデペンデント』の事件を思ひ出した。そして、言外の意味を先生の詞に讀みとつて、愛情しく深い同情を先生に寄せた。

この日は柴田が先づ口を開いた。柴田も物を言つた。氣の弱い小寺も思ふところを遠慮なく述べた。

山田はどうしても、今度は自分が何か言はなければならないと思つた。

併し、言ひたいことが口元まで込み上げて來てゐるのに、山田はやつぱり口を開くことが出來なかつた。自分も柴田や小寺と同じ陰險罪を犯してゐるのだと思つて、幾度も自分で自分を叱つたが、それは何の效果もなかつた。

公衆の前で懺悔するには、自分の悩みは餘りに小さな悩みである。問題は唯自己一身の問題である。

周圍の迫害に苦しんでゐるのでもない。人類國家の爲の苦悩でもない。唯自分一箇の欲望が滿足させようとして、それが失敗に終つた揚句、死を決したのが計らず救はれたといふだけのことである。その「救ひ」――それをしつかり摑みたいのが今の望みであるが、そんなことがどうしてみんなの前に持ち出せよう……山田は自分で自分を恥ぢて、その日も終に無言に過ごしてしまつた。

山田は毎日熱心に千駄ヶ谷へ通つた。

彼の魂の眼は毎日のやうに新しい世界を見た。彼の信仰は毎日のやうに基礎を堅くした。身内には、いつも靈の力と敬神の火が燃えさかつた。

併し、何にも増して高まつて行くのは、森川先生に對する愛慕の念であつた。書物を通して見た先生には、まだ何か隔てがあつた。千駄ヶ谷へ通ふやうになつてから見た赤裸々な先生には、もう何の隔てもなく近づくことが出來た。しかも、近づけば近づく程、先生の人格の社會に孤立する程高いのが分かつて來た――山田は先生を愛しながら恐れた。恐れながら愛した……

三日目からの先生の講義の大部分は「基督の復活」に關するものであつた。この講義も山田にとつては全く珍しい驚異であつた。先生の信仰はここまで來てゐるのか。「眞の基督教とはかういふものか」山田は講義を聞きながら、幾度もこんなことを考へた。

先生の說くところはかうであつた――

世に基督教ほど大膽な宗教はない……

基督教はその教義を説くに當つて、決して哲學者の批評を恐れない。苟も唱ふべき眞理があれば、どんな教義でも大膽に唱へる……

若し吾々の信ずるやうに、基督教が神の示顯であるなら、これは哲學以上科學以上のものである。吾々は近世科學の反對を恐れて、吾々の信仰を匿すやうな卑怯な行ひはしないのである……

吾々は先づ基督なる神の子の降世を信ずる……

また十字架上に於ける彼の犠牲を信ずる……

そして又彼によつて始められた「肉體の復活」を信ずる……

この三つは實に基督教の根本教義であつて、若しこれらを信じないで、自ら基督教の信者だなどと名のる者があつたら、それは單に僞善者の所爲である……

肉體の復活とは即ち肉體の復活である……

基督が葬られて第三日目に甦り、先づペテロに現れ、後に十二人の弟子に現れ、それからヤコブに現れ、また凡ての使徒等に現れたといふ事實である……

但し、これは吾々の國で言ふ「幽靈」のやうなものになつて現れたと言ふのではない。また佛蘭西の歴史批評家エルネスト・ルナンが言つたやうに、基督は十字架の上で死んだのではなくて、實はま

だ生きてゐて弟子達に現れたのだと言ふのでもない……

吾々基督信者は使徒保羅と共に、基督の死の確實なるを信し、同時にまた彼の復活の確實なるを信ずるものである……

かう言ふと、きつと諸君は反對して言ふに違ひない――「死んだものがどうして甦らう。死んだものは死んだもので、墓に葬られて朽ち果てる筈である。それが復活するなどとは迷信の極だ。」と。

だが、實際これは迷信だらうか……

諸君は死んだ土が變じて、或は美しい花となり、或は麗しい鳥となるのを目撃してゐる筈である……

復活とは肉體が化生するといふ意味である……

丁度、麥の粒が腐つて、その內に藏れてゐる幼芽に同化されて、新しい植物を作るやうなものである……

若し、不思議だと言ふなら、草一本の生えることも不思議である……

併し、春雨に草木の萠え出るのが當り前なら、なぜ死人の復活するのが不思議だらう……

復活を迷信だと言ふのは、祈禱を迷信だと言ふのと同じである……

基督教の教へる復活とは、この肉體が肉體の儘で甦ると言ふのではない。復活の眞意は「更生」である。生命が更に新しく肉體に加へられることである……

吾々は死んで再びこの世へ歸らうと望むものではない。吾々は死んで、更に新しい生命を與へられて、新しい世に出て行かうと望むものである……

勿論、死者に新しい生命を加へることの出來る者には、死んだ者の命をこの世に呼び戻すぐらゐなことは容易に出來るのである――約翰傳の十一章に見られるラザロの後生などがそれである……併し、吾々は再びこの世に呼び戻されたところで爲方がない。吾々はみんな一度はこの世を逝るべきものであつて、還つて新しい世に復活するのでなければ、理想に到達することは出來ないのである……

それ故、基督教の復活は更生又は新生であつて、さう見れば理論上更に問題は起つて來ない筈なのである……

ところが、復活に對する疑惑は、その理論の可否に依るのではなくて、その事實の有無如何に存するのである。即ち、復活なるものは有り得るとして、その嘗てあつた、また後にあらむとする證據は何處にあるかといふのである……

世の中には隨分有り得ることで、實際に無いことが澤山ある。人が鳥のやうに空を飛ぶことは有り得ることではあるが、その果して爲し得ることであるかどうかは實に大疑問である。死物が化して生物となることは吾々の日常目撃するところであるが、人間の屍體が更に生命を受けるに至つた事實は、近世の自然科學者の中何人も目撃したことのないことである。それ故、ここに正直な一箇の科學者があつ

て、自分自身が人間の復活を目撃しない以上は、或は又十分信用の置ける科學者が目撃したといふ證明のない以上は、決してこれを信じないと言つても、強ち無理ではないのである……

——先生はここまで來て、自分自身の信仰告白をしなければならなくなつた——

そこで、自分は自狀する……

——先生は實際かういふ詞を使つた——

自分もまた人の復活したのを見たことはない。自分は基督と其の直弟子の詞を篤く信ずるものではあるが、さりとて彼等の詞を以て、二千年後の今日、この大問題を證明する爲に、科學的の價値があるものだとは主張しかねる……

もとより使徒達はみんな正直な人間であつた。併し、彼等はまだX光線の應用も知らず、マルコニ式無線電信の學理をも心得てはゐなかつた。彼等の觀察が科學上の精密を缺いてゐたと言つても、それは決して彼等に對して無禮の詞にはならないと思ふのである……

然らば、自分は何に依つて復活を信ずるか……

第一　自分が復活を信ずるのは、自分が神の大能を信ずるからである……

宇宙とその中にある總ての物を造り、また人を造り、人の內に宿る靈魂を造つた神は、容易に死者を甦らすことが出來ると信ずるからである……

苦しい――自分は既に自分の心に復活の力を感じたことがあるので、同じ力の働きによつて、自分の肉體もまた復活する時があると信ずるのである……

言ふまでもなく、吾々が物事を信ずるに、必ずしも眼を以て見、手を以て觸れなければならないといふ道理はないのである……吾々は太陽の内に水素、鐵、マンガン、ニッケルなどの元素のあることを信じてゐる。併し、何人もまだ親しく太陽に就いてこれを試驗したものはないのである。唯この地球にもこれらの元素があつて、吾々はその化學的固有性と徴候とをよく知つてゐるので、太陽の光線に同樣の徴候の現れるのを見て、太陽にも同じ元素のあるのを知るのである。また吾々は珊瑚の小蟲が海中に大きな島を築く事を信じてゐるが、さりとて何人もまだ眼前にその島が築かれたのを見たものはないのである。唯、吾々は目前に、珊瑚蟲が海の水から石灰質を分泌するのを見るので、小より大を推して、同じ方法から大洋中に幾千となく珊瑚蟲に依つて築かれた島のあるのを信ずるのである。若し、この種の推理法が許されなければ、天文學や地質學のやうな有益で且意味のある學問は成立しないのである――吾々が肉體の復活を信ずるのも、又これと同じ推理法に依るのである……

吾々は心に靈の本能が直覺した。そして、その結果として啻に吾々の靈魂ばかりでなく、吾々の肉體にまで非常な復活力を賦した……疾病の信仰治療なるものも決して迷信ばかりではないのである。現に最近の進歩した心理化學の實驗によれば、忌はしい感情は血液の内に一種の毒結晶を釀し、悲し

い感情はその内に毒物を造るといふことである……

吾々自身の經驗に於いても、神の大能によつて靈魂がその救ひの道につく時の歡喜は、實に譬ふるに物なしの感がある……急に肩から重荷がおりたやうで、身が輕くなつて、中天へでも翔け昇るやうな氣がするのである……

世に清い良心ほど體の藥になるものはない……基督は吾々の靈魂から罪の責任を全く取り除いて吳れるのだから、その罪の消滅と同時に、吾々の肉體が非常な活氣を帶びて來るのは、一度基督の救ひに與つたものの何人も實驗するところである……これが即ち聖書に謂はゆる「靈の質」であつて、吾吾がこの世を去つて後に受ける筈の生命の標本とでも言ふべきものである……

この肉體上の變化が生理學上の力によるのでないことは、吾々の體が最も衰弱してゐる時にもこれを感ずるので明かである……基督が四十日四十夜、食はず、飲まず、斷食されたと言ふのも、彼にこの力が十分あつたからである……また保羅のやうな人が粗衣粗食、寢るに家なく、同情を寄せてくれる家族や友人もなしに、よく三四十年間の間斷なき苦惱に堪へたのも、全く多量にこの力を享けてゐたからである……

それ故に、神が若し更に一層多量にこの靈力を吾々に注入してくれたら、吾々の肉體が全く靈化されて、終には靈體と稱する新しい體を組成するやうになることも、決して信じ難いことではないので

ある

肉體の復活を疑ふものは、まだこの「靈の質」を受けないものである。これを受け、これを感じて、復活は最も信じ易い眞理となるのである……

第一——復活は人類の希望である……そして、一般の希望の存するところには、必ずこれに應ずる事實があるものである……

第二、人が死ぬと悲しいか……

なぜ、死は人生悲慘の極であるか……

一時の離別も悲哀の種である。まして永遠の別れは悲しいものである。併し、人が死ぬ時の悲哀は全く精神的のものであつて、これは如何にしても慰めることの出來ない悲嘆である。普通人によつて、死を慰める手段は、唯これを忘れるの一事あるのみである……

死は實に恐ろしいものであつて、これを「恐怖の王」とは實によく言つたものである。では、なぜそんなに恐ろしいかと言ふと、靈魂が肉體を離れて他に宿るべき體を得る目當がないからである……

靈魂は肉體なしには不完全なものであつて、その意志を外に表すにも何か他に機關を要するものであるから、死に依つて一旦肉體が倒れてしまつた以上は、全く裸體になつてしまつたわけである……

これ、靈魂と肉體とは一つのもので、容易に相離るべきものではないのである。然るに、靈魂の結

果として、人たるものは一度は靈肉その所を異にしなければならぬ悲運を見るやうになつたのである。これ實に世の罪人が死刑に處せられるのと同然であつて悲しむべき至りである……

吾々が單に死を忌むのみならず、ひたすらこれを恐れるのは、人類たるものは罪の罰として死刑に處せられるのだといふことを吾々が知つてゐるからである。死の觀念に甚しい悲慘の情の附隨して起るのは、全くこれが爲である……

人誰か死を恐れざらんや……

人誰か復活を望まざらんや……

罪の結果として必ず一度は、死に會はなければならないものなら、罪の赦しの結果として更に新しい福を與へて貰ひたいと思ふのは、人の心の奥底に潜んでゐる至當の祈願ではあるまいか……

第四 ― 復活は生物進化の理に適ふものである……

宇宙の萬物はみな死を以て始まり、生を以て終つてゐる。この麗しい地球でも、その始めて瓦斯體から凝結して固體となつた當時においては、その内に一箇の生物をも見なかつたのである。然るに、先づ最初にアミィバのやうな原生動物が出てから、無腸動物、環形動物、連環動物、軟體動物、有脊椎動物と順序を追うて進歩して來たのである。しかも、この進化は決して人類を以て終るべきものではないのである。人類もまた更に一段の進化を經て、更に靈妙、更に不可思議な體を受けるやうにな

るべきである……

其の故に言ふ靈體なるものは、實に肉體の進化したものであつて、靈魂を宿す尊い一種の形體たるに相違ないが、その組織と構造とは、肉體のそれに優つて更に幾層も精化したものである……

蝶は毛蟲の復活したものである……

鳥類は爬蟲、蛇類の進化したものであつて、或意味から言へば、その復活したものである……

生命は常に引力に反對するものである……草木が天を指して生え、動物が自由に地上を徘徊し、蝶や鳥とが地を離れて飛ぶのは、みな地球の引力に打ち勝つてである……

生命の薄い植物は、いつも一つ所を離れないで、僅に上の方を仰いで生長するばかりであるが、鳥のやうな活力の旺んなものは、高く空中に翔けることが出來るのである……又同じ鳥類の中でも鷄やウミガラスのやうに稀に飛べないものもあれば、鶴やアルバトロスのやうに飛翔の自在なものもある……蛇は地を這ふ動物なので、昔から「泥土を喰ふ獣」と呼ばれ、雲雀は一直線に上天をさして昇るので古來最大の鳥と稱へられた……逆に近くは活力の不足な畜類であつて、活力が充溢すれば、生物は遂に地を離れて、天へ遊ぶべきものである……

同じやうに、人間の肉體もこれに新生命が十分注入すれば、終には地を離れて天に昇ることが出來るやうになるのである……舊約聖書の創世記五章二十四節に『エノク神と偕に歩みしが、神彼を取り

給ひければ、居らずなりき」とあるのも生きながらの復活を説いたものでなくて何であらう……エノクは死ぬことなしで、直ちにこの肉體から靈體に移されたのである……

併し、かう言つたところで、世人が容易に復活を信じないことは自分もよく知つてゐる……復活とは基督教の他の教義と同じく、議論ではなくて實際である……それ故、その力を少しなりとも自分自身の中に感じたことのない人は、到底この大教義を信ずることは出來ないのである……所謂基督信徒なるものをも含んだ世人の多くが復活を信じないのは、これを信ずる理由がないからではなくて、これを信ずる勇氣を缺いてゐるからである。彼等は罪の故を以て既に死刑を宣告されてゐるので、新生命とか復活とかいふ神の恩賜のあることを聞いても、決してこれを信じないのである。彼等は却つて亡ぶることを好むのである……

併し、復活を信じて宇宙と人生を觀じて見るが好い……宇宙とは何といふ美しいところ一であらう。人生とは何といふ喜ばしいところであらう……「我儕悉く寢るには非ず、我儕みな末の喇叭の鳴らん時、忽ち瞬間に化せん。蓋は喇叭鳴らん時、死にし人甦りて壞ちず、我等も亦化すべければなり」……この信仰があつてこそ、死はその恐れを失ふのである。世に恐いことも悲しいこともなくなるのである……冬が去つて春が來るのも、鶯が梅の枝に春の曲を奏するのも、花の咲くのも、月の照るのも、總て皆希望と歡樂の種となるのである。吾々は天然にその美をのみ見て、その悲と憐とを思はないやうにな

るのである……

吾々人類に悲哀を傳へようとして、風が嘯くのではない。吾々自身が神を離れ、罪の穽に陷り、悲哀の底に沈んでゐるが故に、これを聞いて悲哀の感を起すのである……

世に悲しいことは澤山ある。併し「死」なるものをその根本より絕てば、他に悲しいことは一つもないやうになる筈である……

ふる人の煙となりし夕よりいとなつかしき鹽竈の浦……

これは復活を信じない人のその夫を荼毘に附した後の感じである……

春の日に薫りの花の衣着て心うれしく歸る故鄕……

これは復活を信ずる者が、その妻を葬つた時に、妻の心を偲んで詠んだ歌である……

――先生は最後にかういふ意味のことを言つた――

復活を信ずると信ぜざるとに依つて、人間の生涯は非常に違つて來る……

死の生に入る門だといふことになれば、惡人の世に跋扈するぐらゐ何でもない……

命が欲しければこそ、我も彼を恐れ、彼も亦我を嚇すのである。併し、我に彼の奪ふことの出來ない命があるとなれば、我は金鐵の體を持つてゐると同然である――この貴重なる生命――それは俗人輩が如何に寄つてたかつて、切つても燒いても、決して壞つことの出來るものではない……

人の靈魂には――彼が堅く神を信ずる以上は――その肉體をも取り戻すだけの能力が具へられてゐるのである……

正義は終に最後の勝利者である。不義の者は一度は勝つても、死んで後その肉體は腐れ、その靈は消え失せるのである。美しき者はこれに反して、よしこの世に負けても、その靈は活き、その肉は甦つて、靈體と名づくる更に高尚なる體を組成して、この世以外に再び進歩開發の時期を待つことが出來るのである――

先生の講義は徹頭徹尾インスピレエションに充ち滿ちてゐた。それ故、インスピレエションをもつて聽かないものには理解の出來ないことが多かつた。それは單なる教理でもなければ、枯淡な哲學でもなかつた。一つの生きた靈がその飛び翔けるやうな歡びを他の靈に傳へるやうな說教だつた……

生が始まりで死が終りなのではない……

死が始まりで生が終りなのである……

永遠の生――それが人間の最後に行きつく場所なのである……

この思想は、會員の多數にとつては、餘程はひり難いものであつた――現に、柴田や大岡でさへ、その眞理は認めはするが、これを全的に信ずることは出來ないと言つた……

……先生は吾々の襟上を引つ掴んで、いきなり吾々を先生のゐる高いところへ連れて來てしまつた

――吾々は瞳孔がするばかりで、まだたんにもはつきり見ることが出來ない……」

小寺はこんなことを言つた。

「さうだ、山の頂上を窮めるには順序がある……一合目、二合目、三合目といふ風に……ところが、信者は裾野に立つてゐたところを、天狗にでもさらはれたやうに、いきなり銀明水の前まで連れて來られてしまはれたのだ……どうして、直ぐ水を飲む氣になれよう……よし飲んだところで、どうして水の味が分からう……」

こんなことを言つたのは、柴田だつた。

但し、山田の考へは全く別だつた……

「僕はさうは思はない……ここに一つの暗い部屋があるとする……外には光が充ち溢れてゐるとする……窓を一つ明ければ、光は忽ち暗い部屋を占領するだらう……光は決してちびちびはひつて來るものではないと思ふ……突然……しかも一度にはひつて來るのが光だ……信仰は光だ……信仰も突然はひつて來るものだ……順序を飛び越えてはひつて來るのが信仰だ……吾々はいきなり先生のゐるところへ連れて行かれるのでなければ、いつまで立つても、先生のゐるところへ行くことは出來ない……」

山田は熱してかう言つた――

山田の最近の經驗――それが山田にこの詞を吐かせたのであつた……

山田は突然死に面した……

そして、突然死から救はれた……

山田の新しい生は、この死から始まつたのである……

これは山田にとつて動かすべからざる事實であつた。

併し、さうした經驗は柴田にも小寺にもなかつた――

「君のは詩的直覺だ――その詩的直覺が得られれば吾々も幸福だ。僕等は不幸にして詩人ではない……僕等は科學者だ……科學者は理論を要求する。理論を要求しないまでも徑路を要求する。徑路を要求しないまでも實驗を要求する……」

小寺がかう言ひかけると、山田が遮つて言つた――

「だから、先生も言つてるぢやないか。これは理窟の問題ではなくて實際の問題だ……自分自身の心にそれを感じないものには理解の出來ない問題だつて……」

「だが、それでは科學者の使命をどうしたら好いのだらう。科學者の使命は實驗と論理だ――その實驗はどうしたら出來るのだ……科學者は終に救はれないのか……」

「そんな馬鹿なことがあるものか……僕の今の思想だつて、決して詩的直覺などといふぼんやりしたものから起つて來た思想ではないのだ。僕は自分自身の實驗から言つてゐるのだ。僕にとつてはこれ

い事實なのだ——動かすべからざる事實なのだ……」

「では、その實驗を話してくれ給へ。」

さう要求したのは小寺一人だけではなかつた。柴田も深田も天岡も——殊に南は熱心に——山田からその實驗談を聞かうとした。

山田は暫く躊躇したが、やがて思ひ切つて話し出した——

「……僕は十四の年に始めて戀をした。勿論、その戀は子供らしい他愛もないものだつたが、年を經るに連れて、それが段々しつかりした根強いものになつて來た。中學時代の僕は可なり浮薄で、それからそれと、隨分いろんな異性に心を動かした。併し、僕の「初戀」は海の底に吸ひついてゐる魚のやうにどんな美しい魚が去來しても、一つ所を動かずにゐた……高等學校の一年の時だつた。習志野へ演習に行つた歸りに、神田橋（かんだばし）のところで、僕は計らずその初戀の女に會つた。——會つたと言つても、隊伍の中から垣見たに過ぎないのだ。しかも僕の心の海の底に吸ひついてゐた魚は急に頭を擡げ出した。僕はその時以後、その女性のことの外なんにも考へないやうになつた……二年になつてからは、好きな學課も怠り勝になつた。僕はキイツやシエリイを放さなかつた。詩集の一頁一頁に、僕は自分の戀人の姿をまざまざと見たのだ……懷しいのは野原だつた……青空だつた……野原に寢て、青空を眺めて、僕はぼんやり一日を暮らすやうな日が多くなつた……僕の顏の衰へは母を心配させた……

僕は母の慈愛深い詰問に對して、終に事實を告白しなければならなかつた……それから先きのことは言ふに忍びない……」

と言つて、山田は思はず顔を伏せた。

「でも、それだけぢやあ分からない……何か苦しい事情があるらしいが、やつぱりしまひまで話してくれなければなんにもならない……或は君の話によつて僕等全體が救はれるかも知れないのだ……大事な場合だ……苦しいのを我慢して話してくれ給へ……」

南が心から同情するやうに言つた。

山田は暫く默つて下を向いてゐたが、やがて思ひ切つたやうに、また口を開いた――

「僕は五つの時に父に別れた……僕に女の同胞は二人あるが、母の愛はこの十何年來、僕一人に注がれて來たと言つて好い……その僕が生れて始めて、生死の境に立つ様な苦しみに悶えてゐるのを見て、母はゐても立つてもゐられなかつたのに違ひない……母は自分の親しい友達と相談して――僕にはなんにも言はずに――その友達に先方の家へ行つて貰つたのだ……僕の嫁に貰ひたいと申し込んだんだね……まだ二十一にしかならない僕だ……結婚の早過ぎる事は分かり切つてゐたが、母はもうそんな事には構つてゐられなかつたんだね」 僕はその事實を、母の口からでなく、その女性の手紙で知つたのだ……丁度、この學年試驗の時で、僕は寄宿にゐた……女の人もその結果を危ぶんでゐた……僕

あとのことが氣にかかつて、每晩ノオトの前で、ぼんやり壁ばかり見てゐた……丁度、試驗が濟んで、家へ歸る前の晩だつた――談判の不調に終つたのを知つたのは……女は僕と同い年だ……先方には既に社會的に地位のある人間からの申込が澤山にあつたのだ。僕のやうな青二歳が問題にならなかつたのは尤も至極な話さ……だが僕は堪らなかつた……一箇の眞實な魂と「社會」といふものを對立させて見て、僕は言ひやうのない悲憤を感じた……女も魂を殺して親に從ふと言つて來た……勿論、僕はそれをその儘受け入れることは出來なかつた……僕は女に「死」をさへ迫つた……併し、女はどうしても聞かなかつた……それでも、僕は女を憎むことが出來なかつた……甚しい矛盾だ……矛盾だと知りながらも、僕は生れて始めて相對した『世間』といふものに敗けなければならなかつた……僕は氣が狂ふばかりだつた……何が何だかわけが分からなくなつた……終に七月二十四日が來た……女のかたづく日がきまつて、愈そこへ嫁に行くといふ日だ……女はその日の朝まで、僕のところへ消息を絶たなかつた……」

山田は到底落ちついてそれからの後のことを話すことは出來なかつた……

彼はしどろもどろに順序もなく話した……併し、彼が突然「死」に面して、突然それから救はれたこと――その「死」が新しい「生」の端緒であつたことは、はつきりとみんなに分かつた。

南も柴田も小寺も、深く打たれて、暫くは顔も上げずに默つてゐた。

暫くすると、柴田が靜な聲で言つた――

「君の經驗は、世間の俗人から見たら、實に子供らしいことかも知れない。併し、それは君自身にとつて實に貴重な經驗だ――君はもうその經驗一つで、一生を歩むことが出來る。君はもう立派な信の人だ。實際に神を見た人だ。僕等は今まで餘りに君を輕く見過ぎてゐた。僕はそれを君の爲に恥ぢる。君は實に惠まれた人だ……僕は君が羨ましくて堪らない……」

和　樂

千駄ヶ谷の講話會は、朝から晩まで、額に皺を寄せて、罪の問題、救ひの問題、永遠の問題を論じ合つてゐる集まりではなかつた。

そこには絶えず談笑と和樂と無邪氣な戯謔とがあつた。眞劍に思ひ惱む時には、みんな一緒に思ひ惱んだ。併し、晴々として樂み笑ふ時は、みんな一緒に樂み笑つた――殊に一番氣むづかしさうな植川先生が、一番元氣で一番陽氣だつたことは、みんなの驚異だつた。

會の始めの時分には、「東京インデペンデント」の事件があつてまだ間もなくだつたせゐか、先生の額に苦惱の影の、折々微かに去來するのが見えたが、一日と經ち二日と經つ内に、さういつた影はまるで見えなくなつてしまつて、先生は太陽のやうに明るく光り出した――月のやうに清く澄み出し

た……

先生は時々青年達にせがまれて、農學校時代の話や、農商務省の官吏時代の話や、亞米利加遊學時代の話や、高等學校教授時代の話や、新聞記者時代の話などをした――追憶の内には慘ましい事實が澤山にあつた。併し、先生はそんな事實をも笑つて話した――

「……人間といふものは天國へ昇りかけては、煉獄を落つこち、また天國へ昇りかけては煉獄へ落つこちるものだ――本當に高く飛ぶ力を與へられるまでは、いつまでもそれを繰り返すのだ。吾々は雀の子も同然だ。まだ翼の力が十分でないから、昇りかけては直ぐに落ちるのだ――その翼の力を養はせるのが煉獄だ。僕はこの年になつても煉獄と縁を切ることが出來ないのだ……髭だらけの雀の子だ……」

こんなことを言つて、先生は笑つた。

殊に山田や幸田達の連中が熱心に聞かうとしたのは、先生が高等學校の教授をやめた時代の話だつた……それはもう一昔も前の話であつたが、可なり有名な話で、山田達が高等學校へはひつた時分にも、その「傳說」は殘つてゐた。故参の教師は、みんなその當時のことをよく知つてゐた……

森川先生は或高貴の方の書かれたものに對して頭を下げなかつた爲めに、學校を出なければならなくなつたのだ……

勿論、その時分の先生には、まだ青年の客氣があつた。併し、先生のしたことには、少しの惡意もなかつた――先生はその文章を畏敬しないのではなかつた。併し、文字その者に向つて頭を下げるといふことは、偶像に對して屈服すること以上に、先生には不合理だつた……總ての教師總ての學生が悉く頭を下げて、その文章に敬禮をした時、先生は一人昂然と頭を上げた儘直立してゐた……

勿論、それは教育界の大問題になつた。

先生は國賊と呼ばれ、不忠漢と罵られ、僞善者と謗られた――先生のその後の文章や説教に、これらの詞が屢出て來るのは、その時のことがいまだに先生の頭にこびりついてゐるからであつた――先生は基督教を嫌ふ狹義の忠君愛國者流から責められたばかりではなかつた。味方である筈の基督教の牧師や宣教師からも泥のやうに踏み躪られた。味方は何處にもなかつた。社會は悉く先生の迫害者となつたのである……

「實際あの時はひどかつたよ。學校は出される。先の家内には死なれる。社會は僕を非國民視して、何處でも僕を雇つてくれない――僕はそれから三年間寢るにも起きるにもおんなじ背廣一着で暮らしたもんだ……その時分から見ると、この頃は天國の生活だよ。」

さう言つて、先生は笑つた。

山田達は一度訊きたい訊きたいと思つてゐたその當時の事情が明かになつたのを喜んだ――世間の

傳へるところには大分誤りがあつた。先生は帽子を脱らなかつたのではない。他の人達と同じ講堂に立つて、敬意を表すだけの事はしてゐたのだ。唯問題は文字に向つて頭を下げなかつたことだけだ……

その當時の先生の境遇――それは實際察するに餘りがあつた。當時の境遇に比べれば、今の生活は天國だと先生は言つた。併し、今の生活だつて、贅澤に育つた山田達の眼から見れば、決して豊なものではなかつた。先生は粗末な家に住んで、極めて粗末な着物を着、極めて粗末な食物を攝つてゐた。先生の精神的生活に比べて、先生の物質的生活は比較にならぬ程低かつた。しかも、先生はこれを天國だと言ふのである――學校追放時代の先生の生活は、どんなに悲慘なものだつたらう――山田は限りない同情を先生に寄せた。

先生がこの話を始めたのは、みんなで小金井へ遠足をした日だつた。その日は朝の九時に、會員の中の有志が三十人程千駄ヶ谷へ集まつた。先生は自然木のステッキを突いて、みんなの先導に立つた――

「春の小金井は誰でも知つてゐる　成程、あの櫻は美しい。單に櫻の花だけを見てゐれば、あんな美しいものは他にはない。併し、その櫻の花の下で酒に醉つぱらつて、女に戯れなどしてゐる人間達を見ると、自然の美しさよりは、人間の醜さが眼について堪らない……そこへ來ると、夏の小金井だ。諸君はまだ夏の小金井を知らないだらうが、僕は度々散歩に行つて知つてゐる……春の比ぢやな

いぞ……まあ來て見給へ……」

先生はこんなことを言つた。

一行は徒歩で中野から吉祥寺を指した。空は曇つてゐて、雲が雨を含んでゐた。併し、埃が立たないで、暑さは却つて凌ぎ易かつた……

山田も小金井は知つてゐた。小さい時二三度花見に連れられて行つたのであるが、そこを決して好いところとは思はなかつた——先生の今の詞を聞いても、まだ山田は信ずることが出來なかつた……

山田は唯先生と一緒に歩くといふことが嬉しかつた——行く先などはどうでも好かつた。一行は三十人からゐたが、山田はその間を潜つて、始終先生の側にゐるやうにした……

小金井へ着いて見ると驚いた——

水の清さ……風の涼しさ……それは然程に意外でもなかつたが、川の兩側の土手から崖へかけて、所狹きまでに咲き誇つた白百合の花——それは壯觀とも何とも例へやうがなかつた……

「どうだ。諸君。これはどうだ。」

先生は子供らしい得意さで、花の方をステッキで指した。

「實に立派な百合ですねえ。僕は子供の時から東京にゐますが、小金井は櫻の名所だとばかり思つてゐました。こんな立派な百合があらうとは夢にも知りませんでした。これなら、百合を見物に來ても

好いくらゐですねえ。」

山田は實際自分でも驚きながら、多少は先生の心をも迎へる氣でこんなことを言つた。

「ところが、櫻の花を見に來る奴はあつても、この百合の花を見物に來る人はないのだ。この百合は毎年かうやつて盛に咲くのだが、土地の人が冷淡に見過ごすぐらゐなもので、誰も特別に見に來てはやらないのだ。併し、僕だけは毎年一人で來る。そして、誰にも妨げられずに、靜にこの天然の美を樂しむのだ――今年はこんなに大勢來たので、百合もさぞ滿足してるだらう……」

先生はさう言つて笑つた。

「ほんとに、美といふものはどんなところに隱れてゐるか分からないものですねえ。人が大騷ぎをやつて集まるところなどには決して美はないのですねえ。誰も人の氣のつかない――その癖、春はあんなに雜沓する――かうしたところにこんな美しいものが見られるのですから……」

南がかう言ふと、先生は大きく頷いて、

「さう、さう。その通りだ。眞の詩人はかういふところに美を發見するのだ。店頭に飾られた寶石が眞の美ではないのだ。山の小蔭の名も知れぬ草に宿る一滴の露――それに本當の美しさがあるのだ……」

先生はかう言ひながら、もう一遍百合の花の方を見た――百合の花は長い土手を透間も置かず埋めてゐた。土手の上で、天を仰いでゐるのがあつた。崖の中ごろで、上へ上へと日の光を慕つてゐるの

があつた。水に近いところで、うな垂れて、今にも流れに打たれさうになつてゐるのがあつた……

歸りは境から汽車に乘つた――歩いて歸るものも七八人はあつた。一行の多數は百合を折つて、それを家路の土産にしようとした。

百合の花は汽車の動搖につれて、その赤黑い花粉を散らした。天鵞絨で作つたやうな、黄いろい斑のある白い花瓣がだんだんに赤黑く汚れて行つた……その内に、瓣が水氣を失つて、だんだんに萎れて來た……しまひには瓣も蕋も一緒くたになつて、花の形も何もなくなつてしまつた――一行の携へてゐる花の總てがさうなつてしまつたのである……

「おや、おや……やつぱり、これはあすこで見るべきものだつたのだねえ。家へ持つて歸るべきものではなかつたのだねえ……」

南がかう言ふと、深田が靜に答へた――

「これだけの花を吾々の人爲が無駄にしてしまつたわけだねえ……あすこへ置いとけば、少くともまだ二三日は美しく咲いてゐたのだらうに、こんなことをしてしまつた爲になんにもならないことになつてしまつたのだ……吾々のすることはみんなこれだねえ……」

二人の話を聞いてゐた先生は、笑ひもせずに深く頷いた――

「さうだ。全く深田君の言ふ通りだ……人間が人間の意志だけで事をすると、その結果はみんなこの

通りになるのだ……」

それから二三日して催された夜の園遊會――それも會員達にとつては樂しいものの一つだつた。名は「園遊會」であつたが、そこには勿論立派な庭園もなければ、何一つそれらしい裝飾はなかつた。櫟林の枝から枝へ風絲が張られて、そこへ近所の荒物屋で買はれた田舍向の小提灯がほんの九つか十釣られただけだつた。

椅子や机は學校から擔ぎ出された。先生の書齋からも運び出された。御馳走は鹽煎餅に菓子麵包、安物のカステエラに近所で出來る田舍饅頭ぐらゐなもので、飲み物は麥湯の冷やしたのだけだつた。

この日に一番活躍したのは山羊鬚の白井君で、白井君は朝から會場の設備だの、食糧の買ひ入れだのに忙殺されてゐた――山田や南などの學生達も、白井君を助けて働いた。麵包や煎餅の買ひ入れには、汽車に乘つて牛込まで出かけた。みんなは見えも外聞もなしに、煎餅の大きな袋や麵包の嵩高な包みを抱へて、笑ひ興じながら神樂坂を降りた……

この催しを喜んだのは、先生のお孃さんと坊ちやんだつた。二人は白井君や學生達の働いてゐる中を嬉しがつて飛んで歩いた。

「坊ちやん、今夜はおいしいものが澤山ありますよ。」

白井君が椅子を臺にして、提灯を釣りながらこんなことをいふと、

「でも、僕食べられないよ。早く寢ないとお父さんに叱られるから……」
森川先生は大人に向つても、夜十時より遲くまで起きてゐるのは罪惡だと言つた。況や子供達に夜更かしは決して許さなかつた――
「けふは特別な日ですから、僕からお父樣にお願ひして、いつもより一時間おそく寢て好いことにして上げますよ。」
白井君が笑ひながらかう言ふと、
「好いなあ――嬉しいなあ。」
と言つて、坊ちやんもお孃さんも手を打つて喜んだ。
「さあ、柴田君と南君は食物の世話係になつてくれ給へ――一つ所へいろんなものを集めて置かずに、鹽煎餅は鹽煎餅、饅頭は饅頭と、それぞれ店を別にして呉れ給へ。それが園遊會の形式だから……」
白井君はこんなことを言つて、みんなを指揮した。
「麥湯の店は何處にしよう……」
山田がかう訊くと、
「さうさな。麥湯を飲むところは氣持の好いところが好いな……かうつと……そこい、今僕が大きな提灯を釣つた、その大きな木の下が好いな……さうだ。そこへ比較的大きな机を置いてくれ給へ。だ

が、そこの接待は女連にやつて貰はう……奥さん、奥さあん……」

と、白井君は先生の住居の方を向いて、大きな聲で不遠慮に叫つた。先生の奥さんが襷がけで笑ひながら出て來た。

「……麥湯の方は婦人連に願ひますよ。食物の方は吾々がやりますから……」

白井君がかう言ふと、先生の奥さんは優しく頷いたが、やがて冗談らしく、

「でも、白井さん、みんな男の人が食べてしまつちやあ駄目ですよ。」

と言つた。

「あなたの方も、自分達でみんな麥湯を飲んぢまつちやあ駄目ですよ。」

と、白井君は負けずに應答した。

「でも麥湯の方はなくなればあとが出來ますが、食べ物の方は限りがありますからね。」

奥さんがかう言ふと、白井君は頭を抱へて、

「こいつあ參つた——こいつあ參つた。」

と言ひながら、學校の方へ逃げて行つた。

山田達は白井君と先生の奥さんとの間の、この隔てのない不遠慮な交際を、限りなく美しく感じた

この日はむつかしいことを一切忘れて、自分自身もこの數日の勞を休め、會員相互の間にも和樂を作らうとするのが森川先生の目的だつた。

日が暮れて、豫定の時刻が來ると、山羊鬚の白井君が例のガランガランを鳴らした。みんなが集まつて來ると、先生が叩いてゐる机の上に立つて、一場の挨拶をした。その挨拶は諧謔に富んだ如何にも明かるいものだつた――先生の顏つきには、もうこの人達にはどんなことを言つても誤解される惧れはないといふ安心と滿足があつた――

先生は机を降りると、白井君を呼んで、

「今度は君がけふの幹事として挨拶をするのだ。」

と言つた。

「さうですか。そいつは弱つたなあ。」

と言つたが、やがて白井君は決心したやうに、机の上に乘つた――眼が近いので、乘りどこが悪かつたのか、机がぐらぐらして、危なく轉け落ちさうにした。

みんなが聲を上げて笑ふと、白井君も一緒になつて笑つた。

白井君の挨拶は、駄じやれ交りの徹頭徹尾滑稽なものだつた。まじめな深田などは、「少しふざけ過ぎやしないか。」と思つて、心配して先生の顏を偸み見たくらゐだつた。併し、先生は少しも厭な顏を

せずに、心から白井君の滑稽演說を喜んでゐる樣子だつた……

やがて飲食店が開かれた――ほんとに何一つ御馳走らしいもののない粗末極まる飲食店だつた。併し、會員達は喜んで飲んだり食べたりした。それは、どんな立派な宴席で、どんな立派な饗應に會はうとも、これ程愉快ではあるまいといふ風だつた。

會員の中には、既に擔つて來た苦惱の荷を解かれたものもあつた。まだ惱みから全く離れられないでゐるものもあつた。依然として心の悶えの中にゐるものもあつた――併し、この晩だけは、誰も彼も同じやうに樂んだ。みんなが一度に天國へでも引き上げられたかのやうに喜びの色に照り輝いてゐた。

「さあ、餘興だ。餘興だ。誰か餘興をやり給へ……」

かう言つて、鹽煎餅の札の後から叫ぶのは白井君だつた。

「先づ隗より始めよだ――白井君、やつた、やつた。」

かう誰かが叫ると、

「やるとも……」

と言つて、白井君が始めた――それは琵琶歌の「城山」の初めの一節だつた……

白井君の琵琶歌はなかなか巧かつた。あまり藝のなささうな會員達は感心して聞いた。殊に遠い田

舍から來た人は、名人の至藝にでも接するやうに耳を澄ましたーー

「白井君といふ人は相當にいろんなことをして來た人らしいねえ……」

南が小聲でかう言ふと、柴田が答へたーー

「隨分いろんなことをして來た人ださうだ。小學校の先生にもなつたし、行商人のやうなこともやつたし、お伽話などをして田舍を歩いたこともあるさうだ……苦勞人だよ。」

「人間が練れてゐるね……少しも自分を高くしようとしないところが豪いね……もう野心などは少しもないといつた樣子だね……先生に對する態度なども、如何にも不遠慮で、ちよつと見ると馬鹿にでもしてるやうだが、あれで先生のこととなると一所懸命なんだから不思議さ……人間なかなかああはなれないものだよ……」

山田がさも感服したやうにかう言ふと、今度は小寺が口を開いたーー

「また先生の白井君に對する態度が實に好いね……信じ切つてゐる態度だね……白井君なら先生の前で眞つ裸になつたつて、きつと先生は笑つて見てゐるに違ひないよ……羨ましい位な仲だね……

「ピウリタン的な先生が、ああいつた洒脫な人間を愛するところにも先生の一面は現れてゐるね……先生は決して世間が思つてゐるやうな單純な人間ぢやないよ……決して狹量な人ぢやないね……カアライルも持つてゐれば、ギヨオテも持つてゐる人だよ……」

さう言つたのは南だつた。

白井君の琵琶歌が済むと、先生が第一番に拍手した。それに連れて、みんなが喝采した――暫くすると、先生は自分の近所に立つてゐる青年達に向つて言つた――

「……僕は西郷南洲といふ人物が大好きだ。あの人の詞には立派なのがあるね――「我を愛する心を以て人を愛すべし」などといふ詞は天の啓示によらなければ決して言へない詞だと思ふね……日本の歴史上の人物で最も偉大な名を二つ擧げろと言はれれば、僕は躊躇なく太閤と西郷を擧げるね。二人とも大陸的な野心を持つてゐて、全世界を自分の活動の目的地としてゐた點は同じだが、その偉大さの種類に於いては、全く違ふね――太閤の偉大さはナポレオン的だ。シヤアラタン的なエレメントが多分にあるね――勿論、ナポレオンから見ると小規模だが、兎に角、太閤の偉大さは天才の偉大さで、自分で大きくならうとしないでも、ひとりでに大きくなる方の英雄だつた。ところが、西郷の場合は違ふ。西郷の偉大さはクロムヱルの偉大さだ。唯、ピウリタニズムが彼には缺けてゐただけだ。西郷は飽くまでも意志の力で大きくなつた人だ――だから、道徳的の偉大さである。偉大さの中でも最善の偉大さだ。彼は日本の國民を健全な道徳的基礎の上に作り直さうとしたのだ。そして、業なかばにして倒れてしまつたのだ……あの人が今まで生きてゐれば、日本はきつと道徳的にもつと進んでゐたに違ひないのだ……」

さう言つて先生は深い感慨に沈んだ――

「さあ、次ぎは誰だ。幹事の僕がやつたんだ。なんでも好いから、誰か早くやり給へ。」

白井君がかけ構ひもなく大きな聲を出して叫つた。

『つみかさなれる雲間を過ぎて
　基督信徒の心の空に
　彼方の光は潮の如くに
　よろこばしくも心を充たす……』

突然かう朗誦し始めたのは、四國から來た小學校の先生だつた――彼は千駄ヶ谷に滯留して、毎日先生の講話を聞く内に、再び故郷へ歸つて周圍と闘ふ勇氣を得たと言つて喜んでゐた――「僕はやつぱり現世といふものに束縛されてゐたのです。肉體復活の講話を聞いて、僕は始めてその束縛から解放されました。」などとも言つた――歌は森川先生が自分の好みで譯した讃美歌の一つで、會員の多數はその一字一句をも洩らさず知つてゐた――「基督信徒の未來觀念並に之に伴ふ復活の信念に就いては、智者と才子と新神學者と青年批評家とを以て滿ち充ちたる日本今日の讀者の深く余輩を憐み笑ふ處なるべし。余輩の迷や深し。ああ、余輩の迷を憐めよ。」先生はこの歌に註をして、かう書いた――

『光り輝く讃美の里に

罪を清がる聖き友の
絶えずなりつる鐘の音は
はや我等の耳に觸れぬ
　川の彼方の岸邊に立ちて
　我等は逢うてまた離れじ
　四時變らぬすずしき夏の
　光り輝く讃美の里に……』

四回節のの四節には、特別に美しい節廻しもなく、格別優しい辭詞もなかつたが、歌の內容はこの場合唱團の魂でも動かさずには置かなかつた――みんなは聞いてゐる內に、思はず小聲で相和した……

『旅路の終來るまでの
なほ暫くの疲れ足
夕影暗くなるまでの
なほ暫くの憂き爲事
暮るれば床に息ひ寢て
眠れば夜はちき明けて

光り輝く讃美の里に
　我等は起きてまた眠らじ
　川の彼方の岸邊に立ちて
　我等は遇うてまた離れじ
　四時變らぬすゞしき夏の
　光り輝く讃美の里に』

歌の終る時分には、みんなが熱して思はず聲を高くした。もうそれは一人の餘興ではなくなつてゐた。それはひとりでに敬虔な讃美歌の合唱になつてゐた……

急に涼しい風が吹いて來た。提灯の燈が一時に消えた。あたりは眞暗になつたが、慌てて火をつけようとするものもなかつた――それ程、みんなの心は明かるかつた――みんなの心はいつの間にか、「川の彼方の岸邊」に立つてゐたのである――「光り輝く讃美の里」に永遠の光を見てゐたのである……

突然、闇の中から力強い聲が響き出した――

『暗きこの世に幾多の魔は、
　失せにし人の跡を悲む、
遠き宇宙に幾多の星は、

『消えにし民の草もて廻轉る……』

「先生だ……」

「先生だ……」

あつちにも、こつちにも、かう囁く聲が聞こえた。

それはやはり先生が自分で自由に譯したもので、原作は『無限大』と題するテニスンの詩であつた……併し、それは先生の創作かと思はれるくらゐ『東京インデペンデント』時代の先生の思想に近いものだつた……

「この世の常の歴史なる、
　絶ゆる時なき政治論、
億々萬の日の商論に、
　群り騒ぐ蟻の音。

詐僞はここにもかしこにも、
　智者の推す不信實、
一人の詐僞を掩はんため、

幾千萬の詐僞の聲。

大經綸の大勳功、
　陸海軍の大勝利、
正義の爲に死にし人、
　名なき戰爭に失せし人。

生血に煮らるる無辜の民、
　義人を屠る「正義論」
國の破滅を意はざる、
　自由を衒ふ大束縛。

榮華の極の宗教家、
　疑惑に迷ふ哲學者、
奸智に長くる妖僧は、

幾多の信徒を引き寄する……

チェスンの美しい言葉は失はれてゐたかも知れない。併し、その世を慨き俗を憤る火のやうな正義の念は、チェスン以上に燃えてゐた――先生は自分の思想でチェスンの詩想を率直素朴に譯したのである……

名利を競ふ國と國、
　小事に鬩ぐ村と村、
死をもて守る義士の節、
　火花の如く消ゆる約。

説く世の道者に、
　肉と靈とを薦むる人、
愛に私慾を打ち消して、
　十字に身をば釘けし後。

春と夏と秋と冬と、

果つることなき世の輪回、
國の盛衰、汐の變、
　合せて何の價ある。

凡ての哲理、詩歌、科學、
　人の心の種々の狀、
卑しき物も高き物も、
　穢き物も清き物も、

渾てが墓に終るとならば、
　人の世に在る何故か、
無限に吸はれ死に呑まれ、
　意味なき過去と消えん爲にか。

軒端にうなる蚊の群か、

日車は絲の蜜鈴か、

あゝ、言ふをやめよ、我は彼を愛せり、

死者に死せずして生けり。

十五節に亙る長い詩を、先生は些の勞れも見せずに朗誦し終つた。拍手が嵐のやうに起つた……中には拍手を忘れた程感動した者もあつた……

閉　會

野晩會や閉會會が濟むと、もう會期もあと二三日となつた。

白川先生は與へられた二時間の間に、出來るだけ多くのものを青年達に與へようとでもするやうに、一日に三時間も四時間も一人で話した。どうかすると、午前午後夜の會を併せて五時間も話し續けることがあつた……

「復活」の問題に就いて、先生が話したのは「永生」の問題であつた――この問題に就いても、先生は聖書に表はれた先生獨自の解釋を下した……

「……靈のこと、靈魂のこと、復活のことが分かれば、永生のことを知るのは別にむづかしいことではありません……」

先生は先づ事もなげにから言つた――その態度には、もう誰でも知り切つてゐることを言ふのだ、當然至極なことを話すのだ、自明の理を説くのだといふ風があつた……

「永生とは、肉體の死後に、靈魂がその昔に授かつた靈體で生命を繼續することでありまして、これも亦基督教の傳ふる大教義の一つであります……」

先生は始めた……

神は生命の源である。生きとし生けるものの中に、神より生命を受けないものはない。如何なる分子の化合に依つても、生命を作ることは出來ない。萬物は皆神の手に依つて造られたものであるが、生命は特別に神の生氣の注入に依つて、この世に現れたものである……神とは何であるか。これに確とした定義を下すことは出來ないが、併し、彼が生命の最も高きもの、生命の最も純なものであることだけは確である……

併し、生命にも幾多の種類がある……

植物もある。動物もある。同じ植物の中でも、蕨や苜蓿のやうな低い階級に屬するものもあり、或は楓や櫻のやうな高等なものもある。動物にも下は海月、珊瑚の類から、上は牛、馬、猿、人間までの相違がある。いづれも等しく生命ではあるが、その上下の懸隔は雲泥も啻ならないのである。

人類は生物の中で最も發達したものである。そして人間の靈魂は人間の肉體に棲る生命である。そ

れば、人間の靈魂は、この宇宙に現れてゐる生命の内で、最も精妙な、又最も卓絕したところのものである……

神は人間以上のものであるが、神の造つたものの中で最もよく神に肖てゐるものは、人間の靈魂である。靈魂は意志といふ力を持つてゐて、自ら定め自ら行ふ能力を與へられてゐる……

人間以外の生物は、或は土に賴り、或は他の生物に依つて存在するものであるが、靈魂のみは神に依つて存在するものである――基督の詞に「我が血を飲み我が肉を食ふにあらざれば、神の國に入ること能はず。」とあるのはこのことである。

植物の營養物は無機物であり、動物の食料は有機物であり、靈魂の糧は神である……

假に若し、何かの考案に依つて、植物にその需むる無機物を無限に供給することが出來、また何かの工夫に依つて、その外圍の境遇を無限に適宜ならしめることが出來るならば、植物にも無限の生命――即ち永生――を與へることが出來るのである……松柏科の植物で、或は七百年又は一千年といふ生命を保つものがあるのを見ても、植物はその周圍の境遇如何に依つては、無限とまでは行かずとも、可なり長い生命を持續することの決して難くないのが分かるのである……

……動物でも同じ道理である……

馬には五十年以上生きるものがあり、象には百年以上に達するものが度々ある……人間でも百歲以

上に達するものが決して稀ではないのである……西洋近代の學說によれば、人命は三百年位までは持續し得べきものださうである――卽ち四圍の境遇がその宜しきに適ひ、出來得る限り體内消耗の度が節減せられれば、生命は案外永く保存し得られるのである……

靈魂も神に造られた生命であるから、神のやうに獨立して生存することは出來ない。丁度動物が草木のやうに土や瓦斯で生活することが出來ないやうに、靈魂は植物や動物の供給する食物で、その存在を繼續することは出來ない。生物にそれぞれ適當な食があるやうに、靈魂には靈魂相當の食物がある……

思想が靈魂の食物の一つたることは明かである……

善き人に接し、良き書物を讀んで、我々が一種特別な生氣を感ずるのは、これが爲である……人は如何に住居に腐心し、また如何ほど美食をしても、健全な思想を得なければ、直ぐに墮落してしまふものである……日本今日の樣な物質的社會に於いてすら、著述業や出版業が全く廢らないのは、肉體が食物を要求するやうに靈魂が思想を要求するからである……昔から今日まで、如何なる國にも道德があり宗教があるのは、靈魂存在の打ち消すべからざる證據である……

但し、人は水と鹽とのみで生活することが出來ないやうに、唯思想のみで生存することは出來ない……

壯麗な詩歌や高貴な理論も、靈魂の一時の興奮劑にはなるが、これのみを永久の食糧とすることは出來ない……人は思想以外に、生きた靈の糧を要求する……さうして、靈なる神に接しないでも、妻子や友人から『愛』と稱する一種の實物を要求する……

これさへあれば、他の物がなくても、先づ當分は生存することが出來る……それ故、これを得むが爲には、時として生命をも棄てることがある。殊に神の愛の何たるかを知らないものは、「人望」と稱へて公衆の愛を得ようと焦り、また戀愛と言つて婦人の情を惹かむと苦心するのである……

併し、人間の愛には際限がある……

人は元來私欲に惹かれるものだから、全心全力を竭して他の人を愛するなどといふことは、口には言へても、到底實行の出來ることではないのである。故に、人の愛を以て我が靈魂の無窮の要求をみたさうとするものは、必ずいつか失望しないではゐられないのである――世に失戀者の多いのは實にこれが爲である……失戀者は畢竟人生の誤解者である。彼は到底人より望むべからざるものを人に望んだものである……

婦人何者ぞ。彼女は決して天使ではない。彼女もやはり罪に依つて神より離れ、私欲を追求する者である。彼等の或者は高慢であり、彼等の多くは嫉妬深く、また彼等は總て虛榮を好む者である……然るに、かくの如き者から純潔無私な愛を要求するとすれば、到底失戀は免れ得ないのである……ま

た女性にとつても同じことであつて、男も女と等しく私利を求め、私欲を追ふものである。弱い愛なる者は、多くは自身の快樂と便利とを先にするものである。彼に依つて終生の慰安を得ようとしても、それは初めから無理な望なのである……如何なる男でも――如何なる女でも――人間一人の靈魂を滿足させるやうな愛心を供することは不可能なのである……

……靈魂の要求するものは愛である。純潔無私の愛である。宏大無邊の愛である……

靈魂は金殿玉樓ぐらゐでは滿足はしない。美衣美食ぐらゐでは飽滿はしない。彼に侍せしむるに三千の宮女を以てしても、徒に彼の悲哀を增すばかりである。如何に幸福な家庭を以てしても、如何に情誼に厚い友人を以てしても、彼の飢渴を癒やすことは出來ない……

靈魂はその友として、又その父として、その救主として、實に宇宙萬物の造主たる獨一無二の活ける眞の神の愛を要求するのである。これなければ、靈魂は死物である。これあれば、靈魂はその全宇宙の獲得者である……

生物としての靈魂は實にかくの如きものである。詞は野卑であるが――靈魂とは神を食とする生物である。丁度、蠶が桑の葉に依ている生活するやうに、靈魂は神に依つてのみ生育し得るものである――桑の葉でなければ蠶は直ぐに死んでしまふ。神でなければ靈魂も立ちどころに餓死してしまふ……

「鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如く我が靈魂も爾を慕ひ喘ぐなり。」

食慾があつても肉がなければ、渇慾があつてもその渇を癒す水がないのと同じで、若し果してさうなら、天然とは實に殘酷無慈悲なものと言はなければならぬ……

併し、ここに「靈魂」と稱する生命の最も進化發達したものがある。又これを養ふ神と神の愛がある。この二者が並び存じてゐて、永生はあり得ないものではない。永生とは靈の方面から見ても、神の方面から見ても、なくてはならないものである……

然らば、靈魂は如何にして神に依つて自らを養ふことが出來るか……

神に依つて靈魂を養ふことを、聖書では「神を知る」と言ふ。「知る」といふ希伯來語は意味の深い言で、これが今日の詞で言へば「同化する」とか「一體になる」とかいふ意味である――約翰傳の十七章の三節を見給へ、「永生とは唯獨一の眞の神なる爾とその遣ししイエスキリストを知る是なり」とある……

即ち、永生とは神を知り、神の遣した基督を知ることである。言ひ換へれば、基督に顯れた神の愛を、信仰を以て我が靈魂に同化するといふ義である――基督教の傳ふる永生とは、かくも明白なものなのである……

神は愛である。そして、この愛は最も完全に基督の生涯に於いて顯れてゐる。この世にあつて神を知るの道は、基督を知るより外にない。基督を見たものは、即ち神を見たものであつて、基督は實に

神なのである……

故に、永生に入るの道は、聖書に顯れた基督を知るにあるのである。基督が我等の神たるに至つて――基督が吾々の理想となり、吾々の崇拜物となるに至つて――吾々は新生命の吾々の靈魂に加へられるのを覺えるのである。吾々の神に關する觀念が、基督の吾々に供する觀念でない間は、吾々の心の内に永生はないのである……

かう言ふと、自分の詞は甚だ獨斷的に聞こえるかも知れない。併し、これは事實である。動かすべからざる事實である――基督が供するやうな神の觀念が、他の人に依つて供された例を、自分は古往今來決して見ないのである……

……神は聖いものである。力の強いものである。知慧のあるものである。併し、これらのことを知つただけでは、まだ永生は得られない……

神は聖いばかりでなく、賢いばかりでなく、力強いばかりでなく、非常に謙遜なものである……神は天の高きにゐても、人類を救ふ爲には地の低きにまで降るを厭はないものである……神は宇宙の主宰たる權能を持ちながら、その心の柔和なことは羔のやうで、その世に臨むや決して威風堂々たる大王の姿となつては現れないで、却つて貧家の子となつて現れ、大工を職とし、勞働を恥とせず、しかも正義の唱道すべきは、諤々として帝王も及ばざる權威を以てこれを傳へた。彼に寸毫の私欲もなか

つた程に単純であるのに、世人は彼を棄て、卑しく彼を侮辱し、終に彼を十字架につけて殺した。併し、彼は一言の不平も言はず、死に臨んで却つて敵人の爲に祈つた――基督の示した神とは、實にかくの如きものである……

かかる神を信じ、かかる神に倣つて行つた人間の生涯が、永生を得られずにゐるだらうか……基督のやうな生涯が、萬人に殺されて、それで終局を告げるものだらうか。若し基督が復活しないで、その生涯が單にユダヤの山地の塵となつて消え失せたものであつたら、この宇宙は何といふ醜い小さい物件であらう……

併し、事實はさうではないのである。謙遜なること基督の如き者の生涯は、永遠にまで存在する價値があるのである。さうして吾々の生涯と雖も、若し彼の生涯に倣へば、等しく永久性を帯びて來るのである。即ち永生とは謙遜の結果である――基督のやうに謙遜であることが出來れば、吾々も永生に入ることが出來るのである――

だが、どうしたら基督に倣ふことが出來るだらうか……

これは唯信仰に依るより他に道がない。信仰に依らないで、吾々が如何に工夫を凝らさうと、謙讓を重ねようと、基督に似ようと努めても、似ることは出來ないのである……努めて爲した行は人爲的であつて、心の奥底から自然に湧いて來る愛のやうには行かないのである。世に實行家と稱する者の行爲の常に

機械的なるはこれが為である……吾々は聖賢君子の真似事ぐらゐで永生を承け繼ぐことは出来ないのである。吾々は慎んで悪を避け、努めて善を行ふのではなくて、心に悪を憎み善を愛するやうにならなければならないのである。そしてさうなるには、基督に顕れた神の救を信じなければならないのである……

然らば、信仰とは何か……

讀んで字の通りである。即ち至上者を信じて一身を彼に任すことである。言ひ換へれば、有の儘を神の前に暴露して、罪の治療を彼に受けることである……

至仁至愛は神の特性であるから、神は努めずして仁慈たることが出来るが、人間は生れながらの罪人であるから、神の救ひに與らざる限り、公平無私の人となることは出来ない。基督教道徳の普通に傳へられるところの道徳と異る所以は、實にこの一點にあるのである……

……吾々が基督のやうな人になるには、彼を道徳の模範として、彼の行為に倣ふことに依つて、さうなるのではない。吾々は先づ己れの身を基督に委ね、彼をして吾々の罪を除かしめ、吾々の心に彼の心を受け、さうして吾々が悉く小基督となつて、はじめてこの身に基督のやうな榮光を現すことが出来るやうになるのである……

私欲を去つたばかりでは足りないのである。吾々は吾々の意志をさへ取り去らなければならないの

である——『我が意志は我が意志を爾の意志となすにあり。』と言つた詩人テニスンの心を以て基督に趨かなければならないのである——かうして始めて吾々は、身に基督のやうな行爲を現すことが出來、永生の我が裡に宿ることを確信することが出來るやうになるのである……

これを要するに、永生とは基督に顯れた神の生命を、信仰を以て我が心に受けることである。その不死不朽のものなることは、これを吾々の心に受けて吾々自身にこれを感ずることが出來るのみならず、またこれを受けない人でも、これを受けた人の身に現るる行狀を見て、否定することが出來ないのである。

永生は人が死を好まざる故に存在するものではない。また或人々の信ずるやうに、靈魂は元來不死の性を具へてゐるものだから、それで永生があるのでもない。唯、吾々の身に基督に現れた神の生命を受けて、始めて永生があるのである。吾々基督を信ずるものの永生の希望は、決して確固たる基礎のない希望ではない。吾々は既に吾々の心にその一斑を實驗し、また吾々の最も明白な常識に照らして見て、この新生命の永遠不朽なることを信ずるのである……

先生の二日に亙る講話は凡そかうであつた。

山田はいつものやうに、この講話を、一語一句感動なしには聞かなかつた。併し、彼が最も強く打たれたのは「愛」に關する——殊に「戀愛」に關する——先生の解釋だつた……

人間の愛には限りがある……

靈魂の要求には限りがない……

限りある人間の愛を以て限りのない靈魂の要求に應ずることは初めから不可能である……

失戀者は人生の誤解者である……

先生の詞は、一句一句山田の肺腑を刺した——山田は自己の總てを否定しても「死」に面した自己だけは眞劍だと思つてゐた——その「死」に依つて、この新しい「生」が得られたのだと思つてゐた……併し、今はその「死」さへ人生誤解の結果だと思はなければならなくなつた。從つて、そんな「死」から生れた「生」が果して永遠に堪へるかどうかさへ疑はしくなつて來た……先生は特に自分に向つてこれを言はれたのではないだらうか——山田はさう思ふと、今まで心の底に珊瑚礁のやうに築かれ始めてゐた信仰が一時に突き崩されたやうな氣がした。

基督に依らない永生は眞の永生ではない……

自分が今まで永生だと思つてゐたものは——あれは戀人に依つた永生だつた……女は天使でないと先生は言つた……自分は天使以下のものに依つて永生を求め得たと信じてゐたのだ……

併し、山田は先生の峻烈な詞を——それが特に自分に向つて發せられたやうに感ぜられたにも關らず——どうしても怨む氣にはなれなかつた……

山田はそれを先生自身の詞だとは思はなかつた——神が先生を通してさう言ふのだと思つた。さうして、山田はその詞の前に頭を下げた。

山田は實に自分をくだらない人間だと思つた——小さな、弱い愚な人間だと思つた——到底自分ひとりでは立つて行けない人間だと思つた——この儘では人間らしい人間にさへなることは出來ないと思つた……

先生は一切を基督に委託して、基督の心そのものを我が心に受け入れよと言つた……

併し、山田にはまだ基督の本質が十分分からなかつた。靈魂の問題も、復活の問題も、永生の問題も、先生の説明だけには理解出來たやうな氣がした。併し、その釋義の鍵である基督そのものが、まだ山田にははつきり掴めなかつた……

冬にもう這入りかけてゐた。この儘で、來年の夏まで待つといふことは、甚だ頼りないやうな氣がした。その間、自分で聖書の研究を續けるにしても、先生といふ案内者なしでは路を迷ふに違ひないと思つた。

丁度その時——『東京インデペンデント』の代りに、その秋から、先生一人の手に成る聖書研究の月刊雜誌『聖書の友』が發行せられるといふことが發表された。その上、日曜日の午前は、今夏期講習會へ來た人で京に在住する人達の爲に、先生が千駄ヶ谷の自宅で聖書の講義を續けてくれ

吳れることになつた……

山田は雀躍をして喜んだ――

「僕は先生の戀愛に關する說を聞いて、穴へでもはひりたいやうな氣がした……柴田君に嘲てられて――初めはさうも思はなかつたが――しまひには自分でも信仰へはひつたつもりか何かでゐたが、きのふの先生の話で、僕は一度に高慢の鼻を折られてしまつた。僕はまた初めから出直さなければならないと思つたが、もう會はおしまひになるし、どうして好いか分からなかつた――これから日曜のたんびに先生の講義が聞けるといふのは何といふ幸福だらう。僕は救はれたやうな氣がする……」

と、興奮して山田が言ふと、濱田が例の落ちついた調子で言つた――

「それは君ばかりぢやない。吾々だつてさうだ。十日間の講義で人生の卒業が出來るわけはない。先生だつて又そんな無理なことは要求なさらないだらう。吾々だつて、これからだ。これからやつと道らしい道を歩き始めるのだ。この十日間で吾々は僅に方向を示されたに過ぎないのだ……」

すると、柴田が口を出した――

「ほんとに純な人間だつたら、たつた一回先生の講義を聞いても、人間が生れ變るかも知れないが、近代の教育を受けた吾々は、情ないことに濁つてゐる……だから、眞の[illegible]出來ないのだ。これから先生に隨分厄介をかけることと思ふが、僕は甘んじて先生の御厄介にならうと思ふ……」

十日間の講習は無事に濟んだ。先生は深い感謝の祈禱で會を閉ぢた。地方から來た人達は感謝を以て銘々故郷に別れて立つて行つた。東京在住の人達は、これから日曜日毎に會へることを喜んで別れた。

異教の友

講習會が濟むと、直ぐその明くる日、山田は牛込にゐる三澤といふ友達を訪ねた――七月二十四日の晩、危く赤見附で死なうとした、直ぐその前に訪ねた、長い坂の上に住んでゐる友達である。

三澤は山田と同じ學校の同じ科の同じ級にゐた。友達になつたのは、學校へはひつてからであつたが、もう十年も交つてゐるやうに仲が好かつた。三澤の父は一代に時めく漢學者で、高貴の方々の寵をも恣にした光榮の人であつたが、三澤がまだ中學にゐる頃、人に惜まれて世を去つてしまつた。三澤はその庶子で、實母には幼少の頃死に別れた。當主の長兄は少壯の實業家として名があつた。家名に加ふるに家門の繁榮は、三澤の境遇を少しも不足のあるものにはしなかつたが、三澤は親のないのが寂しかつた……

山田も母はあつたが、父には五つの歳に別れてゐた。兩親のない三澤と、片親の山田とは、會ふたびに彼の寂しさ頼りなさを語り合つた――さうして、二人は莫逆の友となつた……

三澤も山田には何も彼も打ち明けて話した。山田も三澤には何事も隱さず告白した。二人は飽くまでも助け合つて、「文學」といふ親戚知己の間に人氣のない道を進まうとした。

山田が近頃戀愛問題で苦しんでゐることも三澤はよく知つてゐた――七月二十四日の晩の山田の狂態は、どんなに三澤の心を苦しめたらう。三澤は山田が死にはしまいかと思つた。併し、山田の死なないことだけは分かつたので、一時は安心したが、それから十日といふもの、まるで消息がないので、また心配を始めた――山田が千駄ヶ谷へ通つてゐることを、三澤はまるで知らなかつたのである――

「三澤君――こなひだは失敬した――君は僕が氣ちがひになつたと思つたらう。實際、氣ちがひだつたんだよ。あの時は……」

山田がかう言ふと、三澤はまじめに頷いた。

「僕は實際心配したよ……何が何だか譯が分からないんだもの……例の問題が破れたんだといふことは略（ほぼ）想像がついたが……何しろあの狂態だからね。さすがの僕にも手がつけられなかつたよ……」

「醜態だつた……全く醜態だつたよ……だが、僕はもう救はれた……少くとも救はれつゝある……どうかその點は安心してくれ給へ。」

「一體、あれからけふまで君はどうしてゐたんだ……」

「森川先生の講習會へ毎日通つてゐたんだ……」

「あの、『東京インデペンデント』のか。」
「さうだ。」
「前から君は申し込んでゐたのか。」
「さうだ。」
「ちつとも知らなかつた……」
「君達に冷やかされさうだから默つてゐたのだ……實際、また僕の申し込んだ動機も餘りまじめではなかつたのだ……ところが、それが今では重大な意義のあることになつてしまつた……僕は森川先生のお蔭で新しい生活へはひることが出來たのだ……」
「森川先生の講義が君を救つたのか……」
「さうだ。」
「ふうむ。」
と言つて、三澤は考へた。
「……君、精神の極致は死ぢやないね――第一、人生の極致は戀愛ぢやないね……」
突然、山田がかう言ひ出すと、三澤はびつくりしたやうに、山田の顏を見た――
「……さあ、いきなりさう言はれても、僕には分からないが――何しろ大きな問題だから――でも、

戀愛の極致はやつぱり死ぢやないかと思ふね。この人間社會に生きてゐて、戀愛の目的が完全に遂げられようとは思はないね――戀愛の當事者は人間だが、戀愛の場所は人間社會ぢやない。例へば、見給へ、この社會に生きてゐて、至純に始まつて至純に終つた戀愛が、昔から今までに一つでもあるだらうか。典型的な戀愛傳說の終局はみんな『死』ぢやないか。成程、近松の心中物などを見ると、『死』の動機は必ずしも純ぢやあないかも知れない。女の立場から見れば、治兵衞はいづれ戀か名か。忠兵衞も名の爲に果つたかも知れないが、僕は治兵衞だつて忠兵衞だつて、名だけで死んだとは思はないね。名もはひつてゐるかも知れないが、戀が一番高いところにあつたんだ。人間、名だけぢやあなかなか死ねないものだよ……」

三澤は近松とシエエクスピアの愛讀者で、戀愛至上を主義としてゐた――山田もつい十日前まではそれだつたのである……併し、今の山田は、もう考へが違つてゐた。

「ぢやあ、君は何か――僕が死ねば好いと思つてゐたのか……」

「さあ、そこが人生に矛盾のあるところだ。君が若し戀愛に純だつたら、死ななければならなかつたと思ふ――なぜと言へば、この人間社會は決して至純な戀愛を許すところではないのだから。併し、友人としての僕は、決して君を殺したくない。君に死なれたら、僕の人生は廢殘だ。若し、君が死なうとするところを僕が見たら、僕は腕力をもつても君を留めたらうと思ふ。つまり僕は、戀人として

は君に死んで貰ひたかつたのだ。併し、友としては君に死んで貰ひたくなかつたのだ……」

「ぢやあ、僕はどうしたら好いのだ……」

「さあ、それが僕には分からないのだ……」

「ところが、それが僕には分かつたのだ。戀愛の當事者としての僕にも、君の友人としての僕にも、矛盾のない生き方があるのだ……」

「ふうむ……君はそれを森田先生のところで學んで來たのか……」

「學んで來たと言つては當らない……靈的に傳へられて來たのだ……」

「その靈的に傳へられて來た生き方といふのはどういふのだ……」

「決して死んではならないといふことだ——飽くまでも生きなければならないといふことだ……」

「戀愛にも死んではならないのか——社會に戀愛を蹂躙されても生きてゐなければならないのか…」

「さうだ——僕等の標語は『死』でなくて『生』だ……しかも『永生』だ……僕等は永遠に『生』を齎し切つてしまふ……『永生』にはひるには、この世の『生』を完全に成し遂げなければならないのだ……」

「この世の『生』を完全に成し遂げるとは……」

「どんな苦しいことがあつても、堪へて生きて行くのだ。どんなに社會から虐められても、それに負

けずに生きて行くのだ。決して死んではならないのだ。血だらけになつても、傷だらけになつても、生き續けて行かなければならないのだ……」

「若し、殺されたらどうするのだ……」

「それこそ殉教者だ……自殺者の魂は救はれないが、殉教者の魂は救はれる……救はれた魂は永生にはひることが出來る……」

「だが、どうして、そんなにまでして――この僞善と虚僞に滿ちた社會に生きてゐなければならないのだ……葉をむしられ、花をもがれた「戀愛」を、どうしてそんなにいつまでも持ちこたへてゐなければならないのだ……死んで、その葉を、その花を、誰にも手の觸れられない場所へ移してしまふ方が、どんなに戀愛に忠實だか分からないぢやないか……」

「自殺に依つて、果してそれが成し遂げられるだらうか……僕のいふ「永生」にして始めてそれが出來るのだと僕は信じてゐる……「永生」は淨化せられた新しい生だ――むしられた葉も亦生えて來る。もがれた花も亦咲いて來る……そこに、始めて永遠無窮の愛があるのだ。生け續けるといふことは、諸惡と闘つてこの世の「生」を生き通すといふことが、その「永生」の約束になるのだ。短い――極めて短い――この世の生をさへ「生」き通すことが出來ないものに、どうして無窮無限の「永生」が約束されよう。自ら命を絶つといふことは詞通りに自ら命を絶つのだ――永遠に生きることの出來る生

命を自分で捨ててしまふのだ。戀愛の極致が若し無窮無限な愛だとしたら、戀人同志は「永生」に向つて進まなければならないと思ふ……「死」は一時の高潮に過ぎない。約束に過ぎない。爆發に過ぎない――「生」なしに「永遠の命」はない。「永生」は熱でもなければ、爆發でもない。水の流るる如く靜で、而も上昇に一作した生活だ……火はじきに消える。水はいつまでも流れる……」

「至上善といふのは神のことだらう。併し、僕にはまだ神といふものが分らない……君はさつき『救はれた』とか『救はれつつある』とか言つたが、君が救はれたのは果してさうした信仰から救はれたのだらうか。僕はそれを疑はざるを得ない――僕の考へに依ると君が救はれたのは、君が戀を諦めたからだ。愛を捨てたからだ。若し、さうだとすると、僕は君の眞心の爲にそれを悲しまなければならない――僕は君が七年來自分の生命として來た愛を、さう無造作に捨てて貰ひたくはなかつた……」

「いや、僕は決して自分の愛を諦めもしなければ、捨てもしなかつた……現世に於ける肉體の一致は斷たれてしまつたが、肉以外に手を觸れることの出來ない魂といふものが永遠に僕等を結びつけてゐる……僕はやつとそれを感ずることが出來た……それを信ずることが出來て、始めて僕は救はれたのだ」

「でも、君はさつき人生の極致は戀愛ぢやないと言つたぢやないか……」

「前にも言つた――さうして、今の僕はさう信じてゐる……併し、僕は戀愛を否定しはしない……」

「それぢやあ、君は戀愛をどういふ地位に置くのだ……」

「さあ。どういふ地位に置くと訊かれると困るが……僕には、戀愛が人生の凡てではないと思ふやうになつた……戀愛が人生の最も貴いものだとは思へなくなつたのだ……人間の愛には、親子の愛もある、兄弟の愛もある、夫婦の愛もある、友人間の愛もある……いづれも人間同志の愛である以上、不完全な愛たるを免れない……戀愛もやはりその一つで、到底理想的に完全滿足を期することは出來ないのだ……」

「さうすると、世の中に完全な愛といふものはないわけなのだね……」

「いや、一つある――唯一つある。それは神に對する人間の愛……いや、人間に對する神の愛だ――さうだ。人間の愛に完全なものは一つもないのだ。完全なのは、唯、神の愛だけだ……」

「神の愛……或は……併し、神の愛といふやうなものは、まだ僕には分からない。僕は愛といふものを抽象的に考へることは出來ない。手で摑めるもの……兩腕で抱きしめることの出來るものでなければ、僕は愛だと思ふことが出來ない。神の愛といふやうなものが、果して手で摑めるだらうか。兩腕で抱きしめることが出來るだらうか……」

「出來ると思ふ……眼で見ることも出來れば、手で觸ることも出來る……神の愛といふものは、決して抽象的の觀念ではない……具體的な事實だ……小さく言へば、百合の花一つ見ても、神の愛は分か

ると思ふ……大きく言へば、世界の歴史だ……歴史は取りも直さず神の愛の記錄だ……その歴史の中で、最も神の愛の高調せられて現れたのが基督の死だ……十字架だ……」

「ああ、それだ……それは基督教の信仰だらう。成程、君は森川先生の講義に導かれて、既にその信仰を得たかも知れないが、僕は不信者だ。それは、僕だつて人間以上の『存在』を認めないではない。殊に、僕は自然の熱愛者だ。自然の内には確に神を認める。草の葉が一枚芽をふくにも、木の葉が一枚散るにも、僕は至上者の手を認めないではゐない……併し、それは甚だおほまかなものだ。殆ど抽象的な觀念に等しいものだ。人類の歴史に神の手を認めるとか——基督の十字架に神の愛の最高調を見るとかいふことは、僕には全く不可能なことだ……僕は漢學者の子に生れた……小さい時から僕の心を支配したものは、何といつても儒教だ……その次ぎに僕を支配したものは母が信じてゐた佛教だ……勿論、僕は母から直接これを說かれたのではない……併し、僕の母の墓は普通の日本の寺にある。僕は今までその墓を母だと思つて暮らして來た……その上、母の信仰の深かつたことに就いては、度度寺の住職から話を聞かされてゐる……僕の心はどうしても佛教臭くならずにはゐなかつた……基督だとか耶蘇だとかいふことは、なんだか日本ばなれのしたことのやうに思つて來た……西洋の詩を研究するやうになつてから、その考へは餘つ程變つて來たが、併し小さい時から頭に滲み込んでゐる儒敎と佛敎の混淆したやうな觀念は、容易に僕を去らないのだ……君だつて、ついこなひだまではさう

だつたと思ふ。確にさうだつた。さうでなかつたとは言ふまい……」

「そりやあさうだ、君はよくお母さんのお墓の話をした。僕もよく親父の墓の話をした……僕の親父の墓があんまり遠くにあるので、僕はめつたに墓參の出來ないことを嘆いた……さうして、君のお母さんのお墓の東京にあることを羨んだ……僕はよく君と一緒に君のお母さんのお墓參りをした……さうして、墓と墓との間には、どんなに距離があつても聯絡があるやうなことを言ひ合つて、僕が君のお母さんのお墓參りをすることは、取りも直さず自分の親父の墓參りをすることだなどと言つたもんだつけね……併し、もうさういふ痴人の夢は僕には何の力もないものになつてしまつた……僕は變化した――確に變化した。ホタ、スキソへはひつたといふことは言へないかも知れないが……少くとも僕は變化した――變化といふものは急激に來るものだね……實に急激に來るものだ……」

三澤は併し、山田がさう急に變化する氣づかひはないと思つた。勿論、基督教に關する思想にも同感は出來なかつた……

「どうも僕にはよく分からない……君は熱する人だから、森川先生の說敎に動かされて、今は一圖にさう思つてるのだらうと思ふが……もう少し經つて、冷靜になつてからでないと、ほんとの話は出來ないやうに思ふね……」

「いや。そんなことはない。少くとも僕は十日間千駄ヶ谷へ通つた……成程、その間には熱したこと

もあつた……激したこともあつたらう……併し、十日經つ間には、相當に冷靜にもなれたと信ずる。僕は決して一時の感情に驅られて、こんなことを言つてゐるのではない。頭にも情にも意にも相當に考へて考へて見た結果がこれなのだ。勿論、信仰はまだ淺い。基督教に關することも、まだ分かつてゐないことが多い……併し、僕にとつての動かすべからざる「事實」は、僕が救はれたといふことだ……少くとも救はれつゝあるといふことだ……」

「成程、それは君にとつては事實だらうが、僕にとつてはまだ事實ではない……僕は君以外の人間がどう劇的に變化したつて、直ぐそれが事實だと斷ずることは出來ない……」

上野は山田に對して十分同情を持つてゐたが、いつまで經つても山田の言ふことを理解することは出來なかつた……

「……一つ林のところへ二人で行つて見ようではないか……林も君のことは心配してゐた……あいつは北海道の叔父さんが基督教の信仰を持つてゐるんだし……妹だつてミッションの學校にゐる關係から、僕よりはその方の理解がある筈だし……僕も先生の說を聞いて見て、その上で又考へ直して見たいから……」

上野がさう言ふと、山田はすぐに贊成した。

「さうだ。僕もどうせこれから林のところへ行かうと思つてゐたのだから……丁度好い……君と一緒

に行かう……」

さう言つて、二人は一緒に三澤の家を出た。

林は一番町の高臺に住んでゐた。和洋折衷の住居で、林の部屋には北海道風に圍爐裏が切つてあつた。三人はよく冬寒い時分に、圍爐裏の火を圍んで話した……併し、今そこには灰があるばかりだつた……

林は中學時代からの山田の親友であつた。

山田が坊ちやん育ちで、中學の卒業間際になつても、一向將來の方針が立つてゐなかつたのを、山田の才能と傾向に考へて、文科の方へ導いたのも林だつた。讀むべき書物、考察すべき問題についても、山田は常に林の指導を待つた――林は山田より一つ上に過ぎなかつたが、實際に於いては二つも三つも上の兄さんのやうだつた。

併し、林はその色の白い、眼の涼しさ、眉の美しさとは不似合に、決して「優しい兄さん」ではなかつた。林は常に山田の意志の薄弱なことを叱つた。山田の内生活の貧しいことを責めた――「強くなれ。」「眞面目に。」「公明に。」「正大に。」「男らしく立て。」林はさう言つて、絶えず山田を鞭うつた。

山田は尊い林に縛れた――少しの卑屈さ、少しの偏狹、少しの虚僞も林の前では許されなかつた。

併し、山田は林の前へ出る時、きつと何か叱られるやうな種を持つてゐた。或場合には、自分には氣

がつかないでゐることで、林に突かれて始めて痛みを感ずるやうなこともあつた……

しかも……それでゐて……山田は林を愛した。尊敬もした――どんなに烈しいことを言はれても、それが林だと腹は立たなかつた。腹が立たないどころではなかつた。林に少しでも何か言はれると、いつも山田は鬱ぎ込んでしまつた……

併し、けふの山田は今までの山田ではなかつた……山田はもう自分で偉大な力の據りどころを得たと信じてゐた……既に三澤とも多少の論議を重ねて來た……勿論、林が三澤以上の論客であり、三澤以上の強い人格であることは知つてゐたが、山田は少しも恐れなかつた……山田は進んで今の自分を林の前に呈露しようとした……

「やつと還つて來たな、失戀詩人。一體、今まで何處をうろついてゐたんだ。」

林はいきなりかう言つた――思ひ切つて冷笑しながら……

「森川さんの講習會へ行つてゐたんださうだ……」

三澤が引き取るやうにして、かう言ふと、

「ああ、さうか。神の愛か。女の愛に失敗して、神の愛を求めに行つたのだな……どうだ。神の愛は見つかつたか……なかなか見つかるまい……ダンテのやうな偉い人でも、そいつを見つけるまでには、相當に苦勞したらしいからな……それとも、昔のことだから、いつもの極めて簡短に見つけたかも知

れないな……どうだ。神の愛の味は。やつぱり女の愛の味の方が好いだらう。第一、神樣といふ奴はコロリンシャンなどはやらないからな……」

……山田の失つた戀人は好んで琴を彈いた。山田はその琴の音を慕ひながら、屢戀人の家の周りをさまよつた……林はそれをよく知つてゐた……

「まあ、さう冷かさないでくれ給へ……僕はまじめで來たんだ……まじめにその後の話を聞いて貰ひたいと思つて、やつて來たんだ……」

山田が興奮してかう言ふと、林は愈落ちついて言つた――

「まじめ、結構。僕もまじめだ。僕の何處にまじめでないところがあるね……なんなら指摘して貰はうか……僕から見ると、君の方が餘つ程不まじめだ……噓で固まつてゐるやうに見えるね……第一、そのまじめくさつた救世軍づらが噓だ……」

山田は頭ごなしにやつつけられたが、それでも腹は立てなかつた……何と言はれても爲方がない、今までの自分が惡いのだ……今までの自分が、今の自分を管うつてゐるのだ……過去が現在に煩ひしてるのだ……自分は過去と斷絕したつもりでも、世間は自分にいつまでも過去の着物を着せようとするのだ……

それに、林の詞の烈しいのは、或は神が自分を試驗してゐるのではないかと思つた……自分を怒ら

せて、時によつてからさて、何も彼もめちやめちやにしてしまふつもりか……さもなければ、一度に氣を落させて、自分から絶望の境へ身を浸かせてしまふつもりか……いづれにしても、山田はそれに打ち克たなければならないと思つた……

「僕は何と言はれても、決して怒りはしない。悪口を言つて、君の腹が癒えるなら、いくらでも言ひ給へ……僕は甘んじて的になるから……」

　山田が静かにかう言ふと、林は直ぐとその詞に搦んで来た……

「冗談ぢやない……僕は私憤などを洩らしてゐるのぢやない……僕はそんなけちな男ぢやない……僕は君のその待ち澄ましたやうな聖人顔に對して公憤を感じてゐるのだ……君がまだ自分のものでもないものを、自分のものだと勝手にきめてゐる、その厚顔さに腹を立ててゐるのだ……」

「だから、若し僕に嘘があるなら、その嘘を引つ剥いでくれ給へ。僕自身としても、決して嘘でゐたくはないのだ。唯、僕はその僕を、そんなに嘘なのだとは思つてゐないのだ。僕は可なり眞劍なコンヴィクションを經て來たつもりだ……併し、それも他人から見れば、どうだか分からない……僕は決して僕ひとりで信つてゐるのではない……君のいつもの鋭い觀察で忌憚なく批評してくれ給へ……本當に依つては、僕は出直しても好いのだから……」

「よし。君はなかなか勇氣のあることを言ふやうになつた……それだけでも、僕は嬉しい……併し、

僕にはどうしても今の君がほんたうの君だとは思へないのだ……僕は基督教の信仰を持つてゐる親父や妹を持つてゐる……三澤や君とは違つて僕は子供の時から主ェス・キリストを說かれた……だが、僕は親父や妹の行爲を通して見た基督敎といふものにはどうしても服することが出來なかつた……いまだに服することが出來ないでゐる……森川先生といふ人も、僕の親父などは非常に崇拜してゐるが、僕には極めて心の狹い詩人の一人だとしか思へない……成程、人を動かす力は持つてゐる。現に僕だつて、あの人の本を讀んで、幾度感激したか分からない……併し、あの人が果して基督敎の全部だらうか……あの人には第一博大な愛が缺けてゐる……ユダヤの神の峻烈さはあつても、淫賣婦に薄倖の同情を寄せる基督の愛には缺けてゐる……詩人としての彼はそれでも許されるが、宗敎家としての彼はそれでは許されない……例へば、最近の『東京インデペンデント』解散事件だ……若し、どんなに森川氏がひどい目に會つたとしても、相手はみんな自分より後輩だ……博い、深い、寬容な愛があれば、あゝした結果にはならないで濟んだと思ふ……」

林はその邊の事情にも可なりよく通じてゐた。たとへ、その觀るところに誤りがあつても、山田はそれが嬉しかつた。山田は兎に角最後まで林の說を聞かうとした……

林は詞を續けた——

「……山田君。一體、君は人に影響せられ易い性(たち)の人間だ。忌憚なく言へば、君にはオリジナリチイ

といふものが缺けてゐる。キイツを讀めば、直ぐキイツに影響される。シエリイを讀めば、直ぐシエリイに影響される――それは、君が或一人の詩人に心醉してゐる最中に、君が書いた詩を見れば、直ぐに分かることだ。極端に言へば、君の生活は獨自の生活ではなくて、影響の生活だ。君は自分自身の生活といふものを持つてゐないのだ。君が持つてゐるのは他人の生活の反映だけだ……實を言ふと、君が森川さんのところへ通つてゐたことも、或方面から聞いて、僕は前から知つてゐたのだ……講習會に於ける君の行動なども巨細に僕は知つてゐるのだ……さうして、僕は、君が兎に角そこまで行つたのを嬉しいと思つてゐた……前齒の君が、僕等にも相談しないで、單身さういつた世界へ道を求めに出かけたといふことは、君としては確に一進歩だ……その點は僕も喜んでゐた……併し、結果は大抵知れてゐた。君といふ人間をよく知つてゐる僕として、君の上に起る變化は大概分かつてゐた……成程、僕は、まだ君自身の口から、まだなんにも聞いてはゐない……併し、君が今三澤と一緒にここへはひつて來た瞬間、君の顏つきを見て、僕は自分の想像の間違つてゐなかつたことを知つたのだ……君の顏つきは、成程今までの君の顏つきとは變つてゐた……併し、それは君自身の顏ではなかつた……他人の顏だ。他人に影響せられた顏だ。他人の顏を君が冠つて來たのだ……君自身の内部には何の變化もなくて、唯君の表皮が變色しただけだ……」

山田は林の詞を初めは冷淡に聞いてゐた。中ごろは侮蔑して聞いてゐた。その内に、だんだん引き

つけられて來て、しまひにはまじめに林の言ふことを受け入れるやうになつた……

顏つき一つで現在の自分を判斷するとは、隨分殘酷なことだ……併し、敏感な林には、唯それだけで總てが分かるのかも知れない……成程、自分は獨自性に貧しい人間だ……それは今までも屢人に言はれてゐる……自分自身でも十分に認めてゐる……いつも人に影響せられてばかりゐて、一向確な自己といふものを持つてゐない……風に吹かれる蘆の葉とは全く自分のことだ……

自分は變つた……確に變つたと信じてゐる……併し、林に言はせると、自分の變つたのは表面だけで、内部は相變らず元の自分だ……成程、それはさうかも知れない……成程、それは顏つき一つで、直ぐ知れることかも知れない……

實際、自分が得たと思つた信仰も、講習會の終り時分には、甚だ薄弱な信仰だといふことが分かつた……まだ自分は本當に基督を知つてゐるのではない……基督の前に心を虛にして、基督の總てを受け入れてゐるのではない……死生の間を潛つて來た經驗も、單なる人間の經驗に過ぎないかも知れない……魂には何の干係もない――魂の更生には何の關りもない――俗人の經驗に過ぎないかも知れない……

さう思つて來ると、山田はもう一言も林に對して抗辯することが出來なくなつた。林の詞の前に身をひれ伏して、自責と反省に心を悶えるより外にしやうがなかつた……三澤の前では獅子のやうだつ

た山田も、林の前では鼠のやうだつた……

「林君の言ふことは可なり強く僕の急所を突いた……成程、僕は単に影響せられてゐるのかも知れない。……真のコンヴァジョンにはまだ到達してゐないかも知れない……勿論、僕自身だつて、今の僕の信仰を決して誇つてゐるわけではない。……唯、僕は救はれたと思つたのだ――少くとも救はれつつあると信じた。その歓びを君達二人に頒けに来たのだ……併し、だんだん林君の話を聞いてゐる内に、それさへ怪しくなつて来た……僕はまだ救はれてゐないのかも知れないのだ……救ひの端緒にさへ着いてゐないのかも知れないのだ……森川先生に関する林君の批評については、たとへ十日間でも直接に師事した僕として、多少の抗議もないではないが、それは今はいふまい……今、僕の眼の前にあるのに、僕自身の問題で……一つ、帰つて、静に考へて見よう……考へて見た上で、また君達に会はう……さうして、向後の問題に就て相談をして貰はう……実際、僕はなつてない男だ……それが為に始終君達に心配ばかりかけてゐる……済まない……ほんとに僕は済まないと思つてる……」

山田はかう言ふとしよげ返つて林の家を出た。勢込んで三澤の家へ飛び込んだ時の様子とは似ても似つかぬ萎れやうで坂を上がり降りする足もたどたどしく、やつとのことで自分の家へ着いた……

自分の部屋へはひつて、机の前へ坐ると、山田は自分で考へようとしないで、いきなり森川先生の著書を読み始めた――勿論、一つの書物を落ちついて読むのではなかつた。こつちの本を三四頁読む

かと思ふと、直ぐ又あつちの本を五六頁走り讀みした……山田は今の自分に對する「答」を求めた——「答」を他人に漁り求めたのである……

「强き信仰と弱き信仰」……山田は最後に、かういふ題の文章にぶつかつた……

「……信仰は元來意志の動作であつて、結果の有無に出るものではない。信ずべきは結果の有無に拘らずして信じ、信ずべからざるはたとへ天地が壞るるとも信じないといふ信仰——その信仰が眞正の信仰である。故に信仰は目を其結果に注がないのである。「我等見る所に憑らず信仰に憑りて歩む也」とパウロの言ひしは此事である。目を結果に注ぐに至つて、信仰は信仰でなくなるのである。結果を見ることなく、結果を俟つことなく、信ずべきを信じ、これを信じて充ち足れる事、その事が眞の信仰である……」

山田にはもうこれだけで、林の議論の大部分が毀れてしまつたやうに感じた……

先生は更にかう書いてゐる——

「……基督信者に唯一の信仰の目的物がある。それは基督といふ十字架である。これあれば彼は足りるのである。これなくして、彼は貧弱、世に比なき者である。信者のすべてはイエスとその十字架に於てある。彼の職も業も贖もすべてその中にあるのである……信者は基督とその十字架以外に何物をも求めないのである。然り、求むべからずである。彼は全注意をこれに鍾めて他を顧みないのである。

人の後に從ひ信仰の理由を問ふ者あらんか。彼は十字架を指して答ふるのである。「視よ」と……」

山田は考へた――結果の有無はこれを見ないとして、果してこの信仰が自分にあるだらうか……基督といふ十字架……今の自分にとつて一番貧弱なのは、この信仰である……たとへ林に突かれた信仰の弱點は遮れ得るとしても、今先生の文章に依つて刺された自分の信仰の弱點は到底隱し終せることは出來ないのである……山田はまた心の沈んで行くのを感じた。

先生は更に又かう書いてゐる――

「……心靈は自我である、主觀である。心靈的實驗と稱するも自分で自分に感じたまでの事であつて、その果して普通的事實であるや否やは自分一人で定めることは出來ない。潔められたいと思ふことは必ずしも潔められたる事ではない。救はれたりと感ずる者が必ずしも救はれるのではない。永遠の事實は自我以外である。救濟は感情の事ではない、道理の事である。道理を信ずる意志のことである。故に信仰と共に動かざる者である。巖の如くにその根據を宇宙の眞理に根ざす者である。最も廣き意味に於いての客觀的事實である。故に自我以外に在る事でなくてはならない。世界の歴史として宇宙の現象として、在つた事でなくてはならない……

「實に豫言者エレミヤの言ひしが如くに、心はすべての物よりも僞る者なりである。人は自己の心に囚はれて自己を知ることは出來ない。自己の見たる自己は決して眞個の自己ではない。自己が善く見ゆ

る時に必ずしも善くあるのではない。悪しく見ゆる時に必ずしも悪しくあるのではない。この心理的事實をよく辨へたるパウロは言うたのである――「我自から省みるに過失あるを覺えず、然れどもこれに因りて義とせられず、我を審判く者は主なり。」と……」

山田は愈驚いた――救はれたと思ふことが救はれたのではない……自分の心に頼つて自分を知ることは出來ない……自分で自分の善く見える時に、必ずしも自分は好いのではない――かうなつて見ると、自分は今まで何を信じたのだか、何を基礎として新しい生活にはひつたと信じたのだか、まるで分からなくなつて來た……

山田は思つた――自分は神を信じたのでもなければ、基督を信じたのでもなかつた。極端に言へば、森川先生をさへ信じたのではなかつた……自分は唯自分自身を信じたのだつた……自己。自己。總ては自己だつた。自己以外には、世界の歴史もなければ、宇宙の現象もなかつた……

信仰は結果の有無を論じないといふ詞を讀んだ時、林の議論が一度に崩れたやうに思つて、心竊に痛快を叫んだ山田も、ここへ來て、一溜りもなく敗北してしまつた……林に言はれたことは、やつぱり本當だつた……如何にも自分は「救世軍づら」をした自己欺瞞者に違ひない……他人の信仰をかぶつた假面舞踏者だつたに違ひない……それにしても、林は虚無論者でありながら、何といふ深い洞察力を持つてゐるのだらう――さう思ふと、山田は林が恐ろしくなつた……

先生は又書いてゐる――

「……國家社會に現はれたる基督教の效果ではない。また自己の心靈に施されたりと感ずるその感化力ではない。これは只て信者の信仰の基礎となすに足りない。神が親ら供へ給ひし宥罪の供物たる十字架上のイエスである。これのみが我が全身全靈を傾けて信賴するに足る者である。その上に信仰を築きて、雨降り大水出で風吹きてこれを撞つとも倒れないのである……善行を急ぐ必要はないのである。社會事業に焦る必要はないのである。必ずしも惡念悉く絕え、自ら清淨潔白俯仰天地に愧ぢざる人となるの必要はないのである。罪の身この儘、惡の世その儘の內に在りて、信者は贖罪の供物なる十字架上のイエスを仰ぎ視て、神の前に善且義且聖たるを得るのである……」

山田は今自分の信仰の無價値なものであることを悟つた……

小さき墮落

山田の信仰は此の一擊でぐらついた……そこへ小さな誘惑が來た……山田は一溜りもなく、ずるずるとその方へ引きずられて行つた……

山田の友達に、もう一つ他のグルウプがあつた――それは小學校時代の同窓で、唯幼時の親和の追憶のみが互を繋いでゐるに過ぎなかつたが、その團結は存外堅かつた。

春田といふ俊才があつた。海軍兵學校をずつと一番で通したが、はじめての遠洋航海で痠病の爲に斃れてしまつた。寺野といふ數學と語學の天才があつた。外交官試驗に首席で合格して、直ぐ書記生としてウラヂオストックに渡つたが、寒さに肺を冒されて、極東露西亞の土となつてしまつた――今殘つてゐるのは、鳥丸といふ華族の嗣子と、木村といふ財產家の一人息子と、東谷といふ裁判官の三男で、早く父に別れて、母に甘やかされて育つた、いづれも凡才のみであつた。

この三人は小學校時代の成績も惡く、中學へはひつてからも一つの學校に落ちつかず、高等敎育も滿足には受けずに、靑年としての客氣もなければ煩悶もなしに、唯ぶらぶらと蝶のやうな生活を送つてゐる連中だつた。

勿論、今の山田から見れば、いづれも自分より價値の低い人間だつた――學問も淺く、人生觀も低く、感情も鈍く、意志も弱い連中だつた。併し、山田は決して彼等を侮辱しなかつた。夢のやうな少年時代の決して二度とは來ない美しい追憶は、これらの友達に對して常に限りない愛著を山田の心に持たせた。殊に忘れようとしても忘れ難い初戀――それは最近破れるまで七年の長い間續いた戀――の周圍に立つ人物として、山田は親しさ懷しさの限りを盡して、これらの友達を愛慕するのであつた……

林に會つてから二三日にして、この幼馴染の一人が山田を訪ねて來た――

「……近い内に、男女混合の大同窓會を開かうと思ふが、君、贊成してくれないか。學校の先生達にも既に諒解を得てあるし、女子部の幹事達にも既に話がしてあるのだ……」

傳道家の木村は、山田の部屋へはひつて、席につくが早いか、こんなことを言つた。

「ほう、こいつは奇抜なことを思ひついたな。一體、男女が別々に同窓會を開くなんて、もう時代遅れだ！　併し、先生達がなかなか難しいだらう。君は諒解を得たと言ふが、いざとなると、どうだかわからないぜ……」

山田がかう言ふと、木村は大人らしくぽんと膝を打つた——

「高山は吾輩の分擔にありさ……これで僕は事務にかけては天才だからね……なあに、小學校の先生などを說服するのはわけないさ……それにしても、吾々は信用がないから、是非とも君に贊成して貰はないと、仕事がしにくいんだ。何と言つても、君は吾々の仲間では一番偉い人なんだから、君さへ贊成してくれれば、事は容易なんだ……どうだ。贊成してくれるか……」

「さうさ……趣意は大に贊成だが、君達がそれを思ひ立つた動機だね。それを聞かないと、うつかり同意は出來ないね。あとで迷惑するのは厭だからな……」

山田は笑ひながら、冗談のやうに言つた。

「大丈夫、君に迷惑する筈はない。吾々の動機は神聖なものだ。これから吾々が新社會へ出て行くに

ついては、是非とも異性といふものを知つて置かなければならない。また女の方から言つてもさうだ。男といふものを理解しないで、世の中に立たうつたつて、それは無理だ。それには、公開的に両性の接觸を計るのが公明正大で一番好い……とかう言ふのだ。」

木村はまじめくさつてこんなことを言つた。併し、木村の目的が單に女に近づくこと――そして、あはよくば青春の享樂をそこに見出ださうとすること以外に何もないことは、その詞の内容にも表現にもよく分かつてゐた。

山田は十分それを看破してゐながら、決してそれを反駁しなかつた。

「成程、それなら立派な動機だ……正しい。僕も賛成しよう……ところで、島田や東谷はどうなのだ。」

「なあに、あの連中は賛成してくれたところで、たいした信用にはなりはしないんだが、今まで蔭ばかり見てゐて口の利けなかつた女の連中と口が利けるつてんで、からもう大喜びなんだ……」

「ふうむ……」

山田は苦がい顔で笑つたが、心の中では自分だつて同じことだと思つた――山田は失つた愛にまだ全く執着を絶つたのではなかつた。彼は若しよそ眼にも美しい「人妻」の姿が見られればと思つたのである……それは勿論、以前と同じ執着ではなかつた。我意のみの執着ではなかつた……少くとも、千駄ケ谷へ通つてゐる間は、その「隣人」の面影さへ眼には映らなくなつてゐた……三澤に會

ひ、其に責められ、森田先生の文章に自分の信仰の弱點を突かれて、山田は折角進んで來た道を又逆歩があとへ戻つた……そこに立つて待つてゐたのが、もう近づかうとして近づくことの出來ない「過去の愛」であつた……もうそれは「戀」ではなかつた……女としての「愛」ではなかつた……親しい友達のやうな……仲の好い同胞のやうな……その懐しさ慕はしさを押さへることは出來なかつた……

「ぢやあ、これで好い。先生の方はもうみんな賛成が得てあるんだから、牧師連中の意向さへきまれば直ぐ發表出來るのだ……有難い、有難い。」

　木村は膝を打たぬばかりにして喜んだが、やがて急に何か忘れたことでも思ひ出したやうな顔をした。

「さうだ……若し、この話がきまつたら、當日餘興に何か品の好い素人芝居をやりたいと思ふんだが、その時は脚本のことだの、稽古のことだの、萬事君に頼むから、そのつもりでゐてくれ給へ……」

「ほう、そいつはなかなか素敵だね。」

「どうせやるなら、その位なことはしなけりや詰まらないよ……男女混合でやるんだ……面白いぜ……東京なんか、まだなんにもきまらない内から、もうすつかり出るつもりで、役者氣取りでゐやがるんだ……」

「あいつは、そんなことならチャンピョンだ……」

「その癖、不器用なんだがな……」

二人は聲を合せて笑つた……

その時分、青年少女の交際は――今考へると滑稽なほど――世間で嚴しかつた。若い男と若い女の間には――それが同胞か親戚でない限り――單に物を言ふことさへ容易に許されなかつた……

木村や東谷や鳥丸が男女合併の同窓會などといふものを思ひついたのも、畢竟さうした不自然な束縛に反抗する苦肉の策に過ぎなかつた。

勿論、事は容易に運ばなかつた。木村や鳥丸や東谷は、別に用のない體なので、毎日朝から晩まで奔走した。初めは局外にゐるつもりでゐた山田も、あんまりみんなが一生懸命なので、しまひには見るに見かねて、手傳ひ始めた……

かうして、曲がりなりにも、學校側、男子部女子部の幹事連の間にも、やつと諒解が得られた。木村は直ぐと發起人の名をきめて――出身者で、なるべく社會的に地位のある人達の名を列べて――趣意書の起草、その印刷、會の日取及び會費の決定、當日のプログラムの編成などに從事した……

餘與には「水沫集」の中にあるハツクレンデルの小説で「黄綬章」といふのを芝居にしてやることになつた――山田はそれを脚本に書き直すことから、有志の人に役を振つて、稽古をすることまで引き受けた……

誘惑はそこにあつた……山田の妹と同じ年度に小學校を出た女生の一人に、東北の或る資産家の娘があつた。勿論、田舎には宏大な家と土地とを持つてゐたが、東京にも立派な屋敷があつた。娘には二人の姉と二人の妹とがあつた。五人の姉妹は病身の母を故郷に殘して、多額納税議員として東京に用事の多い父と一緒に、小さい時から麹町の御厩谷に住んでゐた。五人の中で、山田の妹と同級の松子が一番美しかつた。學校の成績は著しく好くはなかつたが、頭腦の明晰で、理解の早いことは教師達の羨望の一つであつた……

松子は小學校を出ると、他の姉妹を東京に殘して、自分一人だけ故郷へ歸つた……それから三年程經つて……最近また東京の屋敷へ歸つてきた…… 山田は妹の友人の一人として、顏ぐらゐは前から知つてゐたが、いつ田舎へ歸つたのか、いつ又東京へ出て來たのか、そんなことはまるで知らなかつた——美しい人だとは思つてゐたが、山田は松子に心を惹かれるやうなことはなかつた……

その松子……どつちかと言へば、日本風な嚴格な家庭に育つた、氣の小さい、羞恥に富んだ松子……それが意外にも——山田の妹を通して——自分から「黄綬章」の役者の一人になりたいと申し込んで來た。

「……愉快、愉快……もうこれだけでも吾々の趣意に徹底したといふものだ……あんなお孃さんが——しかも、あんな大家のお孃さんが、進んで餘興の一役を引き受けようといふ氣になつたこと——

そのことだけでも、吾々の爲事はもう無意味でなくなつたのだ……」
木村や東谷はかう言つて、有頂天になつたが、山田は思ひの外冷靜だつた――
「たとひ餘興でも、藝術は藝術だ。いくら綺麗な人でも、その方の才能がなければ駄目だ。一つ稽古をして見て、物になりさうなら使ふし、物にならなさうだつたら、遠慮なく斷らうぢやないか……」
試驗をして見ると――と言つても、山田に少し眼があるだけで、立ち合つた木村や東谷には、まるでその方のことは分からなかつた――果して、松子には餘り天分がなかつた。
それでも、木村は松子が美しいので、これに好い役を與へようとしたが、山田は肯かなかつた――結局「隣の女房」といつたやうな極めて小さな役が松子に與へられた。
山田は役者としての松子にあまり重きを置かなかつたやうに、人間として松子にもあまり注意を惹かれなかつた――もともと唯の友達ではあり、こんなことが縁になつて、山田の家へも足しげく出入するやうになつたが、山田はやつぱり唯の友達といふ以上に深い意味は持たなかつた……

同窓會の當日が來た……
山田がさほどげに――しかも心の中では可なり強く――待つてゐたものは終に姿を見せなかつた。
山田は「待つてはならぬもの」を待つてゐたやうな氣もするので、悲しむことも絶望することも出來

ないやうな氣がした。

　物足りない――併し、物足りないと思つてはならないといふ心持――それが山田の元氣を挫いた。

山田は心の虚な器械のやうに自分の役目だけを果した……

「おい。ひどく意氣消沈してるぢやないか。Tが來ないんでがつかりしてるんだな」

「好い加減に諦めろよ。もう人の細君ぢやあないか」

「從六位功四級海軍機關少佐の令夫人と來ちやあ、吾々側へも寄りつけないからな……」

　木村や東作や鳥丸は、事情の外部的な一面をのみ知つてゐて、容赦もなくこんな冷嘲を浴せた。それでも、山田は怒る勇氣もない程氣を滅入らしてゐた……

　餘興の芝居が始まつた……

　山田はするだけのことをすると、見物席の一番うしろに立つて、ぼんやり見た……

　なんにも興味を惹かなかつた……老母に扮した自分の妹の子供のやうな可愛らしい聲も、息子に扮した鳥丸の甘つたれたやうな詞つきも、稽古の時ほど氣にならなかつた……無事に進んだからではない――見物席には時々笑聲が起つた――山田自身が氣を入れて見てゐなかつたからである……

　暫くすると、突然、山田が眼を見張つた……松子が舞臺へ出て來たのである――あれ程山田が輕く見てゐた松子は、實に驚くべく生き生きした扮裝をもつて舞臺へ現れて來たのである……

それはいつもの松子とはまるで別人だつた。すらりとした、丈の高い姿が、始めて着たとは思へない程、洋装を道はしく見せた。それよりもいつもは死んだやうな日本風な松子の顔の美しさが、悉く命と力に充ち滿ちてゐた……

眼も……口も……鼻も……耳も……いつものそれらとは全く違つてゐた――總てが生き生きと動いて、深い生活の陰影を持つてゐた……

短い詞――それにも、思ひの外な濕ひと深みとがあつた……

山田は見てゐる内に、自分の顏の熱つて來るのを感じた。自分の心臓の高く波を打つて來るのを覺えた……

「誘惑だ……」

山田は咄嗟にさう思つた。

「おれは單に容姿の美にうたれたのだ……おれの信仰のぐらついて來てゐるところを狙つて、惡魔がおれを誘惑するのだ……」

講習會が濟んでからも、續けて日曜毎に森川先生の說教を聞きに行つてゐた山田は、先づ普通の基督信者が考へさうなことを考へた……

「だが、容姿の美といふものが單に容姿の美として存在し得るものだらうか。自然の美の蔭には神の

聖者の正しさがある。人間の姿の美しさも、心の美しさなしに在り得るだらうか……

「成程、おれは常に美しいものに憧れてゐる。併し、單なる形態の美に對して、頰をほてらせ胸を躍らせるほど物質的な人間ではないと信じてゐる……おれが動かされたのは、あの美しい眼や口の蔭にある美しい心に對してでなければならない……」

山田はさう考へて少し安心したが、續いて又叱るやうな聲が心の底から起つて來た……

「それにしても何といふ輕薄さだ。お前は死ぬほど愛してゐたものと別れてから、まだ一月經つか經たない内に、もう又新らしい愛の對象を求めようとするのか……」

「いや、決して自分から求めたのではない……」

心の底で反抗するやうな別の聲が起つた……

「……招かないで來たのだ……自然と自分の前へ現れて來たのだ……それに、これはまだ戀といふものだかどうだか分からないのだ……おれは唯意外な美に出會つて、烈しい感動を覺えただけだ……恐らく戀ではあるまい……いや、斷じて戀ではない……」

山田は種々に自分で問ひ自分で答へたが、一度松子に惹かれた心は、容易に松子を離れなかつた。

木村や東谷は、至難な男女合併の同窓會を無事に濟ますことが出來たので、有頂天になつて喜んだ。會の後始末と稱して、その後も幾度か女子部の幹事連と會合した。そして、その會合を樂んだ。山

田もさういつた會合へは出たが、いつも松子がゐないのを物寂しく感じた。今後續けてかうした同窓會を開くことに就いても、木村や鳥丸は熱心に女子部を説いたが、山田はもうそんなことはどうでも好かつた……

木村の謂はゆる「後始末」——實は女子部の幹事に出來るだけ多く接觸する爲の「後始末」だつたが——もすつかり濟んで、三日程すると、松子が山田の家を訪ねて來た。

山田の妹は留守だつた。いつもは妹が留守だと直ぐに歸つて行く松子が、その日は「若しお兄さんが入らつしやるなら……」と言つた。山田もそれまでは、妹の留守の時、松子に上がれと言つたことは一度もなかつたが、その日は不思議に會つて見たくなつた。

松子は女中に案内されて、淑(しとや)かに山田の書齋へ通つた。餘興劇の「扮裝」で今までとは全く別な感じを山田に抱かせた松子は、飾りのない素の儘の姿でも、今までとはまるで違つた感觸を山田に與へた。

山田は自分で自分の心を疑つた。「扮裝」に於いて一度惑はされた自分の眼は、いまだにまだ惑はされてゐるのだらうか。それとも、自分は今までこの人を全く見違へてゐたのだらうか。子供の時の樣子だけが眼に殘つてゐて、大人になつた今の松子を、自分はまだ注意して見なかつたのだらうか……

兎にも角にも、今山田の前に坐つた松子は、以前の松子とは、全く別の人間だつた……

黒瞳に、利口さうな、それでゐて深く沈んだところのある眼……筋が通つてゐて、少しも驕りの見えない鼻……小さ過ぎもせず大き過ぎもしない口……男性的な濃く太い眉毛……それを和げるやうに可愛らしい、血の色の透き通るやうな耳……どれもこれも、今までの松子には全く見られないものだつた……

併し、それらよりも山田の心を強く惹きつけたのは、松子の服装だつた――そして、その服装の後に現はれる松子の心だつた……

およそ飾りのないと言つて、山田はこれ程飾りのない女を見たことがなかつた……松子はまだ十八だといふのに、うすい藤色の無地の襟をかけてゐた。帯も黒い無地の方を出して締めてゐた。學生の山田には柄も物も分からなかつたが、着物も黒つぽい、常に細い縞目の見える、一向人の眼につかぬやうなものだつた。頭にも彫のある小さい銀の簪を一本深く突きさしたきりで、他になんにも飾りはなかつた……

「柔」にも「色」にも、決して人の注意を喚ばうと企てゝゐるものはなかつた……道端の草の葉の蔭につゝましく咲く薄色の小さい花……われから人の眼につかぬやうにつかぬやうにと水の底深く沈んでゐる鈍色の寂しい魚……どこに人を迷はさうとするやうなところがあらう……どこに誘惑があらう……

山田はかくも淑しいものを「誘惑」だと思つたことを恥ぢた……このやうな神々しい境に惡魔が棲んでゐるなどと思つたことを悔いた……

唯ぼんやり見ても……俗人の眼から見ても……それは決して百萬長者の令孃の服裝ではなかつた……山田は同宿合ひ當日、松子の姉妹達の美々しく着飾つた姿を見てゐた……それとこれとはまるで別の國の人のやうだつた……

山田は松子の生活の蔭に、何か他の姉妹とは——姉妹はかりではない。同じ年頃の總ての他の娘達とは——違つたものがあるのではないかと思つた……物寂しいとりなり、深く沈んだ眼の色、そこには見逸し難い憂傷と頼りなさとが見られた……

「……千枝子さんはどちらへ入らつしやいましたの……」

「お茶の稽古に行つたんでせう」

「……お歸りになるまで、お兄さんのところでお邪魔させて頂いても宜しいでせうか……」

「ええ、どうぞ……」

「……あたくし、お兄さんにいろいろ敎へて頂きたいことがございますの……」

二人はぽつりぽつりこんなことを話した。松子の聲は淸く澄んでゐたが、しかも憂に沈んでゐた……

「僕はまだ學生です……人に敎へるなんてことは出來ません……」

「でも、お兄さんは信仰を持つてゐらつしやるやうに聞いてをりますわ……」
「信仰……どこでそんなことを聞きました……飛んでもないことです……信仰なんて……いつになつたら、そこまで行けるか分かりません……」
「でも、求めてはゐらつしやるんでせう……」
松子は特別に人の氣を惹くやうなことを言ふのではなかつた。併し、その言ふことは最初の一言から、當時の同じ年頃の他の娘達とは違つてゐた――しかも、その語調には些の飾り氣もない眞劍さがあつた……
「……求めてゐます……實は求めて一度得たと思つたのですが、それは自分で自分の影を捉まへたに過ぎませんでした……僕はまた新規に出直しました……」
山田も飾らずにかう答へた。
「あたくしを、そのお連れになさることは出來ないでせうか……」
「さあ……」
山田は卽答が出來なかつた。
「實はわたくし、お兄さんに導いて頂きたいと思つて上がりましたの……それで、けふは千枝子さんがお留守でも、お兄さんには是非お目にかかりたいと思つて參りましたの……」

「飛んでもないことです……導くなんて、到底今の僕に出來ることではありません……僕自身、僕を導いてくれる人を求めてゐるくらゐです……人を導くなんて、考へても恐ろしいことです……」

「でも、お兄さんには森川先生といふ方がゐらつしやいます……あたくしの森川先生はお兄さんです……」

山田は松子が思ひの外に自分のことをいろいろ知つてゐるのを驚くと同時に、その要求の自分を責めるやうなことばかりなのを驚いた――

「愈、飛んでもないことです……僕があなたの森川先生だなんて……どうして、そんな資格が僕にありませう……僕のやうな意志の薄弱な、僕のやうな感情の濁つてゐる、僕のやうな我儘な人間と一緒に歩いたら、横道を迂廻するばかりで、容易に本道へは出られません……若し、眞實にあなたに求める心があるのなら、あなたは直接森川先生に導いて貰ふか、さもなくば御自分一人で出發なさることです……僕は駄目です……僕は駄目です……」

「その、僕は駄目だとおつしやるところが、あたくしお慕はしいのです……かういふと生意氣なやうですが、木村さんや東谷さんは、いろんな點から見て、お兄さんよりはずつと人格の低い方達です……それでゐて、御自分達が駄目だとは思つてゐらつしやいません……」

「いや。人格の高い低いなどといふことは外見だけでは分かるものではありません……成程、あの連

中は學校も正式にやらないし、これといふ目的もなしに遊んで暮らしてゐます……併し、人間としての價値に於いて、僕とあの人達との間に、どれだけの相違があるでせう……僕は子供の時分から、あの連中と親しくして來ました……今でも可なりな親しみを持つてゐます……みんな善人です……友情に厚い、心の優しい人達です……」

「ほんとに、お兄さん、さう思つてゐらつしやるんですか……」

「ほんたうに、さう思つてゐます……」

山田は誠を面にあらはして言つた。

悦子は暫くぢつと山田の顏を見詰めてゐたが、やがて感に堪へたやうに、

「ですから、あたし、お兄さんに導いて頂きたいと思ふのです……どうして、お兄さんはさういふ清い心を持つてゐらつしやるのでせう……あたくしのやうな心の曲(ゆが)んだものは……」

と言ひかけて、ぷつりと詞を切ると、急に暗い顏をして下を向いてしまつた。

「木村や東谷に何か惡いことでもあるのですか……」

山田は悦子の顏をまじめに見詰めて、心配さうに訊いた。

「……いいえ、これと言つて特別に惡いことがあるわけではありませんけれど、あの方達がこんだのやうな計畫を遊ばしたについては、女子部でもいろいろに申してをりますわ……家の一番上の姉など

も、ふだんはあんな風に無口な人ですが、こんなだけは隨分反對したらしいのです……あの方々の思ひ立ちが純でないと申すのですね……贊成して、會を開くにしても、幹事連中は油斷をせずに監視してゐなければならないなんて申したさうですの……今度の會が出來たのは、全くお兄さんの信用が女子部にあつたからですわ……發起人の中にお兄さんの名がなければ、會はなり立たなかつたに違ひないなんて、姉は申してをりました……さういふ風ですから、あたくし達までが木村さんや島丸さんや東谷さんに對しては、始終警戒するやうにしてをりましたわ……」

「なんだ……唯それだけのことですか……それだけのことならあの人達だつて僕だつて同じことです……危險な點に於いては、寧ろ僕の方が危險でせうぜ……やつぱり女には上邊のことしか分からないのですね……」

「いいえ。いくらそんなことを仰しやつても、あの方達とあなたとは全く別ですわ……それは、誰でも認めてをりますわ……それだのに、お兄さんはあの人達のことを今のやうに仰しやるのでせう……あたくし、ほんとに感心いたしましたわ……」

「それは僕が純なのでも何でもありません……女の人は猜疑が深いのです……」

「さうです……ですから、あたくし自分で自分が厭になるのです……どうして、あたし達はこんなに曲かつた心を持つてゐるのでせう……」

さう言つて、松子はまた下を向いてしまつた。

さうかなあ……あなたのやうな何不足のない生活をしてゐる人でも、女はやつぱりさうなのかなあ……

山田は獨語を言ふやうに言つた。

松子はそれに對しては、一言も返事をしなかつた。唯、顏を上げて、物悲しげにぢつと山田の顏を見た——併し、その黑く潤んだ眼には、明かに山田の詞を否定する色があつた。

山田にはそれが分からなかつた。——小學校を出てから三年の間、田舍の方へ行つてゐて、何の消息もなかつたといふことに就いては、何か事情がありさうでもあつたが、自分の家などとは比較にならぬ程立派な家に生れて、何不自由なく暮らして來た松子に、そんなに暗いことがあらうとは、どう考へても想像出來なかつた……

それでも、山田は松子の悲しげな眼を見てゐる内に、自分の心の重く沈んで來るのを感じた……そんなわけはない、そんなわけはないと思ひながら、松子が何となしに可哀さうになつて來た……

「……松子さん、あなたは學校を出られてから、ずつと田舍の方へ行つてをられたのださうですね……」

山田は訊くともなく、かう訊いた……

「……はい。丁度三年……つひこの五月に又こちらへ參つたのです……」

「もうずつと、こちらにお出でになるんでせう……」
「さあ。どうですか……分からないのです。」
「あなたは御自分の意志では動けないのですか。」
……餘計なことだとは思つたが、山田はかう訊いて見た。
「まあ……さうでせうと思ひます……」
と、松子は寂しげに笑ひながら答へた。
「大家のお孃さんなんて、みんなさうしたものでせうか……」
「あたしはお孃さんではありません……水も汲みましたし、庭も掃きました……」
「それは田舍ででせう。」
「ええ……」、
「それでは駄目です……」
「駄目でせうか。」
「駄目ですとも。」
松子はまじめに落膽して、首を垂れた。
「一體、あなたのお國はどちらですか……なんでも、日光の方だといふことは聞いてゐましたが……」

「山の中ですわ……」

さう言ひながら、伶子はやつと又顔を上げた。

「××といふところです。」

「え。」

山田は今までに聞いたこともない土地の名を聞いた……

「そこに、下屋敷があるんですね。」

「いいえ。そこが本宅なのです。」

「御本宅には、どなたか身内の方がゐらつしやるのですか……」

「[illegible]もいとははゐがをります……それに、母が病身で、大抵行つてをります……」

「それぢやあ、寂しいことはありませんね……」

「ええ……」

と言つて、伶子は暗く笑つた——答は肯定だつたが、この笑は明かに否定だつた。

「でも、三年もゐたら倦きるでせうねえ……」

山田は慌して取り繕ふやうに言つた。

「でも、物を考へるにはようございますわ……しづかで。」

松子の顔には、もう晴い影が見られなかつた。

「そりやあ好いでせう……併し、松子さん、あなた、そんなに何か考へることがあるのですか……」

「そりやあ、ありますわ……」

「たとへば、どんなことを……」

「さうですね、……人間はなぜ生きてゐるんだらうなんて問題を……」

松子は輕々と言つた――まじめだか笑談だか分からない程輕く言つた。併し、山田は眞剣だつた。

「それは大問題だ。……まだ僕などにはなかなか分からない問題です……」

「まだ、ありますわ……愛はなぜ制限されるのだらうなんて問題もあります……」

「むづかしい問題ばかりですね。」

「でも、それが分からないと困るのですもの……」

松子は子供が甘えるやうに言つた……

松子は山田の妹の歸らない内に歸つて行つた――ひとりあとへ殘された山田は、言ひやうのない物寂しさを感じた……

「をかしいなあ――おれは松子を愛してゐるのかしら……」

山田はさう思つた……

「いや、いや、そんな筈はない……そんな筈があつてたまるものか……」

山田は直ぐと否定した……

妹が歸つて來た……山田はすぐと妹の口から松子のことが聞きたかつた。妹とふたりで、すぐと何か松子の話がしたくなつた──

「松子さんが來たよ……しばらく君の歸るのを待つてゐたが、君がおそいので、歸つて行つた……」

「でも、松子さんは兄さんに會ひに來たのでせう……」

妹は何の邪氣もなしに言つた。

「僕に……」

「ええ。こなひだから、一ぺん兄さんに會ひたいつて言つてゐましたもの……」

「僕に何か用があるのかしら……」

「信仰の話が聞きたいつて言つてゐましたわ……」

「ふうむ……」

「それに、信業さんのことにも隨分同情を寄せてゐましたわ……」

信業──それは山田が「失つた愛」の名であつた……

「誰にそんなことを聞いたんだらう……」

「あたし、訊かれたから、話したわ……」

「お前が話したのか……」

「ええ……」

「しやうがないな。」

とは言つたが、山田は怒つたやうな顔もしなかつた……

「あの人はなんだか寂しさうな人だねえ……」

暫くして、山田が獨語のやうに言ふと、妹はいつもの率直さで。

「ええ……あの人、氣の毒な人よ……」

と、言つた。

「どうして……あんな家のお孃さんでゐながらか。」

「ええ……あの人、お妾の子ですもの……」

「妾の子……」

「ええ。五人姉妹の內、あの人がまん中で、あの人ひとりだけお妾の腹なの……」

「そのお妾は今でもゐるのか……」

「お松ちやま……あすこの家では、みんなさう言ふのよ……お松ちやまのお母さんはお松ちやまを生、

むと、すぐ死んでしまつたんですつて。だから、上の姉さんがぼんやり知つてるぐらゐなもので、他のきやうだいはなんにも知らないんですつて……」

「ちやあ、別に松子さんが虐待されるといふやうなこともないんだらう……」

「ほかの姉妹と少しも違はない待遇を受けてゐるのですつて……それだのに、どういふもんだか、小さい時からあの人の方で遠慮するんですつて、お妾の子だか何だか自分でも知らない時分から遠慮するくらゐだから、大きくなつて、それを知つてからは尚と尻込をする人になつてしまつたんですつて……小學校を出てから、田舎へやられたのも、お父さんがもつと伸び伸びさせたいからつて仰しやつたからなんですつて……」

山田の妹は松子とおない年だつた。併し、山田の眼から見ると、妹の方が松子よりずつと子供に見えた――その子供のやうな、偽りのない、すかすかした、妹の話を聞いてゐる内に、山田はだんだんはつきり松子の姿を心の内に描くことが出來た……

やつぱり寂しい人だつたのだ……小さい時から寂しい子だつたのだ……人の中にゐて、人と明かるく親しめない女なのだ……眞偽は分からないが、若し姉妹五人の内で、あの人ひとりが腹ちがひだとすれば、さうなるのも無理はないと山田は思つた……

山田の心の内に描かれた松子の姿は、唯描かれただけでは濟まなかつた……その姿はだんだん山田

の心の底に滲み徹つて、そこに消さうとしても消せない繪を作つた……

松子はその明くる日から、毎日のやうに山田の家を訪ねて來た。松子の訪問の目的が山田の妹にたくて山田にあることが、だんだんはつきりして來た――松子はいつも山田が學校から歸つて來る時刻を計つてはやつて來た。日曜は森川先生のところの會合から歸る時分を狙つて來た。

山田の妹が家にゐても、決してそれを邪魔にするやうな樣子はなかつた。併し、妹が留守でも、一向それを不滿足に思ふやうな樣子もなかつた――

「お松ちやまは兄さんの友達になつてしまつたのねえ……もうあたしなんか、ゐてもゐなくても好いのよ。」

「馬鹿あ言へ……そんなことがあるもんか。」

兄妹がこんな冗談を言ひ合ふやうになつた。

松子は來るたんびに、きつと何か一册、本を借りて歸つた――それは主に思想とか宗教とかに關する本だつた――

「お兄さんがお讀みになつて、好いとお思ひになつた本を、あたしみんな拜見したいんです……」

松子はこんなことを言つた。併し、詩集や小說は、山田が勸めても、あまり熱心に讀まなかつた。

主に持つて歸るのは森川先生の著書だつた――

「森川先生つて、隨分豪い方なんですねえ……」

「豪い人ですとも……」

「お兄さんは隨分尊敬してゐらつしやるのねえ……」

「してゐますとも……今のところ、僕を導いてくれる先生は、あの先生一人です。僕は先生の言はれることに、徹頭徹尾服してゐるのです……」

「どんな方なんでせう……」

「顏容ですか……」

「ええ……」

「どつちかと言へば、恐い顏です……それでゐて、少しでも笑ふと、無限の優しみが溢れて出て來ます……先生の書齋にフィッツスラアのかいたカアライルが横向きに椅子に腰をかけてゐる全身の肖像が掛かつてゐますが、それがよく先生に似てゐます……」

「女の方でも、先生のところへ入らつしやる方がありますか……」

「ありますとも……先生はちつとも恐い人ぢやないんですから……」

「でも、あたし、なんだか恐い方のやうな氣がしますわ……」

二人は時々こんな話をした。

――「背教者」前篇――

小山内薫氏の長篇小説について

久保田万太郎

長篇小説を、小山内薫氏は、ほんのわづかしか書いてゐない。「大川端」「第一課」「背教者」「旦那」（後に「落葉」と改題）等が殘されてゐるばかりである。しかも、このうち、「背教者」は未完に終つてゐる。……だから出來上つたものとしてはあとのその三つがあるばかりである。（勿論、この場合、いふところの大衆的な四五の作品をわたしは數へない。）

「大川端」にしても、だが、作者は最初から、決してあゝした長いものを書きはしなかつた。明治四十四年の夏、作者は、「讀賣新聞」に「大川端」と題して若太郎のくだりだけを書いた。そのあとしばらくして、『新小説』に、「小さと」と題してそのくだりだけ書いた。そのあとまた暫くして、おなじく『新小説』に、「せつ子」と題してそのくだりだけ書いた。この作の、描寫の上におのづから精粗があり、構圖の上にまた緊密な統制を缺くもののあるのは、さうした執筆事情の異つた三つの作を、強ひてあとから一つのものに綴合せたからである。

「第一課」にしてもさうである。作者は、この作の、はじめの三分の一ほどを『中央新聞』に連載し

たが、數年後、改めてまた「新小說」にはじめから書直した。そして幾月か後に完成した。從つてこの作にあつても、おのづからそこに、描寫の上に、その呼吸(いき)づかひの繁簡よろしきをえないものが出來た。はじめの三分の一のために費された時間と手間の半分もあとの三分の二のために費されなかつたことがさうした結果を齎したのである。

それからみると「背教者」は、めぐまれた條件の下に、心しづかに作者は筆を遣つた。この作に限つて下書さへあつたと傳へられてゐる。おそらく作者も、畢生作としてこの作に着手したのであらうが、震災は、理由なくその志を奪つた。發表機關を失つた作者は泪をのんでその執筆を中止したのである。

「大川端」も、「第一課」も、「背教者」も、いへばすべて作者の「自敍傳」である。內村鑑三氏の門に出入してゐた時分の作者のすがたを「背教者」のうちにみ出すことの出來るわれ〳〵は、中洲の眞砂座で、作者の、伊井蓉峰とゝもにした劇場生活の記念を「大川端」の中にみ出すことが出來るのである。そしてまた作者の、いかにその少年時代をすごしたか、その青年時をけみしたか、われ〳〵は「第一課」によつてそれを知ることが出來るのである。しかもそこに語られてゐることのすべてが戀愛の、そこに描かれてゐるものは、戀愛に虐げられた、戀愛にさいなまれた、戀愛に離弃された一人の、弱い、哀しい人間のすがたである。第一の戀に失敗した園田一郎は、第二の戀にも、第三の戀にも、第

四の戀にも失敗した。――わたしはいふであらう、そこにさう開陳されたやうに、この作者の一生は戀愛的にあくまで不幸な一生だつた。……

嘗て、「旦那」についてわたしは、その主人公福井さんの、かりそめにおぼえた手慰みからだん〳〵勝負事の、とり返しのつかない深みへまでわれから嵌つて行つたことゝ、もう一つ女から女へ、あらゆる時あらゆる場所に漁色してあるいても、とゞのつまりは矢つ張、はじめからの戀人のふところへ立戻らざるをえなかつたことをいつたあとで「かうした二つの問題を、作者は、この作で扱つてゐるが、われ〳〵は、さうしたものをその中にはッきりよみとるよりも、そのまへに、明治末期のなつかしい風俗畫をそこにみ出すことの出來るのを歡びたい。」と書いた。「大川端」にも「第一課」にも、また「背教者」にも同じことがわたしにいへるのである。「大川端」の、たとへば君太郎のくだりの、慈善演藝會、文藝倶樂部の口繪、眞砂座、俥、石油發動機船、小常磐、岡田、吾妻亭の厚切りのビーフステーク、小松島、龍井浪二郎、等、等、等、「第一課」の、たとへば最初の小學校のくだりの、高等四年、幻燈會、松崎大尉苦戰の圖、軍歌、復習會、毛筆畫、小試驗、少國民、ランプ、等、等、等、かうした言葉をぬき出したゞけでさへ、そこに明治年間の、日露戰爭と、日清戰爭とその前後に於ける「東京」の輝やかな空氣をきはめて容易にわれ〳〵は感得することが出來るのである。……しかもそのそれ〳〵の記述の、すこしの工んだあとのない、おのづからな流露によつてなされてゐることが

われ／＼の返らぬ日の夢のかげを一層ふかめるのである。

……東京を、東京人を描いた作者を数へるほどしかもたなかつたわたしの、はじめて「大川端」を読み、「第一課」に接したときの歓びをいまさらのやうにおもひ出しつゝ、いま、わたしはこれを書いた。

（昭和五年五月）

解題

水木京太

本卷の長篇小說は、いづれも先生の自叙傳的作品として特殊の價値と興味を藏してゐるものである。この三作だけで豫定頁を遙に超し、遂に史傳小說を收載し得なかつたのは誠に遺憾に堪へない。

作者の傳記上の年次からすれば、「大川端」は最後に置かるべきものであらうが、ここではすべて制作發表の順に從つた。

『大川端』のはじめの部分即ち君太郎との件は、明治十四年八月「讀賣新聞」に連載された。つづいて次の部分が「小さと」と題されて翌四十五年二月號の「新小說」に發表され、大正元年十二月號「中央公論」所載「二つの手」を以て完結し、大正二年二月先生の外遊中に「大川端」の名で單行本として出版されたものである。――しかしそれとても、三部作『大川端』の一部に過ぎない。大正十二年に「中央新聞」に連載された「旦那」（後、新潮社版長篇小說全集に收められる時「落葉」と改題）と、大正十五年四月號から「講談俱樂部」に連載された「鏡臺前」とが他の二部として、「大川端」を成すのであると仄聞してゐる。

『第一課』も三つに分たれて書かれた。はじめの「第一課」は大正四年一月號「新小說」に、「第二課」は同じく三

月號に、「第三課」は同じく七月號に發表されて完成した。そして直ちにこれらを纏めて、同九月に四方堂から「盲目」と題して出版した。この題名は書肆の希望を容れたもので、もとより先生の意に滿たなかつたと見え、改造社版新選小山内薰集に收められる時は、總括して『第一課』と改めたものである。

「背教者」は大正十二年四月末から「東京朝日新聞」に連載され、大震災の日を終りとして未完中絶されたものである。震災後に新聞が面目を新にするためか或は作品が前向けしなかつた爲か、私は中止の眞の理由を知らない。いつも締切に追はれて原稿を書き放しにされるのに似ず、この稿は前以て下書を作成してそれを新聞社へ淨書して送るほどの意氣ごみでかかつた仕事だけに、先生がこの中絶をひどく殘念がられたのは事實である。災後大阪に轉住される前夜、引越の荷の積まれた垣町の書齋で「旦那」の原稿を書きながら、「背教者」に就いての抱負を語られた先生の言葉が猶耳底にある。この作中の森川先生――內村鑑三氏もつひ最近昇天せられた。折柄校正の朱筆を手にこの作を繰り返し讀んでゐた私は、ふとその告別式へ行かれる小山内先生の姿を幻に描いて無量の感慨に打たれた。

昭和五年五月二十五日印刷
昭和五年五月二十八日發行

非賣品

小山内薫全集第二卷

第四回配本

著作者　小山内薫

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦

東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　妹尾堅吉

東京市小石川區諏訪町五六番地
印刷所　常磐印刷所

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
振替東京一六一一七
電話日本橋三五一・六四一七　七八八一